大正十二年一月十八日印刷
大正十二年一月廿二日發行

花袋全集第一卷
（非賣品）

著作者　田山錄彌
東京市小石川區東青柳町二十九番地
發行者　川俣馨一
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　高橋賢治
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所

東京市小石川區東青柳町二十九番地
發行所　花袋全集刊行會
電話小石川一〇五四番
振替東京三一七〇〇番

小さい艫を輕く操つて、物を賣つて行く舟もあつた。

『そら、見ろよ……あゝやつて、東京では朝早くあさりを賣つて歩くんだぞ。』

母親は兄の少年に指して見せた。

『もう、此處は東京かえ？』

弟がかう訊くと、

『東京ともよ。深川ッて言ふ處だぞよ。』

少年達の眼には見ゆるものが皆なめづらしかつた。白壁の土藏、ブリキの屋根――河の岸には綺麗な路があつて、其處を人がチラホラ歩いて居た。

たぷたぷとさして來る朝の潮、高く架けられた繪のやうな橋、綺麗な着物を着て其上を通つて行く女。ぶつつかりはしないかと思はれるほど近く掠めて行く多くの舟、大河の碧(みどり)に捺したやうに白く見える小さい汽船――漸く起つて來る雜然とした朝の物の響は、二人の少年の前に忙しい都會を展げて見せた。

――花袋全集第一卷終――

にめづらしい海の魚が食へた。赤い帶を締めて戯談を言ふ女も大勢居た。藩の好い家柄の息子で女房子がありながら、此處でさういふ女に溺れて評判に立てられたこともあつた。其頃東京に出る人は、『川口に行けば、むき身汁が食へる。』かう言つて誰も樂しみにして來た。

しかし今ではわざ〳〵寄つて食事をして行くものもなかつた。料理屋も段々つぶれて了つて、一番下等なのが唯一軒殘つた。爺さんは此家の爺婆に昔から懇意であつた。一家族の人々は船から上つて、暗いランプのついた狹い汚い間で、兼ねて噂に聞いて居る生魚とむきみ汁とを食つた。

兄の少年の眼には曾て榮えたところとは何うしても見えなかつた。闇の田圃の中に、五六軒茅葺家があつて、其處から灯が唯ちら〳〵見えた。

此處でも、船頭は矢張容易に船を出さなかつた。待ちかねて爺さんが其所在を尋ねに行つた。やがて、『酒を飲んで醉ぱらつてるやがる。』かう言つて歸つて來た。

船が出た頃には、遲く出た月がもう高くなつて居た。狹い堀割の兩側には種々な樹が繁つて、それが月の光を篩して、美しい閃きを水に投げた。夜はしんとして居た。ところ〴〵にかゝつてゐる船の苫の中からは灯が見えた。犬の吠える聲が四邊に響いて高く聞えた。

夏の夜は明易かつた。兩側に人家が續いたり、橋が架つたりするあたりに來る頃には、もう全く明放れて居た。

簀張には、午後四時過ぎの日影が照つて居た。兄の少年は其の隣の老人がとぼ〳〵と土手へ登つて行くのを見えなくなるまで見送つて居た。

『もう歩いて行かれるからツて、此處まで連れて來て貰つて、餘り勝手過ぎるのさ――』主婦はかう言つた。

『碌に錢を持たねえで、人の借りた船で、飯も酒も食つたり飲んだりして此處で下りるツて、好く言へたもんだ。』爺さんもこんなことを言つた。

八

涼しくなつた頃から、船頭は船を漕ぎ出した。もう海はさして遠くなかつた。岸には蘆荻や藻が繁つて、夕日が汀を赤く染めた。

それに幸ひに追手の夕風が吹いた。船頭は帆を揚げて、楫をギイと鳴らして、暢氣に煙草をふかした。誰の心も船のやうに早く東京に向つて馳せて居た。

古戰場だといふ高い崖の下を通る頃には、もう夕暮の薄暗い色が、廣い川一面に蔽ひかゝつた。

東京に入つて行く堀割は、それから一里ほど下つた處にあつた。それは川口といふところで、和船で交通をする時分には、隨分繁華な船着であつた。かなり聞えた料理屋も二三軒はあつた。其處では田舍

七

徒歩で行けば其處から東京まで三里位しかないといふ河岸に來て、船頭はまた船を繋いだ。とても今日は東京に入ることは出來ないから、暑い中を此處で休んで涼しくなつてから出懸けようといふ船頭の腹であつた。

船に飽きた人々は皆な不平を言つたが、しかし眞夜中に東京に着いても仕方がなかつた。止むなく此處で待つことにした。

と、隣の老人は、

『甚だ失禮ぢやが………まだ日が高いし、それに今日東京に入つて置くと、都合が好いから私は此處で失禮して歩いて行かうと思ふんぢやが…………。』

かう言ひ出した。世話になるのも氣に懸れば、爺さんから醉つてチク〳〵言はれるも辛かつた。誰も引留めはしなかつたが、しかし餘り好い心地もしなかつた。

『定公、また東京で逢はうな。』

持つて來た風呂敷包を脊負つて、古びた蝙蝠傘を持つて、すり減した朴齒の下駄を穿いて、しよぼたれた風をして、隣の老人は暇を告げて行つた。土手の上には枝を張つた大きな栃の樹があつて、其傍の葭

なかつた。煙突からは白い薄い煙が徒らに立つて居た。

其日も暑い日であつた。それに風がなかつた。上りも下りも帆を揚げて居る船は一隻もなかつた。一人の船頭の胸からは脂汗が流れ、一人の船頭の眼からは眼脂が流れた。人々は岸の人家や土手の樹木の移つて行くことの遲いのに段々倦んで來た。それにヂリ〳〵と上から照り附けられる苫の中も暑かつた。盲目の婆さんは、襦袢一つになつて、濡して絞つて貰つた手拭を、皺の深い胸の處に當てゝ居た。

川に臨んで白壁造の土藏の見える處に來たのは、其日の午後であつた。此處には有名な白味淋の問屋があつた。酒も灘酒に匹敵するやうなのが出來た。もう持つて來た酒を大抵飲み盡した爺さんは、『船頭さん、其處に行つたら烏渡寄せて下さいよ。』餘程前からかう言つて其岸に來るのを待つて居た。

『此處の白味淋はそりや旨いな。』

船頭達もかう語り合つた。

『買つて來て上げやせうか。』と一人の船頭が言ふのを、『何に、私が買つて來る、他に用もある。』かう言つて斷つた爺さんは、途中で船頭に飲まれるのをひそかに恐れて居た。爺さんは德利を下げて、禿頭を日に光らせながら踏板を傳つて行つた。

『常さんがしつかりして居るから、本當に仕合せだ』
いつもかう言つて調子を合せた。
汽船で行けば一日で到着するほどの行程だが、和船では中々さう早くは行かなかつた。暑いと言つては休み、眠らなければならないと言つては碇泊し、荷の積替をすると言つては、岸の小さい埠頭に綱を繋いだ。荷の種類に由つては、二時間近くも其岸を離れることが出來ないこともあつた。
其時は、『かう手間を取つては仕方がない、これではとても今日東京には入れない。此方はまア、船の中で、一晩位餘計に寢るのは好いとしても、常が遲いッて待つてゐるだらう。』かう主婦もお爺さんも一方ならず氣を揉んだ。お爺さんは、わざと聲を猫撫聲にして、『船頭さん、もう出しても好い時分だね、』などゝ聲をかけた。
ある淺瀨では、餘り暑いので、船頭が裸で水の中を泳いで居ると、船緣で見て居た弟の方の少年は、堪らなくなつたといふやうに着物を脱いで、ザンブと水中に飛び込んだ。『大丈夫ですよ、私等がついて居るから。』船頭はかう言つて心配する主婦の方を見て言つた。
連日の快晴で、水の淺くなつた處などもをり〳〵あつた。上りの小蒸汽が白いペンキ塗の船體を暑い日影にキラ〳〵させて、淺瀨につかへて居る傍をも通つて行つた。汽船では乘客を皆な別の船に移して荷を輕くして船員總がゝりで、長い棹を五本も六本も淺い洲に突張つて居た。しかし汽船は容易に動か

中の明るく見える船や、篝のやうに火を焚いて居る船などがあつた。
朝、人々が眼を覺した時には、船はある小さな埠頭に留つて居た。朝霧の晴れ間から、青い蚊帳を吊つた岸の二階屋の一間が見えたり、女が水に臨んで物を洗つて居るのが眺められたりした。其處に泊つて居る船も五六艘はあつた。朝炊の煙が紫に細く颺つた。
『朝の氣持は好いなア……何うだ定公。』
かう隣の老人は其處に立つて朝の川を眺めて居る兄の方の少年に言つた。
お爺さんは、
『朝酒といふものは旨いものだ。』
こんなことを言つて、朝飯の時盃を隣の老人にさした。隣の老人は二三度辭つて見たが、それでも後では四五杯受けて飮んだ。
隣の老人は、財布にいくらの金をも持つて居なかつた。只で乘せて伴れて行つて貰へるからこそ出て來たほどの貧しい身には、世話になるは氣の毒だとは思ふが、しかし酒を買ふほどの餘裕はなかつた。船に賣りに來る大福を買つて、それを弟の少年や盲目のお婆さんに分けて遣る位の義理が關の山であつた。孫達の話が出ても、上京する一家族の希望に滿ちた有樣とは比ぶべくもなかつた。隣の老人はいつも小さくなつて居た。他人の世話になる辛さをもつくぐ〵感じた。

兄弟の心は東京に憧れ切つて居た。

六

中でも兄は、これで多年の志が遂げられたやうな氣がした。東京に行きさへすれば、どんな目的でも達せられる。何んな豪い人にでもなれる。馬車に乘るやうな立派な人にもなれる。其處には、かれの爲めに、あらゆる好運と幸福とが門を開いて待つて居るやうにすら思はれた。

其處には何んな物がかれ等を待つて居るかを知らなかつた。

川は暗かつた。岸の灯が明るく處々に點いて居た。誰か大きな聲を立てゝ土手の上を通つて行つた。艫の音が絕えず響く。

船の中にも蚊が居るので、主婦は準備して來た蚊帳を苫の角に引懸けて低く吊つて、其處に一緒にゴタゴタに頭やら足やらを入れて寢た。棚の上の三分の洋燈は、薄暗く靑い蚊帳を照して居た。凉しい河風がをりをり吹いて通つた。

兄の方の少年は、蚊帳の中に入つても、容易に眠られなかつた。眼が冴えて仕方がなかつた。かれは船を漕いで居る船頭の船尾の處に行つて、默つて暗い水を眺めて立つた。

一人の船頭は、マッチを闇に摺つて、大きな煙管に火をつけて、スパリスパリ遣つて居た。時々苫の

『困つて居たツて、餘りだ。瓢簞の一つ位持つて來たつて誰も惡いつて言はない………何もおれだツて、そんなことを喧しく言ふぢやないけれどな………義理と言ふものがあらア。』

其處に下りて來た兄の少年は、またお爺さんの癖が始まつたなと思つた。

螢が一つ闇の中に流れる頃には、船はもう廣い廣い利根川に出て居た。星の光に水の流るゝのが暗く綾をなして見えた。艫の音が水を渡つて聞えた。

遠い河岸には、灯が處々に點いて居るのが見えた。

其頃、栗橋の鐵橋が出來たばかりであつた。町からわざわざ其橋を見に行つたものも尠くなかつた。其噂は一家族の人々の耳にも聞えた。

『それ見ろよ、あれが栗橋の鐵橋だと。』

かう主婦が二人の少年に指して見せた。川を跨いだ大きな鐵橋は暗い夜の闇の中に其輪廓をはつきりと描いて居た。珍らしいものにあくがれて居る兄弟の心は躍らざるを得なかつた。

やがて船は近づいて行つた。橋杭に當る水音は高く聞えた。少年も老爺も主婦も其下を通る時、皆仰向いて、その大きな鐵橋を闇に透して見た。兄弟は手を延ばしてその橋杭を叩いて通つた。

夕立の霽れた時には、もう薄暮の色が廣い川の上に蔽ひ懸つて居た。渡良瀬川は思川を入れて、段々大きな利根川の會湊點へと近づいて行つた。風が稍々追手になつたので、船頭は帆を低く張つて、濡れた船尾(とも)の處で暢氣さうに煙草を吸つて居る。其傍では船頭の上さんが、釜に米を入れたのを出して、川から水を汲んでせつせとそれを炊いで居たが、やがて其處から細い紫の煙が繪のやうに川に靡いた。夕照が赤く水を染めて居た。

老人達は薄暗い處で酒を飲んでゐた。主婦は酒癖の悪い爺さんが、やがて段々醉つて來て、言はないでも好いことを隣の老人に言ひ懸けてゐるのを聞いた。

隣の老人は何の準備もして來なかつた。酒も飯も默つて御馳走になつて居た。それも困つて居るからだと主婦は思つて居た。

爺さんもそれを餘り蟲が好過ぎると思つて居たらしかつた。

『お爺さん、あんなことを言はなけりや好いのに——折角、心地よく連れて來てやつたのに。』

隣の老人が舳先の方へ行つた跡で、主婦は老爺に小聲で言つた。

『何アに、少し位言つてやる方が好い。餘り蟲が好過ぎる。』

かう言つた爺さんは、もうかなり醉つて居た。

『だツて困つて居るんだから。』

少し酒を飲みながら、老人達はこんなことを言つた。

午後には、主婦は連日の疲勞につかれ果てたといふやうに、平生使ひ馴れた黑柿の煙草の箱を枕にして、手拭を顏にかけて、スヤ〳〵と晝寢をして居た。苫の間から河風が涼しく吹いて來た。

老人連も少し醉つてやがて寢て了つた。兄の少年が船から下りて來た時には、盲目の婆さんも、鼻唄をやめて横になつて居た。晴れた日影はキラ〳〵と水に反射して今が暑い盛であつた。襦袢をも脫棄てた二人の船頭は、毛の深い胸のあたりから、ダク〳〵汗を出しながら、竿を弓のやうに張つて、頭より尻を高くして船緣を傳つて行つた。眼の惡い方の船頭は、眼脂を夥しく出して、顏を眞赤にして居た。

涼しい蔭をつくつた竹藪などはもうなかつた。

五

夕立が催して來た。

船頭は慌てゝ苫を葺いた。其下に一家族は夕立の凄じく降つて通る間を輪を描いて集つて居た。銀線のやうな雨が水の上に白い珠を躍らしてゐるのを苫の間から少年達は見て居た。

『これで涼しくなつた。』

から老人達が言つた。

たりした。竹藪の鳥渡途絶えた世離れた靜かな好い場所を占領して、長い釣竿を二三本も水に落して、暢氣さうに岩魚を釣つて居る鍔の大きい麥稈帽子の人もあつた。

川に臨んで、赤い腰卷を出して、物を洗つて居る女もあつた。

二人の少年は物珍らしいので、下に坐つてなどは居なかつた。紺絣の兄と白絣の弟と二人並んで、じりじりと上から照り附ける暑い日影にも頓着せず、餘念なく移り變つて行く川を眺めて居た。

『霍亂にでもなると大變だよ』

主婦は下から首を出して、時々聲をかけて呼んだ。

兄の少年が手帳を出して、何か書きつけてゐると、其傍に、隣の老人は遣つて來て、

『おい、定公、何か出來るか………。』かう言つて聞いて見た。手帳には七言絶句の轉結だけが書いてあつた。

道具は大抵菰包にして了つた。膳も大きなのを一箇出してあるばかりであつた。晝飯には皆ながそれを取卷いて食つた。暑い日にも腐らぬやうな乾物だとか鮭の切身だとかを持つて來て、それを菜にした。

『江戸では、今は松魚の盛りですな。』

『在番した時分――、勢の好いあの賣聲を聞いて、窓から皿を出して買つて食つた時分のことが思はれますな。』

………』

『始めからさう旨い譯には行かないぢや………。』笑つて見せて、『けれど、正公も成長くなつたし、定公も學問が出來るから、お貞さん、もう、安心なもんぢや。これからは樂が出來る。』

『何んなもんですか。』

主婦はかう言つた。しかし永年一人で苦勞して來た老人や子供の世話を、東京に行けば、息子と一緒にすることが出來ると思ふと、何となく肩が下りるやうな氣がした。息子と住むといふことも嬉しかつた。

『それにしても、お宅のは?………御出になる所は分つて居るのですか。』

『大抵は知れて居るのですけれどな………何うも不都合で困るぢやな。』

『御心配ですねえ。』

かう主婦は同情した。

船頭は竿を弓のやうに張つて、長い船緣を往つたり來たりした。竿を當てる襦袢が處々破れて居た。一竿毎に船は段々と下つて行つた。

此附近には竹藪が多かつた。水量の多い今は巴渦を巻いて流れて居るところもあつた。渡船小屋が蘆荻の深い茂みの中から見えて居たり、帆を滿面に孕ませた船が二艘も三艘も連つて上つて來るのが見え

婿さんが出來たなど丶噂し合つた。婿は綺麗な八字髯を生した立派な男で、丸髷に赤い手絡をした丈の高い細君とはよく似合つた。隣の次男は其婿が朝早く草の生えた井戸端で、眞鍮の金盥で、眼鏡を外して、頭をザブザブ洗つて居るのを見たこともあつた。

處が一年後に、懷妊した細君を里に預けて、其婿は東京へ出て行つたきり歸つて來なかつた。約束した仕送りは無論寄越さなかつた。後には手紙が附箋を附けたまゝ戻つて來た。

東京に出かけて行けば、捜す手蔓はいくらもある。中にはその居る所を敎へて吳れたものもある。しかし出懸けて行く旅費もないほどその家は困つて居た。その美しい娘はもう五月近い腹をして居りながら、亂れた髮をしてせつせと機を織つて居た。其處に丁度隣りの一家族の上京――で賴んで、無賃で乘せて行つて貰へるのを喜んだ。

四

『常さんがしつかりして居るから、お宅ぢやもう心配なことはない。』

隣の老人はかう主婦に言つた。

『何んなもんですか……苦勞しに東京に行くやうなものかも知れませんよ。年寄に子供、力になるのは、常ばかりですから。』主婦は鳥渡考へて、『それも、月給でも澤山取れるものなら好いですけれど…

人が世に出て、扶持を失つた士族が零落して行くあはれなるさまをも見た。大名小路の大きな邸が長い年月に段々つぶれて畑になつて行くのをも見た。御殿のあつた城址には徒に草が長じた。

隣の老人の家柄は、今移轉して行かうとして居る家族よりは、數等すぐれた家柄であつた。昔ならば槍以上と以下とでは、殆ど交際が出來ぬほど階級が違つて居た。隣の老人は二百石の家柄で暢氣に謡ひをうたつて暮して來た。それに引かへて、一方の老人は賤い處から武藝や文事を磨いて、人が驚くほど立身して、江戸家老のお氣に入りに其人ありと知られるほどの勢力のある生活を送つて來た。

しかしこの二軒は昔から隣同士に親んで居たのではなかつた。息子の死んだ後の家族を纏めて、家を貰つて、其處に其の禿頭の老人が移つて來てから、まだ十年と經たなかつた。

孫達の話を老人達は常によく話し合つた。

『常さんがしつかりして居るから、お宅では仕合せぢや。』

かう家柄の方の老人は言つた。

家柄の方の家族も矢張息子に早く死なれて、孫に懸らなければならなかつた。總領は娘で、今年二十二になつて居た。田舎にはめづらしいほどの別嬪で、足利に行つて居る間に、鹿兒島生れで、其土地の中學校の教師をしてゐた男に見染められて、無理に懇望されて嫁いで行つた。一二度其婿が細君と一緒に、柴垣の奥の古い汚い茅葺家に來て泊つて行つたことなどもあつた。其時近所の評判は大變で、豪い

た。町はづれまで來て、さらば！　を言つて行つた人もあつた。其川の岸まで來たのは最も親しい人達であつた。
次男を送つて來た一人の青年は、其友達のかうして東京に出て行くのを羨ましさうに見送つて居た。
船が動き出した時、盲目のお婆さんを除いては、皆な船緣の處に顏を並べた。岸の人々も別れの言葉を述べた。
船は靜かに流を下つた。

三

其頃は汽車が今のやうに便利でなかつた。運賃も高かつた。で、この家族はかうして船で東京に行くことになつた。東京から每日來る小蒸汽は、其頃ペンキ塗の船體を處々の埠頭(はとば)の夕暮の中に白くくつきりと見せて居た。
老人達に取つては、その經て來た時代の推移ほど急激なものはなかつた。此人達は大小を指して殿樣の行列の後に跟いて歩いた。勤王佐幕の喧しい爭鬪の時には、晝夜兼行で濱町の上屋敷に上訴に出かけて行つたこともあつた。維新の際には、若者達の出陣した後を守つて、其處此處の番所を固めた。侍が士族となり、百姓が平民になつて、世の中は目眩しいほどに變つて行つた。實力を持つた百姓町

酒好きのお爺さんは、德利に上酒を一升ほど入れて來たが、子供に引くりかへされぬやうにと、それを茶簞笥の隅に押付けて置いた。

『お貞、それは酒だからな………こぼさぬやうにして呉りやれ。』

かう主婦に注意もした。

『これさへありア、まア、退屈も凌げますぢや？』

隣のお爺さんとこんなことを言つて笑ひ合つた。

主婦は舅の酒には苦勞を仕拔いて來た。夫の生きて居る間は、酒の上で二人はよく親子喧嘩をした。親類に呼ばれて行く時には、屹度醉つて管を捲いた。夫に別れてからでも、町の居酒屋で泥醉して、使を受けて迎へに行つたことなどもあつた。嫁に來た當座には、何處か酒のない國に行き度いと思つた。母親はよくかう子供等に話して聞かせた。しかし此頃では年を取つてもう大分おとなしくなつた。

盲目のお婆さんは、席が定ると、懷から手拭を出して、それを例のごとく三角にして冠つた。暢氣な鼻唄が唸るやうに聞え出した。

『暢氣なものだねえ。もう鼻唄が出たよ。』

母親は其處に立つて居る次男に小聲で言つた。

岸には送つて來た人々が並んだ。門の前で別れて來た人もあつた。町の入口で別れをつげた人もあつ

入るのと言つて居たが、愈々上京の話が決ると、『私ばかり置いて行くのかえ、母さん、』と言つて泣きに來た。母親は、『まア、何うにでもするから、兎に角體が二つになるまで辛抱してお出で。』かう宥めたり賺したりしたが、今朝發つて來る時にも、町の外れまで送つて來て、大きな腹をして、垣の處に寄りかかつて泣いて居た。

目の盲ひたお婆さんは、車に乘ると眼が眩ると言ふので、昔お國替への時乘つて來たやうな輕尻馬をわざわざ仕立てゝ、町の通りをほつくりほつくりと遣つて來た。『盲目でも眼が廻るのかねえ、』と誰かゞ言つた。

維新前から船の問屋の爺を知つて居るお爺さんは、朝から禿頭を光らして出かけて行つて居た。

二

船の準備がやがて出來た。

長い踏板が船緣から岸に渡された。一番先に小さい弟が元氣よくそれを渡つて、深い船の中に飛んで下りた。其處まで送つて來た婿の機屋が盲目のお婆さんを負つて續いて渡つた。お爺さん、主婦、それから便船を幸ひに東京まで乘せて行つて貰はうといふ隣のお爺さんも乘つた。

船の中はちやんと整理がしてあつた。暑くないやうに、一ところ苫が葺いてあつて、其處に長火鉢や茶簞笥が置いてある。炭取には炭が入れられてある。いつでも茶位入れられるやうになつて居た。

兄はかう弟に言つた。

『どれや、どの船？』

『それ、火鉢があるぢやないか。』

其船の船頭は目腐れの中年の男で、今一人の若い方の船頭は頻りに荷物を運んで居た。髮を束ねた上さんは苫やら帆布やらをせつせと片附けて居た。

一家族は此處から一里ほど離れた昔の城下の士族町から來た。老人老婦に取つても、主婦に取つても長年住み馴れた土地や親しい人々に別れて來るのは辛かつた。東京に行つて、知らぬ土地の土になるのは厭だ！　かう目の盲ひた婆さんは言つた。長年苦勞した種に芽が生えて、十分ではなくても、兎に角息子が月給取になつて、呼んで吳れるのは嬉しいが、東京といふ處は石の上の住居、一晩でも家賃といふものを出さずには寢られない。それよりはどんなあばら屋でも、自分の家で足を長くして寢て居る方が好い。主婦もいざとなつてからかう言ひ出した。しかし月給取になつた息子を一人都に離して置くのも氣がゝりであつた。それに修業盛の弟達の爲めもあつた。

親類や知人などは一月も前から、お別れだと言つては、饂飩を打つたり肴を買つたりして、老夫婦や主婦を呼んで御馳走をした。

一人の娘は去年さる機屋に望まれて嫁にやつた。今年の四月頃から懷姙の氣味で、其の前から出るの

七十近い禿頭の老爺が傍に小さく坐つて居る六十五六の目のひたと盲ひた老婆にかう言ふと、

『それぢや、面倒でも今一度連れて行つて貰ふかな。』

やがて婆さんは爺さんに手を曳かれて靜に長い緣側を厠の方へ行つた。

『よくそれでも世話を見なさるな。』

これを見て居た六十五六の今一人の老爺は、傍に居た五十二三の主婦に話しかけた。

主婦は老人や子供の世話に忙殺されて居た。荷積の指圖もしなければならなかつた。送つて來て吳れた人々の相手にもならなければならなかつた。長い間住んだ土地を別れて來るに就いてのいろ〳〵の追懷や覊絆もあつた。

『中々あの眞似は出來ませんよ。』

かう言つたが、丁度其時今歲十一になる弟の方が川の緣の方に駈けて下りて行くのを見附けて、

『正や、川の方に行くと危ぶないぞ！』

白絣を着てメリンスの帶を締めた子は、それにも頓着せず、急いで川の下の方へ下りて行つた。其處にはもう十六になる兄が先に行つて居た。岸に繋がれた一艘の船には、長い間田舍家の茶の間に据ゑられた長火鉢だの、茶簞笥だのがそのまゝ積まれてあつた。

『それ、あの船だぜ！』

朝

一

家の中二階は川に臨んで居た。其處にこれから發たうとする一家族が船の準備の出來る間を集つて待つて居た。七月の暑い日影は岸の竹藪に偏つて流る丶碧い瀨にキラ〳〵と照つた。涼しい樹陰に五六艘の和船が集つて碇泊して居るさまが繪のやうに下に見えた。帆を舟一杯にひろげて干して居るものもあれば、陸から一生懸命に荷物を積んで居るものもある。此處等で出來る瓦や木材や米や麥や——それ等は總て此川を上下する便船で都に運び出されることになつて居た。その向うには某町から某町に通ずる縣道の舟橋がか丶つてゐて、駄馬や荷車の通る處に、橋の板の鳴る音が靜かな午前の空氣に轟いて聞えた。

橋のすぐ下では、船頭が五六人、せつせと竹の筏を組んで居た。

『婆樣、小用が出ないか。船に乘つて了ふと面倒だからな。』

空想と事實とがもう全く一つになつて居た。

不安！　不安！

五

『馬鹿ばかり仰しやる？』

とのんきな女房は笑つた。

『本當にさうぢやないだらうか。』

『本當もうそも、行つて見ていらつしやれば解るぢやありませんか。あなた、何うかして居ますよ、此頃は………。醫師にかゝる方が好いですよ。』

夕暮から曇つて、六月の空には蒸暑い鬱陶しい灰色の雲が蔽つた。書齋に行つて見ると、荷物は其一隅に轉されたまゝ依然として置かれてある。

腐敗した臭氣も何もしない、空想は事實でなかつたのを見て、渠はほツと長大息を吐いた。けれど渠はまだ安心が出來なかつた。何處からか災厄が來て、いつか一度は自分の一生を瞬く間に破壊し盡して了ふであらうと思はれた。

つて死んで居るのを、人の居ない野原に運んで來て、闇夜に乘じて、一生懸命に其の大きな箱の中に詰める。犬が吠えるのを聞いては手を留める。人の足音が聞えはせぬかと耳を欹てる。やがて何うやら彼うやら荷づくりをして、重いのを脊負つて、田舍町に出る。停車場近くの運送店へ行つて、暗い洋燈の下で、手を顫はしながら宛名を書く。眠さうに帳場に坐つて居た老爺が、そんなことゝは夢にも知らず、權衡にかけて、賃錢を取つて、そしてそれを家の一隅に置いた。

自分の曾て關係した女に違ひない。その死骸に違ひない！　彼奴め、己に恨を抱いて、さうした大膽なことをしたに違ひない。其生々した死骸！

『もうおてひだ！』

と、また胸を衝いた。

これが果してそれであるとする。己の名譽も滅茶々々だ。己は社會的自殺を宣告されてまでも己は生きて居る必要はない。災厄が來た。災厄が遂に來た。

世界がかれの爲めに皆眼を据ゑて見て居るやうな氣がする。大地も何だか動くやうで、草木の一葉すら皆な自分を敵視する。――神經は凄じく動搖した。

其死骸――もう少くとも一週間を經過した。もう腐敗して居る？　かう思ふと、其臭氣が此處まで臭つて來るやうに感じられる。其荷物を解いて、死骸があつたと假定して、其時の不愉快と恐怖と羞恥と絕望。

も人間だと思つた。

四

電車を下りて歩いた。

四五日前宅にある荷物が着いた。人から預つたものである。繩で絡げたまゝ書齋の押入に入れて置いた。

不圖、不思議な考へが頭腦を衝いた。

そんな馬鹿なことがあつて堪るものかと思つた。けれど其不思議な考へが非常に力が强い。理由なしに頭を刎る。堪らなくなつて氣が狂ひさうになる。

此頃新聞に血腥い事件が多い。三面記事には疑惑の雲がいつも暗く蔽ひ懸つて居た。それを讀んだ故か、それとも又別に理由があるのか、其荷物――自分の預つた荷物には死骸が入つて居る。しかも生々しい女の死骸!

出所もちやんと解つて居る。託された人からも現に手紙が來て居る。其人がやがて東京に遣つて來るので、それまで他に賴む所が無いから預かつて吳れといふのだ。馬鹿! と打消して見たが駄目だ。

何處かで其荷物を男が送る。其荷物を荷づくりした時のさまが見える。女が恨を吞んで齒を食ひしば

中を駛つて居る。

トンネルの中を出ると、いつも一緒になる屬官らしい男が隣の男と平凡な話をして居るのが眼に留つた。

『いつも今頃お歸りですか。』

『今日は少し遲い方です。』

『朝は？』

『大抵七時半です。』

『役所まで何分お懸りです？』

『四十分あれば充分です。君の方は？』

『僕の方は五十分は何うしても懸る。』

『奥さんもお子さんも皆な御機嫌が好いですか。』

『え、有難う、お蔭で。』

『二番目のはお可愛くなつたでせうな。』

『腕白になつて困り切りますよ。』

こんな平凡な會話である。これとこの己の不安とは大變な違ひだと思つた。大變な違ひでも何でも己

鞄でも抱えて、赤いネクタイでもして、家に歸つて女房にちやほやされて、それで滿足して居るのが普通だ。それが人間だ。少くとも人間の多數だ。

病氣だ、病氣だ。

昨日、女房が心配して、近所の醫師に懸つたら何うですと言つたことを思ひ出した。己は本當に病氣かしらんと思つた。不安がまた恐ろしい力で押寄せて來た。

非常に危險の狀態にあることを自覺した。かういふ時に、人間は自殺するのかも知れぬと思つた。不圖チエホフの書いた『ウロージヤ』といふ小說が頭に上つた。苛々した、絕望した靑年がピストルを咽喉に當てながら、隣室の話聲に耳を欹てゝ居るといふ件が歷々と眼に浮んだ。ひき金を引くと同時に凄じい音がした。

いつか甲武の電車に乘つて居た。矢のやうに電車は駛つた。砲兵工廠の高い煙突からは黑い凄じい煙がもく〳〵と簇つて居る。赤煉瓦、二階屋、二階の窓、屋根の上の物干、張物をして居る女のメリンス友禪の帶、それが不安の念と一緖になつて、ごた〳〵と早く早く眼の前を通る……。

群集が自分を取圍む。罵る聲が騷々しく四邊に聞える、丈の高い大男が拳骨を振上げて自分を撲る。『こんな奴は撲り殺して了へ！』『風上に置けない馬鹿者だ！』『色狂』などとさま〴〵な罵倒が耳に入る。耳ががん〳〵する。頭が惑亂する。眼がちらちらする――ふと氣が附くと電車は暗いトンネルの

駿河臺下に來ると、彼奴は下りた。ほつと呼吸を吐いた。

二

己は何故こんなに不安だ？

己は罪惡を犯した覺えは無い――どころか、己は善事を爲てる。犧牲の尊いことをも知つてる。道德心は人一倍發達してる。イヤ世間もそれを認めて居る。

それに己は多少の名聲もある。

安心して居れ！　と神經の中のある分子が叫ぶと、すぐ續いて、

『安心して威張つて居れ！　酒でも飮め！　女でも買へ！』

と神經が皆谺の如く應じた。

三

女の白い腕が何だ。女の臭い髮が何だ。女の柔かい肌が何だ。世の中には色盲といふことがあると同時に、色情狂と謂ふことがある。貴樣のやうなことを考へる奴は千人に一人、萬人に一人も無い。皆な平々凡々に暮して居る。柔かい膚に觸れても平氣で居る。白い腕を見ても感じが無い。黃い埃の中に、折

をぞろ〳〵と蹤いて來る。破廉恥漢！　不德漢！

『もうお了ひだ！』

と思ふと、ぶる〳〵慄へた。

馬鹿奴！　何で人の心が解るものか。己の腹を讀まうと思つたつて、さう簡單に解つて堪るものか。秘密、人間の秘密が自分の他に誰にわかる。

其男は探偵らしい男だツた。フランネルの單衣を着て、麥藁の安帽子を冠つて居た。隣に銀行員らしいハイカラが居た。其奴も己の顏を見てる。其隣の奴も、又其の隣りの奴も己の顏を見てる。娘盛の女學生まで己の顏をぢつと見詰める。身の置き所がないやうに思はれる。恐ろしい恐ろしい力が四方から自分を壓迫して、世界の隅に押つけられて、もう身動きが出來ないやうな氣がする。不安で不安で爲方が無い。

何か怪まれるやうなものが自分の身の周圍にあるのではないかと思ひついた。慌てゝ帽子を取つて見た。何も無い。胸から肩あたりを見廻した。其處にも何も無い。顏から頭も撫でて見た。矢張何も無い

彼奴め、まだ見て居やがる！

己の眼が何うかしたのか。己の眼では人の眼で見えるものが見えなくなつたのか。己の頭腦では人の考へることが考へられぬやうになつたのかと疑つた。

不安

一

頭腦が少し變だと氣が附く。何もこんなに不安に思ふ理由が無い。日は照つてる、人は往來して居る、電車は駛つて居る、兩側の家屋は並んで居る。いつもに變つたことは無い。

己が何も人殺をして、お尋ね者になつて居るわけでも無い。また非常に不名譽なことをして、新聞で二號活字で書かれて、社會的自殺を宣告されたといふ次第でもない。さうかと謂つて別に心配になるといふやうな事件は露ほども思ひ當らない。女房は肥つて莞爾して居るし、餓鬼共は達者で、わるあがきをして居るし、月末の勘定もまア充分で、ごまかせば茶屋酒の一杯位は飲める。何う考へても不安の理由が無い。

向うに乘つてる奴、厭に人の顏をじろ〳〵見やがる。御用だ！　とか一寸來いとか云つて、己を引立てゝ行きさうだ。罪惡とも意識しないことが非常な罪惡であつて、引立てられて行くと、群集が己の後

ちた。灸點屋は昨日日限が濟んだので、一先づ東京に歸る支度を爲て居たが、午後に賴んだ俥が二臺鋪石道をガラガラと遣つて來た。和尚さんも今日は降りだから、一日滯在して骨休めをして行つたら好いだらうと言ふし、上さんは袖を引かぬばかりにして引留めたけれど、何うしても歸る決心を動かさなかつた。二圓五十錢の席料、二圓の食費、他に一圓御布施料として包んで出した。

一週間の稼ぎ高は三十圓に餘つた。

上さんは泣かぬばかりにして別離を惜んだ。恨めしいやうな啻ならぬ眼色をして見せた。一臺の俥に夜具蒲團と行李を載せて、他の一臺にはかれ自からが乘つた。和尚さんは本堂の階段の處に顏を出して見送つた。上さんはわざ〳〵下駄を穿いて、山門の外まで出て、幌の中を覗くやうにして、男の手を握つて別れた。

山門から町に出る林の角に來ると、其處に蛇の目傘が一つ雨の降り頻る中に立つて居た。俥が近づくといきなり傍に寄つて來て、車夫の怪しむのにも頓着せず、幌の中を覗き込んだ。で、俥と蛇の目傘とは久しく雨の中に縺れ合つて居たが、やがて梶棒は下されて、今度は洋服に足駄を穿いた男の後姿が二臺の俥を遠く前に遣り過して、蛇の目傘と並んで、ゆる〳〵歩いて行つた。草の生えた溝に沿つた長い長い路に雨が横しぶきに降りかゝつた。

伴にして、置いたんだらうと思つて、眠かつたから、寢て了ひましたが、庭に足音がしたり……昨夜は確かに廊下まで入つて來たやうですがね……灸點屋さん、何か盜まれやしませんか。』

『それアけしからん。油斷がならんぞ。灸點屋さん、本當に何か盜られやしませんか。』

和尙さんはかう言つた。

『いゝえ、そんな樣子も…………。』

『なら、好いですけども……險呑ですよ、それは。あなたが本堂に居て、實入があるのを知つて覘つて居る奴があるんですよ。もしものことがあつちや、折角稼いだ金を……それこそ大變ですぞ。實圓、今日から雨戶を引くやうにする方が好い…………。』

『さうしませう。』

處が其日の午後、灸點屋が和尙さんに、金の入つた財布を渡して、『ぢやこれだけ險呑ですから和尙さんに預つて置いて頂きませう。さうすりや、他に盜られたツて困るやうなものはありませんから……一々本堂の雨戶を閉てるんぢや、實圓さんにお氣の毒ですから。』と言つた。そして其夕、實圓が雨戶を閉めようとすると、『何アに大丈夫だから、』と、矢張明けさせて置いた。

結願の翌日は秋雨がしと〳〵と降つて居た。珊瑚樹の廣い葉に雨滴が溜つてそれが風にばら〳〵と落

上に白い上着、もぐさと線香の燻る一室の中で、額に汗をかいて、一生懸命に働いて居た。

上さんがお萩餅を山のやうに盛つて持つて來て呉れて、時々茶を淹れかへて行つたが、それを味つて居る暇もなかつた。『あゝ今日は久し振でえらく酷められました。あゝ忙しくなると、錢金など欲しくもなくなりますよ。』

とその夜男は和尚さんに話した。

『まア、結構でしたな、忙しくつて。』と和尚さんはにこ〳〵笑つた。

夜は同じく靜かで、月は矢張庭と廊下と障子を照した。

庫裡の玄關の三疊に、實圓といふ今年十九の小僧が寢て居たが、翌朝和尚さんと灸點屋と相對して話して居る處で、『何うも和尚さん變ですよ……灸點屋さんも用心しなくつてはいけませんよ。何うも此頃、賊が覘つてるやうな樣子があるんですよ。』

『賊が?』

と和尚さんは顏色を變へた。

『何うも變です。二三日前からですがね、廊下に足音がしたり、本堂の障子が明いてあつたりするんですよ。私は每晩夜中に一度づゝ小便に起きるんですがね、初めの時は氣が附かなかつたんですが……次の晩に何氣なしに見ると、本堂の障子が一枚明いてるんです。不思議に思つたけれど晝の中に明けた

て居る女、よく腹を立てる女とのみ和尚さんの眼には映つて居た。
『かういふ處に居ては隨分淋しいでせうね？』
『えゝもうそれや………。』
『それでも町には面白いことがありますかな？』
『あるものかねえ、それも、町家なら賑かなこともあるだらうけれど、寺に居ちやね。』
『本當にさびしいでせうね。』
男はやさしい顏をして同情した。
夜は矢張靜かであつた。洋燈の消えた後の障子を月が遲く明かに照した。

中日には檀家から萩の餅やら團子やらアンビ餅やらが上げられて、寺の戸棚は一杯になつた。和尚さんは白足袋を穿いて、金襴の袈裟を懸けて、朝の中長い讀經をして木魚を叩いた。
墓詣の人が陸續と入つて來た。門前の花屋では線香と樒が夥しく賣れて、阿伽桶を下げた參詣者が終日井戸端に絕えなかつた。何の墓にも竹筒と樒と花とが代へられて、線香が煙をあげて居た。矢張風の無い晴れた暖かい好い日であつた。時々街道を通る馬車の喇叭の音がした。
灸に來る人も中々多かつた。階段の上には下駄が乘り切れぬほど置かれた。灸點屋は相變らず洋服の

その夜は和尚さんは一里ばかり先の村の豪家の法事に行つて留守だつた。
本堂の六疊に、お上さんが膳を運んで來て、酌をしながら、
『あなた、隨分だよ。』
言葉が大分ぞんざいになつて居る。
『どうしてです？』
『どうしてつて……熱い灸など据ゑて…………。』かう言つて笑ひ懸ける。
『見て居たんですか。』
『見て居たともねえ。』
あはくと男は笑つた。
『あなた、迷はしちや罪だよ。』
『なにさういふ譯ぢやありませんよ。つい、大きいのを知らずに居たもんだから。』
『申譯なんかしなくつても好いから、一盃お上がんなさい。』
と、上さんは酒を波々と注ぐ。
上さんはげらくく笑つた。上さんがかうした女だとは和尚さんは夢にも知らない。さういふ處を見せられたことは結婚してから十年になるが唯一度もなかつた。氣難かしい女、腫物に觸るやうな女、默つ

『それは結構でした。』

帶を解かせて、腹と脊に灸を据ゑた。昨日と別に變つたこともなかつた。唯、ひとつ大きいのに邂逅（でつくわ）して、『オ、熱い！』と言つて、われを忘れて、女はそれを振落して、男の顏を見てにツと笑つた。『熱う御座んしたか。』と言つて、男も笑つて見せたが、その笑ひは唯の笑ひではなかつた。男も女も互ひにある反應を胸に覺えた。

衣紋をつくろひながら、女が、

『熱いの何のツて、それや吃驚しましたよ。』

『お氣の毒でした。』

顏を見合せてまた笑つた。

男はかうした經驗は數へ切れぬほど持つて居る。節操の無い女の眼色（めつき）と笑ひ方とに熟して居る。かういふことは別に大事に思はぬばかりか、男と女とは由來かう出來てゐるものとかれは思つて居る。旅に出れば、隨分つらい眼にも邂逅する。錢が無くつて野宿の憂目を見ることもある。恐ろしい男に追懸けられることもある。ある時などは、評判娘を騙したといふので、村の若い衆から袋叩きに逢つたこともあつた。旅はつらい、悲しい、淋しい。たまにはかういふ役德にでも有附かなければ、こんな割の惡い商賣は出來ない位に思つて居る。

枕元に三分心の洋燈が細く點いて居た。

正面に弘法大師の像が薄暗くはあるが、歴々と見えた。夜着の上には不斷着がかけてあつた。四邊には行李や硯箱や半紙や廣告や竹筒が順序なく散らばつて居た。

夜着の天鵞絨の肩當の處に髪を分けた頭が半分見えて、微かな鼾が床に就くと間もなく聞えた。かうした生活に馴れて、旅を旅とも思はなくなつたと見える。寺の後は杉山で、下草ががさ〳〵と夜風に戰ぐ音がする。鼬が天井を凄じい音して通る。本堂には如來が眼を光らして、寂然として立つて居た。

夜深に月が出て、松やら楓やら檜やら混雜と植ゑた庭を寂しく照した。小さな池には微かな銀の波が立つた。油がなくなつて、洋燈が消えた後も、雨戸も閉めぬ障子に月がさして、晝の樣に明るかつた。

翌日は本堂は更に賑かであつた。今度來た東京の灸點屋は、名人で、男振がよくつて、深切で、やさしいといふ評判がそれからそれへとひろがつたのである。一二里隔つた村の娘達の赤い蹴出も見えた。婆さんや細君達とも懇意になつて、段々面白い話をした。

機屋の細君は、昨日とは更にめかしこんで遣つて來た。人知れず白粉をつけて居るのが男に解つた。觸れた女の手は暖かであつた。

『大變によく利きましたがな、昨日一度据ゑて戴いたんで、せんしやくが大變好くなりましてね、これぢや一週り据ゑて頂けば、治つて了ふと思ひますよ。』

『何ァに、譯はありませんから』

座蒲團を持つて行つて遣る。火鉢を運んで遣る。座敷の跡を掃除してやる。今度は三度の飯までも拵へて遣るといふ深切！　和尙さんが呼んでも返事もせず、なんぞと言ふとツンケンと當り散らして、いつも佛頂面をして居る平生の上さんとは何うしても思へなかつた。

『今日、機屋の上さんが來てましてね？』

『機屋ツて、あの丸髷？…………。』

と灸點屋は莞爾笑つて見せる。

『あの上さん、あれで中々大變なんですよ。行田のものですがね、あの機屋に來る前にも隨分男があつたツて言ふ話ですよ。』

『何うも調子が旨過ぎると思ひました。』

『男殺しツて評判なんだから。』

『用心しないといけませんな。』

と男はまた笑つた。

夜はぽつねんと一人寢た。

る。
『いゝえ、餘り遣らんこともないですけれど………仕事中は成たけ遣らないやうにして居ります。其代り一仕事遣りますと、祝に一騒ぎ遣りますが………。』
『それでもまア好い商賣を覺えなすつた！』
『イヤ、もう仕方が無くつてこんなことをして居るんです。』
身上話が順序として始まつた。灸點の師匠の家は淺草にある。今も其處に荷物が置いてある。生れは能登の小木港で、家は處での網元であるさうな。東京に來て醫師の稽古をしたが、思ふやうに出來ず、法律を學んだが、矢張それも出來ないで、『たうとうかういふものに成つて了つたです。けれど何うかして少し資本を拵えたら、實業を遣りたいと思つて居りますよ。』
其處に寺の上さんが出て來た。
『奥さん、大變お世話になります。』
『いゝえ、無人で、ねつから行屆かないで………。』と云つて、灸點屋の色の白い顔と和尚さんの黒い顔とを比べて見て、『忙しくつて、貴方、とても自炊なんてお出來にならんやうですから、明日から、こちらで御膳を拵へて上げるやうにしませう。何うせ、何も出來やしませんけれど。』
『さう願へれば本當に難有いんですが………。』

灸點屋は平氣で、線香を手に、灸を据ゑて居た。

夕暮近くまで客が來て、番號札は三十五まで進んだ。

その夜、和尙さんは、灸點屋を庫裡に招いて晩酌の御馳走をした。

『大ぶお客が取れましたな。』

『えゝお蔭樣で。』

『每日來るものもあるんでせう？』

『えゝ、まア大抵一週りは据ゑないと、効能が見えませんから………。明日からはお客が殖えるばかりです。』

『中々忙しいですな。』

『え、もう遣り附けて馴れて居りますから、それ程にも思ひませんが、時には助手が欲しいと思ふことが御座いますよ。』

『助手を使つたら好いでせう。』

『面倒でしてな………。都合の好いこともありますけれど、また都合の悪いこともありましてな。矢張自分一人で遣つてる方が氣樂で好いですよ。』

『それもさうでせうな。』と、盃を差して、『貴君平生これを遣りませんか。』と左の手で飲む眞似をす

田舍寺のことであるから、本堂と言つても、都で見るやうな立派なのではなく、それに五十年前に燒けた後の假普請であるので、庫裡に比べて見劣のせられる構、障子の紙は雨風に曝されて、碁盤の目のやうに、或處は白く或處は黑かつた。本堂の階段は木造の粗末なつくりで、あがつた處に小さな古い賽錢箱があつた。本尊の如來樣も眞鍮が禿げて光がなく、汚れた唐縮緬の座蒲團の傍に形ばかりの鉦と木魚とが置かれて、少し離れて處々朱塗の剝げた賓頭盧が貧相な顏をして据ゑられてある。今日は平生の寂しさに似ず、廣い板敷に人が集つて、女の話聲が絕えず聞えた。灸點屋は洋服の上に白い上衣を着て、番號札を配ることから、挨拶をすることから、消え懸けた火に炭を繼ぐことから、萬事總て一人でしなければならぬので、目が廻るほど忙しく、殆ど食事をして居る暇もなかつた。六疊の間の正面には弘法大師の座像の幅を恭々しげに懸けて、前に据ゑた机の上の香爐からは、香の烟が細く騰つて居た。出雲燒の手焙を傍に控へて、一人一人呼び込んだ客の病所を仔細らしく聞糺して、醫師のするやうに、勿體らしく聽診器を出して、胸などに當てゝ見る。ちよつと用事があつて、寺の上さんが行つて見ると、丁度今、町で評判の綺麗な機屋の二十七八の細君の帶を解いて、橫に寢かして、白い肌を露はに、腹に灸を据ゑて居る處で、當てたもぐさの上から細い烟が絕々に颺つた。

上さんは戶を明けて入り懸けて、『あらまア』と思はず聲を立てゝ躊躇した。一種不思議な氣がして、われ知らず胸が躍つて顏が赤くなつた。

ら上つて來たといふばかりの四十男で、泥だらけの手に其白い廣告紙を受取つて、一人は下町、一人は上町をのそ〳〵と配つて歩いた。

入口一二千の小さな町、上町の入口の豪家の前には吹井が綺麗な水を揚げて居た。鹽物屋、荒物屋、障子にうどんひもかはと拙い字で書いてあつて、百姓が汚い筒袖を着て暢氣さうに酒を飲んで居る居酒屋、軒の傾いた煙草屋、醫師の門構の大きい隣は菜畑芋畑桑畑、奥の小屋からは青縞を織る機の音がチヤンカラチヤンカラ聞える。でも通りは流石に町らしく、半鐘臺の立つた四角から、此處等の特色の庇の長く出た二階造の町家が兩側に連つて、市の日には其前に種々の物賣が出て、近在の百姓が赤い蹴出の娘などを伴れてぞろ〳〵遣つて來る。大きな呉服屋、造酒屋、葉茶屋、旅籠屋、赤い暖簾の出て居る種物屋などが續いて並んだ。

町では、裏の淸龍寺に、東京から名人が來て、一週間灸點を下ろすといふ噂が彼方此方で語られた。夜は處々に其引札が白く闇に落ちて居た。何處となく木犀の匂がした。

彼岸の入から寺は賑かであつた。山門から本堂に通じた鋪石道には、爺やら婆やら細君やらがぞろぞろと通つた。中に縮緬の羽織を着た豪家の細君もあつた。若い綺麗な娘もあつた。空は晴れて秋の日がキラ〳〵と廣場に照つた。

柳行李を細引でからげたのが一箇、餘り汚れて居ない夜具蒲團が一組、男は其日矢張洋服を着て、荷物の車について來た。

本堂の六疊に和尚さんが行つて見ると、丁度柳行李を明けて、あたりを一杯に散らかして居る處で、シャツ、ヅボン下、靴下、黄縞の寢卷、半紙、孔法大師の懸軸、硯、番號札、灸點に用ゆる竹筒、もぐさの包などの中に、洋服を紬の袷に着替へて、緋の銘仙の羽織を引懸けて居た。

『和尚さん、これを一つ町に配りたいのですが、人足を心配して頂けるでせうか。』

かう言つて、豫て拵へて置いた廣告を見せた。活字で印刷してあつて、『孔法大師の押灸』と始めに大きく書いて、効能が言文一致振假名附で述べてあつて、何町何寺に於て何日執行と其地名と日數だけ入れられるやうに明けてある。

『わけはありません、前の店子に、いくらも遊んで居るものがありますから。』

かう和尚さんは手輕に受合つた。和尚さんは小柄で、痩せて居て、血色も餘りよくなく、常に肥つた細君に酷められて居さうな體格だが、學問が出來て、縣下の寺々にも名が聞えて居て、稼穡(かしよく)の道に長(た)けて居るといふ近所の評判である。門前に七八軒長屋を持つて居て、屋賃が毎月七八圓づゝあがつた。

廣告三百枚、地名と寺名と日數とを書き入れるのに、そんなに手間は懸らなかつた。やがて門前の日雇取が二人本堂の階段の處に來た。二人とも髮の毛の延びた、肩に穴の明いた着物を纏つた。今、畑か

さんも初對面の挨拶ですつかり氣に入つて了つた。話振に、態度に、言ふに言はれぬ一種のやさしさとなつかしさがある。笑ふ時に可愛い眼色をする。小さい金齒が奥床しくチラ〳〵する。

用事は大したことではなかつた。その男は灸點屋で、毎年春秋の彼岸頃には、此の近所の町々で弘法樣の灸點を下ろして歩いて居るものだが、何うか一週間ほど本堂を貸して頂く譯には行くまいかといふことである。聞くと、昨日まで此處から二里ほど隔つた町のなにがし寺で、一週間灸點を下して居たが昨日で其日限が終つたとの話。和尙さんは前にも知らぬ人に本堂を貸して、一度ならず二度までも酷い眼に逢つたことがあるので、紹介の無いものには、總て貸間は斷ることに腹で決めて居たのであるけれど、此男の柔しい眼と弱々しい口附きとには、何だか無下に斷るに忍びなかつた。此男なら大丈夫だ、間違などのあるやうな種類の男ではないと何がなしにさう思はれた。で、本堂の六疊だけを貸すことにして、食事も寢道具も一切構はず、一週間二圓五十錢といふことに話を決めて、男は歸つた。

歸る時に、庫裡の入口で、

『それぢや奥さん、明後日上つて、またいろ〳〵御世話になりますから。』

『えゝ〳〵、ほんに無人で、行居きませんですけど。』

莞爾と笑つて見せた。

おし灸

秋の彼岸前、ある田舍寺の庫裡の廣い入口に、縞セルの脊廣を着た色の白い二十六七の男が立つた。
脊の高い肥つた寺の上さんが、奥で掻巻を被けて晝寢をして居た五分刈の和尙さんを搖り起して、
『あなた、あなた！』
和尙さんはむつくりと跳起きた。眠さうな眼を摩りながら、
『何だ、何だ、また葬式か。』
『寢惚けちやいけませんよあなた………。今ね、洋服を着た若い立派な人が來たんだがね。』と名刺を渡して、『是非お眼に懸つてお願ひしたいことがあるんだつて。』
寢ぼけ眼で、和尙さんは名刺を見たが、知らぬ名であつた。何んな用事かと一應聞いて來いと言つたが、上さんは躊躇して要領を得ぬので、『まア、上げて置け。』
座敷の次の間の八疊で、和尙さんはその男に逢つた。上さんが一目見て好い人と思つたやうに、和尙

を立てゝ居た。

兎に角本部に行つて知らせて來ようと思つて、兵士は表へ出た。丁度其時街道に車の音がして、荷物と人とを滿載した騾車が、三臺續いて戰場の方から遣つて來た。豚尾の御者がウオウオウイウイと言つて、長い鞭を鳴らした。騾車は凸凹の甚しい路を波を打つたやうにして近付いて來る。其上には腕を卷いた赤い布に白ぬきに社名を記した從軍記者が五六人乘つて居た。寫眞班の人々も居た。荷物は各自の行李やら寫眞の種板やらであつた。かれ等は今歸國の途に就いて居るのである。

兵士も負傷者も其車の過ぎ行くのを長く見送つた。車は靜かな夕暮の野をがら〳〵と…………。

た。

其の夕暮である。

『おい〳〵。』

と、其重傷者の隣に寢て居た士官が聲を立てゝ呼んだ。士官は足部に負傷して立つことが出來なかつたのである。

兵士は用事にかまけてぐづ〳〵してると、

『おい、變だぜ、見て遣れ！』

とまた聲高く士官が呼んだ。

行つて見ると、曹長は呼吸を引取つて居た。手を取つて見たが、もう脈搏がなかつた。『今、なんだか唸りやうが變だと思つて、そつと見て居ると、手を持上げて、胸のあたりを二三遍掵ふやうな眞似をした。はてな、何うかしたんぢやないかと思つてゐると、頷を動かして、二度ばかりしやくり上げた。あれが痰が詰つて來たんだ。』と士官は寢たまゝ話をする。

流石に人々は氣の毒に思つた。けれど急いで軍醫を呼んで來る必要は誰も感じなかつた。

窓から打渡した野は靜かだ。死人に被けた白い毛布の半分と毛布から出て居る死人の足とは、依然として夕日の光線に照されて居たが、朝夕は動けなくなつた蠅が二三疋、明るい暖かい小窓にブン〳〵音

切つて居る。現に、軍醫もさう言つて歸つた。一緒に居る負傷者には餘り重いのが無いので、氣の毒だ、可哀相だと同情はしたが、さて何うすることも出來なかつた。それに、唸聲は矢張不愉快で、人々の心を暗くした。

其曹長は秋田縣の生れだ。戸山學校に久しく居たが、戰爭前に第三師團の聯隊附になつて、戰場に遣つて來たのである。秋田縣の角館町、それがもう餘程山の中であるのに、それからまた三里ほど峠を越して行つた處がその故郷だといふ。其山奧に母と妹とが居た。東京の牛込には內縁の妻が居た。若くつて美しかつた。

山奧の故郷、それは人々の胸に餘りに遠く且つ疎かつたが、若い內縁の妻には、誰も同情を惜まなかつた。其妻はお絹さんと呼ばれた。

かれは早くから死を覺悟して、『君達が國に目出度く歸つた曉には、何うか妻に逢つて下さい。そしてかうじて諸君の世話になつて死んだといふことを話して下さい。』と口癖のやうに賴んだ。覺束ない手附で、手帳の紙に其住所の番地姓名を鉛筆で書いて、それを破つて人々に渡した。

意識を失つて譫言を言ふやうになつてからは、其名が幾度も唇に上つた。

『お絹！　お絹！』

と歷々と其人を眼の前に見るやうに言つた。眼はうるんで、顏は蒼ざめて、半ば死人のやうに見え

沃土の惡臭い臭氣が一室に充ち渡つた。

病院の本部は楊の樹の深く繁つた大きな家であつた。戰爭最中は、此家に司令部が置かれて、腕に白布を卷いた馬卒傭人などが其前を駈足で往來したが、今は綠色の筋の軍服軍帽が出たり入つたりして居る。

夕暮になると、裏の小高い丘から烟がいつも騰つた。風の無い時には、重く低く村を這ふが、大抵は丘の斜坂に緩く靡いて見られた。これは日每に死者の屍を燒く烟である。其處には穴がひろく平らに掘られてあるが、血で汚れた擔架で運んで來た蒼白くしやちこばつた死骸を軍服の儘其中に入れて、高粱殼を積んで、薪を載せて、石油を懸けて火をつける。其任に當つた兵士は、其火で卷烟草を燻らしながら、平氣で笑つて話をした。

街道に添つた一軒の民家にも、矢張同じやうに五六名の負傷者が收容されてあつたが、其處には曹長が一人、胸部貫通で死にかけて居た。家の前には楊があつて、其疎らな葉が野から一面に照り渡つた夕日を篩して、濃淡の影を家の中に漲らした。

夕暮の野はもう寒かつた。

兵士が一人、其重傷者の世話をした。唸聲が昨日から今日まで續いた。もうとても助からぬのは解り

高粱粉で製した饅頭を並べて置くと、隊に後れた日本の兵士が、カーキー色の軍服の隱囊から錢をつかみ出して、『一箇多少錢。』など丶覺束ない淸語をつかひながらそれを買つた。日に燒けた横顏から銃と劍とに夕日が照つた。

高等司令部が戰を督した丘の下の村落には、楊の葉が赤く色付いた間に、赤十字の小さい旗がヒラヒラと風に靡いて居る。此の四邊の民家は總べて此間の戰爭の負傷兵の病院に宛てられてあるので、街道から高粱畑、葱畑、蒜畑などの間を分けて行くと、厚い不細工な土塀で圍まれた民家の中には、槐の樹やら杏の樹やらが見えて、入口の扉には、例の支那人の『立春大吉』とか『擡頭見喜』とかいふ字が書いてあつて、其上に片假名で第何師團第何聯隊傷病兵室と書いて貼つてある。扉を排して中に入ると、土間には竈、平扁い釜に蓋がしてあつて、瓠で造つた桶とも柄杓ともつかぬ器が載せてある。右の室にも左の室にも負傷兵が一杯詰つて居た。

何の室にも一人位は重傷者があつた。戰後日少く、孰れの野戰病院でも、まだ重傷者輕傷者を區別する暇が無かつた。何の隊でも衛生隊が戰場から收容すると、すぐ取敢へず手近い民家に擔ひ込んだ。重傷者の日を經ずに死んで行くのを取片附けるのも容易でなかつた。

室には日が射し込んだ。四邊は明るかつた。炕の上に毛布を被けて、少くとも、三人は寢て居た。土間にも高粱殼を敷いてごろりと轉がつて居るものもあつた。腕と、頭と、脚を卷いた繃帶は血に汚れて

居た。野から村落に入らうとする處の混雜はそれは凄じいもので、砲車が泥濘の波を乘切つて前に出ようとする、歩兵が其間を縫つて先に進まうとする、士官は劍を拔いて叱咤する、傳騎が其間を飛ぶが如くに走つて來る……。村と少し離れた高粱の畑には、後れて到着した臼砲隊が漸く陣地を完成して今少し前から凄じい音を天地に轟かし始める。高い號令臺に上つた士官のメートルを呼ぶ聲が分明聞える。村を中斷して廣い淺い川があつたが、兵は皆それを渉つて勇ましく進んで行く。其處にも此處にも砲彈が炸裂して白い烟を擧げた。けれどそんなことに頓着して居るものは、一人も無い。川の向うは街道上の驛で、大きい客棧が戸を閉めたまゝ簷を連ねて、それを外れると、ひろ〳〵とした野の正面に、露西亞軍の據つた一帶の丘陵が深紫色に分明と顯はれて、其處にも矢張砲烟が蜂の巢のやうに灰色に簇つて居た。高粱畑の處々に砲兵陣地が露はに見えて、眞直な街道を歩兵隊が駈足で前に出て行くのが鮮かに眼に映つた。——死の叫喚、死の奮闘、小銃の音がバリ〳〵聞える………。

砲聲が四日間續いた。

今は靜かだ。以前の街道、以前の村落、以前の野にかへつた。驛の家々からも淺黄の服を着た支那人が暢氣さうな顏を出して、街道の人通りを見て居る。近所に避難した家族が騾車に乘つて歸つて來るのも幾組かある。亭主に負はれて川を渉つて行く嬶もあつた。岸には支那人がもう例の屋臺店を出して、

車の音

九月の末はもう寒かつた。朝夕には水霜が下りた。高粱は既にガラガラと風に鳴つた。腹の白い小さい渡り鳥は、戰後の不時の獲物を知つてか、群を成して例年より早く遣つて來て、點々と晨の星のやうに立つて居る支那民家の附近に下りて餌を漁つては、また夕日の野に向つて羽音凄まじく飛んで行つた。鳴く聲がいかにも物淋しかつた。

楊の葉は黄くなつて散り始めた。村から村へ二里もある廣い野には、泥濘のまゝに乾いて固くなつた一條の豁い路が通じて、をり〳〵それを横ぎつて流れる小川の痕があつた。中には水のある幅の廣い川もあるが、それには一月前まで此處に居た露兵が板橋を架けて、前進して來た日本軍の砲車がとゞろき勇しく渡つた。十日前の戰爭の其日には、此附近は丁度大きなパノラマをひろげたやうで、すぐ向うに見える楊樹の村は炸裂した砲彈の白い烟で全く包まれて了ひ、其傍の小高い丘の上には、日本軍の高等司令部の將校連が一團になつて、中には身を地上に這はせて望遠鏡を片時も眼から離さずに戰況を見て

の鼻までぐるりとパノラマのやうに見渡された。誰も皆な喜悦の聲を擧げた。

最後に、紳士は紀念の爲めにとて、人々を頂上の小さい石の宮の前に集めて、寫眞を撮つた。兵士は五人殘らず其人々の後に立つた。其處に隊長の老士官も遣つて來たので、强ひて群の中に入つて貰ふことにする。ついて來た犬も入れた。

水桶から汲んで出した水は溫かつたが、しかし海軍士官の細君は二杯までお替をして飮んだ。

『奧さん溫くつても、我慢して下さい、これでも下から汲上るんですから。』ハアモニカは二杯目のコツプを渡しながら言つた。

『うまい處に住んで居らつしやるんですねえ。』

暫くしてから、士官の細君は四邊を見廻しながら言つた。

『これは面白い、ほんとに世を離れた生活ですな。』

紳士はかう言つて笑つた。

肺病の娘は途々摘んだれんげを束にして、それをハンケチで結いて持つて居た。透徹るやうに色の白い顏と派手な矢絣の紬の袷とが際立つて四邊に鮮かに見えた。

曹長は大きなブリキ罐から、取つて置きの煎餅を氣前よくガラ／＼と盆の上に明けた。一人が急須と茶碗とを勝手へ洗ひに行くと、一人は裏の炭俵の中から、炭を鷲づかみにして來て、それを七輪に入れて、鐵瓶をかけてばた／＼と其下をあふぎ出した。ぼんやりした二等卒は紳士のコダックの寫眞器を物珍らしさうに見て居たが、『これで寫眞が撮れますかなア。』

人々は兵士を相手に一時間ほど遊んだ。展望哨の居る處に上ると、利根川の海に注ぐさまから、銚子町の人家、川口の明神、彼處は黑生、其處は海獺島、長崎、外川からかけて犬若、屛風ケ浦、遠く飯岡

急ごしらへの粗雑な普請、四面は簡單に板で張られてある。中は兩方に分れて、間が二つになつてゐるが、此の室には卓と椅子とが置いてあつて、電話器が懸つて居る。卓の上には書類も置いてある。長押には劍だの、カアキイ色の服だの、水筒だの、新しい靴だの、いろ〳〵なものが懸けてある。汚い蒲團も幾組となく積重ねられてあつた。

兵卒共は退屈な生活を此處で送つた。一時間交代に展望哨に立つ他には用事がない。あとは食ふか、寢るか、下に行つてハンドオルガンでも鳴らすか、くだらぬ話でもするか。

一人が餘りの退屈に、板に紙を張つて罫を引いて、土製の碁石を町から買つて來て、碁を打つた。けれど、それにもやがては倦きて、此頃では隅の方に押附けられてある。

一日、海水浴のお客がぞろ〳〵遣つて來た。海軍士官の細君は山路につかれて、家に入るや否、『冷たいお水はないでせうか。』と呼吸を苦しさうについて言つた。紳士は肩にコダックの寫眞器をかけて來たので、額の汗を幾度となくハンカチで拭つた。商家の若旦那は肺病の娘の手を引いたり後から押したりしてやつた。

單調な哨兵小舍はいろ〳〵な色彩で充された。

肥つたハアモニカは莞爾して居る。曹長は白い毛布を汚い八疊に敷いて客を請じた。丁度碁を打つて居た二人は、中途で止して、これも矢張嬉しさうに迎へた。

は食事時分には屹度其縁側に首を載せて居た。紳士が海岸に散歩に出懸けると、屹度四目垣の傍から飛んで來て、其周圍を嬉しさうにじやれ廻つた。

『誰れとも懇意にならぬ先に、犬と友達に相成申候、其犬は黄い可愛い眼を致し居り候。』いろ〳〵な狀況を書いた後に、かう附け加へて、かれは東京の細君のところに手紙を出した。

けれどそれは二三日の中であつた。同宿の人々にも段々懇意になつた。海軍士官の夫人とも話した。隣に來る兵卒からも『今度是非山に入らつしやい。それは眺望は好いですから。』と言はれるやうになつた。

裏の松原を越えると、二丁ほどの畠を隔てゝ愛宕山が連つて居た。其山の上に三角測量臺があつて、其傍に戰時の展望哨が置かれてある。

曉鷄館の左の外れから、松原を拔けて、麥の青々した。菜の花の黄い、細い畠道を通つて、處々に肥料溜のある、埃の白い大通を突切つて、それから段々山へと懸る。勿論山と言つても百二三十米の高さで、登りもさう苦しくはない。兵士は下から水桶を擔つて上つて行く。

松と松との間を一丁も登ると、こんな處にこんな平地があるかと思はれるやうな處があつて、其處に松を切拂つて、哨兵の小さな宿舍が一軒。

四面松で圍まれて、下からは其家のあるのが解らない。

海水浴場に來て居る海軍士官の細君と、終日海の展望に倦き果てゝ居る兵卒の群と、召集に應じてかういふ處に來て居る後備の老士官とを通して、敵の大艦隊の襲つて來る一種の不安の空氣を感じた。

『お便はありますか。』

かう男が訊いた。

『いゝえ、御座いませんの。』鳥渡途切れて、『矢張忙しいんでせう。』

『御無事であれや結構ですけれど……。』

『平生から餘り手紙など書かない性分でしたから……。』

『今、どちらに入らつしやいます？』

『何處に居りますか、佐世保富士艦で出せば、手紙が屆くことになつて居りますけれど、居ります處はよく解りませんです。』

それで話が絕えた。細君は自分の室に入つて行つて了つた。

其時、白と茶の斑の洋犬が紳士のゐるその緣側に首を載せて頻りに鼻を鳴らし始めた。と、紳士は眼を新聞から離して、其處にあつた菓子を一つ取つておあづけをした。犬はワン、ワン、ワンと最後のを大きく高く吠えた。

紳士は一番先に此の犬と懇意になつた。殘つた肉や肴などをそれからもよく投げてやつた。後には犬

て來る。新しい戰報に日々待焦れて居る人々は、其鈴の音を聞くと、待兼ねたやうに、座敷から出てそれを買つた。やがていろ〳〵な噂がはじまる。笑ひ語る聲が一時到る處にした。

少佐の軍服を着た五十前後の老士官は、其頃いつも莞爾した顏をして、海に面した其長い緣側の前を通つて、二三の知り合つた顏に挨拶して劍を鳴らして行く。

『隊長さんのお出かけは遲いですね。』

『一體何處に居るんです、隊長さん。每日向うから出て來るが……。』

『あの、あそこに居るんですよ。その向うの離れを借りて居るんですよ。』

『一人でですか。』

『それはさうですとも。』

と海軍士官の細君は笑つた。すぐ語をついで、

『あの隊長さん、あれで中々優しいおもしろい人なんですツて……始終中戲談なんぞばかり言つて居るんですツて……。え、佐倉の聯隊の人ですかね、後備で、今度召集された人でせう。』

『それでは平生は軍人ぢやないんですね。』

『え、何でも東京で會社か何かに出て居るんですツて。』

隣の紳士は緣側の閾の處の障子に倚り懸つて、新聞を讀みながら此會話を聞いて居た。かうして一人

『奥さん、何うです、山に遊びに來ませんか。男世帯で、何にもお構ひは出來ませんけれど、お茶位は上げられますぜ。』

こんなことを言つた。

ハンドオルガンの鳴る隣の間には、二三日前から鬚の綺麗に生えた痩削な卅五六の紳士風の男が來て居た。

矢張病人らしく、烟草盆の灰吹に時々啖を吐いて、苦しさうな咳嗽(せき)をした。

兵卒がぞろ〳〵前を通つたり、客が互ひに樂しげに話し合つたり、親しげに物品の交換をしたりするのを見ると、何となく羨しさうで、他の人のやうに、自分も打解けたいといふ風に見えた。一人で淋しさうに磯に上つて岩の上に立つて居ることもあれば、一間の中にぽつねんとして新聞雜誌を讀むでもなく烟草をふかすでもなくぢつと坐つて居ることもある。疲れ果てたといふさまが何處となく見える。

普通の人ならば、鳥渡した機會をつかんで、同宿の人々に笑顏を近づけたり、會話を試みたりして、十年の知己のやうに親しくなるのは容易なことだが、此客には何うもそれが出來なかつた。折角心易立(こゝろやすだて)に話しかけられた會話にも容易に近づき得なかつた。

毎朝十時頃には新聞が來た。町から古帽子を冠(かぶ)つた書生風の男が、竹行李に數種の新聞を入れて持つ

が、毎日のやうに遣つて來ては鳴して行つた。

丁度日本海々戰前で、バルチツク艦隊がカムラン灣を發つて北上したといふ噂が專ら評判されて居る頃であつた。新聞紙には二號活字で種々のことが報道され、號外賣の聲はこんな邊僻な漁村にまで聞えた。對島を通るか、津輕海峽を拔けるか、それとも宗谷海峽を迂回するかといふ話が誰の口にものぼつた。

けれど山の兵卒は暢氣な調子で、

『ナアに、露助なんか、何うすることが出來るものかい。わざわざ御苦勞にもブク〳〵を遣りにお出でなすつたやうなもんだ。』

など〻言つて居る。

『それでも貴下方は大變ですな、毎日見張つて居て、見知らぬ艦でも通れば、一々報告しなくちやならないんですから。』

客がかう訊くと、

『イヤ――さういふものが通つて吳れると面白いんですけれど、毎日々々海ばかり見て居まさ。』

かう言つて、平氣にハアモニカを吹いたり、犬に調戲つたりして居る。

時には、

寫眞

山の兵卒達は退屈がつて、下の曉鷄館によく遊びに來た。海水浴の客の爲めに建てられた室は一列に海に向つて並んで、何の間からも犬吠の燈臺の聳えて居るさまや、岩に怒濤の打寄せるさまや、客が藁草履を引懸けてそこゝと歩いて行くさまが手に取るやうに見える。春の末で客はまだ少かつたが、それでも海に面した間は大抵塞がつて、メリンスの帶に赤い襷の若い女中が、前の緣側を忙しさうにして通つた。

孫を連れて來て居る品の好い白鬚のお爺さん、透徹るやうに色の白い肺病の娘、矢張これも病人らしい商家の若旦那、八日市場邊から浴場のひまなのを見かけて保養に來た年寄の夫婦、夫が戰地に行つて居る間家を疊んで此處の海水浴彼處の溫泉場と暢氣に逗留して暮して居る二十七八の綺麗な元氣な海軍少佐の細君――これ等の人々の室に、兵卒達は暇さへあると常に遣つて來て話をした。

少佐の細君の室にはハアモニカとハンドオルガンとがあつた。それを背の低い肥つた無邪氣な一等卒

女中は行つて見た。其處はもう松原續きの畑で、甘藷の蔓が一面にはびこつて居た。近寄つて用事を聞くと、これからすぐ發つから、ツケを持つて來い、そして室に散ばつたものをすつかり鞄に入れて一緒に持つて來て呉れとのことだ。女はきまりが惡いかして、後向になつて、亂れた髪をぐる〳〵と頻りに自暴に巻きつけて居た。

『それで何うした。』

と、此物語を聞いて居た男の一人が訊ねた。

『言ふ通りに、ツケと鞄とを持つて行つて遣ると、其松原つゞきの甘藷の畑の中で、旦那は勘定を濟まして、鞄の中の物品を改めて、女を促し立てゝ、道も碌々ついて居ない畑の中を突切つて發つて行つた相だ。女中が歸つて見ると其の好男子の先生は搔巻を冠つて彼方向になつて寢て居た相だ。』

『成程これは芝居式だ。』

と一座は笑つた。

女中は番頭の告げたことを知つては居るが、此の場合、さう打明けて言ふに忍びぬので、

『いゝえ。そんなことは……。』

『それなら好いけれど。』

と、些しは安心した樣子で、髮を長く亂した儘、下駄を突懸けて、戸外に出た。けれどもう遲かつた。旦那は既に其處に來て居た。

女を見ると、突如顏色を變へて肩の處を烈しく攫んだ。女中が見て居ると、旦那は何か烈しい言葉を懸けながら、女を押すやうにして、路の無い裏の松原の中に入るとも無く入つて行つた。朝の長けた日影が美しく松原に透つて、下草の無い褐色の砂地は、箒で掃いたやうに綺麗になつて居る。見える、實に分明とよく見える。旦那が女を松の幹に押付けて、髮の毛を握らんばかりにして、烈しく小突き廻して居るさまが手に取るやうに見える。女は後向になつて、帶をだらしなく下げて居るが、旦那に小突かれる度に、縮緬の赤い袖口が、ちら〳〵とこぼれるやうに袖から洩れる。

丸で芝居でも見て居るやうだつた相だ。

で、十分も經つたらうか、女が何う巧く旦那を納得させたか、旦那が何う忍耐して一時其忿怒の情を和げたか、それは何方だか解らぬが、兎に角氣が附いて見ると、旦那は手を擧げて、お出で〳〵をして此方に立つて居る女中を呼んで居る。

『え、御連樣が居らつしやる。』と遣つた。

『連れ？』

と、男は思ひもかけぬと言つたやうであつたが、番頭の捻くり廻して居る宿帳を鳥渡と手に取つて見て、急に顏の色を變へた。

處へ馴染の女中が來て、其の不穩の有樣を見て取つて、挨拶も碌々爲ずに、急いで離室へと駈けて行つた。

『旦那樣が……。』

と知らせると、をりから女は髮を結ひ懸けて、玉を延べたやうな白い兩腕をさながらに、庇のふくらみを鏡に寫して、頻りに思ひのまゝにならぬを氣にして居たが、自分の耳を疑ふかのやうに、

『え？』

『あの旦那樣が……。』

女の顏は見る〳〵蒼青になつて、肉の戰慄が分明と見えた。もう暢氣に庇髮の膨らみ加減などを見て居るどころではない。

『お前、あの弟の來てることを言つて？』

語氣が慌て返つて居た。

だ。』
と巡査は笑ひながら言ふ。
行つて見ると、果してまだ寢て居た。
高貴の方は八時に發つて了はれた。で、家は大風の吹いた後のやうに靜かになる。離室では九時になつても、手を鳴して呼ぶやうな氣勢も無い。朝食が餘り遲くなつてはと思つて、女中が行て見ると、丁度其時其弟が起きて、戸を一枚明けて居る處であつた。で、座敷を掃除する、其隙を女はだらしない艶かしい風をして、本館の前の大きな泉で顏を洗つた。其傍に男は齒を磨きながら、羽織の長い白い紐をだらりと垂らして立つて居たが、女が濟むと、タオルを其手から受取つて、ザブ／＼と頭を浸して洗つた。何うも其樣子が男女の普通の關係とも違ふやうだ。さうかと言つて姉弟にしては顏が似て居ないし、何處かかう唯ならぬ處が見える。女中は巡査の注意もあるので、朝餐の給仕をしながらも、餘程氣を注けて見たが、何うも解らない。戀中のやうでもあるし、姉弟のやうでもある。
で、その夜も男は泊つた。
ところが、其翌日の午前十時頃ださうだ。朝餐をすまして、女中が御膳を引いて間もなく、本館の入口に、以前の商人風の旦那が不意に東京から遣つて來て、此處へこれ／＼といふ女が世話になつて居る筈だが……と聞く。生憎應接に出た番頭が不馴な男で、解り切つて居るものを、宿帳を捻くり廻はして、

處が其日は丁度陸軍のさる高貴の方が、習志野から歸りをお立寄で、本館の方はそれは忙がしかつた。お附の武官が劍鞘を鳴して往來する。警察官が萬一を慮かつて其附近を警戒する。其混雜は一通りではない。で、多い女中も手が足らぬ處から、八時頃に夜の物を入れた限り、其松原の中の別莊は、全くこの混雜からかけ離れて、其裏の小窓は、遲くまで明るく闇にかゞやいて居た。

翌朝、其女中が離室に行かうとすると、本館の角に立つて居た巡査が、

『おい〳〵。』

と呼ぶ。

何かと思ふと、

『あの離座敷の二人の客は何者だ?』

『御姉弟です。』

『姉弟? 馬鹿な……。』

『だつて……本當に。』

『馬鹿な……あんな姉弟があつて堪るものか、二人とも、一晩中寢やしない。』

『だつて……。』

『本當にあんな姉弟はありはせぬよ。今しがた寢たばかりだ。まだ起きはせんから、行つたつて駄目

『え、え、何うぞ……御一人で御淋しう御座いませうから。』

と女中は挨拶して引退つて、其手紙をポストに入れて遣つた。別段氣にも留めなかつたので、宛名は見ても忘れたが、所は本郷弓町三丁目であつたさうだ。

翌日午後二時頃、果してその弟が來た。二十一か二で、色の白い、鼻の隆い、眼に何とも謂へぬ愛嬌があつた。木綿の絣の書生羽織を着て、袴を穿いて居た。其顏を見ると、まアよく早く來て呉れた！と姉さん大よろこびで、昨日からの氣分の悪いのは全く忘れて了つた樣子、二人の間はいかにも馴々しく、いかにも懷かし氣で、まことの姉弟らしい態度は其言葉の中に現はれて居た。學校に居る間は、かういふ遊山は滅多に出來ぬと言ふので、夕飯には種々の御馳走の註文、一時間ほどの散歩から二人が歸つて來ると、明かな洋燈の下に、會津塗の會席膳、吸物、鹽燒、刺身、口取の栗のきんとん、ビイルの罎、コップ二箇。

女中が堅いビイルの栓を拔き兼ねて居ると、弟が引取つて、一氣に拔いて、姉さん！一つと罎を突出すと、姉がまア私がお酌をして上げるからと言つて、無理に奪ひ取つて、波々と注ぐ。コップの麥酒に洋燈の光が射し透つて、姉弟の顏にも、晴々しい快樂の色が行渡つて、一室が何となく賑かに明かるい。女も男に勸められて、輕くコップに一杯の酒、やがてほんのりと二人は醉つて、睦しい物語――昨夕の膳のさびしかつたのを女中は思出して、姉弟とはかうも好いものかと羨しく思つた。

しいから、何分宜しく頼む、三四日中に迎へに來るからと言つて、四時の汽車で發つた。

女の美しい姿が、松原から松原を越えて、秋の晴れた海岸の路を靜かに逍遙ふのを多くの人々が見た。西洋畫家の書齋の硝子窓には夕日が美しく眩ゆく光つた。潮の引いた海は遠くまで洲を顯はして、紫色した富士が夕照の上に分明と見える。女中が夕飯の膳を運んだ時には、女は既に海岸から歸つて、頻りに長い手紙を書いて居た。

手紙を書終つて、封筒に入れて、宛名を書いて、それを夕飯の膳の傍に置いた。輕く二椀、鹽燒にも箸をつけずに食事を終つたが、女中に其手紙を渡しながら、

『私は、お願ひがあるんですがね。』

『え？』

と女中は仰ぎ見たが、後から思ふと顏が上氣して居た。

『私ね、……此の手紙を書いたのは、私の弟ですがね、……一人きりの弟で、親に二人とも早くから別れて……さびしくつて可哀相なんですがね、それに平生學校に居て、勉強してるんでせう。かういふ處に遊びに來たことなど、本當にないのだから、可哀相だから……呼んで一日二日遊ばして遣らうと思ふんですがね、來たら、宜しくね……。』

と女が言ふので、

ら俄分限と言つたやうなお里が見え透いて居た。伴れて來た女は何うも細君らしくない。かと言つて商賣人でもないらしい。年が二十二三、庇髮に結つて、色の白い、眼のぱつちりした、痩削な、脊のすらりとした佳い女だつた。櫛でも、蝙蝠傘でも中々金目な物で、殊に帶留が立派だつた。小形の鞄の中から、手帳を出す、雜誌を出す、鏡を出す、湯上りのぼつと上氣した身の意氣な不斷着に着替へた其姿がまた水際立つて美しかつた。女中共は隨分各種の客に接して居るから、大抵それと見當のつかぬことは無いのだが、何うも此女ばかりは解らなかつたさうだ。旦那と話して居る調子が、至極打解けて居て、そして甘えるやうで、時には駄々も捏ねると言つた風、旦那はまたそれに憧れ切つて、專心其機嫌を取つて、一顰一笑にも夥しく氣を遣つて居た。まア、强ひて鑑定すれば、容色望みで、金を積んで、漸つと手に入れた新妻と云つた樣なところがあつた、

旦那は肥つて、顏の輪廓が四角で、色が黑かつた。

で、一夜其處に泊つた。翌日、女は蒼い顏を爲て居る。氣分もはつきりしない樣子。昨日の元氣な態度とは丸で變つて、美しい顏にも暗い色が上つた。旦那は忙しい身の、朝から出發の心構で居たらしかつたが、女が何うも氣分が進まぬと謂ふので、午後までぐづ〳〵して立つたり居たりして居た。三時頃になると、女は氣分が何うも惡いから二三日此處に靜かにして置いて呉れと言ひ出した。男はこれを拒むことを敢てしなかつた。女中を呼んで多分の心附を遣つて、いろ〳〵後のことを託して、女一人で淋

弟

今度の千葉の講演には、稻毛の海氣館から僕は通つた。縣廳の役人共は、僕が細君同伴で來て居ると思つて、わざと遠慮して煩さく訪問を爲て吳れなかつたので、お蔭で、至極暢氣に三日を暮した。彼處は鳥渡好いね。

別墅式の小さい家屋が彼方此方松原の中に獨立して居て、なんだか好い感じがする。場所が場所だから、餘り好ましい處では無いとは始めから思つたが、それでも存外あの家は堅いと見えて、一人の男客には女中が屹度二人づゝついて出るよ。僕は退屈まぎれに其女中共を相手にして、いろ〳〵な話を聞いた。

聞き給へ、かういふのがある、これはちよつと話の種になる。

何でも昨年の秋ださうだ。そら、あの松原の中の、有名な西洋畫家の書齋の上にある六疊と八疊の家屋、彼處で起つたことだ。旦那は實業家か、さうでなければ銀行員とでも謂つたやうな風、年齡はもう四十を越して居た。金鎖、金時計の立派な扮裝ではあつたが、何處かかう野卑な處があつて、金滿家な

いことにして、かれは心ゆくまで其の美しい姿に魂を打込んで了つた。

水道橋、飯田町、乘客は愈多い。牛込に來ると、殆ど車臺の外に押出されさうになつた。かれは眞鍮の棒につかまつて、しかも眼を令孃の姿から離さず、恍惚として自からわれを忘れるといふ風であつたが、市谷に來た時、また五六の乘客があつたので、押つけて押かへしては居るけれど、稍ともすると、身が車外に突出されさうになる。電線のうなりが遠くから聞えて來て、何となくあたりが騷々しい。ピイと發車の笛が鳴つて、車臺が一二間ほど出て、急にまた其速力が早められた時、何うした機會か少くとも横に居た乘客の二三が中心を失つて倒れ懸つて來た爲めでもあらうが、令孃の美に恍惚として居たかれの手が眞鍮の棒から離れたと同時に、其の大きな體は見事に筋斗がへりを打つて、何の事はない大きな毬のやうに、ころ／＼と線路の上に轉り落ちた。危ないと車掌が絶叫したのも遲し早し、上りの電車が運惡く地を撼かして遣つて來たので、忽ち其の黑い大きい一塊物は、あなやと言ふ間に、三四間ずる／＼と引摺られて、紅い血が一線長くレイルを染めた。

非常警笛が空氣を劈いてけたゝましく鳴つた。

氣を恢復することが出來るか何うかは勿論疑問だ。

外濠の電車が來たのでかれは乘つた。敏捷な眼はすぐ美しい着物の色を求めたが、生憎それにはかれの願ひを滿足させるやうなものは乘つて居らなかつた。けれど電車に乘つたといふことだけで心が落付いて、これからが――家に歸るまでが、自分の極樂境のやうに、氣がゆつたりとなる。路側のさまざまの商店やら招牌やらが走馬燈のやうに眼の前を通るが、それがさま〴〵の美しい記憶を思ひ起させるので好い心地がするのであつた。

お茶の水から甲武線に乘換へると、をりからの博覧會で電車は殆ど滿員、それを無理に車掌の居る所に割込んで、兎に角右の扉の外に立つて、確りと眞鍮の丸棒を攫んだ。ふと車中を見たかれははツとして驚いた。其硝子窓を隔てゝすぐ其處に、信濃町で同乘した、今一度是非逢ひたい、見たいと願つて居た美しい令孃が、中折帽や角帽やインバネスに殆ど壓しつけられるやうになつて、丁度鳥の群に取卷かれた鳩といつたやうな風になつて乘つてゐる。

美しい眼、美しい手、美しい髮、何うして俗惡な此の世の中に、こんな綺麗な娘が居るかとすぐ思つた。誰の細君になるのだらう、誰の腕に卷かれるのであらうと思ふと、堪らなく口惜しく情けなくなつて其結婚の日は何時だか知らぬが、其日は呪ふべき日だと思つた。白い襟首、黑い髮、鶯茶のリボン、白魚のやうな綺麗な指、寳石入の金の指輪――乘客が混合つて居るのと硝子越になつて居るのとを都合の好

つたとつく〴〵慨嘆する。若い青年時代を下らなく過して、今になつて後悔したとて何の役に立つ、本當につまらんなアと繰返す。若い時に、何故烈しい戀を爲なかつた？　何故充分に肉のかほりをも嗅がなかつた？　今時分思つたとて、何の反響がある？　もう卅七だ。かう思ふと、氣が苛々して、髮の毛をむしり度くなる。

社の硝子戸を開けて戸外に出る。終日の勞働で頭腦はすつかり勞れて、何だか腦天が痛いやうな氣がする。西風に舞ひ上る黄い塵埃、佗しい、佗しい。何故か今日は殊更に佗しくつらい。いくら美しい少女の髮の香に憧れたからつて、もう自分等が戀をする時代ではない。また戀を爲たいたッて、美しい鳥を誘ふ羽翼をもう持つて居らない。と思ふと、もう生きて居る價値が無い、死んだ方が好い、死んだ方が好い、死んだ方が好い、とかれは大きな體格を運びながら考へた。

顏色が悪い。眼の濁つて居るのは其心の暗いことを示して居る。妻や子供や平和な家庭のことを念頭に置かぬではないが、そんなことはもう非常に縁故が遠いやうに思はれる。死んだ方が好い？　死んだら、妻や子は何うする？　此念はもう微かになつて、反響を與へぬほど其心は神經的に陷落して了つた。寂しさ、寂しさ、寂しさ、此寂しさを救つて呉れるものはないか、美しい姿の唯一つで好いから、白い腕に此身を卷いて呉れるものは無いか。さうしたら、屹度復活する。希望、奮鬪、勉勵、必ず其處に生命を發見する。この濁つた血が新らしくなれると思ふ。けれど此男は實際それに由つて、新しい勇

『君の近作を讀みましたよ。』と言つて、笑つて居る。

『さうですか。』

『不相變、美しいねえ、何うしてあゝ綺麗に書けるだらう。實際、君を好男子と思ふのは無理は無いよ。何とか謂ふ記者は、君の大きな體格を見て、其の豫想外なのに驚いたと言ふからね。』

『さうですかナ。』

と、杉田は詮方なしに笑ふ。

『少女萬歲ですな！』

と編輯員の一人が相槌を打つて冷かした。

杉田はむつとしたが、下らん奴を相手にしてもと思つて、他方を向いて了つた。實に癪に觸る、卅七の己を冷かす氣が知れぬと思つた。

薄暗い陰氣な室は何う考へて見ても佗しさに耐へかねて卷煙草を吸ふと、青い紫の烟がすうと長く靡く。見詰めて居ると、代々木の娘、女學生、四谷の美しい姿などが、ごつちやになつて、縺れ合つて、それが一人の姿のやうに思はれる。馬鹿々々しいと思はぬではないが、しかし愉快でないこともない樣子だ。

午後三時過、退出時刻が近くなると、家のことを思ふ。妻のことを思ふ。つまらんな、年を老つて了

塵埃の間に覺束なく見えて、それが何だかかう自分の唯一の樂みを破壞して了ふやうに思はれるので、いよ〳〵つらい。

編輯長がまた皮肉な男で、人を冷かすことを何とも思はぬ。骨折つて美文でも書くと、杉田君、またおのろけが出ましたねと突込む。何ぞと謂ふと、少女を持出して笑はれる。で、をり〳〵はむつとして、己は子供ぢやない、卅七だ、人を馬鹿にするにも程があると憤慨する。けれどそれはすぐ消えて了ふので、懲りることもなく、艶つぽい歌を詠み、新體詩を作る。

卽ちかれの快樂と言ふのは電車の中の美しい姿と、美文新體詩を作ることで、社に居る間は、用事さへ無いと、原稿紙を延べて、一生懸命に美しい文を書いて居る。少女に關する感想の多いのは無論のことだ。

其日は校正が多いので、先生一人それに忙殺されたが、午後二時頃、少し片附いたので一息吐いて居ると、

『杉田君。』

と編輯長が呼んだ。

『え？』

と其方を向くと、

渡つて居る。

やがてお茶の水に着く。

五

此男の勤めて居る雜誌社は、神田の錦町で、靑年社といふ、正則英語學校のすぐ次の通りで、街道に面した硝子戶の前には、新刊の書籍の看板が五つ六つも並べられてあつて、戶を開けて中に入ると、雜誌書籍の埒もなく取散された室の帳場には社主の難かしい顏が控へて居る。編輯室は奧の二階で、十疊の一室、西と南とが塞つて居るので、陰氣なこと夥しい。編輯員の机が五脚ほど並べられてあるが、かれの机は其の最も壁に近い暗いところで、雨の降る日などは、洋燈が欲しい位である。それに、電話がすぐ側にあるので、間斷なしに鳴つて來る電鈴が實に煩い。先生、お茶の水から外濠線に乘換へて錦町三丁目の角まで來て下りると、樂しかつた空想はすつかり覺めて了つたやうな佗しい氣がして、編輯長と其の陰氣な机とがすぐ眼に浮ぶ。今日も一日苦しまなければならぬかナアと思ふ。生活と謂ふものはつらいものだとすぐ後を續ける。と、此世も何もないやうな厭な氣になつて、街道の塵埃が黃く眼の前に舞ふ。校正の穴埋めの厭なこと、雜誌の編輯の無意味なることが歷々と頭に浮んで來る。殆ど留度が無い。そればかりならまだ好いが、半ば覺めてまだ覺め切らない電車の美しい影が、其佗しい黃い

隧道を出て、電車の速力が稍々緩くなつた頃から、かれは頻りに首を停車場の待合所の方に注いで居たが、ふと見馴れたリボンの色を見得たと見えて、其顔は晴々しく輝いて胸は躍つた。四ッ谷からお茶の水の高等女學校に通ふ十八歳位の少女、身装も綺麗に、ことにあでやかな容色、美しいと言つてこれほど美しい娘は東京にも澤山はあるまいと思はれる。丈はすらりとして居るし、眼は鈴を張つたやうにぱつちりとして居るし、口は緊つて肉は痩せず肥らず、晴々した顔には常に紅が漲つて居る。今日は生憎乘客が多いので、其儘扉の傍に立つたが、『込合ひますから前の方へ詰めて下さい、』と車掌の言葉に餘儀なくされて、男のすぐ前のところに來て、下げ皮に白い腕を延べた。男は立つて代つて遣りたいとは思はぬではないが、さうするとその白い腕が見られぬばかりではなく、上から見下ろすのは、いかにも不便なので、其儘席を立たうともしなかつた。

込合つた電車の中の美しい娘、これほどかれに趣味深くうれしく感ぜられるものはないので、今迄にも既に幾度となく其の嬉しさを經驗した。柔かい着物が觸る。得られぬ香水のかほりがする。温かい肉の觸感が言ふに言はれぬ思ひをそゝる。ことに、女の髪の匂ひと謂ふものは、一種の烈しい望を男に起させるもので、それが何とも名狀せられぬ愉快をかれに與へるのであつた。

市谷、牛込、飯田町と早く過ぎた。代々木から乘つた娘は二人とも牛込で下りた。電車は新陳代謝して、益々混雜を極める。それにも拘らず、かれは魂を失つた人のやうに、前の美しい顔にのみあくがれ

駄、ことに色の白い襟首から、あのむつちりと胸が高くなつて居るあたりが美しい乳房だと思ふと、總身が搔きむしられるやうな氣がする。一人の肥つた方の娘は懷からノウトブツクを出して、頻りにそれを讀み始めた。

すぐ千駄ヶ谷驛に來た。

かれの知り居る限りに於ては、此處から、少くとも三人の少女が乘るのが例だ。けれど今日は、何うしたのか、時刻が後れたのか早いのか、見知つて居る三人の一人だも乘らぬ。その代りに、それは不器量な、二目とは見られぬやうな若い女が乘つた。この男は若い女なら、大抵な醜い顏にも、眼が好いとか、鼻が好いとか、色が白いとか、襟首が美しいとか、膝の肥り具合が好いとか、何かしらの美を發見して、それを見て樂むのであるが、今乘つた女は、さがしても、發見されるやうな美は一ヶ所も持つて居らなかつた。反齒、ちゞれ毛、色黑、見た丈でも不愉快なのが、いきなりかれの隣に來て座を取つた。

信濃町の停留場は、割合に乘る少女の少いところで、曾て一度すばらしく美しい、華族の令孃かと思はれるやうな少女と膝を並べて牛込まで乘つた記憶があるばかり、其後、今一度何うかして逢ひたいものの、見たいものと願つて居るけれど、今日までつひぞかれの望は遂げられなかつた。電車は紳士やら軍人やら商人やら學生やらを多く載せて、そして飛龍のごとく駛り出した。

四

電車は代々木を出た。

春の朝は心地が好い。日がうら〳〵と照り渡つて、空氣はめづらしくくつきりと透徹つて居る。富士の美しく霞んだ下に大きい櫟林が黑く並んで、千駄谷の凹地に新築の家屋の參差として連つて居るのが走馬燈のやうに早く行過ぎる。けれど此無言の自然よりも美しい少女の姿の方が好いので、男は前に相對した二人の娘の顏と姿とに殆ど魂を打込んで居た。けれど無言の自然を見るよりも活きた人間を眺めるのは困難なもので、餘りしげ〳〵見て、悟られてはといふ氣があるので、傍を見て居るやうな顏をして、そして電光のやうに早く鋭くながし眼を遣ふ。誰だか言つた、電車で女を見るのは正面では餘り眩ゆくつていけない、さうかと言つて、餘り離れても際立つて人に怪まれる恐れがある、七分位に斜に對して座を占めるのが一番便利だと。男は少女にあくがれるのが病であるほどであるから、無論、此位の祕訣は人に敎はるまでもなく、自然に其の呼吸を自覺して居て、いつでも其の便利な機會を攫むことを過まらない。

年上の方の娘の眼の表情がいかにも美しい。星——天上の星もこれに比べたなら其の光を失ふであらうと思はれた。縮緬のすらりとした膝のあたりから、華奢な藤色の裾、白足袋をつまだてた三枚襲の雪

よく例があるつて……僕にいろ〳〵教へて呉れたよ。僕は屹度さうだと思ふ。僕の鑑定は誤らんさ。』

『僕は性質だと思ふがね。』

『いや、病氣ですよ、少し海岸にでも行つて好い空氣でも吸つて、節慾しなければいかんと思ふ。』

『だつて、餘りをかしい、それも十八九とか二十二三とかなら、さういふこともあるかも知れんが、細君があつて、子供が二人まであつて、そして年は三十八にもならうと言んぢやないか。君の言ふことは生理學萬能で、何うも斷定過ぎるよ。』

『いや、それは說明が出來る。十八九でなければさういふことはあるまいと言ふけれど、それはいくらもある。先生、屹度今でも遣つて居るに相違ない。若い時、あゝいふ風で、無闇に戀愛神聖論者を氣取つて、口では綺麗なことを言つて居ても、本能が承知しないから、つい自から傷けて快を取るといふやうなことになる。そしてそれが習慣になると、病的になつて、本能の充分の働を僞ることが出來なくなる。先生のは屹度それだ。つまり、前にも言つたが、肉と靈とがしつくり調和することが出來んのだよ。それにしても面白いぢやないか、健全を以て自からも任じ、人も許して居たものが、今では不健全も不健全、デカダンの標本になつたのは、これといふのも本能を蔑にしたからだ。君達は僕が本能萬能說を抱いて居るのをいつも攻擊するけれど、實際、人間は本能が大切だよ。本能に從はん奴は生存して居られんさ。』と滔々として辯じた。

美しいと思ふ、唯それだけなのだ。我々なら、さういふ時には、すぐ本能の力が首を出して來て、唯、あくがれる位では何うしても滿足が出來んがね。』

『さうとも、生理的に、何處か陷落ロストして居るんぢやないかしらん。』

と言つたものがある。

『生理的と言ふよりも性質ぢやないかしらん。』

『いや、僕は左樣は思はん。先生、若い時分、餘に恋なことをしたんぢやないかと思ふね。』

『恋とは？』

『言はずとも解るぢやないか……。獨りで餘り身を傷つけたのさ。その習慣が長く續くと、生理的に、ある方面がロストして了つて、肉と靈とがしつくり合はんさうだ。』

『馬鹿な……。』

と笑つたものがある。

『だツて、子供が出來るぢやないか。』

と誰かゞ言つた。

『それは子供は出來るさ……。』と前の男は受けて、『僕は醫者に聞いたんだが、其結果は色々ある相だ。烈しいのは、生殖の途が絶たれて了ふさうだが、中には先生のやうになるのもあるといふことだ。

春の日が室の中までさし込むので、實に暖い、氣持が好い。机の上には二三の雜誌、硯箱は能代塗の黃い木地の木目が出てゐるもの、そして其處に社の原稿紙らしい紙が春風に吹かれて居る。

此主人公は名を杉田古城と謂つて言ふまでもなく文學者。若い頃には、相應に名も出て、二三の作品は隨分喝采されたこともある。いや、三十七歲の今日、かうしてつまらぬ雜誌社の社員になつて、毎日毎日通つて行つて、つまらぬ雜誌の校正までして、平凡に文壇の地平線以下に沈沒して了はうとは自らも思はなかつたであらうし、人も思はなかつた。けれどかうなつたのには原因がある。此男は昔から左樣だが、何うも若い女に憧れるといふ惡い癖がある。若い美しい女を見ると、平生は割合に鋭い觀察眼もすつかり權威を失つて了ふ。若い時分、盛に所謂少女小說を書いて、一時は隨分靑年を魅せしめたものだが、觀察も思想もないあくがれ小說がさういつまで人に飽きられずに居ることが出來よう。遂には此男と少女と謂ふことが文壇の笑草の種となつて、書く小說も文章も皆な笑ひ聲の中に沒却されて了つた。それに、其容貌が前にも言つた通り、此上もなく蠻カラなので、いよ〳〵それが好い反映(コントラスト)をなして、あの顏で、何うしてあゝだらう、打見た所は、いかな猛獸とでも鬪ふといふやうな風采と體格とを持つて居るのに……。これも造化の戲れの一つであらうといふ評判であつた。

ある時、友人間で其噂があつた時、一人は言つた。

『何うも不思議だ。一種の病氣かも知れんよ。先生のは唯、あくがれるといふばかりなのだからね。

とが解る。小さな門を中に入らなくとも、路から庭や座敷がすつかり見えて、篠竹の五六本生えて居る下に、沈丁花の小さいのが二三株咲いて居るが、其傍には鉢植の花ものが五つ六つだらしなく並べられてある。細君らしい二十五六の女が甲斐々々しく襷掛になつて働いて居ると、四歳位の男の兒と六歳位の女の兒とが、座敷の次の間の縁側の日當りの好い處に出て、頻りを何事をか言つて遊んで居る。

家の南側に、釣瓶を伏せた井戸があるが、十時頃になると、天氣さへ好ければ、細君は其處に盥を持ち出して、頻りに洗濯を遣る。着物を洗ふ水の音がざぶ〳〵と長閑に聞えて、隣の白蓮の美しく春の日に光るのが、何とも言へぬ平和な趣をあたりに展げる。細君は成程もう色は衰へて居るが、娘盛りにはこれでも十人並以上であらうと思はれる。やゝ舊派の束髪に結つて、ふつくりとした前髪を取つてあるが、着物は木綿の縞物を着て、海老茶色の帶の末端が地について、帶揚のところが、洗濯の手を動かす度に微かに搖く。少時すると、末の男の兒が、かアちやん〳〵と遠くから呼んで來て、傍に來ると、いきなり懷の乳を探つた。まアお待ちよと言つたが、中々言ふことを聞きさうにもないので、洗濯の手を前垂でそゝくさと拭いて、前の縁側に腰をかけて、子供を抱いて遣つた。其處へ總領の女の兒も來て立つて居る。

客間兼帶の書齋は六疊で、硝子の嵌つた小さい西洋書箱が西の壁につけて置かれてあつて、栗の木の机がそれと反對の側に据ゑられてある。床の間には春蘭の鉢が置かれて、幅物は僞物の文晁の山水だ。

と、再び丁寧に娘は禮を述べて、そして踵を旋した。

男は嬉しくて爲方が無い。愉快でたまらない。これであの娘、己の顏を見覺えたナ……と思ふ。これから電車で邂逅しても、あの人が私の留針を拾つて與れた人だと思ふに相違ない。もし己が年が若くつて、娘が今少し別嬪で、それでかういふ幕を演ずると、面白い小說が出來るんだなど〻、取留もないことを種々に考へる。聯想は聯想を生んで、其身の徒らに靑年時代を浪費して了つたことや、戀人で娶つた細君の老いて了つたことや、子供の多いことや、自分の生活の荒凉としてゐることや、時勢に後れて將來に發達の見込のないことや、いろ〳〵なことが亂れた絲のやうに縺れ合つて、こんがらがつて、殆ど際限がない。ふと、其の勤めて居る某雜誌社のむづかしい編輯長の顏が空想の中に歷々と浮んだ。と、急に空想を捨て〻、路を急ぎ出した。

三

此男は何處から來るかと言ふと、千駄谷の田畝を越して、櫟の並木の向うを通つて、新建の立派な邸宅の門をつらねて居る間を拔けて、牛の鳴聲の聞える牧場、樫の大樹の連つて居る小徑――その向うをだら〳〵と下つた丘陵の蔭の一軒家、每朝かれは其處から出て來るので、丈の低い要垣を周圍に取廻して、三間位と思はれる家の構造、床の低いのと屋根の低いのを見ても、貸家建ての粗雜な普請であるこ

と連呼した。

娘はまだ十間ほど行つたばかりだから、無論此聲は耳に入つたのであるが、今すれ違つた大男に聲を懸けられるとは思はぬので、振返りもせずに、友達の娘と肩を並べて靜かに語りながら歩いて行く。朝日が美しく野の農夫の鋤の刄に光る。

『もし、もし、もし、』

と男は韻を押んだやうに再び叫んだ。

で、娘も振返る。見るとその男は兩手を高く擧げて、此方を向いて面白い恰好をして居る。ふと、氣が附いて、頭に手を遣ると、留針が無い。はつと思つて、『あら、私、嫌よ、留針を落してよ、』と友達に言ふでもなく言つて、其儘、ばたばたと駈け出した。

男は手を擧げたまゝ、其のアルミニユウムの留針を持つて待つて居る。娘はいきせき驅けて來る。やがて傍に近寄つた。

『何うも有難う……』

と、娘は恥しさうに顏を赧くして、禮を言つた。四角の輪廓をした大きな顏は、さも嬉しさうに莞爾莞爾と笑つて、娘の白い美しい手に其の留針を渡した。

『何うも有難う御座いました。』

た腕の白いことも、信濃町から同じ學校の女學生とをり〳〵邂逅して蓮葉に會話を交ゆることも、何も彼もよく知るやうになつて、何處の娘かしらん？　などゝ、其家、其家庭が知り度くなる。

でも後をつけるほど氣にも入らなかつたと見えて、敢てそれを知らうとも爲なかつたが、ある日のこと、男は例の帽子、例のインバネス、例の脊廣、例の靴で、例の道を例のごとく千駄谷の田畝に懸つて來ると、不圖前から其肥つた娘が、羽織の上に白い前懸をだらしなくしめて、半ば解き懸けた髮を右の手で押へながら、友達らしい娘と何事をか語り合ひながら歩いて來た。何時も逢ふ顏に違つた處で逢ふと、何だか他人でないやうな氣がするものだが、男もさう思つたと見えて、もう少しで會釋を爲るやうな態度をして、急いだ歩調をはたと留めた。娘もちらと此方を見て、これも『あゝあの人だナ、いつも電車に乘る人だナ、』と思たらしかつたが、會釋をするわけもないので、默つてすれ違つて了つた。男はすれ違ひざまに『今日は學校に行かぬのかしらん？　さうか、試驗休みか春休みか、』と我知らず口に出して言つて、五六間無意識にてく〳〵と歩いて行くと、不圖黑い柔かい美しい春の土に、丁度金屛風に銀で畫いた松の葉のやうにそつと落ちて居るアルミニユウムの留針。

娘のだ！

突如、振り返つて、大きな聲で、

『もし、もし、もし、』

肉附きの好い、頰の桃色の、輪廓の丸い、それは可愛い娘だ。派手な縞物に、海老茶の袴を穿いて、右手に女持の細い蝙蝠傘、左の手に、紫の風呂敷包を抱へて居るが、今日はリボンがいつものと違つて白いと男はすぐ思つた。

此娘は自分を忘れはすまい、無論知つてる! と續いて思つた。そして娘の方を見たが、娘は知らぬ顏をして、彼方を向いて居る。あの位のうちは恥しいんだらう、と思ふと堪らなく可愛くなつたらしい。見ぬやうな振をして幾度となく見る、頻りに見る。――そしてまた眼を外して、今度は階段の處で追越した女の後姿に見入つた。

電車の來るのも知らぬといふやうに――。

二

此娘は自分を忘れはすまいと此男が思つたのは、理由のあることで、それには面白い一小挿話があるのだ。此娘とは何時でも同時刻に代々木から電車に乘つて、牛込まで行くので、以前からよく其姿を見知つて居たが、それと謂つて敢て口を利いたといふのではない。唯相對して乘つて居る、よく肥つた娘だなアと思ふ。あの頰の肉の豐かなこと、乳の大きなこと、立派な娘だなど〻、續いて思ふ。それが度重なると、笑顏の美しいことも、耳の下に小さい黑子のあることも、込合つた電車の吊皮にすらりとのべ

乘つたことがある。それどころか、冬の寒い夕暮、わざ〳〵迴り路をして其女の家を突留めたことがある。千駄ヶ谷の田畝の西の隅で、樫の木で取圍んだ奥の大きな家、其の總領娘であることをよく知つて居る。眉の美しい、色の白い頰の豐かな、笑ふ時言ふに言はれぬ表情を其眉と眼との間にあらはす娘だ。

『もう何うしても二十二三、學校に通つて居るのではなし……それは毎朝逢はぬのでもわかるが、それにしても何處へ行くのだらう、』と思つたが、其思つたのが既に愉快なので、眼の前にちらつく美しい着物の色彩が言ひ知らず胸をそゝる。『もう嫁に行くんだらう？』と續いて思つたが、今度はそれが何だか佗しいやうな惜しいやうな氣がして、『己も今少し若ければ……』と二の矢を繼いでだか、『何だ馬鹿々々しい、己は幾歲だ、女房もあれば子供もある、』と思ひ返した。思ひ返したが、何となく悲しい、何となく嬉しい。

代々木の停留場に上る階段の處で、それでも追ひ越して、衣ずれの音、白粉の香ひに胸を躍したが、今度は振返りもせず、大足に、しかも駈けるやうにして、階段を上つた。

停留場の驛長が赤い囘數切符を切つて返した。此驛長も其他の驛夫も皆な此大男に熟して居る。性急で、慌て者で、早口であるといふことをも知つて居る。

板圍ひの待合所に入らうとして、男はまた其前に兼ねて見知越の女學生の立つて居るのを眼敏くも見た。

植付られてあるが、其向うには千駄谷の街道を持つてゐる新開の屋敷町が參差として連つて、二階の硝子窓には朝日の光が閃々と輝き渡つた。左は角筈の工場の幾棟、細い烟筒からはもう勞働に取懸つた朝の烟がくろく低く靡いて居る。晴れた空には林を越して電信柱が頭だけ見える。

男はてく〳〵と歩いて行く。

田畝を越すと、二間幅の石ころ道、柴垣、樫垣、要垣、其絶間々々に硝子障子、冠木門、瓦斯燈と順序よく並んで居て、庭の松に霜よけの繩のまだ取られずに附いて居るのも見える。一二丁行くと千駄谷通りで、毎朝、演習の兵隊が驅足で通つて行くのに邂逅する。西洋人の大きな洋館、新築の醫者の構への大きな門、駄菓子を賣る古い茅葺の家、此處まで來ると、もう代々木の停留場の高い線路が見えて、新宿あたりで、ポーと電笛の鳴る音でも耳に入ると、男は其の大きな體を先へのめらせて、見得も何も構はずに、一散に走るのが例だ。

今日も其處に來て耳を欹てたが、電車の來たやうな氣勢も無いので、同じ歩調ですた〳〵と歩いて行つたが、高い線路に突當つて曲る角で、ふと栗梅の縮緬の羽織をぞろりと着た恰好の好い庇髮の女の後姿を見た。鶯色のリボン、繻珍の鼻緒、おろし立ての白足袋、それを見ると、もう其胸は何となく時めいて、其癖何うの彼うのと言ふのでもないが、唯嬉しく、そはそはして、其先へ追越すのが何だか惜しいやうな氣がする樣子である。男は此女を既に見知つて居るので、少くとも五六度は其女と同じ電車に

何ち人間が通るのに、評判を立てる程のこともないのだが、淋しい田舍で人珍らしいのと、それに此男の姿がいかにも特色があつて、そして鶩の歩くやうな變てこな形をするので、何とも謂へぬ不調和――その不調和が路傍の人々の閑な眼を惹くもとゝなつた。

年の頃三十七八、猫脊で、獅子鼻で、反齒で、色が淺黑くツて、頰髯が煩さゝうに顏の半面を蔽つて、鳥渡見ると恐ろしい容貌、若い女などは晝間出逢つても氣味惡く思ふ程だが、それにも似合はず、眼には柔和なやさしいところがあつて、絕えず何物をか見て憧れて居るかのやうに見えた。足のコンパスは思切つて廣く、トツトと小きざみに歩くその早さ！　演習に朝出る兵隊さんもこれにはいつも三舍を避けた。

大抵洋服で、それもスコツチの毛の摩れてなくなつた鳶色の古脊廣、上にあほつたインバネスも羊羹色に黃んで、右の手には犬の頭のすぐ取れる安ステツキをつき、柄にない海老茶色の風呂敷包をかゝへながら、左の手はポツケツトに入れて居る。

四ツ目垣の外を通り懸ると、

『今お出懸けだ！』

と、田舍の角の植木屋の主婦が口の中で言つた。

其植木屋も新建の一軒家で、賣物のひよろ松やら樫やら黃楊やら八ツ手やらが其周圍にだらしなく

少女病

一

山手線の朝の七時二十分の上り汽車が、代々木の電車停留場の崖下を地響させて通る頃、千駄谷の田畝をてく〳〵と歩いて行く男がある。此男の通らぬことはいかな日にもないので、雨の日には泥濘の深い田畝道に古い長靴を引ずつて行くし、風の吹く朝には帽子を阿彌陀に被つて塵埃を避けるやうにして通るし、沿道の家々の人は、遠くから其姿を見知つて、もうあの人が通つたから、あなたお役所が遅くなりますなどゝ春眠いぎたなき主人を揺り起す軍人の細君もある位だ。

此男の姿の此田畝道にあらはれ出したのは、今から二月ほど前、近郊の地が開けて、新しい家作が彼方の森の角、此方の丘の上に出來上つて、某少將の邸宅、某會社重役の邸宅などの大きな構が、武蔵野の名殘の櫟の大並木の間からちら〳〵と畫のやうに見える頃であつたが、其櫟の並木の彼方に、貸家建の家屋が五六軒並んであるといふから、何でも其處等に移轉して來た人だらうとの専らの評判であつた。

に深切にして呉れたんですから、お貞さんだッて、誰だッて思ひ切れないのは當然ですよ。此間もね、お清さん、そら琴の師匠の娘さんさね、あの方が來てね、お線香を上げて下すつて、一緒に泣きましたよ。優しい好い人は皆な早く死んで行つて了つて………。』

僕は默つて種々のことを考へた。

苦しい悲しい辛い追懷のある其の暗い家は、一月後貸家札が貼られたが、間もなく新しく住む人があつて、庭樹を透して明るい燈光がかゞやいて居た。新しき幸福あれと思つて僕は通り過ぎた。

姉上様

貞

僕はこれを讀んで、種々のことを考へた。青山墓地の左の隅にある小さい墓――其兄の子の墓を先づ思ひ出した。家庭の悲劇の主人公なる母と、近く死んだ兄の一生とを思ひ遣つた。淋しく生殘つた前の嫂をも胸に描いた。生兒を壓殺した朝のけたゝましい泣聲、續いて起つた淺ましい光景、それも今更のやうに分明(はつきり)と眼に見えた。

時は過去つた。そして總てを解釋した。

嫂は、

『本當に氣の毒ですよ。私はこれを讀んで泣いて了ひました。……亡くなつた子のことを考へたのでせうね。』

『本當に一人になつたんだからナ。』

『可哀相――。』

嫂は亡くなつた兄を思出してか聲が曇つた。

『大に力になつて遣るサ。』

『えゝ〳〵それはねえ、もうお互ですものねえ。本當に佛は優しい人で、妾のやうなものにもあんな

此時自然力の悄むべきを痛切に思つた。

刻々に迫つて、込上げて來る呼吸の刻みが間近から間遠になる。

『あゝ、もう引取つた！』

『もう呼吸が無い。』

『もう行つた。』

續いて、南無阿彌陀佛の稱名がけたゝましく起る。聲を擧げて泣く。到る處に欷歔の聲がする。死者に對する同情が湧くやうに人々の胸に上る。一瞬間の死がすべて人間の不淨を淸潔ならしめたやうに、全心を捧げて同情する。緩い淸い美しい悲哀や同情が來た時には、悄むべき自然力は旣に其犧牲を拉し得て去つて了つた後だ。何の甲斐がある。愚なる人間！

二七日の法事の席で、嫂は僕に兄の先妻からの手紙を見せた。

拙き筆して申上参らせ候、初七日の日は御内の皆様方御參に御出懸け候ことゝ存じ、態と遠慮仕り、其翌日青山の墓地に參り候、薄き緣と思ひ候へば、墓の前を立去り兼候、まして喜久治（生兒の名）のことを思ひ候ひて、今時分はお父樣と呼びて、だつこされて居ることと思ひ候へば、私一人此世の中に殘され候心地致し、穴の中に入りたくと存候、拙き筆にて思ふ萬分一も申上兼候へども、たよりなきものに有之候間、此後とも妹と思召し、力にもなり頂き度、文して申上參らせ候。

あらず死にあらざる境を、誰も一度は經なければならぬと思ふと、著るしい人生の空虚を僕は感ずる。

『何うせ死ぬものなら、早く御參りさせたい。』といふ言葉がある。

『生きる者ならば生かしてやる。死ぬる者なら早く殺して遣る。』といふ神の御利益を有難がつて、裸足參りをする人間がある。

夫が呼吸を引取つたので、もうこれで子供を産ませられる重荷がなくなつたとほつと呼吸をつく妻がある。

僕は兄の垂死の床に侍した。僕は隱す處なく言はう。悲哀はあつた、追懷はあつた、涙はこぼれた。けれどもまだ其肉體が生にあらず死にあらざる境にある間は、充分に胸を開いて泣くことが出來なかつた。終極――問題の解決を待つやうな希望が絶えず胸の中に蟠つて居た。そして自己の存在、自己の快樂の爲めに自由に心を他に移し得る餘裕を持つて居た。『人の血の流れるのは自分の血の流れるのではない。』といふ皮肉な言葉を思ひ出して、自から切齒して或力に反抗した。

反抗したが、甲斐が無かつた。

飜つて生から死に赴かうとする病者を見る。矢張同じである。病者が苛々して、枕元の藥瓶を投つけたといふ話はよくある。死に近き病者ほど烈しい力の壓迫を感じて、生の意味を失つて了ふ。……僕は

くと役所から歸つて來る。若い娘は何時も其頃は井戸に出て米を磨いで居た。

家庭の衝突の小歴史の中に、茶畑は屋敷町になつた。淡竹の大藪は切開かれて了つた。前の丘を崩して、其土を運んで田圃を埋め盡した。暗い家に對する十五年の僕の追憶、それを恣にするには四邊が餘りに變り過ぎた。

淡竹の大藪の向うに、僕等の懸りつけの醫師があつた。ペンキ塗の新しい西洋風の家屋は茅葺藁葺の家屋の中に、著しい光彩を放つて居た。今ではそのペンキ塗も灰色によごれて仕舞ひ、醫師が僕の母の死亡屆を書いて與れたが、今度は死を宣告された兄の病床を見舞ふこととなつた。

兄は其暗い家で、頭を樹の繁つた庭に向けて、古文書の銅版を貼りつけた屏風に圍まれて死んだ。時刻こそ違へ、母親の死んだのと同じやうにして。

生と死といふことを僕を考へた。

生と死以外、生から死に行く途中に、生でもなく死でもない境があると僕は思ふ。生の希望のあるうちは、病者は血の通ふ同類として、充分なる取扱を受けるが、一度生の希望が絶えると、もう同類としての扱ひを人間から受けることが出來なくなる。死を宣告された人間は嚴密なる意味でもう人間の伍伴(なかま)には入れられて居らないのだ。人間として無能力者たるの取扱ひを受けねばならねのである。この生に

かとばかり情なく悲しかつた。僕は佗しい此家の四疊半で、神經性の不健全の男となつた。母は酒と不平と荒涼たる生活と我儘な性質とでわれとわが身體を傷つけて、癌腫を病つて死んでしまつた。兄は小さい感情と小さい希望と小さい煩悶とを抱いて、世の中の烈しい波に漂つた。新しい娘も出來た。門の梅も咲いた。けれど此の暗い家には遂に明るい一道の光線だに射さなかつた。

　庭の樹は皆繁つた。門内の檜樹は屋を蔽ふばかりになつた。躑躅は枝が網のやうになつた。椿は檣につくやうになつた。鬱蒼とした木犀は兄が曾て神樂坂の緣日で鉢で買つて來て移したものだ。僕は想ひ出す、十五六年前、好い家屋は無いかと思つて、其頃はまだ田舍であつた此近邊を捜し廻つて、此田圃の中の一軒家を見出した時のことを。新築の家屋ではあつたが、請負普請で、建附が曲つて居た。こんな家は仕方が無いと兄が言ふのを、眺望が好いのと、周圍が廣々として居るのと、間數の割合に家賃が低廉いのとで、それでは住んで見ようといふことになつて、四谷から移轉した。家屋の周圍は茶畑で、冬は寒かつた。雨の日、風の日には殆ど裏の雨戸が明けられなかつた。其頃は嫂のお貞さんが居た。手を皸だらけにして、田圃道に向いた井戸で、頻りに洗物を爲た。丸髷に赤い手絡を懸けて、メリンスの腰卷をまくつて、一生懸命に家事に凝鋌して居た。原で子供が凧を揚げるので其のうなりの音が喧しく四邊に聞えた。嫁菜、根芹、野蒜などが其田圃に多く出て、僕は母親と一緒によくそれを摘んだものだ。そして每日五時頃には、淡竹の大藪の向うから、細い道を夕日に向つて、屹度洋服姿の兄がてくて

人力車の縦横に往來する街路を縫うやうにして靜に廻つた。咳嗽と痰と烈しく出るのを、處々で吊臺を止めて、紙で拭ひ取つた。そして咳嗽を止める爲めの氷塊を幾片となく含ませた。

初冬の日影は薄ら寒い。早稲田近い屋敷町の古い家に着いて、庭から座敷に辛うじて病人を移した。此家、此座敷、此處には兄の半生が細かに織込まれてゐる。古い簞笥、古い鏡臺、丈の低い六枚屏風には、古文書の銅版摺が貼られてあつて、床の間には陶製の獅子が置かれてある。机、硯、硯箱、座敷の到る處に古い本箱が數限りなく並べられてあるが、中には、漢學、國學の書が一杯に詰つて居る。歴史考證の書も多い。座敷の中央――蒼い痩せた顔を仰向に、二枚重ねた蒲團の上に病人を寢かした。薄ら寒いので障子を閉めたが、處々破れて居るので、空が見える、樹が見える。垣根の向うには近所の子供が毬投を遣つて居る聲が喧しく聞える。

庭には樹が多い。杉、檜、樫、梅、躑躅、椿、桃、桶を埋めた水には孑孑が浮いて居た。萩も枯れたまま、盆栽を載せる臺も半ば崩れ懸けて居た。

僕等は此家に十五年住んだ。兄が洋服姿で元氣よく役所から歸つた頃のことが眼に見えるやうだ。母が縁側の日向に出て、後向になつて裁縫をして居たのも昨日のやうに思はれる。絶ゆることなき家庭の衝突、互に面白からぬ顔を突合せて、默つて夕飯の箸を運ばせた。母は晩酌の二合の酒、醉つて來るとそろ〳〵不平を始めるので、いとどさびしい薄暮を一層不愉快にして、洋燈のつく頃はこの世も盡くる

厚い、優しい人ですからね。まだ、兄上樣つてね、いやらしい手紙を寄越す女が二三人あるんですよ。』

僕は其女を皆な知つて居た。琴の師匠の娘で、今から十三四年前にラヴした女、友人の妹で殆ど妻にしやうとした女、藝者で向うから非常に熱くなつて來た女――其他にもまだ一人や二人は居た。

兄は少くとも優しい弱い性質であつた。生活の路に橫つて來る種々の困難も覊絆(きづな)も、すべて所謂『美しい感情』で圓滿に切り拔けて來た。いかなる場合にも敵をつくるやうなことは無かつた。

つまり運命に從つた人だ。僕などの考では運命などといふそんな盲目的なものに屈從して仕方があるものかと思ふ。生死、要するにこれは自然力で、背景(バック)は總て空虛だ。同情も犧牲もあつたものぢやない。進めるだけ進む、活動されるだけ活動する、己を盡してそれでいけなければ一死あるのみだ。犬のやうに死にたい。動物の樣に死にたいとは僕の意見だ。で、僕は兄の消極的なのを幾度となく諫めた。止むを得ずんば母にも抵抗せよ。極端なる個人主義たれ……と言つた。けれど兄にはそれは出來なかつた。美しい感情、弱い服從、憐れなる醜い生活――

死を宣告されて病院を出たのは、十月の下旬、病名は肺空洞(はいくうどう)、肺に大きな穴が明いて、膿に似た痰が絕えず出る。熱は依然として高い。駿河臺から牛込の山手まで、四人人夫附の釣臺、後に老いた伯父と義兄と一人の門生と僕が附いた。稍曇つた日で、灰色の雲が薄く空を蔽つて居た。電車、馬車、荷馬車、

寢ないで看病して居たッてつまらない、うちでは、心底では矢張お貞さんを思つて居るんですからね。』

『そんなことは……。』

と、僕は笑つた。

『だッて、さうですもの、子供のあつたものは、情愛が違ふつて言ひますからね。』

今の嫂には子供は無かつた。

『そんなことは無い。』

『いゝえ、此間來た時も、後で、貴方お貞さんが來て呉れて好かつたでせうと言つたら、お貞なぞは本當に感心なもんだ。今ぢや病院でも指折りの看護婦になつたつて言ふぢやありませんか。私はぐつと思ひましたよ。私などよりお貞さんの方が氣が利いて居ますからねと餘程言つて遣らうと思ひましたのよ。』

『馬鹿な――。』

『今もね、こつそり見て居ると、二人で顏を押付るばかりにして夢中で話してるぢやありませんか。餘り話をすると、後が疲れるからつて、餘程言つて遣らうかと思つて居たのですの。』

『馬鹿な――。嫂さんも氣が若いね。』

『だッて左樣ぢやありませんか。……本當に寢る目も寢ずに看病して……。』一寸言淀んで、『一體、情の

廣い廊下を僕と嫂とは並んで歩いた。
『今日は何うです？』
『今日も餘り好い方ではありませんでした。何うしてあゝ熱が取れないのですかねえ……本當に困つて仕舞ひますの。』
『食物は？』
『矢張無理にお粥は食べますけれど。』
『間違つたことを言ひますか。』
『えゝえゝ、大森の家のことを始終言つて言るんですよ。あんなに言ふから、本當かと思ふ位ですの。』
『困つたね。』
默つて歩いた。
『何時から來てるの。』
『お貞さん？　もう少し先程……。貴郎にはお話しませんでしたけれど、此間の夜も來ましてね、これで三度ですの。私はね、折角話をしようと思つて來たのだと粹をきかして、いつも立つて、傍には居ないやうにするのですけれどね、……何だか考へると馬鹿々々しくなつて、こんなに骨折つて、夜も碌々

僕は手を留めた。

『今ね……』と嫂は小聲で、『今、お貞さんが來て居ますの。』

お貞！　これは兄の先妻だ。まだ母親が生きて居る頃、家庭が揉めたので、飽きも飽かれもせぬのに離緣して了つたのだ。其時僕は一面兄の味方、一面母の味方であつたので、板挾になつて辛い境遇に居た。其中此先妻に男の子が出來た。これは好運！　これで家庭の紛紜も稍解釋することが出來ると思つた。此嫂は其時二十だつた。田舍から出た無邪氣な女で、物事に鈍い質であつた。突然悲運が來た。四月のある日の朝、一家は若い嫂のけたゝましい泣聲に暖い春の眠を驚かされた。若い嫂は乳房で其生兒を壓死せしめたのである。この原因は再び家庭を暗黑に陷らしめた。母親はそんな女は嫁にしては置けぬから一刻も早く出せと迫る。兄は愛情が覺めぬので斷乎たる處置に出ることが出來ぬ。ぐづ〳〵して居る中に、又すぐあとが出來たら大變だ！　と母親は氣を揉む。僕は其中に挾つて、一晩兄夫妻と母親とのことを考へた。そして兄に自分の意見を語つた。若い嫂が眼を泣腫して家を去つたのは其結果であつた。兄は嫂と相對して、其緣の薄かつたのを一夜泣いて語り明かしたさうだ。それから十年。兄は妹としてその先妻の世話をして遣つた。女は又女で某病院の看護婦となつて獨立して今日まで夫を持たぬのである。

其先妻が見舞に來て居て、室では低く語る聲が聞える。

『あゝ今、其新宅に行つた夢を見た。好い心地だつた。お前も行つて來い。己ももうかう治つては、退院するのも直きだらうから……支度を爲て置かなくては……。』

死ぬ病人は何處かへ行くやうなことを屹度言ふものだ相だ。で、嫂はこれを非常に氣にして氣味惡がつて居た。棺を家から送り出す時、嫂は、

『何故、私も其の新しい宅に連れて行つて下さらぬか。』と泣いて居た。僕は兄が平生借家生活の貧しい境遇にあつたことを思ひ出した。

墓――墓は實際『新しい家』だ。

病院の長い廊下に足音が響く。室毎に電氣は點いて居るが何となく陰氣で物凄い。白い服を着た看護婦がをりくけたゝましい音をして通る。重い肺病患者の咳嗽がいかにも苦しさうに聞えた。晝間の賑かさと比べると丸で別の家のやうだ。看護婦共も重病患者附添の他は多くは衣服を着換へて、ハイカラ姿に早變りをして、五十の緣日や、寄席などに出懸けて行つて了ふのだ。兄の病室の前に行くと、嫂が立つて居た。

戸を明けようとすると、

『鳥渡待つて――。』

墓――

病人は熱にうかされて、よく『新しい家』といふことを言つた。大森の海岸近く、見晴しの好い處に新しい家屋を建てゝ置いた。何うも今迄の借屋住居では、不自由で勝手なことが出來んから、苦勞して金を貯めて、漸く新しい家屋を建てたといふ。

『もう大抵出來上つた筈だ。お前、鳥渡行つて見て來い。人にばかり任せて置くと、何んなことをするか解らんから。』

と、看護して居る細君に云ふ。

細君は例の熱の爲めの幻影と知つて居るので、唯點頭いて居ると、

『こら、何故行かんのか。お前は己を信用せんのか。……お前の信用せんのは無理はない。お前には苦勞ばかりさせて居るからな。一度だつて物見遊山に伴れて行つて遣つたことは無いから。』と、厭に笑つて、細君の顏を見て、『けれどもナ、今度は本當だ、大森にちやんと立派な新しい家が出來てる。間數は七間、座敷から海は見えるし、植木も松と木犀と高野槇とを澤山に植ゑたよ。病氣が治つたら、あの借屋に歸らずに、すぐに新宅に行かう。心地が好いだらうナ。』と言つてうと〳〵と眠る。

と思ふと、すぐ眼を開いて、

新しい花立、樒、線香の烟、喪主を始めとして、人々が順次に柄杓の水を手向け終つた。もうこれでお終ひだ。ザッツオウル！　ザッツオウルだ。

ザッツオウル！　何と好い言葉だらう。何んな悲哀でも、何んな煩悶でも、何んな苦痛でも、何んな苦しい生活でもザッツオウル！

病院の三等室、暗い陰氣な六疊の一間、熱の容易に去らぬのに苛々して、兄は寢床の上に輾轉反側した。傍に、看護に勞れたる細君、看護婦、親戚の娘、三時間毎に胸部に當てる爲に氷塊を錐で細かく碎く。其音が神經を昂進させて、何うせ熱が取れぬから、そんなものは附けなくつても好い、もう止めだ、藥も入らぬ、お粥も入らぬと言つて焦れた。驗温器なども見るのも厭だと謂つて疊に投げ出すやうにして右の手を出す。看護するものは殆ど始末に困つた。

電話が懸つて來たので、急いで僕が行くと、いきなり僕の手を握つて、おいおいと泣く。痩せ果てた顏が灰色に曇つて、眼からほろほろ涙が落ちる。僕の手を更に更に堅く握り占めて、

『これが最後の握手ぢやないぞ……。』

と言つて泣く。最後の握手ぢやないといふ此の言葉の蔭には、悲しい恐ろしい最後の握手が隱れて居たのだ。

死の恐怖、一刻毎に迫つて來る死の恐怖――それも終を告げて棺になつた、墓になつた。

兄

死んだ兄のことを考へた。

青山の共葬墓地、三坪の狹い要垣の中に、祖父母も居る。母も居る。兄の子も居る。楓の樹も大きくなつた。椿の樹も繁茂した。

兄の柩を此處まで送つて來た親戚朋友は、要垣の外に羽織袴で並んで默して立つて居る。人夫は細引で棺を穴の中に下した。棺の土に觸れる音が微かに聞える。

棺の中には、樒の古葉を入れた無數の紙袋が死屍を埋めて、其處にあの蒼い痩せこけた顏、いなごのやうに細くなつた腕、穩かに閉ぢた眼があるのだ。これが僕の兄の最後だ。もう此世の中に僕の兄は無いのだ。あの海綿のやうな柔しい弱い心は消えて了つた。

人夫は平氣で土を埋めた。棺の上に土塊の落ちる音がけたゝましく聞える。と共に僕は土塊の大きなのを拾つて投げ入れた。見る見る穴は埋められて、白い布を卷いた墓標が其處に立てられる。生花一對、菊の花が頭上の紅葉と共に夕日に照つた。

た。烈しい飢餓をも忘れて、茫然として立つて居た。見ると、其年寄の番頭は一歩々々其の細い爪先上りの道を靜かに靜かに歩いて行く。黑い縞のどてらが、青い畑と灰色の森との間をてく〳〵と動く。ふと林に入らうとする畠から、鋤を荷つた一人の百姓が出て來て、段々と此方へ下りて來たが、前の番頭に出逢ふと、二人は立留つて何事をか語つた。いや、番頭の白い顏がちらと此方を振返つたのが見えた。てつきりその身の罪を告げて居る！　とお作は思つた。お作は顏を蒼青にしてぶる〳〵と戰へた。

一時間後に一事件が起つた。裏の山の林で、嬰兒殺しがあつたといふ噂が溫泉場に知れ渡つた。見て來た男に聞けば、林でおい〳〵泣聲が聞えるから行つて見ると、それは小屋の祭文讀の嬶で、自分で緊め殺した赤兒を抱いて聲を擧げて泣いて居たさうな。それから自分も死ぬつもりでもあつたのか、傍の樹には細帶が長く吊してあつたとの話であつた。で、駐在所の巡査が二人まで劍をぢやらつかせながら驅けて行く。村の世話役の男が呼吸を切つて飛んで行く。そのあとから村の若者、子供、女、赤い蹴出しやら、大縞の絆纏やら、時計の鎖を絡ませた縮緬のへこ帶やら、赤鼻緒の黑塗下駄やら、ぞろ〳〵とその細い畠道には、人が續いて、其向うの林の中に巡査の制服が見え、をり〳〵けたゝましく泣く女の聲がきこえた。灰色の侘しい空が低く垂れた。

灰色の雲は低く垂れて、何となく頭を壓へられるやうな空模樣であつた。お作の小屋は溫泉場の裏の斜坂の中央に當つて居るので、下には先づ疎に茅葺屋根、大根の青い畑が連つて、其下に溫泉場、二階三階、大湯から出る湯の烟、上を仰ぐと、同じ畠の斜坂の爪先上りになつて居る間に一條の路がうねうねと通つて、其向うは烟るやうな楢林の灰色が連續した。

高い山には炭燒の烟が見える。

お作は家を出てその畠道を步いた。つらいその身の境遇や、悲しい追懷よりも、ひもじいといふ念が第一にその胸に押寄せて來て、何か畠に食ふものはないかとあたりを見廻した。牛蒡畑、大根畑が一面に連り渡つて居たが、不圖、五六間先にの葱の白い根を上げた畑が眼に入つた。

われを忘れて、畑の中に入つて、殆ど人の物を盜むなどゝいふ念も起らぬ中に、忽ち一束の葱を取つて、それを揃へて、もとの畠の道に出た。其時、同じ畠道を、一人の男――兼ねて見知つて居る溫泉宿の年寄の番頭が此方に步いて來た。

葱を一束抱へてお作の立つて居るのを、ふと眼につけて、

『葱かね！』

と言つて笑つて通り過ぎた。

お作はぎよつとして我に返つた。自己の罪跡を見附けられたと思つて、身が地にすくむやうな氣が爲

飢餓と病と心勞と――お作は愈々苦境に陷つた。

一月ほど經つたある日の午後であつた。

お作は起上つた――室は暗く汚い。一隅に小さい葛籠、其傍に近所の人の情で拵へた蒲團に赤兒が繼はぎの着物を着て寢て居て、其向うに一箇の圍爐裏、黑い竹の自在鍵に黑猫のやうになつた土瓶が懸つて居て、傍に粥を炊く土鍋が置かれてあるが、幾日にもそれを炊いた跡が見えない。木の燃えさしがだらしなく轉つて居て、疊の黑く焦げたのが際立つて眼に着く。これは祭文讀とお作と喧嘩した時、過まつて取落して燃えたのであつた。戶外は秋の灰色に曇つた日、山の溫泉場はや丶閑で、此の小屋の前から見ると、低くなつた凹地に二階三階の家屋が連つて、大湯から絕えず立颺る湯の烟は靜かに白く靡いて居た。

溪流の瀨の鳴る音が遠くで聞える。

お作は立ちあがつた。二日以來飯を碌々食はぬので、足が妙にふらつく。かう腹が減つては爲方が無い。何でも好いから食へるものを少し捜して來ようと思つたのである。と、同時に赤兒が聲を擧げて泣き出した。で、お作はふらつく脚を踏占めながら、先づ抱き上げて、出ぬ乳を吸はせたが、容易に泣き止まうともせぬので、今度は黑砂糖を水に溶して、吸口を宛がつて見た。で、何うやら彼うやら泣止んだので、それを古い帶で背にく丶りつけて、其儘戶外に出た。

を戀うて居た。

子は產れた。

產れぬ前と生れた後との事情が丸で變つた。身二つになりさへすれば好いと思つたが、それは誤りであつたことがすぐ解つた。幼いながらも人間の絕えざる要求、乳を求めて日夜に泣く赤兒の聲、抑ゆることの出來ぬ强い烈しい母親の愛情、お作は離るべからざる强い覊絆の更に身にまつはるを新たに覺えた。

過勞と營養不良とで、乳が十日目頃からぱつたり留つた。赤兒は火の附いたやうに間斷なしに泣く。それを聞くと、母親といふものは總身の血が戰へるほどに苦しく思つた。で、お作も其身の食物を求めるよりも先づ赤兒の乳を尋ね廻つた。乳酪を買ふ錢が無いので、隙をつぶして、彼方此方と情深い人の惠を求め步いた。で、晝は先づ何うやら斯うやら過して行くが、夜が實につらい。出ぬ乳を宛がつて、疊の足に引懸る一間の中を彼方此方と動物園の虎のやうにして搖つて步くが、何うしても泣きやまぬ時などは、いつそ放り出して了はうかと思ふ程だ。

產褥を早く離れた結果と、營養の不足と、精神の過勞とで、今までつひぞ病んだことのないお作も、烈しい頭痛と眩惑とを感じて、路を步いてもをり〳〵倒れさうになることがある。ある日などは、止むなく終日を一室に倒れて居たことなどもあつた。だから、勞働して食を得ようなどゝは思ひも寄らぬ。

西に百里の溫泉場に來て二人は暮した。樂しかつたのは、ほんの束の間、いや、旅に出るより早く二人は既に——爭ひを始めた。野に生れて、野に生立つて、そして野に食物をあさる群の必ず定つて得る運命——その悲しいつらい運命にお作も邂逅した。

捨てられてお作は泣いた。續いて、十四の時、知らぬ旅客の脊中に石を投付けたと同じやうな忿怒を烈しく心頭に起した。けれど泣いたり、怒つたりしたゞけでは其終を告げることはもう出來なかつた。お作は其時懷姙して七月目であつた。

七月より臨月までの苦痛、勞働の出來る間は種類を選らばず勞働して、刻々に迫り來る飢餓と戰つた。新道の道普請に、砂利車の後押をして、熱い〳〵日の下に働いて居たが、ふと烈しい眩惑を感じて地に倒れ、援けられて自分の小屋に送り込まれてからは、いかな丈夫な身體も何うすることも出來ず、憐みの眼と情の手に、乞食に均しい月日を送つた。

蟾蜍のやうな大きい腹を抱へて、顏は青く心は暗く、初產の恐怖は絕えず胸を痛めて、何がなし一刻も早く身二つになれかしと祈つた。腹の中の子の動くのを覺ゆる時には、これさへ產れたなら……と常に思つた。さうしたならまた勞働して自分だけのことを爲よう。そして無情の男を搜し出して恨を晴して遣らうと思つた。時にはまた其男のことを考へて、何うかしてもう一度一緒に暮し度い。可愛い子が生れて、それを見せて遣つたなら、男も屹度折れて、やさしくなるに違ひないと思つた。お作はまだ男

其時が十四歳、それから十九歳の昨年まで、お作はその呪ふべき故鄕を去ることが出來なかつたのだ。叔父夫婦の虐待、終日の勞働、夏のじり〳〵と眼も眩む日に雇はれて、十二時間の田草取、麥の收穫の忙しい時には殆ど晝飯を食ふ暇も無い。それに養蠶の手傳、雨の日の桑つみ、荷車の跡押、勞働といふ勞働は爲ぬものとてはなかつた。またある時は、機の工場に雇はれて、一日に一反半の高機織、鼻唄を唄ふ元氣さへなくなつた。梭をしめる腕は、自分のか他人のかわからぬ位につかれ果てることもあつた。若いといふのは人間の幸福、いくら烈しく働いても、夜は樂しい機織室の戶を、こと〳〵と叩く音がして、闇に白い頰かぶりの男の立姿、お作の朋輩にはかういふ羨ましい群が澤山あつたけれど、お作は此の若いといふ幸福をも充分には受け得られぬ不幸の身であつた。かの女は額の大きい、鼻の丸い、ちゞれ毛の、鐵色した醜い女であつた。

しかし十九歳で故鄕を去つたお作には相手があつた。この界隈でも有名な祭文讀、博奕が好きで、女が好きで、ことに聲が好いので評判であつた。生れは西のものださうだが、一年ほど前から此地に來て、或は鎭守の祭、村の若者の集合する處などに呼ばれて、銹びた太い調子づいた聲に、多くの無智の男女をあくがれしめたが、突然お作はこれと出來合つて、こんなところはつまらぬ、人の出盛る溫泉場に行けばもつと面白いことがあると、誘ふも誘はるゝも、行水の思ひのまゝなる二人連、こんな故鄕は何うでも好いと、お作は闇に住馴れた地を離れた。

う打たれるのかと思つた。それに、叔父にも好く打たれた。言ふことを聞かぬとか、物をよく食ふとか、假寢をするとか、何ぞと言つては、どやしつけられるのがつらさに、ある時などは、村の路に通り懸つた旅商人らしい男に縋つて、何處へでも好い、どんな難儀をしても好いから一所に連れて行つて呉れと賴んだ。村から西に一里ほど、水の少い石川があつて、其向うに楊樹の繁茂、路のほとりに一箇の石地藏、それをお作はいつでも思ひ出した。追蒐けて賴んでも縋つても、旅客は知らぬ顏をしてずん〳〵と先に行く。初夏の日影は美しく光つて、麥の綠が靜かな午後の微風に搖いて居る。その石川の楊樹の處に來て旅商人はふと立留つた。瘦せた、顏の靑い、髮の延びた男であつた。脊には風呂敷包、紺の脚絆も長旅の塵埃に塗れて、いかにも疲れ果てたといふ風であつたが――立留つて、後を追懸けて來た田舍娘を待つた。伴れて行つて遣るから、何でも言ふことを聞くかといふ。お作は喜んだ。

其の楊樹の繁みをお作はいつも思出す。まだ何事をも知らぬ小娘、長旅の疲勞に伴つて起つた男の烈しい欲望、彩色を施した横綴の繪――二十分の後、旅客の大跨で走つて遁げて行くのをお作は泣きながら追つた。けれど女の足で何うしてこれに追付くことが出來よう。欺かれたと知つて、忿怒が忽ち心頭を衝いて起つた。お作は小石を拾つて後から投げた。一つが旅商人の背中に當つた。と、振返つたその顏、それが今でも歷然と眼に見える。

ネギ一束

お作が故郷を出て此地に來てから、もう一年になる。故郷には親が居るではない、家があるではない、力になる親類とてもない、村はづれの土手下の一軒家、壁は落ち、屋根は漏り、疊は半腐れかけて、茶の間の一間は藁が敷詰めてある。この一軒家の主が、お作の爲めには、天にも地にも唯一人の親身の叔父で、お作は此處で娘になつた。

ぼろ〳〵の襤褸を着て、青い鼻洟を垂らして、結ふ油も無い額髪を手拭で廣く卷いて、叔父の子を背負ひながら、村の鎭守で終日田舍唄を唄ふ頃は無邪氣であつた。筋の多いふかし芋、麥飯の結塊、腹の減いた時には、富家の子を騙して、錢を盜み出させて、二十錢の銅貨に駄菓子を山ほど買つて食つた。根性が惡いと謂つては、村の家々に憎まれ、若い衆に打たれ、菓物を盜んだと謂つては、追懸けて捉へられて、路傍の門に細引でくゝり付けられ、或は長い物干竿で、走る背を撲れて、路上に倒れて膝頭を石に二寸ほど切つて泣いたことなどもあつた。白壁の土藏、樫の刈込んだ垣、冠木門、物心がついてから心から憎いと思つたのは、村の物持て、何うして此身ばかりかう賤く、かう憎まれ、かう侮られ、か

満足した。料理場では猶一時間ほど混雑して居たが、これもやがて靜かになつた。此時表口の戸をそツと明けて、そツと閉めてそのまゝ街道に出た黑い姿があつたが、二三歩家を離れると、すぐ駈け出して道も無い土手を一目散に上つた。闇を透して見ると、それは子守のお源で、その姿は土手からすぐ向うに下りて、河端の二階の空屋に入つて了つた。誰もこれを知るものはなかつた。田舍の街道を風がたゞ吹暴れた。

に塗れた蒲團のにほひ——ほか〱と暖かい冬の日に催されて、お源は今男戀しい情に燃えた。

しばし經つた。

ふと見ると、、前の楊樹がそよいで、岸の蘆荻のうら枯の間から、船の舳先が一尺ほどあらはれて、水馴竿の先から水球が日に光るのがちらと見えた。お源は歡喜の聲を擧げた。船には戀しい若い船頭！

その夜、土手下の料理店は殊に賑かであつた。三味線の音が彼方此方に起つて、宵の內から喧しいドンチヤン騷ぎ、臺所の忙しさは非常なもので、鉤に吊した仙臺鮪も大方皆無になつて了つた。銅壺の德利は羽翼が生えて飛ぶやうで、座敷では三味線と鼓とが自棄に鳴つた。でお源も遲くまでいろ〱と手傳つた。お貞の情夫が一組、お鐵の情夫が一組、それに足利の機場の旦那で、抱藝妓に思召があるといふのが金びらを切つての大酒宴、これが十時になつても中々止みさうにもない。女主人の旦那は九時頃から帳場に來て、酒を飲みながら、にや〱といやに艷めかしい話をして居た。女主人は衣服を着更へて髮を美しく結つて、夜目にもそれと解るほど白粉をつけて、何うしても卅五とは思へぬ若さ！　十時が鳴ると、奥の騷ぎに頓着なく、跡始末を料理番の女中に賴んで、二階の表座敷にトン〱と登つて行つて了つた。

十一時になると、流石にあたりがしんとした。醉へるものは醉ひ、欲するものはその欲するものを得て

畑道を靜かにたどつて、其河の岸の楊樹の傍に行つた。此の楊樹の向うに、一軒の二階屋が、雨戸を閉めたまゝ、空屋になつて、暖かい冬の日に照されて居る。此二階屋は、此町のもので横濱の貿易商をして居る人の別莊だが、二階は一間、下は二間のちよつと凝つた家作である。建てた二三年は、夏になると必ず其家族が避暑に來るのが例であつたが、いくら故鄕でもこんな田舍では萬事につけて不便なので、三年目に平塚に別莊を買つてからは、主人も細君も更に遣つて來ない。家財道具蒲團夜具まで一切整つて藏つてあるのだが、これを遠い親類つゞきの土手下の料理店に監督を頼んだまゝ幾年か過ぎた。秋、水の出る度に、床の上まで浸るのを始末するのが厄介だと女主人は絕えずこぼして居るが、しかもお客の望みで、二月二月と貸して遣つたり、春先時候の好い時に、鮎子狩の大連の宴會を此樓上に開いたことなどもあつた。平生は家の男の子かお源が行つて留守番をして遣ることになつて居る。お源は今寒い河風を避けて、その二階屋の南向きの庭のところに來た。庭には萩や山吹の枯枝が寒さうに立つて居て、厠の傍に糸檜と珊瑚樹とが靑く繁つて居る。一隅には水仙が暖い日を受けて、早くも黃ろい花の芽を出して居た。

お源は戶を一枚繰つて、緣側に腰を懸けた。子供が眼を覺して泣出したので、一しきり子守唄を唄つたが、もう眼を大きく明いて了つた。子供を賺しながらも、お源の胸には種々のことが往來した。其時からの二人の關係、この二階屋の下の六疊を媾曳の室としての快樂、二分心の暗い洋燈、汚い汗と油と

よりもその男に逢ひたいといふのがその願ひである。お源は土手際の暖い枯草に身を埋めて、日に光る川を見ながら、茫然と下流を望んだ。其船の繋つて居た川端の楊樹、其樹の下には漣が寒く寄せて居て、枯蘆の叢がざわ〳〵と河風に靡く。氣候こそ違へ、其時のさまと總て同じである。牛洲船、河楊、舟に仕懸けた水車、運送店の瓦屋根、少しも違はぬ。其時は土手の上で二語三語冗談を言ひ合つた。兼ねて泊りに來てよく知つて居た。關宿の舟宿の息子で、年二十三、上流の赤岩に肥料を積んで來るので、一月に二度位は缺さず見る顏であつた。黑いしやくれた顏で、別に好いたらしいとも思はなかつた。その日は六月の蒸暑い晩、お上さんに叱られて、むしやくしやして、いつそのこと逃げて秩父に歸らうかと思つて居た。旦那が今夜お上さんの處に泊るので、酌婦の情夫が表座敷に飲んで騷いで居るのを裏座敷の二階に移した。旦那は表座敷で絹布の蒲團を重ねて寢るのだ。お源は今、その時のことを明かに頭に浮べた。その若い船頭が冗談半分にお源の袂を引張つて岸に繋つた舟の中に連れて行かうとする。お源は其時は不思議にも「此野郎」とも、「いけ好かぬ奴」とも思はなかつた。引張られ、押され、きやつ〳〵と騷ぎながら、落ちるやうにして、船の中に無理に伴れられて入つた。爺も陸で飲んで居ると見えて、船の中には誰も居ない。暗い六疊位の一間、低い神棚に舟玉神が祭つてあつて、傍に木綿布の卷いたのが夕闇に薄白く見えて居た。脊の子が喧しく泣くのを、船頭が菓子を遣つてなだめて賺した……。

お源は此處まで思つて、獨で厭な薄笑をした。變な氣になつて枯草から身を起した。そして菜の青い

來て世話になつて居た。肥つて色は白いが、全くの田舍娘で、朝、子供を負（おぶ）ふと、終日其脊を離さない。鎭守の社、土手の上の日あたり、理髮床（かみゆひどこ）の店などがその遊場で、二年前までは汚れた手拭を額に幅廣に卷いて、團栗を拾つたりお手玉を取つたり土手の枯草に火をつけたりして遊んで居たが、昨年あたりから少し態度が變つて、簪も挿し紅も黠（つ）け髮も結ふやうになつた。此頃では理髮床の店に行つて居ることが多い。

お源は酌婦共の集つて居る室から、庭を拔けて戶外へ出た。冬の午前の霜解で路が惡い。軒には雀がぺちや〳〵と百囀（さへづり）を遣つて居る。いつもの理髮床に行かうと思つたが、ふとあることを思ひ出して土手に登つた。土手の上は淺間おろしが寒く吹いて、秩父連山の雪が美しく日に光る。川はところ〳〵に洲をあらはして、其洲は濃い鼠色に、水は銹鐵納戶の色に流れて居る。長い長い舟橋の上を車の通る音がとゞろに響き渡つた。

『厭なこつた。』と言つたことを思出して、ぺろりとひとりで舌を出した。舌を出すのは此女の癖である。

『まだ知らねえで居やがる、ざまを見やがれ！』

ふと月經（つきのもの）のとまつて居ることを思出した。懷姙であるかないか經驗がないからそれは解らぬが、兎に角月經は先月から無い、構ふもんか止つたらとまつたで何うにもなれ！　と續いて思つた。今の場合それ

『あゝ、あれ、あれが何うしたの？』

『あの晩、この子をお上さんに渡して、寢たのは十時頃さ。まだ奥に貞ちやんのお客が居たアね。ぐつすり寢て、ふと目があくと、もう皆な寢ちやつた樣子だから、寢反りを打つて、又寢ようとすると誰か梯子をトン〳〵と下りて來た。手水場に行くんだんべいと思つてると、ぱつたり足音が止る。已ア前にもさういふ眼に逢つて知つてるで、來たナと思つたのよ。と、その通り、こつそり遣つて來るぢやねえかね。小面憎くなつたから、默つて、寢た振をして、傍へ來た處を、木枕でうんといふほど擲つてやつた。』

『まア……。』

と女共は皆笑つた。

『と……ね……可笑しいぢやねえか、頭をかゝへて、すこし其處にぐづ〳〵して居やがつたつけが、すごすごと這つて歸つて行きやがつた。次の朝、發つ時に家の前でぢつと見詰めて遣つたら變な顏をしてやがつた。馬鹿な野郎さ。』

『源ちやん、本當に氣が強いね……。それよりも情人の一人も拵へる方が好いぢやないかね。』

『厭なこつた。』と投げるやうに言つて向うへ行つた。

この子守はお主人の從妹の子で、秩父の大宮で生れたのだが、家が貧乏なので、十四の時から此家に

『それは左樣ね、母さんとさへそれ程競爭したッて言ふんだから。』

『可笑しくなるよ。』

とお鐵は笑つたが、傍に三歳の兒の泣くのを負つて、ぼんやり立つて居る子守のお源といふのに向つて、

『源ちやん、よく泣く子ね。』

『本當にこの餓鬼ッたら、困つちまふ。おつかあ〳〵ッてすぐ泣出すんだもの。』

『今夜も土手の家に留守番に行くのかえ。』

『何ァに行かねえでも好いだがね――。』

『淋しいだらう、彼處は？』

『あゝ。』

『源ちやんも情夫でも拵へれば好いんだ。』

『厭なこつた。』と少し顏を赧くして、舌をぺろりと出して、『男なんか厭なこつた。此間も來やがつたから擲つて遣つた。』

『何日？』

『三日ばかし前さ。そら、二階に泊ッた奴、壯士見たやうな、本を澤山持つて賣りに歩いて居る――。』

『誰に見しよとて、紅かねつけて――といふことがあるぢやないかね……。ちつとも可笑しくありやしない。』

ともう一人の女がわざと眞面目で上つ調子に言つた。

『あれでも嬉しいんだね、屹度。旦那の來る日は機嫌が違ふもの。』

『そりやアさうさ、お前さんだツて左樣でせう。これの（と親指を出して見せて）來る時は、顏色つたらありやしない。』

『本當よ。お貞さん、お奢んなさいよ。今日は屹度來てよ。』

とお鐵が傍から口を挿んだ。

『駄目よ。』

『何うして？』

お貞は默つて居た。

『けれどもね、お鐵さん、』とお花は言葉を續いて、『あの年になつても同じかね、ふだんはあんなに無精にして置く癖に、來るとなると、べにをさして、白粉をあんなにつけてさ……。よく氣恥かしくないね。』

『矢張、嫌はれると大變だと思ふんでせう……。大切の人だから。』

除いては多少の信用も持つて居るし、勢力にもなつて居る。種々の事業にも手を出して、相當な財產をも作つた。今では、東京に出て、支那學生の大規模の寄宿舍を引受けて、立派に暮らして居る。東京の宅にも妻ともつかず妾ともつかぬものがあるさうだ。そして一月に一度は必ず此町に來て、母親の本家とこの女主人の料理店とに一晚づゝ泊つて行く。

二三年前までは、泊つて居ることが知れると、母親が夜中でも遣つて來て、呶鳴つたり叫喚いたり泣いたりして、果ては娘の髮を切るの何のと大騷ぎを遣つたものだが、此頃はあきらめてか、そんなことも無いとの話。

それに、母親がその情夫に生ませた娘も、かういふ家庭に育つてかういふ空氣を吸つて居るので、二人とももう情夫が出來て、姉のは村の收入役、妹のは村役場の書記、此家の抱藝妓がこの正月にある料理店に聘ばれて行くと、その姉妹がその男達と平氣で戲れて居たといふので、商賣人も跣足ですねと言つて呆れて居た。

『けふはお上さん、これね。』

と言つて、酌婦の一人が髮を結ふ眞似をした。

『さうさ、當り前サ。旦那が來るんですもの。』

旅客は暗い闇の道から、その家の大和障子を明けると、そこに、帳場に、五分心の洋燈を釣つた下に顏の長い、色の白い、脊のすらりとした三十五六の女が長い煙管を立てゝ居るのを見るであらう。これは此家の女主人で、男あるじは居ない。でも、子供が三人、總領が九歳の男の兒、次が七歳の女の兒、其次ぎが三歳の女の兒、それに今六月といふ腹をして居る。總領は前の亭主の胤で、その亭主と謂ふのは一年ほど居て出て行つて了つた。町では誰も知らぬ者はない。此女主人は此貸座敷の本家の娘で、此母親の情夫に十六の時から通じて居た。で、亭主を早く失つた母親と此娘との衝突は甚しかつた。親子苹刺は田舍でも餘り多くはない。で、娘の十九の時貰つた婿は五日居て吃驚して逃げて了ひ、二十四の時、其事を承知で養子に來た男も、懷姙すると間もなく出て行つて了つた。其時出來た兒も其亭主の子であるか、情夫の子であるか、よく解らなかつた。で、いつそ情夫を家に入れたらといふ說も度々起つたが、いつも母親が泣いたり叫んだりするので破れた。母親にもその情夫に出來た女の子が二人あつて、今歳十八と十六になる。

母親は少なからぬ財產を持つて居るので、その二人の娘と此町に住んで居た。五十五で今も達者で居る。今でも其情夫は母親と此の女主人とに同じやうな關係をつけて居るのだ。

情夫と謂ふのは、今年四十五六で此の近鄕の者であつた。此町に遊廓が榮えた頃よく遊びに來たので、深間に陷つた女郎も少くなかつたといふ。色の白い、丈の高い、男らしい男で、土地でもこの不始末を

る﹅に相違ない。

酌婦共はその中庭の前の六疊に集つて居るのだ。今居るのは三人、一人は髮の毬れた、耳の遠い色の生白いお花といふ女、一人は肥つた脊の低い胸の出たお鐵といふ女、一人は一番年の若い此家での呼物のお貞といふ女、それに内藝妓が一人此間から殖えて、用事さへないと、三味線の復習、皷の復習、それも難かしい高尚なのではなく、俗に入り易いサノサ節、喇叭節、倦きると、だらしない色男の話、着物の話、食物の話。

此室から店に行く處は、欄干のついた、折曲つた廊下で、其奥に厠がある。廊下の前には、昔泉水でもあつたらしい跡が殘つて居て、その凹所には、木綿糸や、鼻紙や、毛の丸めたのがだらしなく捨てられてあつて、いかにも汚い。貸座敷であつた頃の一種の厭な臭が何處となく人に迫る。奥の座敷の間の切り方を見ても、其頃のさまがすぐ思はれる。此土地が榮えて居た頃には、此家など特に立派であつたさうだが、今日のやうに衰へて了つては――古びて了つては、一層其腐つた臭ひが強くなつて、何となく胸の悪いやうな感がする。家も、室も、其處に住む人々も何だか腐つた氣の中にあるやうにしか思へなかつた。

實際一種の臭が此家に充ちて居た。

土手の家

茅葺、瓦甍、トタン屋根の不揃な疎らな田舍町の家並の角に、際立つて大きな二階屋が一軒あつたが、これは此町に遊廓があつた頃、屈指な貸座敷であつたといふことであつた。今は土地での唯一の旅店兼業の料理店で、夜は裏座敷に三味線の音が絶えたことがなく、酌婦のだらしなく騷ぐ聲は、いつも暗く淋しい街道を一ところ賑かにした。

行田から館林に通ずる街道、利根川の長い舟橋をとゞろに渡ると、橋畔の渡小屋、カンテラの煤けた光、爺の禿頭、暗い土手の上から見ると、坂東太郎の溶々たる流は處々黑く光つて、半里ほど下流の渡場の燈火がぽつちり一箇見えるばかり、晝間往來した船の氣勢も無く、街道には日が暮れてから客を一人乘せた馬車が一臺通つて、機廻り(はた)の荷車が二臺通つて、あとはさびしい闇。其土手の闇を破つて明るく見えるのが此料理店の勝手である。晝ならば、中庭に松樹の綠、樫の垣、疎らな柴垣の外に車井戸があつて、婢が野菜を洗ひながら、ねんねこで子を負(おぶ)つた子守女と話をして居るのを見得るであらう。いや、土地の馴染客が自轉車などで通らうものなら、其庭越し垣越しに、けたゝましい呼び聲を女から懸けら

黎明に兵站部の軍醫が來た。けれど其の一時間前に、渠は既に死んで居た。一番の汽車が開路々々の懸聲と共に、鞍山站に向つて發車した頃は、その殘月が薄く白けて淋しく空に懸つて居た。

暫くして砲聲が盛に聞え出した。九月一日の遼陽攻擊は始まつた。

『二時十五分。』

二人は默つて立つて居る。

苦痛が又押寄せて來た。唸聲、叫聲が堪へ難い悲鳴に續く。

『氣の毒だナ。』

『本當に可哀相です。何處の者でせう。』

兵士がかれの隱袋(ポケット)を探つた。軍隊手帖を引出すのが解る。かれの眼には其の兵士の黑く逞しい顏と軍隊手帖を讀む爲に卓上の蠟燭に近く步み寄つたさまが映つた。三河國渥美郡福江村加藤平作……と讀む聲が續いて聞えた。故鄕のさまが今一度其の眼前に浮ぶ。母の顏、妻の顏、欅で圍んだ大きな家屋、裏から續いた滑かな磯、碧い海、馴染の漁夫の顏……。

二人は默つて立つて居る。其の顏は蒼く暗い。をり〳〵其の身に對する同情の言葉が交される。彼は既に死を明かに自覺して居た。けれどそれが別段苦しくも悲しくも感じない。二人の問題にして居るのはかれ自身のことではなくて、他に物體があるやうに思はれる。唯、此の苦痛、堪へ難い此の苦痛から脫れ度いと思つた。

蠟燭がちら〳〵する。蟋蟀が同じくさびしく鳴いて居る。

二人の對話が明かに病兵の耳に入る。
『十八聯隊の兵だナ。』
『左樣ですか。』
『いつから此處に來てるんだ？』
『少しも知らんかつたです。いつから來たんですか。私は十時頃ぐつすり寢込んだんですが、ふと目を覺ますと、唸聲がする。苦しい苦しいといふ聲がする。何うしたんだらう、奥には誰も居ぬ筈だがと思つて、不審にして暫く聞いて居たです。すると、其の叫聲は愈〻高くなりますし、誰か來て呉れ！と言ふ聲が聞えますから、來て見たんです。脚氣ですナ。脚氣衝心ですナ。』
『衝心？』
『とても助からんですナ。』
『それア、氣の毒だ。兵站部に軍醫が居るだらう？』
『居ますがナ……こんな遲く、來て呉れやしませんよ。』
『何時だ。』
自から時計を出して見て、『道理だ』といふ顏をして、そのまゝ隱袋に收めた。
『何時です？』

叫喚、悲鳴、絕望、渠は室の中をのたうち廻つた。軍服の釦鈕(ボタン)は外れ、胸の邊は掻むしられ、軍帽は頷紐(あご)をかけたまゝ押潰され、顏から頰に懸けては、嘔吐した汚物が一面に附着した。

突然明らかな光線が室に射したと思ふと、扉の處に、西洋蠟燭を持つた一人の男の姿が浮彫のやうに顯はれた。其の顏だ。肥つた口髭のある酒保の顏だ。けれども其の顏には莞爾したさつきの愛嬌は無く、眞面目な蒼い暗い色が上つて居た。默つて室の中に入つて來たが、其處に唸つて轉がつて居る病兵を蠟燭で照らした。病兵の顏は蒼褪めて、死人のやうに見えた。嘔吐した汚物が其處に散らばつて居た。

『何(ど)うした? 病氣か。』

『あゝ苦しい、苦しい……』

と烈しく叫んで輾轉した。

酒保の男は手を附け兼ねてしばし立つて見て居たが、其の儘、蠟燭の蠟を垂らして、卓(テーブル)の上にそれを立てゝ、そゝくさと扉の外へ出て行つた。蠟燭の光で室は晝のやうに明るくなつた。隅に置いた自分の背嚢と銃とがかれの眼に入つた。

蠟燭の火がちら〳〵する。蠟が涙のやうにだら〳〵流れる。

暫くして先の酒保の男は一人の兵士を伴つて入つて來た。この向うの家屋に寢て居た行軍中の兵士を起して來たのだ。兵士は病兵の顏と四方のさまとを見廻したが、今度は肩章を仔細に檢した。

『苦しい！　苦しい！　苦しい！』

續けざまにけたゝましく叫んだ。

『苦しい、誰か……誰か居らんか。』

と暫くしてまた叫んだ。

強烈なる生存の力ももう餘程衰へて了つた。意識的に救助を求めると言ふよりは、今は殆ど夢中である。自然力に襲はれた木の葉のそよぎ、浪の叫び、人間の悲鳴！

『苦しい！　苦しい！』

其の聲がしんとした室に凄じく漂ひ渡る。此室には一月前まで露國の鐵道援護の士官が起臥して居た。日本兵が始めて入つた時、壁には黒く煤けた基督の像が懸けてあつた。昨年の冬は、滿洲の野に降頻る風雪をこの硝子窓から眺めて、其の士官はウォッカを飲んだ。毛皮の防寒服を着て、戸外に兵士が立つて居た。日本兵の爲すに足らざるを言つて、虹のごとき氣焔を吐いた。其の室に、今、垂死の兵士の叫喚が響き渡る。

『苦しい、苦しい、苦しい！』

寂として居る。蟋蟀は同じやさしいさびしい調子で鳴いて居る。滿洲の廣漠たる野には、遲い月が昇つたと見えて、あたりが明るくなつて、硝子窓の外は既に其の光を受けて居た。

なければならぬと思ふ努力が少くとも其の苦痛を輕くした。一種の力は波のやうに全身に漲つた。

死ぬのは悲しいといふ念よりもこの苦痛に打克たうといふ念の方が强烈であつた。一方には極めて消極的な涙脆い意氣地ない絶望が漲ると共に、一方には人間の生存に對する權利といふやうな積極的の力が强く横はつた。

疼痛は波のやうに押寄せては引き、引いては押寄せる。押寄せる度に脣を嚙み、齒をくひしばり、脚を兩手でつかんだ。

五官の他にある別種の官能の力が加はつたかと思つた。暗かつた室がそれとはつきり見える。暗色の壁に添うて高い卓（テーブル）が置いてある。上に白いのは確かに紙だ。硝子窓の半分が破れて居て、星がきらきらと大空をきらめいて居るのが認められた。右の一隅には、何かごた〳〵置かれてあつた。

時間の經つて行くのなどはもうかれには解らなくなつた。軍醫が來て吳れゝば好いと思つたが、それを續けて考へる暇はなかつた。新しい苦痛が增した。

床近く蟋蟀が鳴いて居た。苦痛に悶えながら『あ、蟋蟀が鳴いて居る……』とかれは思つた。其の哀切な蟲の調が何だか全身に沁み入るやうに覺えた。

疼痛、疼痛、かれは更に輾轉反側した。

室内が見えるといふ程ではないが、そことなく星明りがして、前に硝子窓があるのが解る。

銃を置き、背嚢を下し、いきなりかれは横に倒れた。そして重苦しい息をついた。まアこれで安息所を得たと思つた。

滿足と共に新しい不安が頭を擡げて來た。倦怠、疲勞、絶望に近い感情が鉛のごとく重苦しく全身を壓した。思ひ出が皆な片々で、電光のやうに早いかと思ふと牛の喘歩のやうに遲い。間斷なしに胸が騒ぐ。

重い、氣怠い脚が一種の壓迫を受けて疼痛を感じて來たのは、かれ自からにも好く解つた。腓のところどころがずき／＼と痛む。普通の疼痛ではなく、丁度こむらが反つた時のやうである。

自然と身體を藻掻かずには居られなくなつた。綿のやうに疲れ果てた身でも、この壓迫には敵はない。無意識に輾轉反側した。

故郷のことを思はぬではない、母や妻のことを悲まぬではない。此の身がかうして死ななければならぬかと嘆かぬではない。けれど悲嘆や、追憶や、空想や、そんなものは何うでも好い。疼痛、疼痛、その絶大な力と戰はねばならぬ。

潮のやうに押寄せる。暴風のやうに荒れわたる。脚を固い板の上に立てゝ倒して、體を右に左に踠いた。『苦しい……』と思はず叫んだ。

けれど實際はまださう苦しいとは感じて居なかつた。苦しいには違ひないが、更に大きな苦痛に耐へ

にあつて、薪の餘燼が赤く見えた。薄い煙が提燈を掠めて淡く靡いて居る。提燈に、しるこ一杯五錢と書いてあるのが、胸が苦しくつて苦しくつて爲方がないにも拘らずはつきりと眼に映じた。

『しるこはもうお終ひか。』

と言つたのは、其前に立つて居る一人の兵士であつた。

『もうお終ひです。』

といふ聲が戸内から聞える。

内を覗くと、明かな光、西洋蠟燭が二本裸で點つて居て、罐詰や小間物などの山のやうに積まれてある中央の一段高い處に、肥つた、口髭の濃い、莞爾した三十男が坐つて居た。店では一人の兵士がタオルを展げて見て居た。

傍を見ると、暗いながら、低い石階が眼に入つた。此處だなとかれは思つた。兎に角休息することが出來ると思ふと、言ふに言はれぬ滿足を先づ心に感じた。靜かにぬき足して其の石階を登つた。中は暗い。よく判らぬが廊下になつて居るらしい。最初の戸と覺しき處を押して見たが開かない。二歩三歩進んで次の戸を押したが矢張開かない。左の戸を押しても駄目だ。

猶奧へ進む。

廊下は突當つて了つた。右にも左にも道が無い。困つて右を押すと、突然、闇が破れて扉が明いた。

なつた。眼がぐら〳〵する。胸がむかつく。脚が氣怠い。頭腦は烈しく旋囘する。

けれど此處に倒れるわけには行かない。死ぬにも隱家を求めなければならぬ。さうだ、隱家……。何んな處でも好い。靜かな處に入つて寢たい、休息したい。

闇の路が長く續く。ところ〴〵に兵士が群を成して居る。不圖豐橋の兵營を憶ひ出した。酒保に行つて隱れてよく酒を飮んだ。酒を飮んで、軍曹をなぐつて、重營倉に處せられたことがあつた。路がいかにも遠い。行つても行つても洋館らしいものが見えぬ。三四町と言つた。三四町どころか、もう十町も來た。間違つたのかと思つて振返る――兵站部は燈火の光、篝火の光、闇の中を行違ふ兵士の黑い群、彈藥箱を運ぶ懸聲が夜の空氣を劈いて響く。

此處等はもう靜かだ。あたりに人の影も見えない。俄かに苦しく胸が迫つて來た。隱れ家がなければ、此處で死ぬのだと思つて、がつくり倒れた。けれども不思議にも前のやうに悲しくもない、思ひ出もない。空の星の閃めきが眼に入つた。首を擧げてそれとなくあたりを眴した。

今まで見えなかつた一棟の洋館がすぐ其の前にあるのに驚いた。家の中には燈火が見える。丸い赤い提燈が見える。人の聲が耳に入る。

銃を力に辛うじて立上つた。

成程、其の家屋の入口に酒保らしい者がある。暗いからわからぬが、何か釜らしいものが戸外の一隅

幾人となく出たり入つたりして居る。兵站部の三個の大釜には火が盛に燃えて、烟が薄暮の空に濃く靡いて居た。一箇の釜は飯が既に炊けたので、炊事軍曹が大きな聲を擧げて、部下を叱咤して、集る兵士に頻りに飯の分配を遣つて居る。けれど此の三箇の釜は到底この多數の兵士に夕飯を分配することが出來ぬので、其大部分は白米を飯盒に貰つて、各自に飯を作るべく野に散つた。やがて野の處々に高粱の火が幾つとなく燃された。

家屋の彼方では、徹夜して戰場に送るべき彈藥丸の箱を汽車の貨車に積込んで居る。兵士、輸卒の群が一生懸命に奔走して居るさまが薄暮の微かな光に絶え〴〵に見える。一人の下士が貨車の荷物の上に高く立つて、頻りにその指揮をして居た。

日が暮れても戰爭は止まぬ。鞍山站の馬鞍のやうな山が暗くなつて、其の向うから砲聲が斷續する。

渠は此處に來て軍醫をもとめた。けれど軍醫どころの騷ぎではなかつた。一兵卒が死なうが生きようがそんなことを問ふ場合ではなかつた。渠は二人の兵士の盡力の下に、纔かに一盒の飯を得たばかりであつた。爲方がない、少し待て。この聯隊の兵が前進して了つたら、軍醫をさがして、伴れて行つて遣るから、先づ落着いて居れ。此處から眞直に三四町行くと一棟の洋館がある。其の洋館の入口には、酒保が今朝から店を開いて居るからすぐ解る。其の奥に入つて、寢て居れとのことだ。

渠はもう歩く勇氣は無かつた。銃と背嚢とを二人から受取つたが、それを脊負ふと危なく倒れさうに

『後備が澤山行くナ。』

『兵が足りんのだ。敵の防禦陣地はすばらしいものださうだ。』

『大きな戰爭になりさうだナ。』

『一日砲聲がしたからナ。』

『勝てるかしらん。』

『負けちや大變だ。』

『第一軍も出たんだらうナ。』

『勿論さ。』

『一つ旨く背後を斷つて遣り度い。』

『今度は屹度旨く遣るよ。』

と言つて耳を傾けた。砲聲がまた盛んに聞え出した。

新臺子の兵站部は今雜沓を極めて居た。後備旅團の一箇聯隊が着いたので、レイルの上、家屋の蔭、糧餉の傍などに軍帽と銃劍とがみちみちて居た。レイルを挾んで敵の鐵道援護の營舍が五棟ほど立つて居るが、國旗の飜つた兵站本部は、雜沓を重ねて、兵士が黒山のやうに集つて、長い劍を下げた士官が

『隊が鞍山站の向うに居るだらうと思ふんです。』

『だつて、今日其處まで行けはせん。』

『はア。』

『まア、新臺子まで行くさ。其處に兵站部があるから行つて醫師に見て貰ふさ。』

『まだ遠いですか？』

『もうすぐ其處だ。それ向うに丘が見えるだらう。丘の手前に鐵道線路があるだらう。其處に國旗が立つて居る、あれが新臺子の兵站部だ。』

『其處に醫師が居るでせうか。』

『軍醫が一人居る。』

蘇生したやうな氣がする。

で、二人に跟いて歩いた。二人は氣の毒がつて、銃と背嚢とを持つて奥れた。

二人は前に立つて話しながら行く。遼陽の今日の戰爭の話である。

『様子は解らんかナ。』

『まだ遣つてるんだらう。煙臺で聞いたが、敵は遼陽の一里手前で一支へして居るさうだ。何でも首山堡とか言つた。』

野は平和である。赤い大きい日は地平線上に落ちんとして、空は半ば金色半ば暗碧色になつて居る。金色の鳥の翼のやうな雲が一片動いて行く。高粱の影は影と蔽ひ重つて、荒凉とした秋風が渡つた。遼陽方面の砲聲も今まで盛に聞えて居たが、いつか全く途絶えて了つた。

二人連の上等兵が追ひ越した。

すれ違つて、五六間先に出たが、ひとりが戻つて來た。

『おい、君、何うした？』

かれは氣が附いた。聲を擧げて泣いて歩いて居たのが氣恥かしかつた。

『おい、君？』

再び聲は懸つた。

『脚氣なもんですから。』

『脚氣？』

『はァ。』

『それは困るだらう。餘程悪いのか。』

『苦しいです。』

『それァ困つたナ、脚氣では衝心でもすると大變だ。何處まで行くんだ。』

もう駄目だ、萬事休す、遁れるに路が無い。消極的の悲觀が恐ろしい力で其胸を襲つた。と、歩く勇氣も何も無くなつて了つた。止度なく涙が流れた。神が此の世にゐますなら、何うか救けて下さい、何うか遁路を教へて下さい。これからは何んな難儀もする！　どんな善事もする！　どんなことにも背かぬ。

渠はおい〳〵聲を擧げて泣出した。

胸が間斷なしに込み上げて來る。涙は小兒でもあるやうに頰を流れる。自分の體が此の世の中になくなるといふことが痛切に悲しいのだ。かれの胸には此迄幾度も祖國を思ふの念が燃えた。海上の甲板で、軍歌を歌つた時には悲壯の念が全身に充ち渡つた。敵の軍艦が突然出て來て、一砲彈の爲めに沈められて、海底の藻屑となつても遺憾がないと思つた。金州の戰場では機關銃の死の叫びの唯中を地に伏しつつ、勇ましく進んだ。戰友の血に塗れた姿に胸を撲つたこともないではないが、これも國の爲めだ、名譽だと思つた。けれど人の血の流れたのは自分の血の流れたのではない。死と相面しては、いかなる勇者も戰慄する。

脚が重い、氣怠るい、胸がむかつく。大石橋から十里、二日の路、夜露、惡寒、確かに持病の脚氣が昂進したのだ。流行腸胃熱は治つたが、急性の脚氣が襲つて來たのだ。脚氣衝心の恐しいことを自覺してかれは戰慄した。何うしても免れることが出來ぬのかと思つた。と、居ても立つても居られなくなつて、體がしびれて脚がすくんだ。――おい〳〵泣きながら歩く。

それにあの頃の友人は皆世に出て居る。此の間も蓋平で第六師團の大尉になつて威張つて居る奴に邂逅した。

軍隊生活の束縛ほど殘酷な者はないと突然思つた。と、今日は不思議にも平生の樣に反抗とか犧牲とかいふ念は起らずに、恐怖の念が盛に燃えた。出發の時、此の身は國に捧げ君に捧げて遺憾が無いと誓つた。再びは歸つて來る氣は無いと、村の學校で雄々しい演說を爲た。當時は元氣旺盛、身體壯健であつた。で、さう言つても勿論死ぬ氣はなかつた。心の底には花々しい凱旋を夢みて居た。であるのに今忽然起つたのは死に對する不安である。自分はとても生きて還ることは覺束ないといふ氣が烈しく胸を衝いた。此の病、此の脚氣、假令此の病は治つたにしても戰場は大なる牢獄である。いかに藻掻いても焦つてもこの大なる牢獄から脫することは出來ぬ。得利寺で戰死した兵士が其の以前かれに向つて、

『何うせ遁れられぬ穴だ。思ひ切りよく死ぬサ。』と言つたことを思出した。

かれは疲勞と病氣と恐怖とに襲はれて、如何にしてこの恐ろしい災厄を遁るべきかを考へた。脫走？それも好い、けれど捕へられた曉には、此の上も無い汚名を被つた上に同じく死！　さればとて前進すれば必ず戰爭の巷の人とならなければならぬ。戰爭の巷に入れば死を覺悟しなければならぬ。かれは今始めて、病院を退院したことの愚をひしと胸に思當つた。病院から後送されるやうにすればよかつた……

……と思つた。

街道には久しく村落が無いが、西方には楊樹のやゝ暗い繁茂が到る處にかたまつて、其の間からちらちら白色褐色の民家が見える。人の影はあたりを見廻してもないが、青い細い炊煙は糸のやうに淋しく立騰る。

夕日は物の影を總て長く曳くやうになつた。高粱の高い影は二間幅の廣い路を蔽つて、更に向う側の高粱の上に蔽ひ重つた。路傍の小さな草の影も夥しく長く、東方の丘陵は浮出すやうにはつきりと見える。さびしい悲しい夕暮は譬へ難い一種の影の力を以て迫つて來た。

高粱の絶えた處に來た。忽然、かれは其の前に驚くべき長大なる自分の影を見た。肩の銃の影は遠い野の草の上にあつた。かれは急に深い悲哀に打たれた。

草叢には蟲の聲がする。故郷の野で聞く蟲の聲とは似もつかぬ。この似つかぬことと廣い野原とが何となく其の胸を痛めた。一時途絶えた追懐の情が流るゝやうに漲つて來た。

母の顔、若い妻の顔、弟の顔、女の顔が走馬燈のごとく旋回する。欅の樹で圍まれた村の舊家、團欒せる平和な家庭、續いて其身が東京に修業に行つた折の若々しさが憶ひ出される。神樂坂の夜の賑ひが眼に見える。美しい草花、雜誌店、新刊の書、角を曲ると賑やかな寄席、待合、三味線の音、仇めいた女の聲、あの頃は樂しかつた。戀した女が仲町に居て、よく遊びに行つた。丸顔の可愛い娘で、今でも戀しい。此の身は田舍の豪家の若旦那で、金には不自由を感じなかつたから、隨分面白いことを爲た。

爺連も圏を爲して何事をか饒舌り立てゝ居る。驢馬の長い耳に日がさして、をりをりけたゝましい嘶聲が耳を劈く。楊樹の彼方に白い壁の支那民家が五六軒續いて、庭の中に槐の樹が高く見える。井戸がある。納屋がある。足の小さい年老いた女が覺束なく歩いて行く。楊樹を透して向うに、廣い荒漠たる野が見える。褐色した丘陵の連續が指される。其の向うには紫色がかつた高い山が蜿蜒として居る。砲聲は其處から來る。

五輛の車は行つて了つた。

渠はまた一人取殘された。海城から東煙臺、甘泉堡、この次の兵站部所在地は新臺子と言つて、まだ一里位ある。其處迄行かなければ宿るべき家も無い。

行くことにして歩き出した。

疲れ切つて居るから難儀だが、車よりは却つて好い。胸は依然として苦しいが、何うも致し方が無い。また同じ褐色の路、同じ高粱の畑、同じ夕日の光、レールには例の汽車が又通つた。今度は下り坂で、速力が非常に早い。釜の附いた汽車よりも早い位に目まぐろしく谷を越えて駛つた。最後の車輛に飜つた國旗が高粱畑の絶間々々に見えたり隱れたりして、遂にそれが見えなくなつても、其の車輛の轟は聞える。其の轟と交つて、砲聲が間斷なしに響く。

『もう始つたですか。』

『聞えんかあの砲が……。』

さつきから、天末に一種のとゞろきが始つたさうなとは思つたが、まだ遼陽では無いと思つて居た。

『鞍山站は落ちたですか。』

『一昨日落ちた。敵は遼陽の手前で一防禦遣るらしい。今日の六時から始つたといふ噂だ！』

一種の遠い微かなる轟、仔細に聞けば成程砲聲だ。例の厭な音が頭上を飛ぶのだ。歩兵隊が其間を縫つて進撃するのだ。血汐が流れるのだ。かう思つた渠は一種の恐怖と憧憬とを覺えた。戰友は戰つて居る。日本帝國の爲めに血汐を流して居る。

修羅の巷が想像される。炸彈の壯觀も眼前に浮ぶ。けれど七八里を隔てた此の滿洲の野は、さびしい秋風が夕日を吹いて居るばかり、大軍の潮の如く過ぎ去つた村の平和はいつもに異らぬ。

『今度の戰爭は大きいだらう。』

『左樣さ。』

『一日では勝敗がつくまい。』

『無論だ。』

今の下士は夥伴の兵士と砲聲を耳にしつゝ頻りに語合つて居る。糧餉を滿載した車五輛、支那苦力の

日本人だ、わが同胞だ、下士だ。
『貴樣は何だ?』
かれは苦しい身を起した。
『何うして此の車に乘つた?』
理由を說明するのがつらかつた。いや口を聞くのも厭なのだ。
『此車に乘つちやいかん。さうでなくつてさへ、荷が重過ぎるんだ。お前は十八聯隊だナ。豐橋だナ。』
點頭いて見せる。
『何うかしたのか。』
『病氣で、昨日まで大石橋の病院に居たものですから。』
『病氣がもう治つたのか。』
無意味に點頭いた。
『病氣でつらいだらうが、下りて呉れ。急いで行かんけりやならんのだから。遼陽が始まつたでナ。』
『遼陽!』
此一語はかれの神經を十分に刺戟した。

全身の力を絞つて呼んだ。聞えたに相違ないが振向いても見ない。何うせ碌なことではないと知つて居るだらう。一時思止まつたが、また驅出した。そして今度は其最後の一輛に漸く追着いた。

米の叺が山のやうに積んである。支那人の爺が振向いた。丸顏の厭な顏だ。有無を云はせず其の車に飛乘つた。そして叺と叺との間に身を横へた。支那人は爲方が無いといふ風でウオー〳〵と馬を進めた。

ガタ〳〵と車は行く。

頭腦がぐら〳〵して天地が廻轉するやうだ。胸が苦しい。頭が痛い。脚の腓の處が押附けられるやうで、不愉快で、不愉快で爲方が無い。やゝともすると胸がむかつきさうになる。不安の念が凄じい力で全身を襲つた。と同時に、恐ろしい動搖がまた始まつて、耳からも頭からも、種々の聲が囁いて來る。此前にもかうした不安はあつたが、これほどではなかつた。天にも地にも身の置き處が無いやうな氣がする。

野から村に入つたらしい。鬱蒼とした楊の緣がかれの上に靡いた。楊樹にさし入つた夕日の光が細な葉を一葉々々明らかに見せて居る。不恰好な低い屋根が地震でもあるかのやうに動搖しながら過ぎて行く。ふと氣がつくと、車は止つて居た。かれは首を擧げて見た。

楊樹の蔭を成して居る處だ。車輛が五臺ほど續いて居るのを見た。

突然肩を捉へるものがある。

て通つた。九十度近い暑い日が腦天からぢり〳〵と照り附けた。四時過に、敵味方の步兵は共に接近した。小銃の音が豆を煎るやうに聞える。時々シュッシュッと耳の傍を掠めて行く。列の中であつと言つたものがある。はッと思つて見ると、血がだら〳〵と暑い夕日に彩られて、其の兵士はガックリ前に踣(のめ)つた。胸に彈丸が中つたのだ。其の兵士は善い男だつた。快活で、洒脫で、何事にも氣が置けなかつた。新城町のもので、若い嚊があつた筈だ。上陸當座は一緒によく徵發に行つたつけ。豚を逐ひ廻したッけ。けれどあの男は最早此世の中に居ないのだ。居ないとは何うしても思へん。思へんが居ないのだ。

褐色の道路を、糧餉を滿載した車がぞろ〳〵行く。騾車、驢車、支那人の爺のウオ〳〵ウイウイが聞える。長い鞭が夕日に光つて、一種の音を空氣に傳へる。路の凸凹が烈しいので、車は波を打つやうにしてガタ〳〵動いて行く。苦しい、息が苦しい。かう苦しくつては爲方が無い。賴んで乘せて貰はうと思つてかれは驅出した。

金椀がカタ〳〵鳴る。烈しく鳴る。背嚢の中の雜品や彈丸袋の彈丸が氣(け)たゝましく躍り上る。銃の臺が時々脛を打つて飛び上るほど痛い。

『オーい、オーい。』

聲が立たない。

『オーい、オーい。』

心から可愛いと思つた時の美しい笑顏だ。母親がお前もうお起きよ、學校が遲くなるよと搖起す。かれの頭はいつか子供の時代に飛返つて居る。裏の入江の船の船頭が禿頭を夕日にてか〳〵と光らせながら子供の一群に向つて呶鳴つて居る。其の子供の群の中にかれも居た。

過去の面影と現在の苦痛不安とが、はつきりと區劃を立てゝ居りながら、しかもそれがすれすれに摺寄つた。銃が重い、背嚢が重い、脚が重い。腰から下は他人のやうで、自分で步いて居るのか居ないのか、それすらはつきりとは解らぬ。

褐色の道路――砲車の轍や靴の跡や草鞋の跡が深く印したまゝに石のやうに乾いて固くなつた路が前に長く通じて居る。かういふ滿洲の道路にはかれは殆ど愛想をつかして了つた。何處まで行つたら此の路はなくなるのか。何處まで行つたらこんな路は步かなくつてもよくなるのか。故鄕のいさご路、雨上りの濕つた海岸の砂路、あの滑かな心地の好い路が懷かしい。廣い大きい道ではあるが、一として滑かな平かな處が無い。これが雨が一日降ると、壁土のやうに柔かくなつて、靴どころか、長い脛も其半を沒して了ふのだ。大石橋の戰爭の前の晚、暗い闇の泥濘を三里もこね廻した。脊の上から頭の髮まではねが上つた。あの時は砲車の援護が任務だつた。砲車が泥濘の中に陷つて少しも動かぬのを押して押して押し通した。第三聯隊の砲車が先に出て陣地を占領して了はなければ明日の戰は出來なかつたのだ。そして終夜働いて、翌日はあの戰爭。敵の砲彈、味方の砲彈がぐん〳〵と厭な音を立てゝ頭の上を鳴つ

あれよりは……彼處に居るよりは、此の濶々とした野の方が好い。どれほど好いかしれぬ。滿洲の野は荒漠として何も無い。畑にはもう熟し懸けた高粱が連つて居るばかりだ。けれど新鮮な空氣がある、日の光がある、雲がある、山がある、——凄じい聲が急に耳に入つたので、立留つてかれは其方を見た。さつきの汽車がまだ彼處に居る。釜の無い煙筒の無い長い汽車を、支那苦力が幾百人となく寄つてたかつて、丁度蟻が大きな獲物を運んで行くやうに、えつさらおつさら押して行く。

夕日が畫のやうに斜にさし渡つた。

さつきの下士が彼處に乘つて居る。あの一段高い米の叺の積荷の上に突立つて居るのが彼奴だ。苦しくつてとても歩けんから、鞍山站まで乘せて行つて吳れと賴んだ。すると彼奴め、兵を乘せる車ではない、歩兵が車に乘るといふ法があるかと呶鳴つた。病氣だ、御覽の通りの病氣で、脚氣をわづらつて居る。鞍山站の先まで行けば隊が居るに相違ない。武士は相見互といふことがある、何うか乘せて吳れッて、たつて賴んでも、言ふことを聞いて吳れなかつた。兵、兵と云つて、筋が少いと馬鹿にしやがる。金州でも、得利寺でも兵のお蔭で戰爭に勝つたのだ。馬鹿奴、惡魔奴！

蟻だ、蟻だ、本當に蟻だ。まだ彼處に居やがる。汽車もあゝなつてはお了ひだ。ふと汽車——豐橋を發つて來た時の汽車が眼の前を通り過ぎる。停車場は國旗で埋められて居る。萬歲の聲が長く〳〵續く。と忽然最愛の妻の顏が眼に浮ぶ。それは門出の時の泣顏ではなく、何うした場合であつたか忘れたが、

一兵卒

渠は歩き出した。

銃が重い、背嚢が重い、脚が重い、アルミニューム製の金椀(かなわん)が腰の劍に當つてカタ〳〵と鳴る。其音が興奮した神經を夥しく刺戟するので、幾度かそれを直して見たが、何うしても鳴る。カタ〳〵と鳴る。もう厭になつて了つた。

病氣は本當に治つたので無いから、息が非常に切れる。全身には惡熱惡寒が絶えず往來する。頭腦が火のやうに熱して、顳顬が烈しい脈を打つ。何故、病院を出た？ 軍醫が後が大切だと言つてあれほど留めたのに、何故病院を出た？ かう思つたが、渠はそれを悔いはしなかつた。敵の捨てゝ遁げた汚ない洋館の板敷、八疊位の室に、病兵、負傷兵が十五人、衰頽と不潔と叫喚と重苦しい空氣と、それに凄じい蠅の群集、よく二十日も辛抱して居た。麥飯の粥に少許(すこしばかり)の食鹽、よくあれでも飢餓を凌いだ。かれは病院の背後の便所を思出してゾツとした。急造の穴の堀りやうが淺いので、臭氣が鼻と眼とを烈しく撲つ。蠅がワンと飛ぶ。石灰の灰色に汚れたのが胸をむか〳〵させる。

天鵞絨の襟に顔を埋めて泣いた。

薄暗い一室、戸外(おもて)には風が吹き暴れて居た。

とのみ思ひ出で、かの一茶が「これがまアつひの住家か雪五尺」の名句痛切に身にしみ申候、父よりいづれ御禮の文奉り度存居候へども今日は町の市日にて手引き難く、年失禮私より宜敷御禮申上候、まだまだ御目汚し度きこと澤山に有之候へども激しく胸騷ぎ致し候まゝ今日はこれにて筆擱き申候、』と書いてあつた。

時雄は雪の深い十五里の山道と雪に埋れた山中の田舍町とを思ひ遣つた。別れた後其の儘にして置いた二階へ上つた。懷かしさ、戀しさの餘り、微かに殘つた其の人の面影を偲ばうと思つたのである。武藏野の寒い風の盛に吹く日で、裏の古樹には潮の鳴るやうな音が凄じく聞えた。別れた日のやうに東の窓の雨戸を一枚明けると、光線は流るゝやうにさし込んだ。机、本箱、罎、紅血、依然として元の儘で、戀しい人はいつもの樣に學校に行つて居るのではないかと思はれる。時雄は机の抽斗を明けて見た。古い油の染みたリボンが其の中に捨てゝあつた。時雄はそれを取つて匂ひを嗅いだ。暫くして立上つて襖を明けて見た。大きな柳行李が三箇の細引で送るばかりに絡げてあつて、其向うに、芳子が常に用ひて居た蒲團――萌黃唐草の敷蒲團と、綿の厚く入つた同じ模樣の夜着とが重ねられてあつた。時雄はそれを引出した。女のなつかしい油の匂と汗のにほひとが言ひも知らず時雄の胸をときめかした。夜着の襟の天鵞絨の際立つて汚れて居るのに顏を押附けて、心のゆくばかりなつかしい女の匂ひを嗅いだ。

性慾と悲哀と絕望とが忽ち時雄の胸を襲つた。時雄は其の蒲團を敷き、夜着をかけ、冷めたい汚れた

時雄の後に、一群の見送人が居た。其の蔭に、柱の傍に、いつ來たか、一箇の古い中折帽を冠つた男が立つて居た。芳子は此を認めて胸を轟かした。父親は不快な感を抱いた。けれど、空想に耽つて立盡した時雄は、其の後に其の男が居るのを夢にも知らなかつた。

車掌は發車の笛を吹いた。

汽車は動き出した。

十一

さびしい生活、荒凉たる生活は再び時雄の家に音信(おとづ)れた。子供を持てあまして喧しく叱る細君の聲が耳について、不愉快な感を時雄に與へた。

生活は三年前の舊の轍にかへつたのである。

五日目に、芳子から手紙が來た。いつもの人懷しい言文一致でなく、禮儀正しい候文で、『昨夕恙なく歸宅致し候儘御安心被下度、此の度はまことに御忙しき折柄種々御心配ばかり相懸け候うて申譯も無之、幾重にも御詫申上候、御前に御高恩をも謝し奉り、お詫も致し度候ひしが、兎角は胸迫りて最後の會合すら辭(いな)み候心、お察し被下度候、新橋にての別離。硝子戸の前に立ち候每に、茶色の帽子うつり候やうの心地致し、今猶まざ〳〵と御姿見るのに候、山北邊より雪降り候うて、湛井よりの山道十五里、悲しきこ

後からも續々と旅客が入つて來た。長い旅を寢て行かうとする商人もあつた。呉あたりに歸るらしい軍人の佐官もあつた。大阪言葉をむき出しに、喋々と雜話に耽ける女連もあつた。父親は白い毛布を長く敷いて、傍に小さい鞄を置いて、芳子と相並んで腰を掛けた。電氣の光が車內に差し渡つて、芳子の白い顏が丸で浮彫のやうに見えた。父親は窓際に來て、幾度も厚意のほどを謝し、後に殘ることに就いて、萬事を囑した。時雄は茶色の中折帽、七子の三紋の羽織といふ扮裝で、窓際に立盡して居た。

發車の時間は刻々に迫つた。時雄は二人の此の旅を思ひ、芳子の將來のことを思つた。其の身と芳子とは盡きざる緣があるやうに思はれる。妻が無ければ、無論自分は芳子を貰つたに相違ない。芳子も亦喜んで自分の妻になつたであらう。理想の生活、文學的の生活、堪へ難き創作の煩悶をも慰めて呉れるだらう。今の荒凉とした胸をも救つて呉れることが出來るだらう。『何故、もう少し早く生れなかつたでせう、私も奧樣時分に生れて居れば面白かつたでせうに、……』と妻に言つた芳子の言葉を思ひ出した。此の芳子を妻にするやうな運命は永久其の身に來ぬであらうか。この父親を自分の舅と呼ぶやうな時は來ぬだらうか。人生は長い、運命は奇しき力を持つて居る。處女でないといふことが――一度節操を破つたといふことが、却つて年多く子供ある自分の妻たることを容易ならしむる條件となるかも知れぬ。運命、人生――曾て芳子に教へたツルゲネーフの『プニンとバブリン』が時雄の胸に上つた。露西亞のすぐれた作家の描いた人生の意味が今更のやうに胸を撲つた。

の荒涼たる生活とを思つた。路行く人の中にはこの荷物を滿載して、父親と中年の男子に保護されて行く花の如き女學生を意味ありげに見送るものもあつた。

京橋の旅館に着いて、荷物を纏め、會計を濟ました。此の家は三年前、芳子が始めて父に伴れられて出京した時泊つた旅館で、時雄は此處に二人を訪問したことがあつた。三人は其の時と今とを胸に比較して、感慨多端であつたが、しかも互に避けて面にあらはさなかつた。五時には新橋の停車場に行つて、二等待合室に入つた。

混雜また混雜、群集また群集、行く人送る人の心は皆空になつて、天井に響く物音が更に旅客の胸に反響した。悲哀と喜悦と好奇心とが停車場の到る處に巴渦を巻いて居た。一刻毎に集り來る人の群、殊に六時の神戸急行は乘客が多く、二等室も時の間に肩摩轂擊の光景となつた。時雄は二階の壺屋からサンドウイッチを二箱買つて芳子に渡した。切符と入場切符も買つた。手荷物のチッキも貰つた。今は時刻を待つばかりである。

此の群集の中に、もしや田中の姿が見えはせぬかと三人皆思つた。けれど其の姿は見えなかつた。

ベルが鳴つた。群集はぞろ〳〵と改札口に集つた。一刻も早く乘込まうとする心が燃えて、焦立つて、その混雜は一通りでなかつた。三人は其の間を辛うじて拔けて、廣いプラットフオムに出た。そして最も近い二等室に入つた。

かつた。

午後三時、車が三臺來た。玄關に出した行李、支那鞄、信玄袋を車夫は運んで車に乘せた。芳子は栗梅の被布を着て、白いリボンを髮に挿して、眼を泣腫して居た。送つて出た細君の手を堅く握つて、

『奧さん、左樣なら……私、また屹度來てよ、屹度來てよ、來ないで置きはしないわ。』

『本當にね、又出ていらつしやいよ。一年位したら、屹度ね。』

と、細君も堅く手を握りかへした。その眼には涙が溢れた。女心の弱く、同情の念は其の小さい胸に漲り渡つたのである。

冬の日のやゝ薄寒き牛込の屋敷町、最先に父親、次に芳子、次に時雄といふ順序で車は走り出した。細君と下婢とは名殘を惜んで其の車の後影を見送つて居た。其の後に隣の細君が此の俄かの出立を何事かと思つて見て居た。猶其の後の小路の曲り角に、茶色の帽子を被つた男が立つて居た。芳子は二度、三度まで振返つた。

車が麴町の通りを日比谷へ向ふ時、時雄の胸に、今の女學生といふことが浮んだ。前に行く車上の芳子、高い二百三高地卷、白いリボン、やゝ猫脊勝なる姿、かういふ形をして、かういふ事情の下に、荷物と共に父に伴れられて歸國する女學生はさぞ多いことであらう。芳子、あの意志の強い芳子でさへかうした運命を得た。教育家の喧しく女子問題を言ふのも無理はない。時雄は父親の苦痛と芳子の涙と其の身

『それも僕には教へて好いか悪いか解らんですから。』

取附く島がない。田中は默つて暫し坐つて居たが、其の儘辭儀をして去つた。

晝飯の膳がやがて八疊に並んだ。これがお別れだと謂ふので、細君は殊に注意して酒肴を揃へた。時雄も別れのしるしに、三人相並んで會食しようとしたのである。けれど芳子に何うしても食べ度くないといふ。細君が說勸めても來ない。時雄は自身二階に上つた。

東の窓を一枚明けたばかり、暗い一室には本やら、雜誌やら、着物やら、帶やら、罎やら、行李やら、支那鞄やらが足の踏み度も無い程に散らばつて居て、塵埃の香が夥しく鼻を衝く中に、芳子は眼を泣腫して荷物の整理を爲て居た。三年前、青春の希望湧くがごとき心を抱いて東京に出て來た時のさまに比べて、何等の悲慘、何等の暗黑であらう。すぐれた作品一つ得ず、かうして田舍に歸る運命かと思ふと、堪らなく悲しくならずには居られまい。

『折角支度したから、食つたら何うです。もう暫くは一緒に飯も食べられんから。』

『先生――』

と、芳子は泣出した。

時雄も胸を衝いた。師としての溫情と責任とを盡したかと烈しく反省した。かれも泣き良いほど佗しくなつた。光線の暗い一室、行李や書籍の散逸せる中に、戀せる女の歸國の涙、これを慰むる言葉も無

から父親の手に移したことは尠くとも愉快であつた。で、時雄は父親と寧ろ快活に種々なる物語に耽つた。父親は田舍の紳士によく見るやうな書畫道樂、雪舟、應擧、容齋の繪畫、山陽、竹山、海屋、茶山の書を愛し、其の名幅を無數に藏して居た。話は自づからそれに移つた。平凡なる書畫物語はこの一室に一時榮えた。

田中が來て、時雄に逢ひたいと言つた。八疊と六疊との中じきりを閉めて、八疊で逢つた。父親は六疊に居た。芳子は二階の一室に居た。

『御歸國になるんでせうか。』

『え、何うせ、歸るんでせう。』

『芳さん一緒に。』

『それは左樣でせう。』

『何時ですか、お話下されますまいか。』

『何うも今の場合、お話することは出來ませんな。』

『それでは一寸でも……芳さんに逢はせて頂く譯には參りますまいか。』

『それは駄目でせう。』

『では、お父樣は何方へお泊りですか、一寸番地をうかゞひ度いですが。』

纏々として說かうとした。靈肉共に許した戀人の例として、いかやうにしても離れまいとするのである。
時雄の顏には得意の色が上つた。

『いや、もう其の問題は決着したです。芳子が一伍一什をすつかり話した。君等は僕を欺いて居たといふことが解つた。大變な神聖な戀でしたナ。』

田中の顏は俄かに變つた。羞恥の念と激昂の情と絕望の悶えとが其の胸を衝いた。かれは言ふ所を知らなかつた。

『もう、止むを得んです、』と時雄は言葉を續いで、『僕はこの戀に關係することが出來ません。いや、もう厭です。芳子を父親の監督に移したです。』

男は默つて坐つて居た。蒼い其の顏には肉の戰慄が歷々と見えた。不圖、急に、辭儀をして、かうしては居られぬといふ態度で、此處を出て行つた。

午前十時頃、父親は芳子を伴うて來た。愈々今夜六時の神戶急行で歸國するので、大體の荷物は後から送つて貰ふとして、手廻の物だけ纏めて行かうといふのであつた。芳子は自分の二階に上つて、其の儘荷物の整理に取懸つた。

時雄の胸は激して居つたが、以前よりは輕快であつた。二百餘里の山川を隔てゝ、もう其の美しい表情をも見ることが出來なくなると思ふと、言ふに言はれぬ侘しさを感ずるが、其の戀せる女を競爭者の手

に就いては、誓つて何人にも沈默を守る。兎に角、あなたが師として私を信頼した態度は新しい日本の女として恥しくない。けれどかうなつては、あなたが國に歸るのが至當だ。今夜――これから直ぐ父樣の處に行きませう、そして一伍一什を話して、早速、國に歸るやうにした方が好い。』

で、飯を食ひ了るとすぐ、支度をして家を出た。芳子の胸にさまぐ\の不服、不平、悲哀が溢れたであらうが、しかも時雄の嚴なる命令に背くわけには行かなかつた。市ヶ谷から電車に乘つた。二人相並んで座を取つたが、しかも一語をも言葉を交へなかつた。山下門で下りて、京橋の旅館に行くと、父親は都合よく在宅して居た。一伍一什――父親は特に怒りもしなかつた。唯同行して歸國するのを成べく避けたいらしかつたが、しかもそれより他に路は無かつた。芳子は泣きも笑ひもせず、唯、運命の奇しきに呆るゝといふ風であつた。時雄は捨てた積りで芳子を自分に任せることは出來ぬかと言つたが、父親は當人が親を捨てゝもといふならばいざ知らず、普通の狀態に於いては無論許さうとは爲なかつた。芳子も亦親を捨てゝまでも、歸國を拒むほどの決心が附いて居らなかつた。で、時雄は芳子を父親に預けて歸宅した。

十

田中は翌朝時雄を訪うた。かれは大勢の既に定まつたのを知らずに、己の事情の歸國に適せぬことを

先生

私は墮落女學生です。私は先生の御厚意を利用して、先生を欺きました。其の罪はいくらお詫びしても許されませぬほど大きいと思ひます。先生、何うか弱いものと思つてお憐れみ下さい。先生に教へて頂いた新しい明治の女子としての務め、それを私は行つて居りませんでした。矢張、私は舊派の女、新しい思想を行ふ勇氣を持つて居りませんでした。私は田中に相談しまして、何んなことがあつても此の事ばかりは人に打明けまい。過ぎたことは爲方が無いが、これからは清淨な戀を續けようと約束したのです。けれど、先生、先生の御煩悶が皆な私の至らない爲めであると思ひますと、ぢつとしては居られません。今日は終日其のことで胸を痛めました。何うか先生、此の憐れなる女をお憐み下さいまし。先生にお縋り申すより他、私には道が無いので御座います。

芳子

先生おもと

時雄は今更に地の底に此身を沈めらるゝかと思つた。手紙を持つて立上つた。其の激した心には、芳子が此の懺悔を敢てした理由——總てを打明けて縋らうとした態度を解釋する餘裕が無かつた。二階の階梯をけたゝましく踏鳴らして上つて、芳子の打伏して居る机の傍に嚴然として坐つた。

『かうなつては、もう爲方がない。私はもう何うすることも出來ぬ。此の手紙は貴孃(あなた)に返す、此の事

て置いた非を悟つた煩悶であつたらしい。午後にちよつと出て來たいと言つたが、社へも行かずに家に居た時雄はそれを許さなかつた。一日はかくて過ぎた。田中から何等の返事もなかつた。

芳子は午飯も夕飯も食べたくないとて食はない。陰鬱な氣が一家に充ちた。細君は夫の機嫌の惡いのと、芳子の煩悶して居るのに胸を痛めて、何うしたことかと思つた。昨日の話の模樣では、萬事圓滿に收まりさうであつたのに……細君は一椀なりと召上らなくては、お腹が空いて爲方があるまいと、それを侑めに二階へ行つた。時雄はわびしい薄暮を苦い顏をして酒を飲んで居た。やがて細君が下りて來た。何うして居たと時雄は聞くと、薄暗い室に洋燈も點けず、書き懸けた手紙を机に置いて打伏して居たとの話。手紙？　誰に遣る手紙？　時雄は激した。そんな手紙を書いたつて駄目だと宣告しようと思つて、足音高く二階に上つた。

『先生、後生ですから。』

と祈るやうな聲が聞えた。机の上に打伏したまゝである。『先生、後生ですから、もう、少し待つて下さい。手紙に書いて、さし上げますから。』

時雄は二階を下りた。暫くして下女は細君に命ぜられて、二階に洋燈を點けに行つたが、下りて來る時、一通の手紙を持つて來て、時雄に渡した。

時雄は渴した心を以て讀んだ。

の節操を尊ぶには當らなかつた。自分も大膽に手を出して、性慾の滿足を買へば好かつた。かう思ふと、今迄上天の境に置いた美しい芳子は、賣女か何ぞのやうに思はれて、其の體は愚か、美しい態度も表情も卑しむ氣になつた。で、其の夜は悶え悶えて殆ど眠られなかつた。樣々の感情が黑雲のやうに胸を通つた。其の胸に手を當てゝ時雄は考へた。いつそかうして吳れようかと思つた。何うせ、男に身を任せて汚れて居るのだ。此の儘かうして、男を京都に歸して、其の弱點を利用して、自分の自由にしようかと思つた。と、種々なことが頭腦に浮ぶ。芳子が其の二階に泊つて寢て居た時、もし自分がこつそり其の二階に登つて行つて、遣瀨なき戀を語つたら何うであらう。危坐して自分を諫るかも知れぬ。聲を立てゝ人を呼ぶかも知れぬ。それとも又せつない自分の情を汲んで犧牲になつて吳れるかも知れぬ。さて犧牲になつたとして、翌朝は何うであらう、明かな日光を見ては、流石に顏を合せるにも忍びぬに相違ない。日長けるまで、朝飯をも食はずに寢て居るに相違ない。其の時、モウパッサンの『父』といふ短篇を思ひ出した。ことに少女が男に身を任せて後烈しく泣いたことの書いてあるのを痛切に感じたが、それを又今思ひ出した。かと思ふと、此の暗い想像に抵抗する力が他の一方から出て、盛にそれと爭つた。で、煩悶又煩悶、懊惱また懊惱、寢返を幾度となく打つて二時、三時の時計の音をも聞いた。

芳子も煩悶したに相違なかつた。朝起きた時は蒼い顏を爲て居た。朝飯をも一椀で止した。成たけ時雄の顏に逢ふのを避けて居る樣子であつた。芳子の煩悶は其の秘密を知られたといふよりも、それを隱し

『あの頃の手紙は此の間皆な燒いて了ひましたから。』其の聲は低かつた。

『燒いた？』

『え〻。』

芳子は顏を俛れた。

『燒いた？　そんなことは無いでせう。』

芳子の顏は愈〻赧くなつた。時雄は激さざるを得なかつた。事實は恐しい力でかれの胸を刺した。

時雄は立つて厠に行つた。胸は苛々して、頭腦は眩惑するやうに感じた。欺かれたといふ念が烈しく心頭を衝いて起つた。厠を出ると、其處に――障子の外に、芳子はおどおどした樣子で立つて居る。

『先生――本當に、私は燒いて了つたのですから。』

『うそをお言ひなさい、』と、時雄は叱るやうに言つて、障子を烈しく閉めて室内に入つた。

九

父親は夕飯の馳走になつて旅宿に歸つた。時雄の其の夜の煩悶は非常であつた。欺かれたと思ふと、業が煮えて爲方が無い。否、芳子の靈と肉――其の全部を一書生に奪はれながら、兎に角其の戀に就いて眞面目に盡したかと思ふと腹が立つ。其の位なら――あの男に身を任せて居た位なら、何も其の處女

『何うもさういふ處がありますナ。』

『見て居さつしやい、明日屹度快諾しやあせんけえ、何の彼のと理窟をつけて、歸るまいとするけえ。』

時雄の胸に、ふと二人の關係に就いての疑惑が起つた。男の烈しい主張と芳子を己が所有とする權利があるやうな態度とは、時雄に此の疑惑を起さしむるの動機となつたのである。

『で、二人の間の關係を何う御觀察なすつたです。』

時雄は父親に問うた。

『さうですな。關係があると思はんけりやなりますまい。』

『今の際、確めて置く必要があると思ふですが、芳子さんに、嵯峨行の辯解をさせませうか。今度の戀は嵯峨行の後に始めて感じたことだと言うてましたから、其證據になる手紙があるでせうから。』

『まア、其處までせんでも……』

父親は關係を信じつゝもその事實となるのを恐れるらしい。

運惡く其處に芳子は茶を運んで來た。

時雄は呼留めて、其の證據になる手紙があるだらう、其の身の潔白を證する爲めに、其の前後の手紙を見せ給へと迫つた。

これを聞いた芳子の顏は俄かに赧くなつた。さも困つたといふ風が歷々として顏と態度とに顯はれた。

でせう。』

『宗教家にはもうとてもようなりまえん。人に對つて教を說くやうな豪い人間ではないでおますで…
…それに、殘念ですのは、三月の間苦勞しまして、實は漸くある親友の世話で、衣食の道が開けました
で……田舍に埋れるには忍びまえんで。』

三人は猶語つた。話は遂に一小段落を告げた。田中は今夜親友に相談して、明日か明後日までに確乎た
る返事を齎らさうと言つて、一先づ歸つた。時計はもう午後四時、冬の日は暮近く、今迄室の一隅に照つ
て居た日影もいつか消えて了つた

一室は父親と時雄と二人になつた。

『何うも煮え切らない男ですわい。』と父親はそれとなく言つた。

『何うも形式的で、甚だ要領を得んです。もう少し打明けて、ざつくばらんに話して吳れると好いで
すけれど……』

『何うも中國の人間はさうは行かんですけえ、人物が小さくつて、小細工で、すぐ人の股を潛らうと
するですわい。關東から東北の人は丸で違ふですがナァ。惡いのは惡い、好いのは好いと、眞情を吐露
して了ふけえ、好いですけどもナ。何うもいかん。小細工で、小理窟で、めそ〳〵泣き居つた……』

『私などは何うなつても好うおます。田舍に埋れても構はんです!』

また涙を拭つた。

『それではいかん。さう反抗的に言つたつて爲方がない。腹の底を打明けて、互に不滿足のないやうにしようとする爲めのこの會合です。君がたつて、田舍に歸るのが厭だとならば、芳子を國に歸すばかりです。』

『二人一緒に東京に居ることは出來んですか?』

『それは出來ん。監督上出來ん。二人の將來の爲めにも出來ん。』

『それでは田舍に埋れてもようおます!』

『いゝえ、私が歸ります。』と芳子も涙に聲を震はして、『私は女……女です……あなたさへ成功して下されば、私は田舍に埋れても構やしません、私が歸ります。』

一座はまた沈默に落ちた。

暫くしてから、時雄は調子を改めて、

『それにしても、君は何うして京都に歸れんのです。神戸の恩人に一伍一什を話して、今迄の不心得を謝して、同志社に戻つたら好いぢやありませんか。芳子さんが文學志願だから、君も文學家にならんければならんといふやうなことはない。宗教家として、神學者として、牧師として大に立つたなら好い

私が一時を瞞着して、芳を他に嫁けるとか言ふのやなら、それは不滿足ぢやらう。けれど私は神に誓つて言ふ、先生を前に置いて言ふ、三年は芳を私から進んで嫁に遣るやうなことはせんぢや。人の世はヱホバの思召次第、罪の多い人間は其の力ある審判を待つより他に爲方が無いけえ、私は芳は君に進ずるとまで言ふことは出來ん。今の心が許さんけえ、今度のことは、神の思召に適つて居ないと思ふけえ。三年經つて、神の思召に適ふか何うか、それは今から豫言は出來んが、君の心が、眞實眞面目で誠實であつたなら、必ず神の思召に適ふことゝ思ふぢや。』

『あれほどお父さんが解つて居らつしやる、』と時雄は父親の言葉を受けて、『三年、君が爲めに待つ。君を信用するに足りる三年の時日を君に與へると言はれたのは、實に此の上ない恩惠でせう。人の娘を誘惑するやうな奴には眞面目に話をする必要がないと言つて、此の儘芳子をつれて歸られても、君は一言も恨むせきはないのですのに、三年待たう、君の眞心の見えるまでは、芳子を他に嫁けるやうなことはすまいと言ふ。實に恩惠ある言葉だ。許可すると言つたより一層恩義が深い。君はこれが解らんですか。』

田中は低頭いて顔をしかめると思つたら、涙がはら〳〵と其の頰を傳つた。

一座は水を打つたやうに靜かになつた。

田中は溢れ出づる涙を手の拳で拭つた。時雄は今ぞ時と、

『何うです、返事を爲給へ。』

て居たが、あれほどに言ふお父さんの言葉が解らんですか。お父さんは、君の罪をも問はず、破廉恥をも問はず、將來もし緣があつたら、此の戀愛を承諾せぬではない。君もまだ年が若い、芳子さんも今修業最中である。だから二人は今暫く此の戀愛問題を未解決の中に其の儘にして置いて、そして其の行末を見ようと言ふのが解らんですか。今の場合、二人は何うしても一緒には置かれぬ。何方か此の東京を去らなくつてはならん。此の東京を去るといふことに就いては、君が先づ去るのが至當だ。何故かと謂へば、君は芳子の後を追うて來たのだから。』

『よう解つて居ります、』と田中は答へた。『私が惡いのでございますから、私が一番に去らなければなりません。先生は今、此の戀愛を承諾して下されぬではないと仰しやつたが、お父樣の先程の御言葉では、まだ滿足致されぬやうなわけでして……』

『何ういふ意味です。』

と時雄は反問した。

『本當に約束せぬといふのが不滿だと言ふのですぢやらう、』と、父親は言葉を入れて、『けれど、これは先程もよく話した筈ぢやけえ。今の場合、許可、不許可といふことは出來ぬぢや。獨立することも出來ぬ修業中の身で、二人一緒に此の世の中に立つて行かうと言やるは、何うも不信用ぢや。だから私は今三四年はお互に勉强するが好いぢやと思ふ。眞面目ならば、かうまで言つた話は解らんけりやならん。

つて居るといふ風に見えて居た。

談話は眞面目に且つ烈しかつた。父親は其の破廉恥を敢て正面から責めはしないが、をり〳〵にがい皮肉を其の言葉の中へ交へた。初めは時雄が口を切つたが、中頃から重に父親と田中とが語つた。父親は縣會議員をした人だけあつて、言葉の抑揚頓挫が中々巧みであつた。演說に慣れた田中も時々沈默させられた。二人の戀の許可不許可も問題に上つたが、それは今研究すべき題目でないとして却けられ、當面の京都歸還問題が論ぜられた。

戀する二人――殊に男に取つては、此の分離は甚だつらいらしかつた。男は宗敎的資格を全く失つたといふこと、歸るべく家を國をも持たぬといふこと、二三月來飄零の結果漸く東京に前途の光明を認め始めたのに、それを捨てゝ去るに忍びぬといふことなぞを楯として、頻りに歸國の不可能を主張した。

父親は懇々として說いた。

『今更京都に歸れないといふ、それは歸れないに違ひない。けれど今の場合である。愛する女子なら其の女子の爲めに犧牲になれぬといふことはあるまいぢや。京都に歸れないから田舍に歸る。歸れば自分の目的が達せられぬといふが、其處を言ふのぢや。其處を犧牲になつても好からうと言ふのぢや。』

田中は默して下を向いた。容易に諾しさうにも無い。

先程から默つて聞いて居た時雄は、男が餘りに頑固なのに、急に聲を勵して『君、僕は先程から聞い

『それが好いですな。』

と時雄は言つた。

二人の間柄に就いての談話も一二あつた。時雄は京都嵯峨の事情、其の以後の經過を話し、二人の間には神聖の靈の戀のみ成立つて居て、汚い關係は無いであらうと言つた。父親はそれを聽いて點頭きはしたが、『でもまァ、其方の關係もあるものとして見なければなりますまい、』と言つた。

父親の胸には今更娘に就いての悔恨の情が多かつた。田舍ものの虛榮心の爲めに神戸女學院のやうな、ハイカラな學校に入れて、其の寄宿舍生活を行はせたことや、其の切なる希望を容れて小說を學ぶべく東京に出したことや、多病の爲めに言ふがまゝにして餘り檢束を加へなかつたことや、いろ／＼なことが簇々（むらく）と胸に浮んだ。

一時間後にはわざ／＼迎ひに遣つた田中が此の室に來て居た。芳子も其の傍に庇髮を垂（た）れて談話を聞いて居た。父親の眼に映じた田中は元より氣に入つた人物ではなかつた。其の白縞の袴を着け、紺がすりの羽織を着た書生姿は、輕蔑の念と憎惡の念とを其の胸に漲らしめた。其の所有物を奪つた憎むべき男といふ感じは、曾て時雄が其の下宿で此の男を見た時の感じと甚だよく似て居た。

田中は袴の襞を正して、しやんと坐つた儘、多く二尺先位の疊をのみ見て居た。服從といふ態度より反抗といふ態度が歷々（りく）として居た。何うも少し固くなり過ぎて、芳子を自分の自由にする或る權利を持

れには其者の身分も調べて、此方の身分との釣合も考へなければなりませんし、血統を調べなければなりません。それに人物が第一です。貴方の御覽になる所では、秀才だとか仰しやつてですが……』
『いや、左樣言ふわけでも無かつたです。』
『一體、人物は何ういふ……』
『それは却つて母さんなどが御存じだと言ふことですが。』
『何ァに、須磨の日曜學校で一二度會つたことがある位、妻もよく知らん相ですけえ。何でも神戶では多少秀才とか何とか言はれた男で、芳は女學院に居る頃から知つて居るのでせうがナ。說敎や祈禱などを遣らせると、大人も及ばぬやうな巧いことを遣り居つた相ですけえ。』
『それで話が演說調になるのだ、形式的になるのだ、あの厭な上目を使ふのは、祈禱をする時の表情だ、』と時雄は心の中に合點した。あの厭な表情で若い女を迷はせるのだなと續いて思つて厭な氣がした。
『それにしても、結局は何うしませう？　芳子さんを伴れてお歸りになりますか。』
『されば……成たけは連れて歸り度くないと思ひますがナ。村に娘を伴れて突然歸ると、何ゝも際立つて面白くありません。私も妻も種々村の慈善事業や名譽職などを遣つて居りますけえ、今度のことなどがぱつとしますと、非常に困る場合もあるです……で、私は、あなたの仰しやる通り、出來得べくば、男を元の京都に歸して、此處一二年、娘は猶お世話になり度いと存じて居りますぢやが……、』

『贊成しようにもしまいにも、まだ問題になり居りませんけえ。今、假に許して、二人一緒にするに致しても、男が二十二で、同志社の三年生では……。』

『それは、左樣ですが、人物を御覽の上、將來の約束でも……』

『いや、約束など〻、そんなことは致しますまい。私は人物を見たわけでありませんけえ、よく知りませんけどナ、女學生の上京の途次を要して途中に泊らせたり、年來の恩ある神戸教會の恩人を一朝にして捨て去つたりするやうな男ですけえ、とても話にはならぬと思ひますぢや。此の間、芳から母へよこした手紙に、其の男が苦しんで居るぢやで、何うか御察し下すつて、私の學費を少くしても好いから、早稻田に通ふ位の金を出して吳れと書いてありましたけな、何かさういふ計畫で、芳がだまされて居るんではないですかな。』

『そんなことは無いでせうと思ふですが……』

『何うも怪しいことがあるです。芳子と約束が出來て、すぐ宗敎が厭になつて文學が好きになつたと言ふのも可笑しし、其の後をすぐ追つて出て來て、貴方などの御說諭も聞かずに、衣食に苦しんでまでも此の東京に居るなども意味がありげ相ですわい。』

『それは戀の惑溺であるかも知れませんから善意に解釋することも出來ますが、』

『それにしても許可するのせぬのとは問題になりませんけえ、結婚の約束は大きなことでして……そ

も兄弟に申譯が無からうと思つた……』

芳子は頭を垂れて默つて居た。

『それは危險でした。それでも別にお怪我もなくつて結構でした。』

『え、まァ。』

父親と時雄は暫くその機關破裂のことに就いて語り合つた。不圖、芳子は、

『お父樣、家では皆な變ることは御座いません？』

『うむ、皆な達者ぢや。』

『母さんも……』

『うむ、今度も私が忙しいけえナ、母に來て貰ふやうに言うてぢやつたが、矢張、私の方が好いぢやらうと思つて……』

『兄さんも御達者？』

『うむ、あれも此の頃は少し落附いて居る。』

彼是する中に、午飯の膳が出た。芳子は自分の室に戻つた。食事を終つて、茶を飲みながら、時雄は前からの其の問題を語り續けた。

『で、あなたは何うして不贊成？』

芳子は遂に父親の前に出た。鬚多く、威厳のある中に何處となく優しい處のある懐かしい顔を見ると、芳子は涙の漲るのを禁め得なかつた。舊式な頑固な爺、若いものゝ心などの解らぬ爺、それでも此の父は優しい父であつた。母親は萬事に氣が附いて、よく面倒を見て呉れたけれど、何故か芳子には母よりも此の父の方が好かつた。其の身の今の窮迫を訴へ、泣いて此の戀の眞面目なのを訴へたなら父親もよもや動かされぬことはあるまいと思つた。

『芳子、暫くぢやッたのう……體は丈夫かの？』

『お父さま……』芳子は後を言ひ得なかつた。

『今度來ます時に……』と父親は傍に坐つて居る時雄に語つた。『佐野と御殿場でしたかナ、汽車に故障がありましてナ、二時間ほど待ちましした。機關が破裂しましてナ。』

『それは……』

『全速力で進行して居る中に、凄じい音がしたと思ひましたけえ、汽車が夥しく傾斜してだら〳〵と逆行しましてナ、何事かと思ひました。機關が破裂して火夫が二人とか卽死した……』

『それは危險でしたナ。』

『沼津から汽關車を持つて來てつけるまで二時間も待ちましたけえ、其の間もナ、思ひまして……これの爲めにかうして東京に來て居る途中、もしもの事でもあつたら、芳（と今度は娘の方を見て）お前

と芳子も流石にはつとした。

其の儘二階に上つたが下りて來ない。

奥で、『芳子は？』と呼ぶので、細君が下から呼んで見たが返事がない。登つて行つて見ると、芳子は机の上に打伏して居る。

『芳子さん。』

返事が無い。

傍に行つて又呼ぶと、芳子は靑い神經性の顏を擡げた。

『奥で呼んで居ますよ。』

『でもね、奥さん、私は何うして父に逢はれるでせう。』

泣いて居るのだ。

『だツて、父樣に久し振ぢやありませんか。何うせ逢はないわけには行かんのですもの。何ァにそんな心配をすることはありませんよ、大丈夫ですよ。』

『だツて、奥さん。』

『本當に大丈夫ですから、しつかりなさいよ、よくあなたの心を父樣にお話しなさいよ。本當に大丈夫ですよ。』

一日二日、時雄は其の手紙の備中の山中に運ばれて行くさまを想像した。四面山で圍まれた小さな田舍町、其の中央にある大きな白壁造、そこに郵便脚夫が配達すると、店に居た男がそれを奥へ持つて行く。丈の高い、髯のある主人がそれを讀む――運命の力は一刻毎に迫つて來た。

八

十日に時雄は東京に歸つた。

其の翌日、備中から返事があつて、二三日の中に父親が出發すると報じて來た。

芳子も田中も今の際、寧ろそれを希望して居るらしく、別にこれと云つて驚いた樣子もなかつた。

父親が東京に着いて、先づ京橋に宿を取つて、牛込の時雄の宅を訪問したのは十六日の午前十一時頃であつた。丁度日曜で、時雄は宅に居た。父親はフロックコートを着て、中高帽を冠つて、長途の旅行に疲れたといふ風であつた。

芳子は其日醫師へ行つて居た。三日ほど前から風邪を引いて、熱が少しあつた。頭痛がすると言つて居た。間もなく歸つて來たが、裏口から何の氣なしに入ると、細君が『芳子さん、芳子さん、大變よ、お父さんが來てよ。』

『お父さん。』

る生活の花でもあり又糧でもあつた。芳子の美しい力に由つて、荒野の如き胸に花咲き、錆び果てた鐘は再び鳴らうとした。芳子の爲めに、復活の活氣は新しく皷吹された。であるのに再び寂寞荒凉たる以前の平凡なる生活にかへらなければならぬとは……不平よりも、嫉妬よりも、熱い熱い涙がかれの頰を傳つた。

かれは眞面目に芳子の戀と其の一生とを考へた。二人同棲して後の倦怠、疲勞、冷酷を自己の經驗に照らして見た。そして一たび男子に身を任せて後の女子の境遇の憐むべきを思ひ遣つた。自然の最奥に祕める暗黑なる力に對する厭世の情は今彼の胸を簇々として襲つた。

眞面目なる解決を施さなければならぬといふ氣になつた。今迄の自分の行爲の甚だ不自然で不眞面目であるのに思ひついた。時雄は其の夜、備中の山中にある芳子の父母に寄する手紙を熱心に書いた。芳子の手紙を其の中に卷込んで、二人の近況を詳しく記し、最後に、

父たる貴下と師たる小生と當事者たる二人と相對して、此の問題を眞面目に議すべき時節到來せりと存候、貴下は父としての主張あるべく、芳子は芳子としての自由あるべく、小生また師としての意見有之候、御多忙の際には有之候へども、是非々々御出京下され度、幾重にも希望仕候。

と書いて筆を結んだ。封筒に收めて備中國新見町横山兵藏樣と書いて、傍に置いて、ぢつとそれを見入つた。此の一通が運命の手だと思つた。思ひ切つて婢を呼んで渡した。

べき戀の報酬を受けた。時雄は芳子の爲めに飽まで辯明し、汚れた目的の爲めに行はれたる戀でないことを言ひ父母の中一人、是非出京して此の問題を解決して貰ひたいと言ひ送つた。けれど故鄕の父母は、監督者なる時雄がさういふ主張であるのと、到底其の口から許可することが出來ぬのとで、上京しても無駄であると云つて出て來なかつた。

時雄は今、芳子の手紙に對して考へた。

二人の狀態は最早一刻も猶豫すべからざるものとなつて居る。時雄の監督を離れて二人一緖に暮し度いといふ大膽な言葉、其の言葉の中には警戒すべき分子の多いのを思つた。いや、旣に一步を進めて居るかも知れぬと思つた。又一面にはこれほど其の爲めに盡力して居るのに、其の好意を無にして、かういふ決心をするとは義理知らず、情知らず、勝手にするが好いとまで激した。

時雄は胸の轟きを靜める爲め、月朧なる利根川の堤の上を散步した。月が暈を帶びた夜は冬ながらやや暖かく、土手下の家々の窓には平和な燈火が靜かに輝いて居た。川の上には薄い靄が懸つて、をりをり通る船の艫の音がギイと聞える。下流でおーいと渡しを呼ぶものがある。舟橋を渡る車の音がとどろに響いてそして又一時靜かになる。時雄は土手を步きながら種々のことを考へた。芳子のことよりは一層痛切に自己の家庭のさびしさといふことが胸を往來した。三十五六歲の男女の最も味ふべき生活の苦痛、事業に對する煩惱、性慾より起る不滿足等が凄じい力で其の胸を壓迫した。芳子はかれの爲めに平凡な

と申せば無慈悲です、勘當されても爲方が御座いません。墮落、墮落と申して、殆ど齒ひせぬばかりに申して居りますが、私達の戀はそんなに不眞面目なもので御座いませうか。それに、家の門地門地と申しますが、私は戀を父母の都合によつて致すやうな舊式の女でないことは先生もお許し下さるでせう。先生。

私は決心致しました。昨日、上野圖書館で女の見習生が入用だといふ廣告がありましたから、應じて見ようと思ひます。二人して一生懸命に働きましたら、まさかに餓ゑるやうなことも御座いますまい。先生のお家にかうして居ますればこそ、先生にも奥樣にも御心配を懸けて濟まぬので御座います。何うか先生、私の決心をお許し下さい。

芳子

先生おんもとへ

戀の力は遂に二人を深い惑溺の淵に沈めたのである。時雄はもうかうしては置かれぬと思つた。時雄が芳子の歡心を得る爲めに取つた『溫情の保護者』としての態度を考へた。備中の父親に寄せた手紙、其の手紙には、極力二人の戀を庇保して、何うしても此の戀を許して貰はねばならぬといふ主旨であつた。時雄は父母の到底これを承知せぬことを知つて居た。寧ろ父母の極力反對することを希望して居た。父母は果して極力反對して來た。言ふことを聞かぬなら勘當するとまで言つて來た。二人はまさに受く

た。時雄は机の上に一通の封書を展いて、深く其の事を考へて居た。其の手紙は今少し前、旅館の下女が置いて行つた芳子の筆である。

先生。

まことに、申譯が御座いません。先生の同情ある御恩は決して一生經つても忘るゝことでなく、今も其のお心を思ふと、涙が滴るゝのです。

父母はあの通りです。先生があのやうに仰しやつて下すつても、舊風の頑固で、私共の心を汲んで呉れやうとも致しませず、泣いて訴へましたけれど、許して呉れません。母の手紙を見れば泣かずには居られませんけれど、少しは私の心も汲んで呉れても好いと思ひます。戀とはかう苦しいものかと今つく〴〵思ひ當りました。先生、私は決心致しました。聖書にも女は親に離れて夫に従ふと御座います通り、私は田中に從はうと存じます。

田中は未だ生活のたつきを得ませず、準備した金は既に盡き、昨年の暮れは、うらぶれの悲しい生活を送つたので御座います。私はもう見て居るに忍びません。國からの補助を受けませんでも、私等は私等二人で出來るまで此の世に生きて見ようと思ひます。先生に御心配を懸けるのは、まことに濟みません。監督上、御心配なさるのも御尤もです。けれど折角先生があのやうに私等の爲めに國の父母をお說き下すつたにも係らず、父母は唯無意味に怒つてばかり居て、取合つて呉れませんのは、餘り

るやうになつたのは此頃であつた。時雄は監督上見るに見かねて、芳子を說勸めて、此一伍一什を故鄕の父母に報ぜしめた。そして時雄も此の戀に關しての長い手紙を芳子の父に寄せた。此の場合にも時雄は芳子の感謝の情を十分贏ち得るやうに勉めた。時雄は心を欺いて――悲壯なる犧牲と稱して、此の戀の『溫情なる保護者』となつた。

備中の山中から數通の手簡が來た。

七

其翌年の一月には、時雄は地理の用事で、上武の境なる利根河畔に出張して居た。彼は昨年の年末から此の地に來て居るので、家のこと――芳子のことが殊に心配になる。さりとて公務を如何ともすることが出來なかつた。正月になつて二日にちよいと歸京したが、其の時は次男が齒を病んで、妻と芳子とが頻りにそれを介抱して居た。妻に聞くと、芳子の戀は更に惑溺の度を加へた樣子。大晦日の晩に、田中が生活のたつきを得ず、下宿に歸ることも出來ずに、終夜運轉の電車に一夜を過したといふこと、餘り頻繁に二人が往來するので、それをそれとなしに注意して芳子と口爭ひをしたといふこと、其の他種々のことを聞いた。困つたことだと思つた。一晩泊つて再び利根の河畔に戻つた。

今は五日の夜であつた。茫とした空に月が暈を帶びて、其の光が川の中央にきら〳〵と金を碎いて居

た。二人の相逢ふことを妨げることは絶對に不可能である。手紙は無論差留ることは出來ぬし、『今日ちよつと田中に寄つて參りますから、一時間遲くなります、』と公然と斷つて行くのを何うかう言ふ譯には行かなかつた。また其男が訪問して來るのを非常に不快に思ふけれど、今更それを謝絕することも出來なかつた。時雄はいつの間にか、この二人から其の戀に對しての『溫情の保護者』として認められて了つた。

時雄は常に苛々して居た。書かなければならぬ原稿が幾種もある。書肆からも催促される。金も欲しい。けれど何うしても筆を執つて文を綴るやうな沈着いた心の狀態にはなれなかつた。强ひて試みて見ることがあつても、考が纏らない。本を讀んでも二頁も續けて讀む氣になれない。二人の戀の溫かさを見る度に、胸を燃して、罪もない細君に當り散らして酒を飮んだ。晩餐の菜が氣に入らぬと云つて、膳を蹴飛した。夜は十二時過ぎに醉つて歸つて來ることもあつた。芳子はこの亂暴な不調子な時雄の行爲に尠なからず心を痛めて、『私がいろ〳〵御心配を懸けるもんですからね、私が惡るいんですよ、』と詫びるやうに細君に言つた。芳子は成るたけ手紙の往復を人に見せぬやうにし、訪問も三度に一度は學校を休んでこつそり行くやうにした。時雄はそれに氣が附いて一層懊惱の度を增した。

野は秋も暮れて木枯の風が立つた。裏の森の銀杏樹も黃葉して夕の空を美しく彩つた。垣根道には反かへつた落葉ががさ〳〵と轉がつて行く。鵙の鳴音がけたゝましく聞える。若い二人の戀が愈々人目に餘

『芳子さん、何だか變ね。』
『何故？』と長く引張る。
『何故もないわ。』
『いゝことよ、奧さん。』
と又睨んだ。
時雄は默つて此の嬌態に對して居た。胸の騷ぐのは無論である。不快の情はひしと押寄せて來た。芳子はちらと時雄の顏を覗つたが、其の不機嫌なのが一目で解つた。で、すぐ態度を改めて、
『先生、今日田中が參りましてね。』
『さうだつてね。』
『お目にかゝつてお禮を申上げなければならんのですけれども、又改めて上がりますからッて……よろしく申上げて……』
『さうか。』
と言つたが、其のまゝふいと立つて書齋に入つて了つた。
其の戀人が東京に居ては、假令自分が芳子を二階に置いて監督しても、時雄は心を安んずる暇はなかつ

時雄は顔を曇せた。

夕飯を食つて居ると、裏口から芳子が歸つて來た。急いで走つて來たと覺しく、せいせい息を切つて居る。

『何處まで行らしつた？』

と細君が問ふと、

『神樂坂まで、』と答へたが、いつもする『おかへりなさいまし』を時雄に向つて言つて、そのまゝばたばたと二階に上つた。すぐ下りて來るかと思ふに、なか〳〵下りて來ない。『芳子さん、芳子さん』と三度ほど細君が呼ぶと、『はアーい』といふ長い返事が聞えて、矢張下りて來ない。お鶴が迎へに行つて漸く二階を下りて來たが、準備(したく)した夕飯の膳を他所(よそ)に、柱に近く、斜に坐つた。

『御飯は？』

『もう食べたくないの、腹(おなか)が一杯で。』

『餘りおさつを召上つたせゐでせう。』

『あら、まア、酷い奥さん。いゝわ、奥さん。』

と睨む眞似をする。

細君は笑つて、

てね、私の其の頃には男に見られるのすら恥かしくつて恥かしくつて爲方がなかつたものですのに……』

『時代が違ふからナ。』

『いくら時代が違つても、餘り新派過ぎると思ひましたよ。墮落書生と同じですからね。それやうはべが似て居るだけで、心はそんなことはないでせうけれど、何だか變ですよ。』

『そんなことは何うでも好い。それで何うした？』

『お鶴(下女)が行つて上げると言ふのに、好いと言つて、御自分で出かけて、餅菓子と燒芋を買つて來て、御馳走してよ……お鶴も笑つて居ましたよ。お湯をさしに上ると、二人でお旨しさうにおさつを食べて居るところでしたつて……。』

時雄も笑はざるを得なかつた。

細君は猶語り續いだ。『そして隨分長く高い聲で話して居ましたよ。議論見たいなことも言つて、芳子さんもなかなか負けない樣子でした。』

『そしていつ歸つた？』

『もう少し前。』

『芳子は居るか。』

『いゝえ、路が分らないから、一緒に其處まで送つて行つて來るッて出懸けて行つたんですよ。』

『今日來てよ。』

『誰が。』

『二階の……そら芳子さんの好い人。』

細君は笑つた。

『さうか……』

『今日一時頃、御免なさいと玄關に來た人があるですから、私が出て見ると、顔の丸い、絣の羽織を着た、白縞の袴を穿いた書生さんが居るぢやありませんか。また、原稿でも持つて來た書生さんかと思つたら、横山さんは此方においでですかと言ふぢやありませんか。はて、不思議だと思つたけれど、名を聞きますと、田中……。はァ、それで其の人だナと思つたんですよ。厭な人ねえ、あんな人を、あんな書生さんを戀人にしないたツて、いくらも好いのがあるでせうに。芳子さんは餘程物好ね。あれぢやとても望みはありませんよ。』

『それで何うした？』

『芳子さんは嬉しいんでせうけど、何だか極りが惡さうでしたよ。私がお茶を持つて行つて上げると、芳子さんは机の前に坐つて居て、其の前に其の人が居て、今迄何か話して居たのを急に止して默つて了つた。私は變だからすぐ下りて來たですがね……何だか變ね……今の若い人はよくあゝいふことが出來

『實は先生に御縋り申して、誰も知つてるものがないのに出て參りましたのですから、大層失望したのですけれど。』

『だツて餘り突飛だ。一昨日逢つてもさう思つたが、何うもあれでも困るね。』

と時雄は笑つた。

『何うか又御心配下さるやうに……此の上御心配かけては申譯がありませんけれど、』と芳子は縋るやうにして顏を顰めた。

『心配せん方が好い、何うかなるよ。』

芳子が出て行つた後、時雄は急に險しい難かしい顏に成つた。『自分に……自分に、此の戀の世話が出來るだらうか、』と獨りで胸に反問した。『若い鳥は若い鳥でなくては駄目だ。自分等はもうこの若い鳥を引く美しい羽を持つて居ない。』かう思ふと、言ふに言はれぬ寂しさがひしと胸を襲つた。『妻と子――家庭の快樂だと人は言ふが、それに何の意味がある。子供の爲めに生存して居る妻は生存の意味があらうが、妻を子に奪はれ、子を妻に奪はれた夫は何うして寂寞たらざるを得るか。』時雄はぢつと洋燈を見た。

机の上にはモウパツサンの『死よりも強し』が開かれてあつた。

二三日經つて後、時雄は例刻に社から歸つて火鉢の前に坐ると、細君が小聲で、

る女の行爲に其の節操を疑つては居るが、一方には又其の辯解をも信じて、此の若い二人の間にはまだそんなことはあるまいと思つて居た。自分の青年の經驗に照らして見ても、神聖なる靈の戀は成立つても肉の戀は決してさう容易に實行されるものではない。で、時雄は惑溺せぬものならば、暫く此の儘にして置いて好いと言つて、そして縷々として靈の戀愛、肉の戀愛、戀愛と人生との關係、教育ある新しい女の當に守るべきことなどに就いて、切實に且つ眞摯に教訓した。古人が女子の節操を誡めた社會道徳の制裁よりは、寧ろ女子の獨立を保護する爲であるといふこと、一度肉を男子に許せば女子の自由が全く破れるといふこと、西洋の女子はよく此間の消息を解して居るから、男女交際をして不都合がないといふこと、日本の新しい婦人も是非共さうならなければならぬといふことなど主なる教訓の題目であつたが、殊に新派の女子といふことに就いて痛切に語つた。

芳子は低頭いてきいてゐた。

時雄は興に乘じて、

『そして一體、何うして生活しやうといふのです?』

『少しは準備もして來たんでせう、一月位は好いでせうけれど……』

『何か旨い口でもあると好いけれど。』

と時雄は言つた。

にもないお世辭をも言ひ、自分の胸の底の秘密を蔽ふ爲めには、二人の戀の溫情なる保護者とならうとまで言つたことを思ひ出した。安飜譯の仕事を周旋して貰ふ爲め、某氏に紹介の勞を執らうと言つたことをも思ひ出した。そして自分ながら自分の意氣地なく好人物なのを罵つた。

時雄は幾度か考へた。寧ろ國に報知して遣らうか、と。けれどそれを報知するに、何ういふ態度を以てしやうかといふのが大問題であつた。二人の戀の關鍵を自から握つて居ると信ずるだけそれだけ時雄は責任を重く感じた。其の身の不當の嫉妬、不正の戀情の爲めに、其の愛する女の熱烈なる戀を犧牲にするには忍びぬと共に、自から言つた『溫情なる保護者』として、道德家の如く身を處するにも堪へなかつた。また一方には此の事が國に知れて芳子が父母の爲めに伴はれて歸國するやうになるのを恐れた。

芳子が時雄の書齋に來て、頭を垂れ、聲を低うして、其の希望を述べたのは其の翌日の夜であつた。如何に說いても男は歸らぬ。さりとて國へ報知すれば、父母の許さぬのは知れたこと、時宜に由れば忽ち迎ひに來ぬとも限らぬ。男も折角あゝして出て來たことでもあり二人の間も世の中の男女の戀のやうに淺く思ひ淺く戀した譯でもないから、決して汚れた行爲などはなく、惑溺するやうなことは誓つて爲ない。文學は難かしい道、小說を書いて一家を成さうとするのは田中のやうなものには出來ぬかも知れねど、同じく將來を進むなら、共に好む道に携はり度い。何うか暫く此の儘にして東京に置いて呉れとの賴みである。時雄は此の餘儀なき賴みを311なく却けることは出來なかつた。時雄は京都嵯峨に於け

『だから困るです。』

かういふ會話――要領を得ない會話を繰返して長く相對した。時雄は將來の希望といふ點、男子の犧牲といふ點、事件の進行といふ點からいろ〳〵さまざまに歸國を勸めた。時雄の眼に映じた田中秀夫は、想像したやうな一箇秀麗な丈夫でもなく、天才肌の人とも見えなかつた。麴町三番町通の安旅人宿、三方壁でしきられた暑い室に始めて相對した時、先づかれの身に迫つたのは、基督教に養はれた、いやに取澄ました、年に似合はぬ老成な、厭な不愉快な態度であつた。京都訛の言葉、色の白い顏、やさしい處はいくらかはあるが、多い青年の中からかうした男を特に選んだ芳子の氣が知れなかつた。殊に時雄が最も厭に感じたのは、天眞流露といふ率直なところが微塵もなく、自己の罪惡にも弱點にも種々の理由を強ひてつけて、これを辯解しやうとする形式的態度であつた。とは言へ、實を言へば、時雄の激じた頭腦には、それがすぐ直覺的に明かに映つたと云ふではなく、座敷の隅に置かれた小さい旅鞄や憐れにもしほたれた白地の浴衣などを見ると、青年空想の昔が思出されて、かうした戀の爲め、煩悶もし、懊惱もして居るかと思つて、憐憫の情も起らぬではなかつた。

此の暑い一室に相對して、趺座(あぐら)をもかゝず、二人は尠くとも一時間以上語つた。話は遂に要領を得なかつた。『先づ今一度考へ直して見給へ』くらゐが最後で、時雄は別れて歸途に就いた。

何だか馬鹿らしいやうな氣がした。愚な行爲をしたやうに感じられて、自から其の身を嘲笑した。心

へで、君は忍んで、京都に居りさへすれば、萬事圓滿に、二人の間柄も將來希望があるのですから。』

『よう解つて居ります……』

『けれど出來んですか。』

『何うも濟みませんけど……制服も帽子も賣つてしまうたで、今更歸るにも歸れませんといふ次第で……』

『それぢや芳子を國に歸すですか。』

かれは默つて居る。

『國に言つて遣りませうか。』

矢張默つて居た。

『私の東京に參りましたのは、さういふことには寧ろ關係しない積でおます。別段こちらに居りましても、二人の間には何うといふ……』

『それは君は左樣言ふでせう。けれど、それでは私は監督は出來ん。戀はいつ惑溺するかも解らん。』

『私はそないなことは無いつもりですけれどナ。』

『誓ひ得るですか。』

『靜かに、勉強して行かれさへすればアナ、そないなことありませんけどナ。』

『本當か？』

『え。』

と細君は笑つた。

時雄は笑ふどころではなかつた。

芳子が今日は先生少し遲くなりますからと顏を赧くして言つた。『彼處に行くのか、』と問ふと、『いゝえ！　一寸、友達の處に用があつて寄つて來ますから。』

其の夕暮、時雄は思切つて、芳子の戀人の下宿を訪問した。

『まことに、先生にはよう申譯がありまえんのやけれど……』長い演說調の雄辯で、形式的の申譯をした後、田中といふ中脊の、少し肥えた、色の白い男が、祈禱をする時のやうな眼色をして、さも同情を求めるやうに言つた。

時雄は熱して居た。『然し、君、解つたら、左樣したら好いぢやありませんか、僕は君等の將來を思つて言ふのです。芳子は僕の弟子です。僕の責任として、芳子に廢學させるには忍びん。君が東京に何うしても居ると言ふなら、芳子を國に歸すか、此の關係を父母に打明けて許可を乞ふか、二つの中一つを選ばんければならん。君は君の愛する女を君の爲めに山の中に埋もらせるほどエゴイスチックな人間ぢやありますまい。君は宗敎に從事することが今度の事件の爲めに厭になつたと謂ふが、それは一種の考

うた。其の男は停車場前のつるやといふ旅館に宿つて居るのである。

時雄が社から歸つた時には、まだとても歸るまいと思つた芳子が既に其の笑顏を玄關にあらはして居た。聞くと田中は既にかうして出て來た以上、何うしても京都には歸らぬとのことだ。で、芳子は殆ど喧嘩をする迄に爭つたが、矢張斷として可かぬ。先生を賴りにして出京したのではあるが、さう聞けば、成程御尤である。監督上都合の惡いといふのもよく解りました。けれど今更歸れませぬから、自分で如何やうにしても自活の道を求めて目的地に進むより他はないとまで言つた相だ。時雄は不快を感じた。

時雄は一時は勝手にしろと思つた。放つて置けとも思つた。けれど圈内の一員たるかれに何うして全く風馬牛たることを得やうぞ。芳子は其の後二三日訪問した形跡もなく、學校の時間には正確に歸つて來るが、學校に行くと稱して戀人の許に寄りはせぬかと思ふと、胸は疑惑と嫉妬とに燃えた。

時雄は懊惱した。其の心は日に幾遍となく變つた。ある時は全く犧牲になつて二人の爲めに盡さうと思つた。ある時は此の一伍一什を國に報じて一擧に破壞して了はうかと思つた。けれどこの何れをも敢てすることの出來ぬのが今の心の狀態であつた。

細君が、ふと、時雄に耳語した。

『あなた、二階では、これよ、』と針で着物を縫ふ眞似をして、小聲で、『屹度……上げるんでせう。紺絣の書生羽織！　白い木綿の長い紐も買つてありますよ。』

だ、空想の極端だ。それに、田中が此方に出て來て居ては、貴孃の監督上、私が非常に困る。貴孃の世話も出來んやうになるから、嚴しく止めて遣んなさい！』

芳子は愈々困つたといふ風で、『止めてはやりますけれど、手紙が行違ひになるかも知れませんから。』

『行違ひ？　それぢやもう來るのか。』

時雄は眼を睜つた。

『今來た手紙に、もう手紙をよこして呉れても行違ひになるからと言つてよこしたですから。』

『今來た手紙ッて、さつきの端書の又後に來たのか。』

芳子は點頭いた。

『困つたね。だから若い空想家は駄目だと言ふんだ。』

平和は再びかき亂さるゝことゝなつた。

六

一日置いて今夜の六時に新橋に着くといふ電報があつた。電報を持つて、芳子はまごまごして居た。けれど夜ひとり若い女を出して遣るわけに行かぬので、新橋へ迎へに行くことは許さなかつた。

翌日は逢つて逢つて諫めて何うしても京都に還らせるやうにすると言つて、芳子は其の戀人の許を訪

『え、左樣でせう……』

『馬鹿な！』

と時雄は一喝した。

『本當に困つて了ふんですの。』

『あなたはそんなこと勸めたんぢやないか。』

『いゝえ、』と烈しく首を振つて、『私はそんなこと……私は今の場合困るから、せめて同志社だけでも卒業して與れッて、此の間初めに申して來た時に達つて止めて遣つたんですけれど……もうすつかり獨斷でさうして了つたんですッて。今更取かへしがつかぬやうになつて了つたんですッて。』

『何うして？』

『神戶の信者で、神戶の敎會の爲めに、田中に學資を出して與れて居る神津といふ人があるのですの。其の人に、田中が宗敎は自分には出來ぬから、將來文學で立たうと思ふ。何うか東京に出して與れと言つて遣つたんですの。すると大層怒つて、それならもう構はぬ、勝手にしろと言はれて、すつかり支度をしてしまつたんですつて、本當に困つて了ひますの。』

『馬鹿な！』

と言つたが、『今一度留めて遣んなさい。小說で立たうなんて思つたッて、とても駄目だ、全く空想

戀人のするやうな甘つたるい言葉は到る處に滿ちて居た。けれど時雄はそれ以上にある祕密を捜し出さうと苦心した。接吻の痕、性慾の痕が何處かに顯はれて居りはせぬか。神聖なる戀以上に二人の間は進歩して居りはせぬか。けれど手紙にも解らぬのは戀のまことの消息であつた。

一ヶ月は過ぎた。

ところが、ある日、時雄は芳子に宛てた一通の端書を受取つた。英語で書いてある端書であつた。何氣なく讀むと、一月ほどの生活費は準備して行く、あとは東京で衣食の職業が見附るか何うかといふ意味、京都田中としてあつた。時雄は胸を轟かした。平和は一時にして破れた。

晩餐後、芳子は其の事を問はれたのである。

芳子は困つたといふ風で、『先生、本當に困つて了つたんですの。田中が東京に出て來ると云ふのですもの、私は二度、三度まで止めて遣つたんですけれど、何だか、宗教に從事して、虛僞に生活してることが、今度の動機で、すつかり厭になつて了つたとか何とかで、何うしても東京に出て來るッて言ふんですよ。』

『東京に來て、何をするつもりなんだ？』

『文學を遣り度いと――』

『文學？　文學ッて、何だ。小説を書かうと言ふのか。』

店には松茸が並べられた。垣の蟲の聲は露に衰へて、庭の桐の葉は脆くも落ちた。午前の中の一時間、九時より十時迄を、ツルゲネーフの小說の解釋、芳子は師のかゞやく眼の下に、机に斜に坐つて、『オン、ゼ、イブ』の長い〳〵物語に耳を傾けた。エレネの感情に烈しく意志の强い性格と、其悲しい悲壯なる末路とは如何にかの女を動かしたか。芳子はエレネの戀物語を自分に引くらべて、其身を小說の中に置いた。戀の運命、戀すべき人に戀する機會がなく、思ひも懸けぬ人に其の一生を任した運命、實際芳子の當時の心情その儘であつた。須磨の濱で、ゆくりなく受取つた百合の花の一葉の端書、それがかうした運命にならうとは夢にも思ひ知らなかつたのである。

雨の森、闇の森、月の森に向つて、芳子はさま〳〵に其の事を思つた。京都の夜汽車、嵯峨の月、膳所に遊んだ時には湖水に夕日が美しく射し渡つて、旅館の中庭に、萩が綿のやうに咲亂れて居た。其の二日の遊は實に夢のやうであつたと思つた。續いてまだ其の人を戀せぬ前のこと、須磨の海水浴、故鄕の山中の月、病氣にならぬ以前、殊に其の時の煩悶を考へると、頰がおのづから赧くなつた。

空想から空想、其の空想はいつか長い手紙となつて京都に行つた。京都からも殆ど隔日のやうに厚い厚い封書が屆いた。書いても書いても盡くされぬ二人の情――餘り其の文通の頻繁なのに時雄は芳子の不在を窺つて、監督といふ口實の下に其の良心を抑へて、こつそり机の抽出やら文箱やらをさがした。捜し出した二三通の男の手簡を走り讀みに讀んだ。

る。時雄は芳子を全く占領して、兎に角安心もし滿足もした。細君も芳子に戀人があるのを知つてから、危險の念、不安の念を全く去つた。

芳子は戀人に別れるのが辛かつた。成らうことなら一緒に東京に居て、時々顏をも見、言葉をも交へたかつた。けれど今の際それは出來難いことゝ知つて居た。二年、三年、男が同志社を卒業する迄は、たまさかの雁の音信をたよりに、一心不亂に勉强しなければならぬと思つた。で、午後から以前の如く麴町の某英學熟に通ひ、時雄も小石川の社に通つた。

時雄は夜などをり〳〵芳子を自分の書齋に呼んで、文學の話、小說の話、それから戀の話をすることがある。そして芳子の爲めに其の將來の注意を與へた。其の時の態度は公平で、率直で、同情に富んで居て、決して泥醉して厠に寢たり、地上に橫はつたりした人とは思はれない。さればと言つて、時雄はわざとさういふ態度にするのではない、女に對つて居る刹那――其の愛した女の歡心を得るには、いかなる犧牲も甚だ高價に過ぎなかつた。

で、芳子は師を信賴した。時期が來て、父母に此の戀を告ぐる時、舊思想と新思想と衝突するやうなことがあつても、此惠み深い師の承認を得さへすればそれで澤山だとまで思つた。

九月は十月になつた。さびしい風が裏の森を鳴らして、空の色は深く碧く、日の光は透通つた空氣に射渡つて、夕の影が濃くあたりを隈どるやうになつた。取り殘した芋の葉に雨は終日降頻つて、八百屋の

『ですから、ね、先生、私は一心になつて勉強しようと思ひますの。田中も左様申して居りました。それから、先生に是非お目にかゝつてお禮を申上げなければ濟まないと申して居りましたけれど……よく申上げて呉れッて……。』

『いや……。』

時雄は芳子の言葉の中に、『私共』と複数を遣ふのと、もう公然許嫁の約束でもしたかのやうに言ふのとを不快に思つた。まだ、十九か二十の妙齢の處女が、かうした言葉を口にするのを怪しんだ。時雄は時代の推移つたのを今更のやうに感じた。當世の女學生氣質のいかに自分等の戀した時代の處女氣質と異つて居るかを思つた。勿論、此の女學生氣質を時雄は主義の上、趣味の上から喜んで見て居たのは事實である。昔のやうな教育を受けては、到底今の明治の男子の妻としては立つて行かれぬ。女子も立たねばならぬ、意志の力を十分に養はねばならぬとはかれの持論である。此の持論をかれは芳子に向つても尠からず鼓吹した。けれどこの新派のハイカラの實行を見ては流石に眉を顰めずには居られなかつた。

男からは國府津の消印で歸途に就いたといふ端書が着いて翌日三番町の姉の家から届けて來た。居間の二階には芳子が居て、呼べば直ぐ返事をして下りて來る。食事には三度三度膳を並べて團欒して食ふ。夜は明るい洋燈を取捲いて、賑はしく面白く語り合ふ。靴下は編んで呉れる。美しい笑顏は絶えず見せ

いた朝顏の幅を選んで床に懸け、懸花瓶には後れ咲の薔薇の花を挿した。午頃に荷物が着いて、大きな支那鞄、柳行李、信玄袋、本箱、机、夜具、これを二階に運ぶのに中々骨が折れる。時雄は此の手傳ひに一日社を休むべく餘儀なくされたのである。

机を南の窓の下、本箱を其の左に、上に鏡やら紅皿やら罎やらを順序よく並べた。押入の一方には支那鞄、柳行李、更紗の蒲團夜具一組を他の一方に入れようとした時、女の移香が鼻を撲つたので、時雄は變な氣になつた。

午後一時頃には一室が一先づ整頓した。

『何うです、此處も居心は惡くないでせう。』時雄は得意さうに笑つて『此處に居て、まア緩くり勉強するです。本當に實際問題に觸れてつまらなく苦勞したつて爲方ないですからねえ。』

『え………、』と芳子は頭を垂れた。

『後で詳しく聞きませうが、今の中は二人共ぢつとして勉強して居なくては、爲方がないですからね。』

『え………、』と言つて、芳子は顏を擧げて、『それで先生、私達もさう思つて、今はお互に勉強して、將來に希望を持つて、親の許諾をも得たいと存じて居りますの？』

『それが好いです。今、餘り騷ぐと、人にも親にも誤解されて了つて、折角の眞面目な希望も遂げられなくなりますから。』

みながら、默して歩いた。

佐内坂を登り了ると、人通りが少くなつた。時雄はふと振返つて、『それで、何うしたの？』と突如として訊ねた。

『え？』

反問した芳子は顔を曇らせた。

『昨日の話さ、まだ居るのかね。』

『今夜の六時の急行で歸ります。』

『それぢや送つて行かなくつてはいけないぢやないか。』

『いゝえ、もう好いんですの。』

これで話は途絶えて、二人は默つて歩いた。

矢來町の時雄の宅、今迄物置にして置いた二階の三疊と六疊、これを綺麗に掃除して、芳子の住居とした。久しく物置――子供の遊び場にしておいたので、塵埃が山のやうに積つて居たが、箒をかけ雜巾をかけ、雨のしみの附いた破れた障子を貼り更へると、かうも變るものかと思はれるほど明るくなつて、裏の酒井の墓塋の大樹の繁茂が心地よき翠をその一室に漲らした。隣家の葡萄棚、打捨てゝ手を入れようともせぬ庭の雜草の中に美人草の美しく交つて咲いて居るのも今更に目につく。時雄はさる畫家の描

して、居るのを不快に思つて、出來るならば、初めのやうに先生の家にと今情願つて居たのであるから
の場合でなければ、かへつて大に喜んだのであらうに…………
時雄は一刻も早く其戀人のことを聞糺したかつた。今、その男は何處にゐる？　何時京都に歸るか？
これは時雄に取つては實に重大な問題であつた。けれど何も知らぬ姉の前で、打明けて問ふわけにも行
かぬので、此の夜は露ほども其のことを口に出さなかつた。一座は平凡な物語に更けた。
今夜にもと時雄の言出したのを、だつて、もう十二時だ、明日にした方が宜からうとの姉の注意。で、
時雄は一人で牛込に歸らうとしたが、何うも不安で爲方がないやうな氣がしたので、夜の更けたのを口
實に、姉の家に泊つて、明朝早く一緒に行くことにした。
芳子は八疊に、時雄は六疊に姉と床を並べて寢た。やがて姉の小さい鼾が聞えた。時計は一時をカン
と鳴つた。八疊では寢つかれぬと覺しく、をり〳〵高い長大息の氣勢がする。甲武の貨物列車が凄しい
地響を立てゝ、此の深夜を獨り通る。時雄も久しく眠られなかつた。

五

翌朝時雄は芳子を自宅に伴つた。二人になるより早く、時雄は昨日の消息を知らうと思つたけれど、
芳子が低頭勝に悄然として後について來るのを見ると、何となく可哀相になつて、胸に苛々する思を疊

『大變に遲くなつて了つて……』

いかにも遣瀨ないといふやうに微かに辯解した。

『中野へ散歩に行つたッて？』

時雄は突如として問うた。

『え〻……』芳子は時雄の顏色をまたちらりと見た。

姉は茶を淹れる。土產の包を開くと、姉の好きな好きなシュウクリーム。これはマアお旨しいと姉の聲。

で、暫く一座はそれに氣を取られた。

少時してから、芳子が、

『先生、私の歸るのを待つて居て下さつたの？』

『え〻、え〻、一時間半位待つたのよ。』

と姉が傍から言つた。

で、其話が出て、都合さへよくば今夜からでも——荷物は後からでも好いから——一緖に伴れて行く積りで來たといふことを話した。芳子は下を向いて、點頭いて聞いて居た。無論、其胸には一種の壓迫を感じたに相違ないけれど、芳子の心にしては、絕對に信賴して——今回の戀のことにも全心を擧げて同情して吳れた師の家に行つて住むことは別に甚しい苦痛でも無かつた。寧ろ以前から此の昔風の家に同居

果してその足音が家の入口の前に留つて、がら〳〵と格子が開く。

『芳子さん？』

『えゝ。』

と艶やかな聲がする。

玄關から丈の高い庇髪の美しい姿がすつと入つて來たが、

『あら、まア、先生！』

と聲を立てた。其の聲には驚愕と當惑の調子が十分に籠つて居た。

『大變遲くなつて……』と言つて、座敷と居間との間の閾の處に來て、半ば坐つて、ちらりと電光のやうに時雄の顔色を窺つたが、すぐ紫の袱紗に何か包んだものを出して、默つて姉の方に押遣つた。

『何ですか……お土産？　いつもお氣の毒ね。』

『いゝえ、私も召上るんですもの。』

と芳子は快活に言つた。そして次の間へ行かうとしたのを、無理に洋燈の明るい眩しい居間の一隅に坐らせた。美しい姿、當世流の庇髪、派手なネルにオリイヴ色の夏帶を形よく緊めて、少し斜に坐つた艶やかさ。時雄は其の姿と相對して、一種狀すべからざる滿足を胸に感じ、今迄の煩悶と苦痛とを半ば忘れて了つた。有力な敵があつても、其の戀人をだに占領すれば、それで心の安まるのは戀する者の常態である。

ないんだから、構ひはしませんけれどもね……』

『それはいつのことです？』

『昨年の暮でしたかね。』

『何うもハイカラ過ぎて困る。』と時雄が言つたが、時計の針の既に十時半の處を指すのを見て、『それにしても何うしたんだらう。若い身空で、かう遲くまで一人で出て歩くと言ふのは？』

『もう歸つて來ますよ。』

『こんなことは幾度もあるんですか。』

『いゝえ、滅多にありはしませんよ。夏の夜だから、まだ宵の口位に思つて歩いて居るんですよ。』

姉は話しながら裁縫の針を止めぬのである。前に鴨脚の大きい裁物板が据ゑられて、彩絹の裁片や糸や鋏やが順序なく四方に亂れて居る。女物の美しい色に、洋燈の光が明かに照り渡つた。九月中旬の夜は更けて、稍々肌寒く、裏の土手下を甲武の貨物汽車がすさまじい地響を立てゝ通る。

下駄の音がする度に、今度こそは！　今度こそは！　と待渡つたが、十一時が打つて間もなく、少きざみな、輕い後齒の音が靜かな夜を遠く響いて來た。

『今度のこそ、芳さんですよ。』

と姉は言つた。

『え、少し……』と言つて、『昨日は歸りは遲かつたですか。』
『いゝえ、お友達を新橋に迎へに行くんだつて、四時過に出かけて、八時頃に歸つて來ましたよ。』
時雄の顏を見て、
『何うかしたのですの？』
『何ァに、けれどねぇ姉さん、』と時雄の聲は改まつた。『實は姉さんにおまかせしておいても、此間の京都のやうなことが又あると困るですから、芳子を私の家において、十分監督しようと思ふんですがね。』
『さう、それは好いですよ。本當に芳子さんはあゝいふしつかり者だから、私見たいな無教育のものでは……』
『いや、さういふわけでも無いですがね。餘り自由にさせ過ぎても、かへつて當人の爲めにならんですから、一つ家に置いて、十分監督して見ようと思ふんです。』
『それが好いですよ。本當に、芳子さんにもね……何處と惡いことのない、發明な、利口な、今の世には珍らしい方ですけれど、一つ惡いことがあつてね、男の友達と平氣で夜歩いたりなんかするんですからね。それさへ止すと好いんだけれどとよく言ふのですの。すると芳子さんはまた小母さんの舊弊が始まつたつて、笑つて居るんだもの。いつかなぞも餘り男と一緒に歩いたり何かするものだから、角の交番でね、不審にしてね、角袖巡査が家の前に立つて居たことがあつたと云ひますよ。それはそんなことは

に行つたが、矢張まだ歸つて居ない。

時雄は家に入つた。

奥の六疊に通るや否、

『芳さんは何うしました？』

其の答より何より、姉は時雄の着物に夥しく泥の着いて居るのに驚いて、

『まァ、何うしたんです、時雄さん。』

明かな洋燈の光で見ると、成程、白地の浴衣に、肩、膝、腰の嫌ひなく、夥しい泥！

『何ァに、其處で鳥渡轉んだものだから。』

『だツて、肩まで粘いて居るぢやありませんか。また、醉ッぱらつたんでせう。』

『何ァに……。』

と時雄は强ひて笑つてまぎらした。

さて時を移さず、

『芳さん、何處に行つたんです。』

『今朝、ちよいと中野の方にお友達と散歩に行つて來ると云つて出た切りですがね、もう歸て來るでせう。何か用？』

實！』

と時雄は胸の中に繰返した。

時雄は堪へ難い自然の力の壓迫に壓せられたもののやうに、再び傍のロハ臺に長い身を横へた。ふと見ると、赤銅のやうな色をした光芒の無い大きい月が、お濠の松の上に音も無く昇つて居た。其の色、其の狀、其の姿がいかにも侘しい。その侘しさが其身の今の侘しさによく適つて居ると時雄は思つて、また堪へ難い哀愁が其の胸に漲り渡つた。

醉は既に醒めた。夜露は置始めた。

土手三番町の家の前に來た。

覗いて見たが、芳子の室に燈火の光が見えぬ。まだ歸つて來ぬと見える。時雄の胸はまた燃えた。此の夜、此の暗い夜に戀しい男と二人！ 何をして居るか解らぬ。かういふ常識を缺いた行爲を敢てして、神聖なる戀とは何事？ 汚れたる行爲のないのを辯明するとは何事？

すぐ家に入らうとしたが、まだ當人が歸つて居らぬのに、上つても爲方が無いと思つて、其の前を眞直に通り拔けた。女と摩違ふ度に、芳子ではないかと顔を覗きつゝ歩いた。土手の上、松の木蔭、街道の曲り角、往來の人に怪まるゝまで彼方此方を徘徊した。もう九時、十時に近い。いかに夏の夜であるからと言つて、さう遲くまで出歩いて居る筈が無い。もう歸つたに相違ないと思つて、引返して姉の家

抵抗すべからざる力に觸れては、人間ほど儚い情ないものはない。

汪然として涙は時雄の鬚面を傳つた。

ふとある事が胸に上つた。時雄は立上つて歩き出した。もう全く夜になつた。境内の處々に立てられた硝子燈は光を放つて、其の表面の常夜燈といふ三字がはつきり見える。この常夜燈といふ三字、これを見てかれは胸を衝いた。此の三字をかれは曾て深い懊惱を以て見たことは無いだらうか。今の細君が大きい桃割に結つて、このすぐ下の家に娘で居た時、渠は其の微かな琴の音の髣髴をだに得たいと思つてよく此の八幡の高臺に登つた。かの女を得なければ寧そ南洋の植民地に漂泊しようといふほどの熱烈な心を抱いて、華表、長い石階、社殿、俳句の懸行燈、この常夜燈の三字にはよく見入つて物を思つたものだ。其の下には依然たる家屋、電車の轟こそをり〳〵寂寞を破つて通るが、其の妻の實家の窓には、昔と同じやうに、明かに燈の光が輝いて居た。何たる節操なき心ぞ、僅かに八年の年月を閲したばかりであるのに、かうも變らうとは誰が思はう。其の桃割姿を丸髷姿にして、樂しく暮した其の生活が何うしてかういふ荒凉たる生活に變つて、何うしてかういふ新しい戀を感ずるやうになつたか。時雄は我ながら時の力の恐ろしいのを痛切に胸に覺えた。けれど其の胸にある現在の事實は不思議にも何等の動搖をも受けなかつた。

『矛盾でもなんでも爲方がない、其の矛盾、其の無節操、これが事實だから爲方がない、事實！　事

して言つた。

中根坂を上つて、士官學校の裏門から、佐内坂の上まで來た頃は、日はもうとつぷりと暮れた。白地の浴衣がぞろ〳〵と通る。煙草屋の前に若い細君が出て居る。氷店の暖簾が凉しさうに夕風に靡く。時雄は此の夏の夜景を朧ろげに眼には見ながら、電信柱に突當つて倒れさうにしたり、淺い溝に落ちて膝頭をついたり、職工體の男に『醉漢奴！　しつかり歩け！』と罵られたりした。急に自から思ひついたらしく、坂の上から右に折れて、市ヶ谷八幡の境内へと入つた。境内には人の影もなく寂寞として居た。大きい古い欅の樹と松の樹とが蔽ひ冠さつて、左の隅に珊瑚樹の大きいのが繁つて居た。處々の常夜燈はそろそろ光を放ち始めた。時雄はいかにしても苦しいので、突如其の珊瑚樹の蔭に身を躱して、其の根元の地上に身を横へた。興奮した心の狀態、奔放な情と悲哀の快感とは、極端まで其の力を發展して、一方痛切に嫉妬の念に驅られながら、一方冷淡に自己の狀態を客觀した。

初めて戀するやうな熱烈な情は無論なかつた。盲目に其の運命に從ふと謂ふよりは、寧ろ冷かに其の運命を批判した。熱い主觀の情と冷めたい客觀の批判とが絡り合せた糸のやうに固く結び着けられて、一種異樣の心の狀態を呈した。

悲しい、實に痛切に悲しい。此の悲哀は華やかな青春の悲哀でもなく、單に男女の戀の上の悲哀でもなく、人生の最奧に祕んで居るある大きな悲哀だ。行く水の流、咲く花の凋落、此の自然の底に蟠れる

今日、行つて、早かつたら、芳子を家に連れて來る。二階を掃除して置け。』
『家に置くんですか、また……』
『勿論。』
細君は容易に帶と着物とを出さうともせぬので、
『よし、よし、着物を出さんのなら、これで好い。』と、白地の單衣に唐縮緬の汚れたへこ帶、帽子も被らずに、其の儘に急いで戸外へ出た。『今出しますから……本當に困つて了ふ、』といふ細君の聲が後に聞えた。
夏の日はもう暮れ懸つて居た。矢來の酒井の森には烏の聲が喧しく聞える。何の家でも夕飯が濟んで、門口に若い娘の白い顏も見える。ボールを投げて居る少年もある。官吏らしい髯髭の紳士が庇髮の若い細君を伴れて、神樂坂に散歩に出懸けるのにも幾組か邂逅した。時雄は激昂した心と泥醉した身體とに烈しく漂はされて、あたりに見ゆるものが皆な別の世界のものゝやゥに思はれた。兩側の家も動くやう、地も脚の下に陷るやう、天も頭の上に蔽ひ冠さるやうに感じた。元から左程强い酒量でないのに、無闇にぐい〳〵と呷つたので、一時に醉が發したのであらう。ふと露西亞の賤民の酒に醉つて路傍に倒れて寢て居るのを思ひ出した。そしてある友人と露西亞の人間は是れだけだから豪い、惑溺するなら飽迄惑溺せんければ駄目だと言つたことを思ひ出した。馬鹿な！　戀に師弟の別があつて堪るものかと口へ出

と時雄は一喝した。
細君はそれにも懲りずに、
『だつて、餘り飮んでは毒ですよ、もう好い加減になさい、また、手水場にでも入つて寢ると、貴郞は大きいから、私と、お鶴(下女)の手ぐらゐでは何うにもなりやしませんからさ。』
『まア、好いからもう一本。』
で、もう一本を半分位飮んだ。もう醉は餘程廻つたらしい。顏の色は赤銅色に染つて眼が少しく据つて來た。急に立上つて、
『おい、帶を出せ!』
『何處へいらつしやる。』
『三番町まで行つて來る。』
『姉の處?』
『うむ。』
『およしなさいよ、危いから。』
『何ァに大丈夫だ、人の娘を預つて監督せずに投遣にしては置かれん。男が此の東京に來て一緒に歩いたり何かして居るのを見ぬ振をしては置かれん。田川(姉の家の姓)に預けて置いても不安心だから、

『だから、本當に厭さ、若い娘の身で、小說家になるなんぞつて、望む本人も本人なら、よこす親達も親達ですからね。』

『でもお前は安心したらう、』と言はうとしたが、それは止して、

『まア、そんなことは何うでも好いさ、何うせお前達には解らんのだから……それよりも酌でもしたら何うだ。』

溫順な細君は德利を取上げて、京燒の盃に波々と注ぐ。

時雄は頻りに酒を呷つた。酒でなければこの鬱を遣るに堪へぬといはぬばかりに。三本目に、妻は心配して、

『此頃は何うか爲ましたね。』

『何故？』

『醉つてばかり居るぢやありませんか。』

『醉ふといふことが何うかしたのか。』

『さうでせう、何か氣に懸ることがあるからでせう。芳子さんのことなどは何うでも好いぢやありませんか。』

『馬鹿！』

頃に歸つたか解るが、今日は何うした、今は何うして居る？
細君の心を盡した晩餐の膳には、鮪の新鮮な刺身に、青紫蘇の藥味を添へた冷豆腐、それを味ふ餘裕もないが、一盃は一盃と盞を重ねた。
細君は末の兒を寢かして、火鉢の前に來て坐つたが、芳子の手紙の夫の傍にあるのに眼を附けて、
『芳子さん、何つて言つて來たのです！』
時雄は默つて手紙を投げて遣つた。細君はそれを受取りながら、夫の顏をじろりと見て、暴風の前に來る雲行の甚だ急なのを知つた。
細君は手紙を讀終つて卷きかへしながら、
『出て來たのですね。』
『うむ』
『ずつと東京に居るんでせうか。』
『手紙に書いてあるぢやないか、すぐ歸すツて……』
『歸るでせうか。』
『そんなこと誰が知るものか。』
夫の語氣が烈しいので、細君は口を噤んで了つた。しばし經つてから、

ますが、一先、旅籠屋に落着かせまして、折角出て來たものですから、一日位見物しておいでなさいと、つい申して了ひました。何うか先生、お許し下さいまし。私共も激しい感情の中に、理性も御座いますから、京都でしたやうな、假りにも常識を外れた、他人から誤解されるやうなことは致しません。誓つて、決して致しません。末ながら奧樣にも宜しく申上げて下さいまし。

芳　子

先生御もと

この一通の手紙を讀んで居る中、さま〴〵の感情が時雄の胸を火のやうに燃えて通つた。其の田中といふ二十一の青年が現に此の東京に來て居る。芳子が迎へに行つた。何をしたか解らん。此の間言つたことも丸でうそかも知れぬ。此の夏期の休暇に須磨で落合つた時から出來て居て、京都での行爲もその望を滿す爲め、今度も戀しさに堪へ兼ねて女の後を追つて上京したのかも知れん。手を握つたらう。胸と胸とが相觸れたらう。人が見て居ぬ旅籠屋の二階、何を爲て居るか解らぬ。汚れる汚れぬのも刹那の間だ。かう思ふと時雄は堪らなくなつた。「監督者の責任にも關する！」と腹の中で絶叫した。かうしては置かれぬ、かういふ自由を精神の定まらぬ女に與へて置くことは出來ん。監督せんければならん、保護せんけりやならん。私共は熱情もあるが理性がある！　私共とは何だ！　何故私とは書かぬ、何故複數を用ひた？　時雄の胸は嵐のやうに亂れた。着いたのは昨日の六時、姉の家に行つて聞き糺せば昨夜何時

なことがあつては、自分が濟まぬと言ふので、學事をも捨てゝ出京して、先生にすつかりお打明申して、お詫も申上げ、お情に縋つて、萬事圓滿に參るやうにと、さういふ目的で急に出て參つたとのことで御座います。それから、私は先生にお話し申した一伍一什、先生のお情深い言葉、將來までも私等二人の神聖な眞面目な戀の證人とも保護者ともなつて下さるといふことを話しました處、非常に先生のお情に感激しまして感謝の涙に暮れました次第で御座います。

田中は私の餘りに狼狽した手紙に非常に驚いたと見えまして、十分覺悟をして、萬一破壞の曉にはと言つた風なことも決心して參りましたので御座います。萬一の時にはあの時嵯峨に一緒に參つた友人を證人にして、二人の間が決して汚れた關係の無いことを辯明し、別れて後互ひに感じた二人の戀愛を打明けて、先生にお縋り申して、郷里の父母の方へも逐一言つて頂かうと決心して參りました相です。けれど此の間の私の無謀で鄕里の父母の感情を破つて居る矢先、何うしてそんなことを申して遣はされませう。今はしばし沈默して、お互ひに希望を持つて、專心勉學に志し、いつか折を見て——或は五年、十年の後かも知れません——打明けて願ふ方が得策だと存じまして、さういふことに致しました。先生のお話をも一切話して聞かせました。で、用事が濟んだ上は歸した方が好いのですけれど、非常に疲れて居る樣子を見ましては、流石に直ちに引返すやうにとも申兼ねました。(私の弱いのを御許し下さいまし)。勉學中、實際問題に觸れてはならぬとの先生の御教訓は身にしみて守るつもりで御座い

謀るばかりだ。これはつらい、けれどもつらいのが人生だ！　と思ひながら歸つて來た。

門をあけて入ると、細君が迎へに出た。殘暑の日はまだ暑く、洋服の下襦袢がびつしより汗にぬれて居る。それを糊のついた白地の單衣に着替へて、茶の間の火鉢の前に坐ると、細君はふと思ひ附いたやうに、簞笥の上の一封の手紙を取出し、

『芳子さんから。』

と言つて渡した。

急いで封を切つた。卷紙の厚いのを見ても、其事件に關しての用事に相違ない。時雄は熱心に讀下した。

言文一致で、すら〳〵と此上ない達筆。

先生――

實は御相談に上り度いと存じましたが、餘り急でしたものでしたから、獨斷で實行致しました。

昨日四時に田中から電報が參りまして、六時に新橋の停車場に着くとのことですもの、私は何んなに驚きましたか知れません。

何事も無いのに出て來るやうな、そんな輕卒な男でないと信じて居ります丈に、一層甚しく氣を揉みました。先生、許して下さい、私は其時刻に迎へに參りましたのです。逢つて聞きますと、私の一伍一什を書いた手紙を見て、非常に心配して、もしこの事があつた爲め萬一鄕里に伴れて歸られるやう

つた。何處へ？　何處へいらつしやるんです？　と細君は氣が氣でなく其の後を追つて行つたが、それにも關はず、蒲團を着たまゝ、厠の中に入らうとした。細君は慌てゝ、

『貴郎、貴郎、醉つぱらつてはいやですよ。そこは手水場ですよ。』

突如蒲團を後から引いたので、蒲團は厠の入口で細君の手に殘つた。時雄はふら〳〵と危く小便をして居たが、それがすむと、突如と厠の中に横に寢てしまつた。細君が汚がつて頻りに搖つたり何かしたが、時雄は動かうとも立たうとも爲ない。さうかと云つて眠つたのではなく、赤土のやうな顏に大きな鋭い目を明いて、戸外に降り頻きる雨をぢつと見て居た。

四

時雄は例刻をてく〳〵と牛込矢來町の自宅に歸つて來た。

渠は三日間、其苦悶と戰つた。渠は性として惑溺することが出來ぬ或る一種の力を持つて居る。この力の爲めに支配されるのを常に口惜しく思つて居るのではあるが、それでもいつか負けて了ふ。征服されて了ふ。此れが爲め渠はいつも運命の圈外に立つて苦しい味を嘗めさせられるが、世間からは正しい人、信頼するに足る人と信じられて居る。三日間の苦しい煩悶、これで兎に角渠は其の前途を見た。二人の間の關係は一段落を告げた。此れからは、師として其責任を盡して、わが愛する女の幸福の爲めを

膳に載せられた肴がまづいので、遂に癇癪を起して、自暴に酒を飲んだ。一本、二本と德利の數は重つて、時雄は時の間に泥の如く醉つた。細君に對する不平ももう言はなくなつた。德利に酒が無くなると、只、酒、酒と言ふばかりだ。そしてこれをぐい〳〵と呷る。氣の弱い下女は何うしたことかと呆れて見て居つた。男の兒の五歲になるのを始めは頻りに可愛がつて抱いたり撫でたり接吻したりして居たが、何うしたはずみでか泣出したのに腹を立てゝ、ピシャ〳〵と其尻を亂打したので、三人の子供は怖がつて、遠捲にして、平生に似もやらぬ父親の赤く醉つた顏を不思議相に見て居た。一升近く飲んで其の儘其處に醉倒れて、膳の筋斗がへりを打つのにも頓着しなかつたが、やがて不思議なだら〳〵した節で、十年も前にはやつた幼稚な新體詩を歌ひ出した。

君が門邊をさまよふは
巷の塵を吹き立つる
嵐のみとやおぼすらん。
その嵐よりいやあれに
その塵よりも亂れたる
戀のかばねを曉の

歌を半ばにして、細君の被けた蒲團を着たまゝ、すつくと立上つて、座敷の方へ小山の如く動いて行

生活に美しい色彩を添へ、限りなき力を添へて呉れた芳子を、突然人の奪ひ去るに任すに忍びようか。機會を二度迄攫むことは躊躇したが、三度來る機會、四度來る機會を待つて、新なる運命と新なる生活を作りたいとはかれの心の底の底の微かなる願であつた。時雄は悶えた。思ひ亂れた。妬みと惜しみと悔恨との念が一緒になつて旋風のやうに頭腦の中を回轉した。師としての道義の念もこれに交つて、益々炎を熾んにした。わが愛する女の幸福の爲めといふ犧牲の念も加はつた。で、夕暮の膳の上の酒は夥しく量を加へて、泥鴨の如く醉つて寢た。

あくる日は日曜日の雨、裏の森にざん〳〵降つて、時雄の爲めには一倍に佗しい。欅の古樹に降りかゝる雨の脚、それが實に長く、限りない空から限りなく降つてゐるとしか思はれない。時雄は讀書する勇氣もない。筆を執る勇氣もない。もう秋で冷々と脊中の冷たい籐椅子に身を横へつゝ、雨の長い脚を見ながら、今回の事件から其身の半生のことを考へた。かれの經驗にはかういふ經驗が幾度もあつた。一歩の相違で運命の唯中に入ることが出來ずに、いつも圏外に立たせられた淋しい苦悶、その苦しい味を彼れは常に味つた。文學の側でもさうだ、社會の側でもさうだ。戀、戀、戀、今になつてもこんな消極的な運命に漂はされて居るかと思ふと、其の身の意氣地なしと運命のつたないことがひし〳〵と胸に迫つた。ツルゲネーフの所謂 Superfluous man ！だと思つて、其主人公の儚い一生を胸に繰返した。

寂寥に堪へず、午から酒を飲むと言出した。細君の支度の爲やうが遲いのでぶつ〳〵言つて居たが、

今回の事件とは他でも無い。芳子は戀人を得た。そして上京の途次、戀人と相携へて京都嵯峨に遊んだ。其の遊んだ二日の日數が出發と着京との時日に符合せぬので、東京と備中との間に手紙の往復があつて、詰問した結果は戀愛、神聖なる戀愛、二人は決して罪を犯しては居らぬが、將來は如何にしても此の戀を遂げ度いとの切なる願望。時雄は芳子の師として、此の戀の證人として一面月下氷人の役目を餘儀なくさせられたのであつた。

芳子の戀人は同志社の學生、神戸教會の秀才、田中秀夫、年二十一。

芳子は師の前に其の戀の神聖なるを神懸けて誓つた。故鄕の親達は、學生の身で、ひそかに男と嵯峨に遊んだのは、既に其の精神の墮落であると云つたが、決してそんな汚れた行爲はない。互に戀を自覺したのは、寧ろ京都で別れてからで、東京に歸つて來て見ると、男から熱烈なる手紙が來て居た。それで始めて將來の約束をしたやうな次第で、決して罪を犯したやうなことは無いと女は涙を流して言つた。時雄は胸に至大の犧牲を感じながらも、其の二人の所謂神聖なる戀の爲めに力を盡すべく餘儀なくされた。

時雄は悶えざるを得なかつた。わが愛するものを奪はれたといふことは甚だしく其心を暗くした。元より進んで其女弟子を自分の戀人にする考は無い。さういふ明らかな定つた考があれば前に既に二度迄も近寄つて來た機會を攫むに於て敢て躊躇するところは無い筈だ。けれど其の愛する女弟子、淋しい

と言つて、ぢつと時雄の顏を見る。いかにも艶かしい。時雄は此の力ある一瞥に意氣地なく胸を躍らした。二語三語、普通のことを話り合つたが、其の平凡な物語が更に平凡でないことを互に思ひ知つたらしかつた。此の時、今十五分も一緒に話し合つたならば、何うなつたであらうか。女の表情の眼は輝き、言葉は艶めき、態度がいかにも尋常でなかつた。

『今夜は大變綺麗にしてますね？』

男は態と輕く出た。

『え、先程、湯に入りましたのよ。』

『大變に白粉が白いから。』

『あらまァ先生！』と言つて笑つて、體を斜に嬌態を呈した。

時雄はすぐ歸つた。まァ好いでせうと芳子はたつて留めたが、何うしても歸ると言ふので、名殘惜しげに月の夜を其處まで送つて來た。其の白い顏には確かにある深い神祕が籠められてあつた。

四月に入つてから、芳子は多病で蒼白い顏をして神經過敏に陷つて居た。シユウソカリを餘程多量に服しても眠られぬとて困つて居た。絕えざる欲望と生殖の力とは年頃の女を誘ふのに躊躇しない。芳子は多く藥に親んで居た。

四月末に歸國、九月に上京、そして今回の事件が起つた。

心を痛める。戀でもない、戀でなくもないといふやうなやさしい態度、時雄は絶えず思ひ惑つた。道義の力、習俗の力、機會一度至ればこれを破るのは帛を裂くよりも容易だ。唯、容易に來たらぬはこれを破に至る機會である。

此の機會がこの一年の間に尠くとも二度近寄つたと時雄は自分だけで思つた。一度は芳子が厚い封書を寄せて、自分の不束なこと、先生の高恩に報ゆることが出來ぬから自分は故郷に歸つて農夫の妻になつて田舍に埋れて了はうといふことを涙交りに書いた時、一度は或る夜芳子が一人で留守番をして居る處へゆくりなく時雄が行つて訪問した時、この二度だ。初めの時は時雄は其の手紙の意味を明かに了解した。其の返事をいかに書くべきかに就いて一夜眠らずに懊惱した。穩かに眠れる妻の顏それを幾度か窺つて自己の良心のいかに麻痺せるかを自から責めた。そしてあくる朝贈つた手紙は、嚴乎たる師として の態度であつた。二度目はそれから二月ほど經つた春の夜、ゆくりなく時雄が訪問すると、芳子は白粉をつけて、美しい顏をして、火鉢の前にぽつねんとして居た。

『何うしたの、』と訊くと、

『お留守番ですの。』

『姉は何處へ行つた？』

『四谷へ買物に。』

たりの婦人の意志と感情と共に富んで居ることを話し、さて『けれど自覺と云ふのは、自省といふことをも含んで居るですからな、無闇に意志や自我を振廻しては困るですよ。自分の遣つたことには自分が全責任を帶びる覺悟がなくては。』

芳子にはこの時雄の教訓が何より意味があるやうに聞えて、渇仰の念が愈々加はつた。基督教の教訓より自由でそして權威があるやうに考へられた。

芳子は女學生としては身裝（みなり）が派手過ぎた。黄金の指環をはめて、流行を趁つた美しい帶をしめて、すつきりとした立姿は、路傍の人目を惹くに十分であつた。美しい顏と云ふよりは表情のある顏、非常に美しい時もあれば何だか醜い時もあつた。眼に光りがあつてそれが非常によく働いた。四五年前までの女は感情を顯はすのに極めて單純で、怒つた容（かたち）とか笑つた容とか、三種、四種位しか其の感情を表はすことが出來なかつたが、今では情を巧に顏に表す女が多くなつた。芳子も其の一人であると時雄は常に思つた。

芳子と時雄との關係は單に師弟の間柄としては餘りに親密であつた。此の二人の樣子を觀察したある第三者の女の一人が妻に向つて、『芳子さんが來てから時雄さんの樣子は丸で變りましたよ。二人で話して居る處を見ると、魂は二人ともあくがれ渡つて居るやうで、それは本當に油斷がなりませんよ。』と言つた。他から見れば、無論さう見えたに相違なかつた。けれど二人は果してさう親密であつたか、何うか。

若い女のうかれ勝な心、うかれるかと思へばすぐ沈む。些細なことにも胸を動かし、つまらぬことにも

麴町土手三番町の一角には、女學生もさうハイカラなのが澤山居ない。それに、市ヶ谷見附の彼方には時雄の細君の里の家があるのだが、この附近は殊に昔風の商家の娘が多い。で、尠くとも芳子の神戸仕込のハイカラはあたりの人の目を聳たしめた。時雄は姉の言葉として、妻から常に次のやうなことを聞かされる。

『芳子さんにも困つたものですねと姉が今日も言つて居ましたよ、男の友達が來るのは好いけれど、夜など一緒に二七（不動）に出かけて、遲くまで歸つて來ないことがあるんですつて。それや芳子さんはそんなことは無いのにきまつて居るけれど、世間の口が喧しくつて爲方が無いと云つて居ました。』

これを聞くと時雄は定つて芳子の肩を持つので、『お前達のやうな舊式の人間には芳子の遣ることなどは判りやせんよ。男女が二人で步いたりさへすれば、すぐあやしいとか變だとか思ふのだが、一體、そんなことを思つたり、言つたりするのが舊式だ、今では女も自覺して居るから、爲ようと思ふことは勝手にするさ。』

此議論を時雄はまた得意になつて芳子にも說法した。『女子ももう自覺せんければいかん。昔の女のやうに依賴心を持つて居ては駄目だ。ズウデルマンのマグダの言つた通り、父の手からすぐに夫の手に移るやうな意氣地なしでは爲方が無い、日本の新しい婦人としては、自から考へて自から行ふやうにしなければいかん。』かう言つては、イブセンのノラの話や、ツルゲネーフのエレネの話や、露西亞、獨逸あ

三

それから今回の事件まで一年半の年月が經過した。

其の間二度芳子は故鄕を省した。短篇小說を五種、長篇小說を一種、其他美文、新體詩を數十篇作つた。某女塾では英語は優等の出來で、時雄の選擇で、ツルゲネーフの全集を丸善から買つた。初めは、暑中休暇に歸省、二度目は、神經衰弱で、時々癪のやうな痙攣を起すので、暫く故山の靜かな處に歸つて休養する方が好いといふ醫師の勸めに從つたのである。

其の寓して居た家は麴町の土手三番町、甲武の電車の通る土手際で、芳子の書齋は其の家での客座敷、八疊の一間、前に往來の頻繁な道路があつて、がや〳〵と往來の人やら子供やらで喧しい。時雄の書齋にある西洋本箱を小さくしたやうな本箱が一閑張の机の傍にあつて、其の上には、鏡と、紅皿と、白粉の罎と、今一つシユーソカリの入つた大きな罎がある。これは神經過敏で、頭腦が痛くつて爲方が無い時に飮むのだといふ。本箱には紅葉全集、近松世話淨瑠璃、英語の教科書、ことに新しく買つたツルゲネーフ全集が際立つて目に附く。で、未來の閨秀作家は學校から歸つて來ると、机に向つて文を書くと云ふよりは、寧ろ多く手紙を書くので、男の友達も隨分多い。男文字の手紙も隨分來る。中にも高等師範の學生に一人、早稻田大學の學生に一人、それが時々遊びに來たことがあつたさうだ。

最初の一月ほどは時雄の家に假寓して居た。華やかな聲、艶やかな姿、今迄の孤獨な淋しいかれの生活に、何等の對照！　産褥から出たばかりの細君を助けて、靴下を編む、襟卷を編む、着物を縫ふ、子供を遊ばせるといふ生々した態度、時雄は新婚當座に再び歸つたやうな氣がして、家門近く來るとそゞるやうに胸が動いた。門をあけると、玄關には其美しい笑顏、色彩に富んだ姿、夜も今迄は子供と共に細君がいぎたなく眠つて了つて、六疊の室に徒に明らかな洋燈も、却つて佗しさを增すの種であつたが、今は如何に夜更けて歸つて來ても、洋燈の下には白い手が巧に編物の針を動かして、膝の上に色ある毛糸の丸い玉！　賑かな笑聲が牛込の奧の小柴垣の中に充ちた。

けれど一月ならずして時雄はこの愛すべき女弟子を其の家に置くことの不可能なのを覺つた。從順なる家妻は敢て其の事に不服をも唱へず、それらしい樣子も見せなかつたが、しかも其の氣色は次第に惡くなつた。限りなき笑聲の中に限りなき不安の情が充ち渡つた。妻の里方の親戚間などには現に一問題として講究されつゝあることを知つた。

時雄は種々に煩悶した後、細君の姉の家——軍人の未亡人で恩給と裁縫とで暮らして居る姉の家に寄寓させて、其處から麴町の某女塾に通學させることにした。

て、女學生の寄宿生活を此上なく面白く思ふやうになつた。旨味い南瓜を食べさせないと云つては、お鉢の飯に醬油を懸けて賄方を酷めたり、舍監のひねくれた老婦の顏色を見て、陰陽に物を言つたりする女學生の群の中に入つて居ては、家庭に養はれた少女のやうに、單純に、物を見ることが何うして出來よう。美しいこと、理想を養ふこと、虛榮心の高いこと――かういふ傾向をいつとなしに受けて、芳子は明治の女學生の長所と短所とを遺憾なく備へて居た。

尠くとも時雄の孤獨なる生活はこれによつて破られた。昔の戀人――今の細君。曾ては戀人には相違なかつたが、今は時勢が移り變つた。四五年來の女子教育の勃興、女子大學の設立、庇髮、海老茶袴、男と並んで步くのをはにかむやうなものは一人も無くなつた。この世の中に、舊式の丸髷、泥鴨のやうな步き振、溫順と貞節とより他に何物をも有せぬ細君に甘んじて居ることは時雄には何よりも情けなかつた。路を行けば、美しい今樣の細君を連れての睦じい散步、友を訪へば夫の席に出て流暢に會話を賑かす若い細君、まして其の身が骨を折つて書いた小說を讀まうでもなく、夫の苦悶煩悶には全く風馬牛で、子供さへ滿足に育てれば好いといふ自分の細君に對すると、何うしても孤獨を叫ばざるを得なかつた。『寂しき人々』のヨハンネスと共に、家妻といふものゝ無意味を感ぜずには居られなかつた。これが――この孤獨が芳子に由つて破られた。ハイカラな新式な美しい女門下生が、先生！　先生！　と世にもえらい人のやうに渴仰して來るのに胸を動かさずに誰が居られようか。

ら才があつても男が相手に爲ない。時雄も內々胸の中で、何うせ文學を遣らうといふやうな女だから、不容色に相違ないと思つた。けれど成るべくは見られる位の女であつて欲しいと思つた。

芳子が父母に許可を得て、父に伴れられて、時雄の門を訪うたのは翌年の二月で、丁度時雄の三番目の男の兒の生れた七夜の日であつた。座敷の隣の室は細君の產褥で、細君は手傳に來て居る姉から若い女門下生の美しい容色であることを聞いて少なからず懊惱した。姉もあゝいふ若い美しい女を弟子にして何うする氣だらうと心配した。時雄は芳子と父とを並べて、縷々として文學者の境遇と目的とを語り、女の結婚問題に就いて豫め父親の說を叩いた。芳子の家は新見町でも第三とは下らぬ豪家で、父も母も嚴格なる基督教信者、母は殊にすぐれた信者で、曾ては同志社女學校に學んだこともあるといふ。總領の兄は英國へ洋行して、歸朝後は某官立學校の教授となつて居る。芳子は町の小學校を卒業するとすぐ、神戶に出て神戶の女學院に入り、其處でハイカラな女學校生活を送つた。基督教の女學校は他の女學校に比して、文學に對して總て自由だ。其の頃こそ『魔風戀風』や『金色夜叉』などを讀んではならんとの規定も出て居たが、文部省で干涉しない以前は、教場でさへなくば何を讀んでも差支なかつた。學校に附屬した教會、其處で祈禱の尊いこと、クリスマスの晚の面白いこと、理想を養ふといふことの味をも知つて、人間の卑しいことを隱して美しいことを標榜するといふ群の仲間となつた。母の膝下が戀しいとか、故鄕が懷しいとか言ふことは、來た當座こそ切實に辛く感じもしたが、やがては全く忘れ

を盡さなければならぬ理由、處女にして文學者たるの危險などを縷々として說いて、幾らか罵倒的の文辭を陳べて、これならもう愛想をつかして斷念めて了ふであらうと時雄は思つて微笑した。そして本箱の中から岡山縣の地圖を搜して、阿哲郡新見町の所在を研究した。山陽線から高梁川の谷を遡つて奥十數里、こんな山の中にもこんなハイカラの女があるかと思ふと、それでも何となくなつかしく、時雄は其の附近の地形やら山やら川やらを仔細に見た。

で、これで返辭をよこすまいと思つたら、それどころか、四日目には更に厚い封書が屆いて、紫インキで、青い罫の入つた西洋紙に横に細字で三枚、何うか將來見捨てずに弟子にして吳れといふ意味が返す返すも書いてあつて、父母に願つて許可を得たならば、東京に出て、然るべき學校に入つて、完全に忠實に文學を學んで見たいとのことであつた。時雄は女の志に感ぜずには居られなかつた。東京でさへ――女學校を卒業したものでさへ、文學の價値などは解らぬものなのに、何も彼もよく知つて居るらしい手紙の文句、早速返事を出して師弟の關係を結んだ。

それから度々の手紙と文章、文章はまだ幼稚な點はあるが、癖の無い、すら〳〵した、將來發達の見込は十分にあると時雄は思つた。で一度は一度より段々互の氣質が知れて、時雄は其の手紙の來るのを待つやうになつた。ある時などは寫眞を送れと言つて遣らうと思つて、手紙の隅に小さく書いて、そしてまたこれを黑々と塗つて了つた。女性には容色と謂ふものが是非必要である。容色のわるい女はいく

の樂みとして、其の女に就いていろ〳〵な空想を逞うした。戀が成立つて、神樂坂あたりの小待合に連れて行つて、人目を忍んで樂しんだら何う。……。細君に知れずに、二人近郊を散步したら何う……。いや、それ處ではない、其の時、細君が懷姙して居つたから、不圖難產して死ぬ、其の後に其の女を入れるとして何うであらう。………平氣で後妻に入れることが出來るだらうか何うかなどと考へて步いた。

神戶の女學院の生徒で、生れは備中の新見町で、渠の著作の崇拜者で、名を橫山芳子といふ女から崇拜の情を以て充された一通の手紙を受取つたのは其の頃であつた。竹中古城と謂へば、美文的小說を書いて、多少世間に聞えて居つたので、地方から來る崇拜者渴仰者の手紙はこれ迄にも隨分多かつた。やれ文章を直して呉れの、弟子にして呉れのと一々取合つては居られなかつた。だから其の女の手紙を受取つても、別に返事を出さうとまで其の好奇心は募らなかつた。けれど同じ人の熱心なる手紙を三通まで貰つては、流石の時雄も注意をせずには居られなかつた。年は十九ださうだが、手紙の文句から推して、其の表情の巧みなのは驚くべきほどで、いかなることがあつても先生の門下生になつて、一生文學に從事したいとの切なる願望。文字は走り書のすら〳〵した字で、餘程ハイカラの女らしい。返事を書いたのは、例の工場の二階の室で、其の日は每日の課業の地理を二枚書いて止して、長い數尺に餘る手簡を芳子に送つた。其の手簡には女の身として文學に携はることの不心得、女は生理的に母たるの義務

『けれど、もう駄目だ！』

と、渠は再び頭髮をむしつた。

二

渠は名を竹中時雄と謂つた。

今より三年前、三人目の子が細君の腹に出來て、新婚の快樂などはとうに覺め盡した頃であつた。世の中の忙しい事業も意味がなく、一生作に力を盡す勇氣もなく、日常の生活――朝起きて、出勤して、午後四時に歸つて來て、同じやうに細君の顏を見て、飯を食つて眠るといふ單調なる生活につく〴〵倦き果てゝ了つた。家を引越歩いても面白くない、友人と語り合つても面白くない、外國小説を讀み渉獵つても滿足が出來ぬ。いや、庭樹の繁り、雨の點滴、花の開落などいふ自然の狀態さへ、平凡なる生活をして更に平凡ならめるやうな氣がして、身を置くに處は無いほど淋しかつた。道を歩いて常に見る若い美しい女、出來るならば新しい戀を爲たいと痛切に思つた。

三十四五、實際此の頃には誰にでもある煩悶で、此の年頃に賤しい女に戲るゝものゝ多いのも、畢竟その淋しさを醫す爲めである。世間に妻を離縁するものも此の年頃に多い。

出勤する途上に、毎朝邂逅ふ美しい女教師があつた。渠は其の頃此の女に逢ふのを其の日〳〵の唯一

草を一服吸つて、立上つて、厚い統計書と地圖と案内記と地理書とを本箱から出して、さて靜かに昨日の續きの筆を執り始めた。けれど二三日來、頭腦がむしやくしやして居るので、筆が容易に進まない、一行書いては筆を留めて其の事を思ふ。また一行書く、また留める、又書いてはまた留めるといふ風。そして其の間に頭腦に浮んで來る考は總て斷片的で、猛烈で、急激で、絕望的の分子が多い。ふと何うい ふ聯想か、ハウプトマンの『寂しき人々』を思ひ出した。かうならぬ前に、この戲曲をかの女の日課として敎へて遣らうかと思つたことがあつた。ヨハンネスフオケラートの心事と悲哀とを敎へて遣り度かつた。此戲曲を渠が讀んだのは今から三年以前、まだかの女の此の世にあることをも夢にも知らなかつた頃であつたが、其の頃から渠は淋しい人であつた。敢てヨハンネスに其の身を比さうとは爲なかつたが、アンナのやうな女がもしあつたなら、さういふ悲劇に陷るのは當然だとしみ〴〵同情した。今は其のヨハンネスにさへなれぬ身だと思つて長嘆した。

流石に『寂しき人々』をかの女に敎へなかつたが、ツルゲネーフの『フアースト』といふ短篇を敎へたことがあつた。洋燈の光明かなる四疊半の書齋、かの女の若々しい心は色彩ある戀物語に憧れ渡つて、表情ある眼は更に深い〳〵意味を以て輝きわたつた。ハイカラな廂髮、櫛、リボン、洋燈の光線が其半身を照して、一卷の書籍に顏を近く寄せると、言ふに言はれぬ香水のかほり、肉のかほり、女のかほり——書中の主人公が昔の戀人にフアーストを讀んで聞かせる段を講釋する時には男の聲も烈しく戰へた。

い地には數多の工場の煙筒が黑い煙を漲らしてゐた。

其の數多い工場の一つ、西洋風の二階の一室、それが渠の毎日正午から通ふ處で、十疊敷ほどの廣さの室の中央には、大きい一脚の卓が据ゑてあつて、傍に高い西洋風の本箱、此中には總て種々の地理書が一杯入られてある。渠はある書籍會社の囑託を受けて地理書の編輯の手傳に從つて居るのである。文學者に地理書の編輯！　渠は自分が地理の趣味を有つて居るからと稱して進んでこれに從事して居るが内心此れに甘じて居らぬことは言ふまでもない。後れ勝なる文學上の閲歷、斷篇のみを作つて未だに全力の試みをする機會に遭遇せぬ煩悶、青年雜誌から月毎に受ける罵評の苦痛、渠自からは其の他日成すあるべきを意識しては居るものゝ、中心これを苦に病まぬ譯には行かなかつた。社會は日增に進步する。電車は東京市の交通を一變させた。女學生は勢力になつて、もう自分が戀をした頃のやうな舊式の娘は見たくも見られなくなつた。青年はまた青年で、戀を說くにも、文學を談ずるにも、政治を語るにも、其の態度が總て一變して、自分等とは永久に相觸れることが出來ないやうに感じられた。

で、毎日機械のやうに同じ道を通つて、同じ大きい門を入つて、輪轉機關の屋を撼かす音と職工の臭い汗との交つた細い間を通つて、事務室の人々に輕く挨拶して、こつ〳〵と長い狹い階梯を登つて、さて其の室に入るのだが、東と南に明いた此の室は、午後の烈しい日影を受けて、實に堪へ難く暑い。それに小僧が無精で掃除をせぬので、卓の上には白い埃がざら〳〵と心地惡い。渠は椅子に腰を掛けて、煙

僞り賣つたのだ。自分を欺いたのだと男は幾度も思つた。けれど文學者だけに、此の男は自から自分の心理を客觀するだけの餘裕を持つて居た。年若い女の心理は容易に判斷し得られるものではない、かの溫い嬉しい愛情は、單に女性特有の自然の發展で、美しく見えた眼の表情も、やさしく感じられた態度もすべて無意識で、無意味で、自然の花が見る人に一種の慰藉を與へたやうなものかも知れない。一歩を讓つて女は自分を愛して戀して居たとしても、自分は師、かの女は門弟、自分は妻あり子ある身、かの女は妙齡の美しい花、そこに互に意識の加はるのを如何ともすることは出來まい。いや、更に一歩を進めて、あの熱烈なる一封の手簡、陰に陽に其の胸の悶を訴へて、丁度自然の力が此の身を壓迫するかのやうに、最後の情を傳へて來た時、其の謎を此の身が解いて遣らなかつた。女性のつゝましやかな性として、其の上に猶露はに迫つて來ることが何うして出來よう。さういふ心理からかの女は失望して、今回のやうな事を起したのかも知れぬ。

『兎に角時機は過ぎ去つた。彼の女は既に他人のものだ！』

歩きながら渠はかう絕叫して頭髮をむしつた。

縞セルの脊廣に、麥稈帽、藤蔓の杖をついて、やゝ前のめりにだら〳〵と坂を下りて行く。時は九月の中旬、殘暑はまだ堪へ難く暑いが、空には既に淸凉の秋氣が充ち渡つて、深い碧の色が際立つて人の感情を動かした。肴屋、酒屋、雜貨店、其の向うに寺の門やら裏店の長屋やらが連なつて、久堅町の低

蒲團

一

小石川の切支丹坂から極樂水に出る道のだら〳〵坂を下りようとして渠は考へた。『これで自分と彼女との關係は一段落を告げた。三十六にもなつて、子供も三人あつて、あんなことを考へたかと思ふと、馬鹿々々しくなる。けれど……けれど……本當にこれが事實だらうか。あれだけの愛情を自分に注いだのは單に愛情としてのみで、戀ではなかつたらうか。』

數多い感情づくめの手紙――二人の關係は何うしても尋常ではなかつた。妻があり、子があり、世間があり、師弟の關係があればこそ敢て烈しい戀に落ちなかつたが、語り合ふ胸の轟き、相見る眼の光、其の底には確かに凄じい暴風が潛んで居たのである。機會に遭遇しさへすれば、其の底の底の暴風は忽ち勢を得て、妻子も世間も道德も師弟の關係も一擧にして破れて了ふであらうと思はれた。少くとも男はさう信じて居た。それであるのに、二三日來の此の出來事、此から考へると、女は確かに其の感情を

蒲團外十一編

かれの心に織込まれて見えたが、それがすべて意味のない空しき現象としか映らなかつた。
空しき現象！　その現象のまゝで、時は唯過ぎて行く。辨慶橋の上の戀ももう昔話になつた。若い時の煩悶も苦痛も何も彼も笑つて話が出來るやうになつた。どんなことでも——どんな辛い悲しい情ないことでもずん〳〵過ぎて行く。個人々々の生活は現象のまゝで日毎に千變萬化して行く。
過ぎ去つたさま〴〵の舞臺やら、人間やら、感情やらが活動寫眞のやうにかれの前に展げられてそして消えた。笑つたり泣いたり悔んだり嘆いたりしたかれが其處にも此處にも見える。
『曾て種々の現象の過ぎ去つたと均しく、此今の現象も忽ちにして過ぎ去るのだ。津輕海峽の怒濤も、此今の自己の境遇も、妻に對する考も、てる子に對する考も、何も彼も忽ちにして過ぎ去つて了ふのだ！』
ふと氣が附くと、路に枝を出した梅が二三輪寒さうに白く咲いて居た。
今日編輯で主幹の言つたことを思ひ出した。編輯では從軍記者に就いての選擇が容易に決らなかつた。活氣が一室に充ち渡つた。扉を開けて入つて來る人が新しい報を齎らす度に、人々の心は躍つた。主幹が『中村君、何うです？　君、行く氣はありませんか、』と言ふと、『中村君なら大丈夫だ。體も達者だし、脚も達者だから、』と社長は笑つた。
てる子のことが流石に氣に懸つたが、すぐ抑へて、
『戰地へ、戰地へ。』

四十六

騒がしい號外の聲を聞流して、勤は日比谷公園に入つた。午後は暖かであつたが、夕暮から風が出て、雲が出て、赤煉瓦の大きな建物の上に殘つた日影は厭に黄かつた。戰端が開かれたといふ日、『そんな大きな戰爭を始めて日本は何うするんだらう、』といふ不安があつたが、愈々敵が復仇に來たと思ふと、人と同じやうに烈しく血が躍つた。國の爲め――かういふ思ひを起したことはかれには稀であつた。

津輕海峽の怒濤が繪のやうに眼の前に浮んで通つた。

田邊の言葉が思出された『タアニングボイント、さうだ今は國家もタアニングボイントにあるんだ!』

何だかかうして居られぬやうな心になつた。時代も國家も矢張自分の閲歷や運命と同じく、盲目の力に支配せられて、無限から無限に動かされつゝあるやうな氣がした。混亂に混亂、紛糾、かうして時代も國家も個人もある大きな潮流の中に流されて行くのである。

平凡なる自己の生活――寧ろ平凡なる人間の生活。

搖籃から死に至るまで、殆ど判を捺したやうな無意味で、平凡でつまらないのは、此の人間の生活だと勤は繰返した。

親と子の關係、兄と弟の關係、夫と妻との關係、友人と友人との關係、それが目の網かい網のやうに

『それでも時々は東京に出て來るかね？』
『いや、滅多に出て來ない。でも此春は來るつて言つて來た。』
『來たら、大に歡迎して遣らうねえ、』と言つて、『子供は？』
『ひとり出來た。』
其時窓の下の濠端の道を號外賣が勇しい聲で通つた。今から三四日前、旅順の攻擊が始まつた。露國に對しての宣戰の詔勅もつい此間出た。田邊は昨年鎌倉の佗住居を出て、ある人の計畫の下に、「時事畫報」を編輯して居た。
『それ、號外！　早く買へ。』
と次の室に向つて呶鳴つた。
下女が號外を持つて、階段をけたゝましく昇つて來た。號外には津輕海峽に敵艦が遣つて來て、運送船を擊沈した報が載せてあつた。
『遣つけやがつたな、』と田邊は叫んだ。
號外の聲があとからあとへと來た。市中は俄かに騷がしくなつた。

『さう〳〵、何と謂つたけな。』

『袖ちやんさ。』

『さう〳〵袖ちやん。』

『あの子がもう立派な娘になつて、ハイカラに結つて、リボンなぞかけて、此間、西君の處で逢つた。』

『我々はまだ昔の氣で居ると、ぢき老人の組に打込まれて了ふんだねえ。』

『ぐづ〳〵しては居られんよ。』

二人は高らかに笑つた。

『田舍の和尚さんは何うだねえ、便りがあるかね。』

田邊がかう訊ねると、

『相變らず丈夫で居るさ。』

『金を殘したらうな。』

『何ァに……殘りもしないだらう。』

『だッて、僕はわが黨のルーチンの爲めになんて、氣焰を吐いたことがあつたぢやないか……少し金を融通して呉れても好いわけだぜ。』

『駄目さ。』

と田邊は盃を勤にさした。

『皆な變つたね。』

かう言つて二人は昔を思つた。

『此間西に逢つたが、先生もすつかり御役人様になつた。』

『西君もさう言つて居た。君も變つたつて言つたよ。』

『さうかな、變つたかな。』と傍にあつた鏡を戯談に取つて映して見て、『さう、別に變つた處もないやうだが。』

一杯グッと干して、

『先生の利根川の家に行つたことがあつたね。』

『うむ』

『機(はた)を織つて居る娘があつたね。』と言ひかけて其時の狀(さま)を思ひ出すといふ風をした。暫くして、

『あの娘、何うしたらう？』

『もう、子供が二人ある。』

『さうかなあ。さうだらうな、もう君も僕も三人の子持だから。』

『西君の姪が居たらう、あの時十歳位で、君が抱いたり何かした——』

田邊はかう言つて笑つた。田邊は其戀した女の話を細君の前で草や木のやうに平氣で話した。

『あの時分は若かつたねえ君。君も讀んだことがある例の日記が、時々本箱など搜すと眼に附くので明けて見るがね、それは馬鹿なことが大眞面目で書いてあるよ、其愚や及ぶべからずと思ふねえ。』

『だつて、其時分は大眞面目だつたんだから。』

『それは大眞面目とも……邂逅したら、あの女め、殺して遣れと思つて短刀を持つて歩いたことがあるからねえ。實際、人は刹那に於てのみ眞面目なので、一時間と謂はず、三十分でも經てばもういくらか其眞劍の度が薄くなる。だから經驗をすればするほど容易に動かなくなる。』

『本當だ。』

『だから一生五十年の刹那を殘らず經驗して見なければ大きなことは言へんのさね、三十五の人は三十五、四十五の人は四十五でなければ、其年代の複雜した機能を知ることは出來ないよ。』

『實際さうだ。八年前、君と日光に行つた時分、戀などといふことに悶えてゐる時分、辨慶橋の上唇代には、今日あらうとは思ひもかけんからねえ。其時分の心持を今の心持に比べて見ると、天と地と墨と雪との相違があるが、それが別段ギャップを爲して居るのではなく、自然に推移るのだから實に驚くよ。自然の前に立つては、我々人間は土偶(でく)のやうなもんだね。』

『そんなことを聞かせられると、不眞面目だつて言つて大に議論の鋒を向けたもんだなア。』

四十五

田邊は別に意見もなかつたが、唯こんなことを言つた。『人間と謂ふものは、どんな親友でも――親子でも立入ることの出來ぬ處がある。第三者にはとても解らぬほど、人間の機能は複雜して居る。隨分深く其心持を知つてるつもりでも、中に入つて見ると、多くは第三者が思つたやうな簡單なものではない。』

また、次のやうなことも言つた。

『人間はタアニングポイントと言つたやうな時期に邂逅することがある。それが外部から來ることもあれば、內部から來ることもある、內外兩方から來ることもある。さういふ時期は人間には大切だ。其人の發展も失墜も多くはさうした時期にある。』

田邊と勤とは茶湯臺に凭りかゝつて、酒を飮みながら昔を話した。

辨慶橋の上で、勤がお光に對する戀を田邊に明かしたことがあつた。それはもう七年も前のことである。月の明るい夜で岸の柳の影が風に黑く靡いた。勤は何うしても今夜は打明けて話すつもりで、其時一緒に居た田邊の家に行つたが、何うしても話せぬので、歸りに田邊を引張出して、其橋の上まで來て、やうやく話した。田邊は以前に戀を得て、そして失つて居た。

『あの時分のことを考へると隨分もう遠いねえ。』

西さんが勤から其話を聞くと、

『でも、細君が困るだらう。』

と眞面目な聲で言つた。其聲の中には忠告の意味が籠つて居た。

『何ァに、平氣さ。かへつて友達が出來て好いよ。』

『だッて、そんなことはいかんよ。さういふことは、よく考へてしないと、後で困ることが出來るよ、君。』

てる子に紹介された時には、西さんは嚴めしく坐つて、窮屈な話の爲方をした。西さんは勤のやうに若い女に對して鑑識力を缺いては居なかつた。若い女の複雜した情の曲折――さうしたことはよく知つて居た。西さんが歸つてから、てる子は『立派な方ね、』とお光に囁いたが、すぐ後を續いで、『でも、私、何だか變だつたわ、何處か怖いやうなところがあつてね。』

『あの人が怖い？』とお光は思ひもかけぬといふ顏をすると、

『だつて怖いわ。人の心をすつかり見拔くやうな人ですもの……先生のお友達では、矢張田邊さんが一番好き。』

てる子はかう言つた。

『何うしてッて言ふこともないけれど、矢張、お前が可愛いもんだから、心配になると見えるんだよ。』

『大丈夫よ。』

『それは大丈夫さ………。事があつちや大變だよ、お前。勤さんがしつかりしてるからそんな心配はないけれど………そりやないけれど………』とわざと重ねて言つて、『そこは又男の考と女の考とは違ふからねえ………。』

と謎みたやうなことをいふ。

お三輪はまたお光の顏を見ても、成たけ避けて其話をしないやうにする。しないのは、するよりも危機を意味して居る。お光が平氣で、てる子の話をしだすと、フン〳〵と唯笑つて聞いてゐる。ある時聲をひそめて、今まで見たこともない眞面目な顏で、『それや大丈夫だけども、慾にかゝつて、奥さんを追出す人はいくらもあるからねえ。』

お光は其言葉が胸につかえて、其意味をいろ〳〵に考へて見た。

兄は書生のことがあつてから、てる子に關しては、一切口を噤んで了つた。何か話をすると、厭な顏をした。生活の補助を弟から受けて居るので、何彼と細かに其家の世話をして遣つたが、てる子の話だけは身を入れて聞かうともしなかつた。相談をかけられると、『さうだなあ、』『それもよからう、』などと煮え切らぬ返事をした。勤も後にはそれと知つて、全く其話を持出さなくなつた。

女でもほれ〴〵する位だつたんですよ。何うして、あんな女を妾なんかにしてるかと思ふと、不思議な位……。』

『あなたが此處に居ることが先に分つて？』

『此間、風呂敷を抱へて、洋服で、路次を入つて來る處で逢つちやつたの。變な顔をして居ましたよ。』

『困つたでせうねえ、』とお光は笑つた。

『それからお妾さんが店に來てよく買物などして行きますよ。此間も母さんに大奥さんに知れると大變だからつて賴んで居たつて……。男つて浮氣なものねえ、油斷が出來やしませんよ。』

『さうねえ。』

お光は家のことを考へた。

見附の處で、秀子に逢つても、『てる子さん、何うして？』と先づ聞かれる。

姉は姉で、

『お前もお客様が來て大變だね。』

『姉さんの家で置いて吳れると好いッて言つてるよ。』

『まアもう少し經つてから、』と言つて意味ありげに笑つて、『母様、此間歸つて來て心配してたよ。』

『何うして？』

すの……男ッてのんきなものねえ。』

ふと思ひ附いたといふ風で『それから、お光さん面白いことがありますの。私前に上つてたお屋敷の若樣のお妾がすぐそこに圍つてあるのよ。』

『お妾？』

『私、此處で、窓の處で見てますとね、其前の家の緣側で、座敷の障子を貼つてる人がありますのよ。何うも髭の工合といひ姿と言ひ、よく若樣に似てるけれど、家に居てあんなに贅澤をしてゐる人が、こんな處で障子を貼つてるなどと夢にも思ひませんからねえ、別な人かと、思つてると、矢張さう……。毎日、華族女學校へ敎へに行つた歸りには、屹度寄つて行くのですよ、可笑しくなつて了ふ。………』

『まァ、さう……何の家？』

『そら、すぐ其處の………。』

二階の下に、庭に松のある三間位の家があつた。踏石の上に盆栽が二つ三つ置かれて、障子は閉めてあつた。

『奥さんや大奥さんに知れると、大變だから、內所にしてあるんでせう。』

『別嬪さん？』

『奥さんの方が何の位好いか。奥さんは矢張華族さんから來たんですから、上品で、容色もよくつて、

『いゝえ、まだ――。』

『何處か早く好い下宿があればいゝがな。』

母親は此間行つた時、襖を明けて淑やかに入つて來て挨拶したてる子の姿を頭に浮べた。

おきよは二階でお光に、

『此間も家で大變賞めて居ましたよ。學問は出來るし、話は旨いし、とてもお光やお前などに眞似が出來ないつて言つてましたよ。』と猒に笑ひながら、『此間も一緒に柳町まで來たんですッてね。』

『政さん、自分でさう言つてゝ？』

『いゝえ、――自分なんか知らん顏してますの。此間ちよいと其話を聞きかじッて、言つて遣りますとね、可笑しいんですの、誰に聞いたッて笑つてるんですもの。』

『一緒に歩くとよく似合つてよ。』

『家ぢや此頃本當に爲方がなくなりましたよ。子供が出來ると、男といふものは皆なあゝかしらん。もうちつとも構つて吳れやしません。子供が煩さいッてばかり言つてて。』

『男は皆なさうね。』

『やさしい言葉などかけて吳れッたッてかけて吳れはしませんよ、もう。此間もね此上に、大きな家の娘がありますのよ、その娘が學校に行く時、いつも一緒になるんだッて、いつもそんな話ばかりしま

『まだ學校がきまらんかな。』
『四月まで遊ぶつて言つて居ました。』
『何んな人ぢやな。』
笑つてお光の顔を見る。
『母さん、此間逢つたぢやないか。』
『氣分を言ふのぢやがな。』
『好い人ですよ。そりや、深切な………。』
母親は聲を落して『お前、さうぢやけども………いくら深切な人でも、滅多なことを饒舌つてはいかんぞな。』
お光は母親の心を讀み兼ねたが、『滅多なことなど言ひはしませんから大丈夫ですよ。』
『でもなお前、口を愼まないと、何んなことが起らんものでも無いぢやでな。』
『あゝ、それはもうよく解つてますよ。』
『本當によく氣を附けな。』
母親の心では、お光ののんきなのが何だか齒痒かつた。
『勤さん、本でも教へて遣るかな。』

『奧さんも御丈夫で………。』

あんな女に負けてはいけませんよといふ言葉が口から出ようとしたが、お菊はそれを押へて言はなかつた。何とはなしに涙がこぼれる。折角馴染んで自分の家のやうになつた。我儘も言つた。奉公人にあるまじき臣もきいた。まだ二年や三年はお世話にもなり世話をもして上げようと思つた。それが、かうした行懸りで——靜かな水に石を投り込まれたやうな行懸りで、ついわけなく別れて行つて了ふのが、いかにも儚なく心細いやうな氣がした。人間には、ある時ある場合、常に平氣で過して居た世の中の過去と將來とが分明と頭に映つて來るやうなことがあるが、さうした思ひが別れてゆくお菊の胸にも漲り渡つたのである。

お菊は別れてから、門の處で暫く立留つて泣いて居た。

四十四

お光は到る處でてる子のことを聞かれた。

里に行くと、先づ第一に母親は心配さうな顏を笑に包んで、

『何うぢやな、何と言はしつたな、てるさん………さうぢやてる子さん何うして御座るな。』

『勉強してますよ、家で。』

を拵へたり、繻子の帶を買つたりして、時々は見違へるやうにめかし込んで出懸けた。ねんねこの新しいのを喜ぶやうにもなつた。每晩抱いて寢た咲子も大きく可愛くなつた。――それが皆な別離に臨んで、取集めて、犇と胸に迫る。

氣强いことを言つて、此處ばかりが主人ぢやないといふやうな氣になつたが、さて別れるとなつて見ると、矢張名殘が惜しかつた。四五日前、濠端の政次が土曜の役所の歸途に、ハイカラな洋服姿をして遣つて來て、火鉢の傍でてる子と一緒に睦しさうに話した。てる子の艶かしい樣子と政次のやさしさうな話振とが、前に山口のことがあるので、何となしに腹立たしくお菊には見えた。やがて勤が歸つて、夕飯の御馳走も濟んで、政次が玄關で靴を穿いてゐると、てる子がちよつと其處まで買物があるから御一緒に參りませうと言つて、そろつて出かけようとする。送つて出た洋燈の光にてる子の顏は白くくつきりと際立つて見えて、政次のいゝ男振とよく似合つたので、われ知らず、『おそろひで、よく似合ひますよ、』とひやかして笑つた。それが後で小言の種になつて、主からしたゝか叱られた。そんな失禮なことを言ふ奴は使つて置かれないと言つた。勤は前からお菊のてる子に對する素振を見て居て、折があつたらと思つた。その折が來たのである。お菊が暇を乞うて許されたのは其翌日であつた。

女だけに、長年使つて馴染んで居たゞけにお光はお菊との別離を惜んだ。『暇があつたら、時々お出……。』と言つて縮緬の半襟を遣つた。

『山口さん、山口さん、』とお菊は思ひ出したやうに、『あなた、小づかひ持つてゝ？』

『金なんかあるもんか。』

『ぢや、』と帶の間から自分で縫つた巾着を出して、中から細かく折つた一圓紙幣を濡れた手でつまんで、

『これ、少しだけれど持つていらつしやいよ。』

『金なんかいらん。』

『だツて、一文なしぢや――。』

要らんと言ふのを、お菊はわざ〳〵立つて來て、無理に男の懐に入れて遣つた。

四十三

勤の家の空氣が頻りに動搖した。下女がまた出て行つた。

新しい婢が目見えに來て、一日働いて見て、居ることにきまると、お菊は荷物を白い大きな風呂敷に包んで、お別れの言葉を述べた。田舍から出て四年目、其頃にはまだほんの小娘で、町の通りを平氣で子守唄を唄つて歩いた。肥つた手を皸だらけにして泣いて居たこともあつた。東京の面白いことも、菓子の旨いことも、氷水の飲みたいことも、男の面白味も皆な此處で覺えた。白粉をつけたり、銘仙の着物

『さうさ――、定つてゐらァね。先刻、あつちの家から、ちよつと來て呉れと言ふから行つて見ると、昨夜、彼方の先生に話があつたんだッて。てる子さんは來たし、費用が多く懸つて爲方がないから、彼方の家に當分引取つて呉れッて言ふんださうだ。それは別に理由があるのは定つてるけれど。』

『さうさね。』

『僕だッて、此方の宅に世話になつたのは彼方の先生が困つてるから來たんだから、今更、彼方の先生の處に歸つて行くわけには行きやしない。………』

『それはさうさねえ。』

お菊は胸が晴れたやうな思ひがした。そして一方では山口に對する同情が盛んに起つた。山口は、

『僕だつて、友人もあるし、知己もあるから困りやせんさ。………これから出懸けて行つて寢る處を搜して來るんだ。』

かう言つて一生懸命に鼻緒の前壺をすげて居る。

お菊は笑つて小聲で、

『えらい人が入り込んで來たものねえ！』

『これから一芝居さ。』

と山口も笑つた。

で鼻緒をすげ始めた。

『山口さん、何してるの。』

『御覧の通りさ。』

笑ひもしない。

『何處かに行くの？』

『あゝ。』

お菊は洗濯を續けた。

『扶持に離れた身は可哀相なもんさ。ぐづぐづして居られやしない。今夜寢る處を捜さなくつちやならないんだ！』獨言のやうに言ふのをお菊は聞きとがめて、

『何うしたのさ？』

『今から宿なしになつちやッた。』

『何うして？』

お菊は其耳を疑つた。

『何うしてッて！　別に意味はないさ。置いて呉れないッて言ふんだから、爲方がないぢやないか。』

『それはさうだけれど――可笑しいぢやないかね、唯斷つた？』

と言つたと思ふと、すッと立つて下女室に行つて了つた。
てる子は下婢のかうした素振に喫驚したやうな顔附をした。
『先生、何うかしてるんですよ。』
と書生は言つた。
お光が子を寢かしつけて、はだけた乳を胸に藏ひながら出て來た。話聲と笑聲とはまた續いた。

四十二

ある日、山口は兄の家から使ひを受けて出懸けて行つたが、一時間ほどして、すご〳〵歸つて來て、玄關の自分の室に入つて、机のあたりをごと〳〵させて居たが、着物を着替へて外出の支度をした。
茶の間を通る時、てる子とお光と長火鉢に相對した話をして居たが、見向きもせずに通つて勝手に行つて、手を洗つて水を一杯飲んだ。
お菊は井戸端で洗濯をして居た。
山口は水口から下駄を突懸けて、裏に行つた。物置に放つて置いた鼻緒の切れた駒下駄をさがしに行つたのである。お菊は洗濯をしながら、頭を分けた山口が竹箒や埃取や薪や炭俵や大きな石を載せた澤庵桶の間を頻りにさがし廻してゐるのを見たが、やがて古い疊表の駒下駄を一足さげて來て井戸端の傍

次の間に行きかけると、てる子は『奥さん、私、だつこして上げませう。』と傍に寄つて來る。
『いゝのよ、いゝのですよ。』とお光は抱へるやうにソッと子供を抱へて、次の間へ行く。
遣つた菓子も食はず、茶も飲まず、暗い顏を低頭かせて、隅の方に小さくなつて、お菊がせつせと針を動かして居るのを兄は見附け出して、
『お菊、何うした？　何か心配ごとでも出來たかね！』と戯れかけると、
『えゝ、何うせ私なんか。』
笑ひもせずに、矢張低頭いたまゝ針を運ばせて居る。
『これは御挨拶だね。』
と兄の笑ふのにつれて山口も笑つた。てる子も解らずなりに笑つた。
『お前、菓子でも食つたら好いぢやないか。』
勸に言はれて、
『えゝ、後で戴きます！』
『お菊、何うかしたね？』と口がまた笑ひかけると、
『屹度好い便（たより）が無かつたんでせう、』と何か知つてるやうに山口が言つた。
『山口さん、たんと仰しやい！』

い素振を見せる。山口は笑つて居た。

夜は賑かであつた。兄がよく遊びに來た。てる子と兄と初對面の挨拶をしてから日數がかなり經つた。兄が來ると、戯談を言つて屹度皆んなを笑はせる。八時には子供が皆な寢て了ふので、それからきまつて茶を淹れて燒芋だの菓子などを食ふ。八時には勤が、『てる子さん、お茶がはひつたから、來ませんか、』と呼ぶ。

てる子は二疊から出て來る。輕い足音がして、仕切の襖がすうと明いて、闇から白い顏が出る。髮の後姿を見せて、しやがんだ儘襖を閉てゝ、さて座に就いて丁寧に兄に挨拶した。書生も傍に來て坐つて居る。お菊もお光の後に雜巾などを刺しながら見て居る。輕い明るい言葉が流るゝやうに人々の口から出て樂しげな無邪氣な笑聲が一座に充ち渡る。

洋燈の明るい光が勤の肩からかけて、兄の優しい顏の半面と膝の上に重ねたてる子の細い指とを照らした。

鐵瓶の湯はグラ〳〵沸立つて、白い湯氣が盛に颺つた。『山口さん、水をさして下さいな、』とお光に命ぜられて、書生は立つて火鉢の前に行く。

一座が茶を飮んだり、菓子を食つたり、面白さうな話をしたりして居た。

お光は赤兒を抱いて居たが、重くなつたので、下に寢かさうと思つて、しびれた足を引摺りながら、

りませんよ。』

お光とてる子はこんな風にもう隔てを置かなくなつた。

てる子はまたよく出歩いた。通りの小間物屋、坂下の雜誌店、西洋菓子を賣る店などに其姿を人々は見懸けた。勤が朝夕の行きかへりにも處々で逢ふことがある。雨の降る中を蛇の目傘に高い足駄で縫ふやうにして歩いて行く後から、いきなり聲を懸けると、驚いたやうに振返つて『まア、先生』と言つて莞爾する。

『何處へ行つたの？』

『ちよつと手紙を出しに…………。』

四十一

書生とてる子と話をすると、お菊は變な顏をして居る。あの事があつてから、離れた心が合ふやうになつて、不思議にもお菊は山口にやさしい素振を見せた。下駄の鼻緒などを立てゝよく世話してやつた。山口は山口で、『お菊さん、本當によく働きますねえ。』と同情の深い言葉を懸けた。その合つた心が、てる子が來てからまた離れた。

勝手元に來ても、いつもツンケンとして居る。『私など何うせ相手になりませんよ。』といふやうな當な

懸けた編棒の手を留めずに、いろ〳〵故鄕の話や學校の寄宿舍の話などをする。夜など、玄關の傍の室に行つて一時間も熱心に何か話を續けて居ることもあつた。と、お榮が、『今の娘は丸で私達の時代とは違つて來ましたねえ。』と、一種の笑ひを顏に湛へて、それとなく諷した。

『もう、女も恥かしがつてばかりは居なくなりましたから。』

勤は定つて、かういふ返事をしたが、矢張餘り好い心地はしないと見えて、別に用事もないのに、『てる子さん、ちよつと。』などと呼んで、今日持つて來た雜誌などを見せる。

隣りの小學校に通ふ女教師とも間もなく懇意になつた。始めは日曜など裏の木戸の處に立つて、二人は話をしたが、二三日經つと、今迄お光の處には來たことのない娘が、庭から敷石傳ひに、二疊の室の前の緣側に來てお饒舌をして行く。

『てる子さん、中々交際がお上手ですね。』と、もう徐々起きられるやうになつたお光が、隣の娘の歸つて行く後姿を見ながら言ふと、

『さう？　何うしてですの奥さん？』

『だつて、………すぐあなたはお友達が出來ますもの。』

『私はお友達にならうなんて思はないんですけれど、雜誌を貸してッて仰しやるものですから。』

『お友達が澤山出來る方が好いのよ。私などお友達といふものがなくつて、本當に淋しくて爲方があ

る前に長大息(ためいき)をついた。

四十

隣近所でも二階の家に若い女學生の來たのを話の種にした。何(ど)うかすると琴の音などがする。古いお光の琴を引出して、小半日懸つて糸を緊(し)めて、むづかしい曲をすら〱とてる子は鳴らした。

裏の畑へ行つて、なづ菜などを摘んで居ることもあつた。白い顔を薄暮の色の中に浮かせて、小聲で讃美歌をうたつて居ることもあつた。時には井戸端へ行つて野菜物を洗ふお菊の傍に立つて、面白半分に水など汲んで遣つた。

さうかと思ふと、一日青い顔をして、二疊に引籠つて讀書をするのでもなく、筆を執るのでもなく、机に凭り懸つて物思はしさうな樣子をして居ることがある。顔が非常に綺麗に見える時と非常に醜く見える時とある。そんな時に、お光が『てる子さん、何うかして？』と訊くと、

『私、變でせう。何うかすると、私厭な氣分になりますのよ。』

二疊に居ない時には、毛糸の玉を袂から出して、編棒を梭(をさ)のやうに細い指で動かして、見る〱子供の涎懸けや襟懸などを拵へる。

無邪氣に書生と話をして居ることもあつた。朝、書生が庭を掃いて居ると、緣側に腰を掛けて、編み

座敷の奥の二疊の間が物置になつて居た。彼處では餘りにむさくろしい、產室が明いたら、其處を貴孃の室にして上げるから、それまで座敷の八疊に机を置くやうにと言つたが、却つて其の狹い二疊の方が物を考へたり何かするには氣が散らなくつて好いといふので、翌日出勤前に勤はお榮と一緒に、古葛籠や古屛風や長持や古雜誌の束ねたのなどを片附けて使ひ古した机に有り合せの更紗の布を被けて、重硯の一つを持つて來て貸した。本箱も二箇ほどあけて遣つた。

其日歸つてから、勤が其室に入つて見ると、あたりはすつかり片附いて本箱には愛讀書が綺麗に並べられ、着物を入れた大きな支邦鞄は其傍に積重ねられた。今まで讀んで居た一葉全集に、絹糸で編んだ枝折が斜に置かれてあつて、一輪挿にさした沈丁花が強く狹い室に匂つた。

座敷と居間とを隔てた產室は暗く寒かつた。花もなかつた。二三日來の混雜で、少し血が頭に上つたかして、何うも頭痛がして爲方がないと言つて、お光は鉢卷をして居た。終日光線の何處からも入らない袋のやうな室で、枕元にはサフランを飮んだ茶碗が盆に載せて置いてあつた。生れた兒は小さい蒲團に小さい枕をして、ねんねこと毛布とを被けて寢て居た。何だか昨日あたりから乳が出なくなつたと言つて居る。

勤は產室を出て二階に上つた。六疊の書齋には書藉や雜誌や反古が一杯になつて散らばつて居た。机の上には今朝早く起きて書き懸けた原稿が半ば黑く塗り消されたまゝになつてひろげてある。勤は筆を執

その翌日、夕暮に勤が社から歸つて來ると、てる子は玄關から晴々した顏を出した。道具一切を車二臺に載せて、その午後に移つて來たのであつた。產室に行くと、『今日、てる子さん、引越して入らしつてね、父さんが今一度上るんですけれど、國が選擧で手放されないから失禮するッて……こんなものを頂戴しましたよ。』とお光は土產物を示した。

『父樣は？』とてる子に聞くと、

『今夜の六時の急行で。』と莞爾する。

子供等が皆すぐ懷(なつ)いて、煩さいと思ふ位其袖やら膝やらにまつはつた。男の兒をかゝへるやうに抱いて、首を傾げて、他愛のない片言を聞くやうにして、そしてをり〳〵眼で勤の方を見る。

勤の晩餐の給仕をするお榮の傍に坐つて、快活な調子で、てる子は話をした。聲と言ひ、態度といひ、表情といひ、總てが生々として居た。倦み果てた、疲れ果てた家の空氣が俄かに一洗されて、洋燈まで明るくなつたやうな氣がした。

書生が學校から歸つて來た時は、もう十一時を過ぎて居た。其巷路はいつも樹の影が闇に蔽ひ冠さつて暗かつた。家々から微かな明りさへ見えぬのが常であつた。であるのに、其夜は鍵の手の路を曲つた處から、其處等と思ふあたりに明りがぱつとさし渡つて、ゆづり葉の廣い葉裏が照りかゞやいて、門に近づくと、笑聲と話とが賑かに高窓から洩れて聞えた。

『そして、何うなさるの、宅に置くの？』

『宅に置きはしないが……下宿の定まるまでは置いて遣つても好いつて言つてやつた。父樣は話を定めて一刻も早く國に歸りたいつて言つてたから……。』と少し考へて、『何うだらう、姉さん、置いて呉れないかしら。』

『姉さん？……何うですかねえ。』

お榮が入つて來たので其話をして、『秀ちやんの勉强の復習などして貰ふにも都合が好いと思ふが。』と言ふと、姉は考へて、『さうねえ、まァ、少し考へて見るよ。好ければ好いけど惡かつたりすると困るから。』

其夜、床についてから、勤は遲く迄眠らなかつた。傍には咲子が可愛い顏をして寢て居た。夫と妻と子との關係が繰返し繰返し頭腦に上つて來る。『子が出來ると男女の關係が全く肉の關係になる、』と言つた田邊の言葉が思ひ出される。てる子に對して一種の感じを經驗したといふこと——そのことが更に夫妻と子との複雜した關係を明かに勤の前に展げて見せた。

三十九

翌日、勤はてる子親子を芝の旅館に訪ねた。

た。知らずに父親と話して居ると、いつか其眼が見て居る。心を奪つて居る。何だか其眼はてる子が初めてよこした手紙の中にも、もう既に光つて居たやうにも思はれ、その山の中の田舎町のさうした家庭に生ひ立つたある力が、偶然ながら時機を待ち得て、荒涼とした生活の上にある意味を齎らして來たやうにも感じられた。其眼は確かに勤の戀をした時代の簡單なものではなかつた。節操をのみ女子の寶とした昔の恥を含んだやさしいおとなしい無邪氣なものでもなかつた。さうかと謂つて平凡なる生活に倦んだり疲れたりするやうなものでもなかつた。

勤は玄關まで送つて出た。

てる子は下駄を穿いても、コートを着なかつた。勤が寒いからと言つて勸めても矢張其儘にして居た。父親に、『折角先生がさう仰しやるんだから、』と言はれて始めて小さくなつて着た。コートの裏地は派手な薄紫の綸子であつた。

あとで勤はお光に、

『お前によろしくつて言つて行つたよ。』

『別嬪さんですッてね。』

『何ァに。』

少時默つて居た。やがて、

とお榮は立つて行く。

膳を運んで來た時には、客は旣に歸り支度をして居た。お榮が座敷に來て給仕をした。てる子の恥かしさうに箸を取るのをお榮は見ぬやうにして見た。

障子にさした夕日は消えて、裏の欅の樹が潮のやうに鳴る。『ひどい風ですこと！』膳を引いた後で、てる子が誰に言ふともなく言ふと、

『東京の空ッ風ッて今が一番氣候のわるい時ですから。』

勤がかう引取つて言つた。

兎に角女子大學の方も聞いて遣らう、しつかりした下宿も搜して遣らう、下宿があるまでは取敢へず家に來るが好いといふことに話が決つた。

『奥さんにお目にかゝりませんが、何うぞよろしく仰しやつて頂きますやうに………。』

別れる時、父親が言つた。

『奥さまにもよろしく。』

てる子もかう言つて勤の顏を見る。

勤はてる子の眼を到る處で胸に深く刻んだ。其の複雜した引力に富んだ情の曲折を巧に表はす眼！其處でも此處でも其眼に邂逅して、其の度毎に自分の心の底のある部分を奪ひ去られるやうな心地がし

さんを親が見ず知らずの東京に出すといふのは解らないねえ。何か譯があるんぢやないかね。』
『わけつて？』
『わけつて別に何でも無いがね………。無闇な人に關係して後で困るやうなことが起りやしないのかしら………。勤さん、あの父樣や何かよく知つてるの？』
『それは手紙で………。』
『それはそんなことはないだらうけれどね、あゝした娘を一人他人の中に手離すといふことが、ちよつと私達には考へられないから………』と囁くやうに言つたが、『それで、何うするんだらう。今夜泊つて行くんだらうか？』
『それは歸るんでせう。』
『さうかねえ、田舍の人だから、存外平氣で泊つて行く氣で居るかも知れないよ。それだとね、お前蒲團を何うかしなくつちやならないよ。』
『泊つて行きはしますまいよ。まさか。』
『さうかしら。』
『でもね、御飯の準備だけはして下さいよ。』
『それはもうしてるよ。』

『結婚のことに就いては、別にこれといふ希望もありませんし、自由結婚といふことも好いとは思ひますが、今の女學生のやうに墮落して了つては困りますので………其時には先生にも相談して、それでよろしいものなら、私には別に異存もありませんけえ。』

と父親は存外打解けた意見である。勤は田舍紳士として、非常に開けた人だと思つた。

『何うせ世の中は思ふやうにはなりませんでな……一番係累のないと言ふことが何よりですがな……』と勤の顏を見て、『かうして娘を遠い處に伴れて參るといふことも矢張まゝならぬ浮世ですな。』

こんなことを言つて笑つた。

壁一重隔てた產室では、お光が耳を聳てゝ座敷の會話を聞いて居た。父親の聲、勤の聲、をり〳〵其間に交るやさしい華やかな聲――其聲に何だか美しいハイカラな人がありありと眼に浮ぶやうな氣がした。襖を細目に明けて覗いて見ようとすら思つた位である。勤の錆びた聲とてる子の華やかな聲とが雜り合つて聞えると、思はず顏が熱つて胸の動悸が高くなつて、ついわれ知らずイラ〳〵する。平生お光が人知れず苦勞にして居た自己の缺點――文學の上で夫のさびしさを慰めることの出來ない缺點を、その若い華やかなてる子が滿すかと思ふと、胸が騷いだ。

兒が小さやかな聲を立てゝ泣き出したので、起返つて、乳を含ませようとすると、お榮が其泣聲を聞つけて入つて來た。『別嬪さんだがね、中々』と聞きもせぬのに小聲でお榮は言つた。『それでも、あの娘

話は段々文學に移る。

『文學といふものは他から見ると、大變派手な面白いやうに思へるかも知れませんが中々むづかしいつらいもので、男でさへうはの空では出來んものですから、まして女は……餘程の決心がなくつては駄目ですから、私は其事はてる子さんに始めてお手紙を頂戴した時から申したんですが。』

『それはもう十分呑込んで居るんですけえ……何うしても文學でなくてはいかん言うて、これで中々我儘でしてな……一度言ひ出すと、親でも何でも言ふことを聞きませんでな。』と娘を少し顧みるやうに頭を曲げて、微笑を顏に湛へながら、父親はいふ。

『その熱心は好いですけれど……只熱心だけでは爲方がありませんから、そこはよく考へて戴かないと……』

勤は眞面目な調子になつた。

『何うぢや、お前、先生の仰しやることはよく解るぢやらうな。』

『え、よく解つて居ります。』

とてる子は頭を下げた。

父親は娘の病身のこと、稚い頃から神戸に出して寄宿生活をさせたこと、物心が附く頃から文學が好きで筆を手から離さなかつたことなどを語つた。話の順序として、やがて來るべき結婚の話が出る。

八疊の一隅には洋書を入れた大きな本箱があつた。桐の唐机の上に雜誌と新刊書とが半開いたまゝに亂れて居たのを、勤は話しながら直した。客は文晁の山水の幅を懸けた床の間と、蒔繪の重硯箱(かさねすゞり)を唯一つ置いたさびしい違ひ棚とを後にして坐つて、父親と勤とが主(おも)に種々の話をした。勤の眼に映つたてる子は美しいと言ふよりも寧ろ引付けられるといふ風であつた。縞お召を着て、襟は白綸子に赤く細かい模樣の浮いたのをして、髮には白いリボンを挿した。飽かず話して居る勤の顏をてる子はをりをり見る。

『丁度家内が產をしましたので、ごたごたして居りまして。』

と話の途切れた時に勤は言ふと、

『それはお目出度い。』

てる子は、『おやまア、さうですか、』と眼を張る。

話はそれからそれへと續いた。てる子は何處となくそはそはして居た。逢つた時に言ふことをいろいろに考へて來たが、それが少しも口から思ふやうに出なかつた。尾の道から神戶、其處の親類に三日ほど逗留した。其日が長くつて爲方がなかつた。新しい友達を訪問する氣にもなれなかつた。神戶から長い汽車の路、其間にも東京のことばかり思ひつめて、さて芝の旅館から吹荒む西風の黄い埃の中を山手の奥まで來て、今、其願が遂げて、かうした靜かな一室の中に其人と相對した……小鳥の行水をつかふ影がまた障子に動く。

間に行かうとするのを捉へて、お光は、

『誰れ？』と小聲で訊いた。

『そら、此間から話して居た人がいよ〳〵來たんだとさ。』

『さう………』とこれも矢張胸が騷ぐといふ樣子で、

『何んな人………』と聲をはずませて訊く。

『まだ私見ない………』と言つたが、『まア、お前ぢつとしてお出でよ、血にさわるとわるいよ。』

此方の茶の間では、書生が火鉢に火を入れながら、笑つて、

『先生、素敵ですよ。』

『何が………』

『私の想像した通り。』

と火鉢を運んで行く。

座敷の緣側には、午後四時過の日影がぱツとさしてゐた。霜柱の半ば解けて崩れた踏石の處に、沈丁花が簇り咲いて、匂ひが微かに靜かな空氣に雜つた。石の手水鉢の傍の、南天燭の赤い白い實を、小鳥が常に啄みに來てゐたが、低い枝から手水鉢の上に下りて、をり〳〵行水をすると、其水の動く影が日を帶びて障子に寫る。

の光を雪を載せた松の梢に送つた。
　てる子の顔は晴々しくかゞやいた。

三十八

　お七夜の赤飯、お頭つき、祝儀に鰹節をつけて貰つて、産婆は喜んで歸る。勤は自分でも心祝の積で、手傳に來て居るお榮に晩酌の準備をして貰つて居ると、玄關に人の來た氣勢がした。
　書生が取次に出たが、すぐ飛んで來て、
『先生、田舍の……………』
『來たのか。』
『え丶。』
『母樣と一緒？』
『い丶え、父樣らしいです。』
　姉のお榮も手を留めて聞いて居る。勤も何處となく胸が騷ぐ。
『通して置き。』
　客は導かれて座敷に通つた。其前に、お榮は産室と座敷との間の一枚の扉を慌て丶閉めた。すぐ茶の

『尾の道でも、神戸でも皆さんに宜しく。』
『後をよく頼むぞ。』
主の聲ははつきりとして居た。車は凍つた地上を動き出した。
『左樣なら。』
『左樣なら………』
『てる姉さん！ 御機嫌よう！』と長く曳いた稚い妹の聲が高く聞えた。綱をつけた車はガラガラと勢よく凍つた雪道の上を走つた。振返つて見ると、提燈の光がまだ其處を離れずに……。
混雜した光景の中から、丁度其處だけ切り取つて離して見たやうに、鮮かにてる子の頭に浮んだ。黎明の光が山合から何處となくさして來て、町から一里ほどの村落を離れると、谷川がザァと脚の下に鳴つた。谷の竹藪は雪に伏してゐる。
路傍に低い茅葺屋根の百姓家が一軒あつた。入口の處に立つて居た一人の老爺が、威勢の好い車に眼を睜つて、車の上の人を見て、慌てゝ丁寧に辭儀をした。『町の吉江の孃さん、また修業に行かつしやると見える。』と口に出して言つて、二臺の車の見えなくなるまでぼんやり見送つてゐたが、やがて手を後に廻して裏の方に行つた。
小さい峠の上には、松が一本立つてゐた。其處に來た時、丁度朝日は山と山との間から昇つて、最初

思はれる。山は總て黑かつた
地には雪が薄く蔽つた。
此の二臺の車は、今から一時間ほど前、まだ曉の眼から覺めぬ寂とした田舍町の闇の中から發(た)つて來た。曉近く、暗い町の家並に、一ところ燈火の明く洩れた大きな家があつて、くゞり戶の前にこの二臺の車は久しく微暗(ほのぐら)く置かれてあつたが、やがて人々のがやがやと騷ぐ音がして、提燈の光が彼方此方に動いた。
『もう早く發(た)たんと二番には間に合はんけえ。』
『路が惡いでな。』
語り合ふ聲が寒さに震へる。空は晴れて曉の明星がキラキラ光つた。やがて二重外套(マント)に毛の襟卷をした此家の五十位の主が出て來て、一臺の車に乘ると、續いてコートを着て庇髮に結つた中脊の娘が他の一臺に乘つた。雇人や下婢が手廻りの物を入れた鞄や信玄袋を運んで來て、車の蹴込に載せると、車夫は厚い毛布をかけて梶棒を上げた。
娘の母も兄も兄の妻も稚い妹も皆其前に並んだ。母が、
『それぢやてるさん、丈夫で。』
『母さん左樣なら、兄さん左樣なら。』

と男の兒は不思議な顏をする。朝に晚にまだ乳を離さずに居たので、いきなり傍に寄つて母の乳を探る。

『今日はかァちやんキーキがわるいから………彼方へ行つて居よッね………好い兒だ、邦雄は。よく聞き分けるね、』とすかすと、

『かァ、キーキ。』

とそれも聞きわけて、父親に連れられて、六疊に行く。

夜は全く明け離れた。

隣の車井戸の音がする。鳥が啼く。何處か遠くで汽笛の鳴るのが聞える。裏の藪に霜が白く置いたのが見える。勝手では今火を引いたと見えて、烟が一杯に滿ちて、餘りが六疊まで流れ込んで來る。

『飯が出來たら、すぐあとで湯を沸かすんだよ。』

と勤は顏を勝手に出して言つた。

其處にお三輪が書生の山口と一緒に呼吸を切つて飛んで來た。

續いて產婆も來た。

其頃丁度二臺の車が瀨の音の高い谷川の緣を縫つて、郡ざかひの小さい峠に懸りかけて居た。

燃えるやうな黎明の空が谷の半を染て、山と山と重り合つた間から、朝日の昇るのももう程がないと

五時には、男の兒の他は家内中皆な起きて居た。竈の前に蹲踞んだお菊の顏は火に赤く、早起の咲子は其傍をちよこちよこして居た。勤はガラ〳〵と前の戶を繰ると、冷めたい新しい空氣は流るゝやうに室內に入つて來た。もう戶外は薄明るく、晴れた空には黎明の光が交つた。

產室では、お光は白い顏だけ出して、搔卷に包まれて寢て居たが、勤が行つて見ると、

『お婆さん、まだ。………』

『もう來る。』

邦雄が六疊で眼を覺まして、

『かァちやん、かァちやん。』

勤が行つて着物を着せて遣らうとすると、

『かァちやん、かァちやん』と言つて泣く、まだ漸く數へ年の三歲、母の手は離れ難いのである。

詮方なく、產室に伴れて行つて、

『それ、かァちやん、此處にねんねしてゐる。居たらう、かァちやん………。』

お光が笑つて見せると、男の兒はそれで納得して、自由になつて、父親に着物を着せて貰ふ。『邦雄は好い男だな、かァちやんが今好いねんねを生んで遣ると………。』

『ねんね。』

勤は默つて了つた。

やがていつものやうに、行火を床から出して、ランプを行燈に點け更へて、便所に行つて來て再び床に入つたと思ふと間もなく鼾が高く聞え出した。お光は腹が痛むので、山手の夜をひとりさびしく目覺めて居た。

これはもう愈々生れると思つた時、明方の四時が鳴つた。出來るだけ自分で準備をして置かうとお光は蒲團を四疊半の間にソッと引張つて來て、押入から兼ねて揃へて置いた一切の產の道具を出して、今一度改めて見て、六枚折の古屛風を立廻して居ると、眼が覺めた勤は六疊で、

『お光、お光。』

傍に行つて、『もう生れさうですから、』と言ふと、勤は眼を摩りながら、

『何だ、もうお前準備をしたのか。』

『えゝ。』

『それぢや、もうすぐ山口を起して產婆を迎へにやらう。』

と起上つて四布蒲團の上にかけた着物を着にかゝる。

『それぢや、邦雄をお賴みしますよ。』

『いゝとも。』

『今度は大丈夫か。』

『えゝ、今度はお腹の兒もしつかりしてますよ。初めから邦雄の時に懲りて、ちやんと養生をして置きましたから。』

いつとなく話が變る。

『てる子さん、もう來るんでせう。』

『もう來るかも知れないよ。』

『でも此間の手紙では、まだ急なこともないぢやありませんか。』

『よく解らんけれどねえ、』と勤は鳥渡言葉を途切らせて『屹度田舍からすぐ來るんだらうと思ふけども、若い娘のことだし、一人手放してはよこされないから、それで屹度後れるんだよ。丁度今は田舍の正月だからね………母さんか誰か連れて來るに違ひないから。』

『さうでせうねえ屹度、………』かう言つて白い顏を浮ぶやうに薄暗い闇から見せて、

『何んな方でせうねえ、早く逢つて見たいやうな氣もしますよ。私のやうなものは、お友達になれるかしら?』

『なれるとも………なれなくつてもなつて貰ふさ。お前には友達といふものがないから丁度好い。』

『何んな方でせう。屹度別嬪さんよ。』

『でも、夜中に起されるとつらいから、今の中、山口に、産婆にさう言つて來て、居て貰はうか。』
大丈夫でせう。明日の朝位までは生れるやうなことはないでせう。』
『大丈夫ですよ。』
『まだ痛みはしないのか。』
『少しは痛みますけれど、まだこんなことでは中々生れやしませんから。』
お光は平氣でゐる。
勤は行火で暖めてある床の中にもぐりながら、枕元にランプを置いて、いつも習慣になつて居る讀みさしの書を十頁ほど飜して見たが、頭も眼も勞れてゐるので、止して、
『お前もお産は上手になつたな。』
『えゝ。』
『咲子の時はつらかつた。』
『本當に咲子の時には、樣子が解りませんし、手はなし、あんなに困つたことはありませんねえ。』
『邦雄の時も隨分長く苦んだねえ。』
『えゝ、あの時は……無理をしたんですもの。生れる半月前に、車になど乘つたんですもの。あの時は初めからいくらか重いつて言ふことが解つて居ました。』

とはなかつた。かうした思ひの起るのは何だか自分ではないやうな氣がする。遠い昔の反響のやうに思はれた。

雪に光る淺間山は汽車の駛るにつれて、左に見えたり右に見えたりした。碓氷川の瀬は白く砕けて、風はをり〳〵ドッと車窓に砂埃を吹きつけた。勤は何年にも詠んだことのない歌を考へて、隠袋から手帳を出した。友達の家に着いたら、淺間山の繪葉書を一枚貰つて、歌を書いて、遠い山中のてる子に贈らうと思つたのである。

勤は焦茶色の外套に黑の脊廣、てる子の送つて呉れた大きな毛糸のシャツを下に着て居た。

三十七

裏で蕗の薹をさがして居た時から、腹の具合が少し變だつた。産れるのかも知れぬとお光は思つたが、それなりまた靜まつて、夕飯の準備を手傳ふにもさして大儀には思はれなかつた。三人目にもなれば、經驗で略々様子が知れて、さう騒ぐにも當らないといふ落着いた氣になる。

其夜は遲くまで勤は二階で筆を執つて居た。下りて來たのはもう彼是十二時に近かつた。お光は床に入つて居る。

『何うだ、催して來たやうな様子かね？』と、聞くと、『さうですねえ、まだよく解りませんけれど、

て居る。

汽車の窓には煤烟と砂埃とが風に煽られて烈しく當つた。耳を欹てると、汽車の馳る音と川の瀬の鳴る音と風の吹暴れる音とが一緒になつて、さながら物の吼えるやうに聞えた。

午後三時過の日影は、左の窓から車内一杯にさし渡つて居るが、湯タンポも無い三等室は、ぞく〳〵と身ぶるひの出るほどに寒かつた。汚い手拭で頰冠をした百姓と、メリンスの赤い帶を緊めたあかぎれだらけの田舍娘、これでは好奇心を惹く價値もない。勤は讀み耽つた新年の雜誌を伏せて、ふと見るともなしに前を見ると、雪で眞白になつた淺間山が壓するやうに眼前に聳えて居た。

羊毛のやうな白い煙が丸で繪のやうに頂から靡く。

これから訪ねようとする友達は、其山の麓に住んで居るのだと思つたが、其考はすぐ變つて、今度は遠い谷合の小さな町が眼に浮んだ。谷川の瀨の音が木枯のやうに聞えて、軒を並べた家々には雪が白く積つて居る。てる子は今年の年始狀に、その山の中の田舍町を寫眞版にしたのを勤に寄せた。

版が鮮明でないので、餘りよくは解らぬが、町を圍んで居るのは可也高い山で、その入口とも覺しき處に小さな橋があつて柳が二三株靡いて居た。町の家並の中央の處に紫インキで線を引いて、『これが私の家ですの、』とてる子は書いた。

柔しい暖かい情緒が勤の胸に萠して來た。氣が附くと、こんな思は、もう久しくかれの心に起つたこ

『よし、よし』と兄は點頭いた。

兄の職はまだ見當らなかつた。勤は原稿を書いて毎月いくらかづゝ手傳つて居た。お光は來年の二月が三人目の兒の臨月である。

三十六

冬休暇に勤は小旅行をした。

一月になつてから四日目、かれは信越線の汽車で、雪の深い信濃へと志して居た。かれの前には榛名の群山が裾を長く曳いて、前橋市の白壁や半鐘臺や煙突を前景にした赤城の大きな姿は、既に既に後になつて了つた。榛名の右の潤い處は利根川の流れ落ちる谷で、其奧の越後境の山は、アルプスの山の繪葉書を見るやうに、美しく白く雪に光つた。

汽車は烏川の小さい鐵橋を轟と音して渡つて、今度は碓氷川の深く削られた左岸の臺地へと懸る。桑畑の中を通つて居るかと思ふと、竹藪と白壁と土藏と貧しい百姓の家族の襤褸を散して日向ぼつこをして居る藁葺家とを掠めるやうにして駛つて行く。踏切小屋からよぼ／＼した頰冠の爺が白い旗を出して居るのもあつた。川を隔てゝ眠つたやうな田舍町がをりをり見えるが、此方の岸から彼方の岸に通ふ橋の上には、吹荒るゝ風に逆つて、俥が一臺、客は吹飛ばされぬやうにと、低頭いて帽子をしつかりと押へ

『毛糸のシャツは暖かくつて好い。これを着ると、メリヤスのなどは寒くつて着て居られやしない！』

兄は眞面目な顏に一種の笑を湛へて、『そして、本當に遣つて來るのか？』

『え、來年は早々來るんですつて、』と勤の答へるのも待たずに、傍からお光が訴へるやうな調子でいふ。

『來て、何うするんだね？』

『女子大學の寄宿にでも入れて、宅には日曜にでも通つて來るつて言ふやうにしやうと思ふんだがね。』と勤は言淀んで、『けども……寄宿舍生活には倦きて、もうつく〴〵厭だつて言つてるから、何處か好い處があつたらとも思つても居るんだが……兄さん、何處か好いしつかりした後家さんか何かで世話して呉れる家はないだらうか。』

『さうさな……』

別に思當る處もないといふ顏を兄はすると、お光は、

『何うせ、家では子供がやかましくつて、勉強などしてられやしませんしね、私は私で、この體ですから、家にはとても居られないんですから……。』

『それはさうとも。』

『何處か好い處があつたら、心掛けて置いて下さい、』と勤が頼むと、

と言ひ懸けると、兄は笑つて、

『さうさな、お前によこしたんぢやないだらう。逢つたことがないんで、大きい人か小さい人か分らんから、二つ拵へてよこしたんだらう。』

『でも、先生の寫眞は、雜誌か何かで見たことがあるんでせう?』

『それはあるだらうがね………』

『屹度、さうですよ、それに違ひないですよ。神戸のミッションスクールあたりに居る女ですもの、その位なハイカラなことは屹度しますよ。』

『さうですかしら。』

とお光は首を傾けた。

少時して、『それでも、器用にまァ、よくこんなに纏まりましたねえ。十八や九で、こんなに見事に……。餘程、編物が達者だと見えますのねえ。』

『えゝえゝあそこらの學校の生徒は、こんなものはわけなく拵へるでせう。』と書生は笑ひかけて、『冬休暇に先生に上げようと思つて、屹度一生懸命に編んだんですよ。』

『さうですよ屹度。』

とお光も笑つた。

あつた。お光は逸早く手に取つてひろげて見た。一つは大きく一つは小さく、手首の處の膨れて居るのと、居ないのと――

『自分で編んだんでせうか。』

と、暫くして、お光は誰に訊くともなく言つた。

『さうですとも……自分で編んだんですとも、なかなかえらい女ですねえ。』

書生はかう言つて手に取つて見た。

『これだけ編むには中々大變だ！』

と兄は切つた小注連(こじめ)を輪飾に挿しながら言ふ。

書生は二箇のシャツを引くりかへして頻りに展げて居たが、『ひよつとすると、此の小さい方は、奥さんのゝつもりでよこしたのか知れませんよ。』

『私に？』

とお光は眼を睜つて、小さい方を取つてまた展げて見て『私に？　私がこんなのを着たら、それこそ可笑しいでせう。』

『可笑しいもんですか、今の若い奥さんは皆な着て居ますよ。』

『まさか、ねえ、兄さん、私によこしたんぢやありませんねえ。』

れるけれど……眞綿ぢやあるまいな、まさか。』

『眞綿、眞綿、確かに眞綿ですよ、先生。』

と書生は今一度兄の手から取つて觸つて見て言つた。

『だつて、眞綿を送つて寄越すといふのも變ぢやないか……國は何か生糸でも澤山出來る處かえ？』

『いや、そんな話は聞かないが……』今度は包が勤の手に渡つた。

『眞綿をわざ〱送つてよこすつて言ふことはないでせう、……お祝とか何とかならさういふこともあるけれど……』とお光は傍から口を挿れて、『てる子さんのことですもの、屹度何かハイカラなものに違ひないですよ。そんなことを言つて居ずに、早く明けて御覽なさいな！』

で、勤は餅切庖丁で、小包を絡つた麻糸をばら〱と切り放した。兄もお光も書生も皆な眼を其包に注いだ。中から何が出て來るか、一座の人々の好奇心を惹くに十分であつた。

油紙を剝ぐと、中は丁寧に新聞紙で二重に包んであつて、思ひもかけず手づから編んだ毛糸のシャツが二箇出て來た。

『これは素敵ですな。』

書生は眼を圓くした。

勤の顔にも兄の顔にも微笑がそれとなく湛へられた。成程、ハイカラな女だといふ思ひが誰の胸にも

當てゝ居た。四角な餅が見る〳〵莫蓙の上に溜つて行つた。

門が明いて、續いて玄關のくゞり戸が勇しく明いたと思ふと、

『郵便！』といふ聲がして、ドサリと重い物を置いた音がした。

立つて行つた書生はやがて大きな油紙包と小包受取證とを持つて入つて來た。勤は油紙包を鳥渡手に取つて見たが、默つて傍に置いて、次の間の机の硯箱から認印をさがして、それを受取證に捺して、書生に渡した。元の席に戻つた時には、もう細君が其包をひつくりかへして見て居た。

『てる子さんから、また何か送つて來ましたね。』

とお光は笑つて、『何んでせう、いやにぶか〳〵と柔かな物ね。』

『どれ、お見せなさい、奥さん、』と書生は傍から手に取つて、暫く押して見て居たが、『何うも鳥渡見當がつきませんね、食ふものぢやないらしいけれど………』

『どれ、己が當てゝ見よう。』

と兄は傍から手を出した。

で、其小包を上にしたり下にしたり、觸つて見たり、押して見たり、ものゝ十分もいぢくり廻して考へて居たが、『さうさな、何うも解らんな………或は海岸の名産の何か海苔とか和布とかさういふものかも知れんが、何うもそれにしては、少し柔か過ぎるやうだな………手觸りでは、何か綿のやうにも思は

しきは、古き思ひ出多き家に、火燵圍みて父母と物語りすることに御座候、來ん春の御目もじいかに嬉しく候ふべき先づはあら／＼かしこ

十二月十七日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　て　る　子

先　生　お　も　と

末ながら奥樣によろしく御傳へ被下度候

勤は今から一週間ほど前、てる子の爲めに、入學手續を聞きに女子大學に行つたことを思ひ出した。まだ脚が十分に治らぬので、車に乘つて行つた。其處には幹事に知人がゐて、萬事詳しく教へて呉れた。大きな講堂からはオルガンの音がして、落葉した櫻の樹の處々にある廣場には、白いリボンや菫色の袴などがちらほら歩いて居た。門を出て廣い目白の通を行くと、軒を並べた雜貨店に夕日がパッと照つて、袴を長く紫の風呂敷包を抱へた脊のすらりとした女學生の影を長く前に曳いた。

三十五

押詰つて十二月も三十日、門松を買つて來て立てるやら、お供餅の飾付をして三寶に載せるやら、六疊の居間は、注連、ゆづり葉、ゴマメ、昆布などの散亂れた中に、手傳に來た兄が、時々輕い戲談を言ひながら、半紙を折つて、小注連を切つて居ると、勤と書生とは、長火鉢の傍で頻りにのし餅に庖丁を

れに此學校は御存じのミツシヨンスクールとて、小說を繙き居候ふても舍監など何彼と喧しく申し、とても筆執り候暇など無御座、小女のためにも不爲のやう思はれ申候、父母もやうく心解け、文學に携はり候ことをも上京をも許し呉れ候今の際、いたづらにかく暮し候よりは、一刻も早く御地に上り、勉强仕度と存候、女子大學は學期の初めならでは入學相許さずとのことに候はゞ、それまでは獨學致してもよろしく、よき補習學校有之候はゞ、一月二月通ふもあしからじと存候、さは申し候へども、師の君にして不得策なりと思召候はゞ、尙暫く當校に留り申すべく、猶御意見今一度御洩し下されたく候、

小女は五年を學の窓にありながら、何も出來ぬつまらぬ女にて、女子大學の英語科などには、とても入學覺束なきことと存候、止むなくば、豫科になりと入學致し勉强仕度覺悟、父母は文學を修むるにしても、普通學を今少し修め候方得策なるべくと申候ふが、いかに候ふべき、無論、國語などの力も不十分にて文章の言語なども多く知り申さず、此方も猶十分に勉强致さではと存じ候、兎に角、聖書のみ强ひて讀ませられ、集會、祈禱會などにのみ出席を强ひられ、文學修養の寸暇なき此の學校は一刻も早く去り度くと存候、今一度御指圖賜はり度候、

この二十三日頃よりは、冬休暇に相成申すべく、御たよりは田舍の方に御つかはし被下度候、尾の道より十三里も山の奥、雪積りて軒には氷柱長く、谷川の瀨の音のみ高く聞え候ところに有之、唯々樂

肉體的だからねえ。』

『そこが性(セツクス)の違ひだ！』

と勤は心から感じたやうに言つた。

『男は種を蒔く、女はそれを育てる。要するに平凡なる眞理さ。人間あつてから常に繰返された事實に過ぎないさ。右に推して見たつて左に推して見たつて、この事實が何うなるものぢやない。これを思ふと、僕は厭世ならざるを得んね。』

と田邊は例の思想を持出した。勤もそれからそれへと熱心に語つた。

病院の半月は勤の混亂した思想にある一種の沈靜を與へた。のどかな小春日和は長く續いた。

三十四

拜啓益々御機嫌麗はしくわたらせられ候御由奉賀上候、御怪我も御退院後益々御快癒の趣何よりも嬉しく存候、先日は心なしにも面倒なることを御相談申上げ候ひしに、御病後にも拘らず、今朝御芳書賜はり、謹で拜見仕候、態々女子大學まで御足勞、いろ〳〵御世話下され候ことまことに身に餘る恩惠と唯々感謝致すより外に言葉もこれなく候、來年四月まで此地に留り學事にいそしみ候方得策との御意見もよく解り申し候へども、小女は一日も早く御地に上り、朝夕御元にて御教へを蒙り度く、そ

つけたから惡いんだ。』

こんなことを言つて笑つた、

『戀と言ふものは可笑なもんだ。』と田邊は始めた。『戀が消えなければ、夫婦の愛情は起らないねえ、君。僕は此頃つくづく思ふよ。妻と兒と自分と、もう何うなつても離れられない紐で縛り附けられてある。僕はこれで隨分癇癪黨だから、女房の横面位張り兼ねないけれど、それでも矢張變な淡い愛情があることは否まれないねえ。不思議なもんだよ、ねえ君。』

『僕は又此頃こんな風に思ふね、』と勤は考へて、『靑年時代には頭でばかり生きてる。肉體なんぞ何うでも好いといふ風がある。戀してる間は確かにさうだつたねえ。お互ひに心の滿足ばかりを趁つて居た。けれども今ぢやもうさうぢやない。肉體が中心になつて來たやうな氣がするよ。肉體が中心になると、もう頭が餘り動搖しない。靑年時代を例へて見れば、頭でつかちの、體の瘦せた畸形兒のやうなものだ。』

『本當にさうだ。夫婦の關係もさういふ風だねえ。』と田邊は言つて眉を昂げて、『だから一歩突込んで考へて見ると、夫婦の淡い愛情は動物の愛情に近い。心よりも肉で堅く結び附けられてある。殊に、女がさうだねえ。男の方ではいくら肉が中心になりかけて來ても、まだ心が動く、頭が動く。動物だけでは、何うしても生きて居られない。けれど女は平氣だ。動物結構で御座いッて言つて、のんきに生きてる。兒に對する愛情などを觀察して見てもすぐ分るねえ君。先生方の愛情は盲目的だからねえ。飽まで

來る。好いことだ。』

『さういふと、本當にさうですねえ、私などつまらなかつた。』

てる子から手紙が來る度にかういふ話が二人の間に常に交換された。此間小包で、神戸名物の茶の入つた菊水の紋の白く草色の地に出て居る菓子を送つて來た時にも、長火鉢に相對して坐つて、茶を淹れて食ひながら同じやうな話をした。けれど今日は何も言はなかつた。枸杞の紅い實が硝子戸を透して見えた。

見舞客は可也多かつた。社の編輯の人々も來た。自轉車を門前に乘捨てゝ案內を乞ふものもあれば、俥を奧の病室の入口まで曳込ませるものもある。新形の脊廣を着たのは實業雜誌の主筆で、金縁の眼鏡を懸けて頭を丁寧に分けたのは編輯長次席であつた。醫師は、『貴郞の處には、いろ〳〵なお客樣が澤山來ますな、』などと言つた。山手の小さい病院ではかうした見舞客はめづらしいと見える。

親友の誰彼も驚いて音信れて來た。西は火傷の原因を聞いて、『君はそゝつかしいからな、』と笑つた。田邊は丁度鎌倉から上京して居たので、七日目に來て半日以上も話して行つた。相變らず元氣で、輕い鋭い洒落やら皮肉やらが口を衝いて出る。

『君、あの原稿は何處でもフイさ。大阪でも返して來たよ。けれど折角書いたものを破つて了ふのもつまらないから、まァ爲方がない、筐底に深く藏して置くといふ始末だよ。一體『運命論者』なんて名を

ねえ。』

またある時はかうした話もした。

『今の女はすつかり變つて了つたね――。』

と勤が言ふと、

『それはもう何うしても……』

『お前の娘で居る時分にはこんな娘を見たくつても見られやしなかつた。』

『さうですねえ、本當に。』

『この手紙を讀んで御覽、實によく書いてあるぢやないか。自分の心がすつかり出てゐる。まだ逢つたこともない人に、かういふ手紙を書くなんて、我々時代にはなかつたことだ。』

『さうですねえ。……本當に、此頃の娘は路を歩いて居ても、私、吃驚する位ですもの、丸で男のやうですねえ、此頃は。』

『日本も進歩した！』と勤はさも感じたやうに、『昔の娘のやうに家庭と子供にばかり躍起してるやうでは爲方がないからねえ。それに女としてもつまらない話だ。亭主が何をしやうが、何んなことを考へて居ようが、そんなことは丸でお構なしで、襁褓の世話ばかりして居ちや餘り張合がないからねえ。これから、日本にも本當の女が出來る。本當の意味で夫を助けたり女の本分を十分に出したりする女が出

勤が讀終つて、それを傍に置くと、お光は覗くやうにして、『また、てる子さんから參りましたね、』と笑つた。勤はいつも細君のそれを讀むのに任せて置く。

お光は火鉢の前で、膝の上に其の長いすら〳〵と達者に書いた手紙を展げて低頭いて熱心に讀んだ。勤は其顏と頰と丸髷と手紙とを何のことなしにぢつと見詰めた。室の中を咲子がちよこちよこと眼まぐるしく歩いて、時々母親の傍に寄つて來る。

『かあちやん、何ちてるの？』

と幾度か訊ねる。

長い手紙を丸めて、封筒に入れて、寢臺の上にソッと返した。勤はもう向うむきになつて、芝草地の向うの藁葺家を見て居た。引窓から細く煙が颺る。

『來年になると、出て來るつて書いてありますね。』

『む〻。』

勤は取合はなかた。

てる子の噂は此までも隨分出た。家庭から性質、年齡などをあれのこれのと話し合つた。容色の話がことに話題に上つた。『容色は何うだか知れませんけど、それは屹度ハイカラな人ですよ、』とお光は言つたが、時には、『けれどかう熱心に文學などをやらうといふ人だから、存外容色の惡い人かも知れません

夜は遲くまでいろ／＼な話をして行く。お三輪の笑聲も時々聞えた。

醫師も何うかすると、夜など一杯機嫌で話に來ることがあつた。もう五十をとうに越して居たが、病院を經營した話や、此處に開業した二十年前のことや『醫は仁術なり』といふ古めかしい意見などを語つて聞かせた。『世間の人は醫師が病氣を治すと思つて居るのは間違ぢや、治すのではない、惡くならないやうにするのぢや、どんな豪い博士だとか何とか言つたつて、皆なさうぢや、醫師も神さまぢやないでナア、』と言つて機嫌よく笑つた。印刷した小冊子を置いて行つたのを後で見ると、醫師としての古めかしい意見が拙い漢文調で豪さうに書いてあつた。この醫師には、房州生れの下婢上りの若い妾があつて、夜など何うかすると、奥で調子はづれの三味線の音がしたり、拙い義太夫を唸る聲が聞えたりした。

看護婦と代診と駈落した話も勤は聞いて知つて居る。

お光は丸髷に結つて、小紋の縮緬の羽織を着て、咲子を伴れて朝ごとに遣つて來た。廊下を小刻に歩く足音と、咲子の無邪氣に何か饒舌つて來るのとで勤にはすぐ分る。咲子は廻らぬ舌で、『父様、火傷、あんよ。』

お光はいつも新聞と手紙とを寢臺の上に置いた。ある朝、その中に女の名の手紙が一通交つて居た。

この手紙は二月前から一週間に一度位づゝ來る。處は神戸、名は吉江てる子。勤が返事を出して、將來文學上の相談相手になるといふことを諾してからは、てる子といつも名ばかりを書いてよこした。

捺したやうに枝を張つて居ると、其間ををり〳〵鳥の翼がスッと掠めて通つた。がら〳〵と落葉の轉がる音もした。

勤は足に火傷(やけど)をして、早稲田の醫師の小さい病院に半月以上も居た。寢臺に病床日記が下げてあつて白い敷布(シイツ)の上に、西洋の書籍が五六冊亂雜に置かれてあるが、讀みさして伏せた金緣の本の半面から寢て居る勤の頰に朝日がさした。

白い服を着けた年老(と)つた看護婦が、いつも牛乳を運んで來た。十時には醫師が見舞ひに來る。繃帶を取つて、ガーゼと油紙と脂藥を塗つた布とを除(と)り去ると、足の甲が一面にただれて赤くなつて居る。石炭酸の匂ひがプンと鼻を衝く。

石炭酸で洗ふと、傷が切らるゝやうに烈しく痛んだ。堪らなく顏を蹙めたり聲を立たりすると、『大きな體をして、子供のやうぢやな、』などと醫師は笑つた。

傍にはいつも誰か來て居た。兄とお三輪とお光と家の書生とが交る交る看護した。室の傍の二疊の疊に角火鉢と炭取と茶器と見舞の菓子折とがあつて、鐵瓶は常に湯氣を吹いて居た。病院の賄がまづいので、兄夫婦は午に晩にいろ〳〵なものをつくつて持つて來て呉れる。肴屋が好い鮪を持つて居たと言つては小皿に一人前さし身に作らせて來たり、饂飩が好きだからとて瀬戸引の小鍋に湯氣の立つのを風呂敷に包んで來たりする。林檎だの柿だの蜜柑だの錢もないのによく買つて來ては袂から出した。

勤は可笑しいやうな淺間しいやうな家を汚されたやうな氣がした。『山口に訊いて見る！』と急に立上つたが、『まア、お止しなさいよ。山口さんだッて、直下に聞かれちや赤面するから、』と頻りにお光が留めるので、一先づ思ひ留つた。

出勤前には、いつも洋服を着る手傳をするのだが、其朝は書生は玄關で靴を磨いて居て出て來なかつた。顏を見られるのを避けるやうにして居た。其夜、勤はお菊に、『男にそんな眞似をされたッて、欺されてはいかんぜ！』と言つて聞かせた。

『大丈夫ですよ。私なんか。』

とお菊も流石に顏を赧くした。

勤は數日前、西さんとイブセンの劇の話をしたことを思出した。家庭といふことから、家の構造、室の位置が家庭の悲劇に大きな關係があるといふことを話した。『何うも日本の室のつくり具合はいかん。僕が聞いた話でも貧乏で一間に寢る爲めに、親子兄妹が通じた話はいくらもある。』こんな話をしたことを思ひ出した。夜遲く長い暗い路を歸つて來る錢もない一書生の姿を浮べても見た。

三十三

硝子戸を隔てゝ、日當りの好い芝草地が見える。梧桐の葉の落盡した梢が、十二月の鮮かに晴れた空に

書生と謂つても、勤やお光には友達のやうであつた。事に寄ると、若い夫婦などより却つて世間のことを知つてゐることがある。お光などは時々夢にも知らぬやうなことを聞かせられて驚くこともあつた。玄關の三疊には、友達が來て、義務だの權利だのと常に喧しい議論をした。夜はいつも十二時過に歸つて來る。『お菊さん、門と戸だけ明けて置いて下さいねえ、』と常に言つた。

夏のある夜、下女室の二疊が厠に近く風通しが惡く、いかにも寢苦しいので、何うせ明いてるのだからとて、お菊は蚊帳と蒲團とを玄關の隣の二疊に持つて來て寢た。二三日は何事もなかつた。すると、ある朝、勤が二階に居ると、お光が上つて來て困つたやうな笑つたやうな顏をして、『餘り虛言らしいと思ふんですがね、お菊がさう言ふんですよ。いくら山口さんだつて、まさか、あんなお菊見たやうなものに、あんな眞似はしやしないだらうと思ふけど………』

『怪しからんね、それは――』

今朝玄關と隣の室の襖が五寸程明いてゐた。それが山口が明けたのだとお菊は言つたとお光は語つた。

『餘りうそらしい、お菊が思ひ違ひをしてるんぢやないかと思ふけれど、………本當だッて言ふんですからねえ。眼が覺めて、ちやんと知つて居たつて言ふんですよ………腹が立つたから、餘程聲を立てて遣らうかと思つたけれど、と言つて居ましたよ。』

『馬鹿な――怪しからんねえ、それは。』

その前に子供が七八人かたまつて居て、其處に垣に寄つて、男が一人腰を草に下ろして居るらしかつた。其前に行つたお菊の赤い繻子の帶が日に光つて、はつきりと際立つて見える。

二人は相對して、何か久しく話して居た。ふと、男は立上つた。今まで見えなかつた姿が見えた。髪の長く延びた學生風の男で、汚い茶色の脊廣を着て居た。兒を抱いたお菊と一緒に並んで、二人とも後を振返りもせずに、長い路を一步一步話しながら歩いて行くと、後から子供の群がぞろ〳〵尾いた。長い路には葉櫻の枝が出たり、桐の花が紫に咲いたり、冠木門の松が枝を伸したりして居たが、並んだ姿は段々其間を遠く遠く、曲り角に近づいた頃には、もう跟いて行く子供もなかつた。振返りもせずに曲つて了つた二人のあとの長い巷路には、日が葉にキラキラと光つた。

『田舍の從弟が來て……こんな處に來なくても好いのに……』とお菊は歸つてから顏を赧くしながら、申譯のやうに言つた。

『從弟?　お菊さんうそでせう。』

と書生はわざと眼を丸くして見せた。書生は二十四五、丈の高い氣の利いた男で、夜は神田邊の法學校に通つて居た。兄が非職にならぬ前、一年ほど世話をして遣つた緣故で、止むを得ず引取つて、勤が㐮闕に置くことになつたのである。父親が難かしかつたとかで、家事にはよく馴れて、家の周圍や庭の掃除は痒い處に手の屆くやうに行屆いた。箒を持つのが道樂ではないかと思はれる位であつた。

ばたばたと勝手元に逃げあがつた。三年の間に様子がすつかり變つて、言葉の訛も除れ、田舍の土臭い處もなくなつた。何方かと謂ふと、元氣な働者で、跡仕舞などはぐんぐんすまして、子供を負つて、いつも近所の小さな練兵場に兵隊さんを見に行く。日當の好い芝草の堤には、子傅や下女が澤山遊びに來て居て、近所に居る好い男の御者の噂抔をした。戲談を言つてから歸つて行く酒屋の御用聞などもあつた。藪地と寺とを隔てた通りには、午後に時々廣告の樂隊や行進中の兵士の軍歌などが通る。と、お菊は浚ふやうに男の兒を後にたゞ負ぶして、鍵の手に曲つた道を、それに間に合ふやうに一散に驅け出した。同じ道から同じやうにして驅出す下女が少くともいつも四五人はあつた。で、通りに出る角の煙草屋の檐下に並んで、道化た假裝行列や、紅白の旗や、調子をかしく叩いて行く樂隊の男や、牛に曳かせた粧飾した車などをあくがれ見た。

ある時かういふことがあつた。六月の晴れた日のことである。門の前に近所の子供が來て、『お菊さん、誰かゞ呼んでるよ!』と言つた。お菊は聞いての聞かぬ振をして居た。でも子供等が容易に去らぬので、玄關の三疊に居た書生が出て見たが、すぐ引返して來て、厭に冷かすやうに、『お菊さん本當に人が來てるんだよ、』と笑つた。其日は日曜か何かで、勤は長火鉢の傍に居た。お菊は困つたやうな樣子をして顔を赧くしてぐづぐづして居たが、ひよいと男の兒を抱き上げて勝手元からこつそり門を出て行つた。勤が好奇に、後から出て見ると、樹の繁つた長い道に、一ところ長屋の三軒ほど續いたところがあつて、

賴りにするやうになつた。

勝手元は廣かつた。井戸も一軒で使ふやうになつて居る。流しが石で出來て居て、冬は凍つてツル〳〵滑る。勝手の隣に湯殿があつた。錢湯が遠く、夜行く路が淋しいので、勤はつまらぬ雜誌につまらぬ原稿を二十枚ほど書いて、立派な角風呂を買つて來て据ゑた。井戸から竹筧に通すやうにする爲めに、汚い桶屋の爺が來て、一日働いて拵へて行つたが、その傍で閑暇な兄は何彼と世話を燒いた。これに限らず、兄はすぐ勤の家の世話をした。勤も何ぞといふと、兄を呼んで相談をした。移轉した當座、物干がなくて不自由して居ると、兄は近所の材木屋から丸太を二本買つて來て、薪を半分に割つて竿かけを拵へて、裏の空地に立派なのをつくつて呉れた。鋸に鉈に釘箱に錐。兄の體を曲げて仕事をして居る肩の處に暖かい日が當つた。

咲子は今年四歲のよち〳〵歩行、その傍に行つて、廻らぬ舌で『伯父さん、何ちてるの？』など〻言つた。眼の丸い、髮の房々した兒であつた。雜種の茶色の犬が垣の傍で足で腹のあたりを搔いて居たが、時々それを止して、何か物音でも聞くやうな樣子をして、ぢつと耳を立てた。例の肥つた家婢が襁褓の洗つたのをバケツに入れて通つて行くと、兄は仕事をしながら『お菊それ蛇の脫殼が、』など〻戲談を言つた。お菊はいつも大きな聲で笑つた。

『彼方の旦那樣が戲談を仰有つて爲方がないんですよ、奥さん。』

怨むやうな音、蚯蚓のなく音、名を知らぬ蟲の音、靜かにしんとしてゐる時があるかと思ふと、際立つて騷々しく思はれる時もある。藪地との境に丸竹を組んだ古い垣があつて、葎が一面に蔓つてゐた。

晴れた日には、光線が亂れ合つて、綠がチラ〳〵した。雨の日には降る雨の脚が樹の影に長く見えた。二階を下ると、庭に面した八疊が座敷で、六疊が居間、其居間の硝子障子の傍に、勤は妻子と蒲團を並べて寢た。朝目を覺すと、いつももう雨戶が繰つてあつて、鮮かな朝の靑空と欅の大きな樹の頭とが見える。前の戶袋には朝日がさした。

隣の後家さんの家には肥つた二十三四の娘が居た。赤城あたりの小學校の女教師をして居て、朝早く海老茶の袴を穿いて出懸けて行つた。勤は此娘については、餘り好奇心を起さなかつたが、移轉しない前、神樂坂に通ふ通りで、每朝邂逅した綺麗な女教師が此娘の友達で、ある日門から二人で伴れ立つて行くのを見てから、何となくたゞならぬ心地がした。隣の娘もその綺麗な女教師も麻布の高等女學校出身で、同じく一人娘で、養子を取る身だといふことを聞いた。隣の娘には、一昨年一度軍人の養子が出來て、三四箇月して離緣になつたといふことである。

隣の後家さんは、裏から緣側に來て、日向ぼつこをしながら、お光とよく話をして居た。旗本で、維新前から此處に住んで居て、家屋も地所も皆な自分で持つて居る。上品な、言葉の少い、義理の固い好いお婆さんであつた。初めは樣子を見に來たものらしかつたが、後には懇意になつて、却つて勤の家を

持主の後家さんは、十九になる中學に通ふ男の兒と、十七になる眼の美しい容色の好い娘とを育てゝ暮した。南山伏町に小さな家を借りて、生花敎授の看板を出して居た。『宿が此家を造りまして、三年住んだ切りで歿くなつて了つたものですから……此の二階なども今に伜が成長くなつて、友達でも來るやうになると、庭からすぐ上れるやうにッて、さういふ處まで考へて造りましたのですが、逝かれて了つては本當に爲方が御座いません、』と後家さんは昔を話した。話振から推すと、夫は相應に好い處の官吏をして、派手に暮して居たらしかつた。勤は住んでからも、時々此の家を造つた人のことを胸に浮べて見ることがある。床の間の好み、緣先の石、玄關のつくり、植込の木の種類、其人が亡くなつて、かうして他人が借りるといふことも意味のあることである。

庭に大きな枇杷の樹があつた。この樹を他所から買つて此處に移した時、細君が『枇杷の木を植ゑると惡いことがあると言ひますから、』と言つてとめた。其時、主は『女は御幣ばかり擔いで爲方がない』と笑つたとの話、其枇杷の樹の大きい葉の間から、春は紅梅の花が二階の勤の書齋を硝子障子に繪のやうに透して見えた。

欅の木は恰度大きな翼をひろげたやうに空に聳えた。風が渡る、夕日が照る、色ある雲が過ぎる、弓のやうな月が懸る、――勤は朝に夕に、この大きな樹の動き靜まる姿と相對して坐つた。

前の藪からは、さまぐ\の音が聞えて來た。葉と葉と擦れる音、幹と幹と觸れる音、私話くやうな音、

三十二

家には書生が置いてあつた。構も今までとは大した違ひで、間數が六間、家賃が十四圓、庭には松に敷石、手水鉢は立派な石で出來て居た。移轉した時、持主の切髪の後家さんが來て、目ぼしい道具の無いのと細君が若くつて世馴れないのと、且那の書生上りでぞんざいなのとに不安を抱いて、それとなくもしもの時のことを、隣の友達の後家さんに賴んで行つた。

勤は散步の序に此の家を見附けた。原町の通から奥に鍵の手に折れ曲つて入つて行くと、日に〳〵開けて變つて行く牛込の山手に、維新以來の感じが其儘ソッと保存されてあるといふやうなところ、木立が深く繁つて、秋の日には、日影がチラチラと葉を洩れて、垣には紅い白い木槿が咲いて居た。栗のいがの熟みわれた藁葺家からは、細い煙が人に忘られたやうに颺つて、井戸端で白髮の上品なお爺さんが、盆栽の鉢を洗つて居るのを見懸けることなどがある。貸家札の斜に貼られた其家の門には、其時柏の廣葉が風にガサ〳〵と音を立てゝ居た。勤は隣の後家さんに戸をあけて貰つて入つて見た。構からつくり、間取の具合がいかにも氣に入つた。殊に裏の空地の欅の大きな樹が聳えて、淡竹やら草やら八重葎やらが一面に亂れて居るのを面白く思つた。幽栖(かくれが)――勤の胸は喜びに溢れた。兄や里の母親が家賃が餘り高過ぎると反對したにも頓着せず、すぐ話を定めて移轉して了つた。

うして大きくなつて來たんだ、』と言つた兄の言葉を胸に繰返した。平凡な言葉、よく自分も聞かせられた言葉――でも今日は何だかそれに深い意味があつて、混雜した現象がそれを中心に分明と頭腦に上つて來るやうな氣がした。西さんのこと、田舍に隱れた友のこと、おきよのこと、自分等夫妻のこと、殊に其身が世の中に出て段々思想も地位も感情も變つて行くのを意味深く感じた。世間といふものが解つたやうな氣がすると共に、榮ゆるもの丶上にも、衰ふるもの丶上にも、動かすべからざる力が行はれて居ることをつく〴〵思つた。

『勞働! 勞働!』

と自から叫んで、ゾラのことなど考へて見た。

妻といふことが頭腦を衝いて來た。戀と妻といふことが第一に考へられる。戀といふも愛といふも皆な生殖の爲めである。複雜した人間の生活も皆な種の繼續の爲めであるといふやうに考へても見た。けれどさういふ風に見るよりも、戀は戀、愛は愛、妻は妻、生活は生活といふ風に、その中心に連絡した思想を置かずに考へる方が事實に近いと思つて見た。と、かうして男と女がある動機で一緒になつて、妻と呼び夫と呼び、親となり子となつて居るのが、不思議な現象のやうに思はれた。

脊から下すと、兒はぱつちりと眼を明いて、笑ひもせず泣きもせず不思議さうにして四邊を見廻して居る。お三輪は手を出すと、顏を母親の胸に當てゝ了つた。

おきよは此の伯父伯母を一方ならずたよりにして居た。結婚當座は來る度によく戯談を言はれた。交情が好いと言つては冷かされ、惡いと言つては冷かされた。娘から妻になつた苦痛、妻から母親になつた苦痛、それを訴へに來ても、いつも心が輕くなつて歸つた。聞いて居て顏の赤くなるやうな男女の祕密をもお三輪の口から聞いた。しつかりした里のない身には、里にも増して力に思つて居た。その伯父の非職は、おきよに取つて、賴む木蔭に雨が漏るやうな氣がしたのである。

兒に乳を含ませたり、襁褓を更へて遣つたりするのを主は見て居たが、

『此頃は子供の世話が大分上手になつたね。』

おきよが默つて笑つて居ると、お三輪が、『え、もう此頃ぢやすつかり母樣になつて了つた。』

『でもね、伯母さん、』とおきよは笑つて、『今でも隨分大變ですよ。雨が降つて襁褓が乾かない時だの、夜何うしても寢つかない時など、つくづく子供といふものはつらいものだと思ひますよ。』

『勝手に拵へたんだから爲方がないわね、』とお三輪は笑つた。

『皆なさうして大くなつて來たんだ、』と主は淋しさうに言つた。

勤は少時して暇を告げたが、車屋、石屋、煙草屋などの並んで居るいつもの通を歩きながら、『皆なさ

『おきよだよ。』

傍に來て坐つた居たお三輪が、

『おきよが……此雨に、』と言つて、立つて行つたが、續いて、『まァお前、子供を負つて此雨に遣つて來たの。』

といふ聲がする。

『だッて、暫く御無沙汰しましたから。』

かう言つて、おきよは上つて來た。二三月前から見ると餘程變つた。第一、少し肥つて、昔の愛くるしい眼がもう光を失つて、額のあたりから頰にかけて、何處となく母親になつた面影が見える。めづらしく束髮に結つて、結付に負つた兒はスャスャと寢て居た。

おきよは勤に、

『今、ちよつと、勤さんの處に寄つて來ましたのよ。』

『さうですか。お光が一人で淋しがつてゐたでせう。』

『えゝ、』と笑つて見せる。

『歸りにまた寄つて行くんでせう?』

『え、荷物を少し置いて來ましたから。』

話もして遣り度い。此兄には自分は幼い頃から一方ならぬ恩を受けて居る。かういふ時に恩返しをしなくつてはならないと思つて居る。時には眞面目になつて『何アに、月に二十圓か三十圓、原稿の五六十枚も書けば、あの一家の不安を救ふことが出來る。夜、二時間づゝ兄の爲めに働いて遣れば好いんだ!』などと健氣な決心をすることもある。けれど餘裕とてもない身には、一枚でも餘計に原稿を賣れば賣るだけ、金が費るといふことになる。實行は容易でなかつた。

『何うか氣の毒だがな………』

と兄はまた言出した。

『え、何うかします。』

勤は言つた。

雨は矢張降つて居た。

表で傘に雨が當る音がしたと思ふと、『入口の格子が明いて、誰か人の來た氣勢がする。主が暗い入口の障子を明けたが、

『あゝお前か、』と言つて、すぐ引返した。

『誰?』

勤がかう訊ねた。

どのことでもないが、職を失つたとなると、この境遇が無限に續くやうな氣がして、不安が絶えず一家を襲つた。

『本當に好い處が無くつて困つて了ふ。勤さん、何處かありませんかねえ。何んな處でも好いんですがね、』とお三輪は幾度も言つた。『内などもう老耄れて了つて爲方が無いんですがね……本當に、今になつて困つて了ふ。』

こんなことも言つた。

何時來て見ても二人とも屈託したやうな顏をして居る。今までには、時々御馳走を拵へて晩酌によばれたこともあつたし、菓子鉢に羊羹、唐饅頭などが常に取つて藏つてあつたし、火鉢の傍に笑聲の絶えたためしはなかつた。それなのに、此頃では、『本當に氣がくさくさして、口を利くのも厭になつて了つたんだがね、勤さん。』

お光も勤に、

『此頃は兄さんの家へ行つても、何だか調子が變で、話も碌に出來なくなつて了ひましたね。本當に何處か口がありさうなもんですがね。』

兄の家を蔽つた暗い影が、勤の家までも襲つた。

勤は時代に後れた兄の學問と平生とを知つて居るだけに、一層先を苦勞にした。出來るなら十分の世

『お前、勝手も片附けないで、何處を遊んで居るんだ。』
『前の家に行つたら、つい饒舌が長くなつて了つて………』
いつものやうに笑ひもしない。戲談も言ひもしない。主が茶簞笥やら火鉢の抽斗やらをさがし廻して居るのを見ても、何をさがして居るかと聞きもしない。
さがしあぐねて、主は、
『まだ廿諸があつたらう？』
お三輪は返事もせずに立つて、勝手に行つて、戸棚をガタピシさせて、やがて汚ない盆に、禿びた丸燒を二三本載せて持つて來た。
『これやひどい、もつと好いのが殘つてると思つたが、これぢや爲方がない、』と主は言つたが、『お前、少し嗳い處を買つてお出………』
『何に、これで澤山、澤山ですよ、嫂さん、』と言つて、勤は其丸燒を一つ取つた。
お三輪は勝手元で放つて置いた跡仕舞に取懸りながら、
『あゝあゝ何をするにも張合がありやしない！』
先月の拂も出來なかつた。米屋、酒屋などは長いお得意だけに厭な顏もしないが、家賃は其前々から溜つて居るので、差配の四十男が來て、度々催促をした。一二箇月の停滯、常ならば、左程氣にするほ

兄は勝手元に手を出すのが好きで、朝など常にお三輪を寢かして置いて、自分で飯を炊いたり味噌を擂つたりしてやつた。勇造が居る時分見兼ねて、『兄さん勝手元だけは女に遣らせなければいかんよ、』と言つて、お三輪に膨れられたこともあつた。鐵瓶がやがて音を立て始めたので、兄は茶碗、土瓶、椀。鍋、七輪などの混雜と足の踏所もないやうに散らばつてゐる間を、流元に下りて、急須の茶殼を捨てたが、『本當に、何處をほうつき歩いて居るんだか、朝の勝手をまだ仕舞はない！』とぶつ〳〵言ひながら戻つて來て茶を淹れに懸る。

『氣の毒だが、月末にまた少し何うかして貰はなくつちやならんがな。』

と兄はしばらくしてから言つた。

『僕も困るけれど。』

茶を飲みながら勤が顏を曇らせると、

『お前には本當に氣の毒だけれど、來月は何處かに出るから……己だつて、いつまでかうして居られやせん。』

勤は默つて困つたやうな顏色をした。

其處に、お三輪は雨の中を傘もさゝずに歸つて來たが、兄弟默つて坐つて居るのを見て、自分も矢張默つて其處に坐つた。何處となく元氣がない。

兄はかう言つて、氣の拔けたやうにあくびをした。
『お前今日は歸りが早いな。』
『休んだんだもの。』
『書くものでもあつたのか。』
『え、少し、』と言つて、『何處か好い口はまだ見附からないですか。』
『心當りが一二軒はあるんだけれど、何うも思ふやうに運ばない。』
何うせ食はずに居る譯には行かないから、大抵な處は我慢して出る積だが、『それでも餘りひどい處でも困るからな、』と淋しく笑つた。聞くと、話が二つあつた。一つは某省の雇で日給四十錢、一つは府廳の寫字生で月給十五圓。
『それでも困るからな。』
と兄は同じことを言ひ足して弟の顔を見た。
今迄の兄の生活は、多くの官吏などに見る其月暮しで、月の半は贅澤に半は節約して暮した。貯金などをする餘裕は無論なかつた。
裏の雨戸は雨にしめた儘なので、家が何となく暗く感じられた。朝起きて掃除をする元氣も無いと見えて、障子の棧にも閾にも埃が白くたまつて居た。神棚にも佛壇にも花もなかつた。

『あんまり詰らん處でも爲方がないが、何處か好い處が無いかな、』と勤の顏を見る度に言つた。『官吏も長く遣つたが、もう懲々した。今度は一つ實業界に出て見ようと思ふんだが、お前の社に口がないか、』などとも言つた。

賑かであつた家が丸で火の消えたやうになつた。お三輪の元氣な笑聲も聞えない。勤は昨年の暮に、久しく住んだ家を離れて、原町の二階のある家に引越したので、もう以前のやうに度々遣つて來なくなつたが、でも來る度に、蒼い顏と進まぬ話と絕望的な言葉とを聞かされて、いつも氣の毒な思をした。後には兄は生活に勞れ果てたといふやうに常に搔卷を被つて寢て居た。

『嫂さんは？』

『今居たつけがな……何處か其處等に遊びに行つたんだらう。』

身を起して、火鉢の前に坐つて、火をかき起した。

袖口の切れた汚れた黃縞の羽織を着て居た。顏色は蒼い上に暗い影が添つて、半白の頭にはフケが溜つて居る。頰も著しく瘦せて見えた。

若い時の墮落はいかやうにしても浮び上ることが出來る。人生の盛期を過ぎてからのかうした墮落――勤は胸に佗しい同情の念を強く感じた。

『よく降る雨だなア。』

縁側から障子を明けて、案内も乞はずに茶の間に入ると、汚い襟垢の附いた搔卷を懸けて、鬚の茫々と生えた顔を仰向けにして、兄は寢て居た。

久しく替へない古疊が長雨にしとつて、氣味惡く足にベトつく。

『兄さん。』

と搖り起すと、やがて眼を開いて、『勤か、』と言つて半ば起上る。

『何うかしたの？』

『いや。』

と眼を摩りく起上つた。今から三月前大改革があつて非職になつてから、元氣がすつかりなくなつて了つて、白髮が著しく目に立つて來た。財產もなく、力になる先輩も友人もない身には、扶持に離れた翌月から、もう日每の生活に困り始めたのである。

最初の一月は古びたフロックコートを着て、每日のやうに彼方此方と出懸けて職をさがし廻つた。顏を合せるのも羞かしいやうな後輩の家をも訪ねた。緣故といふほどの緣故もない舊藩の人々をも訪問して、役にも立たぬ菓子折を贈物にした。けれど四十にもなつた官吏の古手などを相手にするものはなかつた。通り一遍の挨拶と人の不運を冷かに見る眼とに到る處で邂逅した。次の一月は絕望と窮迫とが續いた。着物を質に入れる時の細君の繰言にも耳を痛くした。

春の夜はせめては啼くな、
故鄕の藥家の鳩が、
たまさかに、
むかしの春を思出でゝ、
夢に見にこん………。

五年前に西さんが作つた詩で、若い連中は當時よく歌つたものである。夕日の野に林から出ようとする坂の上などに來ると、西さんはやさしい聲で、眉を昻げて、胸に染みわたるやうな歌ひ方をした。向うには利根川が一筋白く、帆が色ある雲に映つた。それが、今、秋雨の降頻る田舍寺の薄暮の佗しい空氣に震へるやうに聞えた。

三十一

その翌年の矢張秋雨の降頻る日に、勤は長兄の家の門の前に立つた。檜の木の繁茂の間を傘を斜に庭に入らうとすると、雨滴がばらばらと落ちたので、思はず首を縮めた。緣側に添つた障子は堅く閉ぢられて、處々の破れやら、碁盤の目のやうに黑く白くなつて居るのが目に附く。あたりは何となく陰氣にひつそりして居た。

うせ、人生は轉變極りない。自然が人間を保護すると思ふのは大間違ひで、ある時などは實に殘酷に見えることがある。人間は自然に對して防禦に出でなければならないと痛切に感ずることさへあるよ。僅か三四年の間だが、隨分大きな變遷があつたぢやないか、君。現に僕の方の杉山君などの死を考へて見てもわかる。あんなに得意であつた地位から忽ちにして死！　先生が洋行に萬歳を唱へられた時には、もう其の暗い影と相面して居たんだ。ぐづぐづしては居られんよ、君。どんな形式でも自分の特色を發揮して了ふ必要がある。』と言淀んで『それを思ふと、田邊などは豪いさ。餓ゑても猶ほ其目的の爲めに働いて居る。瀨尾君などの歷史事業に隱れて、安きに就いたのから考へると、餘程豪いと思ふ。』

『本當にさうだ。僕なども安きを貪り過ぎてた。大に遣るさ。』

貞一の顏は酒に赧くなつて居た。

細君は勤のよく飮みよく談ずるのに驚いた。夫も頻りに機嫌よく聲高に笑つた。平生默つて、進まぬ顏をして、机に凭つて書を讀むか物を書くかして居る人とは思へぬ位で、傍で見て居ると、二人の心が解け合つて、縺れ合つて、さも離れ難ないやうに見えた。夕暮近く、德利が五六本も並ぶ頃には、二人はしたゝかに醉つて、殆ど席に堪へぬといふ風であつたが、やがて濁聲で何か歌ひ出したので、細君が襖を細目にあけて覗いて見ると、客は眼を細くし顏を上げて、拙い調子で何か歌をうたつて居た。

おきつね、きつね、

とか衰頽とかいふ風なことを考へて、自から消極的にして了つた時、ある新しい芽がもう出懸つて居たんだね。』

『さうかな。』

貞一は頭を傾けた。

二人の間には酒が置かれてあつた。貞一は昨年結婚したので、田舍訛のある丈の高い肥つた細君が勤に初對面の挨拶をした。若い群の青年時代は既に去つた。

むかしの友に訪はれて、消え懸けた心の再び燃ゆるほどの熱はまだ貞一に殘つて居た。幼い頃から枯淡な宗教にはぐくまれて、物に執着せぬ性質は、若い群の間にも常に際立つて眼に附いて居たが、それがかれのかうした隱者の生活を送るやうになつた第一の動機である。

『僕も遣るよ、大に遣るよ。』

とかれは激昂して言つた。

勤は田邊の話をした。窮厄また窮厄、霞ケ丘の家も持ちこたへられずに、家族を里に預けて、再び放浪の生活を始めた。『あの才筆を抱いて、久しく世に認められないことを考へると、實際、文藝の道に携つて居るのは厭になるよ。西君が此道に入らずに、吾々と別れて行つたのも尤だと思ふね、』と嘆息して、『それは君のやうに、かうして田園生活をして、原稿の一枚賣の恥辱を免がれたのは賢い仕方だ。何

貞一の言葉には何處となく田舍訛が交つた。おきよと政次の結婚後、一度東京に出て來たばかり、心も姿も田舍風に染みたのを勤は見た。

ルーヂンの話、わが黨にも隱家一つ位あつても好いと其頃言つた。其隱家に敗兵は來ずに、貞一自からが隱れることとなつたのである。

若い群は思想上にも實際上にも敗北に敗北を重ねながら、猶志すところに進んで居た。勤の此頃の心から見ると、貞一は餘りに平和に安んじ過ぎた。

『僕等はもう在來の思想に甘んじて居ることが出來なくなつた。平和などに甘んじて居られなくなつた。』

勤はかう言つた。

明治の詩壇も著しく變つて居る。貞一が田舍で田園の平和を歌つて居る間に、感情派が出たり唯美派が起つたりした。手帳に書き附けた詩を貞一は歌つて聞かせたが、勤には甚だ時代に後れて見えた。

『何うも面白いには面白いが、もう少し新しい分子があつて好いね。』

『さうだらうね、僕も何うもさう思ふ。矢張刺戟するものが無いといけないねえ。』

『田舍に安んじて了ふと、矢張いかんのだ、』と勤は言つて、考へて、『一時、田園生活などといふことが唱へられたことがあつたね。あれが矢張ある思潮の墜落の頂點に達した時だつたんだね。吾々が敗殘

『よく來て呉れた、よく來て呉れた。』

寺行の話があつた時分の貞一の物語が勤の胸に蘇つた。廊下もある、中庭もある、貞一の小僧の頃居たといふ玄關の三疊もある。總てが思つたよりも古く汚く衰へ果てゝ居た。貞一の詩に歌つた寺の娘の若々しい戀が、こんな寺に起つたとは何うしても思はれなかつた。

其娘は色白の丸顏で、よく貞一と圍爐裏に相對して坐つて、火箸で灰に字を書いて見せ合つたといふ。また默つて泣き合つたこともあるといふ。裏の畑の芋の葉に夏の月の夜の露が光つて、其間の細い路は林の中に入つて行く、『二人こそ樂しかりけれ、おぼろ夜の月の光に。』かう貞一は詩の中に追懷を歌つた。其娘は今鴻の巣在の荒物屋の細君になつてゐた。

『此間も來たよ、』と貞一は話した。

『僕が小僧をしてる時分には、此寺はこれで中々盛んなものだつたよ。老僧が派手家で、世話人に其時分の豪家が居て、成田から不動さまを勸請する。其門前には、弘法樣の御夢想湯ッて言ふのがあつて料理屋が二軒まで出來て、白粉を塗つた女が五六人も居て、朝から三味線の音がしたものだよ。寺だつて、こんなに荒れては居はしない。道具だつて寺附の立派なものが隨分あつたサ。處が先住が死んで、留守居を置いてある間にこんなに荒れて了つて、僕は初めて入つた時は、それや喫驚した位だつたよ。唐紙、雨戶、そんなものまで持つて行つて了つたんだから。』

しかつた。昔榮えた寺の衰微——杉山の大きいのと、境内の廣いのと、周圍に溝を取廻してあるのとが、昔の榮えと今の衰へとを語つた。

蝙蝠傘に雨を凌いで勤が傾きかけた山門の處にひとり立つた時には、さまぐの思が胸をついて湧き返つた。當年の若い群の一つの心は、此處に埋れ果てゝ居るのである。柳町から原町喜久井町の長い路をシエクスピアを抱へて早稻田に通つたかれ、柔しい情を常に若い群に與へて居たかれ、共に戀に泣き運命に泣いたかれ、明治の詩壇に新しい種を蒔いたかれ——かれは此處に居るのであると思ふと、過ぎ去つた昔の追懷がそれからそれへと集つて來て、緩かな哀愁が曲譜のやうに心に流れわたつた。勤は此のなつかしい思を靜かに味ひたい氣になつて、山門の處にしばし立盡した。秋雨は降頻つた。

あたりは靜かであつた。庫裡の廊下に接した珊瑚樹の大きな葉に雨がたまつて、風の一吹ごとにばらばらと落ちた。井戸側には釣瓶が伏せてあつて、赤い冠鷄の鷄が簷下に雨を避けて、一二羽遊んで居たが、人の近寄る氣勢にコヽと聲を立てた。

庫裡の入口はがらんとして居た。米俵が五六俵隅の方に積まれたのが見えて、高い天井には、維新前主僧が供をつれて乘り廻した古駕が、埃に黑く煤けて、二箇吊つてある。案内につれて、古い衝立の蔭から十五六の小僧が顏を出した。

やがて貞一の莞爾した顏が其處に顯はれて、

三十

ガタ馬車の顚覆りさうな深い泥濘の五里の路を衝いて、田舍の小さい停車場から、貞一の寺を勤の訪ねたのも、此年のことである。横しぶきの入らぬやうにと垂れ下げた馬車の雨被ひの間から、をり〳〵見える藁葺の百姓家、餌を拾ふ鷄の群、ふかし甘藷を並べた路傍の休み茶屋、雨に赤い蹴出を高く捲つて、傘を避けて、馬車の駛つて行くのを避けて居る田舍娘もあつた。町の家並から野に出る處には、竹藪が連つて、川柳やら蒲やら藻やらの亂れた小川に、秋雨はザン〳〵降つた。

寺のある町は、平野の中に處々散らばつて居るやうな特色のある町で、造醬油屋の細い煙突と半鐘臺と北を劃つた寺の暗い杉山と多額納稅者の白壁とで成立つて居て、其の中央にペンキ塗の剝げた警察分署があつた。庇の長い家屋が一筋に並んで、市の日には唐物屋の硝子戸の中に赤い青い毛糸が見えた。青縞が土地の名產で、機杼の音が到る處に聞える。大きな吳服屋と足袋屋の招牌が著しく眼に附いて、町の街道の向うには、晴れた日の空に日光の群山が捺したやうに鮮かに背景をつくつて居た。

道路が町から四方に車の輻のやうに通じて、其外れに、乘合馬車の繼立場が三箇所まであつて、喇叭の音がをり〳〵町の靜かな空氣を賑かにした。

寺は町の裏にあつた。山門の白壁は半は崩れて、鋪石道はでこぼこと步み惱く、本堂は低く見すぼら

『さうかねえ、まア、』と夫人は言つたが、すぐ話を更へて、『それに、お子さんが此間お產れになつたばかりのやうに………』

と言ひ懸けてお光の顏を見て、『おつれになつていらつしやれば好う御座んすのに、少しの間でも、さうしては、お困りでせうにねえ。』

『中村君に預けて來たんですか。』そんなことをと思ふやうなことを西さんは言ふ。

お光には夫人が何だか難かしい人のやうに思はれて爲方がなかつた。話しながらぢろ〳〵と見る眼、自分の扮裝も羞かしかつた。

お光は西さんに同情した。またしても、『なぜ御自分から養子になどなつたのでせう?』といふ心が起る。と、其蒼い顏も、瘦せた體も、昔のやうにはき〳〵せぬ調子も、皆な其の爲めであるやうに思はれる。何となくうら悲しいやうな佗しい心になる。

夫人の去つた後、

『田舍の兄さんは此頃何うしました。』

かう西さんから訊かれて、『もうすつかり田舍者になつて了ひました。』

顯はれる。別嬪といふほどではないが、さう容色が悪い方でもないとお光は思つた。細い白い指に篏めた純金の指環、不斷着にして居るらしい伊勢崎銘仙の羽織、帶の色などが眼に留る。

初對面の挨拶は形式的に濟んだ。學校仕込のハイカラな好い家庭の娘と二人の兒の親の世帶じみた姿が一種の對照(コントラスト)をなして相對した。お光はたぢ〳〵といつも立後れのやうな調子で話した。

下女が大きな有田燒の菓子器にウエーハーを入れたのを持つて來て、銀瓶から湯を薩摩燒の小さな急須に移して、冷えたのと換へて行く。

其處に肥つた夫人が入いて來た。

お光は氣がつまるやうに感じた。莞爾した笑顔、言葉つかひも上品に、手を膝の上に重ねて、『まだほんに分らずやですから、』とか何とか調子の好い口附で話し懸けられると、無調法な口がいよ〳〵無調法になつた。

『中村君にお嫁に行く時、私が荷物の宰領をしたんですからねえ。』

と西さんが席の白けるのを氣にして、笑ひながら言ふと、

『さうかねえ、まァ。お前も、里にゐらつしやる時分から知つてゐるのだねえ。』

『えゝえゝ、私はお光さんがまだ此位の時から知つてるんですよ、』と西さんは笑ひながら、手を疊から三尺位の高さに伸ばして見せる。

西さんも先輩からの壓迫を常に役所で受けて居た。青年官吏間では兎に角樞要な地位を得て居るのであるが、年が若いので、其意見がいつも思つたやうに通らなかつた。『今日は一日口の酸くなるほど議論をした。』『いくら重要な新しい議論をしても老人連には解らんのだから。』『僕も其中に田舎に出るかも知れんよ。』などといふ言葉の端々に、不平不滿の氣が充ちて居た。身體が弱く常に蒼白い神經のたかぶつたやうな顔をして居た。

其顔を見ると勤は『早く結婚して了ひ給へ、』と心から眞面目に勸めた。友を思ふの餘、身體が弱い爲め、養子の籍を入れても、わざと結婚を延ばして居るのではないかといふ邪推もあつた。

西さんのその新室で、お光が若い未來の細君に逢つたことがある。お光は勤にすゝめられて其大きな邸に西さんを訪ねた。百日紅のまだ赤く咲き殘つてゐる頃の日曜日で、西さんはフランネルの上に羽織を着て居た。顔が蒼白く、弱々しさうな姿に、眉の徒に秀でたのが惜しいやうな氣がして、昔のことがさまざまにお光の胸に溢れた。

若い未來の細君はお節さんと呼ばれた。西さんが電鈴を押して下女を呼んで、『中村君の奥さんが入らしつたから、節ちやんに御目に懸つたら好いだらうッてさう言つてお出で、』と命じたが、中々出て來なかつた。節ちやん! 節とかお節とか言はずに節ちやん! 其言葉がそゝるやうにお光の胸に響く。でも、少時すると、廊下に輕い足音がして、障子がすうと明いて、瘦削の庇髪に結つた面長な顔が此處に

君のは何時まで何うしたんだ。もう內々一緒になつてるのかい、』などと無遠慮に田邊が言つた。

『そんなこと言つたつて、まだ學校に行つてるんだから仕方がないぢやないか、』と西さんは微笑を含んで眉を昻げた。

『學校なんぞ舍させちまふさ。』と田邊は笑つて、『丸で、猫の鼻先に鰹節をおくやうなもんだからな。』

『馬鹿にしてる！』と西もつい笑つた。

また西さんが勤にこんなことを言ふこともある。『本當に、家のはまだねんねで仕方がありやしない。雨戶の建てやうも知らんのだからねえ、君。此間も母に、お前そんなことで何うするのなんて言はれて居たよ。細君になつたッて、別段變りやうはありやしないし、僕も多きを望まんけどもねえ。』

『それや何處の家だッてさうだ。僕の妻だつて御覽の通りだ。』

『でも本當に考へると不思議な氣がするねえ。君の細君が兎に角二人の子供を怪我もさせずに育てゝ居るんだからねえ。』

『本當さ。』

『人生といふものは、難かしいやうで、存外容易く出來てゐるもんだねえ。』

『左樣だとも。』

近所の細君連も、その變りやうの早いのに眼を睜つて、『此頃は裏の方も見違へるやうに立派におなんなすつてね、』とお三輪に言つた。

西はまだ公然と披露目こそしないが、もう立派な旦那樣で、その爲めに建增した八疊の新室に常に起臥して居た。室には本箱が並べられて、紫檀の机の上には金縁の洋書が幾册も置かれた。硝子戶を透して山茶花の赤い花が見えた。勤が初めて洋服を着て行くと、『ヤア、洋服などをつくつて……丸で變つちやつたね、もとの中村君ぢやないやうな氣がする。』

勤も西の變つたのを見た。

梅雨の頃、西さんの養子披露會があつて、大學の同窓、役所の同僚、竹馬の友も二三人は來た。文學方面では勤と田邊が席に列した。養父といふのは、法曹界でも有名な官吏である。肥つた夫人が自から席を斡旋して、髯の生えた主人も出て杯を客に勸めた。十二疊の廣間、床には狩野元信の三幅對が懸けてあつた。芝草の庭にサッと降頻る雨、青葉の風に靡くのが硝子障子を透して夢のやうに見えた。

雨に濡れた薔薇の紅いのが緣葉の中に一輪鮮かに咲いてゐた。勤は西さんのことを繰返して考へた。

披露會があつてからは、勤が訪問すると、夫人がよく出て來て快活な話をした。未來の若い細君も廊下などで、時々は恥かしさうな樣子をして、黃八丈の羽織姿を見せた。後には馴れて、西さんが電鈴を押すと、障子を明けて、白い美しい顏を出した。田邊と勤と西さんと三人落合ふことなどあると、『おい、

けて家屋が新しく建てられて行くのと、僅か一年の短い月日の中にも、數へれば盡きぬほどの推移があつた。

おきよは今年の夏に女の兒を産んだ。宇都宮のお孝も二番目の兒が生れて、『今度は海軍を産んぢやつた、』と勇造が失望したやうに知らせて來た。お光にも九月の末に男の兒が出來た。『皆な上手だことねえ、まア、』とお三輪は頓狂な聲で羨ましさうに言つた。六月頃、お三輪にもその噂があつて、『今に見てお出！負けないやうな好い兒を生んで見せる、』などと威張つて居たが、やがてそれは何でもなかつたといふことが解つた。

勤の心の持方は、其實際の處世上にも絕えず効果を與へて居た。かれは常に奮鬪を續けた。自ら顧みるよりは自から進まうとして居た。羞恥、慚愧、神經過敏などといふものは勉めて押へて、如何なる凌辱にも如何なる罵詈にも耳を塞いで奮勵した。夏の初、主筆が罷めて、勤が其週刊雜誌を自分で編輯することになつてから、其力は更に所を得た。咲子の生れた時と、二番目の男の子の生れた時とを比べると、僅か二三年の間に、かうも心も境遇も違ふものかと思はれた。

勤は洋服をつくつて着た。縞セルの脊廣に、縞のズボン。冬服には焦茶色の羅紗の立派な外套が出來た。中折の帽子も流行の色を選んで買つた。靴も深護謨を二足まで造つた。――かれは全く汚れた舊い衣を脫いだ。

車はガラガラと動き出した。お孝は二三度振返つて此方を見た。いつもの朝なら、坂の上までは其後影が見えるのだが、霧が深いので、車の音はしてももう見えなくなつた。

人々は思ひ思ひの考を抱いて別れた。

二十九

一年はまた過ぎた。

表通りが賑かな町になつて、蕎麥屋、菓子屋、煙草屋が軒を並べるやうになつたのと、ミルクホールが出來て、色の白い白粉をベッタリ塗つた女の學生と戯れて居るのと、丘の蔭に夫婦者の情死があつたのと、久しく塞がらなかつた前の空地に大きな家屋が建てられて、藝者上りの細君のある家族が住んだのと、お三輪が其細君にすぐ懇意になつて、毎日のやうに出入をして、相變らず例の笑聲を立てゝ居るのと、政次の俳句が近頃大分上手になつて時々はホトトギスなどの選に入るのと、裏の樅の樹の伐り倒されたのと、傍の家に主は臺灣の役人に行つて居て、祖母さんが二人、孫娘が二人、その姉の方は、今年十五で、生れつきの白痴で、平生涎を垂らして居るといふ家族が引越して來たのと、下の家の主人が昵近になつて何彼と相談に乘つて遣るので、祖母さん達は大變に喜んで居るのと、早稻田が大學になつて、四角の帽子を被つて學生が朝に夕に陸續と通りを通つて行くのと、鶴卷町の裏の森や茗荷畑が段々ひら

『うむ、來年は出られるだらうと思ふんだ。兄さんも少し田舍の方に遊びに遣つて來ると好い。』

『あゝ其中行くよ。』

お孝は里親の抱いた兒に離れ難ないといふやうに其の顏をじつと打守つた。兒はメリンスの赤い地に紅葉の白ぬきにしてある衣を着て、莞爾して居た。若い母親の眼には涙があつた。

お光は其處に立寄つて來て、別離の言葉を述べた。

誰の胸にも別離のつらさが充ちた。此春からの睦しい往來が胸に浮んで、明日からはもう弟の元氣な聲を聞くことも出來ないと思ふと、總領の兄も勤もさびしい氣がした。お光はまたかうして睦じく夫と一緒に國に歸つて行くお孝が羨しかつた。――霧がこの一團を包んで流れた。

勇造は時計を出して見たが、

『それぢや、汽車に後れると惡いから。』

『さうとも……』と兄は言つたが、『でもまだ大丈夫だ。上野までは一時間あれば行ける。』

車夫は梶棒を寄せる。行李はお孝、軍用カバンは勇造が其車に載せた。總領の兄は汽車の中で退屈した時にと、唐饅頭を一袋包の中に入れて遣つた。

『それでは。』

『左樣なら。』

に載せたのは、下の家の主人である。續いて勤が出て來る。お三輪が出て來る、軍服を着け劍を鳴らした勇造の後から、お孝は縮緬の羽織に紬の袷、手に信玄袋を下げて顏を出した。

昨夜から宿つて居た二十三四の丸髷の里親は、男の兒を抱いて其傍に立つた。

お光が咲子をたゞ負ぶして、急いで向うから遣つて來る。

『それぢや丈夫で、』と總領の兄が言ふと、

『兄さん、大變に御世話になりました』とお孝はもううるみ聲で、『武(男の兒の名)はこれからさぞ御世話になることで御座いませうが、よろしくどうぞ……親の傍に居られない兒だと思召して……』

半ば言得ずに顏を背けると、總領の兄は、

『大丈夫だよ、武のことは安心してお出!』

『嫂さんには、殊に御世話になるでせうから、』と今度はお三輪の方に言ひかけると、

『本當に大丈夫だからね、安心して居らつしやいよ。立派な兄弟がこんなに澤山居らしやるんだから。』

勤は勇造に、

『それぢや成るたけ早く東京に出られるやうに運動するが好いよ。田舍にまごまごして居たつて爲方がない。』

勇造は、

なくそは〳〵して居た。

おきよと政次との間は、まだ蜜のやうであつた。大きな髷はおきよに殊によく似合つた。政次は其節毎に流行のネクタイをして役所から歸つて來る。母親は段々嫁の蔭口を人に語るやうになつた。その癖、嫁に對する言葉遣ひはいよ〳〵丁寧になつて、『おきよさんや、これをしてお呉れ、』などと言つた。時には傍に居るおきよをわざと擱いて自分で腰を曲げて勝手元へ行つて用を足すことなどもあつた。おきよが二階で泣いて政次に何事をか語ると、『困るなァ本當に、母さんは、』と政次は言つた。

お榮は近くに居るので、朝に夕に濠端の母の店に來た。秀子の綺麗な眼とハイカラな無邪氣な姿も其處に見られた。

秋は日に日に深くなつた。雨がしとしとと幾日か續いて降つた。彼岸の中日は空は美しく晴れて、下の家の金木犀が庭から座敷に匂ひ餘つた。此木犀は十年前に主人と勇造とで神樂坂の緣日で買つて來たものである。

其日勇造夫婦の歸國を送る爲めの宴がその座敷で開かれてあつた。

翌朝は霧が深かつた。

露に濡れた木槿の紅い白い花が垣に幽かに見えて、屋敷町はまだしんとして居た。井戸側、門、垣、其處に俥が二臺置かれて車夫は久しく待つて居た。やがて門から柳行李と軍用カバンとを運び出して車

しい幕を見せて、寢卷姿で女房に負さつて居ることなどもあつた。秋の初めに、近所に評判の立つほどの大喧嘩をしたが、四五日して、不意に小石川の方へ移轉して行つて了つた。太田の後家は、いつの間にか男に印形をちよろまかされて、氣が附いた頃には、三軒の貸家を抵當にしても猶埋らぬ程の借金の穴が出來て居た。男は其金で赤坂の藝者を買つて居たのである。後家さんは雨のしとしとと降る日、下の家の長火鉢の前で、

『これも亡くなつた人の罰が當つたんだ、』と泣いてお三輪に一伍一什を話した。

新聞記者の家では、本妻に先づ男の子が出來て、續いて妾が懷姙した。丁度此頃七月位で、大きな腹をして、庭などに出て居るのを往來の人が常に見懸けた。每朝十時頃に抱への車が來て、新聞記者は洋服姿で威勢よく出懸けて行く。

山手から濠端に通ふ路には、小婢の押した乳母車が同じやうにして通つた。ある日、坂を下りようとすると、洋服姿の西さんが、急に傍に寄つて來て、突然、車の中から咲子を抱取つて、頰を自分の頰に當てた。咲子は人見知もせずに莞爾と笑つて居た。

小婢は歸つてから、お光に、

『本當に奥さん、私、初めびつくりしましたのよ。』

お光は嬉しさうにして、其時のことを詳しく聞いた。其日は終日西さんのことを頭腦に描いて、何と

た。或者は悪魔のやうな皮肉な笑ひ方をした。或者は石のやうに冷かに沈默した。或者は狂した。或者は憤死した。けれど其心は一つだ。

『新しき奮鬪、新しき努力。』

二十八

夏になり秋になつた。

丘の上から見ると、目白臺の樹木の中に西洋館の白いペンキ塗が際立つて、空には色ある雲が靡いた。草の上には、赤蜻蛉が飛び、細い水には藻が浮いた。

勤の家では夜はいつも遲くまで書齋の障子に燈火がさした。萩の散つた庭には蟲が鳴いた。勇造の家のの門の側の井戸端には、お孝が襟に白い手拭を懸けて水を汲んで居ることもある。何うかすると琴の音がした。お光のを借りて來て、お孝はをりをり生田流の六段を彈く。

後家さんの群も凋落した。石渡少佐が臺灣から歸つて來て、一悶着あつたのは此夏のことである。亭主と喧嘩して若いけんのある顏をして、夫人がお三輪の家に驅け込んだのも二度や三度のことではなかつた。離緣をするなら手切金を五千圓出せと、夫人は主張した。下の家の主人が中に入つていろ〳〵口を利いて遣つたが話は容易に纏らなかつた。少佐は夫人に未練があつて、喧嘩の間には、をりをり甦めか

『求めよ、さらば與へられんとイエスクリストは言つた。此立場が即ち今の新しい思想と違ふ所だ。與へられんなどといふよりも、われは得ん、必ず得ん、得ざるべからずといふのが今の思想である。自己本位、自己中心、自覺、——超人（ユーベルメンシ）——。

『理想の夢に迷はされたるが爲めに、失望が多かつたのだ。與へらるゝを待つが爲めに何物も得なかつたのだ。

『今までは、唯、人生の希望、理想、快樂といふことにのみ頭を沒して居た。馬車馬が脇目も觸らずに歩いて行きさへすれば好いと思ふやうに歩いて居た。いつも同じ路を歩いて居ながら、高い處に達せんことを望んで居た——今、今は少くともさうではない。自分は四邊を見廻し始めた。眼を蔽つてゐたある物を捨てた。確かにぬぎ捨てゝ大地に投り附けた。

『新しい西洋の作家の傍觀的態度、本當にその傍觀的態度が羨ましい。巴渦の中から、一度離れて立つて見て居るのがかれ等の態度である。美も醜も善も惡も無い、萬般の事物唯現象として自然の姿として歴々（ありあり）として其眼に映ずる。

『飽まで悶え、飽まで苦しみ、飽まで疑ひ、飽まで巴渦の大坩堝の中に其眞面目な熱烈なる心を投じて見て、矛盾、敗滅、紊亂、平凡、腐敗、虚僞の現象に魂を驚かして、さて否定し、反抗し、冷笑した心！

『さうだ——形は千變萬化、人に由つて異り、國に由つて違つた。或者は燃えるやうな高い獅子吼をし

倒に就いて、感慨無量たらしめた。眞實なれ、自然なれ、われまことに獸たらば、獸たるに甘んぜん。まことに惡魔たらば、惡魔たるに甘んぜん。弱點あらば弱點を人に示すに躊躇せじ。願ふところは、唯わがまことの心、まことの姿、まことの力の僞るところなく顯はれんことのみ――。

『愛せる子を殺す。殘忍の極、非情の極。されどこれを敢てせるものには、殘忍非情より來る絕大なる呵責に堪へたる力を有せることを證す。呵責なき自由は與みしないが、若し自分にもその力を有すること が出來たならば――。

『總て人に求むる心、依賴する心、憧るゝ心、願ふ心――これ等は皆な人間が欲望に屈從して居ては、決して自己の自然のまことの姿を示すことが出來ない。

『自分は曾て道を求めた。美を求めた。善を求めた。自己の克己忍耐と博愛と犧牲とに由つて、理想の家庭をつくり、理想の樂園を得ることが出來ると信じた。戀は戀にして肉にあらずとの考を抱いて居た。かくして爾は美を得たか、善を得たか、理想の家庭を得たか、淸き戀を得たか。

『一つとして滿足のある物を得たためしはない。自分は妻を敎育しやうとした。自分は子を得て、親として新しい意義を發見しやうとした。いづれも失望に終つたではないか。

『何處まで行つても自分は自分である、他人は他人である。妻は妻である。子は子である。何物をも求められない、何物をも得られない。――いや求めたのが、得ようと思つたのが、そもそもの過誤である。

なかつた。爾に弱點ありといふ、爾に惡の分子ありといふ、爾に呪ふべき惡魔の影ありといふ。何者ぞ弱點？　何者ぞ惡の分子？　何者ぞ惡魔の影？

『自分は空しき影を逐つて居た。空しき美しき夢を見て居た。弱點の攻め、惡魔の襲ひ來るのをのみ恐れて居た。けれど弱點は人間の弱點ではないか。惡魔は人間の惡魔ではないか。否、否、弱點として今まで呪つて居たのは、暗い弱點の影、惡魔の影ではなくて、其處にまことの自然の力が潛んで居たのだ。

『弱者——然り弱者であつたが爲めに、其自然の偉大なる力を縱橫に自由に發展せしめることが出來なかつた。地上にあつて天上の星にのみ憧れて居た。

『胸には美しい淸い思想を抱いて居ると思ひながら、實際は無情、臆病、卑劣な擧動をのみして居た。虛僞の生活をまことの生活と信じて居た。畫いた彩色した餅を食つて旨いと思つて居た。

『われは地上の動物たるに甘んぜん。猛獸野獸たるに甘んぜん。我は四肢を地上に立て、吼ゆる時は吼えん、眠る時は眠らん。かくニイチエは叫んだ。然り地上の野獸！

『善とは人間が社會組織上に便利と見たる時の符徵、惡とは人間が社會組織上に不便と見たる時の符徵——。

『所謂善を行ふ事にのみ腐心せる人は禍なるかな、所謂惡を拒ぐことにのみ努力する人も亦禍なるかな、ズウデルマンは其作中の主人公ボレスラブをして、自然の兒レギイネの死屍に對して、善惡價値の轉

『何うしたんだえ？』

『いゝえ、何でもないんですよ。』

とは言つたが、傍に居た咲子を抱き上げて、さもこの世に賴りになるのはこればかりと言はぬばかりに柔かい頰に強いキッスをした。咲子は泣出した。

二十七

『自分は弱かつた。同情は弱者の聲だ！』

かう勤は心に叫んで步いた。

『善惡標準の轉換、道德の超越、強者の世界、超人を叫んだフリードリッヒ、ニイチエは豪い。善にあらず、惡にあらず、自然の力、自己を自然の力の一部とする思想。

『此の熱烈なる思想を自分が今まで抱いて居た考と比較して見る。自分ながら自分の弱者であつたのに呆れざるを得ないではないか。善を爲せよ。博く愛せよ。美しく行へよ。自己の弱點を改めよ。不幸なる人を憫めよ。筆にせるものは皆な同情的文字、考ふるところは皆な消極的厭世、自己の至らざる、及ばざる、成す能はざることをのみ自ら責めて居た。

『至らざる、及ばざる、成す能はざる、これが至り、及び、成す道であるなどとは、夢にも思ひ至ら

た方が好いぢやろッて、政次が一生懸命に替へて御座つたがな。』
お光にはさうは思へなかつた。何だか其身などが來て、勝手に店の品物の原價を知るからだといふ風に邪推されだ。母さんも政さんも他人扱ひにして餘りだと思つた。
勤も前には怒つたり、悲しんだり、三日も口を利かずに居たりしたが、此頃ではさういふことは少くなつた。從つて、その反動とも謂ふべき熱い握手、烈しい情熱、極端な後悔などを示すことも稀になつた。戀人らしい甘い言葉などはもう二人の間に交はされようとはしない。
咲子も次第に可愛くなる。あやすと、高い聲を立てゝ笑つた。齒が生える前には、むづ痒いかして、ぷうく\と唇を吹く。やがて小さい齒が二枚可愛らしく出る。すると智慧が附き出して、母親が見えないとすぐ泣出したが、それがまた母親には、此上なく可愛かつた。他から愛を求めて居た身は、いつか他を愛さねばならぬ身となつて居たのである。
ある日、勤が社から例刻に歸つて來ると、お光は今里から歸つたばかりの扮裝をして居たが、溜息を吐いて、
『つまらない！　つまらない！』
『何うしたんだ？』
『本當につまらない！　母さんなんどは頼りにならない！』

――その總てを占めて居たと信じた母親が、もう自分のものではなくなつた。

話をしても以前のやうに腹の底を打明けることが出來ないばかりか、『お前は他所に嫁いた身だ、』と常に言はれる。家の樣子も變つた。簞笥の置き場所も變つた。姉が別居してから、一層さういふ氣がする。おきよが赤い襷を十字に綾取つて、主婦氣取で、臺所で、働いて居るのを見ると、もう自分の家でないといふ感がひしと迫る。

政次の机の上には、おきよが拵へた綺麗な縮緬の肱附が置いてある。柱に長い姿見が掛つて居る。信女袋が其傍に雜誌、書籍と一緒になつて居る。紅血が鏡臺の上に伏せてある。寫眞挿には、おきよの母親、兄弟、友達などのが一杯に挿されてある。

總てが變つた。

店の品物を手に取つて見ると、符徵まで變つた。タフネ、イネ、カイヅ――何う考へて見ても解らない。

『符徵を改へたのね、母さん。』

『あゝ替へたよ。』

『何うして？』

『何してといふこともないぢやがね、』と笑つて、『此頃お客樣がな、段々覺えて御座つたで、少し替へ

にしたハイゼの短篇小說に讀み耽つて居た。男女の不可思議なる關係、境遇から起る戀の止み難き力、さうした感の起る實例の一つとして、餘所の出來事のやうにしてかれに話した『細君は隣の間に寢て居る。何うしても寢られぬと見えて、寢反を打つたり、溜息を吐いたりするのが聞える。僕も何だか變な氣がして、其夜はたうとう明方まで眼を覺ましてゐたよ。性の違ふものが二人居るといふことは意味の多いことだ。ハイゼがさういふ處を狙つて詩材にしたのは面白いね、君。』——

姉妹が猶盡せぬ話に耽つて居ると、表の格子が明いて、秀子が學校から歸つて來た。

『お光、御覽よ。秀の恰好ッたら何うだらう?………柄にもないハイカラな眞似をして………此頃はお轉婆になつて爲方がありやしない………』

秀子は流行の廂髮に幅の太い白リボンをかけて、海老茶の袴を穿いて立つた。

二十六

月日は早く經つた。

親に離れるさびしさが此頃お光の胸に絕えず往來した。

嫁が出來てから、以前ほど里に行くのが樂みでなくなる、店の品物を持つて來ても母親は一々帳面に附ける、おきよの綺麗な姿が一面羨しいと共に一面邪魔になるやうな思がする、其身の占めて居た母親

『此頃、久しく見えないのよ、家には。』
『もう、ちやんと此方の家に來てるの？』
『え、え、去年の暮から養家に一緒になつて居るのよ。』
『まだ式は擧げないいんだらう？』
『え、まだ結婚しないのよ。お嫁さんになる人、まだ學校がすまないんですもの。』
『さう。』
『この正月、お嫁さんになる人に逢つたつて、內では大變に喜んで居てよ、やさしい方ですつて。何だか妹でも出來たやうな氣がしたつて言つて居てよ。』
『變るものねえ。』と少し言ひ淀んで『大久保に來る時分には、まだ若い綺麗な學生さんだつたのに……何でも一度泊つて行つたことがあつたよ、日清戰爭に內でも出征して、貞一が泊りに來てた頃だつたよ。貞一は學校を出て番町の印刷所に一時勤めて居て、歸りがいつも遲くなる。けども折角遠い處をお出になつたんだからつて、引留めたは好かつたがねえ。其夜、貞一はたうとう歸つて來ないのさ、本當に氣の毒な思ひをしたことがあつたよ。』
『そんなことがあつたの？』
お光もお榮も知らぬが、西がある時、其夜のことを、勤に話したことがある。西は其頃不倫の戀を材

もある。

『義兄さんが生きて居て呉れると好かつたのねえ！』

いかにも沁々とお光は言つた。稚い頃から可愛がつて、寄席、芝居などによく一緒に伴れて行つて呉れた。自分の下級の若い士官に嫁けようとする腹で、種々教訓した。現に、逝く一年前に、その世話である青年士官と見合をしたこともあつたのである。義兄さへ居れば、お孝さんのやうに樂しい生計も出來たのにとお光は今でも思つて居る。

義兄が肺病で死んだ家の庭には、白い菊が簇つて咲いて居た。お榮も泣いたが、お光は一層力を落した。月の明かな夜を雁が鳴いて通つた。垣の傍に矢竹が戰いで、其外は細い徑が通じて居たが、勤が丁度その時分其路を往つたり來たりしたことを後に聞いた。『確かお通夜の晩だつたらう、念佛の鐘の音がカン〳〵聞えて、障子には明るく燈光がさして居た。』勤はこんなことを言つた。

『さう言へばお前、今朝西さんに逢つたよ。』お榮は突然言ひ出した。

『何處で？』

『ちよつと、用があつて、今朝早く原町まで行くと甲良町の角で、車に乘つた立派な人が莞爾して私の顏を見て挨拶するから、誰だと思つたら西さんさ。立派になつたね、大變にえらくなつたもんだねえ。』

色白の顔を莞爾させて、新しい大學帽を冠つた一青年と相對した。貞一は表の六疊に、洋書を七八册机の上に載せて、ファルケンベルヒの哲學史などを繙いて居た。小兒の詩と淡い戀の詩とが得意で、新聞の日曜附錄などにはいつも載つた。西は其處で銀杏の樹の蔭に住む少女の話、紫の衣服を着た眼の清い少女の話などをした。利根川の戀も打明けて語つた。

裏の間に、紙腔琴が一箇置かれてあつた。幸子が丁度五歳位で、常に飽きずにそれを廻すと、『君が代』だの『梅が枝の手水鉢』だの、種々の曲譜がゆるやかな同じ調子であたりに聞えた。

勤はいつも貞一を誘ひ出して、裏の林を拔けて戸山の原に行くのが例になつて居た。其時は大抵春の長閑な日とか、秋の空の鮮かに晴れた日とか、冬の初めの落葉の鳴る日とかで、二人の青年は、射的場の上にひろびろと晴れた空を見渡して、自然に對する新しい思を漲らせた。林の角の芝草の小堤、その下に小川が澄んで、二人の頭上を通る色彩ある雲の影が映つた。落合に通ふ路傍の林の中からは、二人が燃した落葉の煙が細く靡いた。晴れた秋の日には、其處によく演習があつて、兵士が『伏せ』を遣つて居ると、漸く今年少尉になつたばかりの若い士官が劍を拔いて號令をかけて居る。處々に高く積んだ枯草が長く影を夕日に布いた。汽車が出る度に、踏切の小屋から爺が白い旗を出して居る。

お光も此家に泊つたことが幾度もある。東京にもこんな淋しい處があるかと思つた。姉の秀子と幸子と伴れ立つて、竹のガサガサと鳴る藪の奥に百姓家の燈光の薄く見える垣根道を、通りの湯へ行つたこと

が出て行くのを見たこともあつた。お榮の夫は其頃三十四五で、鬚の生えた、瘦削な、世の中のことは知り拔いて居る軍人だつた。植木が好きで、庭には檜、楓、蘇鐵、萬年靑、柘榴などの鉢が、棚に載せられて、日曜には、へこ帶をした主が、如露から水を潑けて居るのを折々見懸けた。お光は其頃まだ子供で、里から遊びに來ては、貞一の膝にまつはつて繪本などを弄つて居たものだ。

大久保の奧、竹藪の中の藁家が續いて思出された。春は筍が出たり野蒜が出たり菫が咲いたりした。秋は裏の林に栗の實が落ちて、秀子は朝毎に樂みにして其を拾つた。畑には葱、菜、大根などが常に靑靑として、傍の小屋に住んでゐた老爺が、節毎の野菜の種を下して呉れる。夕暮近く、戶山學校に勤めて居る夫が劍を鳴らして歸つて來るのをお榮は少くとも三四年この家の戶口に出て迎へた。座敷には村田銃が一挺、あたりには獵の道具が一面に置かれて、日曜には夜中から準備をして出懸けて行く。狩獵に懸けては、中々の達人で、山鳩の眠る場所、雉子の居る森、鴨の下りる沼などをよく知つて居た。冬休暇には、汽車で二三日路の處まで行くことなどもある。獲物は常に多かつた。お榮は今でも日當りの好い緣側で小鳥の羽を捘つた其時分のことを思ひ出した。

勤にも貞一にも西にも、其處は記憶の多い家である。露伴紅葉の小說、逍遙鷗外の論文、難かしい審美論が出るかとすると、優しい美しい夢のやうな戀物語が出た。西が新體詩を作る頃には、遠い本郷臺から戶山の原を越して、林を拔けて裏から遣つて來て聲を懸ける。お榮は大きな丸髷に結つて、肥つた

『政次は主人だから、さういふ處に氣を附けると好いんだけど………一向そんな風も見えないし、母さんは母さんで、お腹ん中でヤキモキ思つて居るばかりで、それは變挺だよ。お嫁さんだツて、あれではかへつて困らアね………』

『その癖母さんは家の嫁さんだからつて成るたけよくする氣なんでせう？』

『此頃ぢやもうさうでも無いやうだよ。初めの中は、それでも世話をするつもりで居たらしいけれど、段々厭氣がさして來たんだらう屹度。もう餘りほいほいしなくなつたよ。』

『さう？』

疑はしいといふ顏をお光はした。

家の狹い割に、好い道具が多かつた。簞笥、服簞笥、懸軸、額、桐の丸い火鉢もある。立派な茶簞笥もある。紫檀の机もある。鐵瓶、茶器などにも價値のあるものが揃つて居る。お榮の夫は大尉で死んだが、平生心懸が好かつたので、種々な道具を手放しても、猶此小さな家にはありあまるほど殘つて居た。勤はお榮を昔から知つて居た。秀子が生れる時分、貞一が其入口の狹い二疊に寄寓して、早稻田に通つて居たので、勤は破袴を穿いて、摩滅らした駒下駄を引摺つて、常に其家を訪うた。お榮がかき餠などを燒いて呉れたものである。秀子が生れる日にも、丁度行き合せて居て、其時遣つて來た產婆の肥つた姿を今も覺えて居る。秀子は眼の美しい可愛い子だつた。友禪の綺麗な衣を着せて、夫と一緖にお榮

『本當ねえ、姉さん、少し母さんに言つて遣る方が好いよ。』

『あゝいふ性分なんだから、言つたつて駄目よ。』

『何うしてあゝだらう、母さんは。』

『それに、お嫁さんも、少しむッつりの方だからね、母さんが呼んだつて、中々立ちやしないつて言ふ風だからね。』

『さうね、少し………』

『なまじつか華族さんなどに奉公してたもんだから、上品なことばかり覺えて、貧乏者にはちとゆつたりしすぎてるからね。西洋料理の拵へ方などばかり覺えて居たつて爲方がありやしないよ。それに政次も惡いのさ、母さんをはつたらかして置いて、二階で話し込んで居たり、一緒にこつそり寫眞を撮つたり、寄席に出懸けて店をしめる時分に歸つて來たりするんだもの。』

『政さん、それでも、毎晩、店を閉める時は手傳ふでせう?』

『手傳ふものかねえ、お前――私が別れてからはそれは手傳ふだらうけれど、此間までは店などに手を出しやしないがね、お前。店を終つて勘定をすまして、母さんが寢る時分には、もう二階ではとうに寢て了つてるんだよ。』

『それはいけないねえ。』

想が好くなつて來たがね。』

調戲はれても冷かされても、お光には矢張勇造の快活なのが好かつた。お孝との間柄にも目に餘るやうな睦しいところがある。吟子が生れても、お光はお光で、勤は勤であつた。

お光は話題を變へて、

『おきよさん、まだ出來たやうな樣子はなくつて?』

『まだそんな話は聞かないがね。』

『もう出來ても好い時分ね。』

『まだお前……』

『店はまだ任せられないつて、今日も母さん言つてゝよ。』

『それはさうともねえ、お前……それに母さん例の遠慮家で、言はなくつてはならないことも遠慮して默つて居るから……あれぢや困るよ、本當に……』

『さうね、何うも氣が附かなくつて困るつて、母さん言つたよ。』

『そら、さういふ風だから困るんだよ。腹ん中でいろんなことを思つて居ても、それは口に出さずに、人にばかり困る困るつて言つてるんだから爲方がないよ。嫁さんだッて、あれぢや遣り憎いし、今のうち、しつかり仕込んで置かないと、後で困るよ。』

扱つて居るから可笑しくなるよ。ひとりであんなことをしてゐては、三人にもなつたら、何うするんだらう。』
『本當よ。泣かせると言つては小言を言はれ、喧しいつて言つては怒られ、本當に何うしたら好いか解りやしないよ。それに、此兒がそれや喧しいんだから！』
『さうね、少し癇が强いね。』
『亡くなつた義兄さんなぞは、秀ちやんの小さい時分はよく抱いたり何かしたでせう。內でも――時には抱いたり何かすることもあるけれど、それはほんの氣まぐれで、喧しい、喧しいッ、丸で他人の子のやうなんだもの………』
『さうね、もう少し世間の人のやうに、平氣で、夫婦一緒になつて育てるやうにするといゝねえ……勤さん、書く方で、子供どころぢやないんだらう。』
『さうなのよ……それにね、姉さん、內は情が薄いのかも知れないと思ふよ。勇造さんなど十日に一度位里に遣つた兒が來ると、それはお孝さんと二人で大騷ぎ、引奪り(ひつたく)こをして抱いて居るのよ。あんなにして子を育てたら好いだらうと羨しく思ふこともあるよ。』
『それはお前、里に遣つてあつて、時々逢ふ子と、始終家に居る子とは違ふがね……勤さん餘程變つてるからね。』と少し考へて、『でもね、お前、去年あたりから見ると餘程よくなつたよ。此頃は餘程愛

『だつて爲方が無いがね、お前誰だつて皆なさうして來るんだもの、私など內に逝かれる時分は、お前も知つてるけど、それは大變だつたよ。秀は未だわからないし、幸はかァちやんかァちやんつて言ふし、生れた子は乳を離れないし………』

『幸ちやんが今迄生きて居ると好かつたねえ。』

『何方かひとり生きて居りや好かつたと思ふこともあるよ。秀一人ぢや本當にもしものことがあると心配だからねえ。けどね、考へて見ると死んだ方が好かつたかも知れないよ。三人居ては骨が折れるからね。』と話を後に戻して、『お前なぞ、今のうち苦勞して、たんと子供を育てゝ置く方が好いよ。』

『子供も好いけど………』と言ひ淀むと、姉は、

『お前の內では、皆な子供が嫌ひだね、勤さんもさうだし、お前も餘り好きぢやないねえ。』

『え、私、嫌ひね、何方かと謂ふと、……』

『本當に不思議だよ。子供つて言ふものは可愛いものだがねえ………それ笑つて居るよ、』と乳を離した兒をあやして、

『もう母さんが解るね。』

『え、もう私が立つと、後を見送つて居るのよ。』

『可愛いものなのに、何うしたんだらう、お前の家に行つて見ると、本當に二人で大騷ぎをして、持

『本當だよ、お前。うつかりして居られやしないよ。秀でも大きくなつて、好いお婿さんでも來るやうになるまでは、寢る目も寢ないで働かなくつては、それや本當に立つて行きやしないよ。』
お榮の前には、銀杏の裁物板に針箱に鋏に糸卷、賃仕事の一樂織の男物があたりに散らばつて居た。
『それでも秀ちやんは容色が好いから、何んな好い養子でも來るわね。』
『何うしてねえ。お前。今時分財產も碌々ありもしないこんな處に養子の來手があるものかね。隨分大きな家でも、養子ッていふものは難かしいものだ相だから、爲方が無けりや、私は、秀は餘所に出して了はうかとも思ふよ。』
『さうしても好いのねえ。』
『兎に角、あの兒は丈夫で大きくなつて貰はなくつては爲方がない、』と言つて、少し笑ひ懸けて、『その代り、あれが大きくなつて、そんなに望みは無いけども、好いおとなしい養子でも出來れば、それこそお前、どんな御馳走でもするよ。』
伴れて來て次の間に寢かして置いた咲子が目を覺まして泣出したので、お光は立つて抱いて來て乳を含ませた。
『本當に、子供の世話つて言ふものは、なかなか大變ね。餘り泣かれると、私、投つて了ひたくなるのよ。』

氣がのう〳〵するよ。店があると、何うしたつて夜も勝手に寢られやしないし、二階で仕事をしてりや、お榮は自分の仕事ばかりして居て、役に立たんて母さんに言はれるし……それに、秀（女の兒の名）の爲めにも、あゝいふ見世屋に居ては、行末の爲めにもよくないからね。』

『さうね。』

『此間もね、秀がお婆さんの處に居るのが厭だ、厭だつて言ふから、何うしたのかと思ふと、學校でね、お前、ダイヤモンドつて言ふ綽名が附いてるんだとさ。』

『何うして？』

『店に、ダイヤモンド齒磨のビラが出て居るだらう。』

『まア厭だ！』

とお光は笑つた。

『さういふ風だからね、お前。あの兒の爲めにも早く引越したいと思つて居たんだけれど、お嫁さんが馴れないし、見て貰つたら先月までは動いては惡い事があるツて言ふから爲方なしに居たんだよ、お前。母さんは一軒家を持つと、中々同居してるやうな譯には行かないつて、唯ででも置いて貰ふやうに恩に着せるけれど、秀のと二人分食扶持はちやんと出して居るんだからねえ、お前。』

『姉さんも大變だね、これから。』

賣つて居るのを母親にせびつて、一錢貰つて、自分が買つて食つて居る――ふと前にめづらしいものがあつたので、思はず立留つた。垣の傍にしんこ細工をする爺さんが荷を卸して居て、子供が五六人其周圍を取巻いて居るのが眼に入つた。猫、犬、鷄其他いろいろなものが出來て居る。

今、鼠を拵へて居る處で、見て居る中に頭が出來て、胴が出來て、尾がずうと長く引出された。色しんこを彼方此方こね廻して居ると思ふと、今度は何うしても本當の物としか思はれないやうな鷄卵が出來が。

小婢は久しく立つて見て居た。

車の中の兒は、眼をあけて、まじ〳〵とあたりを見廻した。晴れた大空が其の小さな明かな瞳に映つた。花の影やら木の影やらが微かに顏、衣、車の上に動く。兒は時々思ひ出すやうにスパスパと乳を吸つた。

山手の春の路は綸のやうであつた。小路の到る處に花が明かに咲いて、鶯の聲が竹藪の中から聞えた。

二十五

お光とお榮とが話をした。

『別れた方がのんきだらう、姉さん。』

『それやのんきだともねえ、お前。こんな狹い――六疊と四疊半の家だけども、自分の家だと思ふと、

雛壇の上に置かれた。

二十四

四月の麗かな日に、山手から濠端に通ふ同じ路を、新らしい一箇の乳母車が押されて通つた。黄格子の唐棧の綿入に、樺色がゝツた繻子の帯を緊めた肥つた小婢の姿は、柴垣、要垣、枳殼垣、板塀、冠木門などのある小路から賑かな町の通りに際立つて鮮かに見られた。

車には唉子が色の褪めた肩掛に包まれたまゝ寢かされてある。この大きな幅廣の肩掛は、お光が娘の時分に流行つて、色合が好いなどゝ友達から賞められたものであつた。兒の傍には、ミルクの罐と罎とが置かれて、小さい口の動く度に、罎の中のミルクがのどかな春の日に微かに光る。襁褓を包んだ風呂敷包もその傍に載せてあつた。

小刻に運ぶ足に連れて、乳母車はガラガラと動いて行く。

小婢の心は、押して居る車よりも、あたりに見える賑かな町の家並よりも、路傍に唉く木蓮、八重櫻の美しい花よりも、遠く田舎の藁葺の小屋にあつた。藁葺の小屋には昨年產れた妹に乳を含ませて、母親が笑つて居た。姉が路に近い戸を明けて、青縞を織つて居る音がチヤンカラチヤンカラ聞える。家の前に草の蔽つた汚い溝があつて、人が通ると、蛙が音を立てゝ飛込んだ。町の漬物屋で杏の漬けたのを

『本當に何うしたんでせう、まア。』

『ちよつと見ると、何うかしてるとしか思はれない位ですよ。突如壁に懸つてあつた外套を取つて、あんなことを始めるんですもの。』

『何うかしてるのよ。あの奥さんは。』

『可笑しいのねえ。』

『何か心配でもあるんぢやないの。』

『そんなことは無いでせう。』

『嫂さんも隨分ですねえ。』

『それは隨分、聞いて居られないやうなことをいふのね。』

『私、此間も呆れて了つた。兄さんのことをあんなに惡く謂はなくつても好さゝうなものだのに……』

『何うかしてるんですよ。』

若い女の群に中年の女の心は解らなかつた。

三月の節句には、下の家の座敷に古い雛が飾られた。これは、前の細君の持つて來たものである。女の子も無いのに、こんなもの面倒臭いと、毎年お三輪が邪魔にするが、主人はいつも手づから丁寧に壇を拵へて飾つた。菱餅に白酒、紅梅が桃の代りに花瓶に挿されて、高島田に結つた先妻の娘姿の寫眞が

『一人で淋しいツて、此間も言つてたぢやないかね。』

『でも、ひとりで居る方が、いくら好いか。本當にのう〱すると思ふことがありますよ。餘所へ行つて奥さんが御亭主にぶつぶつ言はれて居るのなどを見ると、それやかうしてひとりでゐるのが何んなに難有いと思ふか知れやしない………。』

『奥さん少し惚氣でも言つて聞かせてお上げなさいよ。』

とお三輪は少佐夫人に言ふ。

少佐夫人は何處となく重々しく品格をつくつては居るが、拍子に乘ると、隱すところなく、ドシドシ饒舌る。ある日、お光がお孝の家に行つて見ると、少佐夫人は勇造の外套を引張り出して、白い顏に鬚を書いて、束髪の上に軍帽を冠つて、面白い手附で踊つて居る。

笑聲が崩るゝばかりにした。

『よう、よう、似合つた！』

と手を拍くものもある。

平生澄まして居るだけに、際立つて可笑しく見えた。

後で、お孝がお光に、

『面白い奥樣ねえ。』と言ふと、

『怒られても好いのよ。』

『教へないでも段々今に覺えて來ますよ。』

と少佐夫人も笑つた。

『これで子供さへ出來ないものなら、好いでせうね。』

『本當ねえ。』

と皆笑つた。

『でもね、子供があるんで持つて居るんですよ。子供が出來ないとなつたら、そりや隨分でせうね。』

『それこそ闇ですよ。』

『それこそさぞ勝手に男を拵へることでせうねえ。』

『さうなれや面白いけれどねえ。』

などと話合つた。傍で聞いて喫驚するやうな話も出た。男の知らない女の祕密が幅で打明けられた。

『本當に旦那さんの居らつしやる方は、お氣の毒のやうですよ。』

などと後家組が言ふとお三輪は負けぬ氣になつて、

『そんなことを言つたら、うんと交情の好い處を見せつけて遣るから。』

『見せつけられたッて、何とも思ひやしないから大丈夫!』

すと、傍に居た若い細君が不思議なことをといふ顏をして、

『奧さん、何うして子供を拵へない法があるんですの?』

『それはあるともね、けども中々容易には傳授が出來ないがね………。』と笑つて居る。

『うそでせう? そんなこと。』

『うそなことがあるものかね、若い人はたしなみが惡いから、子供ばかり產んで爲方がないんぢやがね、ねえ奧さん。』

と少佐夫人を顧みる。

少佐夫人も笑つて、『子供ばかり拵へて居ては、本當に爲方が無いわねえ。女だつて少しは樂をしなくつちや、男にいぢめられてばかり居るのが女の能ぢやないものねえ。』

『本當ともねえ。』

『奧さん、私、聞かせて下さいな。』

『何を?』

『子供の出來ない法を………。』

『大變だねえ、まァ。この人は………』と笑つて、『そんなことを無闇に傳授すると、旦那樣に怒られるがね。』

石渡の少佐夫人と、太田の後家さんと、田舍から來た若い細君と其他後家さんが猶二三人も居た。後家さん達は常に男の話をして笑つた。『もう私達は此世を濟ましたんですから、何んなことをしても好いんです！』と言つて無遠慮な打明話をした。男は一體に情に脆いといふこと、意氣地がないといふこと、月經前後は頭が懊惱して爲方がないといふこと、もう亭主などは二度と持つ氣にはなれないといふこと、亭主といふものは氣むづかしやで、我儘で、始末にいけないものだといふこと、それから懷姙する時の話なども出た。

―『懷姙すると思ふと、よく〳〵男が厭になるけれど……そこには又男が可愛い處もあつてねえ。』

と誰かが言ふと、

『私は又、亭主に死なれた時、ホツとしましたよ。そりや悲しいことは悲しかつたけれどもねえ、これでまァ子供を產まなくつても好いと思ふと、身が輕くなつたやうでしたよ。』

これは……五人まで生んだといふ後家さんの言葉である。他の一人は、

『本當に今になつて見ると、よくあんなに子供の世話が出來たと思ふ位ですよ。襁褓がいらないやうになつたと思ふと、もうすぐ後に出來てるんですもの……。本當に體の安まる暇はないんですものねえ。』と笑つて、『お三輪さんのやうに子が出來ない人は仕合せよ。』

『それやねえ、奧さん、其處はちやんと出來ないやうにして置くんだがね。』と例の調子をお三輪が出

また、時には、

『お前はさうするが好いさ。己にはそんなことはつまらない。』

弟が何かに激昂することなどあると、

『そんなに短氣では、世の中は渡つて行かれないよ。世の中つていふものは、さうしたものぢやない。』

此頃、勤の胸にもある感じが萠して來た。長兄の經て來た徑路と同じところがあるやうに思はれた。

『今少し眞面目にならんければいかん。』とわれとわれを戒めて見ても不思議にも何等の反響も起らぬ。

社の仕事も變つた。今までは少年相手の至極單調な平凡な雜誌を遣つて居たが、此二月から、新に出來た週刊の雜誌を編輯することになつて、社會と密接に觸れて來た。いくら臆病でも、神經質でも、仙人でも、默つて顏を赧くして机に取附いて居る譯には行かなかつた。

二十三

男連が出勤した後は、女連の自由の世界であつた。笑ひ聲が彼方此方に聞えた。お三輪の家の勝手元には、朝飯の跡仕舞が午後まで其儘になつて居ることもある。かき餠を燒いたとか、使に出た歸りに餠菓子を買つて來たとか、退屈だからお汁粉を拵へたとか、何とか彼とか言つて、寄集つては、茶を飲み無駄話をした。

謂ふべき元老院があつて、二頭馬車が門から勢よく砂利を飛ばして出て來た。あれが三條公だなどと長兄が敎へて吳れた。京橋日本橋の大通りには、漸く馬車鐵道が出來たばかりで、珍らしがつて乘る人が多かつた。丸の內には昔の大名屋敷がまだ殘つてゐて、乳のやうな鐶のついた大きな門や、ナマコ漆喰で塗つた處々に窓のある長い高い塀などがあつた。日蔭町の細い通り、門並にある古本屋を一軒々々ひやかして步いたこともあつた。上野淺草にも日曜日といふと出懸けた。池の端の角に牛肉屋があつたが、其處で長兄は弟共に午飯の御馳走をした。其時分のことを考へると、勤はいろ〳〵なことを思出す。あの活氣のあつた長兄がかうした人間になつたことも不思議であるし、自分等兄弟三人が各自に一家を成して、每日往來して居るのも意味がある。二十年に近い月日が昨日のやうにも思はれ、また遠い遠い昔のやうにも思はれる。

彼方此方と引越し廻つた家屋が庭の木やら、大家の顏やら、其折々に起つた事件やらと一緒に細かに織込まれて、繪のやうになつて眼前を通る。先の嫂はやさしいかよわい女だつた。勤とは交情が好かつた。細い眼を怖々ながら明けて見るといふ風で、低く囁くやうな話し方をした。其先妻の死んだ時、兄は聲を放つて慟哭した。其時から長兄の性格は著しく變つたやうに勤には思はれる。物に頓着しない、實際のことはなるやうにしかならぬといふやうな捨身なところは、其時から出來たやうに勤には思はれる。

『そんなことを言つたつて駄目だよ。血氣に逸つたつて爲方がない。』長兄は常にかう言つて笑つた。

主人は熱心に古文書を調べる。面白い歴史上の隱れた事實を弟共にして聞かせる。昔の豪傑の殘した逸話を持出して、『己は今の戰術は知らんがな、勇造、昔の戰爭だつて今の戰爭だつて戰略には變りはない。關ヶ原の狹隘に引附けた石田の軍略も、あれで中々馬鹿に出來んよ。あれは家康が稀世の英雄で機を見るに早い大將だつたから、西軍が敗北したが、小早川が裏切をしなけりや何うなつたか解りやせんよ。』など〻話すと、勇造は此兄から少年時代に八家文の無點を教つた尊敬の念で熱心に聞惚れて、『うむ、さうだ。今の戰術にも敵を隘路に誘ひて擊破するといふことがある。狹隘戰と謂つて、中々大切な戰術だ！』と態々戰術敎科書を出して、讀んで聞かせる。

長兄はまた勤に向つては、何とかいふ人の關ヶ原の覺書といふ寫本を見せて、浮田秀家が戰場から遁れる時、一人の忠僕が苦心して大阪まで伴をしたといふ話をして『これを一つ脚本に仕組むと面白い立派なものが、出來るが、勤、何うだ、一つ奮發して書いて見んか。』と勸める。けれど勤にはそんなものは一顧の値だになかつた。勤は長兄の話を唯點頭いて聞いた。

この兄が短い白縞の袴を穿いて、太いステッキをついて、腕を扼して寫した當年の寫眞が今も黃く薄くなつて寫眞箱の中に交つて居るが、それを見ると、勤は自分等の田舍から出て來た時分のことを考へずには居られなかつた。東京の名所をこの兄にせびつて伴れて行つて貰つたものだ。日比谷の原には中央に大きい樹が一本立つて、兵士がいつも演習をやつて居た。今の凱旋道路の處には其時分の樞府とも

『表向きはあゝして誰にもやさしいけど、それは怒ると怖いんだよ。』
『義兄さんが怖いなんて、そんなことはありやしない。』
お光もお孝もかう言ふと、
『さうでないんだからねぇ、あれで……。何も彼もすつかり呑込んで居で、そして默つて耐へて居るんだから、怖いがね。』
長兄は漢學者で、歴史に通じて居て、藏書家である。古い書箱に、お三輪などが見てはこんなものが何うなるかと思ふやうな古い書が一杯に詰められてある。そして時々蠹の食つた綴の切れた書を買つて來て、ざも珍らしいものを搜し當てたといふ顔をして喜んで居る。二人の弟に對しては、無論慈愛の深い兄で、義妹達にもいつも笑顔を見せてやさしい言葉をかけた。誰かが批評して言つた――中村の總領の兄は弱い男だ。弱いから從つて同情がある。男よりも女に持てる。嘘と思ふなら見ろ、その周圍には、屹度同情を買はんが爲めに泣附く男か、さうでなければ女が集つて來る――。
この批評は確かに一面を見て居た。憂ふるもの、苦しめるもの、病めるもの、蒼い顔をしたものが常に長兄の周圍に集つた。貧しい割合に家の賑やかなのはこの爲である、お三輪は『本當に、內ぢや爲方がありやしない、世話をしないでも好い人まで世話をしてやるんだから。』と常に言ふ。けれど其の同情の深いのに感心もして居る。

はれたりしては、遣り切れんなア。』と怒る。其怒るのがまた可笑しいとて、お三輪もお孝もお光も腹を抱へて笑つた。總領の兄は『大變旨く出來たつてな、お萩餅は！』

『殿樣、大失敗を遣つちやつた。』

と勇造は生え懸つた下顋を撫でる。

其時から『殿樣のお萩餅』といふ新熟語が女連の口に上つた。お光は何ぞといふとそれを持出した。と、勇造は皮肉を言つて置いて、『嫂さん、そら殿樣のお萩餅が口から出懸つて居るぜ。もう殿樣も古いぜ！』などゝ先を越していふ。

細君連が寄集ると、夫の話が出る。お三輪はお孝を好運者だといふ。お孝にはそれが快く耳に響くが、お光には餘り嬉しくなかつた。『好い旦那さんをひつかけて、本當に旨いことをしたがね。』といつもいふ。お光には、其身が軍人に嫁きそくなつたといふつた。『なんだ軍人なんか、中尉なんか。』といふ腹がある。それに、社會上の地位や、器量などは言はずに、堅くいくらか羨ましい氣もある。お三輪が勤を評する時には、社會上の地位や、器量などは言はずに、堅くつて好いとか、しつかりしてゐてしまりやで好いとか言つて賞める。そして自分の夫の意氣地なしで、何時もピーピーで、無い癖に派手家で、いらぬ交際や義理をするから爲方がないと言つて、『でもまア世の中が廣いから。』といつか巧に自分の夫を賞めて居る。夫がやさしいといふのがお三輪には自慢である。

つもりでも、すぐ其上手に出て見事に崩されて了ふ。さうかと謂つて正面から顏を赤くして怒つて見る場合もない。また餘りお孝の田舍訛を種にしても角が立つ。

お光はその時はきまつて、

『此間は殿樣のお萩餅を澤山御馳走樣！』とやる。

『何でい、兄さんだッて、始めの中は釜の底に穴を明けたぢやないか。』

と言ひ返すが、でもそれを持出されると勇造も流石にしよげる。

此間の日曜に、お萩餅の御馳走をするから皆樣にお出でなさいとのおつかひであつた。勇造が自から竈の前に立つて飯を焚く。小豆を袋で漉して餡を拵へる。お孝が手傳はうとすると『お前見たいなお孃樣に何が出來るものか、殿樣の遣るのを見てゝ覺えろ！』などゝ頗る鼻息が荒かつたが、お光が喫子を負つて、勝手に行つた時には、臺所はもう大失敗の大まごつき、『貴樣、默つて笑つて見てる奴があるか。』と勇造がお孝を叱り飛ばして居る。お孝は『だッて可笑いんですもの！』と笑つて立つて見て居る。聞くと飯は眞黒焦げ！　それに慌てゝ折角煮た餡の鍋を板の間にひつくり返して了つたので、折角の御馳走も滅茶々々。

遣つて來たお三輪がキャッ〳〵と笑ふ。

『そんなに笑つたッて駄目だよ。嫂さん。人には過ちと言ふことがある。御馳走しようと思つたり笑

同期生がよく來た。中村のお安くない噂を見て遣れなどと遣つて來る『宅のお客は暴くつて爲方がないんですよ。』とお孝が常にお光にこぼした。其癖内心では客の元氣の好いのを誇つて居る。幼年學校の生徒などが來ると、大抵居留守を遣ふ『彼奴等に菓子を食はれては、途が潰れて了ふからナア、兄さん。それや三人も來りや、五十錢位ぺろりッと平らげて了ふんだからな。』

勇造はまたお光を捉へてよくからかふ。足に小さい瘤があるのを、お光は成たけ隱すやうにして居ると、それを見附けて、わざと『嫂さん、何だよそれは、ちよつとお見せなよ。』などゝいふ。またお光が娘時代に店に出て居たのを知つて居て『僕も嫂さんの家に吸取紙を買ひに行つたことがあるぜ。嫂さんの手から釣錢を取つたこともあるんだぜ、これでも………。山本が二階に居たねえ、彼奴、氣障で厭な奴さ。男の癖に香水などをふつて居やがる。僕は大嫌ひさ。けど、男振は好かつたねえ。嫂さん。』などと厭がらせる。お光はくやしがつて、その仕返しに、お孝の言葉にちよいちよい田舍訛の出るのを捉へて、その眞似をする。

『嫂さん、旨いものゝ御馳走しようか。』と言ふから、何かと思へば、麩糊を煮て居る『咲ちやんの足は何時まで治らないんだ、嫂さん、あんな醫師に掛けて放つて置いては駄目だぜ。』などと世話を燒く。お光はよく突込まれる。笑ひながら調戲半分に遣られるので、一層小腹が立つ。此方でも何かの竹箆返しをして遣らうとは思ふが、才氣のない無邪氣なお光にはそれが出來なかつた。時偶旨いことを言つた

入口の格子の中には、下駄箱の蓋が除れたのに、女下駄と男下駄とが並べて入れられてあつて、其上に長靴と短靴が置いてある。日曜日ごとに秋田あたりの田舎訛の除れない單純な顏をした從卒が遣つて來て、せつせと長靴を磨く。時には使に遣られたり水を汲ませられたりする。三疊の間には外套、軍服、劍などが置かれた。

お孝が軍服を疊んで居ると、『本當に下手だなァ。服ばかりは手入れが惡いと、なつて居ないからなァ。かう疊むんだ。かう——。』と勇造が引奪つて自分で疊んで見せる。そして暇があると、新しく拵へた軍帽を出して、刷毛で丁寧に埃を拂つたり、劍を拔いて磨粉を丸く包んだ布でトン／＼叩いたりする。

さうかと思ふと、緣側の暖かい日向で、ドシドシと鯱鋒立をして手で歩く。それをお孝はまた始つたと言つたやうな顏をして笑つて見て居る。勤と並んではよく脊競をした。勤は鴨居に殆ど髮が着くが、勇造のは五分位あく。『兄さんは髮を長くしてるからだ！』と言つて、『口惜しいナ、己は兄さんより高い筈だがなァ。』

今一度と遣り直して、こつそり足を爪立てる。

『ずるい、ずるい。』

と勤が見附けると、『何うしても駄目かなァ。』と投げて、『それぢやこれで來い』と鐵のやうな筋肉の張つた腕を出す。腕角力の強いのが自慢である。

赤い。小婢が兒を抱いて結附帶を丸めて其處に立つと、醫師は手で前の椅子にと指さす。やがて小さい足を巻いた繃帶を取つて見ると、踵の所が赤く爛れて居た。醫師はちよつと見て、膏藥を塗つて、新しい繃帶で巻いて、『何うも寒いから治りが遲い。』

勤の家に田舎から小婢が來た翌日、咲子は若い母親に抱かれて、行火でこの火傷をした。

三日に一度はお光が醫師に伴れて行く。そして歸りには屹度下の家かお孝の家に寄つて、正午近くまで話をする。お光とお孝は若い同士だけに話が合ふ。

お孝の家の庭には、野梅が一本、粗末な手水鉢に竹製の柄杓、猫が日向に丸くなつて居る。お光はすべて生物が嫌ひ、行く度に其猫が氣になる。殊に、一度爪を立てゝ引搔かれてから、其傍には決して腰を掛けなかつた。

『何うしてお孝さんは生物が好きなんでせう。』などといふ。お孝はわざと抱いたり懐に入れたり頬摺をしたりして見せた。

新世帶——ことに一時なので、簞笥も長持もなかつた。机に赤い毛布を懸けて、偕行社記事が二三册と野外要務令とが載つて居て、暖い日影が縁側から座敷に射した。お孝は常に絹物を着て居るので、銘仙の派手な縞が目に立つ。

指環をはめた手も華奢で細く白い。

開いて、五歳位の可愛い女の兒がちよこちよこ歩いて、其傍に行く。やがて甘えるやうに膝に凭懸る。お婆さんと孫との體が一緒になつて久しく離れない。時には年の頃十七位の色の白い姿の好い娘が、黄縞の八丈の羽織を着て、目白臺の眺めの好いのを立つて見て居る。いつも桃割に結つて、何方かと言へば舊派な娘だが、近所でも評判な子で、下宿屋の書生が大騒ぎをして居る。緣側には梅の盛りを過ぎた大きな鉢が置いてあつて、障子の日影に映る。

毎日朝の十時頃、田舍から出たばかりの十五六の小婢が、黄縞のねんねこで兒を負つて、霜解路を拾つて、低い田に添つた路を歩いて行く。淡竹の藪の向うに小學校の正門のある通りがあつて、新に開いた雜貨店、學校用具を賣る庇の低い家屋、下宿屋、其の隣の小高い處にペンキ塗の洋館、これは此の附近がまだ田畝で竹藪で、夜は狐狸が啼いたり雁鴨が下りたりする時分から永住した醫師の家で、其の快活な調子と金緣の眼鏡を懸けた半老の姿は、誰も皆なよく見知つて居る。門から玄關の砂利に暖かい日影が射して、石の階段に繻珍の鼻緒や泥に塗れた山桐の駒下駄などが並べてある。小婢がいつものやうに入つて行くと、藥局生が硝子窓の中からちよつと此方を見た。廣い待合所には、安段通の毛のすり切れたのが敷いてあつて、大きな丸い眞鍮の火鉢の周圍に患者が三四人退屈さうに坐つて居た。小婢は先づ其處に出してある番號札を取る。

一時間ほど經つて、其番號が呼ばれる。扉(ドア)を明けると、中は暖爐の暖かさで、醫師の顏も代診の顏も

つちやもうおしまひだ。』と勇造は言つて、つまらなさうな大きなあくびをした。

二十二

一月、二月、三月――

西風に裏の雨戸の明けられぬ日もあつた。薄雪が向うの丘を白くして、空が水彩畫のやうに鮮やかに碧(みどり)に晴れた朝もあつた。路の角の南を受けた老梅樹の早咲の花が、夕空に星のやうに寂しげに見える夕もあつた。霜解の路は新開地だけに日増に惡く、下駄を取られぬやうにと拾つて歩く近所の女、草鞋ばきで矢立を腰に挿した酒屋の御用聞、米屋は車の輪を深い泥に埋めながら、粉で白くなつた米袋を載せて通つた。家々の門から入口までは薦(こも)やら莚やら炭俵の明いたのやらが敷かれた。

風の日には凧のうなりが日の暮れるまで空に聞える。達磨に市松に武者繪、中には隨分大きなのもあると見えて、その鳴る音が唸るやうに吼えるやうにあたりに響く。近所の七八歳の男の兒が二三人、一錢凧にヒラ〳〵した紙の尾をつけて、垣の蔭の日向に小さくなつてかたまつて遊んで居ると、其頭の上の梅の枝に、大きな奴凧の半ば破れたのが、糸を一間ほど引いて引懸つて居て、風にブー〳〵鳴る。

小高い處に長い緣側を廻した家が其處から見える。東南を受けて居るので、いかにも暖かさうだ。七十位になる品の好いお婆さんが、白い手拭を襟に卷いて、後向になつて裁縫をして居ると、障子が一枚

な氣がした。溫良貞淑を唯一の生命として其以外の才能も何等の自由も持つて居ない時代の女の不幸をも繰返した。かれは籠から放たれた女の自由を眼を聳てゝ見たのである。

神樂坂の雜誌屋の店には、女子の讀物、女子の雜誌が山のやうに積まれた。

思潮界には宗教と文學、殊に奔放な個人主義がそろ〳〵その萠芽を出して、名高い批評家は、獨逸のニイチエの學說を主張した。美的生活といふ語も種々の意味に用ひられて世の人の口に上つた。新派――舊派などゝいふ言葉が無意味に若い娘の口から出る。

其夜の歌留多會は唯喧しかつた。政次もおきよも政次の妹も來た。肥つたお三輪の姪も來た。中にハイカラの女學生が一人居たが、殺風景な歌留多會に手を出し兼ねて、面白くないやうな手持無沙汰のやうな顏をして居た。昔の連中は下の句ばかりで遣らうと主張する。それでは歌留多を取つたやうな氣がしないと若い娘連はいふ。混雜の中に時は經つて、五目鮨が出る、酒が出る、福引が出る。鬚の白いお爺さんが高箒に當つて恐縮すると、げた〳〵と常に厭に笑ふ癖のある中年の腰辨には擂鉢が當つた。丸髷の型を得た政次はヤンヤと喝采された。

十時過には人々が歸り出して、やがて間もなく解散した。踏留つて徹夜をしやうなどゝいふものはなかつた。

『歌留多會ももう駄目だ。遣つてる中に若い細君の子供が目を覺まして、やめて飛んで行くやうにな

に、おかめの面のやうな娘に、下髮の女兒に、肥つた後家さんに、子供のある細君に、これではいくら人が多くつても、歌留多會として盛會とは言はれない。勤も勇造も今更に二十騎町時代を戀しく思つた。

時代も絕えず遷つて居た。歌留多の取りやうもいつとなく變つた。勇造や勤の頃には、下の句のみを取るのが普通で、引手繰る取組む引掻く、洋燈を引繰返す、それは騷ぎなものであつたが、此頃では上の句を讀んで下の句を取るので、すべてが上品に綺麗にハイカラになつて、臭い手を幽靈のやうに歌牌の上に出したり、他人の取つたのを傍から奪つたりするやうなことは全くなくなつた。

大學生の中には歌留多の競技會なども行はれ、好奇な新聞社では、正月の懸賞に歌留多の優勝者を募つて技を競はせたりした、女子教育の勃興、女子大學の設立、今まで深窓にのみ閉籠められた女子は、籠から放たれた鳥のやうに、自由に快活に新しい世に出た。海老茶の袴を着けて、紫メリンスの風呂敷をかゝへて、庇髮にリボンといふ効々しい扮裝は老いた人々の眼を驚かした。勇造すら東京に出て來て、『實に女のハイカラになつたのには驚いたねえ。丸で變つちやつた。桃割だの銀杏返だのは見たくつても見られなくなつたぢやないか。』と勤に言つた。勤はまた勤で、朝夕の社へ往還りに、學校通ひの姿を見て、常に暗々の裡に逸早く過ぎ行く風潮の急なのを思つた。壓抑せられた時代から見ると、町にも巷にも野にも山にも、女子の生々した色彩が著しく目に立つ。勤はこの秋目白の女子大學の運動會を見に行つた時にも、身輕な自由な運動と競技とに對して、後れて古びて行くものは、唯自分ばかりのやう

お三輪は『小遣もありもしないのに、本當に爲方がありやしない。子供見たいに、內ぢやあんなことが面白いんだがねえ。』とこぼして居る。と、主人は、鼻どんがまた喧しいことを言つてござる位に聞き流して平氣でゐる。お三輪はわざと戲談らしく、『少し皆なに寄附でも募る方が好いがね。』

『本當にさうする方が好いんですよ。宅にも出させますから………。』

とお孝が挨拶に困つて眞面目に出ると、

『さういふわけぢやないけれどねえ。』

、『馬鹿な奴だ！　しみつたれたことばかり言つてる！』と口には似合はず主人は笑ひ懸けて『いくらピーピーでも、まだ福引を買ふ位な小遣はあるはな、お孝。』

『まア、兄さんが………。』とお孝も笑つた。

若い娘を彼方此方驅り催して見たが、二十騎町時代のやうに集つて來なかつた。親類から親類、娘の居る家には、遠い處まで電話を懸けた。裏の二階家に容色の好い娘のあるのを、主人がわざ〳〵出懸けて借りに行つたが、學校の下讀をしなければならぬからとて謝られた。女連には娘よりも若い細君が多かつた。細君の中には、子供がありながら、何うか取らせて下さいといふ熱心者もある。

夕暮から人々が集つた。歌留多を始める頃には八疊の間が狹い位になつた。けれど客種は揃つて居なかつた。白髮の爺さんもあれば、まだ歌留多を取つた經驗がないといふ中年の腰辨もある。荒くれ書生

さんは日本橋邊の商家に嫁いてもう男の子がある。お梅さんは藥王寺前町あたりで大丸髷に結つてハイカラの道行などを着て歩いて居るのを常に見かける。お貞さんは窒扶斯を病つて死んで了つた。おせんさんは中學校の先生の細君になつて出雲の松江に行つて居る。おけいさんに死ぬほど戀した勇造の友達の中尉は、別な女と結婚してけろりとして居る。

『若い女が居なくては面白くない。兄さん誰か別嬪をかり催して來る人はないかな。』などと勇造がいふ。歌留多をするといふ日、長兄は福引の材料をわざ〳〵町まで買ひに出た。福引の文句を二三日前から樂みにして考へて居るので面白い文句をしぼり出すと、勇造でも勤でも其時其處に居たものを捉へて、

『何うだ！　富士の雪で時計を出して見せてすぐ引込ませる。とけやらぬは面白いだらう、』などゝ言つて高笑ひをした。町から歸つて來た風呂敷包の中には、白粉、茶碗、埃拂、一錢菓子、上しん粉、海苔、おかめの面、ガラ〳〵煎餅、小十能、ライオン齒磨などが雜然として入れられてある。高箒と大根一本と擂鉢と草鞋、これに當る人を想像して主人は獨り悦に入つた。

座敷の隅で熱心に考へて遣つて居る處にお孝が顔を出すと、

『待つてお出！　今、旨いことを考へて居るんだから。』

と言つて、中で面白さうなのを一つ二つ話して聞かせて、『默つて居なくちやいかんよ。誰にも內所內所。』と手を振つて見せる。お孝は聲を立てゝ笑つて、『兄樣、本當にお上手ですことねえ！』

來いつて言つて來ても、何うしても行かないッて言つてる。』

『えらい女だ！』

『この春には主人が歸つて來るさうだから………。』

『兎に角えらい女だよ。』

と言つて茶を飲んで、羊羹を頬張つた。勇造は軍人肌の無邪氣で、何も彼もぐんぐん言つた。

『兄さん、歌留多を取らうぢやないか。』と勇造は主人に言つた。長兄も昔からの歌留多好きである。此間も暮の忙しいのに、のんきに紙を買つて來て、丁寧に歌留多牌を張つて、自分で歌を書いて置いた。勇造も成城學校に生徒で居る時分から、歌留多に懸けては夢中になるほど好きで、田舍では正月になつてもあの樂しみが出來ないと常にこぼして居た。歌留多をするといふことを樂みのひとつにして田舍から遣つて來た位である。

歌留多會に就いては、兄弟三人の間に隨分種々の追懷がある。其頃一家は二十騎町に住んで居た。おけいさん、お梅さん、お貞さんなどといふ美しい娘達が居た。おせんといふ快活な早口な夢中になつて男と引組んだり何かする女もあつた。勤はあまり歌留多を好きではなかつたが、長兄と勇造とは毎晩のやうにそれからそれへと押懸けて行つて、よく夜明しをした。朝早く歸つて來ると、屋敷町の松飾には霜が白く、路には羽根やら手糸やら蜜柑の皮などが落ちて居た。時の經つのは早いものである。おけい

お孝に酷肖(そつくり)である。里親はまだ年の若い洋服屋夫婦で、其時、亭主は酒に醉つて、したゝか管を卷いて勇造を困らした。

ある日勇造が主人に、

『隣(太田のこと)に下宿して居る中尉は、同期生で知つてるが、困つた男だね。』

『お前知つてるのか。』

『知つて居るといふほどでも無いが、顔は見て知つて居るさ。學校に居る時分から評判の餘り好くない男だつた。』

『何うも軍人にもあゝいふ屑が中にはあるなァ。』と兄は笑つて居る。

『すぐ垣一重だもんだから、いろんなことが聞えて爲方がありやしない。あの後家も後家だね。今、いちやついて居たかと思ふと、すぐ喧嘩を始めるんだから、實にやり切れんよ。親類で喧しく言ふものなどないのか。』

『うむ………。』

兄は要領を得ない笑方をする。

『石渡の嚊もえらい女だね。』

『うむ、』と兄は矢張要領を得ない返事をして、『此間其話が向うに知れて、大悶着があつたよ。臺灣に

しかつた。

やがて暇を告げる友をお光は門まで送つて出た。丸髷姿が向うの角を曲るまで見送つて居たが、急に淋しいつらい感が胸一杯に溢れて來た。なつかしい友達と久し振で逢つても、心の底を割つて見せることの出來ぬ悲しさ――この悲しさは里の家に嫁が來てからの淋しい心に似て居る。母親がちやほやと嫁にやさしくするのを見ると、何となく其身が疎くされたやうな氣がする『お前は餘所に行つた體だ、おきよは家の人、これからいかやうにも世話にならなければならないから』と此間縮緬の羽織を嫁に拵へて遣つた時に、母親は申譯のやうに言つた。お光は其時の淋しさと悲しさとを繰返した。

二十一

お孝が京都の親類から歸つて來ると、四五日して宇都宮の勇造が術科修學の爲め、八箇月間戸山學校に聯隊から派遣されて上京した。正月は賑かであつた。

勇造は取敢へず太田の後家の持家の一軒明いて居たのを借りて住んだ。不自由なものは下の兄の家から借りて間に合はせることにした。

兄弟三人は互に往來した。女連も常に下の家に集つて、笑聲と饒舌とが絶間なく聞えた。

お孝の兒は里親が伴れて見せに來た。乳が充分だと見えて、丸々と肥つて居た。額から眉のあたりが

『お見せなさいよ！』

お光は兒を抱いたまゝ笑つて立つて、寫眞箱から一葉の寫眞を出して見せた。政次は立ち、おきよは腰を掛けて居た。かうした寫眞はお光もお常も寫して持つて居る。お常はぢつとそれを見て居たが、

『お睦ましさうね。』

と笑つてお光に返した。

以前ならば、今の境遇を打明けて話して、夫といふものゝ難かしいことも、子を育てることの容易でないことも、何も彼も隱す所なく、愚痴も言ひ、同情もして貰ふのであるが、今はお光は何うしてもさういふ氣にはなれなかつた。若々しい無邪氣な友情よりも女友の快活な樣子と立派な扮裝とが胸につかへた。

猶ほ話を續けて居ると、勤が乳母車をガラ〳〵押して歸つて來た。兒はまだ乳母車に乘せるには早いが、金がある時買つて置かうと言ふので、勤は神樂坂にわざ〳〵出懸けて行つたのである。車の中には、砂糖だの、お茶だの下駄だのと買物が入れられてあつた。餘りに値切つて負けさせたので、乳母車屋の亭主は、暮で忙しいのを口實に、何うしても持つて行つては上げられぬといふ。止むなく勤は賑かな榎町の通りを自分で押して來たのである。

摩り減らした下駄、鬚の生えた顏、洗ひ晒しの着物、かうした夫をお常に見られるのが、お光には悲

『それは結構ですねえ、交情が好いのが何よりよ。』
ませたことをお常はいふ。一度は政次に氣があつて、顔を見るのを樂みにして、お光の家に出懸けて行つたものであつた。お光は薄々それを知つて居た。お常は、
『政次さんにも、一度お目に懸つて行きたいと思つて居ますのよ。』
『兄もお目に懸つたら、屹度喜ぶでせう。いつもお噂はして居ますの。』
『さう。』
何か思ひ出すやうな顔色(かほつき)をして、
『奥さん、お幾つ！』
『二十でせう。』
『綺麗な方ですね。』
『丸髷に結つて居まして？』
『えゝ。』
『此間、御夫婦で寫眞を撮つたのよ。』
『さう……此處に持つて居らしつて？』
『えゝ。』

『でも、貴方などまだお子さんが無いから好いですけども………子供が出來てはそりや本當に駄目なの、琴どころではないんですもの、………内などもよく言ふんですよ、女が琴など鳴らすのは、嫁入支度にするばかりで、何の役にも立ちはしないッて………それも上手に出來るんなら聞いて遣るけれど、お孃さん藝では爲方がない、それより料理でも旨く出來る方が餘程好いッて申しますのよ。』

『それはさうですねえ。』

とお常は笑つた。すぐ話頭を更へて、

『お里でも好いお嫁さんが出來ましたね。』

『いゝえ、もう…………。』

『本當に好い奧さん………何處からいらしつたの？』

『下の嫂の姪に當りますの。』

『さう、それぢやまァ重緣見たいね、母さん御安心ですねえ。奧さんも政次さんがやさしいからお仕合せですわねえ。』

『兄にお逢ひになつて？』

『いゝえ、政次さんは何處かお歲暮廻りに御出になつたつてお留守でした。』

『そりや、二人仲が好いんですよ。』とお光が笑ひながら言ふと、

『本當ねえ。』

二人は其身の變つたのには氣が附かなかつた。

寫眞にある人々はもう大抵人の妻であつた。華族のお孃樣も居たが、其人は二三年前同族の勢力家に嫁いて、今では交際界の花とまでたゝへられてゐる。外交官に嫁いで外國に行つて居るものもあれば、夫に從つて臺灣に行つて居るものもある。それでも中にはまだ嫁がぬ人が二人あつた。一人は日本畫を學んで居た。一人は英語の教師になつて居た。死んだ人も數へると三人まである。

お常はお光と比べると、割合に世間が博いので、種々の噂を聞いて知つて居た。嫁いて間もなく肺病になつて、平塚の病院で死んだ友達のことを話して聞かせた。此友達は色の白い小づくりなやさしい子で、お光とも仲が好かつた。ラブした人の手を握つて、莞爾と笑つて、呼吸を引取つたといふあはれな話を聞いた時は、お光も思はず涙組んだ。

琴が袋に入つて床の間に立てられてあるのを見て、

『此頃、矢張琴をなすつて?』とお常が訊く。

『いゝえ、もう琴など彈いて居る隙はありませんの、……… すつかり忘れて了ひましたのよ。松づくしなどもう彈けませんのよ。』

『私も暫く………』

凡な樂みのない日毎の生活に比べて羨しく思つた。

學校友達の話も出た。

座敷の長押に四つ切の集合の寫眞が額になつて懸つて居る。小學校を卒業する時、紀念に撮つたので、校長の瘦せた洋服姿と裁縫の女教師の肥つた姿とが好い對照をなして見えた。振袖を着て居るものもあつた。袴を着けて居るものもあつた。お常も居た、お光も居た。

『まァ、あの時の寫眞！』

とお常は態々立つて、凝と見る。

『まだ、三年しか經ちませんけれど、隨分變りましたねえ。』とお常はさも感じたやうに、『松島さん、お子さんが出來ましたよ。』

『オヤ、さうですか。』

『昨日、番町の通りで逢ひましたのよ。』

『男の兒？』

『え、男の兒よ。もう餘程大きくなつて居ましたよ。あのお轉婆な方がね、あんなに澄まして居るかと思ふと變な氣がしましたよ。鞦韆に乘つては大きな聲をしてよくふざけてゐたのがまだ眼に見えるやうですのにねえ。』

『いゝえ、冬休暇にせびつて、やつと伴れて來て貰つたんですの……私、行つてる處それは田舍ですの、松山ですと、まだ少しは賑かなんですけど、其處からまだ四里田舍なんですもの、話相手つて言つてね、そりやねえ、お光さん、田舍者ばかりで、淋しいんですよ。』
『東京にお出なさるやうにすれば好いのにねえ。』
『三年位、何うしても其處に居なくつちやいけないんですつて、厭になつて了ひますのよ。』
春の子が泣き出したので、
『まァ、一度おろして御見せなさいよ。』
『でも喧しいから。』
『よう御座んすから、一度下して抱かして頂戴。』
春から無理におろさせて、お常は咲子を抱いた。兒は漸く物が見え始めたやうな眼附をして、小さい口を動かしてあたりを見まはした。
『好い兒、まァ何て好い兒でせう。眉があなたにそつくりね。』
と見較べて笑ひながらいふ。
いろ〳〵な話——夫の話、子の話、ことに田舍の話がお光の好奇心を惹いた。神戸、須磨、明石、讃岐の金毘羅、松山の高い城、道後の溫泉、さうした珍らしい處を夫と一緒に旅する友の境遇を自分の平

いたんですよ。』

娘時代の人懐つこい言葉の調子はもうなかつた。

お光は急いで洗つて了つて、さてお常を家に請じた。お常が此處に尋ねて來たのはこれで二度目である。最初はお光の新婚の當座、まだ其頃は家が狹いとは言ひながら、あたりが綺麗に片附いて居たので、さう羞かしくもなかつたが、兒が生れてからは、襁褓は彼方此方に散らばつて居る。着物がぬいだまゝ疊まずに座敷の一隅につくねてある。疊は汚くなつて居る。お常の扮裝の立派なだけに、お光は一層自分の家を醜く羞しく思つた。

一通りの挨拶が濟むと、お常が、

『旦那樣は？』

『鳥渡、其處まで買物に出懸けましたのよ。』

『さう』と言つたが、いつ出て來たといふお光の問に答へて、

『私、一昨日着いたばかりですの。』

『旦那樣も御一緒？』

『え、』と澄まして居る。

『これから、始終こちら。』

つて居ると、向ふから霜解路に重い車の輪をめぐらしながら、一臺の俥が遣つて來た。
俥には丸髷の女が金茶色の流行の肩掛をして乘つて居た。
別に眼にも留めずに、汲上げた水を盥に明けて居ると、俥は段々此方へと近づいて來た。自分の家にはあのやうな奥さんが訪ねて來る筈はないのにと思つて居ると、俥の梶棒はすぐ其處に下された。
『まァ、お常さん。』
『お光さん。』
昔の學校友達は互に喜悦の聲を擧げた。お常は此五月に豫て噂のあつた技手を養子にしたが、結婚が濟んだ翌々日、夫の役向きの都合で、急に遠い愛媛縣に一緒に行くことになつたので、二人は別離を惜しむ暇すらもなかつたのである。お常は春とは肥つて、何處となく奥樣振つて、丸髷がよく似合つた。流行の栗梅の縮緬の羽織を着て、指には二つまで純金の指環をはめて居た。お光が洗ひ懸けた襁褓を其儘に、お常を家に請じようとすると、
『まァ、洗つてお了ひなさいよ、私、待つて居ますから。』
『でも、もう好いのですから。』
『まァ、好いからお洗ひなさいよ、』と强ひてお光に襁褓を洗はせて、其傍に立つて居たが、脊の子の頭巾を烏渡まくつて見て、『まァ、よくねんねしてねえ、可愛い兒ねえ、昨日お里に上つて、すつかり聞

夜風は剃刀のやうに頬に當る。角に來て勤は車に乘つた。

車夫は元氣な男で、前の車を幾臺となく追ひ拔いて行く。で、いつもの路――雨の降る時などはねを二重外套に上げて、しよぼ〳〵と濡れそぼちて通る路を、懸聲で、ガラ〳〵と威勢よく過ぎた。錦町河岸の龍紋氷室の前には、夏の日は屑氷塊を廉く買つて、一杯五厘の安アイスクリームをガラガラと廻して製造して居る連中が幾組も並んでゐて、濠を隔てた高い石垣の上の凉しい樹の陰には、田舍から來たばかりの新兵が、覺束ない調子で頰を膨らせて、馴れぬラッパを鳴らして居るのをよく見懸けたが、今は夕陽の名殘が微かに濠に暮れ殘つて居るばかり、岸にかゝつた舟で裸火を燃してゐるのが、赤く鮮かに暗い水に落ちた。

二十

霜解で路がぐしや〳〵して居る。冬の薄ら寒い日影は井戸端の傍に蹲踞んで、襁褓を洗つて居るお光を照らした。黃縞の新紬のねんねこに毛糸で編んだ白い頭巾、兒は母の脊に心地よげに寢て居た。

水が荒いので手は散々に胼が切れる。娘の時分、白魚を並べたやうだなどゝ賞められた面影はもう見たくも見られない。汚れたものをザブ〳〵と振つても振つても容易に落ちない。固く絞る時には冷たいので手が切れさうになる。お光は漸く下洗を終つて、汚い盥の水をこぼして、霜に凍てた井戸繩を手繰

勤はある暗い處に行つて、人知れず歳晩の賞與の金額を數へた。思つたより多かつたので、胸は喜悅に溢れた。自から顧みて意氣地のないのを笑つても見た、それに來年からの增俸も嬉しい。僅少ではあるが、兎に角これで兒のミルクを買ふ錢にはなる。亡つた母が子供は幾人も成るたけ多く生んで置け、子供には屹度扶持が附いて來る。何んな困つた人でも、子供を餓ゑさせるといふことはない。こんなことを平生言つて居た。今、その言葉を思ひ出した。何だか世の中を渡つて行く上に一種の新しい意味を發見したやうに思はれた。

編輯の一室は賑かである。麥酒の栓はポンポンと景氣好い音をして拔かれた。小僧も編輯の人々からお歲暮を貰つて、常になく莞爾して居る。ハイカラの獨身者の學士は、赤坂邊りに前觸の電話を懸け出した。

勤は猶二三杯麥酒を呷つたので、好加減に醉つた。いつもの不平も不安もない。詩でも吟じたいやうなうかれ心になつて、元氣よく階段を踏鳴して下りた。

店には瓦斯がついてゐた。算盤の音が到る處から聞える。發送掛では忙しく荷を積出して居る。店は大晦日まで休暇といふものがない。店の者が二階に來ては、編輯の方は羨しいとよく言つた。勤はそれを思出して、勞働者といふことを考へて、事務に忙殺されて疲れた聲を出して働いて居る人々を見た。簿記帳、インキ壺、廣告の木版、寫眞版、板の間に積み重ねた當用日記などに光線は晝のやうに照つた。

戶外は鐵道馬車が通る。車も通る。人の往來は織るやうで、町の角の電氣燈がピカ〳〵と靑く光つた。

懸ける。と思ふと何か思出したやうに、またスゥと出て行つて了つた。

間もなく店の小僧が來て、名を呼んで、『社長さんが』といふ。俸給と賞與とを渡し始めたのである。名を呼ばれた人は、眞面目な、しかし待つて居たといふやうな顏をして出て行く。席順でそれからそれへと呼ばれる。濟んだ人は何處となく莞爾と嬉しさうな顏をしてゐる。もう折鞄の鍵をして歸り支度をしてゐるものもある。不景氣で金融逼迫だからと言つた杞憂も消えたらしい。

やがて勤の番になる。

社長の席は店の一隅で、一段高くなつてゐる。大きな丸い陶器の火鉢に櫻炭が半ば熨になつて、机の上には新刊の出版物が二三册載せてある。傍には綿の厚い大きい座蒲團が敷いてあつた。

社長は笑を含んで、

『中村君。』

と顏を見て、豫め準備して置いた金を封じた幾組かの封筒を引繰返して、其名の書いてあるのを二つ取つて重ねて、『甚だ少しですけど……これはお歳暮のしるし、來年からは上げて上げますから、』と其增俸の額を言つて、勤が頭を下げて禮を述べるのをも待たず、誰君に來るやうにと其後の人の名を言ふ。

勤は長い急な階段を一呼吸に馳昇つた。每日種々な感想を抱いて昇降する階段！　その階段にも尠からぬ追憶はある。

歳暮として寄越したのである。連中の中の酒好が先づ『あけて飲まうぢやないか、』と言出すと、賛成者が其處にも此處にもある。小僧が鉈を持つて來て、函の蓋をこじ明けて、罎に冠せた藁をあたりに散らして、栓抜きで敏活に栓を拔いて、机を並べて居る人々の前に一本づゝ配つて歩いた。酒好は茶碗でぐんぐん呷つて飲んだ。

勤は隅の方に小さくなつて居た。かれの掛には仕殘した用事がまだある。明日も來て校正を爲なければならない。

勤は主筆に麥酒を差されて、校正の筆を止めて、われ知らず二三杯呷つた。顏が火のやうに赤くなる。一室は俄に賑やかになつた。誰の顏にももう春が來たやうだ。饒舌と笑聲とが到る處に起つて、『何か酒の肴がないか、おい小僧、罐詰でも買つて來い、』と言ふものがある。『もう財布も空だ、』などと笑ひながら、錢の音をちやら〳〵させて居るものもある。不意に其處に社長がフロツクコートで、今何處か會社にでも廻つて來たといふ風でスウと入つて來た。編輯長の机の前に足を留めて、『何うです、もうすつかり雜誌は出來ましたか。』

『え、もうすつかり、』と編輯長が答へると、社長は莞爾して別に其出來榮を聞かうでもなく、其儘徐かに歩を運んで、雜誌、寫眞、麥酒の罎、それに醉つて其處に一團、彼處に一團固つてゐる編輯員の顏を笑つて見て通る。西洋の給入の雜誌をちよいと手に取つて見る。二語三語編輯員の重立つた顏に話し

十九

大家の訪問、原稿の催促、何の掛でものんきに煙草をふかして居るものはなかつた。机の上には原稿だの校正刷だの、雜誌の綴込だのが一面に散らばつて、糊と鋏とが誰の手からも離れない。新年大附錄の雙六の石版の綺麗な校正刷を下から持つて來ると、人々が周圍に寄つてたかつてがやがやと批評した。其聲を聞かなければ年の暮が來たやうな氣がしないといふ原稿の催促掛も、橫綴の成績記入帳を抱へて、騷々しく二階に上つて來た。誰も彼も皆そは〳〵と心を空に編輯長の駄洒落に相槌を打つて居るものもない。二十日頃から日に日に迫つた忙しさ――それも今は終つた。大抵の雜誌は校正も濟み、控も揃ひ、原稿料も書出して了つた。忙しがつて居るのは庶務ばかりで、古びた脊廣を着た男は、原稿料の請求簿やら書留にする狀袋やらの中に身を埋めて、小僧を相手に頻りに算盤を彈いて居る。十二月二十八日、一年中の仕事納め、樂しい正月を誰も胸に描いて、近い所の溫泉に行く話をして居るものもあれば、面白く正月を遊ぶ相談をして居るものもある。午後四時に近い日は晴れて、硝子窓を透した光線は廣い一室に斜に射し渡つた。戶外には西風が立つた。

俸給と賞與――それの渡るのを誰れも皆待つて居るのである。

其處に小僧が二ダース入の麥酒の函に熨斗が附いたのを運んで來た。石版屋から例年の通に編輯にお

若い母親がねんねこで負つて連ると、乾皮背の子は白い丸い錫の當つた乳口をすぼ〳〵音をさせて吸つて、長いゴム管のだらりと下つたミルク罎は、まことの乳のやうに若い母親の懐に入れられてある。錫が罎に當つていつもカタ〳〵と音を立てた。

夜はことに困つた。ミルクを溶かす爲めの湯がいつも沸いて居なければならぬので、枕元には火を入れた箱火鉢に鐵瓶をかけて、傍に土鍋やら罐やら罎やら一切の準備を整へて置く。火が消えて了つて、鐵瓶が水になつて居ることもあれば、夫婦がいぎたなく熟睡して居るすぐ枕の上で、火が赭々と起つて、鐵瓶がガラ〳〵沸え立つて、夥じく湯氣を一室に漲らして居ることもあつた。

其傍に暗く點いて居る二分心の洋燈、それがまた隨分危險であつた。勤は神經質だけに、若い細君の無頓着を氣にして、口喧しく常に注意を與へては居たが、お光は一日の子守に疲れて、床に入るや否、前後を忘れてぐつすりと寝込んで了ふ。或時などは其洋燈を引くりかへして危く大事に及ぼうとした。

勤はまた生兒の窒息を恐れた。若い母親には得てさうした過失があり勝である。乳房で壓し殺した話は新聞などにもよく出て居る。乳がないとはいひながら、矢張吸はせて添寢をするので、勤は夜中に目を覺して餘り靜かに寝て居るのに胸を騒がして、兒の體に觸つて見てホツと安心することなどもある。

勤は毎夜子の泣聲に起されて、はだけた寢卷を合はせる暇もなく、夜の寒さに震へながら、枕元の鐵瓶の湯で、ミルクを拵へた。

十八

若い母親の乳がないといふことも非常な苦痛であつた。鷲印のコンデンスミルクは一罐三十八錢、それは五日目にはなくなる。餘り高いので、和製のを二三度飲まして見たが、質が惡く粘りが薄く、小便にばかりなつて了ふので、ぢき止した。勤は社の歸途に白銅と銅貨とを財布から傾けて、ぢやら〲と音させて、神樂坂の尾澤で其の罐を買つた。土曜日ごとの豚の肉などはもう買ふ餘裕もなかつた。

舶來の鷲印は鷄卵色にやゝ青みを帶びて、匙にしやくつても何處となく濃厚である。時を定め分量を定めて飲ますのが好いといふことも知つて居たが、若い夫婦にはそんな落附いた眞似は出來なかつた。子が泣き出すと、大急ぎで、ミルクを一匙しやくつて土鍋に入れて、湯で溶かすのが待遠な位に鐵にあけて、泣く子の口に宛がつて遣る。兎角よく溶けて混つて居ないので、細い護謨管につかへて、吸つても吸つてもミルクは出て來ない。また管も四日に一度位は、掃除して置かないと、通りが惡るくなつた。無精をした爲め、朝起きるとから、子の焦れて泣き叫ぶのを餘所に、ぶつ〲言ひながら、勤は流元に蹲踞んで、かじかんだ手で細い管に粗い毛の洗滌器を通した。

また時には朝日の當る緣側の柱の處に、綺麗に掃除したミルク罎と護謨管と硝子管と洗滌器とが並べて干されてあることもあつた。

馬鹿々々しいと思ひながらも、勤も矢張お光と同じく不安の念に驅られて居た。絕えざる烈しい兒の泣聲の中には、何か恐ろしい見えない力があるやうに思はれた。

外に出ると、庭には寒い月が明かに照つた。樹の影と言ふよりも枝の露はな影が鮮かに地に印せられた。裏の樅の樹に吹寄せる風が、凄じく潮のやうな音を立てゝ、冴え渡つた月の光が散るやうに見える。勤は裏に廻つて、いつも襁褓を干すあたりを歩いて見たが、垣から垣に渡した繩が霜に白く照つて居るばかり、犬の吠へたやうな樣子もなかつた。

若い夫婦は一生懸命に泣く兒をだました。お光は低い眞面目な聲で『……ねんねんよう』―を歌ひながら、寒い前の緣側を搖ぶつて歩いた。

坊やは好い兒だ、ねんねしな
坊やのお守は何處へ行た、
あの山越えて里へ行た、
あの山越えて……

歌の中には打克つべからざる力に對するやうな悲しい哀れな調が籠つた。『子守唄――子守唄は一種の軍歌だ。自然の力に對する軍歌だ。』かう思つた勤の胸には、熱い熱い淚が流れた。

凩が近くから遠くに鳴つた。

くして坐つて居た。

『此子は何うしたんでせう？』

若い母親の眼には涙が光つた。

『何だお前も泣いてるのか？』

『だつて、此子はいくらだましても、だまらないんですもの。』

横抱にした咲子は、小さい手足を震はせて、身もだえして益々泣く。

『何か着物に痛いものでも附いて居るんぢやないか。』

半ば裸にして彼方此方と調べて見たが、そんなものは見當らなかつた。『どれ、己がだまして遣る！』

と言つて、勤は武骨な大きな腕にぐいと抱上げて、よし〳〵と茶の間から座敷の間をほろつて歩いた。

少しく止み加減になつたかと思ふと、また恐しいことでも迫つて來たかのやうにけたゝましく啼き出す。

『襁褓を犬でも咬へて居るんぢやないでせうか。貴方、鳥渡見て來て下さいな。』

『そんなことは無いだらう。』

『だつてさう言ひますからさ。後生ですから見て來て下さい、』と咲子を勤の手から取らうとする。

『そんなことはない。』

『でも………』

と思つた。するとすぐ自分のことが頭に上つて來て、『自分も矢張勞働者だ』と思ふ。丁度其男が矢來の交番あたり迄行つた頃、砲兵工廠の第二の汽笛が鋭く朝の寒い空氣を劈いて榛の木の丘を越して來る。

新に建築しかけた家屋があつた。五間位で間取の具合が巧に出來て居る。勤は脊の子を搖りながら、よく其中に入つて見た。新しい鉋屑が前に山のやうに積まれて、庇の外に出たところは霜で白くなつてゐることもある。夜風の荒れた朝は、その鉋屑が柴垣の根元やら溝の中やら家の軒下やら大きな家の門の前やら處々に吹寄せられて居た。

十七

木枯が凄じく裏の森を鳴らすと、がら〴〵と落葉が家の周圍を舞つて通つた。山手線の汽車が遠くで轟と聞える。

夜の九時過ぎから目を覺ました咲子は、泣いて泣いて何うしても泣き止まぬ。ミルクの吸口を宛がつても、口を脇に遣つて了ふ。抱いてほろつて歩いても、洋燈の明るい處に連れて來ても、後にそり反つて泣く。寒いのだらうからと言つて、襁褓を更へて暖かい肌につけて遣つても、矢張駄目であつた。初めの中は、お光がいろいろにしてだまして居たが、何うしても泣き止まぬので、少時して勤が行つて見ると、若い母親はもう思案に餘つたといふやうに、泣き叫ぶ子を横抱にかゝへたまゝ、襖の陰に手を空し

朝毎の霜は前の新建の瓦屋根を白くした。

兒はいつも早くから目を覺して泣聲を立てた。母の乳が無いので、抱いて寢ても體が暖らないと見えて、兎角むづがり勝である。もう一度寢かしつけてから起きようと思つても寢つかなかつた。子守か下女か賴みたいと口を諸方にかけて置いたが、澤山の給金が出せないので來るものがない。月一圓位で盆暮の仕着せを持つて氣安く來て居て吳れる田舍者が欲しかつたのである。で、爲方がないので、初めの中は細君が結附けに負つた上にねんねこを被けて、竈の下を燃し附けにかゝつたものだが、後には勤が見兼ねて、朝の中だけ子傅をすることにした。

ねんねこで負つて、表の雨戸を明ける頃は、いつもまだ薄暗かつた。向うの丘の上には、榛のひよろ長い梢が黎明の赤い空に黒く並んで立つて居て、淡竹の大藪のかげの寺からは、朝の讀經の聲が鉦の音と共に聞えて來る。大地は凍つて踏む每にざく／＼と霜柱が崩れた。

每朝出懸けて行く砲兵工廠の職工があつた。勤が子を負つて、まだ人の起きた氣勢もない近所を步いて居ると、角の柴垣のあたりで、いつもその男に邂逅した。髮を蓬々とさせて、縞の汚れた羽織を引被けて、染返しのへこ帶を小さく結んで、朝の寒さにぶる／＼慄へながら、小聲で鼻唄を唄つて通つて行く。睡眠が不足だと見えて、顏の色が蒼褪めて厭に白い。勤は勞働者の哀むべき境遇を思ひ遣つた。夜業まで交ぜて十六時間の勞働、漸く歸つて寢たかと思ふと、すぐ夜が明ける。心も安まる暇があるまい

『繁殖？　妻を娶るのは唯だ繁殖の爲めか？　然り、繁殖の爲め、戀といふ美しい花の咲くのも要するに肉體と肉體とを合せしむる爲め——繁殖を計る爲めの自然の一手段であるのだ。憤慨したつて、煩悶したつて人間はこの天地の大きい係蹄——然り單に生活の係蹄ではない——この大きな係蹄から脱却することが出來るか。』

少し考へて、

『要なき煩悶、要なき苦痛、要なき同情、少くとも今まで自分は要なきものに餘り多く憧れた。戰鬪戰鬪と常に言つて居ながら實際は何物にも觸れて居なかつたのだ。何物をも知つて居なかつたのだ。生活の波に觸れることが恐ろしかつたのだ。』

『まことなる生活、まことなる戰鬪。』と勤は獨り叫んだ。

まことなる生活は日に日に迫つた。年の暮はもう近く、毎日通る神樂坂の通りには、下駄屋、砂糖屋、小間物屋など店の飾附が景氣よく出來て、人がぞろ〳〵と通る。不景氣の聲は到る處に聞えるが、町は賑やかで、そんな樣子は少しも見えなかつた。西風がドツと吹いては黄い砂埃を擧げた。

裏の林は海近くにでも住んで居るかのやうにゴーと鳴る。松だけに殊に淋しく吼えるやうに聞える。つい此間までは、境を縁取つた楢の乾いた葉が、風の一吹毎にばら〳〵と散つて縁側の角、座敷の中庭の一隅などを轉つて通つたが、今はもう殘り少なになつて、空いた梢から寒さうな弦月が微かに見える。

ある。一合の酒にほんのりと顔を赤くして戯談を言合つたこともある。けれど今はそんなのんきなことはして居られなかつた。漸く一時間も懸つて、お光が寢つけて來て勝手元に行つたと思ふと、すぐ目を覺して泣き出す。飯を食つて居る間もじつとして落附いて居られない。それに、間數が三間しか無いので、いつも机の傍に寢かして置く兒が氣になつて氣になつて爲方がない。今にも目を覺ますか、泣き出すかと思ふと、筆を取つても氣が乘らず、本を讀んでも氣が乘らず、思想をまとめようとしても氣が乘らず、神經が常にイラついて居る。

時にはこんなことをすら思ふことがある。『あゝもう自分は生活の係蹄の中に入つて了つた。妻といふ係累さへ自分には重過ぎるのに………今は子といふ重荷も附いた。もう駄目だ、自分はもうこの係蹄から脫却することは無論出來ない………恐るべき係蹄、恐るべき生活の係蹄！』

又ある時は憤を發して、

『妻と子！　妻と子などは何だ。何うでもなるが好い。己はそんな意氣地のない平凡な人間になり得るか。世の中の普通一般の人間のやうに單に妻を愛し子を愛するのが己の能か。己は何の爲めに生きてる。何の爲めに煩悶してゐる。子を育てる！　それにも痛切な意義はあらう。けれど子の爲めに自己を犧牲にする必要が何處にある。子は子、妻は妻、自己は自己。』

讀み懸けたルウソウの『コンフエツシヨン』を伏せて頭に兩手を當てた。

此間も言つた。別段心持も變らない、眞面目にもなれない、けれどかうした二人の間にかうした子が生れて、朝に晩に口をあけて乳をさがして泣いてゐるといふ事實——いよ〳〵免れられぬ新しい辛い羈絆。

女に取つてはその泣聲が餘程男と變つて聞かれた。可愛いといふ情が溢るゝばかりにあつた。勿論、お光はまださうしたことを意識しては居らぬが、泣聲を聞くと、身内の血が沸き立つて、其儘じつとしては居られぬやうな心持になる。

お光は不馴れで取扱が自由に充分に出來ぬのをわれと自から腹を立てた。それに、男はそんなことなどは察しもせずに、唯喧しい〳〵と言つて、揚句の果は『何故だまさんのだ、何故負はんのだ、』と厳しく叱つた。少しは見て呉れても好いといふ腹があるので、ブツブツ言はぬまでも厭な顔をする。男もまた不愉快になる。

勤は一日働いて來る。晩餐後から寢るまでの數時間は、渠に取つては實に重要なる時間である。此間に筆も執らなければならぬ、思想も練らねばならぬ、新着の洋書も讀まねばならぬ。此間だけは種々の雜務、種々の係累、種々の束縛から身を自由にして、頭腦を一洗して、將來に於ける戰鬪の準備をしたいと思つて居る。それなのに、夕暮から夜にかけては、兒が殊にむづかつて泣く、何うかしたのかと思はれるほどに烈しく泣く。

二人きりで居る中は、何の彼のと言つてもまだ餘裕があつた。夕飯の膳を並べて樂しく食つたことも

れど三十日も經つと、段々難かしくなつて來た。抱癖が附いて、下に置くとすぐ泣出す、晝と夜とを取違へて、夜中に大きな眼をして起きて居る。だましてもだましても泣止まぬことがある。

經驗のあるお婆さんでも家に居れば、こんなことはなんでもない。だます方法も知つて居る。氣にも懸けない。子供はかうしたものだと多寡を括つて居ることが出來る。けれど二人はさうしては居られなかつた。かれ等はアダムとイブのやうにして子を育てなければならなかつたのである。

小やかではあるが性急な小兒の泣聲、それが少くとも家の空氣を一變させた。年中一緒に顏を突合して居ながら、其心もその趣味も其の傾向も、溝を隔てゝ並行して走つて居る二筋の道のごとく永久に相逢ふの機會が無い夫婦の間に生れた兒の泣聲は、普通の夫婦の間に生れた兒の泣聲とは、著しく異つて二人の耳に響いた。

勤には子は夫婦の間の鎹と言つたやうに唯簡單に解釋して濟まして置かれない。かうした夫婦の間にも子が產れたといふことゝ、男女一緒にある年月同棲さへして居れば、戀などが無くても子が生れるといふことが何だか不思議のやうにも思はれる。

二三年前から破れて來た自分の思想が愈々敗滅に近づいたやうにも思はれる。意味が無いと思つた處に思はぬ意味があつて、意味があると志した處に意味も何もなかつたやうにも思はれる。親になると心の持方が變ると人はよく言ふ。西は、『君は人の親になつたんだ、大に眞面目にならんければいかん、』と

んと其處に寢たが、其日は田邊と夜遲くまで話した。赤兒の泣聲が氣になる話もした。
西は五日目に來た。もう政府のお役人で、新調のハイカラな背廣を着て、白いリボンで縁を取つた中折の帽子を冠つて、リウとした扮裝。喜んで起上らうとする若い母親を手で制して。其處に寢てゐる生兒をのぞいて見て、『何うも名づけ親には年が若過ぎるけれど……』と笑つて風呂敷の中から、お祝の唐縮緬と長く折つた奉書紙とを出した。勤が受取つて展げて見ると、眞中に綺麗な書で——咲子。

十六

床揚の日に姉が歸つて行くと、生兒をはごくむ責任は全く若い夫婦に歸することゝなる。乳が充分に出ぬので、神樂坂あたりの有名な乳もみに賴んでもんで貰つたが、結果は矢張思はしくなかつた。鷲印のコンデンスミルクの小罐と赤いゴム管の長くついたミルク罎とが常に長火鉢の傍に置かれた。
若い母親に取つては、一刻も其傍を離れない小さい束縛が尠からぬ重荷であつた。抱きやうもまだ滿足に出來ない。襁褓の當てやうも不器用である。朝毎の汚れた洗物も何だか汚いやうな氣がする。殊に火のつくやうな泣聲にはしたゝか困つた。
生れた當座は唯スヤ〳〵と寢てゐた。乳も欲しがらずに、時には何うかしたのではないかと思はれるほどおとなしかつた。『此子は本當におとなしい好い兒だよ。』などと世話に來てゐた姉は常に言つた。け

此間勤が西を澁谷の郊外に訪問した時にも、ズウデルマンのカッツエンステッヒが二人の話の題目となつた。一週間ほど前に到着したのを二人は逸早く讀んで居たのである。西はニッケル臺の明るい洋燈の下に、其綠色の表紙の本を展げて、主人公がクリスマスの晩に雪の庇に落つる音を聞くの條を激賞した。かの新しい文藝の潮はこの遠い國のさびしい二人の胸にも波を打つたのである。其夜勤は西からピエル・ロチのアイスランドフィッシャアマンを借りて闇の田舍道に躍る心を抱きつゝ家に歸つて來た。

田邊の四谷の家は練兵場から穩田の方へ行く途中にある。小さい川が岸に深い樹を鬱蒼と茂らせて、うねくと曲つた流に、水車が音高く水を亂して居るが、其前に草の生えた土橋が架つて、竹藪の奧に庇の低い家が一軒、勤は路の遠きを厭はず、牛込の山手から此處におとづれて來る。日中には細君が子供を負つて、いつも井戸端で洗濯をして居る。西の書齋では多く外國文學の話が出たが、此處では當時の文壇の趨勢や作物の批評が一室を賑かにした。二人は伴立つてよく野を散步した。

田邊は窮して居た。賣れぬ原稿を抱いて饑と戰つた。けれど氣は熾んに、胸は功名に燃えて、勤とは著しく生々してゐる。西の年に似合はず老成なのに引替へて、田邊は飽まで眞率な若々しい處がある。

勤が始めて親になつたのを聞いて、田邊は逸早く訪ねて來た。初產の馴れぬを氣遣つて、お光の姉が二十一日まで手傳に來て居たが、それを相手に快活に雜談をしたり、お光の產蓐に行つて生兒を見て、其容色を賞めたりした。勤は產婦に座敷を奪はれて、玄關の三疊に机や本箱を移して、夜も一人ぽつね

靴がだいなしになるが、家の周圍には大きな欅の木が聳えて、武藏野の木枯が夜もすがら寒く落葉を吹捲いた。此間勤が行つた時、庭に紅白のしぼりの山茶花が一輪二輪咲いて、南縁の籐椅子に冬の日が暖かに射した。

西と田淺とは此頃勤には缺くべからざる慰藉者であつた。さびしいとては訪ね、苦しいとては行き、不平があるとては出懸けた。社の俗塵に塗れて眼の前に黄い埃の舞ふやうな時にも、西の昻つた眉と沈痛なる言葉とに接すると、忽ち勇氣を恢復して新しい希望を得た。『今の中勉强して本をたんと讀んで置くさ、今に勉强したくつても暇が無いやうな忙しい時代が來るからねえ。』

かういふ風に西は常に勤を勵ました。西は自分が文藝を目的として居ないにも拘らず、先に立つて西洋の新しい書を購つて來て讀んで見せた。フランスの輓近文學が殊に其趣味を動かして、最初にドオデエ、次にゾラ、フローベル。露西亞ではツルゲネーフとトルストイが其机の上に離さずに置かれてあつた。勤もこれに勵まされて漸く新しい西洋作品に親しんで、金があれば丸善の二階をあさつて、思はぬ掘出し物を得るのを喜ぶやうになつた。

不完全な書目から骨折つて捜して註文した小說戲曲類も月を逐つてかれ等の机に到着した。

二人は餓ゑたものゝやうに全くそれに心を集めた。獨逸のレクラムの廉い叢書の中からも、ハイゼとドオデエとツルゲネーフとをさがして讀んだ。

ふものかと思ふほど晴々して、頰のあたりが際立つて赤い。傍に臥かして置いた生兒を覗くやうにして、

『寢てますか。』

生兒はスャスャ寢て居る。勤はじつとそれを見た。自己の子といふ感よりも、鼻の隆い口の小さい容色の好さゝうなのが第一に嬉しかつた。勤は常に夢みて居た理想の女性をこの小さい一塊肉に當てゝ見た。戀に覺め世に覺め自己にすらも覺め懸けて居るかれも、今日は何うしてか胸に若々しい血が燃え渡つた。久しく忘れて居た西の國の詩人の歌を思ひ出した。二年前、連中の遣つて居た雜誌に、かの西さんが『女の子を生みたる友に。』といふ文を載せた。大きくなりての後をさまぐ〵に想像しての美しい言葉の中に、『この君琴彈き給はん秋の萩の花いかに幸なるべき』と言つた風な句があつた。人々は皆な其若々しい優しい心を賞めたゝへた。西さんが女性ならば、これが理想的女性だなどと言つた人があつた。

『西君に名をつけて貰はうぢやないか。』

『えゝ。』とお光は笑つて居る。

『好いだらう。』

『結構ですけど……。』と勤の顏を見てまた笑つた。

勤は出勤前に西に當てゝ手紙を書いた。西は近く文官試驗に好成績で及第して、某省の奏任官になつて居た。澁谷に近く宮益の坂を北に入つた素人屋の一室を借りて下宿した。霜解の路で、いつも出入の

た。

産婦は次第に疲れて、いきんで來ても、これに伴ふ力が出ない。呼吸が切れてすぐたッとなつて了ふ。生鷄卵を二度までもお三輪が皿に割つて飲ました。産婆は生れる際になつての力の缺乏を、經驗上尠なからず心配したが、勤が里の母親を迎への車を頼みに行つて歸つて來ると、門の處で小やかな性急な生兒の啼聲が朝の鮮やかな冷たい空氣を劈いて銳く聞えた。

勤の胸には今まで經驗したことの無い新しい喜悅が漲り渡つた。

生れた子は女の子であつた。新しい世の空氣に觸れるのを恐れるやうに手足を縮めてひた啼に啼く。後産が下りないので、あたりは昨夜から散ばつたまゝになつてゐて、屛風の傍には洋燈が消し忘れられてぼんやり點いて居る。

でも里の母親が心配しながら腰を曲げて遣つて來る頃には、生兒はもう産湯を使つて、産衣を着せられて、若い母親の傍に寢かせられて居た。産は重い方ではなかつたが、何しろ始めてで力が充分に出ないものだから豫定よりも時間が長引いたなど、いろいろな話が出る。笑ひ聲も盛にした。たき立の飯の臭ひ、味噌汁の臭ひが茶の間に充ちて、朝日が晴れやかに南向の障子を照した。

兄も心配して遣つて來た。昨夜からの話がまた繰返される。

お光は此方を向いて寢て居たが、勤が行つて見ると、莞爾と笑つて見せる。顏色が昨夜とはあゝも違

ではなかつた。男が生れるか、女が生れるか、或は不具の兒が生れはせぬかと前から繰返して居た心配、そんなことよりも、今は唯一刻も早く生れさへすれば好いといふ氣になつた。

まぎらせやうとして戸外に出て見た。けれど角の家の軒燈が前の下宿屋の羽目をさびしげに照して、寒い夜風が闇を吹くばかり、矢張氣がまぎれぬので、勤は下の家の近くまで行つて引返して來て、今度は庭からわざと他人の家でもあるかのやうに中の樣子を覗いて見ると、雨戸の隙間やら穴やらから處々光が闇に洩れて、中の障子が明るく見える。生れたやうな氣勢もない。と、忽ち、

『勤さん』

と、お三輪の呼ぶ聲がする。

急いで家に上ると、お三輪が今勝手に二分の洋燈を點けて、竈に火を燒き附けようとするところ。呼んだのは、湯を沸す用である。で、勤は嫂に代つて、揚板の下から木屑やら杉の枯葉やらを出して火をつけると、青い黑い煙が一面に渦き上つた。薪が生なので、容易に燃え附かぬのを、勤は火吹竹で吹いて吹いてあたりを灰だらけにする。

やがて竈の前に蹲踞つた勤の鬚面は燃え出した火に赤く照されて見えた。

湯が沸いた頃には、黎明の光が既に東の空を染め出した。近所の工場に汽笛の音がして、朝の聲が微かに町の方から來る。やがて瓦屋根に霜の白いのが見えるほどに明るくなつても、子はまだ產れなかつ

時が來れば産れるものにきまつて居るんですか、』らと勵まして力強く腹をさすりながら、『お三輪さんお氣の毒ですが、髮を束ねて下さいナ』

お三輪は櫛と鋏とを持つて來て、向うむきに打伏して居るお光の髮の元結の根を切ると、丸髷の形は落ちて、長い房々した髮が亂れた。

唸聲が唸聲に續く。

お三輪が茶の間に來る度に勤が、

『まだ中々生れさうな樣子はありませんか、』と訊く。

『えゝまだ……』

『重いんぢやないですか？』

『いゝえ大丈夫、そんな心配をしないで寢て居る方が好いがね。』勤が噓をするのを見て、『そら御覧なさい、風邪を引きますよ、床を玄關に敷いて上げようかね。』

『床なぞ好い――』

『でも起きて居たッて爲方が無いがね、今好い兒を見せて上げるから、それまでじつとして休んで居る方が好いがね。』

座敷の一隅につかねて置いた蒲團を玄關の三疊に運んで來て敷いて吳れる。けれども勤は寢るどころ

痛みが催して來ると、お三輪は取敢へず夜着の下から頻りに腹を摩つて遣つて居たが、一刻毎に其いきみが強くなるばかり、寢て居てはいかにも不便なので、葛籠を其處に運んで來て、其上に蒲團をかけて産婦にそれに凭り懸らせて、後へ廻つて、兩手で強く下に扱くやうに腹を押して遣る。勤が珍らしいものを見せられるといふ顏をして立つて居ると、お光はきまりが惡さうに、彼方に行つてといふ態度をする。お三輪は、

『勤さん、彼方に行つてお出よ。こんなものを男は見るもんぢやないがね。』

勤は茶を注いで飲んでゐたり、煙草を吸つて見たりしても、矢張頭腦は隣の間の唸聲に引附けられる。平生うはの空で聞いて居た難産の話が又しても新しい力で襲つて來る。お産は棺に足を半分入れて居るやうなものだといふ言葉も今更のやうに胸に響く。

壓迫が時を刻んで烈しくなつて來ると、女はたしなみなどは言つて居られない、身を悶えて苦痛を耐へようとするので、額には汁が滲んで、丸髷が半ば壞れた。お三輪は出來るだけ力を強く撫つてやつて居る積であるが『もつと強く………後生ですから嫂さんもつと力を入れて………』と産婦はいふ。

其處に産婆が來た。

茶も飲まずに手ばしこく白い服を着て産後の準備を殘りなく整へて『さア、私が………』と努れたお三輪に代つた。『まだ中々ですから、氣をしつかり持つて………心配なそするものではありませんよ……

『さうでせうともね。初めてッていふものは心配なもんだから……』と言かけて、『今すぐ行くがね。』

『それぢやどうぞ……』

かう頼んで置いて、勤は田畝を越して、淡竹の籔に沿つた暗い路を急いだ。星のキラ〳〵と閃めく夜で、寒い風が路傍の枯れた萱をカサ〳〵と吹鳴らした。産婆に遣る金のことが絶えず氣になる。

産婆の家はすぐ知れた。軒燈に『さんば』と平假名で書いてあつた。下宿屋の裏庭にある松が斜に其光線を受けて細かい葉を明かに見せて居る。産婆はかういふことには馴れて居るので、一二度戸を叩くと、すぐ返事がして、マッチを摩る音と共に二分心らしい洋燈がぱッと點いて家の中が明るくなる。

『上の中村さんですね、』と戸を明けずに産婆の聲がした。

『何うかすぐ來て下さい。宵から苦んで居るんですから……』一刻も早く來て貰ひ度いといふ氣が勤にあつた。

『はい〳〵かしこまりました。今すぐ參ります』

寢床の中で煙草を吸ふらしく、灰吹を叩く音がトントンする。

家に歸ると、嫂はもう來て居て呉れた。例の元氣な調子が尠くとも暗い家を明るくした。勤もいくらか氣が安まる、産婦も大に心丈夫になつた樣子。『もうさう長くはないでせう。催して來る間が大變短かくなつて來たからね。』と嫂は小聲で囁く。

一痛みが漸く募つて來て、身悶をして唸聲を立てる。傍に行つて、顏を覗いて『何うだ、もう産れさうか、』と聞くと、それでも微笑を顏に見せて『まだでせうけれど………』と言ひ懸けて腹を押す。

『婆さんに行つて來ようか。』

『寒くつて大變ですね。』

『なあに、わけはない………何うせ夜があけるまで持ちはしまい。』

『え、朝までは………』と顏をしかめて『それぢや下の家に寄つて嫂さんに來て貰ふやうに賴んで、お婆さんの處に行つて來て下さい………お婆さんの家知つてるでせう。』

『よく知らんけれど………』

『あのお醫師さんから向う通りに出て、左へ行くと酒屋がある。それから二三軒先に下宿屋がありますが、その裏で軒燈が出て居りますから、すぐ解ります。』

勤は古びた二重廻を引懸けて、磨滅らした駒下駄を引摺つて出懸けた。下の家に來て、緣側の雨戸の處から二三度聲を懸けたが、熟睡して居ると見えて返事がない。止むなく雨戸をトントンと叩くと、今度は聞えて、お三輪がだらしのない寢卷姿で戶を開けて、白い顏を闇に出す。

『愈々始まつたかね………』と眠むさうな眼を摩る。

『まだ急には産れないかも知れないけれど、樣子が分らんもんだから………』

折の屏風を半ば立廻した。其屏風に、かれ等の友達の群の手紙が、若い情熱時代の記念として張られてあつた。寢てゐるお光の丸髷のすぐ上に、かの西さんが利根川の戀を勤に報じた手紙が白く鮮かに見えてゐる。『この堪へ難き思を抱きて一人此地に別れ行くべきわが運命のはかなきを思へ』と書いてあるが、一人といふ字とはかなきといふ字が殊に際立つて大きく出てゐた。

夜は寂として居る。寒さがもう嚴冬であるかのやうにゾクゾクと身に沁み渡る。勤は臺所に行つて、竈の下から鉋屑を攫み出して來て、先づ第一に火を起した。鉋屑がペラ〳〵と燃えて、消炭に螢のやうな火が附いたのを、勤は顏を押附けてぷう〳〵吹く。

火が起る間にも、痛みは二三度來たらしかつた。産婆を呼びに行かうかと、其度每に勤は思つたが、成るべくなら夜明までかうして保つて居て吳れゝば好いと思つた。今は二時、下の家にしろ産婆にしろ、この夜中に起すのは氣の毒だ。それに自分も寒い。

勤はある雜誌に原稿を遣つて置いた。出産の費用にと思つたのである。けれど雜誌社から昨日其原稿を送り返して來た。財布に月の始めに一圓位はあつたのが、今はもう銅貨ばかりになつた。また社の編輯長に泣附いて、自分の文學者たるの矜持を侮辱されるのかと思ふとつく〴〵厭になる。それに産が神經を昂らせる。難産？　死？

勤は始めて親になる夜をかうした不安な心で過した。

ら呼起された。薄暗い行燈の下にお光は白い顏を出してブルブル身を戰はして居た。

夜は既に寒かつた。

お光は終夜一睡もしなかつた樣子。腹の痛みが波の寄せるやうにをり〳〵來て、そして間が段々近くなつて、その度毎に痛みも強くなつて來る。『今は鳥渡途切れて居ますけれど………もう生れるに違ひありませんから、』とお光は苦しさうに呼吸を吐く。

勤がヅボン下を穿いたり寢卷を着替へたりして居ると、『それからね、貴郞、すつかり支度をしなくちやなりませんから………其處から……押入から………』腹が痛んで來たと覺しく、言ひ懸けたのを急に止して、打伏になつて腹を蒲團で押すやうにする。

『痛んで來たか。』

返事がないので、勤は其傍に寄つて見る。白い顏には苦痛に堪へようとする眞面目な表情が出て居て、大きい丸髷がだらしなく半ば潰れ懸けて居た。勤は自分の妻とこれから世に出でようとする一塊肉との間に、一種否むべからざる關係と束縛とがあるのを思つて厭な氣がした。お光が呼吸を刻むやうにする度に、勤は生物の産れる力の壓迫を其身にも感じた。

やがて少し痛みが落着く。

此間にと勤は押入から豫め準備をして置いたいろ〳〵の物を出して、寢具を床柱に近く寄せて、六枚

母親、姉、貞一、お光とかはる〴〵階段を登つて行つて、親子兄弟のかための盃を濟ました。母親は寫眞よりも立勝れて嫁の容色の好いのを見た。

やがて膳が狹い八疊に隙間なく並べられる。嫁と婿とは上座ではあるが、隅の方へ押附けられて、十餘人の伯父やら伯母やら親類やらがずらりと膳に着く。勤は貞一と並んで坐つた。

手傳に來たものゝ中に下町の綺麗な娘が二人居て、人々に酒を侑めた。姉のお榮は晴衣を平常着に着替へて、如才なく席を斡旋する。少し酒が廻つた頃に、母親が出て改めて挨拶をした。

勤の兄の氣輕な洒落と、酒好の伯父の大きな笑聲とが殊に一座を賑かにした。姉の女の兒は派手な扮裝を絶えず鮮かに見せて、無邪氣なことを言つて人々を笑はせた。

其夜醉つたのは伯父ばかりではなかつた。貞一も嫁の兄もしたゝかに醉つた。勤は席が散じてからも、蹌踉ながら大きな聲で詩を吟じた。今までこんなことはなかつたのである。貞一も覺束ない調子で新體詩を歌つた。

十五

十一月の末にはもう雁が鳴いて通つた。

宵から何うも樣子が變だと言うて居たが、夜中に愈產氣が催して來たことが解つて、勤は喫かい夢か

兒は階段を二段ほど上つて足を爪立てゝ覗いて見たが、やがて下りて來て、『伯父さんが盃を持つてゐてよ、』と言つて、長い袖を口に當てゝ笑つた。

『お嫁さんが見えたか、』と貞一が訊くと、

『え、え、見えてよ。それや別嬪さんよ………床の間の處に坐つて、下を向いて、困つたやうな顏をして居てよ。』

と誰も知らぬものを自分ばかり見たといふ無邪氣な調子。

この二階のひつそりとなつた間を、勤は店の硝子戸に凭り懸つて坐つて居た。自分の結婚と引較べて二人の戀を頭腦に浮べて見た。

羨ましいやうな氣がする後から、自分のは要するに片戀であつたとおもふ。お光は戀などを知らず、唯望まれるまゝに嫁いで來たのである。勤はこんなことなら寧ろ其時失戀した方が好かつたと後に思つたことすらある。勿論自からも其の理由の無いことを知らぬではないが、知つて居ても矢張片戀は片戀であつた。自分の戀は冷たい水をかけられて、じめ〳〵と燻つて消えて了つた。……ふと考が變つて、お光の姉がさびしい未亡人の身で、かうした新婚の夫婦と一緒に同じ家に起臥するといふことが氣の毒のやうにもあり、同情に堪へぬやうにも思はれる。

氣が附くと、もう當人同士の式は濟んで、二つの燃えた心が晴れて此世で合ふことゝなつた。續いて

よりも面窶れがして、顔色が悪い。何うも持病の胃が出て爲方がないといふ。貞一はまた勤がいくらか世馴れたやうな調子を見て取つた。顏も稍肥つたやうである。西、田邊の近況もやがて出た。西は此夏大學を出るとすぐ、書籍を抱へて鹽原に二月ほど行つたが、今は丁度文官試驗に忙しがつて居る。田邊は三月ばかりで主筆と衝突して新聞社をよして、四谷に引越して、筆で食つて居る。明日、君が都合がよかつたら、近郊散歩旁先生の處に行つて見ようではないかなど、勤は貞一に言つた。

客が漸く集つて來る。十數年某省に勤めて居る酒好の元氣な伯父の鮨鬚と勤の兄の八字鬚とが新聞を種に世間話を始めると、伯母達は今度の結婚からいろ〳〵昔話を持出す。やがて時計が八時を打つ。下がガヤガヤと賑かになつて嫁の一行が來た。

儀式の間は客は皆下に降ろされる。栗梅の縮緬の紋附に繻珍の帶を緊めた嫁が、先方の伯父に伴れられて、二階に通ると、媒妁役の勤の兄夫婦が續いて階段を上る。

店と茶の間とには羽織袴と縮緬の紋附とが彼方此方に立つたり坐つたりして、低い笑聲と囁きと勝手の物音とが一緒になつて、狹い家を更に苦狹しくした。高く吊つた洋燈の心が出過ぎて、ホヤが半ば黑くなつたのを貞一は氣にして、幾度も直して見たが、室は矢張暗かつた。引替へて二階はぱッと明るく、階段の黃い壁に張附けた石版繪の美人の横顏が浮出すやうに見える。

三々九度が始まつたと見えて、今迄折々話聲がしたのが急に止んで、二階はひつそりとなつた。女の

『貞や勤さんはそんな狹い處に居ないで、二階に行つてお出な、』と荷物を見に來た姉に言はれて、二人は其儘二階に上る。

二階の八疊は綺麗になつて居た。中央に白い毛布が敷いてあつて、座蒲團が其周圍に幾つとなく並べられてある。置洋燈が二個、四邊は晝のやうに明るい。二人が上つて行くと、欄干に凭懸つて町の夜の賑ひを見て居たお光が、暗い中から派手やかな扮裝と丸髷姿とを顯はした。女の兒も上つて來た。

『お婿さんは何うしたんだえ？』と勤が聞くと、

『もう來るだらう。家が狹いから、隣の二階を借りて、其處で支度をすることにして置いたものだから。』

欄干に行つた女の兒が、すぐ軒をつらねて居る隣の二階を覗き込んで『伯父さん！』と呼んで居る。見ると其一間にも洋燈が照り輝いて、障子の硝子を透して政次が袴を穿いて居るのが見える。手焙に茶道具が置いてあつて、穿きかけた袴の襞に光線が動く。

裏の高窓を明けると、冷たい十月の空氣が入つて來て、向うの家の庭の高い梧桐の葉ががさがさと夜風に鳴る。明神山の常夜燈がホッツリ見えて、黑い大銀杏の上に星が光つた。

貞一と勤とは盡きざる話に耽つた。二人は政次の結婚の席に列するといふよりも、かうして語り合ふ機會を得たのを一層うれしく思つたのである。貞一は田舍寺の方丈さんになつて了つた。五月逢つた時

十四

唐物屋がめづらしく店を閉めて休業したと思ふと、今日嫁さんが來るといふ噂が近所の人々の耳を驚かした。日の暮れる頃から、羽織袴を着けた見馴れぬ人が出たり入つたりして、今少し前魚屋の若衆が板臺を斜に狹い露路を裏に行つた。

二階が一間、下が一間、いかにも狹いので、足も踏立てられぬほどの混雜、竈の火の赤く燃えて湯氣の立つ中に、女連の手拭を冠つて働いて居るのが、汚れて黄くなつた硝子戸を透して不透明に見える。八疊には膳具、座蒲團、茶器などが一面に散らばつて、中央に吊した五分心の洋燈は腰を曲げて忙しさうに立働いて居る母親の色白の顏を照した。茶の間と店の閾の處に貞一が居て、それに羽織袴の勸が傯かず話し懸けた。姉の女の兒の今年十二になるのが、友禪縮緬の濃い水色の地に菊を白く出した晴衣を着て、繻珍の赤い帶を立矢の字に結んで、髮をおちごにして、莞爾と無邪氣に伯父さん達の肩に攫つたり何かして居ると、其處に嫁さんの荷物が來た。

人々が手傳つて取敢へず店に上げた。店は殘なく片附けられて、硝子棚に無理に押込んだ赤、靑、海老茶などの毛糸と白いメリヤスのシャツが目に立つ。簞笥二棹、鏡臺、日用道具、葛籠などがやがてずらりと其處に並ぶ。

娘が慌てゝ手を引込めるのを見て、

『さう容易くは渡されない、』と笑つて居る。

『何だか當てゝ御覧よ、』とお三輪は傍からいふ。

『厭ですよ、伯父さんや伯母さんは、………』

『だつてお前の欲しいものだから好いぢやないか。』

半紙の中にはハイカラな政次の寫眞！

昨日其人が來て、此處にあつたおきよの半身の寫眞と交換したといふ。おきよは今年春の頃使に出た途中、山の手の小さい寫眞屋で撮した其寫眞を思出した。横向の顏も惡いし、銘仙に繻子の帶の扮装も羞かしかつた。

歸途は闇が嬉しかつた。おきよは懐に大事に其寫眞を抱いて來たが、場末の町の薄暗い洋燈の光に一度ならず二度までも出して透して見た。蕎麥屋の角の郵便函に其手紙をソッと入れた。

あくる日の午後、主人は茅ヶ崎の病院をたづねたが、母親は存外弱かつた。それほどまで當人が思つて居るのならとすぐ承諾した。白い服を着けた五十歳位の小柄の看護長は、少し褪めた紺の背廣を着た主人を、病室やら海氣室やら診察室やらに案内して廻つた。海氣室の小高い處に二人は立つて、色の濃い鮮やかな初秋の海を見た。

しく存じ候、一生他人に奉公と覺悟仕候身の心の中お推もじ被下度先づは御禮旁御返事まであら〳〵かしこ、

きよ

伯父上樣
伯母上樣

『これで好い、これで上等だ、』と主人は得意さうに點頭いて、

『それを清書して御覽。』

やがて清書した手紙を主人が讀返して見て、

『これで伯父さんが一狂言書いて遣る、首尾よく參ればお慰みだが、』と可笑しさうな笑ひ方をする。

お三輪も夫から其手紙を取つて字を拾つて讀んで居たが、『これは旨いねえ！』一生他人に奉公の身の心の中お推もじだッて……旨く遣つたね、まアおきよ、』と手紙を展げたまゝ轉げるやうに笑ふ。

主人はお三輪を頤でしやくつて『さつき預けたもの持つてお出！』

お三輪は立つて簞笥の上の抽斗から半紙に包んだものを出して、厭に笑ひながら夫に渡すと、主人はそれを娘の前に出して……娘がそれを取らうとすると……

『おつと、お預けお預け！』

のやうに默つて居る譯にも行かず止むなくもじ〳〵してると、お三輪は座敷に行つて、机の上から卷紙と硯箱とを持つて來て、おきよの前につきつけるやうに置いて、『政次さんの處に行きたけりや、今伯父さんが文句を敎へて上げるから、言ふ通りに、伯父さんに寄越したやうにして、つくり手紙を書くんだとサ。それを伯父さんがね。茅ケ崎に持つて行つて母さんを說きつけるんだつて……丸で狂言ぢやがね。』

主人は微笑みながら、いろ〳〵と文句を敎へてやる。お三輪は傍でひやかしを入れて笑ふ。おきよは筆を片手に持つて、卷紙を洋燈の下に廣げて、時々恥しい文句に出會つて顏を赧くした。おきよはいつそ家に歸つてさうした本當の手紙を書かうかと幾度か思つたが、まさかにそんなことも言へなかつた。

やがて手紙の草稿が出來る。

主人が讀んで見る——

一筆申上まゐらせ候、此間は御馳走樣に相成難有御禮申上候、また此節中は私緣談につき伯父樣伯母樣一方ならざる御心配下され、此御恩は海山盡きせず一生忘れ申すまじく候、母不承知の由私のやうなものを少しも好かれと思ふ慈悲と思へば淚も出で申候、左には候へど私のやうな者はまたと緣談も有之間敷、萬一有之候とも最早一生他へは嫁き申さず、獨身にてさびしく暮す積りに覺悟致まゐらせ候、伯父樣伯母樣あれほどに御世話下され候ふに、かゝることに相成り候ふは私身に取りても口惜しく悲

おきよは默つて顏を赧くして、手紙を膝に廣げたまゝ低頭いてゐた。

相變らず頓狂な奴だなといふやうな顏をして、主人はお三輪の笑ひこけるのを面白さうに視て居たが、やがてやさしげな微笑を八字髯の邊に湛へて、

『だから好いんだよ。向うだッて欲しがッて居るんだから、………母さん不承知を言つたつて、當人同士が好くさへあれば、それで好いんだ。何も母樣が結婚するんぢやなし！』と笑つて見せて、大丈夫だよ、心配せんでも大丈夫だよ。』

『そら、大丈夫だとさ！おきよ。』

と低頭いて居る顏を强ひて覗くと、

『厭よ、伯母さんは。』

とおきよは其儘につこりする。

『厭もないもんぢやがね、………うんと御馳走して貰はなきや遣り切れんがね、………』とまた一しきり笑ふ。

少時してお三輪が、

『それで、何うぢやね、お前本當に嫁く氣かえ？』

眞面目に出られると、おきよも流石に返答に困つた。嫁く氣だと明白と言ふのも氣恥かしいし、子供

二年も今の處に辛抱して居る中には、容色だつて、悪いと言ふのではなし、どんな好い處から望まれないものでもないと母親は娘の將來の榮華を夢みてゐる。

お三輪は『姉さんがまア何うだらう、華族さんの處へでも遣れる氣で居るから可笑くなるぢやね、』と無造作に笑つた。勿論お三輪にしても、もう少し厄介の少い生活の樂な處に遣り度いといふ考はあつた。姉が夫に死なれて三人の子を抱へて難儀したことも知つて居る。自分の夫の俸給が少く、毎月つらい遣繰を遣つてゐる經驗もある。

主人は腕を組んで考へた。今になつて纏まらぬとあつては口を利いた甲斐が無い。顔も立たぬ。徒に感情を弄ばれた當人同士にも氣の毒だ。で、少時默つて考へ込んで居たが、やがて端書をおきよのところに出した。

おきよは其夜奥樣の手離されぬ用があるのを強ひて賴んで飛んで來た。お三輪が取敢へず母親の手紙を見せると、小石川から長い夜路をさまぐ\に夢を見て嬉々して來た調子が忽ち變つて、沈み切つた悲しさうな顔色になつて了ふ。

一座が少時深い沈默に落ちてゐたが、突然、お三輪が、

『遣り切れんね、まア、此娘は。政次さんに首つたけなんぢやがね！』

と體を崩して笑つた。

と政次の顔を見てお光はまた厭に笑つた。八月のお光の腹は、前掛を高く緊めてももう隱されぬほど人目に立つた。

母親もお榮の歸るのを待ちかねて『何うぢやつた？』と訊く。

『あれなら好ささうだよ。品の好い溫和しさうな娘ですよ。』

『店が出來さうかな？』

『さういふことは好きだッて言つて居ましたよ。』

『さうかな？　それなら好いがな。……』

翌日役所の歸途に下の家の主人が壕端の店に訪ねて行くと、母親は下にも置かぬといふやうに欵待して、鮨を大きな皿に盛つて出した。主人の笑ふ聲がお榮の笑ふ聲と一緒に高く聞えた。

おきよには母方の伯父が三人あつたが、主人が其話を持つて行つて相談をすると、孰れも皆贊成した。一番上の伯父は中でも殊に同意して、出來るだけは準備もして遣り度いと言つた。先づこれで此の縁談も世話甲斐があつたと喜んで居ると、意外にも茅ヶ崎の母親から不承知の手紙！

母親の意見では、折角の良縁だが、其身が舅姑小姑に苦勞し拔いた覺えがあるから、何うかあの娘にはさうしたつらい思をさせたくない。今少し樂なひとり者か何かに嫁け度いと言ふのである。內々は少しでも好い處にと願ふ親心から、多少の財産があつたにせよ、判任官ではといふ腹があるらしく、猶一

無論異存無し！　で、其話を先方に持込むと、政次も胸を躍らした。母親や姉は流石に老功で、『私共のやうな世帶でも一緒に遣つて見て下さる積なら、嫂さんの姪、これほど結構なことはない、』と上邊の挨拶は綺麗にして置いて、種々の方面から奉公先やら親類やらの樣子を聞き糺した。別にこれと謂ふこともなかつた。娘の奉公先の門前の年寄夫婦は口を極めて其性質の溫良なのを語つた。近所での評判も好い方であつた。話は段々進んだ。處が當人同士は一度逢つて知つて居るから好いやうなものゝ、母親か姉か一度逢つて置き度いと言ふので、それなら改めて正式の見合をしやうといふことになつて日が選ばれた。

其日は政次は姉と一緒に來た。絽の三ッ紋の羽織に糸織の單衣を着て白足袋を穿いた。おきよは結ひ立の銀杏返がよく似合つて、少し地味な白茶の帶がかへつて其姿を品好く見せた。座敷で姉と主人と政次とが話し合つて居る處に、茶を運んで出た娘の顏は上氣した。姉はガラ〳〵者の遠慮もなく、思ふことをずん〳〵言つて了ふので、政次は傍で聞いて居てはらはらした。

見合が濟むと、姉弟が歸途にお光の家に寄つた。お光は笑ひながら姉の耳に口を寄せて何事かを囁くと、姉も笑つて、

『好い娘だがね。』

『さうねえ、別嬪さんね、政次さん仕合せよ。』

に繰返した。

二つの心は人知れず互に燃えて幾日か過ぎた。おきよは二三度伯母の家を訪ねて來たが、其のなつかしい洋服姿を見ることが出來なかつた。政次も妹の家に來る毎によく下の家に寄つて行くが、矢張その銀杏返は居なかつた。早稲田の淺間神社の祭が來て、カンカンカンと鐘を鳴らす音が場末の町を賑かにした。通りの祖師滿願の押灸の賑かな日もやがて過ぎて、お孝が京都の親類に向けて發つと、萩の咲く九月が程なく來た。

下の家の主人がある朝何氣なく、

『何うだらう、おきよは政次さんに、………』

とお三輪に言つた。

『さうぢやね』とお三輪は考へたが『好いぢやらうと思ふがね、政次さんは柔和いし、それに男も好いから。』

『屹度好いよ。』

『あの子だツて、さういつまで奉公して居たツて爲方がありませんしね………屹度好う御座んすよ。』

では先づ當人に聞いて見ようといふことになつた。一週間ほど經つて、おきよが遣つて來たので、それとなくお三輪が氣を引いて見ると、おきよは何も言はず顏を赧くして低頭いて了つた。

地圖、油繪、棚の上の人形の置物、八字髭の若主人は常に厚い洋書に讀み耽けつて居るが、夜などのお召の時に行つて見ると、其處に若奥樣と一緒に居て、晴れやかな樂しげな笑聲が高く聞える。おきよは瓦斯の光に照り輝いた其室から、暗い廊下へと靜かに足を運びながら、一層鮮かに其の姿を頭に浮べた。
おきよが朝の用を濟まして、化粧をザッとして奥に行く頃には、其の洋服姿は丁度出勤の途中で、いつも九段坂を下りて牛ヶ淵に出ようとする位であつた。腰辨の群は大洋を流るゝ黑潮のやうに朝日に向つてぞろぞろと歩いて行く。政次はをり〳〵此の附近で勤と邂逅して伴れ立つて行くことなどもあつた。
政次の勤めて居る課は、主として計算と統計とで、算盤を控へて桁の多い數を讀み合はすのが其日其日の仕事である。始めは二三日勤めると、誰でも大抵うんざりして了ふのが習ひであるが、さうした無趣味な仕事にも、人間は慣れゝば慣れられるもので、政次は此處に勤めてからもう三年、加算は殊に達者で、いかに早い讀口にも、滅多に數を誤ることなどはない位に熟達した。
かれも其時から矢張其娘のことを忘れずに思つて居た。色は少し淺黑いが、後姿の好い、眼の綺麗な上品な處が少なからず氣に入つた。當世式ハイカラは嫌ひ、下町式の意氣なのも餘り趣味に適はないといふ政次には、其大きな銀杏返が際立つてよく眼に殘つた。嫁を貰ふ話をまだ直接に母親から言はれたことはないが、妹が嫁いてから、家は無人、姉は其忘れ形見の娘と樂に二人暮をするだけの財産を持つて居るので、嫁さんでも出來たら一刻も早く別れたいと口癖に言つて居る。政次も暗に妻になる女を胸

『下の家に來るのはあれは何處の娘？』
『娘つて？』
『そら顏の長い、丈の高い？』
『あゝあの娘？　嫂さんに似た？　今あの人が居て？』
『あゝ。』
『別嬪さんでせう。』
仲兄は笑つて見せた。お光は知れる限を話した。里の家でも此頃嫁を貰ふ話があつた。此間も母親が下の家の主人に『何處かに好い娘がありましたら、』などゝ賴んで居たのである。
娘はおきよと呼ばれた。
おきよも一目見た洋服姿を忘れ兼ねた。忙しく立働く間にも、勝手元で水仕事の手傳をする時にも、おひけになつて朋輩と一緒に寢る際にも、派手なネクタイと丁寧に分けた髮と色白の柔しい顏とを思ひ浮べた。殊に、西洋館の若主人の居間に通ふ長い廊下の角を通る時には、何故か一層強く鮮かに其姿が眼に見える。其廊下には圓柱が立つて、庭に下りる石段の上に、大きな蘇鐵の鉢が置かれてある。其鉢は紫の地に白く模樣が浮出してあつた。芝草の庭から築山の向うには、松やら楓やら高野槇やら棕櫚やらが繁つて、置石の處々に伽羅と丸ヒバの大きいのが綺麗に刈込まれてある。室には金緣金文字の書籍、

何處か沈んだところが見える。お三輪のやうに氣もはしやいでは居なかつた。それといふのも難かしい、氣の置ける朋輩の多い中に居たからで、新華族の家庭などと謂ふものは、それは面白いものですよとお三輪は勤に話した。

其屋敷は小石川の高臺にあつた。椎の樹の大きいのが庭に聳えて立つた。娘が見習に上がつた當座、さる新華族から若主人に立派な奥さんが來た。娘は始め一年の間は、妾腹に出來た末の孃樣の七歳になるのに傅いて、毎日お茶の水に通つたが、二年目から座敷に出るやうになつた。容色がよく、擧止が落着いて居るので、旦那樣奥樣のお氣に入りで、着物も三疊の押入の葛籠に一杯に出來た。門前に住んで居る庭掃除の爺婆とも懇意にして、暇があるとよく其家に行つた。

けれど朋輩との軋轢が隨分ひどい。勝手を取締つて居る五十ばかりの女の機嫌を取るのも容易でなかつた。それに若主人夫婦の睦しいさまがちよい〳〵眼に付く。娘は今年二十である。何時まで他人の家にかうして居た所で爲方が無いといふ氣がいつとなく萠して來た。路を行く若い洋服姿が眼に留つた。

ある日曜に、お光の仲兄の政次が、水色のアルパカの脊廣に白のズボン、色の際立つて濃い派手なネクタイをして、意氣な麥稈帽子を冠つてお光の家に遊びに來た。勤は生憎朝出て居なかつた。で、妹を相手に氷など御馳走になつたが、餘り御無沙汰をして居るからとて、ちよつと下の家に行つた。十五分ほどして歸つて來たが、お光とのさま〴〵の會話の中に巧に挿んで、

十三

下の家にはお三輪の親類の人々が常に訪ねて來る。早稻田に通ふ甥、女子高等師範の寄宿舍に居る遠緣の女學生、高等商業のハイカラ生徒、姪だといふ肥つた娘、それにお三輪が前に嫁いて生んで來たといふ七歲位の女の子も時々來た。主人が柔しいので誰も氣が置けない。

其中に一人綺麗な娘があつた。丈の高い、後姿の好い、顏だちのなだらかな、眉の好もしい子で、髮は常に輪の大きい銀杏返に結つて居た。春の頃勝色がかつた銘仙の羽織を着て、後向に銀の簪を見せて、お三輪と對して坐つて居た。勤が行くと、羞かしさうに、それでも行儀正しく挨拶をして、やがて立つて玄關なり勝手元なりへ行つて避けて了ふ。女學生風では無論なく、さうかと謂つて下町式でもなかつた。『別嬪さんですね！』とある時勤が嫂に言ふと『えゝ〳〵大變な別嬪さんですとも！　何處か好い處が無いかえ勤さん、嫁に行きたいつてキユツ〳〵言つてるんだがね、』と例の大袈裟な笑ひ方をした。聞けばお三輪の姪で、小石川あたりのさる新華族に三年前から行儀見習に上つて居る。父親に早く死別れて、三人の遺兒を抱へて、母親は一方ならぬ苦勞をしたが今では皆な大きくなつたので、自分は茅ヶ崎の高田病院の首席看護婦をして居るといふ。

姪は叔母さんに何處か似て居た。口の利き方笑ひ方などがそつくりで、唯違つて居るのは、眉の邊に

く世辭が好いので、附近の商家の眠つたやうに淋しいのに引替へて、士官や學校の生徒が其頃ボツ〳〵街頭に見え始めた海老茶袴の女學生などが常に出たり入つたりして居た。

まだお光と結婚しない頃にも勤は此路を通つた。冬の寒い夜、お光の顏が見たくなつて、態々壕端まで出懸けて行つたこともあつた。店にお光が出て居ない時は非常に失望した。それから新婚の當座、丁度其八重櫻の美しいトンネルの中を矢張今と同じやうにして並んで歩いた。其時は薄月夜であつた。心は快樂に傯れ切つて居た。

お光にはまた異つた記憶があつた。里に行く時の嬉しさ、歸る時の悲しさ、朝はいそ〳〵として行き、夕はボツ〳〵として歸つた。途中に陸軍の大尉に嫁いた學校友達の門構の家があつて、二階には新しい硝子戸がはまつて居る。或る日、其友達が立派な夫と盛裝して門から出て來るのに逢つたことがあつた。羨しいといふ情が燃えわたつた。學校に居る頃には、學問は自分よりずつと出來なかつたし、容貌だつてさう大して好い方ではなかつた。お光は其身の不運を悲んだ。此間默つて家を飛び出した時には、其門前で思はず涙を零した。

けれど今宵は二人とも嬉しかつた。何だか新しい戀が其間に生じたやうな氣がする。言葉は餘り交さなかつたが、心はヒタと合つた。

二人は戀人のやうにして歩いた。

月の明るい夜であつた。氷屋の店には客が一杯入つて、せつせと氷をかいて居る亭主の顔に、瓦斯の光が青白く照つた。米屋の前には小さい緣臺に夜目にも白く見えるほど白粉をつけた娘と若い男とが腰を懸けて何か話した、夏の夜は賑かで、ぞろ〲と人通りが絕えない。

一方汚い溝、一方富豪の高い石塀に月が射して、溝端の大きい楊樹の影の濃い鮮かな間を二人は樂しい心で通つた。

二人はもう其時のことを思ひ出す必要が無かつた。お光も莞爾と嬉しさうに笑つて見せた。勤にも何だかお光がいつものお光でないやうな氣がして、月を浴びた顏を美しく思つた。

それから貧しい人々の住む細い路を通つて、坂を登つて、舊大名の長い黑塀に添つて、冠木門やら建仁寺垣やら庭樹やらの多い屋敷町を向うの臺地に出る間の路――これは二人に取つて記憶の多い忘られぬ路であつた。春は曲り角に木連の花の咲く家があつた。廣い路の兩側に大きい八重櫻が咲き滿ちて、見事な花のトンネルが出來た、此方の臺地から、向うの臺地に出る低い處には、カンテラの光薄暗い場末の町があつて、日中通ると、角にいつも蒸籠やら鰹節のダシ殼やらを並べて干して置く汚い蕎麥屋があつた。梅雨の晴れた日などには、番傘が干しつらねてあつて、泥に汚れた醜い茶色の毛をした犬がごろ〲して居た。交番の巡査、剃身屋の婆さん、酒屋の肥つた莞爾した亭主、乾物屋の跛足の老爺、煙草屋ののつそりとした馬鹿のやうな息子、其隣が近頃俄かに店をひろげた雜貨店で、若主人が如才が無

杖だのを常に買つて讀んで居る。手帳と鉛筆とを手から離したことがない。勤とは合口で、顔を見るといつもすぐ俳句の話が出る。

今日も此頃の紛紜などは夢にも知らぬやうに、すぐ手帳を出して、最近に得た自作の俳句を勤に讀んで聞かせた。『何うも旨く出來ません、』の、『何だかぢき月並になつて了つて爲方が無い、』のと言つて、『何うでせう、これは？』と稍得意の句を鉛筆の尖で指して見せる。勤は俳句は作らぬが、其趣味は知つて居るので、遠慮なく批評して、

『これが一番好い』などゝ鉛筆を政次の手から取つて印をつけて見せた。

で、最後まで其話が一座に出なかつた。お光は歸る支度をした。勤は可也に醉つて赤い顔をして居た。

一緒につれ立つて、暇を告げると、母親がお光に、

『それぢやね、お前よく勤さんの言ふことを聞かんといかんぞな。』

勤に向つては、

『本當にまだ子供でしやうがなからうがな、それでも面倒見て遣つてな。………。』

『私も惡かつたんですから。』

と勤も笑ひながら氣輕に言つた。

二人は外に出た。

とお光は平氣で言つた。四五日里に遊びに來て居たといふ調子である。

母親は店から、

『此間、兄樣がわざ〳〵お出で下すつたにな、何もお構ひも出來んでな………失禮してな。』

『いゝえ。』

『まァ暑いぢやないかな、羽織でも脫りなさらんか。』

『勤さん樂にする方が好いよ。』と姉のお榮も傍から言つた。

さうかうする中に氷が出る。近所で名代の鮨が出る。夕飯の準備が出來る。ホイ〳〵と下にも置かぬ欵待振。――勤は變な不思議な奥齒に物の挿つたやうな心地がした。

御馳走になりながらも、勤は其話が今出るか出るかと思つて居た。けれど母親も姉もわざと避けたのか、一言もそれに觸れようとはしなかつた。いつもと同じやうな賑かな世間話、勤はビイルに醉つて、社からの途中いろ〳〵に思ひ惱んだ暗い心などはいつか全く忘れて了つて、常に似ず樂しげに話した。

其處へ仲兄の政次が役所から歸つて來て、座が愈々賑かになつた。

政次は某省の判任官で、此家の相續者、兄弟中での好男子、勉強時代に胃の重いのに罹つて、遣り懸けた私立の商業學校も中途で廢學し、四五年家で遊んで居たが、二三年前に今の役所に勤める身になつたのである。おとなしい深切な性質で、當年二十七歲、近頃新派の俳句に熱中して、ホトヽギスだの卯

しかし勤には平氣では居られなかつた。それは無論兄の言ふ如く、何うせ歸つて來るであらう。けれどかうした事實があつたといふことは、二人の間に永却消え去るべきものではないのだ。成程お光は無邪氣である、兄の眼からは子供である。けれど此事實を簡單に解釋して了ふのには勤には餘りに大きかつた。――兄の家に行つてめづらしい松魚の刺身、兄が手づから拵へたお得意の鳥の吸物、酢の物などを膳に並べて、したゝか御馳走になつても、いつものやうに快活にはなれなかつた。

十二

悶着は四五日續いた。兄が出懸けて行つての話では『一人で默つて出て來るなどゝは、お光が重々惡い。あんなものでもお詫をしたら許して下さるでせうか、……』と何處までも里の母親は下手に出た。けれど明日送り歸す送り歸すと言ひながら、容易にそれを實行しなかつた。

勤は五日目に自から里を訪ねた。社の歸途に寄つたのである。かう決心するに就いては少なからぬ侮辱を感じたが、それ以上にかれにはお光が必要であつた。他人に任せて置けぬといふ氣があつた。

里の母親は例の莞爾した顏で婿を迎へた。姉も笑つて居た。お光は二階に居たが、勤が來たといふのを聞いて、慌てゝ階段を下りて來た。矢張莞爾して居た。あんなことがあつたとは何うしても思はれない。

『今日歸らうと思つて居たのよ。』

『何だ、雨戸も明けないで熱いぢやないか、』とガラ〳〵と前の戸を繰る。
話を聞き終つて、『なあに、そんなに心配せんでも好い、懐妊してる時といふものは、ぢきそんな氣になるもんだ……。けれどお前もやかましく言つちやいかんよ。まだ子供だから。』
勤の點頭くのを見て、
『お光はそれに一體小さなことでも何でもすぐ本氣にする方だから……里から歸つて來た時などに、そんなに小言を言つてはいかんよ。あれで里に行くのがどんなに樂みなんだか知れやしないんだから。』
勤が善後策を相談すると、『待て待て己に任せて置きなさい。お光もひよつとするとそんな氣で行つたんでもないかも知れない。もう歸つて來るかも知れない。』
『そんなことは無い。』
『まァ、待つておいで、大丈夫だから。』
と兄はひとりで手輕に引受ける。人一倍經驗に富んだ身から見ると、こんな事は何でもなかつた。新婚當座には、かういふ話は得て難かしくなるものだが、お光は懐妊して居る、確かなものだと多寡を括つて居る。それに此方にもいくらかは文句がある、少し成行を見ようといふ腹もあつた。
『丁度好い、今日肴屋が好い松魚を持つて來たから、一杯相手をして呉れ。』
と元氣な調子で兄は歸る。

いやね。』

勤は調子の輕薄なのに腹を立てゝ、鍵を貰つてすぐ歸つた。家に上るには上つたが、裏の戸を明けた限で、座敷に仰向に倒れて了つた。體がぶる〳〵と慄へて來た。『馬鹿！　馬鹿！』と罵つたが、誰を罵つたのか解らなかつた。

一番胸に應へたのは、自分がこれほどに妻に了解されて居らぬかといふ事であつた。一時の感情に任せての仕打と眞面目な夫妻の關係とが解らぬとは實に情ない。これで夫婦！　新しい親！　と思ふと、神經がプリ〳〵した。

種々の妄想も盛に起つた。男の一分が立たぬやうな忿怒も出れば、『勝手にしろ離縁なり何なりしてやる、』と口へ出して言つても見た。けれど勤は平生からいふことを常に恐れて居たのである。男女の關係、夫婦の關係には際立つて重きを置く方の性質で、世の中が『離縁』其物に對して、一種の淡い解釋をして居るのを不眞面目のやうに思つて居た。夫婦は努力すべきもの互に弱點を扶け合つて行くものといふ自信を持つて居た。けれどかれは熱烈なる實行者よりも疲れたる理想追求者であつた。――

『離縁！　離縁！　あれほどにして貰つた妻を離縁！　何の顔を以て西や田邊に………早川に對しても濟まん、』と心に叫んだ。

氣が附くと兄が心配して遣つて來て、

ソッと自分の寢具を蚊帳の中へ入れて寢た。泣じやくりはまだ止まぬ。
翌朝、お光は眼を泣腫して居た。
其日勤は社から例刻に歸つて來ると、驚いたことには、家の戸がぴつしやり閉つて、夏の暑い夕日が雨戸に照つて居る。それが遠くから見える。
勤は胸を躍らした。
上り口の戸には錠が下りて居た。
取敢へず下の家へ行つて聞くと、嫂のお三輪は平氣な顏で、午後にお光さんが來て、ちよつと用が出來たから里に行つて來るつて鍵を預けて行つたといふ。
勤の顏の蒼いのを見て、お三輪は、
『何うかしたのかね?』
勤の身にしては、餘り話したくはなかつたが、止むを得ず昨夜のことを手短に言ふと、『さうかね、ちつとも知らなかッたがね、お光さんもいつもの通り莞爾して居たから、………』と勤の顏を見て、『そんなことはないんでせう。何か用が出來て、急に行つたんだらうがね。』
『いや――。』
『思ひ當ることがあるのかね………。餘り交情が好過ぎるから、ちつとはさういふことがあつても好

勤が押入を明けて、寢具を出し始める氣勢がすると、それでもお光は立つて來て、丁度敷き懸けた蒲團を手傳はうとした。勤は突然、

『構はんで置け。己がする。貴樣のやうな奴にして貰はなくても好い！』

とグッと引奪つた。

ワッとお光は又高く泣いた。

『泣きさへすりや好いと思つてやがる。馬鹿！』と罵つたが、其儘手ばしこく自分の床だけ敷いて、寢卷も着更へずに寢て了つた。お光は蒲團の傍に蹲踞つて、漸く收つた歔欷をまた新たにした。簞笥の前に行つても猶久しく泣いて居た。

『喧しい！　子供のやうに何時まで泣いてゐやがるんだ。』

と勤は腹の中ではそんなに強く言はうと思はなかつたが、ついかう言つて呶鳴つた。『早く蚊帳を釣れ、蚊に食はれて爲方がありはせん！』

お光は默つて矢張歔欷げて居た。

『貴樣のやうな奴に賴まん。』

と勤はがばとはね起きて、けたゝましい音をさせて、蚊帳を釣り始めた。蚊帳の金具の音がチャラ〳〵鳴る。お光は流石に見兼ねて、蚊帳の一方を引張つて、室の隅の長い釣手に結び附けた。少時してから

夫の小言が懐姙して過敏になつて居る神經を一層强く刺戟した。――お光はぬぎかへた晴衣を疊みながら泣出した。

これが更に勤の氣を惡くした。

『わたしがこんなになつたのに………わざと無理を言つていぢめるんだから。………』

とお光は愈々泣く。

『いぢめるも何も、………妻が夫の世話をするのが當り前ぢやないか。』

『たんと……おいぢめなさい！』

と丁度子供ででもあるかのやうに、疊み懸けた晴衣の手を留めて、オイ〳〵と歔欷げる………。

泣く度に丸髷が動いた。

勤は默つて了つた。洋燈を點けて、戸棚をがたびしさせて、自分で自分の膳を出して、鰹節を自暴にかいて、水のやうな湯を懸けて夕飯を濟ました。お光は餘程悲しかつたと見えて、矢張泣いてゐる……歔欷げるのが止まぬ。

其夜は裁縫をしながらも、お光はをり〳〵鼻を啜つて手巾で眼を拭つた。十時過ぎに咽喉が乾いて、水飲みに勤が臺所に行つた時にも、矢張低頭いて低く刻むやうに歔欷げて居る。こんなことは今迄に曾てなかつた。お光は泣いたり怒つたりすることがあつても、ぢき機嫌の直るのが常であつたのである。

有田燒の女夫茶碗で、二人は向ひ合つて、睦しく食事を爲たものであるが、段々お取膳などは珍しくなくなつて――いや衝突した時などは都合が惡いので、ある時その女夫茶碗の一つをお光が粗相で壞したのを幸ひ、勤は春慶塗の廉いのを買はせて、全く膳立を別にした。

『茶碗が壞れて御膳が別になりましたね。』

と其時お光は淋しく笑つた。

ある時、お光は里から日が暮れてから歸つて來た。すると勤は甚しい不機嫌で、常になく烈しい小言を言つた。また里に行つて夫の告口をして來たといふ腹が勤にはあつた。結婚の當時、母親が素直にお光を與れなかつたといふこと、それを別に腹に持つて居る譯でもないが、喜んで婿にしたのと澁々ながら與れたのとでは感情上非常な相違があることは免れ得ない。勤は里の母親に對していくらか反感を持つて居る。それにお光が母親をのみ便りにし、母親がお光をのみ力にして居るのを見ると、何だか自分が疎外されたやうな厭な心地がする。お光が自分のお光でないやうに思はれる。それも自分一人日が暮れて洋燈もつけぬ蚊の多い闇の中に置かれるやうなことが無く、一日厭な他人の中で氣苦勞をして働いて來て、腹を空かせて居なければならぬやうな目に出會さなかつたなら、そんなにくしやくしやもしなかつたかも知れないが――。

お光は其日は何うしてか殊に母親に別れるのがつらいので、つい歸りが遲れたのである。從つて此の

満足し母親も滿足し親類も滿足するやうな夫を持つて、無意味に氣樂に生活して行く方が結局幸福である。また自分にしても、かういふ無意味な平凡な生活は堪へ得らるゝ處でない……とかう幾度も思つた。けれどももう今は駄目だ。自分と妻との間には相對の關係ばかりではなく、新しいものが出來た。

思つて居たこと、考へて居たこと、計畫して居たことが總て無駄になつて、自由といふものが重綱の中に束縛され牽制されて了つて、自分の身でも自分の身が何うにも彼うにもならなくなつたやうに思はれる。勿論勤のことだから、これをいろ〳〵に誇張して考へるので、普通の人なら何でもないことをも深く氣にする。神經がいつも苛苛する。妻が蒼い顏をして眼に立ち始めた腹を抱へて、不機嫌な樣子をして居るのを見ると、一方では可哀相だといふ同情も起るが、それよりも先づ不快な念が第一に起つて、嘔氣を催したり、青梅を食つたり、生米や鰹節を嚙つたりするのが厭で無氣味で爲方が無い。で、をりをり夫婦喧嘩が持上つた。

勿論喧嘩と謂つても暗鬪が多い。勤は神經家ではあるが、自己の感情を自己で押へて了ふ方の性質だし、お光は無意識に夫に從つて居る方であるから、それが火花を散らすやうなことは殆ど無い。けれどぶす〳〵と燃えもせず消えもせずに燻つて居るのは、稻妻のやうにぴかッと光るのよりも一倍つらかつた。いとゞ難かしい顏を一層難かしくして、言葉を懸けても返事も爲ない。感情が衝突したとなると、一日口を利かずに居ることなどは幾度もある。つい近頃までは、細君の持つて來た大きい膳に、お揃ひの

洋雜誌の飜譯をさせられるのも、大家の訪問を遣らせられるのも、皆な自分の技倆を試めす爲めとのみ取られた。机に縋つて居るのが大儀で、何だか人々の視線が自分の一身に集つて居るやうで、自分の歩き方笑ひ方乃至顏のつくりまで氣に懸る。そんなことを誰が思つて居るものかと時には自分の臆病を笑ふこともあるし、また時には例に似ず人々の仲に入つてはしやいで饒舌つて見ることもあるが、それが何の反響も起さぬと分ると、忽ちしよげて、そして一層神經過敏になる。勤は長い丸の内の壕端の柳の下を、毎日毎日社をやめることをのみ考へながら歩いた。

新婚當座はそれでも若い細君が樂みであつた。四疊半にひとりで空想に耽つて居るよりも、色の白い顏や赤い手絡や黃八丈の羽織がなつかしかつた。社の門を出ると、ほつと長嘆息をついて、これで先づ細君の顏が見られると思つたもので、横しぶきの雨にびしよ濡に濡れながらも、若い細君のことを考へながら歩いた。一年の間總てかれの不平不安不健全不滿に對する唯一の慰藉は、若い細君の愛情と慾情であつた。——けれど今はもう倦んで了つた。勞れて了つた。光彩を失つて了つた、匂ひが無くなつて了つた。

『斷然退社する。侮辱！　侮辱！』

と激昂して叫ぶことがあるが、『それぢや何うして食ふ？』といふ問題にすぐ逢着する。妻が懷姙しない前には、幾度も今までの豚小舍のやうな生活を破壞して、妻を離緣して新規蒔直しを爲ようと思つた。妻にしても自分のやうな男にくつ附いて居るよりも、もつと好い相手がある。軍人なり官吏なり其身も

三の友達が來て、例のお光には解らぬ話をして長坐をして行くばかり。下の家では相變らず賑かで、夜など近所の細君やら後家さんやらが來て、主人も一緒になつて戲談を言ひ合つて居る。お孝の子は餘り可愛くなつて手離せぬやうになつてからでは事が面倒だと云ふので、熱心に人に頼んで搜して貰つて、漸く里親になる人を見附けて、三十二日目に其處に遣る準備をして居た。

お光が行つて見ると、若い母親は可愛い赤兒を抱いて、ほろ〳〵涙をこぼして居た。傍には襁褓やら小い着物やらを包んだ風呂敷が置いてあつた。『かうして手離すのが悲しい、嫂さんなどは自分で可愛がつて育てられるんだから好いけれど……』と言ひさして泣いた。やがて俥が來た。

十一

勤は此頃總てのことに不平で不安で不健全であつた。所謂過渡期で、今迄の思想に黴が生えて、文を書いても、在來の調子で唯形式的に空なことを並べて居るばかり、讀返して見ると同じことが到る處に繰返されてある。他人の傑作が氣になつたり、文壇の形勢が癪に觸つたり、詰らぬ事に瞋恚を燃やして、ある時などは何だか人が寄つてたかつて自分を撲滅しようとしてるかのやうに思ふ。無意味に言つた人の言葉も谺のやうにすぐ頭に反響する。殊に社の編輯に居る間はそれが甚しかつた。机を並べた人々が、皆なかれの敵で、呪手で、自分の一擧一動に詳しく注意して居て、油斷も隙も無いやうに思はれる。西

で、蓋を明けるさへ苦勞な位であつたが、姙娠してから、不思議にもそれが以前ほど臭く厭でなくなつた。糠のついた生米の臭ひが非常に好きになつて、米櫃からこつそり茶碗に一杯出して來ては嚙つた。火鉢の傍に置いたのを夫に見附けられて、

『何うしたんだえお前、此頃生米などを嚙るのか、』と言はれたこともある。

それから鰹節をよく嚙つた。土佐節の固いのは高くもあり、嚙るにも不便なので、和かな廉い龜の子節をわざ／＼買つて來て置いた。例の青梅は元より言ふまでもない、八百屋の御用聞が厭に笑ふのにもかまはず、ちよい／＼持つて來て貰つては、臺所の隅、裏の縁側の角などに行つて、顏をしかめながらポリ／＼食つて居る。

それから路を歩くと、物を煮燒する臭がはつきりと鼻に來て、彼處の家では何を煮て午飯のお菜にして居るかなどゝいふことが著るしく解つた。里の家に驅込みながら『母さん、今日甘藷を煮て居てね？』などゝ言ひ中てゝ母親を驚かした。

非常に鬱ぐかと思ふと、またある時は人が變つたかと思ふ位にはしやぐ。月の戌の日に、お孝のを取揚げた同じ産婆が來て、初めてだと謂ふので、里の母親がわざ／＼持つて來た紅白の腹帶を緊めた。神棚には珍らしく燈明が上げられて、勤は里の母親を相手に三四杯酒を飲んだ。

梅雨はいつか晴れて、暑いキラ／＼する夏は來た。別に變ることも無かつた。日曜日には、親しい二

氣が附くと、かれは小さい果物屋の前を通つて居た。節おくれの赤い林檎が山のやうに積まれてあつた。此果物屋は若夫婦で、かれが家を持つた頃に丁度此處に店を出した。朝夕二人が懸命に働いて居るのを見る毎に、勤は自己の日毎の生活に比較して微笑して通つた。柿や蜜柑を買つて遣つたこともあつた。赤い手絡を懸けた丸髷の愛嬌のある上さんだつた。今はその上さんも懷姙してやつれて六月位の腹を抱へて居た。

十

お光のつわりはかなり重かつた。嗅覺が鋭敏になつて、何處へ行つても厭な臭ひがする。木のにほひ、塵埃のにほひ、書籍のにほひ、織物の色素のにほひ、殊に臺所が一番厭だつた。

勝手元へ行くと、何うしてか堪らぬ臭ひが鋭く鼻を衝く。さうかと謂つて、それが平生の惡い厭な臭ひとも違ふ。一種言ふに言はれぬ形容の出來ぬ臭氣で、それを嗅ぐと、すぐ胸がむかついて來る。けれど女の身で、臺所に入らずに居るわけにも行かぬ。始めはこれは不潔にして置くからだと思つて、一生懸命に綺麗に掃除して見たが矢張駄目だつた。お光は朝起るときから、勝手の流元で、よくげえ〳〵遣つて居た。

さうかと思ふと、臭くなくてはならぬやうなものがねつから臭くない。糠味噌桶などは平生は大嫌ひ

『それも考へて見たがね、何うせ一緒に置く譯には行かんから……それに孝も産がすめば京都に當分行くことにして居るから、好い處を見附けて里に遣らなけりやならんがね……それがまた好い處がないんだ。無闇な處へ遣つて、新聞にあるやうな鬼婆にでつくわしても大變だから。……』

二人はいつか屋敷町から場末の小さい町に出て居た。上からは落ちないが空は曇つて路は夥しく泥濘だ。荷馬車の馬がビチャビチャ遣て來て遠慮なく泥を擧げた。町家の店も今朝は何となく陰氣に灰色に見える。兄は泥濘に靴を爪立てるやうにして歩いた。

交番の前に來た時は、勤はもう一人だつた。いつも通ふ長い路、宅から社までは一里以上ある。腰辨の群はぞろぞろと其間を通る。勤は種々のことを考へながら歩いた。大學生、貞一、妻、妻の實家、社の編輯所……世はさまざま、嫂のやうな生活をして居るものもあれば、里の母親のやうな月日を送つて居るものもある。兄のやうにして居るものもあれば、早川君のやうにして居るものもある。ふと今朝產れた兒のことを考へた。弟の勇造とお孝との戀を思出した。あゝして世間を憚つて子を產むといふことが面白いやうでもあり可笑いやうでもあり悲しむべきやうでもあつた。宇都宮の士族町のある家の二階で、熱い呼吸を取りかはした二人のさまを想像した。生れた兒の將來をも思つて見た。戀の結果といふことが強く頭腦を打つた。戀の後に戀、結果の後に結果、無數の人間と無數の慾情とが層々累々として此の世の中に重り合つて居るやうな心地がしたと思ふと、すぐ佗しい暗い心になつた。

『兄さん、足が早いね。』
兄は振返つて見て笑つて、
『お前も今朝は早いぢやないか。』
『今日は校正日で少し忙しいから。』
並んでさつさと歩く。繕ひに繕ひをした膏薬張の靴の悪く光つたのが眼に附く。鳶色の毛の摩れ切れた洋服もみじめだ。
『それでも安産で好かつたね。』
『あゝ。』
『大變だつた。――』
『兎に角人の娘を預つてるんだから、心配さね。それに孝にしても他人の中で遠く親を離れてお産をするんだからな、もしものことでもあつては大變だと思つて一層心配したのさ、まあ好かつた。それに男だから。』
『勇造(弟)に知らして遣りましたか?』
『今、行きがけに電報を打つ。』
『喜ぶでせう!』と言つたが、『それで後は何うするつもりです?』

『お婆さん胞衣をかたして置いて下すつたかね？』

『えゝえゝ其處にちやんとして置きましたから、何時でもお跨ぎなさいよ。』

『それぢや跨がせて貰はうかな、』と、お三輪は立上る。不思議なことをすると思つてお光が見て居ると、縁側の隅に、土器に入れて痲で結んで熨斗をつけて置いた胞衣を、お三輪は可笑な恰好をして跨ぐ。他人の胞衣を跨ぐと懷姙するといふ傳說があるのであつた。

『これで子が產れゝやお婆さん、それやどんなお祝でもしますがね、』と面白さうにお三輪は笑つた。

『奧さんも、一人お拵へなさいよ。』

『思切つて拵へようかね、若いものに負けちや口惜しいからねえ、』と態とらしく產婆に笑ひ懸けた。

お光が歸つて見ると、夫と兄とは長火鉢の前でもう例の盡きない話をして居た。貞一は兎に角今日田舍に行つて見る筈であつた。二人は生れた兒を見て來ると言つて續いて出て行つたが、十分も經たぬ中に歸つて來た。朝飯の準備は出來て、味噌汁の强い香が鼻を衝いた。好きな納豆が小皿に盛つて出された。

『今日一日延ばし給へ、さうすれば僕も社を休んで何處かに一緒に行つて見よう、』と勤は言つたが、貞一は同意しなかつた。八時を打つと二人は一緒に家を出て、少し行くと其の角で別れた。

勤はいつもの淋しい心を一倍深く感じながらも、淡竹の大藪に添つた道を歩いて行くと、ふと前に洋服を着た兄の出勤姿が曲り角の處にちらりと見える。走るやうにして小學校の前でやつと追附いて、

起したが、それが寢惚けて了つて何うしても起きなくつて困つた。やつと出して遣つてまァ好いと思ふと、今度はいくら經つても歸つて來ない。此方では段々痛んで來る。氣が氣でない、内でも心配して、己が行つて來るつて出懸けて見ると、呆れるではないか、産婆さんでは、そんな使者（つかひ）は來ないといふ。あの田舍者奴が前にも行つたことのある家を忘れて、飛んでも無い方角に行つて寢惚眼で搜し廻つて居たので、それから一時間ほどして、『奥さん産婆さんの家が解らねえがね』ッて歸つて來た。其時はもうお婆さんがちやんと來て居て大笑ひだッた。

話を突然やめて、

『今度はお光さんの番だね！』

と仰々しく言ふ。

お光は笑つて居ると、

『此度は大丈夫、もう私がすつかり覺えて了つたからね、お婆さんなぞ來なくつても大丈夫ぢやわ、』

と言つて笑つて、『丸でね、お光さん、私がひき出して遣つたんだがね。』

『本當に奥さんのお手柄！』とお三輪と平生知合つて居る氣さくな産婆は、丁度其處に入つて來て面白さうに言つた。

お三輪は突然、

覗くやうに低い聲で言ふと、お孝は只點頭いて笑つた。

お三輪は平氣で『今でこそお光さん、かうして笑つて居られるけどね、其時ッたらそれは大變、私もお産婆さんも蒼くなつて了つてね、お孝さんの顔なんて見られやしなかつたがね。』

『まァ本當に結構でした！』

とお光は盥の傍に戻ると産婆は『おとなしい』とか『大きな子だ、』とか言ひながら、頻りに産衣を着せて居た。

やがて抱いて伴れて行つて、

『そら、御覽なさい、こんな好いお兒樣が生れました。』

と見せる。産婦は晴々した嬉しさうな顔をして笑つた。

で、其儘、産婦と並べて小さい蒲團に小さい枕、上に八丈の黄縞のねんねこを被けて寢かした。

茶の間に來ると話が始まる。

お三輪が例の面白い調子で手眞似をしながら、昨夜からの一伍一什を話す。八時頃から少しお腹が痛いッて言ふから、始つたかなと思つて居ると、十一時頃になつて嫂さん産れさうだから準備をして下さいといふ。お産と謂ふものは、さう容易く出來るものではない、障子の棧が見えなくなる位にならなければ産れやしないと言つて一寢入すると、ふと唸聲で眼を覺した。見ると一時、それからお雪（下女）を

と思はず聲を立てた。

生兒は初めて觸れた世の中の空氣を怕るゝものゝやうに手足を縮めて眼を閉ぢて丸くなつて居た。人間の子と謂ふよりも小さな肉の塊と謂つた方が適當であつた。年の頃三十五六の產婆が熟練した風で、盥の湯の中にそツと入れると、生兒は聲を立てゝ啼いた。

『おおよしよし、そら綺麗におなんなさいよ、』と言ひながら產婆は丁寧に其處此處と洗つてやつた。お光の後にお三輪も主人も來て見て居た。

生兒は頻りに啼く。

氣になると見えて、若い產婦は向ふむきに寢て居た顏を少し擡げて、

『大變泣きますのね。』

『大丈夫ですよ、心配しないでも、………今產湯を遣はせたものだから、それであんなに啼くんぢやがね。』とお三輪が其傍に行く。

若い產婦は笑つて見せた。

『それやまア、好い兒ぢやがね、今、見せて上げますから。』

其處に、お光が顏を出して、

『結構でしたね、お孝さん!』

いつもながら頓狂なお三輪の調子。

『聲を少し低くおし！』

と夫にたしなめられて、

『大丈夫ですよ。もう產れて了ひさへすりや、少し位聲を立てたつて、ねえ、お光さん。』

『產は後が大切だから………』

『大丈夫、大丈夫！』

と夫とも思はぬ。お三輪にしても、昨夜から徹宵の介抱、難かしいのを自分が生ませて遣つたといふ腹がある。

お光が襖を明けて座敷に入ると、丁度其時產婆が生れた兒に產湯を使はせようとする處であつた。傍には脫脂綿やら油紙やらオレーフル油やら金盥やらコップやらが戰場の跡と言つたやうに一面に散ばつて、新しい盥からは湯氣が薄く颺つて、其傍には桃色木綿の產衣が着せられるばかりにして展げて置いてある。產婦は疲れ切つたといふ風で、たばね髮を亂して向うむきになつて、大きい白い括枕を高くして寢て居た。

お光は逸早く盥の傍に行つたが、

『まア、可愛い。』

るのが恐ろしいやうな氣がする。唯女のみ知るといふやうな同情も出て、神經が昂つて呼吸がはずんだ。竈の燃えさしを引かうとして慌てゝ板の間に落して渦き上る煙にしたゝか咽んだ。やがて釜の下の熚を長火鉢に移して、水を新らしくした鐵瓶を懸けて、十能を猫板の上に置いた儘次の座敷へ行つて、ぐつすり寢込んで居る夫を搖起して、お孝さんのお產が始つたから行つて來ると言置いて、急いで下駄を突懸けて外に出た。

雨は止んで居たが、靄が茫と一面に屋敷町を籠めて居た。

氣にしながら、下の家の門前に來ると、突然赤兒の新しい啼聲が朝の靜かな空氣に震へて聞えた。

前の緣側から驅け込みながら、

『生れましたね。』

と茶の間の障子をがらり明けると、其處に居た主人が大きな聲を立てゝは產婦に觸ると言はぬばかりに笑ひながら手を舉げて制した。

『男?』

其返事も聞かぬ中に、座敷の襖が明いて、

『お光さん、そりや好い兒が出來ましたぜ………行つて御覽よ、そりや好い兒!………肥つた好い男の兒ぢやがね。』

がまだ消えぬので覗いて見ると、兄は蒲團の上に腹這になつて、熱心に新刊の雜誌を讀んで居た。

九

翌朝、お光が手拭を被つて、襷を懸けて、火箸を片手に吹加減になつた釜を見ながら、竈の前に蹲踞つて居ると、下の家の下女が一夜眠られず眠くつてたまらぬと言つたやうな生あくびをして遣つて來て、

『若奥さんのお産だよ、奥さん。』

『えゝ？』

『昨夜十一時頃から苦しみ出しただよ。』

『もう產れて？』

『まだ生れねえ。』

『お產婆さん來てるの？』

『夜、一時頃に迎へに行つて、やつと伴れて來たけれどもな。何うも難かしいお產でな！』

難かしいお產の一句がお光の胸につかへた。

『それぢやすぐ來て下されや。』と下女は歸つて行く。

お光は難しいお產の一句を繰返して見た。何となく胸が騷ぐ。すぐ行かうかと思つたが、苦しむを見

三人は西君に就いて猶話り合つた。其娘の死は戀と關係があつたか何うか？　西君の今度の養子問題は單に家庭の溫さを知り度いといふばかりであるか、何うか？　他に功名心を充たす爲めの誘惑もなかつたらうか何うかなどゝいふ疑問も出た。

室はいつもに似ず明るかつた。茶は幾度も淹れ易へられた。菓子鉢の餅菓子は殘り少なになつた。梅雨を稍肌寒く、引被けて着た黃八丈の派手な羽織は、お光の姿を若々しく娘らしく見せた。貞一は話の調子を輕く合せながら、をりをり煙管を出してトントンやる。

何かの機會で、勤が障子を明けたが、

『何だ！　まだ雨戶を閉めないのか！』

『さうでしたね、すつかり忘れて了つた。』

と言つてお光は緣側に出た。雨はザァと降つて居た。あたりはもうすつかり寢靜まつて、軒燈の其處此處に淋しく點いて居るのが見えるばかり……。

雨戶を閉めて、また一しきり話す。

十二時を聞いてから、お光は兄と夫の床を座敷に並べて敷いて、二分心の洋燈とマッチとを持つて行つて枕元に置いた。自分の床は茶の間の六疊に運んだ。

兄と夫は床の中に入つてからも久しく話合つて居たが、やがて夫の高い鼾が聞え出した。でも、洋燈

『肺で死んだんだらう。』

『さうか、それは可哀相だね。何でも親の無い、兄に懸つてる娘だつて聞いて居た。僕はその寫眞を見たことがあるよ。』

『君も見たか。』

『まア西さんに前にそんな方があつたんですか、』とお光は初めて其事を聞いて驚いたといふ調子である。

『別に何の事も無いのだけれど、』と勤はわざと笑つて、『死んだのは、何でも去年の三月頃だらう。布施あたりの姉さんの處か何かで死んだんだ。利根川を夜舟で其死骸を郷里に下して葬式をした相だが、實にロマンチックさね……昨年雜誌に出た先生の「利根のうれひ」といふのを君は知つてるだらう、あれがそれを歌つたんだ。』

『さうか、』と貞一が思當ると、

『まアねえ、可哀相に！……』とお光は其人のことを思つた。

しばし互に默つて居たが、

『今度のはその反動だね！』

とさも〳〵感じたやうに貞一は言つた。

『何故?』
『だッて何だか變ですもの。』
『ちつとも變なことはありやせん。』
『さうでせうか、それぢや今度いらしつたらさう言はう、』と少し途絶えて、『虎の門は何時御卒業なさるの?』
『まだ中々だらう。』
『それぢやまだ結婚するまでには、大分間があるんだね?』
今度は貞一が訊く。
『間があるともね、君。去年西君がちよい〱行き始める頃、まだほんの子供だからッてよく言つて居たさ。今ぢやもう大分馴れて、そんなことは無いだらうけれど、其頃は可笑しかつた相だ。先方ぢや薄薄知つてるだらう、けれど戀といふ氣はないから、餘程不思議なんだッて。話をしても何うもそれが餘程變なんだッて……。君、考へると、ロマンチックぢやないか。西君のやうな烈しい戀に憧れた人が、さういふ慕を打つといふのは餘程コントラストの妙があるね。』
『本當だね、』と貞一は言つたが、『國の方は何うしたねえ、もう終りをつけたと言つて居たが、一體何うしたんだ?』

『西君は詩を讀んで見ても話を聞いて見ても、何處か優しい捨て難い處があるねえ。「鳩の歌」と言ふのがあつたね、本當にあの通りだ、』と新體詩人らしいことを貞一は言つた。

『ピアノもお出來になるんだつて、兄さん、』とお光が突然傍から口を入れた。

『さうかえ。』

『西さんがいらつしやる時は、いつもピアノを彈いていらつしやることが多いんですつて……音樂學校に時々いらしつてね、ハイカラなんですつて。此間、あのお屋敷の前を通ると、ピアノの音がしてましたよ。』

『ふむ。』

と兄はうはの空の返事をする。

何うした加減か、お光はいつになく惡くはしやいで、

『貴方、寫眞を見たことも無くつて？』

『ない。』

『今度西さんいらしつたら、さう言つてお貰ひなさいな。』

『お前が言へば好い。』

『私が言つても好いでせうか。』

少し身體が弱かつたもんだから、先方でも心配してね、海岸などに療養に行つて居たが、其頃は西君の境遇は氣の毒だつた。今ぢやすつかり治つたので、先方でも安心して、もう約束は大抵きまつたんだらう。』

『何うも西君は體が弱いねえ。』

『君も身體は餘り丈夫な方ではないよ。大事にし給へ。』

『僕は大丈夫だ！』と貞一は笑つて體をゆすつて見せた。

『田邊君などは西君の養子問題は大不賛成なんだ。何も先生など養子に行かなくつても好い。あの位の秀才だから、大學を出さへすれば立派に獨立して行かれる。何も自からすき好んで、束縛の中に入らなくつても好い。それも細君になる人が非常に別嬪でラブでもしたとか何とか言ふならまだ好いけれど、……本當に西君の氣が知れないつて、口癖のやうに言ふけれどもね、西君は屹度「やさしい束縛」といふやうな處が欲しいんだと僕は思ふね。』

『さう。』

『自分でもいつかもさう言つて居た、君などは束縛を非常に嫌つてなんでも自由でなければならないやうに言ふけれど、「やさしい束縛」なら僕は喜んで受ける。さうした束縛が無くつては僕は淋しくつでたまらんと言つて居たよ。』

と傍に居たお光は笑ひながら聞いたが、勤はそれには返事をせずに、

『だから僕も少しは其時は言つたけれど、西君は自分で思ひ立つと、ぐんぐん一人で遣つて了ふ方だから。それに僕も先生の爲めにさうした方が或は幸福になるかも知れぬと思つたからね。』

『何ういふ關係でその家に出入するやうになつたんだね？』

『それは中々面白いさ。先の家ではね、君、西君が高等學校に居る時分から眼を附けて居たんださうだ。僕等が昔よく行つた戸澤先生の家ね、あの歌の會に、品の好いお婆さんが來たらう？　被布などを着た？　あれが西君の將來の細君になる人の祖母樣なんだ。先方ではあの頃から眼を着けて居たんだ。戸澤先生も中に入つたらしいよ。』

『さうかね。』

『昨年の夏だつた。突然僕の處に來て、その話をした。西君は平生家庭に非常に重きを置く人だが、其時もね、僕はもうラブなどはお終ひだ。好い家庭の快樂さへあればそれで滿足だと謂つてね。』

『好い家庭なのか知ら？』

『ごく好い家庭らしい。僕はまだ行つて見ないから知らんが、姉さんが二人あつて、それが皆な好い處にかたづいて、西君の細君になるのは、末の娘ださうだがね。まだ虎の門に通つてゐるさうだ。中々快活な娘さんだツて、知つてる人が話して居たよ、』と言葉を切つて、『昨年の秋だつたかしらん、先生、

『いやまだだがね、今度は卒業だから、少しは點も取つて置き度いと思つてね。……………それに、それが濟むと、またすぐ文官試驗だから、一二年は忙しくつて駄目だ。』

三人が三人とも自己の境遇を考へた。勤は平凡なる家庭と俗惡なる社の編輯所とを思出して、狹い四疊半で自由にのんきに色彩の濃い空想を食物にして居た時代と較べて居た。貞一は田舍の中學でストライキを起されて困つたことと、これから引籠らうとする田舍寺のことゝを思つた。唯大學生の胸のみ希望に輝き渡つた。

『田舍行を此處できめて了ひ給へ！　早川君。』

とかれは元氣よく貞一に言つたが、更に勤の方を見て『中村君、一つ早川君の寺行の爲めに祝杯を擧げようぢやないか。』

で三人は杯を合せた。

其夜貞一は泊つた。

八疊の一間はめづらしく洋燈に照り輝いて居た。もう十時を過ぎて久しく經つが、お光の笑聲がをりをり聞えた。

勤は貞一に大學生の話をした。

『何故養子になどいらつしやる氣になつたんでせうねえ？』

『それは、君達のやうな友達が居るから悪いんだ！』と笑つて、『けれど、お互ひにもう夢は覺めた。現に此處に居る三人の上で見ても解るぢやないか。あの戀愛神聖論者の中村君はもう父にならうとしてるし、早川君は田舍寺に行かうといふやうなことを考へて居るし、僕にしても御存知の通り………』と言つたが、不圖、あることを思ひ出して、『此頃田邊は何うした！』

『此間ちよつと來た。』

『何うしてるね？』

『好い鹽梅に新聞社に口があつて出るやうになつた。』

『何新聞？』

『報知の外交記者ださうだ。忙しくつて困るだらうと云つたら、なあにちつとも忙しくないッて、社の俥を待たせて、一日遊んで行つたよ。矢張君と同じやうなことを言つて居たよ。』

『さうか、何んなこと？』

『二三年前のことを考へると、實に隔世の感があるッて言つて居た。昔の手紙など出して讀んで見た………。君が田舍から寄越した、「野の道」といふことなども話したよ。』

『一度逢ひたいと思つて居るけれど、僕も此頃は忙しくつてね。………』

『さうだね、試驗だね、もう始まつたのかね？』

大學生は笑ひながら、『一體早川君はさういふ風に出來てるよ。袖を氣にして歩いて居る具合など何うしても和尚さんだ！』

『本當に左樣だねえ、』と勤も言ふと、

『大學林に居た頃の癖が何うしても拔けないと見える。………』

と莞爾として貞一は杯を干した。

『僕にしても、もう、』と大學生は愈々調子に乘つて、『もうそんなことを考へて居られない。甘かつた醉が苦い痛恨の追懷になつて了つた今は到底昔の境に歸ることは出來ないぢやないか、君。あれほど努力し、あれほど苦悶したのは君達も知つて居る。それに結果は？　と言ふと、あの有樣ぢやないか。』とビイルを呷つて『僕はもう詩などに滿足して居られない。これから實際社會に入るんだ。戰ふだけは戰ふのだ。現に、僕はもう態度を改めた！』

『詩をやめなくつても好いぢやないか。』

『それは、君などはやめなくつても好いさ。君などはそれが目的なんだから………。けれど僕は文學が目的ではない、僕の詩はディレッタンチズムだつた。もう僕は覺めた。戀歌を作つたッて何になる！その暇があるなら農政學を一頁でも讀む方が好い。』

『さういふことを言つて、實は詩を離れることが出來んのだから面白い。』

學教師としての成功を期し難い。いや總て實際的の事務には其性質が不適當である。貞一が學校を出て東京に遊んで居る頃、かれは貞一の職業に就いて、いろ〳〵心配して遣つたことがあるので、其間の消息には寧ろ勤よりもよく通じて居た。

『何も君、詩を作るばかりが人間の務めではないさ。詩だとか小說だとか言ふことは何でも無い。實際の人々はそんなことを眼中に置いて居はしない。文學の存在などを知つてゐるものは普通の民の萬分の一、それよりも少い。だから僕は中村君などと、いつも此の議論をするけれど……詩人とか小說家とかしてよりも、先づ「人間」といふことを眼中に置いて貰ひ度い。つまり我々は「人間」になり度い、眞の人間になり度い。今までの空想を脫するといふのは、その意味で言ふのだ。だから、僕に言はせると、中村君なども一人で四疊半で文を書いて居るよりも、如何に實際の事務はつまらなくても、無意味でも、かうして家も持ち、細君も持ち、社に勤めて居る方が好い。そのことが一つの事業だと僕は思ふ。』と大學生は例の調子に段々と乘つて來て、『つまり空想に耽つて、實際を輕く見てるのが惡いんだ。我々はまだ夢を見てる。それはいつまでも夢を見て居たい。夢を見て居る方が美しいからねえ……。けれど僕にはもうそれは出來ない。だから早川君が田舍寺行は僕は贊成する。潔く頭を丸めて方丈さんになるさ！』

勤も貞一も皆な笑つた。

階に居た。其町は海が近かつた。大學生はレクラム版のハイネの詩集を得意になつて二人に讀んで聞かせた。それは丁度仲秋の前二日、月が雲間からほの見える夜であつた。三人は町の料理店の二階で、白粉を塗つた汚い女を相手に酒を飲んだ。興に任せて、新體詩や萬葉の古歌を朗吟した。歸る時、大學生が醉つて、編上げの靴の紐が結べずに困つて居るのを、其女が『何てまァ、難かしい厄介な靴やな、』と言つて、肩に手を懸けさせて結んで呉れた。其時から思ふと、時も人も思想も變つた。

『もうラブでも無いよ、ねえ、中村君。』

と大學生は笑つた。

『でも、國のは何うしました。』

『あれはもう終を告げたさ、君、』と辭退したビイルを取上げて一口飲んで、『僕等は、もう眞面目にならなきやならんよ。いつまで空想に甘んじて居ることは出來んからねえ。』

『それは本當だ――けれどあれほどにしたのに……』と貞一が猶言はうとするのを、

『まァ其話は跡で僕が話すよ』

と勤は傍から遮つた。

一しきり豚肉をつゝいたり、酒を飲んだりして居た。田舍寺の話も出た。大學生の考では、貞一の田舍寺行は贊成であつた。かれは貞一の弱い性質と體格とを知つて居た。飽迄詩人肌の貞一には、到底中

『まア、そんなこと言はずに飲み給へ。もうかうして三人都合よく逢ふといふことは滅多にはありはせんよ。久し振りで醉つて君の新體詩を歌ふのでも聞かして貰ふさ、』と勤は元氣よく笑つて、『お光！ビイルがあつたね！』と大きな聲を立てる。

やがてお光の持つて來たビイルの栓を拔いて、澤山だと謂ふのを、コツプを押しつけるやうにして强ひて注ぐ。

しばらくして、貞一が、

『君は飲んだらう？』

『いや――此頃はやめてる！』と押附けられたコツプを傍に置く。

八

『何うしました、君の話は？』

『僕の話ッて、何？』

と大學生は態としらばくれると、其一伍一什を詳しく知つて居る勤は、大學生と貞一とを見くらべて笑を含んだ。

二年ほど前三人は貞一の教へて居る其田舍町を歩いたことがあつた。貞一は町の通の角の下駄屋の二

『もう洋燈を持つてお出でな。』

と夫に言はれて、

『えゝ唯今、』と立つて行くのを勤は追懸けて、

『この他に何か御馳走があるんだらうね。』

『えゝ。』

と振返つて、夫の顔を見て、お光は次の間に出て行つて了ふ。

竹筒臺の置洋燈が大學生と貞一との間に置かれた頃には、もう豚肉は大抵煮えて居た。外では雨が矢張音もなくしよぼ〳〵と降つて居る。

茶湯臺には赤い刺身が大きな皿のまゝに載せられて、椀にはお光の手製の拙い玉子の吸物が出來た。燗のついた徳利を勤が取つて先づ貞一に酌いで、次に大學生に向けると、

『僕は酒は飲まん。』

『少しは飲むぢやないか。』

『いや廢す！』

『それぢやビィルにしようか。』

『いや、澤山だ。』

居て、
『やあ！』
『やあ、君丁度よかつた。早川君が來て居てね。』
『早川君？』
丈の高い色の白い姿は稍薄暗くなつた夕暮の室に浮き出すやうに明かに見えた。貞一は手を擧げて座をひろげて、矢張嬉しさうな顏をして、この新來の客を迎へた。
挨拶やら何やらがしばし續いた。
ふと豚肉が燒附きさうになつたので、勤は慌てゝ蓋を取つて、丼の葱を無造作に其中に投り込んだ。白い煙がぱッと颺る。
『相變らず遣つてるね。』
と大學生が笑ひながら言ふと、
『もう君にや豚の御馳走でもなからうねえ、』と勤は皮肉をいふ。
『何ァに、さうでもないさ！　豚は暫く食はんからねえ！』
其處にお光は出雲燒の手焙を持つて來て、大學生がまだ座蒲團も敷いて居ないのを見て、簞笥の傍に重ねて置いてあるのを一枚取つて勸める。何となく莞爾して居る。

莚を敷いて七輪に火の活々と起つたのを置いて、葱やら燒豆腐やら糸蒟蒻やらを入れた丼を茶湯臺の上に載せた。勤はいつものやうに竹の皮から豚肉を燒けた鍋に移した。ジージと脂の音がした。

『久し振だね、かうして食ふのも。』

『本當だね……東京だと、かういふ好い肉が食へるから好いけれど……田舍ぢや君も知つてる通りだからね。』

と貞一は卷煙草に火を點けた。

勤は鍋の蓋を幾度も明けて肉の煮加減を見た。かれ等の群は、勤の『この豚の煮よう』に熟して居る。蓋を取つて事々しく加減を見る態度はかれ等の群の話の材料にまでなつて居る。貞一は其時分のことを思出した。

表に人が來た氣勢がした。誰かと思つて勤が耳を澄まして居ると、お光がばた〳〵と嬉しさうな晴々しい顏をして入つて來て、

『西さん』

と莞爾する。西さんはかの大學生である。

『西君？』

と勤も喜ばしさうに言つたが、すぐ立上つて玄關に行かうとすると、大學生はもう其處に入つて來て

深い意味を抱いて生活して居るものだと思つて居た。いや、さうなくてはならぬものだと信じて居た。勤は世の中に出た。其思想は實際に觸れて忽ち氷の如く釋け去つた。

日毎に出勤する社は如何？　社に居る人々は如何？　妻は如何？　里の母親は如何？　下の家の兄は如何？　嫂は如何？　否々かうして平凡に月日を空しく過せる自己は如何？

金がありさへすれば先づ好い。餓ゑさへしなければ兎に角安心だ。この『兎に角安心』が非常に勢力があるものであるといふことを勤は此の一年の間に痛切に學んだ。この『兎に角安心』で人は皆な生きて居る！

勤は其時分のことを考へた。其身も何方かと言へば、ルウヂン黨であつた。斃れるまで戰はうと固く思つて居た。大學生の感情的の高い熱烈な調子がかれの血を湧かした。けれど今は戰ふといふ意味が其時と餘程異つて居た。

『實際、君、我々はもう世の中の巴渦に入つたんだね。』

と染々感じたやうに勤が言つた。

『本當にさうだ！』

と貞一も嘆じた。

其處に、お光は夕飯の準備を揃へて運んで來た。

貞一は悠々とした調子で續いて田舍寺の話をした。今は荒れて居るが、昔は其附近の小本山で、御朱印が二十石もあつて主僧は駕籠でお先拂が附いた。今も其駕籠が高い天井に塵埃になつて吊されてある。寺のある町は青縞の產地で、機織娘に美しいのが多い。君の小說のヒロインになるやうなのはいくらもある。それに利根川が近い。半里とは無い位だから散步には持つて來いである。本堂と庫裡との間には長い廊下が通じて、中庭が立派に出來て居る。室の數は二階まで合せると十以上もある。幾人厄介物が來て居ても、大丈夫だ。

『君、我黨にも隱れ家が一つ位あつても好いよ。』

と貞一は笑ひながら言つた。

一二年前連中が集つた時、ツルゲネフの『ルウヂン』の話が出て、レジネフがルウヂンに向つて言つた『敗兵にも隱れ家が必要だ』といふ言葉に就いて、大に激して語り合つたことがあつた。戰鬪者には『隱れ家』などは必要がないといふ說と、敗れた者は一度靜かに其創痍を養ふ爲めの『隱れ家』が必要だといふ說と二つに別れて盛に氣焰を揚げた。大學生は敗北せば寧ろルウヂンたらんと言つた。貞一はレジネフに同情を持つて居た。

其時から思ふと、考へが非常に變つて居るのを勤は明かに感じた。纔かに一二年！　かうも變るものかと思つた。其時分は渠には理想なくして世を渡ることは不可能であつた。如何なる人も皆な眞面目に

壇に密接に觸れて戰鬪を續けて行き得ればそれに越したことはないけれど、策略で成立つて居る文壇には僕のやうなものはとても容れられないよ。僕は寺に引込んで詩を書かうと思つて居るんだがね、何うだらう？　いかんか知らん。』

貞一は里の家の二階に居る頃、卒業しても口が無いので、父母に責められて、心にも無い原稿を書いた。それが金になつたりならなかつたりする。なれば無論苦情はないが、ならない時は痛いつらい皮肉やら罵詈をしたゝか家の人から浴せ懸けられた。勤はそれを知つて居た。

『僕は詩の方だからね、君。………』

と貞一は勤の顏を見る。

勤は默つて居る。

『小說の方だとそれは出來んけども………。觀察も要るしね、戰鬪もしなければならんけれど………。詩は田舍に引込んで了つても十分出來ると思ふがね。バアンスでもワアズワアスでも皆なさうだからねえ。』

勤の身にしては力にした友をさうした田舍に遣るのが惜しい。折角學んだ學問が惜しい。今迄に築き上げたかれの文壇の名が惜しい。かれ等の群の主張から言つても、空しくかれを田舍寺に引込ませて了ふのが心外だ。

原稿を翻へして見て居た貞一が、初の處を少し讀まうとすると、勤は引奪くるやうにそれを取つて、

『まァよし給へ、今に皆な出來てから見て呉れ給へ。』

貞一の田舍寺行き相談がやがて持出された。

勤は考へながら、

『さういふ處に身を落着けて了ふのもかへつて心に餘裕が出來て好いかも知れない。けれど君、田舍といふ處は恐ろしい所だよ。田舍は底の知れない泥深い沼のやうなもんだからねえ。まご〳〵すると埋つて出られなくなる！』

『僕もそれは考へるんだがね。』

『大に考へなけりやいけない。』

『けれど一方から言ふと、それは其人の心懸にも由ることだと思ふねえ、君。田舍の中學校の教師をして居たつて矢張同じことだもの。英語の初歩を毎日同じやうにして卷きかへしくりかへし敎へて居たつて、埋れることは矢張埋れる。』

勤が輕く點頭くのを見て、

『それよりは、僕は此際斷然田舍に引込んで了つた方が好いかと思つて居るがね。僕は身體は弱いしね、筆は立たんしね、それに、原稿を賣つて生活するのは、もう懲々だからね、』と言つて、『それは文

『見せ給へ。』

勤は抽斗に藏つて置いた三十枚許りの原稿を出して示した。

いつもかうして互ひに好く見せ合つたものである。貞一の新體詩の朗吟を勤が熱心に聞けば、勤の作品を忠實に貞一は批評した。若い群の心はバイロンやワアズワアスを透して、新しい藝術に對する限りない憧憬の情となつたのである。けれどかれ等とていつまでも青年ではなかつた。

貞一が田舍に行く時、彼等の群は五六人集つて、記念にとて寫眞を撮つた。友の世の中に出て行くのを見るにつけても、もういつまでも美しい夢を見ては居られないといふ考へは誰の胸にもあつた。群の中の一人は既に細君を持つて居た。一人は女のにがい失戀の味を甞めて、深い懊惱の淵に沈んで居た。眉の昻つたあの大學生は、其時『われも戰鬪者たり』といふハイネの文句を引いて、『かれの如き情の詩人すら猶且つ此言を爲して居る、我々も最早今までのやうにしては居られない、』と激語した。

其寫眞は小さい框に入れられて今も床柱に懸けられてある。若い血は皆な其の群の眉宇に漲つて、敗るゝまでは戰はうとする氣が其態度に充ち渡つて見えた。

勤は赤手にして世に出た。初めて獨り一家の主となつた夜は殆ど眠られなかつた。一月の借家賃すら得らるゝか否かゞ疑問であつた。釜、擂鉢、鍋、米櫃などを買ふには買つても、それが果していつまでかうして生活して居られるか自分にも解らなかつた。愚圖々々すれば、饑がすぐ其前に迫つて來た。

で、多い編輯員から『仙人』とか『聖人』とかの諢名を授けられて居た。店の小僧からは『厭世家、厭世家』と呼ばれて居た。

かれとて無論相應の力を持つて居る。使へば使へる人間である。けれど自己が勢力の中心にならなければ動かないといふ癖がある。で、默つてむッつりして居るか、強ひて笑を粧つて居るか何方かしてゐる。それに自分は『これでも聞えた作家』だといふ氣がある。普通の雜誌記者の群とは違ふといふ矜持もある。

『これも皆家庭の爲だ！』と思つて、いつもそれを抑へて居た。

『青年時代の煩悶は要するに夢のやうなものだね、君。青年時代の煩悶には、まだいくらも餘裕がある。突當つて居ない。けれど家庭を造つて世の中に出てからは、青年時代のやうな空想や煩悶に耽つては居られない。』と友の顔を見て、『僕は此頃其問題についてしみ〴〵感じた。今、それを書き懸けて居るんだがね。』

『それは好い！　僕も同感だ！　實際人生は空想ぢやない。』

と貞一は深く感じた處があるものゝ如く、

『もう書いたのかね、君。』

『半分ばかり書いた――』

『駄目だよ、君、我々の理想で考へて居るやうなことは何處に行つたツてありやしない。』

『それはさうだらうとも！』と言つて、『でも此頃ぢやもう馴れたらう？』

『馴れたは馴れたけれど、何うせ我々は雜誌記者ではないから、駄目だよ。パンの爲めに遣つてるんだから。……』

『それはさうだね。』

と貞一は自分にも經驗があるので、同情した。

『杉山君は相變らず盛んかね。』

『盛に活動して居るよ。見て居ても氣持が好さゝうだ。けれど僕にはあの眞似は出來ない。氣の毒だと思つた原稿でも何でも遠慮なしにはねつけるからね。僕には氣が弱くつて、とてもあの眞似は出來ない……………。それにあゝした策略を用ゆるのは厭だ。』

『けれど杉山君が居るのは君の爲めには好いだらう？』

『うむ。………』

と、勤は言つたが、餘り『うむ』でもなかつた。

今日も杉山が自分を冷かして、『仙人は困る、雜誌記者になつたら、もう仙人は止し給へ、』などと言つた。勤は人見知をするので、態度がおのづから臆病になつて、終日編輯室の机にへたばり附いて居るの

其處へ疲れた足を引摺つて、餓ゑた腹を抱へて、功名に躓いた心を重荷にして、勤は歸つて來た。倦んだ心には玄關の踏石の上に置かれてある見馴れぬ爪革の高足駄も眼に映らなかつたが、障子を明けて迎へに出た細君の笑顔の向うに、なつかしい莞爾した親友の顔を見た時は、思はず喜悦の聲を擧げた。

じめ〳〵と侘しかつた雨の長い路も、腹立たしかつた主筆の無遠慮な言葉も、絶望的の六號活字の批評も、何も彼も忘れて了つた。

勤には昔から此友の顔を見るのが尠なからぬ慰藉であつた。莞爾した其顔！　其顔を見さへすれば、大抵な不愉快はまぎれて了ふので、此友の田舍の中學行を新橋停車場に送つた時は、自分の希望も、糧も悉く失ひ盡したやうに思つた位である。

『丁度好かつた！　蟲が知らしたんだ。』

と言つて、途中で買つて來た竹の皮に包んだ豚を出して、『月末で金がピー〳〵だから餘程やめようと思つて、五六間行き過ぎたんだが、思返して買つて來た。本當に君、蟲が知らしたんだ！』

で、火鉢に火を取らせて、すぐ貞一を座敷に延いた。お光が茶の間で聞いて居ると、普通の挨拶などは碌にせずに、もう盛に話を始めて、面白げに樂しげに笑ふ夫の聲が絶えず續いた。

『社の方は面白いかね？』

『あゝ。』

『中村君も喜んでるだらう？』

『何うですか、』と矢張笑つて居る。

『矢張、難かしいかね。』

『別に難かしいッてことはないけども、……』

少しは難かしいといふ調子である。

『此頃は何か書いてるかね。』

『えゝ。』

『長いものでも書き初めてるのかね。』

『いゝえ、さうでも無いやうよ。雜誌か何かに出すんでせう。』

『いつも何時頃、歸つて來るかね。』

『さうね。』

と後を向いて時計を見る。針は四時十分の處を指して居る。

『五時には歸つて來ますよ。』

で兄妹は猶積る話をした。

『それはさうでせうとも！』

かう言つたお光は、其身がまだ七歳位の時、母に連れられて其寺に行つたことを思ひ出した。兄は十歳の時から其寺にお小僧に遣られて、其時は丁度十八歳位、玄關の側の三疊の案に居た。門から本堂に通ずる長い敷石道の兩側には、紅い白い松葉牡丹が一杯に咲いて、子供心にも綺麗だと思つたので、今でもはつきりと其時のことを覺えて居る。老僧は六十位の鬚の生えたやさしさうな方丈さんであつた。

田舍寺も好いが、

『東京に居て呉れると猶好いがね、兄さん。』

『まだきまつた譯ぢやないから。』

『さうね。』

お光が茶を淹れにかゝると、貞一は風呂敷包を解いてお土産を出した。

茶を飲みながら貞一は、

『それはさうと、お前もお目出度いッてね。』

『えゝ。』

とお光は笑つて居る。

『大事にしないといかんよ。』

と、顔を見たゞけでも氣が打解けるといふほどの交情だつた。

貞一は明治の文壇をよく知つて居た。大家と青年文士との差別、雜誌記者と作者との關係、黨閥朋閥の交際、かけ持批評家の無操持、原稿料の階級、生やさしいことではこの波の荒い文壇を乘切つて行かれぬことも諳じて居た。かれは早稻田を出てから、田舍に行くまで一年ほど、羽振の好い勢力のある某雜誌記者の英語の教師になつて、其宅に賓客ともつかず書生ともつかず寄食して居たので、勤などよりも一層文壇の內部の事情に通じて居たのであつた。

『田舍のお寺に今まで誰か居たの？』

とお光は猶訊く。

『老僧が亡くなつてから留守番が置いてあつたんだがね、荒れて了つて爲方が無いつて檀家が强つて言ふもんだから。』

『母さんは其方が好いつて言ふんでせう！』

『あゝ。』

『兄さん、さうするつもり？』

『さうしようかとも思つて居るのさ。あの寺には田地が四町、檀家が二百軒もあるから、彼處に入りさへすりや、食ふには困らんからねえ。』

『それぢや兄さん、田舍の和尙樣になるのね。』
『まだきまらないけれどね、』とちよつと切つて、
『皆なに相談して……中村君にも相談して見ようと思ふの。』
『さう。』
貞一はお光のさまを見た。自分が第一に進んで、反對する母親をも說いて、親友の默止し難い望に應じた。『中村君の處に嫁くなら、これから一生世話もして遣るし、力にもなつて遣るが。厭だと言ふなら、もう兄さんは、お前が何うならうが一切構はんからね、』とまで兄は妹に言つた。從つて、貞一は此結婚に就いて言はば全責任を帶びて居る。この新夫婦の睦しく平和ならんことをかれは常に祈つて居た。
昨夜、母から妹の懷妊したことを聞いたが、兄の眼には妹は別に變つては見えなかつた。成程いくらかは窶れて居る、何處か沈んだ處も見える。けれど母親の心配するほど瘦せては居らなかつた。昨夜も母親からしたゝか口說かれた。軍人ならば夫は萬一のことがあつても、恩給と言ふものがある、それに年限さへ無事で勤めれば、ちやんと定つて立身する、山本さんなどを御覽、もう來年は大尉になるがね……などゝ言つた。
貞一は勤の性質に熟して居る。多い友達の中でも心から力になつて吳れるのは此人である。氣難かしいのと神經過敏とが弱點だが、正直で勤勉でそして熱心である。それに貞一とは合口で、二人相對する

『それぢや隨分遲かつたのね。』

『あゝ。』

『母樣喜んだでせう？』

『あゝ。』

無數の小質問がお光の口を衝いて出る。餘りの意外、餘りの嬉しさに茶を出すことも忘れて了つた。

『今度は長く居られるの？』

『あゝ、もう今度は彼方を辭つて來たからね。』

『さう、辭つて來たの？』

辭つて來たことが何でも無い當り前のことであるかのやうなお光の調子。

『ぢや此から始中終東京ね！』

『あゝ、』と貞一は同じやうな無意味な返事をしたが、『田舍の寺の話がね、段々運んでね、何うしても私が跡を相續しなくつては困るツて言ふもんだからね。』

『田舍のお寺？　さう〳〵母樣が此間もそんなことを言つてた……誰か世話人が態々訪ねて來たつて？』

『あゝ。』

『まア、兄さん』

とお光は思はず立上つた。

長兄の名は貞一と呼ばれた。丈の低い小づくりな餘り揚らぬ風采であるが、脇に更紗の風呂敷包を抱へて莞爾と笑ひながら、玄關と茶の間の閾の上に立つた。

『誰も出て來ないから留守かと思つたよ。』

『私、兄さんとは思懸けなかつたんですもの、』とお光は嬉しさうに、兄の顏を見て、

『何時出て來たの？』

『昨日。』

貞一はまご〳〵して立つて居た。お光はやがて氣が附いて、座敷から座蒲團を持つて來て、いつも夫の坐る長火鉢の向うに兄を請じた。

一年以上も逢はぬ挨拶などは拔きにして、

『昨日は家に泊つたの？』

『あゝ。』

『何時の汽車で來たの？』

『夜の九時に新橋に着いた。』

かれてあるが、其鏡に其身の青白くやつれた顏を映すが最後、容易に其處を離れようとしなかつた。それでも時には賑かな下の家に行つて、嫂さんなどゝ話をしようと思ふこともあるが、それは極く稀で、寧ろこのさびしい室に、一人してかうして居る方が好いと思つた。

ある日、夫の机に凭れて、ほんねんとして居た。戶外は細かい雨が降つて、庭の木の葉が泣いたやうに濡れて居る。蛙の聲が遠くで聞えて山の手の午後は靜かだ。

遲咲の躑躅が赤く庭を彩つた。

お光は筆を取つて傍にあつた原稿紙にむだ書を始めた。種々な字を書いて見た。學校に居る頃、難かしかつた「壁」といふ字のくづしたのを幾度も書いて見たが、矢張巧く書けなかつた。で今度は參らせ候といふ字を五箇も六箇も並べて書いて見る。ふと傍に夫の著した本があつたので、それをひろげて見て、すぐ伏せて、更に夫といふ字、妻といふ字、中村勤といふ字を數限り無く書いた。學校友達と書き競をした不倒翁を描いて見て、其頃の無邪氣を思出して獨り笑つた。

ふと下駄の音がしたので障子の二寸ほど明いた間から覗くと、玄關の前の檜の樹の蔭に蛇の目傘がちらと見えて、誰か來たやうな樣子である。晝間、夫の留守に客のあつた例は滅多にない。嫂さんでも來たのか知らんと思ひながら、物懶く立たずに居ると、玄關の格子戶が明いて、障子が明いて、其處にめづらしい、田舍の中學の教師をして居る長兄の姿が見えた。

何故涙が出るのか、何故このやうに悲しいのか、お光自身にも解らなかつた。亡つた父親のことを思出したとては泣く。母親のことを思出したとては泣く。夫のことを考へたとては泣く。夕雲を見たとては泣く。琴が床の間に置かれてあつたとては泣く。木の葉が動いたとては泣く。

中でも一番悲しいのは、かうして母親と離れて居ることであつた。風が吹く毎に、雨が降る毎に、母親との情が一日一日薄くなつて行くやうな氣がする。自分では無論そんな氣は微塵もない。片時も忘れぬほどに思つて居る。母親も亦自分と同じやうに、自分を思つて居て呉れる。それに相違ない。けれど何と言つても彼と言つても、親子の間が段々薄くなつて行くやうに思はれて爲方が無かつた。それにまた母親はをり〳〵來て『お榮はよく世話はして呉れるが、どうもお前のやうでないぢやでな！』などゝ染染話す。と愈々悲しくなつて、涙が今更のやうにこぼれる。

薄い緣だなどと考へる。もう少し家に居ればよかつたと思ふ――賑かな明い街が歴々と目に見える。

夫の出勤は八時、あとは唯一人。勝手を片附けて了つて、長火鉢の前に來て坐ると、何をするのも厭になつて、自分で惡いとは知りながら、ぐたりと首を俛れて火箸で灰に字など書きながら、取留めもなくいろ〳〵のことを思ひ耽ける。

一時間二時間はかうしてわけなく經つ。

裁縫を出しても矢張同じこと、一日懸つて袖さへ縫へぬこともあつた。新しい簞笥の上に、鏡臺が置

笑聲は其處から來た。

見るともなく見ると、さつき噂をした妾が新聞記者だとか言ふ三十七八の鬚の生えた旦那と並んで、頻りに戯れて笑つて居る。座敷には酒が出て居た。

あることを思ひ出して、自分ながら可笑しくなつて、お光は獨り笑つた。嫂が二三日前、頓狂な聲を出して『あの家の旦那さんがね、お光さん、私が朝起きて水汲に行く時に、いつでもあのお妾さんの處から寢卷のまゝで出て行くがね……寢ぼけ顔をして、變な恰好をして、それは可笑しいの何のッて……。』と話したことを思ひ出したのである。

其妾は成程ちよつと色の白い愛嬌のある丸顔の好い女だ。時々庭に出て花など弄つて居るのを見ることがある。絹物を着て、ぞろ〳〵して、白粉をつけて路を歩いて居ることもある。二三日前には本宅の勝手口に立つて下婢と何か話して居た――

七

それから二月になる。

お光の懷姙はもう知れ渡つて居た。例の酸い物好み、不思議なほど涙脆くなつて、物を食ふと、嘔氣を催して困つた。

若い細君は田舍から來たのだか、お洒落で、浮氣で、夫が陸軍士官なのを自慢にして、白粉を塗つたやうにつけて、人前も憚らずに大口を利く。自然お三輪とも氣が合つて、月給の出る前に、財布が空になると、十錢二十錢と借りに行つたり來られたりする仲である。

お光は何故か此細君を蟲が好かぬ。

お三輪は細君を引留めて猶ほ頻に饒舌つた。やれ、旦那が優しくつて好いの、二人切りでお睦しくつて羨しいの、子供を邪魔にしてはいけないのと例の同じことを際限なく言つて笑つた。

お光は急に暇を告げた。

『まァ好いでせう、嫂さん、』とお孝が留める。

少佐夫人もお三輪も留めたが、お光はさつさと下駄を穿いて外へ出た。何だか變な氣がする。此家に來る人々は其身の境遇も心持も感情も甚だしく違つて居る樣に思はれる。お光は少佐夫人のことをも考へた。夫がある身で役者買をするとは何うしたこと！　けれど其役者買といふことが、お光にはまだ本當には解らなかつた。續いて質の通帳を借りに來る細君のことをも念頭に浮べた。

一方では亦かうした自由な放縱な生活も羨しいやうな氣がした。其身のさびしい生活とも較べて見た。

ふと笑聲が耳に入つて、お光は頭を擧げた。小さな門に、庭の松が蔽ひ懸つて、もう芽を出し始めた要垣が長く續いて居た。疎らな垣の絕間からは、六疊の一間が明らかに見える。

と顔を赧くする。

言ひ憎いことと察して、お三輪は縁側の處に行く。

耳を假して中腰にして居る恰好が可笑いとて、此方では皆なが笑ふ。

點頭いてお三輪は聞いて居たが、

『何ぢやね、まァ。お易い御用ぢやがね、』と元氣よく言つて、引返して、座敷の簞笥の一番上の抽斗を明けて、彼方此方とさがし廻つて、もみくちやになつた横綴の帳面を皺を直し直し持つて來る。

質屋の通帳である。

座敷の閾の處で自分でちよつとひろげて見て、

『奥さん、あの着物は何うするのさ！　今月少しでも入れて置かんと、流れて了ふがね。』

と少佐夫人に言つた。夫人は點頭いて、唯笑つて居る。

縁側に持つて行つて、

『いつでもおつかひなさいよ！』と渡す。

『それぢやちよつと拜借しますよ。』

『えゝえゝ。』

と輕く點頭いて、『旦那さんに知れると大變ぢやで、用心しなさいよ、』と調戲(からかひ)半分に笑ふ。

らは好い旦那さんとして立てられて居るのである。

お三輪も面白いきさくな細君だと思はれて居る。隱し立てをしたり、品格を作つたりしないから、眞面目な家庭からは、卑められたり、笑はれたりするが、體の自由な後家さんや、亭主を尻に敷く細君連や、遠く故郷を都に出て力になる親類の無い軍人の若い細君などからは、二なきものに思はれて、互ひに何も彼も隔てを置かぬので、時の間に十年も附合つた交情(なか)のやうになつて了ふ。

一年前には家に難かしい姑さんが居た。細君が近所に行つて油を賣つて歩くのを、常によく口汚なく罵つた。從つて、前の路を通る人も、不愉快な物爭ひの氣勢をのみ聞いて、難かしい陰氣な家だとばかり思つて居た。間もなく姑さんが病氣で死んだ。掌を翻すやうに忽ち家は賑かになつて、笑聲が絶えず聞えて、夜は遲くまで、雨戸も閉めずに、洋燈が明るく障子を照らした。

近所の人々は、姑が死ぬとあゝも變るものかと驚いて居る位。

容易に話が盡きずに居ると、其處に、又若い束髮が入つて來た。ぢき裏に居る中尉の細君である。少佐夫人の居るのを見て、少し極り惡るさうに躊躇して居たが、

『奥さん、ちよつと。……』

『何ぢやね、お上がんなさいナね。』

『ちよつと。……』

『一體あのお妾さん何うして出來たのかね！』と夫人が訊くと、

『つい、一昨年越して來たのぢやからよくは知らないけれどもね、何でも根岸あたりの八百屋の娘で、始めから家に小間遣をして居たんぢやと、……處が本妻が子宮が惡くつて、箱根とかに湯治に行つてゐる留守に、旦那さんつい手を出して、それから、ずる〳〵べつたりに今日まで附いて離れずに居るんだつて。……いつか本妻が子供が居なければとうに出してしまふんですけれど……つて溢して居たがね。』

『それが今度は競走、どつちが勝つか負けるか、よいしよ！』

と夫人まで柄に合はず浮かれ出したので、お三輪もお光もお孝も皆腹を抱へて笑つた。

話は話と續いた。笑ふ聲が垣の外を行く人々の足を留めた。

『相變らず戲談を言つて騷いで居る！　暢氣な家もあればあるものだ、』などと思つて行く細君もあつた。其家は丁度路の角で、疎らな庭樹の間から、縁側に置いてある小さい瓶などが見えて、軒の物干竿の手拭が微風にピラ〳〵靡いて居た。

此家の主人は三十七八、鬚の立派な、中肉中脊の、柔しさうな人で、いつも黄縞の羽織を着てよく鉢物などを弄つて居る。常に莞爾として誰に向つても丁寧に口を利くのが評判である。それに世話好きで、相談を懸けられると、どんな難かしい話でも、乘つて眞身になつて聞いて吳れるので、近所の細君連か

と顔をちよつと上げる。この顔を上げるのがこの夫人の癖である。
お三輪は可笑しげに笑つて唯點頭く。
『何うしたのさ！』
『それは可笑しいの何のつて………』と乘地になつて、『本妻とお妾と二人で競走ぢやからねえ。先刻見るとね、まァあの色の黑い奧さんが眞白にこて〳〵と塗りつけて、』と白粉を塗る眞似をして、『ぺらぺらした絹物なんか引摺つて居るぢやがね。本當にお妾さんに負けちや大變だからねえ。』
『此間までそんなでも無かつたぢやァないの？』と夫人が不思議がると、
『其處が面白いんぢやがね、其處が話ぢやがね。そら、此間お妾さんの子が死んで、まァ好いと思つてると、今度は本妻の子の四つになるのが死んだでせう。それからだがね、二人白粉のつけつこを始めたのは！』
『さうかねえ、まァ。』
『何方が早く子供を拵へるか、早いもの勝と言ふんぢやがね。』
とお三輪は可笑しさに堪へぬといふやうに相好を崩して笑つた。
『旦那さんも骨が折れることだね、』と夫人が平氣で言ひ足したので、お三輪は更に大に笑つた。
少時して笑が收つてから、

『それはさうぢやねえ。………』
『あの若い人だつて唯引懸つて居るんぢやないだらうから。』
『それはさうさね、金でも無くつて、誰があんなお婆ァさんに引懸るもんかね。かういふ若いのがいくらも貰へる身なんだもの………』とわざと傍に居るお光とお孝とに笑ひ懸ける。
『さうね、かういふ若い方が好いからね。』
と夫人も笑ふ。
『まァ、いやな嫂さん。』
とお孝も笑つた。
『でも………親類には、』とお三輪は煙草を一服吸つて、『あの娘さんね、あの子の婿にするつもりに言つて置くんだつて。………』
『大變なお婿さん！』
と夫人は舌を出して見せる。
『それから此方も大騷ぎだがね。』
とお三輪は烟管で隣の方を指す。
『此方つて、其處？』

とお三輪はわざと頓狂な聲を出して呼ぶ。

其調子が可笑しいので、傍に居たお光もお孝も笑ひ出した。太田の後家は聞えぬ振をしてさつさと歩いて行くので、お三輪はわざ〳〵縁まで出て、業々しく手を叩いた。

矢張知らぬ顔で通つて行つて了ふ。

『太田の後家が、何うだらう、まァ。知らぬ顔の半兵衛さんをして濟まして行くぢやがね。』

とわざと聞えるやうにいふ。

この後家とお三輪とは交情が好い。いつも互に行つたり來たりして戯談の言ひつこをして居る。年は三十七八で、今年十五になる娘がある。亡夫は警察署長を爲た人で財産も一二千圓はあつた。で、この屋敷町の一隅の空地に一軒十圓内外の貸家を三軒建てゝ、其一軒の自分の家には、戸山學校に出勤する若い士官を下宿させて置く。

『あの人、何うするんでせうね。』

『あの人ッて誰ぢやね。』

『あの若い人さ。』

『何うするもかうするも無いぢやがね。』

『でも、まさか、御自分で御亭主にする譯にも行かんでせうがねえ？』

ないといふお安くない證據を見せつけられる。

夫人は平氣で隨分立入つた話をして笑つた。かういふ種類の女には節操などゝいふ思想はない、品格などゝいふ考もない、自己の品格や節操を一場の笑ひに供して何とも思つて居ない。

今まで氣が附かずに居たが、ふと見るといつもはめて居る右の指のダイヤモンド入の指環が無いので、

『何うしたのぢやね?』と驚いたやうに訊く。

夫人は默つて笑つて、顏をしやくつて見せる。

『まア入れちやつたのかね?』

と、お三輪は大きな聲を立てた。

『奥さんの聲の大きいこと!』

夫人は落着いたものだ。

『だツて——まア。』

大枚二百五十圓で買つて貰つたダイヤモンド入の指環!

お三輪は其大膽に呆れ果てゝ、言葉も出ずに居ると、ふと垣の外を同じ遊び夥伴の太田の後家さんが通る。

『太田の後家さん』

根氣負けがして少佐夫人が緣側から上つて何か考へる風で坐ると、

『しつかりおしなさいよ！』

とお三輪は少佐夫人の肥えた膝をいきなりピシヤリと叩いて、體を崩して笑ふ。

少佐夫人は存外眞面目な顏をして居る。お三輪に比べて何處かに品格がある。娘の時分、舊藩の若樣に見染められて夜のお伽に上つたといふ話を、自分でよく自慢さうに話すが、成程若い時は美しかつたらうと思はれる。

『本當に眞面目な顏をして、平氣で惚けを言ふんぢやがね、此人は！』

『まァ、好いよ。』

『ちつとも好いことはありやしない。旦那に知らして遣るがね。………』

夫人は笑つて居る。

お三輪は夫人から、昨日の意氣筋を聞かせられたのである。とある待合に役者と行つて、一夜に費つた金の高、待合の座敷の構造、女將や女中の如才ないといふこと、小さく切つた間の多いと云ふこと、其他いろ〳〵面白い話を聞かせられた。お三輪の夫は月四十圓位の屬官である。さうした話はお三輪には珍らしかつた。

勿論、お三輪にしても、其話を總て眞に受けて聞きはしない。話半分に思つて居る。けれど時々嘘で

戀しき君さままゐるッて毎日書いて居るんぢやらうがね、それならいつそ活版にでもして置くと好いがな。』

元氣よく笑つた。

細君が一人、井戸端の折戸の處から、お三輪の後を追懸けて來て、

『奥さん、ちよつと、ちよつと。………』

『なんぢやね、もう解つてるがね。』

『好いからちよつともう一度。』

『もう澤山、お惚けなら澤山！』

『いゝから……』

と頻りに手招きをする。

『それより、まア、家にお上がんなさいよ。若い娘共が來てるから、面白い話があるぢやらうから。』

『まアちよつと。………』

『まアお上がり。』

頻りに戲談のお復習（さらひ）をして居る。石渡の細君といふのは、少佐夫人で、頭を束髪にして、金の指環をはめて、ぞろりとした絹物づくめ、色の白い肉附の好い丸顔の美人、年は二十九位。

『本當に、私などには、あんな眞似はしたくつても出來はしない。指環でも着物でも何でも質に入れてずん〳〵行くんですからねえ、』と話しながらお孝はせつせと筆を運んで居る。

近所の噂が若い二人の話の題目となつた。此近所には後家が多いこと、氣のさくい細君が多いこと、その人達が寄り集つて話をするとそれは笑はせられるといふこと、此家の兄さんがその中に入ると面白いといふこと、太田の後家さんの笑ひ方が可笑しいといふこと、あんな若い子息のやうな中尉さんと好い交情になつて居るさうだが呆れたものだといふこと、木村の後家さんも何でもさうした人があるといふこと、何うしてあの年頃になるとあゝした露骨な話が平氣で出來るものかといふこと、此間向うの女狂人が裸で飛び出したといふこと、通りの芋屋の馬鹿が甘藷を食ひながら歩いて居たといふこと、それからそれへと話が盡きずに居ると、嫂のお三輪が歸つて來て、お孝が卷紙を片手に筆を持つてゐるのを見て、

『まだ書いて居るのかねえ。まア。いくら戀しい人ぢやッて好い加減にしなはれな、六錢では行かんがな。』

言ひ懸けて、けたゝましく笑つた。

『まア嫂さんが――』と、お孝もその餘りに業々しいのに呆れて居ると、

『まアも無いもんぢやがね。毎日毎日一通づゝ出して、それでよく書くことがあるぢやね。戀しき、

六

翌日は日曜日で上天氣。お光は午後に下の家に行つて見ると、兄様も留守、嫂さんも留守、お孝が八疊で机に向つて、長い手紙を書いて居る。

宇都宮に遣る長い手紙！

『嫂さん鳥渡待つて下さい、もうぢきですから。』と言つて、せつせと書き續く。

『嫂さんは？』

『屹度いつもの處でせう。』

『石渡さん？』

『えゝ。』

『あの奥さん、此頃何うして？』

『矢張、夢中よ。昨日も行つたんでせう。何でも東京座の役者だつてね、臺灣に行つてる旦那に知れたら、大變でせうにねえ。』

『でも、あの奥さん、前にもさういふことがあつたんですつてねえ。それを承知で今度の旦那がお貰ひなすつたんですッてね。』

と、また門前にけたゝましい足音がして、呼吸を切らしてはひつて來たのは、下の家の嫂のお三輪である。

緣側からお孝の長火鉢の前に坐つて居る姿を見て、『なんぢやね、まア、お孝さん、此處に來てるのかね、フイと出て行つて了つて歸つて來ないから心配したがね。呆れた娘ぢやないかね。』

今年二十八、あけつ放しの元氣な女で、東京に來て久しくなるが、相變らず昔の田舍訛が除れない。子が無いので言ふことが若かつた。

『まア、お上がんなさい、』と、お光が立つと、『まア〳〵、措いとくれ、この娘が居さへすれや好いんぢやから。』

と、今しがた互ひに言合つたとは思へぬほどの上機嫌である。

お光は無理に嫂を上に請じた。暗かつた室は忽ちにして賑かになつた。嫂の饒舌る聲と笑ふ聲とが闇を破つて聞えた。

勤は散步から歸つて來た。緣側から座敷の屛風の中に入つて、漸く集めて來た思想を筆に上さうとした。けれど次の間の女連の笑聲がいかにも喧しい、下らぬことをキャッ〳〵と騷いで居る。けれどまさか吸鳴るわけにも行かぬので、チョッと舌打をして、執り懸けた筆を投じて、仰向に倒れて了つた。

『動く時はそれは變な氣持よ。丁度、あの牛乳の煮え立ちかけた時の皮ね。あんな風に動くのよ。』

『何だか氣味が惡いやうねえ？』

『それは氣味が惡いのよ、嫂さん。』

『生れる迄は心配でせうね？』と他人事でないやうな氣がする。

『それはもうねえ、早く產れりや好いと思ふのよ。』

『人間ッて、變なものね！』

『さうねえ！』

と二人は顏見合せて笑つた。

『嫂さん、あるものはあつて？』

と更めてお孝が訊く。

『ありませんの。』

『ぢや、屹度出來たのよ。』

『まだ分りやしない！』

『出來たのよ、屹度、』とお孝は笑ひながら嫂の顏を見る。

お光は里から貰つて來た五日飯を皿に盛つて、小箸を添へて出した。で、お孝が御馳走になつて居る

『いゝえ、さらい月よ、嫂さん。』
『もう、そんなになると、大儀でせうね。』
『それはね、何うしても………』
とお孝は笑ふ。
『一體に、懐姙して居ると、何んな風ですの？』
『さうね、ちよつとどんな風ッて、言ひ難いのねえ。………』
お光の出した茶をお孝は飲む。
『でも、まア、何んな風？』
『さうねえ………』と躊躇して居る。
『もうお腹ん中の子が可愛いでせう。』
『さうねえ、可愛いッて言ふほどのことはないけど………もう動きますからねえ。』
『どんな風に動いて？』
『そら今も動いてよ、』と、お孝は自分の腹の帶の處を指して、
『そらまた………動くのが見えるでせう？』
お光にはちよつと解らなかつた。

『何もそんなこと向うに言つて遣らないでも好いだらうつて嫂さん、むきになつて怒つてるんですもの。私は困つて了つてよ。それや私も悪いのよ。世話になつて居て、そんな我儘を言つて遣つたのは悪いけれど、……家に居て達者な時でさへ、水桶を下げたことなどは無いのに、この體で、あの細い路次を……。』

『でも懷姙して居る時は、働く方が好いつて言ふぢやありませんか。』

『だつて嫂さん……』

『兄さんはなんて言つて居て？』

『兄さんも怒つて居たやうでしたよ。いつもなら、何とか言ふんですけれど默つて火鉢の處に坐つて居ましたよ、』と言つて、考へて、『でも爲方が無い。體には換へられませんからねえ。』

『さうですともねえ。』

『宇都宮でも下の嫂さんは、あゝした女で爲方が無いから、勤兄さんの方に行つて何でも相談しろッて、いつでも言つて來ますのよ。此方の兄さんは、しつかりして居て嫂さん仕合せですねえ。』

『いゝえ……』

とお光は煮え切らぬ返事をして、

『もう、來月？』

『下の家にいらしつたの？』

『何うですか、』と言つて、途切れて、『其處等散歩に行つたんでせう、屹度。』

お孝はやがて茶の間に上がつて來て坐つた。

『嫂さん、よく御精が出ますのね。』

『いゝえ。』

『兄樣の袷？』

『えゝ。』

お孝の腹はもう人目に立つほど大きくなつて居た。

『今下の家の嫂さんと言合つて來たのよ。』

と突然お孝がいふ。

『何うして？』とお光は眼を睜る。

『宇都宮から下の兄さんの處へ手紙が來ましてね………重い物を持たして呉れるなッて言つて來たんでせう……私、惡かつたけれど、此間、鳥渡さう言つて遣つたの。下の嫂さん、水を汲ませたり何かするんですもの』

『それで何うして？』

『お茶でもあがりませんか。』

と聲を懸けて見る。

返事が無い。

やがて、默つて夫は門を出て行つたやうな樣子。

暫くすると、今度は女の小刻みな足音が近づいて來た。聞き馴れて居るので誰だかすぐ解つた。

『嫂さん。』

と其人は其處に來て聲を懸けて、色白の顏を闇から出した。

『お孝さん？』

『嫂さんお裁縫（しごと）？』

と緣側に腰を掛けたのは今年十九、勤の弟の軍人の內緣の妻で、宇都宮の士族の娘だが、祝言をせぬ中に懷妊したので、この正月から下の家に來て居るのである。

『まァお上がんなさいな。』

『難有う……』

と言つたが、『今其處で、兄さんに逢つてよ。』

『さう。』

お光は茶の間に戻つて猶少時坐つて居たが、思返して押入から針箱を出した。洋燈の心の切りやうが拙いのか、石油が惡いのか、ほやが眞黑になつて、あたりがいかにも暗い。餘り氣になるので、一度消して、掃除して、心を切り直して見た。けれど矢張焰が立つて、やがて元のやうに暗くなる。

風呂敷包を出して中から袷を出した。瓦斯入銘仙の黃懸つた縞である。母は忙しい中で、それを裁ちながら、『勤さんが見立てゝ買つて御座つたのか、地味ぢやな、これは……』と言つた。成程地味である。何うせ買ふなら今少し好いのがありさうなものだ。私が買つて來ると、何時も難癖をつける癖に、自分で買つて來たのなら、こんなのでも好いと見える。

こんなことを考へながら、お光は針山から針を取つて糸を通した。袖になるところをやがて縫ひ始める。

時計が八時を打つ。

琴のおさらひがまだ聞えて居る。今のは確かに越後獅子だ。あの相の手の處が出來ぬと見えて、幾度も幾度も繰返してさらつて居る。娘時代が何となく懐かしい。

ふと座敷の障子が開いた。

續いて、夫が緣側から駒下駄を突懸けて庭に出る氣勢がする。氣が盡きたと見える。お光は茶の間の障子を明けて闇を覗いて見た。夫の黑い影は庭の彼方に行つたり、此方に來たりして居る。

つてそして戯戯半分に、『お前よく愛憎づかしを言つたな、今に後悔させて敵を打つて遣るから覺えてお出！』と聲高に笑つた。

お光は夫に氣が合はぬと謂ふのではない、そんなことは無論意識しては居らぬ。優しくさへされると好い夫、戀しい夫、力になる夫、一生を託するに足る夫となるのであるが、難かしくされると、『もつと好い人？』がすぐ胸に込上げて來るのである。

『子供が出來ると、もう一生連添つて居なければ……』と再び思つて、涙を袖で拭つた。

あたりはしんとして居る。蛙の低い聲が何處からともなく聞えて來る。隣の家では老母と娘とが提灯張の夜業をして居ると見えて、時々物を打つ音がして、話聲笑聲が其間に交つて聞える。向うの二階屋では娘が琴のおさらひを始めた。

お光は立つて、裏の雨戸を閉めにかゝつた。裏の林は眞暗で何となく無氣味だ。雨戸を繰つて了ふと、屛風で圍んだ夫の机の上の洋燈が殊に際立つて明るく障子に照りかゞやいた。何をして居るのか、眠つてでも居はしないかと思はれるほど靜かである。お光はソッと覗いて見た。夫は机の少し横に肘を張つて趺坐をかいて、髮の長い頭を紙の上に低れて一生懸命に筆を走らせて居た。

ぐるりと廻つて表の雨戸を閉めに懸ると、『もう少し明けてお置き！』

夫の聲は鋭かつた。

しやと思ふ。『もしや出來たんぢやないか』と繰返して見る。それは今迄にも時々無意味に停滞することはあつた。けれど其時には頭腦が痛いとか、氣分が悪いとか、屹度何處かに異狀があつた。月經丸を用ひさへすれば、二三日の中には必ず効能が現はれた。何うも今度は樣子が少し違ふ。藥を先月も飮んだが効能がない。頭痛も爲ない、氣分も怠くはあるが、いつもほど神經が昂つたり苛々したりしない。『出來たのか知らん、』とまた考へて見る。

子と謂ふことはお光には尠くとも新しい問題であつた。懷妊する、子が產れる。珍らしくもない事實である。けれど他人が子を產んだり育てたりするのと、自分が產んだり育てたりするのとは大分違ふ。お光は其新らしい問題に突當つた。

譯もなく悲しくなる。『子供が出來れば、もう一生——』と思ふと涙が出た。一週間ばかり前に夫婦で衝突して、この長火鉢に相對して、『いけないなら、今の內ですから……本當に戲戲ぢやありませんか ら、眞面目に考へて下さい、』と言つた。夫は暗い顏をして、默つてお光をぢつと見詰めた。離緣——いけないものなら、離緣するのがお互の爲めである。世間にもいくらも例がある。恥かしいけれど恥かしい位には更へられない。とかうお光は思つて居る。夫は其時は默つて何も言はなかつたが、二三日して機嫌が直つてから、『お前の沒分曉にも困る。己がこれほど思つて居るのがお前には知れないのか。一度結婚した以上は離婚などといふことを考へてはならん。離婚などさう容易く出來るものではない、』と言

夫は西洋の本を買つたり借りたりして來て、よくそれに讀耽る癖がある。筆を執つて居らぬ時は、必ず机に向つてそれを讀んで居る。時には寢食を忘れることすらある。一人で面白がつて居る。そして退屈すると、妻を一人打棄てゝ置いて勝手に出かける。

妻の身にしては、これが何より物足らなかつた。時々は長火鉢の前に來て坐つて、妻の淹れた茶を旨さうに飮んで、態々使に行つて買つて來た餅菓子を食つて、埒も無い世間話でも爲て貰ひたかつた。それは何うせ面白い話は出來ぬ、高尙な話に調子を合はせることも難かしいが、さし向ひになつて莞爾と樂しさうな顏を見もし見せもして、互に打解けるのが夫婦ではないか。

お光は本を憎み、筆を憎み、立て廻す屛風を憎んだ。

五

勝手の洗物を濟まして、お光は長火鉢の前に坐つた。茶を一杯湯呑に注いでさびしさうにして飮んだ。遣瀨ないやうな氣もすれば、里のこと、お常のこと、途中で逢つた大學生のことが胸に集る。何だか悲しいやうな氣もする。

體が懈怠い、何をするのも厭だ。今日母さんに積つて裁つて貰つて來た夫の袷を縫はうかと思つても見たが、何だか懶くつて針箱を出す氣にならない。ふと、月々あるもの丶無いのを思ひ出して、……も

けれど内の人は何うもはきはきしない。捌けない。沈んで居る。それに、話すことが難かしくつて解らない。面白くもないことを面白がるかと思ふと非常に面白いことを見向もせずに、さつさと行つて了ふやうなことがある。

　箱根に行つた時、大地獄といふ處へ伴れられて行つたが、夫の愉快さうなのに引かへてお光は恐れ慄いて顔を眞青にして了つた。面白いどころか、珍らしいどころか、駕籠に取附いて一刻も早く山を下ることをお光は望んだ。其時夫は『駄目だなア、怖いことは一つもありやしないぢやないか、かうして己も立つてるぢやないか。』と叱るやうに言つた。夫は雲が美しいと謂つては佇立み、水が綺麗だと言つては駕籠を停め、湖水が面白いと言つては其處に一泊しようとした。けれどお光にはさうした自然の景色よりも賑かな東京の街の方が面白かつた。

　ある時、夫が友達に、『女といふものは、君、始末に行かんもんだね。一緒に伴れて歩くにしても世話が焼けて仕方がありはせんよ。言はゞまァ小便の世話まで爲て遣らなければならんのだからな！』と言つて笑つた。これは其前の日曜に珍らしく夫に伴れられて瀧の川の紅葉見に出懸けて、歸途に便所が無くつて困つたことをそれとなく言はれたのである。お光は顔を赧くした。

　兎に角お光は淋しかつた。家に舅小姑でもあれば、まだそれにまぎれて、いくらか賑かに暮すことが出來たかも知れぬが、若い同士の鼻を衝き合はせての日毎の平凡な生活！

る、情もあり涙もある。實に清い涙だ、悲しい情だ！　と長い頭髮を顏の傍に寄せて、熱い呼吸を吹き懸けながら語る。それがお光には堪らなく辛かつた。噛殺しても噛殺してもあくびが出て來る。點頭いて解つたやうな顏をして居ても、心は里の母親の處に飛んで居る。

遂には夫も失望して、

『お前は小說など讀んだことは無いのか。』

『讀んだことはありますけれど、小說は嫌ひですから。』

とお光はいつた。

それから筆を執つて書くといふことも、お光にはよく呑込めなかつた。一枚書けばいくらかになる位、唯ぼんやりした考で、書いて居る間は何故あのやうに機嫌が惡いか、何故あのやうに氣を焦せるのか、何故あのやうに人に當るのか、そんなことは一向に解らなかつた。でも、今では段々それにも馴れて、解らぬなりにも、さうしたものと決めて了つて、其時は腫物に觸るやうにソッとして置く。

自分の周圍を見廻しても、夫のやうな人は少い。下の家でも里の近所の人々でも、もつと快活で、さつぱりして居て、日曜日などには細君子供を伴れて上野淺草に出懸けて行く。夜も偶には睦ましさうに伴れ立つて寄席に行く。官吏軍人には殊にさうした樂しげな夫婦が多かつた。それは夫も結婚當座は彼方此方と遊びにも伴れて行つて呉れた。新婚旅行といふほどでなくとも、兎に角江の島鎌倉にも行つた。

んの處に行つたり何かしたもんですから、つい遲くなつて了つて……さぞお腹が空いたでせうね、』と言つて、急いで平常着に着改へて、洋燈を點けて夕飯の準備に取懸つた。

やがて出來た夕飯の膳に向つても、夫は矢張押默つて難かしい顏をして口を利かうともしなかつた。姉が持たせて寄越した五目飯を食ふには食つても、旨いとも拙いとも言はず、何處から持つて來たかとも訊かず、お終の湯を飲み終ると、箸をからりと捨てゝ、ふいと座敷に立つて行つて了つた。例の屛風を立廻す氣勢がする。

お光はたつて懇望されて此處に嫁いで來たのである。まだ年も若いし、裁縫も十分稽古させて無いし、殊に、學問にかけては何も出來ないから、……と長兄が幾度も斷つた。それにも拘らず、何が出來なくつても好いからとたつて望まれて來たのである。

それは母親の手傳をして、飯の炊きよう汁のつくりよう位は知つて居た。家事に懸けても滿更のお孃さんでも無かつた。けれど十七の小娘に文學などの解りよう筈はない。

お光が此家に來て、第一に困つたのは夫から小說を讀ませられることであつた。講談とか落語とかなら寄席に行つて聞いても居るので、全く解らぬことも無いが、難かしい字の入つた、戀とか淚とか悲哀とかいふ小說は、少しも頭腦に入らなかつた。それを始めの中は、夫は熱心に說明して聞かせて呉れる。此處が好い處だ、この文章が巧い、この文句が堪らない、此男と此女とがかうした具合で失戀の境に陷

『それぢや……』と男は帽子を取る。

『左樣なら。』と、お光は丁寧に挨拶した。

暫し立留つて其後姿を見送つたが、男は振返りもしなかつた。其路から少し行つた處に、大きな屋敷があつて、其門際に見事な八重櫻がある。其屋敷に今年十五になる娘が居て、將來は其大學生が其處に養子に行くに決つて居るといふことをお光は夫から聞いて知つて居た。

お光の心はさびしかつた。自づと出る涙を襦袢の袖でソッと拭つた。夕暮の風が埃を立てる。

四

夫はもう歸つて居た。不機嫌は豫ねて期して居たが、期して居たよりも一層不機嫌であつた。是までにも里に行つて好い顏をされた例しは尠いが、さりとて今日のやうなこともなかつた。遲かつたとか、亭主が飯も食はずに居るのに何時まで遊んで居るとか、小言を言つて呉れゝばまだ好いが、今日は知らん顏をして、洋燈も點けずに薄暗い座敷にぽつねんと坐つて、見えもせぬ本を見詰めて居る。

『只今歸りました』

と挨拶しても返事が無い。

お光は機嫌を取る積りで、『大變遲くなつて濟みませんでした。もつと早く歸る積でしたけれど、お常さ

んに水汲をさせて置く積りですか？』と言つた。深切で、やさしくッて、そして年寄のやうな解つた口を利くので、長兄の友達の中でも此人のみには父母も感心して居た。いや、それぱかりではない……實際それぱかりではない……。

長兄の居る頃二階によく來た此人も、長兄と同じく新體詩をつくつた。正月には歌留多に來たこともあつた。長兄の友達にも、かういふ人があるかと思つたこともあつた。

今の夫に嫁ぐ日に、荷物の宰領をして、荷物と一緒に俥に乘つてついて行つて呉れたのも此人である。結婚屆に證人になつて呉れたのも此人である。

少時默つて步いたが、

『今日は何方へ？』とやがてお光は訊く。

『ちよつと其處まで。』

『甲良町にいらつしやるんでせう、』と、續いて訊かうとしたが、それは口から出ずに、

『此頃はちつとも御出になりませんのね。』

『少し學校の方が忙しいもんだから、つい御無沙汰してました。その内行きますから、中村君によろしく言つて下さい。』

丁度別れる路の角に來て居た。角の家に白蓮が美しく咲いて居た。

『社へ出るのは厭だッて言つてるでせう？』

『此頃ではそんなにも……』

『左樣ですか。』

又默つて步いた。

『お里でもお變りありませんか。』

『えゝ、皆な……』

『此頃は姉さん御一緒ですね。』

『えゝ。』

『柳町の家はもうすつかり疊んだんですか。』

『えゝ。』

『お父さんがゐなくなつてッから淋しいでせう？』

『えゝ、何うしても……』

お光は『えゝ、』で持切つて居る。何だか嬉しいやうで、きまりが惡いやうで、なつかしいやうで、自分で自分の身が自由にならぬのがもどかしいやうで、胸が際限なく騷ぐ。夫の親友、長兄の親友、其身が今の夫に嫁ぐに就いても、此人が一方ならず盡力した。容易に承知せぬ母を說いて、『何時までお光さ

供を叱る聲が喧しく聞えて、荷車が一二臺置かれてある居酒屋には、酒に醉つた勞働者の聲がする。夕日はペンキの剝げた戶の堅く閉された小さい耶蘇會堂の屋根に淋しく照つて、其餘光が黑い汚い溝に映つた。

ふと、ある路の角で、

『お光さん』と又呼び懸けるものがある。

三

お光は胸を躍らした。

角帽、金釦――色の白い眉の昂つた好男子。

『何處に行つたんです?』

『鳥渡……』

『母さんの乳を飲みに行つたんですね。』

お光は顏を赧くしてもじ〱して居る――二人は並んで歩いた。

『中村君此頃出てますか。』

『えゝ。』

路次を出て、店先で今一度母親の顏を見て、挨拶して、そして歸途に就いた。五時に近い日影は蔭つて町通も何となく忙しい。角の牛肉屋では女がキャツ〳〵と騷いで居る。氣まぐれな風が何處からともなく吹いて來て、四辻に黃い埃を高く颺げた。

交番の巡査は退屈さうに立つて居た。芽を出した柳が靑々と靡いて居る。見附の方から、スコツチの脊廣の燒けたのを着た丈の高い男が、海老茶の風呂敷を抱へて、腰辨の群のするやうな態度をして、疲れ切つたといふ風で步いて來た。

『お光！』

と聲の懸けられて、お光ははツとして、頭を擧げて、役所に勤めて居る仲兄の顏を見た。長兄は田舍に行つて東京には居ないのである。

『今お歸り。』

『あゝ。』

『此頃は遲いのね。』

『何アにさうでもないさ。』

こんなことですぐ別れた。

米屋の角で曲つて、汚い溝について、だら〴〵した坂を上つた。いつも通る貧民窟には、上さんの子

傍に風呂敷包があつた。其中に淺草紙やら歯磨やら洗濯石鹼やら封筒やら卷紙やらが入つて居た。母親はそれを帳面に附けて置いた。お光は來る度に母親から何か店の品物を貰ふのが例になつて居たが、今日は新形の博多地の錢入れを一箇貰つた。

『姉さん大變御馳走になつて、……』

『ちよつとお待ち、今、……』と五目飯を詰めた小重箱の上を布巾で拭いて、『これを勤さんに持つて行つてお上げよ。何うせ旨くはないけれど。』

『さう氣の毒ね。』

『重いからかへつて迷惑かも知れないよ。』

と笑つて、『鳥渡その風呂敷をお出し、包んで上げるから。』

重箱を下に、上に雜貨品を載せて包んで自分で下げて見て、

『そんなに重くはないよ。』

『あゝ大丈夫、ちつとも重くはない！』とお光も下げて見る。

『ぢや姉さんも其のうち來ると好い。』

『あゝ其のうち……ぢや勤さんにも宜しくね。……』

姉がかう言つた時は、お光はもう下駄を穿いて居た。

半切に移した飯を團扇で煽いで、細く刻んだ材料を混ぜる。先づお初に神棚と佛壇とに上げて、さて歸りが遲くならぬやうにと、お光は其暗い八疊の一隅で急いで御馳走になつた。

『それでは、母樣、また來ますから。』

と、店で客の相手をして居る母親に聲を懸ける。

何となく心細かつた。

『さうかな、もう歸るかな。』

と母親は振返つて、硝子戸の前に浮き出す樣に其姿を顯はした娘を見た。母親の胸も物淋しかつた。

『また、暇を見て出懸けてお出！』

『母樣も一日出て來ると好いがね。家では晝の間は留守だから。』

『あゝ、其のうち都合して行くわ。』

『それでは左樣なら！』

『體も大事にせんといかんぞな。なんなら醫師に見て貰ふ方が好いがな。』

『あゝ。』

『いろんなものも持つたかな。』

『あゝ。』

餘り遲くなつてはと思つて、やがて暇を告げた。里に歸ると母と姉とは御馳走するつもりで、一生懸命に五目飯をつくつて居た。竈には火が赤く燃えて、釜が吹きかゝつて居る。俎板の上にはかんぺうの煮附けたのが載せられてある。皿には赤漬生薑が入れられてある。姉は襷がけで頻りに慈姑を細かく刻んで居るところ……。

お光は其身の娘であつた時のことを思ひ出した。赤い襷を懸けて此勝手元に働いた時のさまが眼に見える。其頃兄が二階に居た。兄の友達がよく來た。今の夫が絣の羽織を着て、店の硝子戸を明けて、其處に人が居れば輕く挨拶して二階に上つて行く。兄の友達は長座のものが多かつた。飯時が來ても中々歸らうともしなかつた。何があんなに話があるんだらうと母親はぶつぶつ言ふ。兄は詮方なくありもしない自分の巾着の錢を掻集めて、蕎麥の盛をお光に命じた。ある時などは耶蘇のかたまりらしい頭の毛を長くした男が來て、午頃から夜の十時過ぎまで、兄と疊を叩いて議論した。箒に手拭を被せて置いても何の効能も無い。不思議にして居ると、それも其筈、箒が倒れて居たのが後で解つて、大笑をしたことがあつた。兄は又兄で夜遲くから、新體詩といふものを作つた。鼻をほじくりながら、ウーンウーンと唸りながら筆を運ぶので、眠られなくなつて困つて『兄さん唸るのだけはよして下さい、』と賴んでも賴んでも矢張唸つた。今の夫に嫁ぐ話のあつた時、『兄さんのやうに唸る人なら厭だ、』と言つて笑はれたことを思ひ出した。

『さう。』
とお常には矢張不思議であつた。
お常には旦那さんといふことは謎である。學校友達は結婚すると、多くは變な風になつて、いつとなく交際が出來なくなつて了ふが、何うしたわけか、それが先づ第一にわからない。此のお光さんなどはそれでも結婚してからも、かうして交際して居るが、結婚しない前とは何處かに違つたところがある。さうかと謂つて、何處が違つたかと言はれゝば、それは解らぬけれど確かに違つて居る。何處か違つて居る。
『御亭主を持つてはなか〳〵さうは我儘には行きませんからねえ！』などと母親はいつもよく言ふが、夫といふものは、そんなに難かしい面倒なものかとお常はいつも思ふ。
これまでにもお常はお光に由つてその疑問の幾分を解かうと試みたことは幾度もある。けれど娘の身ではさう露骨に尋ねることも出來ない。お光もまたいくら親しい友だと謂つて、すつかり打明けて話すやうなことはしない。寧ろお光にもまだ夫といふものがはつきり頭に映つて居ない。從つて謎は依然として謎であつたのである。
で親しい二人は三時頃まで、琴を彈くやら、お鮨を食べるやら、學校時分の樂しい話をするやらして面白く遊んだ。殊に、お光に取つては此三時間が命の洗濯でもあるかのやうに思はれた。

二人が合奏するのを、母親は樂しさうに嬉しさうにして聞いた。相の手の多い松づくしの中途で、お光が調子を外して顏を赧くして少しどぎまぎした。お常の爪音は冴えて高かつた。

合奏が終るとお光は琴爪を直しながら、

『少し遣らずに居ると、すぐ忘れて了うんですもの、此間もお師匠樣の處に行つてさらつて頂いたんですがね、鳥渡した處を忘れて了つて本當に仕やうがないのよ。』

『お家でもよくなさるんでせう?』

と母親が訊く。

『うちで居ない時なぞ、少しはさらつて見ますけれど……何だか餘りのんきらしくッて、里に居る時のやうには參りませんの。』

『そんなことは無いでせう、』とお常は笑つて『旦那樣に聞かせてお上げなさい、旦那樣琴お嫌ひ?』

『嫌ひなことは無いでせうけれど……矢張煩さいんでせう。』

『煩さいの。』

この琴の音をうるさいとは不思議至極と言つたやうな顏附をした。

『それは始めの中は、夜分など彈いて御覽なッて言つたこともありましたけれど、此頃ではまづ私の琴なんか聞き度くないんでせう……滅多に爪をはめることなどないのよ。』

お光は嫁いてから一年になるが、夫といふものがまだ好く解らぬ。嬉しいやうな、難かしいやうな、烟たいやうなものと思つて居る。夫婦と言ふものは、夫婦にならなければならぬからなるので、餘り好んでなるべきものでは無いと思つて居る。

それは自分も嫁に行く時は羞かしかつた。けれど人が羞かしがつたり、其親達が一生懸命に養子をさがしたり、自分と同じやうに夫を持つたりするのかと思ふと何だか不思議でならなかつた。

『本當に何時ですの？　をばさん、』と改めて訊くと、

『うそよ、うそよ、私養子など貰ひませんから。』

とお常は猶頻りに打消した。けれど何處となく調子がはしやいで、樣子がいつもとは違つて居た。

『そんなに隱さないでも好いぢやありませんか。』

『だツてうそですもの。』

『それなら好う御座んすよ。何うせ分ることだから…………けどもね、』とお光はお常の顏をぢつと見て、『けどもね、二人はいつまでも仲好くしませうね。』

『えい、えい。』

とお常はお光の手を握つた。

母親が菓子を運んで來た時には、座には琴が二面出されて、二人は向ひ合つて頻に琴柱を配つて居た。

と娘が傍から言ふと、

『好いがね、まァ、本當にお光さんなどは立派な奥様におなんなすつた。お前なぞもも う ぐづ〳〵しては居られませんよ。』

『母さんはぢきあんなこと言ふんですもの。厭になつて了ふよ、ねえお光さん。』

『もうきまんなすつたんでせう？』

『まァ、お光ちやんまでそんなこと！』

と娘は呆れた顔をする。

『だつて本當でせう。私、母から聞きましたもの、ねえ、をばさん。』

『そんな話があるんですけれど、捗々しくありませんでね。』

『母ざん、うそよ。』

と娘は一生懸命に打消した。

娘は名をお常と呼ばれた。何方かと謂へば、容色は餘り好い方では無かつた。父親は舊大名の家扶で、近所のお屋敷に毎日朝から詰めて居る。ひとりつ子で養子を貰はねばならぬ身の上なので、八方に口をかけて頼んで置いたが、久しく好ましい縁が無かつた。處が今度或役所の技手で、いよ〳〵話が纏つたといふことをお光は母から聞いたのである。

二

其處から餘り遠くない屋敷町に、お光の學校友達が一人居た。小學校を卒業すると華族女學校に行くもの、お茶の水に入るもの、家に居て裁縫に通ふもの、其家々の都合で區々の運命を得て、木の葉のやうに散々になつて了ふのが女の習であるが、此二人は學校を出てからも、二年間同じ琴の師匠に通つたのが緣で、遊びに行つたり來られたり、曾ては先方の母親も緣談のことで態々訪ねて來たことがある位、嫁いてからも里に來る度毎に、お光は其友達に逢ふのを樂みにして居た。

其日も菓子折を持つて、午後からお光が行くと、友達は大喜び、引張るやうにして自分の室に伴れて入つて、學校に居た頃と少しもかはらぬ物語が始まつた。

盡きぬ話の中に母親が入つて來て、

『お光さんの丸髷のよくお似合なさること！』

『いゝえ。』とお光は頭を氣にして顏を赧くする。

『もう、やゝさんがお出來なすッても好い頃ですのに、まだですの？』

『いゝえ。』

『お母さん、そんなこと何うでも好いぢやありませんかね。』

此間なぞも、これから書かうとして机に向つてると下の家の下女が來てべちや〳〵饒舌つたんでせう。腹が立つたと見えて、歸れ早く歸れッて呶鳴るんですもの、私は氣の毒で何うしようかと思つたのよ。』

『あのお雪かえ、さぞ喫驚したらうねえ、』と姉は笑ふ。

『喫驚する位なら好いけれど、それからは怖がつて、滅多に來はしない、用があつて來ても、すぐこそこそと歸つて行つて了ふのよ。』

『それでも書きさへすりや好いお錢になるんだらうね？』

『何うだか知れないのよ。』

母親は婿の青い顏を浮べた。季つ子の可愛さ！　十七やそこらで手離すのには忍びなかつた。其話のあつた時にも少からず反對した。お光の兄が今の婿の親友で、兄が二階に居る時よく遊びに來て、其顏は昔から知つて居たが――堅さうなしつかりした人だとは思つて居たが、あゝいふ人に最愛の季子の娘を嫁けようとは思はなかつた。貧しい中から父親の反對するにも拘らず、お孃さんのやうに育てゝ、琴の奥免許までも取らせたのは何の爲め？　立派な三枚襲も作つて遣り、金の指環の一つも買つて遣つたのは何の爲め？　年頃に惡い評判でも立てられぬやうにと氣を揉んだ上にも氣を揉んだのは何の爲め？　若い士官候補生の日曜下宿などよく〳〵いやであるのに、進んで世話をして遣つたのも何の爲め？　士官を二階に下宿させたのも何の爲め？

『さうよ、』とお光は笑つた。
『かの子ッて、名が好いッて言つてたよ。』
『何うしてぢやな。』
『かの子の君とか何とか新體詩につくるんだらう、それでだよ。』
『まァさうかナ。』
と母親は大袈裟に笑つた。けれど母親にはよく其意味が解らなかつた。すぐ言葉を續いで、
『勤さん相變らずかな。』
『え丶、』とお光は煮切らぬ返事をしてゐる。
『お前の家も隨分變つてるね、』と姉はがさつ者の無遠慮に、『相變らず屛風を立て廻して遣つてるんだらう。本當に氣が盡きる商賣だね。頭腦から絞り出すんだからね。……………それにしてもよく種切にならないね。』
と、口癖の『ね』を頻りに重ねる。
『本當よ。書いてる時は氣むかづしくつて本當に爲方が無い。いつかなんぞも筆を買つて來いッて言ふから、坂下へ行つて買つて來ると、いつものやうな筆でなかつたッて、それは怒るの、怒らないのッて、癇癪を起して折つて屛風に叩きつけて、そしてふいと出て行つて了ふんだもの、私は困つて了つてよ。

急須を載せて、茶の罐を出しながら、『お前加減が惡いッて何うぢやな。』

『大したことは無いのだけれどね、何だかだるくつて、氣分が惡くつて………胃が惡るいんだと思ふけれど………。』

『醫師に見せたら何うぢやな。』

『それほどのことも無いから。』

『無理をするといかんぞな、』と言つた母親は、ぢつと娘の顏を見た。娘の顏はいくらかやつれて居た。眼の周圍には暗い影のやうなものが出來た。

やがて茶が掩れられる。姉のお榮がせつせと雜巾懸をして居る姿が勝手の硝子戸越に見えたので、『お榮、茶をあがらんかな、お光が御馳走を持つて來て吳れたで。』

『それは御馳走樣。』

かう言つたが、姉の働いて居る襷懸の姿は依然として硝子越に見えて居た。

母子が餅菓子を食ひ、茶をすゝり、樂しげな長い物語を爲て居る間に、店に客が來て母親は二度立つた。さうする中にお榮も勝手の跡仕舞を濟まして其處に來て坐つた。

『それぢや御馳走になるかね。』

と、笑つて鹿子餅を一箇取つて、『勤さんこの鹿子を好きね。』

つてたよ。』

『本當に氣の毒な人よ。妹が二人弟が二人あつて、それを皆な世話しなくちやならないんだから――。』と少し途切れて『だから自分でも僕の處なんかに來る女はありやしないつてよく言つて居てよ。』

『本當に好い人だがね、』と姉はバケツを提げて裏へ水汲に行く。

お光はほつねんとして居たが、佛壇が開いて居たので、思ひ出して、此正月に死んだ父の位牌の前の香爐に線香を一本立てた。香の煙が暗い中にすうと細く騰る……ふと座敷との間の硝子戸が重さうに明いて母親が入つて來た。

聽て相對して坐つた母親も莞爾して居る。娘も莞爾して居る。一言も交へぬけれど、二人共此の上なく嬉しさうである。母は娘の眼を顔を、娘は母の眼を顔を互にぢつと見合はした。

少時してから、

『此頃は忙しいのね、』と言つて、紫の風呂敷を解いて、つい其處で買つて來た母親の大好物の餅菓子を出した。

『何ぢやね、まァ、こんな心配は措くが好いがね、來る度々に氣の毒ぢやなァ。』

『なあに母さ、其處に出來立のおいしさうなのがあつたから。』

母親と相對すると不思議に昔訛が出る。母さんを『母さ』と短く呼ぶのは行田訛である。母親は盆に

『何處に居るの。』
『よく聞かなかつたけれど、何でも大久保に下宿して居るつて……。』
『夫婦で？』
『それァさうさね、お前、』と笑つて『いづれ近いうちに家を持つんだらう。』
お光は其士官の此二階に居た時のことを思ひ出した。まだほんの娘で、何の氣も無かつたが、裏のお政さんがぞつこん其士官に打込んで居たので、唐物屋ではお光ちやんをあの人に押附ける積だの何だのと吹聽した。其士官も亦戯談半分にお光の肩に手を懸けて『お光さんは私と一緒に伏見に行きませんか、』など丶言つた。寄席にも一緒に行つた。少尉の服を着けた寫眞も貰つた。
あの頃はまだ父樣が居た！　と思ふとお光はなんとなく悲しくなつた。無邪氣で快活で嫁に行く時にも涙一つ滴さぬ程の娘であつたが、何うした加減か、此頃は夥しく物思はしげになつて、何ぞと言ふと涙が出る。
『田村さんは？』
『あの方久しく見えないよ。母さん、『お嫁さんを世話して遣り度いッて言つたけれど――。』
『今も砲工學校でせう。』
『あ丶さうだらうよ。好い人だけれど、舅や小舅が多いんだッてね。それだから困るッて母さんが言

『此間奥さんをつれて來た話をお前は知つてるねえ？』

『いゝえ………奥樣お貰ひなすつたの？』

『あゝ、伏見で貰つたんだッて、此間伴れて來てお友達にして貰ひたいッて言つてたよ。』

『何んな奥樣！』

『ちよつと綺麗な、丸顏の。』

『いくつ位。』

『さうね、お前位だらう。』

『どんななりをして。』

『派手なお召を着て金鎖を下げて、指環の三つも筬めて大したなりだつたよ。』

『それぢやお里が好いのね。』

『何でも宇治の金持の娘だつて、京都の高等女學校を卒業して學問もあるんだッて話だよ。』

『それぢや私なんぞお友達どころか………。』

『あれで丈さへあると立派な奥樣なんだけれど………。』

『そんなに小さい人？』

姉は點頭いて、『何うも押出しが立派でないね、………だから折角のなりもちつとも引立たないのさ。』

お光は店をのぞいて見たが、客は未だ去らない。母親は客の相手をしながら、お光と顏を合せて嬉しさうに笑つて見せた。また一人客が入つて來た。

つまらなさうな顏をしてお光は立つて居たが、ふと思ひついて、たぎつた鐵瓶に水を差して、また勝手元の姉の方へ行つた。

『ちよつと待つてお呉れ、これさへすますと、もう好いんだから、』と言ひながら、丸髷に結つた肥つた姉は頻に鍋や小皿を洗つた。

この姉は此家の總領娘で、なにがし大尉の未亡人で、今年十二歳になる女の子が一人ある。

『少しお手傳しませうか。』

『いゝよお手傳なんぞ、お前、』と輕く言つて、『母樣何うしたえ？　お客かえ？　此頃は少しは店が忙しいもんだから……』と洗ひ終つた鍋を棚に伏せて、『お前が來るッて言ふと、母さんはそれァ大變なんだから。』

『何うして？』

『それは大騷よ。季子はあゝも可愛もんかと思ふよ、』と笑つた。また始まつたとお光は思つたが、話を改へて、

『山本さんから便があつて』

『おや、お光！　早いのね。』

『え〻。』

と笑つて、『菓子屋に居る軍人さんは大變遲い出勤ねえ。』

『あ今行つたね、いつももつと早いんだけれど………。』

『あの人山本さんと同期生ね？』

『あ〻、さうともねえ、山本さんが家の二階に居る時分、始中終よく來たがね………そら杉原さんとか言つたがね。』

『さうでしたか。』

とお光は上らうともせずに立つて居るので、

『何をしてるのさ、お上りな！』

お光は繻珍の鼻緒の新しい駒下駄を古下駄やらバケツやらの散らばつた汚い狹い入口にぬいで、棧に埃の積つた重い硝子戸を開けて八疊の間に入つた。八疊の間！　此間はお光に取つて追憶の多いなつかしい室である。兩方は壁、天井も低いので、外から入ると、鳥渡何物も見えぬほどに暗いが、それでもお光には此暗いのがなつかしかつた。母親は門徒の信者なので、暗い壁に添つて、金色の大きな開きの佛壇があつて、それに並んで、古簞笥が二棹置かれてあつた。長火鉢には鐵瓶が湯氣を吹いて居た。

『何しろ、をばさんは商賣が上手だから敵はん。』

『さうかなこれでも上手かな、』と笑つた。

客が一人來てナイフを見せて呉れといふ。

主婦は脊髓の持病で曲り勝になつた腰をもたげて、種々のナイフの入れられてある箱を出して示した。

あれのこれのと客は選擇に迷つて居る時、ふと八丈の羽織を着た色白の丸髷が眼に入つた。をばさんの胸は波立つた。をばさんはこの丸髷を今朝起きた時から待つて居たのである。

丸髷は昨年さる處に緣附いた娘のお光で、今日來るといふ傳言があつた。

お光は店からすぐ上らうとしたが、混雜して居るので思返して、家の傍の路次から裏へ廻つた。

劒の鳴る音がしたと思ふと、忽ち軍人が其處へ出て來た。昨年士官學校を卒業した少尉で、砲兵の黄い肩章と丈の高い姿とが際立つて眼に附いた。滿更知らぬ顏でも無いので、お光は躊躇して顏を赧くして立留つた。

でも軍人は快活に、『や、これは失禮、』と言つて、二人並ぶことの出來ぬ狹い路次を笑ひながら身をかはして、ざつさと街道の方へ出て行つて了つた。

勝手から入らうとすると、姉が流元に蹲んで、せつせと跡仕舞をして居た。

ばさん』といつもなつかしがられて居るのである。

『をばさん』は例の無邪氣な心配の無ささうな顏をして、前硝子の棚を前に、小さい錢箱を控へて、いつものやうに坐つて居たが、不圖傍にある算盤を取つて、二三度珠を動かして見て、何か少し考へて、今度は小さい帳面を出して、昨夜遲く賣つた品物を考へ〳〵つけ始めた。前の通りには女學生が行く、騎馬の士官が行く、フロックコートの紳士が行く、交番の傍の客待の車夫の群では、中折帽の洋服男と相談が出來て、籤に當つた車夫がガラ〳〵と車を挽き出した。

其處へおろし屋が來た。

『今日は、』と元氣よく腰を懸けた。

『おや、革屋さんかね、』と眼鏡越に男を見て、『まだ澤山あつたがね。此次にしてお吳れな。』

『さうですか、』と言つたが、腰を懸けたまゝ、煙草を出しかけるので、老主婦はマッチを取つて渡した。

『何うも不景氣で困るぢやないかね、』と莞爾しながらいふ。

『それでもお宅などは好いでせう。學校前の讃岐屋などではお客が無くつて困るッてこぼして居ましたが、候補生さんが皆な此方に買ひに來るんで……。』

『あら、ま、さうかな、そんなことは無いぢやろがな。私の方こそ學校が遠いので生徒さんを取られて困るぢやないか。』

妻

一

其頃はまだ電車はなかつた。見附の壕端の櫻は昨夜の雨に催されて大分蕾があからんで來たが、からりと霽つた朝は此頃にめづらしい麗かさで、朝日を受けた片側町には番傘が處處に干されてあつた。評判の細君の居る書籍店、理髪店のペンキ塗、靴屋、馬具屋の看板、麵麭屋、鰻屋と檐を並べて明神の宮の大華表へと接して居るが、其間に一軒、ダイヤモンド齒磨のびらの際立つて眼につく雜貨店があつて、色の白いよく肥つた言葉附の丁寧な五十二三の中老婦がいつも坐つて居た。

何うせ場末の小さい雜貨店、金目の品が置いてあらう筈はなく、毛糸、シャツ、ヅボン下、革帶、石鹼などの日用品に子供相手の學校用具、繪草紙、繪はがき、手帳、インキ壺位が關の山であるが、それでも商賣はかなりに繁昌して、月々の儲けは一家の經濟を半ば補けて行くに十分であつた。それといふのも此中老婦の愛嬌が呼物になつたからで、此界隈での唯一の御得意の士官候補生からは『をばさんを

妻

一週間目に其寫眞が郵便で屆いた。割合によく寫つて居た。立つた光子のが一番立派で、眉の長い細面の丸髷姿がすつきりとして居た。男の兒をお桂が抱いて、お梅は自分の兒を膝にして、二人並んで腰を懸けた。女の兒の笑顔がいかにも可愛らしかつた。

寫眞の話が一時三軒の家を賑かにした。いろ〳〵な批評が出た。お梅の眼色の可笑しいのを言つたのは秀雄で、光子の手附の變てこなのを見出したのは銑之助である。お桂の位置の取りようが惡かつた爲め、顏が鳥渡別人のやうに見えるのを、『今少し傍に寄れば好かつた、』と主人が言つた。

『一番好く寫つた人は、割前をたんと出すが好いね。』

とお桂はキャッ〳〵と笑つた。

序に寫眞を藏つて置く小箱が其處に展げられる。明治の初年に大阪で撮つたといふ大小を差した父親の寫眞はもう黃く薄くなつて居た。それに兄弟が三人揃つて撮した少年時代の寫眞、誰れだか解らぬ丸髷の女と一緒に撮つた中年の頃の母親の寫眞、死んだ叔母の寫眞、嫂の寫眞、總領の姉の寫眞は其頃はやつた種板其まゝの硝子製で、木の框の壞れて取れたのを丁寧に母が白紙に包んで藏つて置いた。其の他に昨年英男と一緒に寫した母親の寫眞が一枚あつた。兄弟は皆なそれを手に取つて見た。

何うも思ふやうにならぬので癇癪を起して、『本當に厭になつて了ふよ、』と焦れて見たが爲方がないので、大抵にして着物を着た。じみな鼠か何かの紋附で、帶もよく見馴れた繻珍の丸帶である。でも脊倒なので、ちよつと姿が好い。

『嫂さん、よく似合ひますよ。』

とお梅が言ふと、

『えゝえ――、よく似合ふでせうとも！　髮がぺちやんこで、着物がお古のおゆづりと來てるぢやかね、』と言つて、帶をキウと堅く緊めて『旦那樣がもう少し働きがあんなさると好いんぢやけどねえ。』

『まァ、嫂さんがあんなこと！』と光子は笑つた。

支度が出來て、俥が來て、いざ出懸けようとする時、主人が、

『歸りに土産を澤山買つて來るんだよ。』

『はいはいかしこまりました。』とお桂は茶化したやうにいふ。

俥なので、存外早く、午少し前には、三人は寫眞を撮つてもう歸つて來て居た。紅谷のあんころが土産であつた。主人が自ら立つて來て茶を淹れる。寫眞屋の話が始まつた。室が立派であつたの、鬚の生えた寫眞師が可笑しかつたの、何處かの華族のお孃さんが馬車でうつしに來て居たの、ダイヤモンド入の指環が立派であつたのと、話は容易に盡きなかつた。

助は母親の死んだ年に、思想上に少なからぬ變化を來して、自から進んでなにがし雜誌社の編輯員になつて、今でもわづかの俸給で、毎朝風呂敷包をかゝへて出勤して居る。長兄の洋服姿も依然として淡竹の大藪の向ふにてく／＼と歩いて行く。

ある日曜に、光子は縮緬の着物に縮緬の羽織といふ立派な扮裝で、同じく盛裝した兒を抱いて、下の家へと出懸けて行くと、

『もうおつくりが出來たのかねえ、まア、綺麗にねえ………。』とお桂は迎へた。

『上の嫂樣もまだ入らつしやらいの？』

『えゝえ、まだ來ませんがねえ、もうぢき來るでせうよ、』と子供の着物を見て、『よく似合ふのねえ！』

『いゝえ。』

と言つたが座敷の机に坐つて居る長兄の前に行つて、『兄さん今日は………』と丁寧に挨拶する。

今日は女連が三人お揃で、九段の鈴木に行つて、記念の寫眞をとらうといふのである。

やがてお梅も綺麗に粧つて、女の兒を抱いて來た。女の兒は友禪縮緬の美しいのを着て、莞爾して居る。相變らず扮裝の話が出る。やれ帯留が好いの、半襟の色合が好いの、櫛が好いの、簪が好いのと際限がない。光子が金の指環を二つ迄はめて居るのを、お桂もお梅も羨ましいことに思つた。

お桂は二人を待たせて支度をした。鏡の前に立つて、髮の亂を頻りに直したが、生れつきちゞれ毛の

の音高く出勤すると、後では子供の泣聲がして、若い細君が頻りにそれをなだめる氣勢がする。若い細君は光子であつた。

二人の戀愛問題は中々難かしかつた。老祖母の反對、親戚の反對、これも隨分烈しかつたが、それよりも一層困つたのは、田舍新聞が何處から何う材料を搜し出したか、光子の懷姙した事を其紙上に麗々しく掲げたことである。で、大騷ぎになつて、手紙が原の家に來て、母親の死んだ翌年の二月、主人は弘前に出懸けて行つたが、一緒に伴れて來た光子はもう六月の大きな腹をして居た。光子はなつかしい父母、なつかしい戀人に離れて、二百里の都に二人の嫂に介抱されて、その母親の死んだ八疊で男の兒を分娩したが、其年の秋には何うやら彼うやら話が纏つて、おもてむき秀雄と結婚することになつた。それに秀雄は翌年の春、戸山學校に術科研究の爲め隊から派遣されることゝなつたので、それで取敢へずこの兄の近所に家を持つたのである。

光子は美しかつた。それに性質が優しいので、近所でも評判であつた。唯、弘前なまりが容易に取れぬので、いつも嫂達に笑はれる種をつくつた。

兄弟三人――三軒の家は一家のやうに睦しく往來した。男達が交る〳〵御馳走を拵へさせて酒を飲むと、女連は男達に留守番を頼んで、一緒に神樂坂の縁日に出懸けた。

裏の家では女の兒が產れて、お梅がねんねこで負つて、其處等を歩いて居るのを常に見懸ける。銑之

やがて『本當に力になつて下さる母樣でしたのに………』とお梅は言つて『けども、もう爲方がありませんから、………二人で一生懸命に、どんなことでもして。』

二人は始めてうき世の波に觸れたやうな痛切な悲哀を感じたのである。夫婦としての意味以上に、ある力强い密接な關係がかれ等の上に生じた。

お梅は丁度六月である。

五十日に今一度お祭があつて、一家揃つて墓參をした。床の間に飾つた神壇は其日を限り撤せられて、位牌は父親の靈の祀られてある家の神棚に加へられた。主人の手向けた花は暗い家を明るくした。

三十九

二年經つた。原の家はもう原の家ではなくなつた。老百性夫婦の借りて耕した畠も宅地になつて、縱横に路が附けられて、新しい家屋が幾軒となく建つた。和洋折衷の下宿屋も出來れば、大きな門構の板塀圍ひの二階屋も出來る。路の角に新につくられた共同の井戸には、近所の女房連が終日長く饒舌を續けた。

北に寄つた小路の奥に、小さな門の四間ばかりの新建の家屋があつた。狹い庭には樹も無ければ草花も無い。玄關の格子を明けると、綺麗にみがいた長靴と短靴とが置かれて、出來で買つて來た下駄箱には、繻珍の鼻緒のすげられた新しい女の駒下駄が入れられてあつた。每朝夙く、軍服を着けた中尉が靴

よ。』

汪然として涙が溢れた。

思返して序文を書いた。和文調で母の死に逢つた悲哀を叙した。『これよりは時雨降り、木の葉散り、さらでだに悲しき秋を、かしの實のわれ唯一人いかに佗しき世をば經べき、』と書いた。最後に、『大なるめぐみに酬ゆべきもの無し、せめてはこのはかなき小さき文をだに御前に奉らばや。』

かう書いて筆を擱いた。まだ涙がかれの頰を傳つた。かれは大きい手を顏に當てゝ歔欷げた。

垣根では蟲が頻りに鳴く。

其處にお梅が來て、

『何うしたんですの？』

『母樣が死んで了つた。もう一人だ。』

見ると夫が泣いて居るので、お梅も悲しくなつた。慰むべき言葉も出ない。

『もう一人だ！』と銑之助は繰返して言つて『もう力になつて吳れるものは無い。お前と二人で此世の中を渡らなければならない。』

お梅も催されて泣いた。

少時は沈默に落ちた。

時の間に全く一變した。

三十八

秋は來た。露は草の葉にしとゞに置いて、蟲の音が物哀れに垣根に鳴く。月の明かな夜が幾夜か續くと、今度は冷たい雨がしとしとと降つた。

銑之助はさびしい思をして居た。下の家はもう兄の家嫂の家になつて了つた。丁度其頃かれは最初の小文集を公にするつもりで、出版元から日毎に送つて來る校正を見て居たが、最後の一臺を終つて、序文を書かうとしたのは、母の四十日の祭を濟まして歸つて來た夜であつた。晴れては居たが、闇で、天の河が明かに空に横はつて、星が閃々と輝いて居た。

理由なしに涙が滴れる。子の爲めに親は其總てを盡した。子は親の爲めに果して何を盡したか。母は難かしかつた。けれど難かしい以上に溫情であつた。われ等の爲めに、眞心から悲しみ、眞心から憂ひ、眞心から、怒つた。むづかしかつたのは優しかつた爲めである。であるのに、子等は何を以てこれに酬いた?

人間の淺ましさが今更のやうに犇と胸に迫つた。少時して思返して、

『けれど、之が人間である。之が自然である。逝くものをして逝かしめよ、滅ぶべきものを滅ばしめ

暗鬪とにおたら月日を送つて來た。主人は今更のやうに、一人は死じ一人は離縁した先妻を氣の毒に思つた。

『お前なぞ仕合せだ。』

『何故ぢやね。』

『もうこれからは樂が出來るから。』

『お雪さんを又思出したのかね。』

『馬鹿な。』

『だッて此間の手紙ッたら厭ッたらしい、見られやじないがね。樂が出來るやうになつたから、お雪さんを呼んで上げるが好いぢやがねえ。』

『お前は何うする！』

『人に散々苦勞をさせて阿房らしい。』と、今度は本當に膝の處をピシャリと打つた。

主人は笑つて居る。

賑かな笑聲が原の家に聞えるやうになつた。隣の細君は例の若づくりで、絶えず遣つて來ては面白さうな話をして行く。眼の悪い老婆も縁側に來て、用も無いのに長い饒舌を續ける。お桂の甥に當る早稲田の學生も今迄は一度も來たことも無いのに、行きかへりにちよいちよい寄るやうになる。生活狀態は

仕舞を爲たり、襷懸になつて劾々しく働いて居たが、洋燈が點く頃、二人はまた長火鉢に相對して坐つた。

主人は煙草を一服吸つて、ドンとはたいで、

『まア、これで濟んだ！』

『隨分の騷ぎ……。』

『お前も大變だッた。』

『本當にねえ、此間など、私つくぐ厭になつて了つたがねえ。』

『でもお前も中々隱蓺があるナ、』と莞爾ずる。

『隱蓺ッて何ぢやね。』

『あんなに酒の曲飮みが出來るとは知らなかつた。』

『何ぢやね、阿房らしい。』と打つ眞似をした。

二人は始めて一家の主人になり得たやうな心地がするのである。かうした鳥渡した戯も今迄は決して出來なかつた。夫婦の愛情を少しでも表面に顯すと、すぐ厭な眼で睨まれた。主人など殊に其感が深い。他所の夫婦は睦しさうに縁日に出懸けて行つたり、一緒に三越に着物を買ひに行つたり、思ふまゝの快樂に耽つて居るのに……。其身ばかりはさうした甘い味も全く知らずに、むづかしい口小言と衝突と

助に促されて秀雄は鞄を明けて書籍の間に挿んで置いた光子の寫眞を出して渡した。銑之助の眼には可愛い眼をした小づくりの娘の姿が映つた。

『何處か中町の絹さんに似てるね。』

『うん!』

と秀雄は顏を赤くして、仲兄の手から寫眞を取つた。中町の絹さんは秀雄の幼馴染である。

待つ間程なく汽車が來る。若い士官は劍鞘を鳴して二等室に入つた。場末の停車場は乘降の客も少く、車掌が手を擧げて笛を鳴すとすぐ動き出した。

秀雄は窓から顏を出して、停車場に立つて居る白地の浴衣姿を小さくなるまで見て居たが、やがて線路が曲つて見えなくなると、そのまゝ腰を下して、隱袋から寫眞を出して、飽かずその姿をながめ入つた。汽車が赤羽に着く頃、銑之助は淋しい顏をして、高田の穴八幡の傍の坂を降り懸けて居た。

三十七

お駒も歸ると、跡は靜かになつた。主人とお桂と男の兒と夕飯の膳もさびしい。

男の兒は箸を置くと其儘、急いで遊びに出て行つて了ふ。夫婦は默つて飯を食つて居たが、それも濟むと、主人は床の間の神前に線香を添へて、庭から井戸端のあたりを逍遙する。お桂は水を汲んだり跡

『旨く行けば、さうだけれど、競爭者が多いからねえ。』

面影橋をもいつか過ぎて、兄弟は雜司ヶ谷の通に出る低い坂を登つて居た。

『寫眞があるだらう？』

『うむ？』

『歸つたらすぐ送つて吳れ。未來の義妹に早く御ちかづきになりたいから。』

秀雄は躊躇して居たが、『實は持つてるよ。』

『持つてる！　寫眞を。』

『うん。』

『ぢやお見せ！』

『鞄の中に入れてあるから、停車場に行つてから……。』

銑之助は笑つて『それなら早く見せれば好いのに！』

『だツてそんな氣になれなかつたもの。』

通に出て、肴屋、荒物屋、馬具屋、桶屋などの軒を並べた場末の汚い町を拔けると、濶々とした野の上に、秋近い白い雲が靡いて、榛の並樹で緣取つた田舍道を空車の音が高く響いた。

停車場は空いて居た。時計を見ると、時間まではまだ二十分ほどある。切符もまだ賣出さない。銑之

『それは、もうさうする積りなんだけれど。』

『それは好い！』と銑之助は其身のことでもあるやうに喜んだ。

秀雄は種々のことを包むところなく語つた。勿論、軍人の訥辯で話した積でも十分に其戀物語を傳へることは出來なかつたが、しかし銑之助は自分の想像で聞くので、其消息はよく解つた。

『折があつたら、兄樣にも話して置いて下さい。』

『よし、よし。』

『何うせ、話を進めれば、兄さんや銑ちやんに世話にならんけりやならんのだから、僕からも兄さんに言ふけれど……。』

『よし、よし』と點頭いて、『早くきめる方が好いぢやないか。』

『だつて、少尉ぢや食つて行かれないからねえ。』

『そんなことは無いさ。』

『それにおもてむきの結婚となると、保證金も入るし……。』

『さう〳〵、さういふ厄介ものがあるね。』

『だから、今一二年、中尉になるまでは、結婚は出來ないけれど……。』

『もう、今年の暮あたり昇進するんぢやないか。』

お米は大きな風呂敷を俥の蹴込の下に、メリンス友禪の單衣を着た女の兒を八月の大きな腹の上に抱へて、主人と銑之助と秀雄と其他の女連に見送られて別れて行くのであつた。

秀雄も發つ準備をした。鞄の中には娘に贈物の半襟と帶留、娘の弟妹に遣る繪本とリボンなどが入れてあつた。酒呑の中隊長に賴まれて、新橋際の大きな陶器店で豆腐鍋を買つたが、さてこれを壞さぬ樣に何うして持つて行かうかなどゝ苦心した。榮太樓の甘納豆、玉だれなども其中にあつた。

暑い日であつたが、何となく秋の氣が空に滿ちて居た。目白の停車場まで、銑之助が送つて行くと言ふので、俥には荷物だけを載せて兄弟は歩く。

亡き母のことや、嫂のことや、長兄のことや、お米のことなどをいろ〳〵に語り合ひながら、軍服を看た秀雄の白地の浴衣にへこ帶をしめた銑之助とは、戸塚町の軒の低い貧しい商家の家並の午後五時過の日影を拾つて行つた。

面影橋に曲る道の角あたりで、何うした調子か、秀雄は娘の話を始めた。

銑之助はざッと聞終つて、

『それは好い、それは好い。』

『何うも親類がむづかしいから、旨く行かんかも知れんけれど……。』

『なアに、大丈夫だ。此方の考さへきまつて居りや。』

『大きなお腹をして本當に危いよ!』

と義兄が言ふ。その言葉には笑つたやうな調子が籠つた。

主人は默つて居た。妻の無法を羞かしく思つたらしい。秀雄もお梅も吃驚して立つて見て居た。お駒は、『何んだらうね、まァ、大きななりをして、喧嘩なんぞして、呆れたものだよ。』

お桂も一時の感情が覺めると、流石に羞かしい。けれど夥しく醉つて居る。前の船乘の夫の仕込で、酒を飲むことは覺えて居るが、こんなに醉つたためしは無い。險しい顏は青く、眼は据つて居た。

でも何うやら彼うやら白けた席がまた賑かになつて、やがて駄洒落を言つて面白げに笑ふ主人の聲が賑かに四邊に聞えた。

三十六

墓參を濟ましての翌日、お米は淋しい心を抱いて母の家に別れを告げた。田舍の家の生活もつらい、十年以上連添つた夫も賴みにならない、けれどもう二度と再び此家の閾は跨ぎ度くないと思つた。もう親の家では無い、兄の家だ! お別れにもう一度位牌の前に線香を上げた。細い煙がすうと青く立上る。お米はそれをじつと見て居たが、堪らなく悲しく心細くなつて、涙は我知らず霰のやうに袖の上に落ちた。

『人の家に入つて來て、勝手なことをして、自分一人で看病したやうな顏をしやがつて……。あきれた女ぢやがナア。』

『大きな御世話だ。』

『お桂！ お桂！ 默つて居れ！』と主人は聲を厲ました。

『默つて居られるかねえ。こんなに馬鹿にされて……』とお桂は泣聲になつて、『人を散々踏付けて、勝手なことをされて、私や口惜しい！』

と忽ちお米に武者振ついた。

隣にある膳の皿やら茶碗やらが、滅茶々々に壞れた。主人が慌てゝそれを留めに中に入つた時はもう遲かつた。お桂はお米の胸倉を取つて手を擧げて亂打した。お米も負けずにお桂の髮を摑んだ。

席にあつた人は總立になつた。何事かと勝手からお駒も飛んで來た。主人と義兄とがやつと二人を引分けた時には、お桂の髮は滅茶々々に壞れ、お米の顏には爪の痕があつた。

『放してお呉れよ、嫂も糞もあるもんか。お位牌の前だから勘忍して居れば好い氣になりやァがッて……。』と頻りに罵りながら、執られた袖を振放たうとするお米を、押すやうにして銑之助は四疊半に連れて行つた。

後を見送つて、

『えゝえゝ、酒なんかいくらでも飲めますとも！』

『お桂、馬鹿をするなといふに。』

『いゝぢやありませんかねえ。酒位飲んだッて。本當に馬鹿々々しい。自分一人で看病したやうな顔をしやがつて……酒々として……。』

『何ですッて、嫂さん。』

とお米は屹とした。

『何ですもあるもんかねえ。何方が姉だかわかりやしない……。』

席は少時沈默に落ちたが、避くべからざる暴風は遂に來た。

『嫂さん、今一度言つて御覽なさい。何ですッて、碌々世話もしない癖に………。人の親を死ねがしに扱つて、嫂さんなどに取つちや一刻も早く死ぬ方が好いだらうけれど、………私には大事な親だからね。』

『誰が死ねがしに扱つたぢやかねえ？』

『誰だか心に聞いて御覽。』

『さういふお前さんこそ……。』

『私が何うしたえ？』

國に歸ると謂ふので、晝間それ〴〵形見分をする。母親の紋附はお米が貰ふことになつた。

長々の看病、御苦勞樣だとあつて、今日は女連も皆な座敷に直つて膳に就いた。八時頃には客は大方醉つて、折を持たせられて歸つて行くものもあつた。

座は既に白けた。

ふと主人が氣が附くと、お桂は濟まして膳に向つて頻りに酒を飮んで居る。飮むと言ふよりも寧ろ呷つて居る。顏は眞赤になつて、物に激した調子が名殘なく其態度に顯はれて居た。少し離れて坐つたお米の顏にも何となく不穩の色が上つた。

『お桂！』

と主人は呼んだが返事も爲ない。

『お桂！　馬鹿をするな！』

と續いて言つたが、聞えぬ風をして、德利を手にしたまゝ、頻りに盃に酒をつぐ。

『お桂、お前は聞えないか！』

此聲が甚だしく尖つて居たので、お米は險のある赤い顏を主人の方に向けた。

『嫂さん中々酒が行けるんですねえ？』

ふと傍から言つたお米の言葉には冷笑の調子が籠つて居たので、

『僕は何も形見はいらんから此を貰ひ度いナ。』

『それを何うするんだ。』

『指環でも拵へさせるさ。』

『お前が指環をはめるのか。』

『どうせいゝ人に遣るのさねえ！』と銑之助は傍から冷かした。

『いゝだらう、兄様！』

『ずるい、ずるい………。秀はずるいよ、』とお米は言つた。

『好いさ！　僕は貰うんだ！』と秀雄は猶それを弄つて居た。

同胞は形見分けの相談をした。母は平生着物などを餘り多く持つて居なかつた。好いものは總領の娘とお米とに既に大抵は遣つて了つた。秀雄が士官學校を卒業した時にこしらへた紋附位が先づ重なるものである。主人はそれをお桂に遣る下心らしく、お米は自分がそれを貰ふ權利があるやうに思つた。二人の暗鬪はこれにも起つた。

三十五

十日祭の前夜には重立つた親類が皆集つて、賑かな酒宴があつた。明日お墓參をして、秀雄もお米も

墓參には交る〳〵行つた。三日目には墓前の生花が全く凋れ果てゝ居た。家では主人が同胞と一緒に亡き母の遺物の整理をしたが、其中からは古い鏡やら帳面やら古金銀の包やらが出た。小さく包んだものを何かと展げて見ると、それは子供等の產毛と臍の緒で、主人のも銑之助のも秀雄のもあつた。父親の筆蹟で生年月日と名とが記されてある。猶別に同じ小さい紙包があつた。それは父親の遺髮であつた。これを見るといづれも黯然として父母の一生を思つた。

『皆なの臍の緒を己が持つて居たつて仕方が無いから皆なに返すぞ、』と暫くして長兄が笑ひながら銘銘にそれを渡し、『お米のは何うして無いんだらう？』

『私のは私が持つて居るよ。東京に皆なが出て來る時、お前のはお前が持つてお出でッて、母樣が私に渡して吳れたから。』

『さうか、それなら好い。』

『臍の緒も自分自分に保存しなけりやならくなつたんだナア、もう。』

と悲しさうに銑之助が言ふと、

『それはさうさね、お前。いつ迄そんなこと言つて居られるもんかねえ。お前だッてもうぢきお父樣になるんぢやないか。』とお米は笑ふ。

古金銀は二朱金が五枚、二枚金が十枚、一分銀が五枚ほどあつた。秀雄は二朱金を頻りに弄つて居たが、

成して居た。土に塗れた人足は棺を受取るや否、細引を懸けて、する〳〵とそれを穴に下した。土塊の棺の上に落ちる音がする。

親戚知己は皆な土塊を拾つて穴に投げ入れる。瞬く間に墓は築かれて、新しい墓標は楓、椿などの繁茂を明るくした。一同は形の如く水を手向けて葬式を終つた。

親しい人々は藤棚の茶屋の奥座敷に休んで茶を啜つた。銑之助は長押に懸けてある油畫を立つて見た。主人は義兄と襖の名家の書に就いて話した。ある事業を終つたといふやうな滿足は誰の胸にもあつた。

家に歸つてから床の間に飾つた位牌の前で、しるしばかりの酒宴があつたが、やがて親戚の誰彼も暇を告げて歸つて、一同は連日の疲勞に死んだやうになつて熟睡した。

夜深く神前の蠟燭は消えて居た。

三十四

のんきな平凡な日が續く。母の居なくなつたことは何となく淋しい。殊に銑之助には其感が深かつた。何うかするとまだ其處に寢て居るやうに思ふ、難かしいことを言つて居るやうにも思ふ………。何んなに難かしくツても生きて居て呉れた方が好いなどとも思つた。母の面影はまだ其暗い家の軒を離れなかつたのである。

練兵場を銑之助と競爭して驅けた。原の外れの一株の銀杏の樹、其陰にはいつも荷車や俥が五六臺休んで涼んで居たが、其處で兄弟は後れた母親の來るのを待つた。

長兄はそれよりももつと以前のことを思ひつゝ歩を運んだ。まだ練兵場にならぬ前、古い屋敷と古い町、檐の低い商家が連つて、衰頽の氣が巴渦を卷いて居た。其町に六道の辻といふ處があつた。其處を姉――力にした姉の葬式の行列に跟いて行つた時のことを思ひ出した。

青山の齋場では、神官が傳記に似た祭文を朗讀した。神道の式は簡單ではあるが、何となく人々の心を動かした。

會葬者の中には、父親の舊友が少くとも四五人は居た。根岸に居る時分よく酒を飮み合つた連中である。一人は警部長、一人は本郷の區長になつて居た。長兄が和文で書いた弔詞を讀上げる時、『皆な大きくなつてかうして立派な葬式を爲るやうになつた！ 吉田が生きて居たら、さぞ喜んだらうに』と思つて、軍服を着けた秀雄が悄然と頭を低れて居るのを見た。

式が濟むと棺は墓地へと運ばれる。三坪の狹い要垣の中に、數箇の墓標は半ば朽ちて祖父のなどは雨風に全く腐れ果てゝ居た。十年の間に四度の葬式、先妻の墓石の他に祖父母の墓石を建てたいといふ願は常に主人の心にあつたが、貧しい苦しい生活ではそんな餘裕は無かつた。

乳房で壓されて死んだ子の墓標と先妻の墓石との間に母親の墓は選ばれて、掘つた穴の赤い土が山を

づかしい婆樣も居なくなつて、旦那はこれから仕合せ！』などゝ言つて居るのもあつた。

喜久井町の通では皆原の家を知つて居た。白髪頭の、齒の拔けた、難かしさうでそして他人には丁寧なやさしいお婆さんをよく知つて居た。で石屋、車屋、理髮屋、烟草屋の亭主やら上さんやら皆な店頭に出て、其行列を見る。角の氷屋の意氣な姉妹も出て居た。

一町ばかり來ると、材木屋の娘が朋輩らしい十六七の娘を伴れ立つて此方に歩いて來たが、葬式の行列を見て、

『そら　酸漿のお婆さんさ！』

『さう………。』

と他の娘も立留つた。

途中は長く暑かつた。それに風の強い日で、青山の練兵場は黄い埃を揚げた。銘旗がばた〳〵と音して、徒歩の群は半ば後れ勝になつた。

共葬墓地には吉田の家に取つて緣故のある墓が少くない。祖父母、嫂、嫂の子、それに總領の姉も此處にあつた。盆とか彼岸とかには、同胞は母親と一緒によく墓參をした。早く死んだ總領の娘の墓に母親は秋の草花を手向けて泣いたことがある。交番の前の藤棚の茶屋、樒と線香とを買つて、手づから桶を下げて、墓と墓との間を縫つて行くのが常であつた。其頃は秀雄はまだ少年で、『歸途には屹度青山の

したくなる。出棺前の誄辭を神官が讀む間、秀雄は隣に坐つたお梅の膝をつゝいて頻りに可笑しがるので、お梅は笑ふには笑はれず困つて居た。

長い誄辭が濟むと、燒香が始まる。それも濟むと、今度は愈々最後のお別れ！　親しい人の限りは棺の周圍に集つた。棺の蓋を取ると、其瘦せ果てた醜い顏！　涙の雨はまた一しきり人々の袖を濕したが、やがて葬儀社の人足の監督が來て、冷かに棺の蓋をカンカンと打附ける。其音が狹い暗い家の隅々まで響き渡つた。

庭には會葬者が既に多く集つて居た。夏の暑い日盛、樹の蔭、家の蔭に白い扇がばた〳〵と動く。生花、造花、榊、白衣の人足は門前に群を爲して、十數臺の俥は前の坂の半まで續いてゐる。近隣の人々も思ひも懸けず葬式の立派なのに驚いて眼を瞬つた。

棺は緣側から運ばれて棺臺の中に納められる。人足がすぐ擔ぐ。やがて庭樹の間を門前に出た。

主人から銑之助、續いて少尉の新しい軍服を着けた秀雄、位牌は孫の男の兒が俥に乘つて持つた。

銘旗が風に飜つた。

棺は坂の上まで行つて、しばし後から續く行列の揃ふのを待つた。行列の順序を世話する役目の鬚髭の紳士は、てんてこ舞をして、女連を車に乘せて居る。――やがて行列は續いて棺は動き出した。家に殘る人々は門前に立つて長く見送る。隣の老婆も坂の下の處に出て居る。近所の人々の中には、「あのむ

で、棺の中に納める。薄い蒲團を一枚敷いて、葬衣を着せて、白い脚絆に白い甲がけ、胸には頭陀袋を懸けて六道錢を入れた。佛式でないからとの注意がまたあつたが、女連はそんなことに頓着しなかつた。杖も入れた。草履も入れた。遺骸の周圍を埋めた樒の枯葉の香が一室に漲り渡つた。

三十三

燒香の順序に就いて、お米とお桂の間に暗鬪があつた。葬式に列する女連の衣服に就ても紛紜が起つた。紋附を持つて居るものは遠い血統でも行列に加はり度いし、持たぬものは衣裳を見せびらかす爲に行くのならやめて貰ひたいといふ腹がある。お米とお駒とは止むなく損料で紋附を借りた。

銘旗墓標の揮毫、青山墓地の準備萬般のことはやがて皆整つた。更に一夜を賑かな通夜に過して、出棺は午後一時、午砲の鳴る頃には、家内は戰場のやうに混雜に混雜を重ねて、じつとして坐つて居るものはひとりもなかつた。

主人と銑之助は神主の衣冠を着けて葬式に從ふことになつた。秀雄は退職軍人の意見で軍服を着た。四疊半で銑之助は神主の衣冠を着けて居ると、秀雄が入つて來て、

『銑ちやんよく似合ふぜ！』と笑ふ。

銑之助の其姿は實際可笑しかつた。冠を冠ると面變りがして濟まして坐つて居るのを見ると誰も噴出

と、足を折つたり、首を曲げたり、窮屈で厭なものだが、寢棺ではその心配が無くつて好いと言ふものもあつた。

第一に棺に納めたいと言ふので、肉身のものが寄集つて、湯灌をすることにした。湯はもう以前から沸いて居た。先づ雨戸を半分たてる。茶の間と座敷との襖を仕切つて、他の人々には茶の間の方に一先づ集つて貰つて、屛風と遺骸とを一隅に寄せて、中央の疊を三枚揚げた。

大盥に湯が波々と汲まれる。湯灌をする連中は古い單衣に着かへて、繩の帶を緊めて、其盥の周圍に立つた。お駒とお米がそのまゝ遺骸の衣裳を脫がせたが、『まァ此樣になつてねえ！』とお米が得堪へずまた泣き出すのを、主人が手傳つて、盥の處に運んで來ると、櫛職人はかういふ世話はよく爲つけて居るといふ風で、効々しく手やら足やらをざぶ〳〵と洗つて遣る。『綺麗におなんなさいよ、ねえ、叔母さん！』とお駒は顏を洗つた。

死人はぐたりと手を垂れて首を曲げて眼を閉いで居る。それを薄暗い洋燈の光が朧ろ氣に照して、氣味惡く死の影を四邊に擴げた。肉身のものは少しでも洗つて遣るものだと言ふので、皆な手やら足やら胸やらを洗ふ。南無阿彌陀佛の唱名が處々に起る。秀雄は無造作に手拭で顏を拭く。銑之助は見るに忍びないやうな暗い顏をしてじつと立つて、このさまを見て居たが、最後に思切つて足を洗つた。死の冷かさが總身に傳つてギヨツとした。

だ山の物、海の物が三寶に載せて靈前に供へられた。

人々は皆な思ひ思ひの場所に座を占めて思ひ思ひの談話に耽つて居た。老人はお國替時分のことを語つた。軍人の義兄は父親の戰死した頃のことを語つた。其時この佛が氣丈であつたことが繰返された。櫛職人は若い放蕩時代に櫛を行商に日光の山奥を彷徨したことを、禰宜は館林に居る頃祖父によく小言を言はれて上目で睨められるのが、此上なく怖かつたといふことを話した。若い者はまた若い同士で、秀雄を中心にした一群は、士官學校の試驗の話、數學の話、若い士官の話、演習の話などを熱心に聞いて居るし、鉄之助を中心にした一群は、紅葉、露伴の小說から紀行文の話、名所古蹟の話、山水の話など殆ど其の盡くる所を知らなかつた。滑稽の話も出ると見えて、をり〳〵聲高く笑ふものもあつた。

主人の伯父に當る老人が狐に化かされた話をした。化かされると知りつゝ化かされて行く心外さを手眞似をして話した時には、人々は皆笑つた。狐の話から幽靈の話が出て老人組の方も中々賑かになつた。

『賑かなお通夜で、佛樣もさぞ喜んで居らつしやるだらうねえ！』とお駒の姉の天理教が言つた。

立關の前では月が檜の樹に懸つて、黑い影をつくつて居た。其蔭に、お駒とお貞が立つて居た。鉄之助はお駒にお貞のことを話したので、それで、娘は母親からしたゝか油を絞られて居るのである。娘の歔欷けるのを母親は頻りに小突き廻して糺問した。其處に棺が來た。

取敢へず緣側に置いた。五分板の立派な寢棺である。棺を譽める聲が彼方此方からする。普通の棺だ

『好い月だねえ。』

『先程から此處に居るのか。』

『いゝや。』

『もう棺が來たかえ？』

『いゝやまだ……』と言つたが、『田舍の姉と嫂さんと喧嘩ばかりして居て爲方がありやしない。』

『何か遣つたのか。』

『ナァに、言合はしはしないがねえ、何ぞと言ふと、二人ともすぐぶつぶつと怒つて、變てこで、外聞が惡くつて仕方がありやしない。』

『困るねえ。』

『何うしてあゝだらう？』

『氣が立つてるもんだから、お互ひに小さなことに角を立てるんだ。』

三十二

通夜は賑かであつた。神官が來て誄辭を讀んで二時間ほど居て歸つた。白木の位牌には何々の命といふ長い戒名が新しく書かれた。蠟燭と線香の煙の間に遺骸の長く横はつたのが見えて、三種づゝを選ん

若夫婦は顔を見合せて笑つた。二人は代る〳〵看病に忙がしく、久しくかうして長火鉢に向つて坐つたことがなかつた。それに弟や姉が絶えず遣つて來るので、人目の關が多かつた。勿論二人の間はもう新婚當座のやうな甘い歡樂は無いが、それでも時には手の一つも握つて見たくないことは無かつた。二人は今一度顔を見合せて笑つた。お梅は派手な中形の浴衣を着て、丸髷の鬢のほつれを二筋三筋色白の肥つた頬に亂して居た。

八疊の座敷は暗く、洋燈は徒らに茶の間を照らした。

少時して銑之助は月の明かな庭を彼方此方と歩いた。例の感情的神經で、死んだ母と子等の關係との賴むに足らざるを思つて、何うしてかう人間は汚ないものであるかと考へた。こんなことは當り前のことである、何でも無いことであろと思ひ返しても、渠は矢張胸苦しかつた。

下の家に行かうとして、門を出た。實に好い月夜だ。母のことを考へるに、これほど好い記念になる夜はあるまい。畠の芋の葉にはもう夜露が置いて、蟲の聲が叢にすだく。銑之助は思はず冥想に耽つて、門から少し行つた處の右の小徑に秀雄が立つて居るのを知らずに過ぎた。秀雄は久しい前から門の傍に立つて居た。其處から垣を越して銑之助の家の中がはつきりと見えるのである。

仲兄を遣り過して、後から口笛を吹く。銑之助は氣が附いて振返つた。

『誰だお前か。』

『だッて話せやしませんわね。………だから、私は、ソッと引返して來ましたの。』

『困るぢやないか、………そんなことになつちや、前からそんなことがあつたのかねえ?』

『そんなことは知りませんけれど、ちよいちよい、話などをして居るのは見たことがありました。』

『困るねえ。』

『お駒さんに話して上げる方が好い……。』

『まア、それより行つて見よう。』

二人は行つて見た。もう無論其男が居よう筈が無い。お貞は茶の間の洋燈を後に、脊を丸くして坐つて居たが、疵持つ足の唯そは〳〵と落着かぬ樣子、先程の足音を烏渡耳に入れたので、勘附かれたかといふ疑が其胸にあつた。緣側から上つて行つた銑之助は、默つて厭な眼色をして小柄な桃割に結つた娘を上から見下したが、お梅は打解けて、

『お腹が空いたでせう。もつと早く代るつもりでしたけれど忙しいもんだから。』

『ちつともお腹なんか空きやしませんよ。』

『でも退屈でしたらう?』

『いゝえ。』顏の赧くなつたのが洋燈のかげでも解つた。

匆々にして逃げるやうにお貞は緣側から歸つて行く。

いので、家の中にじつとして居るのは容易でない。十三日の月は已に美しい光を放ち始めて、一點の雲も無く晴れた空に星が疎らに點綴せられた。

三十一

日が暮れてから一時間經つた。

お梅は留守番に頼んで置いたお貞と代つて、夕飯を食はせようと思つて裏の家へと歸つて行つた。其時銑之助は鮮かな月の光を浴びて門の處に涼んで居たが、今行つたと思つたお梅が少時すると戻つて來て、

『貴郎』と手招ぎをする。

『なんだえ』と言つて、行かずに居ると、

『貴郎、ちよつと、話すことがありますから……。』

何かと聞くと、お梅は聲を低く、『今ね、門の處まで行くと、家の垣の中で話聲がするんですの。可怪しいと思つて立留つて聞きますとね。お貞さんが向うの書生さんと……』と言懸けて笑ふ。

『何うしたんだ？』

何も言はずに益々笑ふ。

『可怪しいぢやないか。』

父が戰死して靖國神社に合祀されて居るので、母の葬儀も神道で擧げることに評議一決した。貧乏はしてるが、成るべく立派にといふ主人の意見で、近所にいくらもあるのを擱いて、鎌倉河岸の大きい葬儀社に一切を託して、日比谷の大神宮から神官を呼ぶことにした。兀頭の禰宜が萬事馴れて居るといふ處から、其方の世話は總て其人がすることになつた。生花が三對、造花が二對、榊が一對、御旛の二重に下がる棺臺を選んで、銘旗をも立てる筈だと話すと『それなら立派だ！　高等官の葬式でもそれまでだ、』と退職軍人の義兄は言つた。今夜湯灌をして成るたけ棺に納めて了ひたいので、兀頭の禰宜はすぐ大神宮から葬儀社へと出懸けた。

逆屛風の中には新しい花が更に多く供へられた。西洋蠟燭が美しく點つて、飯を山のやうに椀に盛つた上に箸が二本差されてあつて、枕團子が其傍に置かれてある。神道ではさういふことはせぬものだといふ說もあつたが、神官の來ぬ中は、矢張佛樣なのだからといふ女連の說に從つたのである。屛風の外には、人々が皆な思ひ思ひに座を占めて、故人の話やら雜談やらに耽つて居た。

茶の間から勝手に懸けては、非常なる大混雜、火鉢には鐵瓶の湯が煮え立つて白い湯氣を立てゝ居るし、竈の下には火が赤い舌を出して居るし、流元では水を使ふ音がざぶ〳〵と聞える。女連が一生懸命に夕飯の準備をして居るさまが晝のやうに………。

やがて夕飯が出る。洋燈が點く。晝の暑さは夕暮から出た凉しい風で少し凌ぎよくなつたが、蚊が多

打つた。無論、それは娘の家である。ふと、あと一週間經てば歸れる！と思つた。で、神樂坂から矢來の長い暑い路を、母のことやら娘のことやらを思ひ續けに歸つて來ると、家ではお駒とお米とが茶の間に坐つて、頻りに白い葬衣を縫つて居た。

夕暮近く人が次第に集つて來た。

深川に居る叔母も來た。退職軍人の義兄も來た。死んだ母の甥で本所で櫛職人をして居る男も來た。お駒の姉で天理教の信者だといふ五十恰好の中老婦、お桂の實家の長兄、お梅の實家の仲兄、幾年越し往來したことの無い祖父の甥に當るといふ兀頭の禰宜、狹い家はいとど狹く、挨拶やら歔欷やら追懷談やら、煙草と線香との煙は暑苦しく薄暮の一家を籠めた。

四疊半には、同胞の他に、重立つた親類が寄集つて、頻りに葬式の準備を相談して居る。主人は二三軒奔走して、漸く百圓足らずの金を借りて來たが、其中のひとりには維新後の別離の時藩侯から紀念として抽籤で頂戴した雪舟の羅漢の一幅を抵當にした。此一幅は吉田の家の寶物同樣にして置いたもので、祖父の生きて居る頃は、長持の底深く珍襲して、一年に二度床の間に掛けて孫共に見せるのが例であつた。そして祖父はこれを吉田家の生命のやうに孫共に說聞かせて、これを人手に渡すやうなことがあつては、もう吉田家もお了ひだと口癖のやうに言つて聞かせた。銑之助は祖父の言葉を思出して、自分等の腑甲斐の無いのを悔まずには居られなかつた。

ね。仕方が無い、借りるさ！』

と秀雄はのんきだ。

で秀雄は近い親類――殊に是非來て手傳つて貰はなければならぬ人々に電報を打ちに神樂坂の郵便局に出懸けて行く。主人は色の褪めた紺の脊廣を着て、金の工面に神田まで行く爲めの車を呼ぶ。銑之助はひとり殘つて通知の端書を書くべく四疊半に入つた。

死の報知が傳つたので、近所の人々が先づ第一に悔みを言ひに來る。前の夫婦者、右隣の二階屋の細君、軍人の細君、それがひとりづゝ遣つて來ては屛風の蔭に置かれてある遺骸の顏の上の手巾を取つて、線香を二三本上げて、同じやうな悔みの言葉を述べて歸つて行く。『まァ、まァ、こんなになんなすつてね、長い御病氣でしたからねえ、』と隣の老婆が例の調子で言つた。

一家は何となくそは〳〵して居た。別にこれと謂つてまだ用はないが、何だか非常に用があるやうな氣がされる。お梅は何をして好いか解らぬので、彼方に行つて立つたり此方に行つて立つたりして居た。そして思ひ出したやうに、をり〳〵屛風の蔭に行つて線香を上げる。お米は母のことから引續いて自分の夫のこと家のことを思ひ出して、絕えず眼を赤くして居た。銑之助が端書を書いて居る前の庭には、百日紅が鮮かに夕日に照つた。

郵便局は空いて居た。秀雄は電報を十通打つた。自分の中隊長にも知らせて遣つたが、最後に今一通

早く結末を見たいといふやうな空氣が漲つて居たが、さて結末が到着して見ると、今度はそれとは異つた清い美しい悲しい情が溢るゝばかりに流れ渡つたのである。

けれど一方では兎に角これで重荷をおろしたといふやうな氣がした。誰れも皆な其前に新しい生活の開かれるのを見た。同胞の間の關係も、親といふ連鎖が斷たれたので、全く獨立した自由と寂しさとを感じた。

お駒とお米だけ先に立つて遺骸を薄縁のござの上に北向に臥かして、長い間敷いて居た蒲團を裏の緣側の夕日に干すやら、小形の六枚屛風を逆に立て廻すやら、有合せの晒木綿を取敢へず机に懸けて、其上に香爐を据ゑるやら、線香を立てるやら、裏の野からお貞が折つて來た花を供へるやら、いろ〳〵其始末に忙しがつて居る間に、主人と銑之助と秀雄は、先づ第一に報知すべき親戚知己を選んだ。同時に主人の胸には葬式の費用のことが先づつかへた。銑之助は兄の兼ねての性質を知つて居るので、正面からは切つて出さぬが、內々其れと匂はして、自分も萬一の時と思つて貯めて置いた金二十圓があるから使つて呉れと申し出ると、

『まァ、大恩になつた母の葬式だから、成るたけ立派にしたいからナ、少しは助けて貰ひたい！』

と主人が言つた。

『兄樣は大變だけど仕方がたい。僕等も何うかしたいけれど、貧乏少尉で、金なんかありませんから

かなかつた。

渺くとも三四十分は歔欷やら追懐やら悲しい繰言やらに過ぎた。けれどいつ迄かうして居る譯には行

お駒は先づ其屍の傍に寄つて、『眼を開けて居てはいけませんからね、お閉ぎなさいよ。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛』と生きて居る人に物言ふごとく、眼を閉ぢ口を閉ぢて遣つて、

『あゝあゝ後生が好い、ほら、好い顏に成つた、やさしい顏になつた！』

効々しく後に廻つて、汚ないものがもしや出て居はせぬかと調べて見た。『あゝ綺麗になつて居るよ、何も出て居やしない！』

『さうだらうともねえ、氣丈な母樣だつたから、』とお米はまた顏を掩つた。

お駒はふと氣が附いたらしく、『足や手は體の柔かい内にちやんとして置かないと、あとで困るがねえ……………』茶の間に行つた主人を呼懸けて、

『鐐さん、棺は何うするんですえ！　寢棺ならかうして置いても好いけれど……………。』

『無論寢棺さ！』と秀雄は聲高く言つた。

三十

呼吸を引取る前と引取つてからとでは人々の頭腦が著しく變つた。前には或ることの結果を急いで、

て、互ひに思出したいろ〳〵の悲しい記憶を一つ一つ語り合つては誰も涙に曇る眼を拭つた。暑い夕日は畠の緣の玉蜀黍の赤い葉と丈の高い杉垣とを越して、まともに此八疊に照り渡つた。
其處に捜しに行つたお貞が英男を伴れて歸つて來た。
『坊やは何處に行つて居たんだねえ、まあ、』とお駒は逸早く立つて行つて、『お婆ちやんが――お婆ちやんが死んだがね、もう。』
とまたも涙に聲を曇らせながら、そのまゝ傍に坐らせて、
『そら、御覽、お婆ちやんがもう死んで了つたよ。』
一座は又濕つた。
男の兒は困つたといふ風で、眼を開いたまゝ死んだ祖母の顏をこは〴〵見た。子供ながら、朧ろげに死の何物たるを知つて居るので、涙こそ滴さぬが、默つて悲しさうに頭を垂れた。お駒は水を含ませた筆を手に渡して、
『もうお別れだに、………口をぬらして御上げなさいよ。お婆ちやんはもう死んだからね！』
男の兒は言ふがまゝに死んだ祖母の口を筆で濡らした。
『本當に、お婆ちやんは坊やを可愛がつて居たのに………。もう抱いて寢て吳れる人も無いねえ。』お米は堪らなくなつたやうに聲を立てゝ泣いた。

く色の淺黑い無邪氣な大きい顏を涙が流れた。

主人もお梅もお桂も皆泣いた。

醫師は來たが、ちよつと脈を取つたばかり、もう胸を明けて見ようともしなかつた。極めて平氣で、

『たうとう亡くなつたか。お婆さん、幾つぢやナ？』

『六十一でした。』

と主人が答へる。

『六十一ではまだ惜しかつたぢやな。八十まで生きる人もあるんだから………。それにかう息子さんが皆な大きくなつて、立派になつたのだから猶殘念だ。』

『もう、一二年生かして置きたう御座いました、』と言つた主人の聲は曇つた。

『まア仕方が無い。幼い子を三人も置いて死んで行く母親もあるんだ。………それに、手當も十分にしたんだし、これも壽命とあつて見れば止むを得んぢやて……』鞄を携へて立上つて、『それぢや診斷書はすぐ書いて置くから取りに寄越しなさい！』

さつさと暇を告げて行く。

子等はまだ其傍を離れがてに、默つて其周圍を取卷いて居た。一しきり泣いた烈しい壓迫は夏の空の低氣壓のやうに、忽ちにして過ぎ去つたが、今度は緩い靜かな深い追懷に伴つた悲哀が人々の胸を蔽つ

『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛！』

お駒は一生懸命に唱名をして、頻りに口を筆で濡らしながら、『死ぬ時と謂ふものは、水が欲しいものだ相だから』とか何とか言つて、さも〳〵情に堪へないやうに、『好い叔母樣だッたに……。よく物の解つた、利口な叔母樣だッたに……。』

涙が其頰を傳つた。

呼吸が絕え〴〵になつたと同時に、ぐつと痰が咽喉にこみ上げて來て、二度三度顚をしやくつたと思ふと、それきり息は絕えた。

手の脈を取つて居た主人も今が最後であるのを知つた。

最後！　死！　と思ふと、悲哀の情が溢るゝやうに人々の胸に漲つた。死は總ての事情を忘れしめ、總ての汚れた思を淸淨ならしめる。死に面しては、誰も嚴かな悲哀と同情とに撲たれぬものはあるまい。

『南無阿彌陀佛〳〵』とお駒は猶唱名の聲を止めずに、『銑ちやんも秀ちやんも最後の水を含ませてお遣りなさい。親子の緣もこれが限りですよ。』

低頭勝にして居た銑之助の眼からは、涙が霰のやうにほろ〳〵こぼれた。秀雄は少し離れて覗き加減に死者の顏を見て居たが、この悲しい言葉を聞くと、堪らなくなつたといふやうに平手で無造作に面を掩つて下唇を嚙んだ。つとめて抑へて居る樣子であるが、胸には波を打つて悲哀が押寄せて來ると覺し

『早く銑と秀を呼んでお出で！』

お梅は慌てゝ顏色を變へて飛んで行く。主人は玄關のお米を搖り起す。お駒は濡れた手のまゝで緣側から上つて來る。靜かな夏の晝の平和は忽ち破られた。

『貴郎、貴郎、大變！』とお梅は庭から聲を立てゝ入る。

『何うした！』

『母樣が變です！』

銑之助はすぐ立上つた。そのまゝ傍に仰向に寢て居る秀雄を搖つたが、容易に目覺めない。うん〳〵と返事を爲ながら、すぐまた眠つて了ふ。いろ〳〵にして漸く起すと、目を摩つて不平さうに、『何うしたんだ？』といふ。『何うしたんぢやない、母樣が………』と話すと、澁々ながら起き返るには起返つたが、まだすつかり眼が覺めないといふ樣子。

それを漸く促し立てゝ、急いで下の家に驅附けると、お米が眼を赤くして筆で末期の水を含ませて居る處であつた。呼吸はまだついて居た。深く刻むやうに時を置いて、半開いた瘦せ果てた顋が其度每に動いた。見開いた眼は義眼のやうにぱつちりして、手を遣つて見ても、もう眼ばたきを爲なかつた。

『母樣！』

と泣聲でお米が呼んで見たが、もう通じぬらしい。

『それから生れた時刻に人は死ぬものだと謂ひますねえ、叔母さんは何時頃生れたんでせう、知つてる人はありませんか、』とお駒が言ふ。

誰も知る者は無かつた。

月が落ちた。黎明の光が何處となく行渡つた。潮時も來てやがて過ぎた。

鳥が啼く。日が出る。車井戸を繰る音が其處此處に聞える。家々の引窓からは朝餉の烟が昇る。味噌をする音がする。新しい日毎の生活は始つた。けれど病人はまだ生きて居た。お駒は井戸端で、『まだ御引取下さいませんでね、』と朝水汲みに來た隣の細君に話した。

二十九

其日の午後四時、主人は四疊半で古文書を取調べて居た。お米は玄關の三疊で女の兒に乳を呑ませながら眠つて了つたし、お駒は汚れたもの丶洗濯を爲て居るし、秀雄は裏の家の座敷が涼しいと言ふので午後から態々出懸けて行つて晝寢に耽るし、銑之助は暑い日盛を袒(はだぬぎ)になつて一生懸命に原稿を書いて居るし、病人の傍にはお桂とお梅とが唯形式的に坐つて居るばかりであつたが、急に様子が變になつたので、お桂は慌て丶夫を呼んだ。

主人はすぐ來て見たが、お梅に、

『同じだらう』と秀雄が小聲で訊く。

お米は點頭いて見せる。蚤に責められて痒いと見えて、體の彼方此方をボリ〳〵掻いたが、急に立上つて、前をはだけて、白い腰卷を洋燈に寄せて蚤をさがし始めた。また初めたナと秀雄は眉を顰めた。

鉄之助も主人に續いて出て來た。やがて鹽煎餅が山のやうに盆に積まれたまゝ出される。秀雄は八犬傳を讀みながら三枚も四枚も食つた。主人が淹れた茶を姉弟は皆飮む。

今度は鉄之助が緣側に出たが、『好い月だナァ！』と言つて、すぐ庭に下りた。多感の鉄之助は此落月の寂しさを無意味に見ることは出來なかつた。かれの悲哀は長く黑く曳いた物の影に細かに織込まれるやうな氣がした。

月は低くなつた。裏の水口の戸が今まともに其光を受けて居る。戸の上の壁の崩れも明かに眼に見える。土用を過ぎても刈込まぬ杉垣が不整に亂れた影を路に落して、蟲の音が物哀れに聞える。母の最後の夜――かうした落月の物の影と洋燈と蟲の音とがかれの胸に鮮かに印せられて、一生忘れる時がなからうと思はれた。

鉄之助が上つて來た時、

『潮時といふことがあるもんだ相だ。……』

と主人の言ふのが聞える。

行燈の微かな光は枕元の黒塗の盆、藥瓶などから懸けて、蒼白い死人のやうな顏を照した。周圍に集つた人々の顏も眞面目で陰氣でそして暗かつた。今までは、主人が小さい水差を口に宛てゝ遣ると、さも旨さうに嚥下したものだが、今はもうそれも出來なくなつたのである。止むなく筆に水をふくませて飮ませた。

時計が十二時を打つた。秀雄は久しく病人の足元に坐つて居たが、ソッと蚊帳をまくつて裏の緣側に出た。眠くつて眠くつて爲方が無いのであつた。で、茶の間を通つて、緣側から下りて、井戸端に行く氣勢がしたが、續いて水を汲む音がして、頭を洗ふ音がざぶ〳〵聞える、

月はもう餘程傾き懸けて居た。美しく晴れて居るので、樹と草の影がいかにも濃い。影と影とが暗く重り合つた處から少し離れて、椿の葉が一つ一つ露に光つた。

秀雄の黑い影は門の處に少時立つて居たが、やがて駒下駄の音をさせて緣側から茶の間に上つて、長火鉢の前に坐つて、煙草を一服吸つた。眠むさうな顏を洋燈が斜に照した。不圖傍に姉のお米が見て居た八犬傳の最後の卷が一册讀み懸けたまゝ伏せてあるのを手に取つて、無意味に頁をかへして見た。八犬士が八人の姫と籤を引く個所である。幾度も讀んで知つては居るが、つい釣込まれて二三頁讀むと面白くなつて來た。けれど蚊がいかにも多い、大きな奴がこつそり來て、着物の上から痛く刺して行く。

其處に、お米が出て來た。矢張眠さうな顏だ。

く地上に横つて、垣には蟲が早鳴き始めた。

其處に男の兒が兩手の指の間に隙間なく蜻蛉を挾んで歸つて來て、

『叔父さん、これ!』

と得意さうに見せる。

『一人で捕つたのか』

秀雄がかう訊くと、

『一人とも、まだ澤山居るんだよ!』と、跣足で上にあがれぬので、身體を延して籠を取つて、ガサガサと蜻蛉を其中に入れる。

『新ちやめが二疋に婆ちやめが三疋!』と嬉しさうに叫んだ。

『英ちやん、もう足洗つて寢るんですよ』

と其處にお駒が來て、バケツに水を汲んで足を洗つて遣る。

時計が八時を打つ頃には、其男の兒は茶の間の一隅に蚊帳を半分釣つて、小さい鼾を立てゝ寢て居た。茶の間には紙笠の五分の洋燈が徒に明るく點いて、一家の人は皆座敷の蚊帳の中に集つた。

蚊帳の中は薄暗くつて蒸暑かつた。それに物の腐る臭が人を壓して重苦しい呼吸の音が沈默した一間に際立つて聞える。

子等は兎に角其周圍に環を爲して集つた。誰の視線も皆な痩せ衰へた病人の上に落ちた。
病人は微かな呼吸を刻むやうにする。そして一分の中に一度位ハァと深く大きな呼吸を交へた。其時に半開いて締のなくなつた顋ががつくりと外れさうになる。右の手を辛うじて持上げて、胸の邊を搔挘ふやうな眞似をしたが、其度に微かな無氣味な形容の出來ない唸聲を立てた。
誰も皆沈默した。障子に移つた夕燒の反照も次第に消えた。
やがて日が暮れたので、お桂が先づ立つて茶の間に洋燈を點けた。そして病人の枕元に行燈を持つて行くと、お駒とお米は立つて蚊帳を釣りに懸る。
緣側に並んで立つた秀雄と銑之助。
『いよ〳〵駄目だね』
『今夜はあぶない』
『今日は幾日だッたね？』
『十五日』
『さうか八月の十五日』
と秀雄は何事をか思ひ集めるといふ風でかう繰返した。
舊暦は七月十二日、銀盤を磨いたやうな月は既に水のごとき光を庭に落して居た。樹の影草の影が黑

と秀雄は、夕飯後の運動に、男の兒と一緒になつて、黐竿で蜻蛉の縱橫に飛交ふのを拂つて居ると、井戸端からお米が事ありげに手招きした。母樣の容體が變だ！

行つて見ると上目をして一ところを凝と見詰めた眼は凄くうるんで居た。仰向に白髮頭を括枕に載せて、兩手を胸の邊に合せて、不整になつた呼吸をする度に、咽喉の處が微かに動く。をり〳〵聲を出して何か言ふが、それがもう解らぬほどに舌が縺れた。

『あら、もう舌が廻らないのだよ、』とお米は慌てゝ、『母樣、母樣』と聲を高くして呼んで見る。病人は眼を聲のする方に向けた。まだ意識があるといふのが解る。時々顏に皺を寄せる。

『まだ痛むと見えるね。』

三時頃から少し容體が變つて來たのである。午まではいつもの狀態、別にこれと謂つた徵候も見えなかつたが、不圖傍に居た主人が氣が附くと、舌といひ、眼といひ、皮膚の色といひ、何うも唯ならぬ氣勢がそれとなく見えた。折よく醫師が來た。形のごとく胸に聽診器を當てゝ、眼緣をめくつて見て居たが、いつものやうに病人に聞かるゝのを憚りもせず、『うん、これはいかん。もういけません、』と平氣である。醫師は病人が既に聽覺視覺を失ひつゝあるのを知つたのだ。

『お大事になさい、もしもの事があれば何時でも起して好いから。家の耳門の呼鈴を知つて居るかね、あれを押しさへすると夜中でも通じる。』かういつて匆惶に去つた。注射などはもうする必要が無かつた。

『十五か六で、よく機を織つて居たァね。』
『秀もなかなか惡戯だッたよ。』
と傍からお米が言つた。
『さうかねえ、秀ちやんも惡戯だッたかねえ。私は叔母さんが叔父さんと東京に出てからは、足利に嫁に行つて了つて知らないけれどね……それにつけても、かうしてまァ、皆な大きく立派になつて、揃つて看病するとは、叔母樣も仕合せさね。』
此お駒が老母の若い時代のことも話した。實家の祖母の話では、老母は嫁に行つた當座、舅姑が難かしいので、幾度も實家に歸つて來た。それをいつもすかしたりなだめたりして歸して遣る。處がある時、もう今日こそは死んでも歸らぬといふ。段々樣子を聞いて見ると、餘程辛いらしい。けれど昔はさう容易く離緣は出來ないから、もう一度我慢して辛抱して呉れ！ ッて、泣いて祖母が慰めたさうだ。母は泣きながら夕暮の田圃道を一人さびしく歸つて行つたが、其時から居る氣になつたと見えて、間もなく亡くなつた總領の姉が腹に出來たとの話である。母がある時酒を飮んで醉つて『お前の父樣などは氣難くつて來たくはなかッた。もつと好い人はいくらもあつた。』と言つたことを銑之助は思ひ出した。永久の人生に連珠の如く輝くのは若い戀である。
夕暮になると前の田圃に蜻蛉が蚊を食ひに來るので、近所の子供が黐竿を携へて多く集つた。銑之助

と、英男は大喜びで、前の田から鰌やら目高やらを自分ですくつて來た。いつもは蜻蛉捕蟬捕に夢中で、晝飯も碌々食はずに遠くまで彷徨き歩く。緣側の隅の紙屑籠には、ぎんやら、ちやめやら、やんまやら蟬やらが一杯入れられてガサ〳〵騷ぐ。

『此子はまァ父樣に似たと見えて、こんなにやんまを捕つて來て……。』とお駒がいふ。

兄弟の中で主人が一番頑健であつたといふ。蜻蛉や蟬を澤山取つて來ては緣側に籠を伏せて置くので、祖父が喧しいと言つて爲方が無かつた。それに惡戲と言つたら界隈でも名代で、近所の兀頭を打つて呶鳴り込まれたことなどもあつた相だ。『あの惡戲子がこんな立派な旦那さんにならうとは思はなかつた。』などと其頃を知つて居るお駒は笑ひながら常に昔を語る。

『秀ちやんは知らないが、銑ちやんは成人しかつたよ。此子はおすばりで家に引込んでばかり居て、滅多に戸外に遊びになど出なかつたからねえ。それに此兒が生れたばかりの時、叔母さんがね、よく實家に抱いて連れて來てね、御飯の時は、お駒、鳥渡代つて小兒を抱いて遊んで來なッて、祖母さんに吩咐けられて、戸外に行くのさ。すると此子はそれは泣蟲で、火のつくやうに泣いて泣いて、いくらだましても泣止まない。餘り泣くもんだから、お駒、落しでも爲たんぢやないかつて、祖母さんによく叱られたものさね！』

『其時幾歳だッたえ、お駒さんは。』

めではない。昨夜もハンモックの上で、五日頃の月を見て、此月のいつ頃に母の死に逢ふことかと烈しく泣いた。けれどそれは母親を悲しむといふよりは寧ろ自己の感情に泣いたのだ。其證據には、其處に若い細君が歸つて來たら、其涙は忽ち乾いて了つたではないか。其の柔かい手を握つたではないか。

銑之助は自からかう罵つた。

二十八

月が段々明るくなつて、今日はもう十日だといふ。街の賑はひ、氷店の繁昌、鉢植の草花、神樂坂は毎夜毘沙門の緣日のやうに雜沓するとの噂。山の手の奥からも白地の浴衣に薄化粧の夫婦連が幾組となく出懸けて行く。

病人はまだ生きて居た。

平生後生を願はなかつたからといふ聲が彼方此方に聞えた。だから言はぬことではない、私は御寺參をあれほど勸めたのにと親戚の法華かたまりの老婦が得意さうに言つた。お駒は人知れず叔母の爲めに榎町のお釋迦樣に跣足參をして、何うせ治らぬものなら一刻も早くお引取下さるやうにと願を懸けた。

主人は月の始めから暑中休暇で家に居た。小まめに病人の世話やら家事やらを手傳つて、暇には緣日で買つた草花などをいぢつて居る。男の兒の爲めに、小さな池を庭に掘つて、金魚を三四疋放つて遣る

『だッて、母樣でも死ぬ、死ぬと醫師から宣告されて、未だに生きてるぢやないか。』

『あんなひどいことを……男はのんきだねえ。』

とお米が呆れる。

『だッて左樣ぢやないか。何うせ死ぬんなら、早く死んだ方が好い。僕などは卒中か何かで、ぽつくり死んで了ひたいよ……』と秀雄は平氣で、

『それにしても、よく保つもんだねえ。丸で一週間から食ふ物も食はずに、あゝして居るんだがなァ。』

『本當だ。』

銑之助も言葉を合せた。

『姉さんも國の方を何時まで投つて置いて好いのかえ。何とか消息があつたかえ。』

『好いたッて、惡いたッて、かうなつて親の死目に逢はないで歸れやしないやねえ。秀はのんきなことばかり言つてるよ、一體、情が薄いね、お前は………。』

秀雄は笑つて居る。

けれど銑之助は秀雄のかうした言葉をも別に不思議とものんきとも思はなかつた。まして情が薄いなどと夢にも……。秀雄が心から母親を思つて居ることは銑之助はよく知つて居る。自分よりも數等情が篤いことも知つて居る。銑之助は涙を流したり悲しい言葉を言つたりする。けれどそれは情に篤い爲

『大學には入らんのか？』
『入る積りで、勉強してるけれど………駄目だよ、僕には。』
『何故？』
『參謀なぞ柄にない。』
『始ッからさう捨てゝ了はなくつても好いぢやないか。』
『野戰隊の方が面白いからナ。』
『野戰隊でも旅團長位になれや面白いけれど…………。』
『無論なるさ。』
と秀雄は笑つた。
秀雄には鉄之助が解らなかつた。お互ひに交情は好い。やさしい人だと秀雄は思つて居る。けれど何うもその文學的の處が腑に落ちない。何ぞといふとすぐ悲しい方にばかり物事をきめたがる。平凡なことを罪惡だとか言つて大騷ぎをする。何ういふ譯だか解らない。長兄の形式的の辭令にも餘り感心はしないが、仲兄のやうに神經過敏でも困ると常に思つた。
『人間も死なうたッて中々死ねないもんだねえ、』と秀雄が突然いふ。
『何故。』

かうして居る間にも秀雄は娘のことを思つて居た。

鉄之助は『ふる郷』の話をして聞かせた。秀雄は聞終つて、

『それで一册書いてよほど金になるのかね？』

『金は僅少だ。』

『でも書いて呉れッて、書肆から頼みには來るんだらう！』

『それは來る。』

『それから、書いて持つて行きさへすりや、何處でも買つて呉れるんだらう？』

『うむ。』

鉄之助の答は稍曖昧して居た。

『それなら好いさ………。軍人なんざ本當に詰らん。朝から晩まで埃を浴びて、大きな聲で呶鳴つて、

そして時々は大目玉を食ふんだから。』

『東京には出て來られないのか。』

『さうさなア………。其中には出て來られるだらうけれど、今年は駄目だ。』

『田舍にぐづ〳〵して居ると、後れて了ふぜ。』

『大丈夫だよ。』

錦を飾り度いといふ氣が秀雄の胸にあつた。銑之助は此頃『ふる郷』といふ小說を書きかけて居た。故鄕は渠の爲めには失戀の故鄕であり失意の故鄕であり灰色の故鄕であつた。かれは飄零落魄した男が一夜を人知れず故鄕に過すといふことに筆を着けたが、其男は無論銑之助自身であつた。錆色の淺茅沼、泥塗れの小舟、藻や蓴菜や蓮の繁茂、それが目の細かい網のやうに其記憶に織込まれる。

故鄕の追憶にはいつも母が伴ふ。士族屋敷の小路、裏の畠、湯歸りの田畝道、沼の畔の朴の樹――姉弟はこれ等の縮圖の中に母親のなつかしい顏を見た。

『母樣今少し生かして置きたいねえ！』

と、しんみりした調子でお米は言つた。けれど母親はもう現在の人としてよりは過去の人として子等の頭腦に映つて居たのである。

七輪に懸けた鐵瓶が煮立つたので、お米は茶を淹れて弟共に出すと、

『茶はあつい ナ、銑ちやん、己がサイホンを奢らうか。』

『奢れ、奢れ。』

で、姉は子供を秀雄に託して使に行く。暫くして、喜久井町の通の氷屋の婢が氷のぶつかつたのとサイホンの罎とを岡持に入れて持つて來る。風通しの好い涼しい松原の緣の漲つた一間に姉弟は樂しさうに氷を啜つた。

玉蜀黍を食ひながら、をさない頃の物語が始つた。一粒づゝ玉蜀黍の實を爪で取つて空地を拵へて、此處が三疊、六疊、ずッと奥が便所！　などゝ物眞似をして食つたものである。それに同胞の一人が屹度後まで殘して置いて、態と見せびらかす惡い癖があつたので、最後はいつも奪ひ合やら喧嘩やらに終つた。

『もう忘れても燒いて遣りやしないから覺えて居ろ、』と母親がよく叱つた。

その頃を誰も皆思つた。お米は自分の敎つた小學校の先生から結婚を申込まれたことを思ひ出した。其先生は今も田舍の近鄕の學校の校長をして居る。時々町で邂逅すことがある。銑之助も秀雄も其先生を知つて居るので、其先生の話から、段々田舍の話に移つた。

銑之助は銑之助時代、秀雄は秀雄時代の友達やら娘やらのことをお米に訊いた。故鄕に殘つた友達は、多くは小學校の敎師になつて、其頃の娘達はそれ〴〵子持になつて居る。銑之助のラブした丸顏の町娘はもう三番目の女の兒を抱いて、此間も街頭を步いて居たとお米は語つた。秀雄は十二の時田舍を去つたので、まださうした戀の經驗はない。渠は釣のことや沼のことや竹馬の友のことを飽かず訊く。

『お前が士官になつたのが、そりや田舍では評判だよ。』

とお米は言つた。

『一度國に行つて見たいね。』

つた。姉弟は言合せたやうに其時分のことと今のこととをひきくらべた。かうして人は生れ人は死し世は移り行くのである。

お米は田舎に置いて來た子供等をも思ひ出した。

秀雄は燒けたのを二本取つて、

『暑い、暑い。火の傍はたまらん。姉さん燒いてお呉れ。』

もう用が無いといふ風で立上る。

『ひどいね、まァ秀は、』とお米は笑ひながらいふ。

『だッて、かういふことは女の役目だ。その代り一本遣るよ。』

『己にはよこさんのか。』と銑之助がハンモックの上からいふ。

『姉さんが今燒いてやるとさ。』

『お前がまだ一本持つてるぢやないか、それを寄越せ!』と半ば身を起して取りにかゝる。秀雄は笑ひながら逃げて廻つた。大人とは思へぬほどの無邪氣である。

火の上に載せてあるのが焦げるので、お米は止むを得ず、子供を縁側に這はせて、七輪の前に立膝して蹲踞んだ。

やがて殘らず燒ける。

タビシとけたゝましい音をさせて、七輪を前の緣側に持出して、火種を火鉢からさがして、消炭と炭とを上に乘せて團扇でばたぐ〳〵煽ぐ。

『銑ちやん、手傳つても好いぢやないか。』

銑之助は笑つて居る。

『燒けても遣らんよ。』

『けしからんことをいふ、人の家の玉蜀黍を無斷で取つて、人の家の炭で燒いて、遣らんよもないもんだ。』

『遣らん、遣らん。』と言つて、ばた〳〵煽ぐ。

火がやがて活々と起る。秀雄は取つて來た玉蜀黍の皮を剝いて、三本ほど火の上に載せる。

其處にお米が女の兒を抱いて、だらし無い恰好をして遣つて來た。

『何だね、まァ、秀。玉蜀黍なんぞ燒いてるのかい。』

と笑ひながら言葉を懸ける。母が病氣なのに暢氣なといふ調子である。

三人の胸には同時に幼い時のことが浮んだ。夏の日學校から歸る時分には、母親とこの姉とが（姉は其頃もう學校を卒業して居た）二人の弟の爲めに玉蜀黍を燒いて待つて居て吳れた。姉が畠に行つて玉蜀黍を折る音がギイ〳〵と聞える。母親は賃仕事に坐つて、前には大きい銀杏の裁物板が据ゑられてあ

二十七

かういふ狀態で猶幾日か經過した。

午後三時過ぎ、秀雄は晝寢から起きて、裏の家に行く。緣側で少時仲兄と話して居たが、不圖立つて畠に入つた。

玉蜀黍の熟したのを取らうとするのを銑之助は見て、

『いかんよ、玉蜀黍を取つちや――。』

『何故?』と秀雄は振返つて、『好いさ、好いさ、此間から覘ひをつけて置いたんだ。』

ギイと折る音がする。

それを手にして、畠から出て來て、皮を剝いて、『ほら……この通りに立派に實が熟つて居る。』

『困るナア、お梅が大事にして居るんだよ。』

『嫂さんが……。構ふもんか、己が取つて食つたつて言へば好いぢやないか。』

秀雄はずん〳〵畠に入つて、暫くがさ〳〵と熟したのを搜して居たが、やがて毛の黑くなつたのを五六本抱へて出て來た。

銑之助はハンモックに身を横へたまゝ、默つて見て居ると、秀雄は自分で臺所へ出懸けて行つて、が

思つたから、今日は何事をも措いて出て來たとのことである。かういふ話が幾つとなく人々の口に上つた。

病人は依然として腹が痛むのであるが、もう押して貰はうともしなかつた。押しませうかと言ふと、手を振つて見せる。そして小聲で、『押すと却つて痛い、獨りで我慢する、』といふ。

お梅は夜伽を恐れた。と謂ふのは、二三日前の夜にお桂に賴まれて少時の間一人で起きて居ると、病人が怖い眼をした。身體の具合で神經が昂ぶつて居る身には、それが怖くつて怖くつて爲方が無かつた。それからは賴んで成べく夜伽を許して貰ふやうにした。主人もお梅は姙娠して居るから餘り無理を爲ないやうにと注意して呉れた。

お梅は晝間病人の傍に居ることが多かつた。病人はお梅の顏をぢつと長く見詰めて居ることがある。他の人はさうで無いのに、何故に自分ばかりかう注意されるのだらうとお梅は時々無氣味に思ふ位である。殊に其夜伽の時の眼を思ひ出すと、戰慄が出るほどに氣味が惡い。其身が懷姙してから、病人の調子が著しく變つたことが常にそれとなく若い細君の心を惱して居るのである。

久留米耕の單衣に赤い帶揚をして、大きな丸髷に結つた肥つた若々しい姿は、瘦せ果てゝ、骨と皮とばかりになつた垂死の姿と相對して坐つた。

つちり開いて、看護をするもの丶顔をまざ〳〵見ながら言ふ。では、もう人の見さかひがつかなくなつたのかと思へばさうでもない。鉄之助や秀雄を捉へていろ〳〵正氣な話もした。

何處かに行くといふことをよく言つた。それから衣を着けた和尚様が一晝夜に少くとも三度位は迎へに來た。其時は丸で意識を失つて了つて、坊主が來た！　坊主が來た！　と叫ぶ。据ゑた眼がいかにも恐ろしさうで、細い痩せた手を重さうに擧げては、胸の邊りを頻りに掻き拂はうとする。口をもぐ〳〵させて何か言はうとしても、其時は滿足に言葉が出ぬらしい。他界の神祕が人々の胸を衝いた。

又かういふ話があつた。昨夜、お駒が看病して居た。勞れてついうと〳〵すると凄じい音がした。確かに誰か來て戸を叩いたに相違ない。で、はいと返事して、玄關の雨戸を開けて見たが、誰も居ない。門まで出て見たが、矢張誰も居ない。不圖氣が附いて、急に戰慄(みぶるひ)が出て、慌て丶戸内に入つた。『實にあの時は怖かつたですよ。何うしようかと思つた位でしたよ。だから……急いで秀雄さんに起きて戴いたんですがね………』とお駒が話した。

近い田舍から出て來た義妹に當る老婦も同じやうなことを語つた。此頃毎晩胸騷ぎがする。不思議な夢を見る。病人が重いのではないかしらんと苦勞にして居ると、一昨夜確かに姉さんが來た。それは夢ではない。まだ宵の口で、火鉢の前に坐つて居ると、姉さんが莞爾と笑つて入つて來た。はて不思議だ。あんな病人が歩いて來られる譯が無いと思つたら、もう影も形も消えて無かつた。お暇乞に來たんだと

『それ、其處に坐つて居らしやる。』と行燈の陰を指した。

鉄之助はギョッとした。お桂は顏を袖で掩つた。

『噓だよ、誰も居やしないよ。』

『其處に居るぢやないかナ。お前にも見えないかナ、』と、さも情なさゝうに、『和尚樣、何うかもう少し………もう少し待つて下さいまし。』

眼がまた据わる。

『折角迎へに來て下すつたのだけれど………もう少し………あゝ馬車、立派な馬車、折角だけれど………私等の乘るやうなものではないから………和尚樣………和尚樣………。』

言葉が斷續する。天井では鼬が鼠を追ふのか凄じい音があたりに響き渡つた。

時計が一つ鳴つた。

夜は寂として居る。老いた蛙の鳴聲が絕えてはまた續く。四疊半から秀雄の高い鼾がする。少時すると、病人は安心したといふやうな長大息を吐いた。

二十六

其夜に限らず、病人は可笑しなことを言ふやうになつた。それも熱の爲めの譫言とは違つて、眼をぱ

病人は又始める。

『迎へに來たッて、行かない。厭だ、厭だ！　歸つて呉れ、歸つて呉れ！』と手で拂ふ眞似をして、

『和尙樣、私は何も惡いことは致した覺えはありません。私は正直に世を渡つて參りました。……』

『母樣、母樣、何うしたんです？』

矢張通じない。

『何うしたんでせうねえ、』とお桂は矢張ぶる〳〵震へて居る。

『和尙樣……和尙樣…………。』

『母樣！』

と、今度は聲を強く、見張つた眼の前に顏を出して、輕く肩を搖ぶると、漸く氣が着いたらしく、空間を見詰めた眼で、銑之助の顏をぢつと…………。

『母樣！　何うした？』

『今、其處に衣を着た和尙樣が……。』

『夢だ夢だ！　和尙樣なんか居やしないよ。』

『其處に居るぢやないか。』

『何處に？』

『母樣、母樣！』

と、銑之助が呼んで見たが通じない。

丁度其前に恐ろしい或物が坐つて居るかのやうに、見張つた眼をぢつと据ゑて、氣味惡く空間を見詰めて居る。油汗が額からダク／＼出る。

『母樣、母樣。』

矢張返事が無い。

爲方が無いので、銑之助はお桂に向つて小聲で、

『さつきからかうなんですか。』

『え、もう少し先程（さつき）……すや／＼眠て居らつしやると思ふとねえ、急に、聲を立てゝ誰だ！　誰だ！其處に居るのはッて仰しやるですがね。私です、お桂です、何か御用ですかッて聞きますとね、それには御返事を爲さらずに、「迎へに來たのか、來たッて、まだ行きやしないぞ！」と仰しやるぢやありませんかね。私、怖くつて、怖くつて何うしようかと思つて居ましたがね。』

『夢を見てるんだね。』

と銑之助は無造作に言つたが、それでも何となく無氣味であつた。病人の見張つた眼が微暗い行燈の光に見える。

渠は暫くして家の方に戻つて行つた。庭に入ると、一枚明けた戸から行燈の火が洩れて、檐に近い椿が半ほど其微かな餘光を受けて居た。靜かに歩いて、戸の傍に近寄つた。障子も明放してあるので、蚊帳の青く風に動くのが見える。母！　母！　大恩ある母！　なつかしい戀しい母！　その母にももう別れなければならぬかと思ふとまた涙が出さうになる。

靜かに緣側に上つて、蚊帳の中に入ると、お桂が蒼ざめた顔をして、さもさも物に怖れたといふ風で、聲を低くして、

『銑之助さん、今、母樣が……。』

がたがた震へて居る。

『何うしたんです？』

『今、母樣が怖い眼をして、譫言を仰しやるんですがね。』

銑之助は病人の方を見た。成程大きく眼を見開いて居る。

『母樣、何うかしましたか。』

其返事はせずに、

『誰だ！　其處に居るのは、行くのは厭だ、厭だ、誰が行くものか！』

眼を恐ろしく見張つて、手をひろげるやうにする。

した境遇に身を置くに至つた徑路やら、正直な我儘な性質から萠した悲劇やらに涙を濺いで、快樂といふ快樂をも遂げずに、自から身を亡して行くのを悲しむのであつたが、今宵は何故か母親の死が人類一般の死と相聯關して居て、何うせ一度は死ななければならぬ人間の儚なさがひしと胸に迫つた。

銑之助の眼には草の生えた墓と生れたばかりの赤兒と白髮の老人と死に瀕した母親とが眼前を通り過ぎた。深い深い生の悲哀が其多感多情の胸を抉つて、熱い涙がほろほろと頰から落ちた。

かうした感を渠は久しく起したことはなかつた。空想の境から實際の人生に入つた身には、さういふ悲哀は要するに粧飾である、繪具である。粧飾や繪具が糧にならぬのは渠自身にもよく解つて居る。けれど今はもう堪らなくなつたのだ。

暗い闇の中に自分唯一人生きて居るやうな氣がした。

銑之助は田の緣の草原に腰を休めた。草原には露がしとゞに置いて居る。蛙の聲の相變らず喧しい間を、水鷄はこゝとさびしく鳴く。

暗い丘の向うに黑い榛の樹が怪物のやうに並んで立つて居る。淡竹の藪の中に微かな寺の燈火が見えて、其上に星が一つ光つた。

突然飛附いたものがある。喫驚して立上つたが、見るとそれは平生よく馴れて居る近所の野良犬で、嬉しがつて兩足を立てゝ頻りに銑之助に飛びついた。

上げる奴はありやしまい、』と口癖のやうに罵つたが、まだ母親の死なない中から、佛壇も神棚も全く閑却されて、塵埃が一杯に積つて居た。

夜は二人づつ起きて居ることにした。病人は落着いて居る時は唯すや〳〵と寢るばかりであるが、痛み出して來ると、唸聲が烈しいので、隣の人も寢られぬといふ程である。けれど家人は連夜の看護に勞れ切つて、狹い蚊帳に鮨をつけたやうにぐつすりと寢込んで了つて、眼など覺ますものはなかつた。

一夜銑之助がお柱と夜伽をして居ると、前の田に水鷄の聲が面白く聞えた。渠は立つて戸を明けた。夜はもう十二時を過ぎて居た。曇つて暗い空を透して、梅、樫、檜、百日紅などが更に暗くこんもりと影を重ねた。四邊は全く寢靜つて、坂の上の二階屋の門前の瓦斯燈が覺束なく點いて居るばかり、蛙の聲が田やら畠やらに滿ちて聞えた。

低い田にちよろ〳〵と流れ込む小川があつた。草が流に浸つて、水馬が晴れた日の影にのどかに遊ぶ。蜻蛉のつるんだのが、水に尾を落して休んで居ると、子供が長い黐竿を寄せて、拔足差足近寄るのを常によく見懸けた。この闇の夜に、恰も其の小川の邊を水鷄がこゝと鳴く。

銑之助は庭から井戸端の柴折戸のかき金を外して垣の外に出た。胸は何となく沈着いて、自然の穩かな靜かな光景に全く一致して了つたやうな心地がする。

渠は母親の一生に同情した。けれどそれがいつもの同情とは不思議にも異つて居た。常には母のかう

が利かなくなつた。體に締りが無くなつて、起返ると頭腦が眩惑する。で、やむを得ず寢たまゝ取ることにしたが、始めは馴れぬので一方ならず困つて灌腸までした。けれど近頃では何うやら斯うやら用を辨ずるやうになつた。瘦せこけた脚を二本立てさせて、便器を其處に挿込むやうにするのである。

隣近所でも病人の段々重くなつたのを知つた。人の出入が非常に繁くなる。車がをり〳〵來て其門前に留る。丸髷の細君が來る。切髮の老婦が來る。洋服の紳士が來る。狹い玄關の靴ぬぎには、駒下駄やら、雪駄やら、足駄やら、編上げの靴やら、殆ど足の踏處も無い位。

勝手は相變らず汚なかつた。老母が喧しく言つて、銀のやうにてか〳〵光らせた釜も赤い錆が出て黑くなつた。釜の底などは十日に一度も庖丁で搔くことがないので、煤が厚く厚く積つた。七輪には物の煮え立つて吹き滴れた痕が條を爲したまゝになつて居る。お桂は勝手を自分の唯一の勢力範圍にして、襷を懸けた儘、其處に遁れて、ぐづ〳〵して居るのが例であつた。飯時分になると、茶湯臺が出て、茶碗と箸とが簡單に其上に並ぶ。多くは馬鈴薯の煮付か、豆腐汁か、鹽の辛い鮭か煮豆か乾物かが菜として顯はれる。

『豆腐ばかり食はせられて、こんなに瘦せちやつた。銑ちやん、何か肉でも御馳走して吳れないか、』などゝ秀雄は裏の家に行つて言つた。

母親は、『己が死んだら、佛壇や神棚などどんなになつて了ふのか解りやしない。御燈明一つだつて

ことを言つたつて爲方が無いぢやないか、』と笑つた。

二十五

醫師はもう五六日しか持つまいと言つた、食物が殆ど通らなくなる。腹が痛むと、弛んだ澤の無い皮膚からは油汗がダク〳〵出て衣を浸した。苦しい、苦しいと言ふ聲は垣の外を行く人にも聞えた。

お駒も來た。お貞も來た。一家は更に一層の混雜を加へた。

代診が其度に來て、注射をして行く。初めはそれで稍落着いたものだが、後にはカンフルの注射位では餘り長い効能が見えなくなつた。さりとてこの衰弱した患者に、モルヒネを注射することは全然不可能であつた。

少し落着いた時には、それでも病人は口を利くが、もう癇癪を起したり物を投り附けたりする元氣は無い。看護する人の顏を見てはほろ〳〵と涙を飜し、秀雄の手を堅く握つては、もうこれがお別れだ！などといふ。弱い弱い人になつて了つた。

秀雄が脈搏を取つて見ると、餘程早く且つ不整である。呼吸もさも〳〵苦しさうにつく。をり〳〵便の催すのをさし込の便器で取つた。病人は性來潔癖で、起き返られなくなつてからも、便をする時だけは、お米の手を假りて辛うじて身を起したが、四五日前からは、もう何うしても其自由

も煩さく其周圍に集つて來る。棕櫚の葉を麻糸で結んだ蠅打が血で汚くなるまで打つても、容易に其數は減じようともしなかつた。ありもせぬ錢で、硝子の蠅取器を一個主人が買つて來て、それを座敷と茶の間との閾の上に置くと、時の間に黑くなつた。

親として曾て子等に對した權力はもうなくなつて了つた。家庭に種々の波瀾を起し壓制的に子等を壓迫した當時の勢力も認められなくなつた。もう嫁が厭でも、交情の睦じいのを見せつけられても、自から其身の不運不幸に忿怒の情を起しても、如何ともすることが出來なくなつた。親は親である。子は子である。子等の胸は、この難しかつた母親――理由の無い烈しい欲望の爲めに苦しい悲しい犧牲を敢てさせられた――そのむづかしい母親の亡くなつた後のことを想像するやうになつた。

銑之助には殊に其想像が强かつた。垂死の一塊物に對する不愉快の情と、不幸なる母親の一生の運命に同情する心と、自己の將來に於ける不安の念と、この三つが一緖になつて、常に凄じい波を擧げた。兄弟の中、銑之助が一番便りの無い心細い境遇である。それはお米も心細い。不安である。けれどお米にしろ、主人にしろ、秀雄にしろ、世間に觸れて、世と共に浮び且つ沈み得る人間である。世は世に觸れた人間を捨てゝ了ふことは滅多に無い。銑之助は文學を天職とした其身の苦痛を今更のやうにつらく覺えたのである。

ある時、銑之助がこれを秀雄に話すと、秀雄は寧ろ兄の例の癖とばかりで、『また始つたね、そんな

夫婦は默つて居ることが多く、殊にお梅は姙娠の故でもあらうが、眉の邊に何處となく淡い影が生じて、立居も勝れず、をり〳〵辛氣さうに嘆息をつく。畠には玉蜀黍ががさ〳〵と高くなつて、廣葉の蔭に、もう熟し懸けた實の黑い毛も見えた。

秀雄の身の上も變つた。

二十四

秀雄が餘り暢氣らしく閑暇な身を持餘して居るのを見て、お米は笑ひながら、

『お前、少し看病して上げたら好いぢやないかねえ、折角態々來たんだから。』

『うん……』と氣の無い返事をして、病人の枕元にちよつと坐つては見るが、別段手を下して爲ることもないので、直き四疊半に入つて了ふ。夏の日影は次第に暑く、病狀も日毎に重くなつて行く。

低い屋根の安普請、奥行が淺く、座敷の前後が緣側になつて居るので、朝に夕に日射が近い。殊に午後四時からは、夕日が座敷の半まで射込んで來て、その暑さと言つたら一通りでない。それに厠がそのすぐ側にあつて、穢いものゝ乾く臭氣が堪へ難く人の鼻を襲ふ。蒲團は成たけ清潔にして、敷布は絕えず洗濯するやうにして置くが、死に近い病人には、床摺れの靡爛や長い間の汚れた皮膚の惡い臭氣がそことなく纒つて、吐く呼吸も健康者の鼻には夥しく不快に感ぜられる。從つて蠅が多い。打つても打つて

などと言つて居る。來てからまだ二三日經つか經たぬに、もう單調なる生活に厭いて、古い小說を押入の中から引張出して、四疊半に寢ころんで、それに讀耽つた。そして退屈すると、その書籍で顏を掩つて、いぎたなく晝寢をする。

裏の家にもよく出懸けて行つて、

『銑ちやん居るか。』

と門から呶鳴る。士官學校時代と調子が少しも變つて居ない。銑之助は仕事の邪魔をされるのを此上なく恐れて居るが、秀雄はそんな遠慮は無く、つか〳〵と座敷に上つて來る。銑之助が筆を擱かうが擱くまいが頓着せずに、すぐいろ〳〵な雜談を始める。前に釣つてあるハンモックに身を橫へて、『こんなものより籐椅子を買へば好いぢやないか。籐椅子の方が好いぜ、』などゝいふ。

琴が袋に入れられた儘床の間に置かれてあるのを見ては、『嫂さん、此頃は琴も彈かないのか………。僕は上手になつたぜ、もう嫂さんに負けやしない。』

秀雄が三月に來た時から比べると、本家も裏も總て心持が變つて居た。お鐵がお桂に變り、それにお米が來て、互に絕えずすれ合つて居るので、調子に何處か合はない處がある。それに病人の重くなるに伴れて、人々の苛々した調子が何となく不愉快だ。

裏の家ももう以前のやうに樂しさうでも賑やかでもなかつた。

を見度いといふ希望も起るが、醫師も唯毎日形式的に診察して行くばかり、全くの對症療法で、死ぬ病人、治らぬ病人と始めから多寡を括つて居る。病人はそれでも容易に死を自覺することが出來ず、少しでも氣分が好く、腹でも痛まないと、これで食ふものさへ食へば治るかも知れぬなどゝの希望をも起すが、看護するものには、これを見て居るのがいかにもつらい。ことに世話の難かしい機嫌の變り易い病人なので、それが各自の心やら境遇やらから起つて來る紛紜と一緒になつて、何うせ生命の無いものならば……といふ氣に時々なる。そんな考を起してはと誰も自から押へるのであるが、しかもその念を留め得るものはなかつた。

一家が總て浮足になつてそは〳〵して居た。主人は費用の多くかゝる上に、眼に見えて居る葬式の金の出所に就て日夜苦勞した。銑之助も秀雄も金を才覺するやうな柄ではない。相談をして見た處で駄目なのは知れて居る。二三箇所、先輩に泣附いたなら何うかして呉れるとは思ふが、さて其先輩にも結婚の費用などで、既にすでに多くの迷惑を懸けて居た。銑之助も此頃それと感附いて、兄を扶け度いものだと思ふ。けれど自分の生計すら辛うじて凌いで居る身には、何うすることも出來なかつた。秀雄はそんなことゝはゆめ知らず、

『まだあれではなか〳〵死ぬやうなことはありやしないよ。暑中休暇になつてから來ても遲くはなかつた。』

『姉さん、何うしたんです……夏まけですか。』

『いゝえ、さうぢやないよ、』とお米は傍から口を挿れて笑つた。

『何うしたんだい？』

『つわりだよ、お前。』

『もう出來たのですか、早いナア。』

と秀雄は快活に目を睜る。

午飯を濟ましてから、昨夜よく寢なかつた、少し休まうと謂つて、秀雄は四疊半に入つたが、間もなく高い鼾が聞えた。お米が行つて見ると、枕もせずに、大の字なりに顏を上げて口を開いて熟睡して居た。

二十三

これで同胞は皆集まつた。容體が重いと言ふので、親類の人々も代る〴〵見舞に來る。果物の籠、鷄卵の折、珍らしい菓子など多く床の間に積まれた。

今一目逢つて死に度いとまで願つた秀雄も、來て見ればそれほどでもなかつた。泣いて貰つても、悲しんで貰つても、慰めて貰つても、要するに其身は獨り死ななければならぬのであつた。

一家の人々も長い看護に全く疲れ果てゝ了つた。治る病人ならば張合がある。一度全快させて喜ぶ顏

する。銑之助もそれと聞いて、書き懸けた安原稿の筆を擱いて、急いで裏の家から遣つて來た。

銑之助は秀雄の相變らず元氣で快活なのを羨しく思つた。軍服を輕い紺絣の單衣に着替へて、色の淺黑い、頭の丸い、莞爾した苦勞の無ささうな顏をして、頻りに無邪氣なことを言つて笑つた。林檎を選んで手づからナイフで皮を剝いて、『銑ちやん………これが旨いよ、』などゝ自から勸めた。

お米は秀雄の成功を目を聳てゝ見た。小さい頃母の手だすけに秀雄の世話をよく見て遣つたので、情合が何となく厚い。それに久しく逢はぬから懷かしくもあるし、力にする氣にもなる。『銑は若い女房に鼻毛を讀まれるやうな男だから駄目だ！』とお米は此間の衝突から銑之助を餘り快く思つて居ない。

秀雄は母親の病氣を思つたほどではないと思つた。それは衰弱したのは事實である。三月來た時とは丸で見違へるほど瘦せ衰へて了つた。顏色も惡い、眼も光が無く一種のうるみを持つて來た。けれどもう間もない暑中休暇をも待たずに、電報を打つて寄越したくらゐであるから、もつと危篤であると思つた。事に寄ると、死目に逢ふことすら出來ないかと心配した位であつたのである。

銑之助は其病狀を詳しく語つた。時々の烈しい疼痛、食慾の減退、身體の衰弱、神經が昂進して機嫌の惡いのが一番困るといふことから、死期の迫つて居ることをも殘りなく話した。秀雄は唯點頭くばかりである。

其處にお梅が來て挨拶したが、その憔悴した姿に秀雄はすぐ眼を着けて、

青年士官は劍を引摺りながら、やがて其晴やかな軍服姿を緣側の前に立たせた。
病人は淚を流して喜んだ。けれど其喜びはやがて深い悲哀である。抵抗することの出來ない力に對する悲愁は血を分けた親と子の全身の脈を動かした。
頰を流るゝ老母の淚と秀雄の默つて背けた顏とを、同じく默してぢつと見て居たお米は、堪らなくなつて自から顏を掩つて泣出した。
秀雄は嚴然と坐つて、顏を背き勝に低頭かせて、瀧津瀨と胸に集つて來る淚を下脣を嚙んで押へた。
一座は深い沈默に落ちた。
けれどもそれも瞬間であつた。淚や悲哀は長く續くものではない。時ならずして、其沈默は破られ、其淚は乾かされ、其悲哀は薄らいで行く。
病人の枕元には、紅い美しい數顆の林檎と土地の名產の林檎羊羹とが並べられる。病人は此頃は殊に食慾が進まない。それに食つてもすぐ反して了ふ。また旨く納つたにしても腸の痛むのが恐ろしい。でも折角秀雄が遠くから持つて來たのだと謂ふので、一番味の好ささうなのをお米は選んで、半分にさいて、皮を剝いて、小さく割つて、その儘手に持たせると、病人は秀雄の顏を飽かず見ながら、それをさも旨さうにサク〳〵と音させて食つた。
主人は役所に行つて留守、お桂も藥取りに行つて居なかつたが、やがて歸つて來て、初對面の挨拶を

まァ、』と謂つて幾度か禮を述べた。

利根川の長い鐵橋を汽車の渡る時、秀雄は母や祖父母と一緒に買切の川舟で東京に出た折のことを思出したが、栗橋、久喜、大宮、赤羽と急行の列車は逸早く過ぎて、王子の烟突に漲る煤煙をも後に、やがて上野の停車場に着く。

二十二

停車場から車を傭つて、秀雄が喜久井町の宅に着いたのは八時半過であつた。低い門、庭樹の繁り、緣側には張物が出してあつた。車の門前に留つたのに氣が附いて、井戸端に居るお米が振返ると、眼に映つたのは立派な若い軍人姿!

『まァ秀だよ』と飛出して來た。

七八年逢はぬので、今更のやうに姉弟の胸は躍つた。

『母樣は?』萬事を擱いて秀雄が訊くと、

『今日は少し好いやうだけど……好いが好いでないものだから。』

かう言つたが、すぐ緣側に飛んで行つて、

『母樣、秀が來たよ。』

まれて居るやうに其胸に若々しい希望が滿ち渡つた。

小山に來て、朝飯を食つた。もう東京がぢきである。旅行案内を繰ると、七時四十分には上野に入ることが出來る。秀雄はふと立つて傍の手提の中をさがした。既のこと忘れて來ようとした光子の寫眞が白紙に包まれたまゝ其中に入れられてある、手札形の小さい寫眞で、昨年の夏撮影した單衣姿であつた。顏の長い、眉の美しい、ほつそりとした姿で、丈も何方かと謂へば低い方である。成程容色が好い、ちよつとこの位に眼鼻立の揃つた娘は少い。殊に眼が美しい。表情があると謂ふよりは、寧ろ落着いたといふ方で、此眼は餘り複雜した感情を顯はして居ないが、美しいことは此上なく美しかつた。惜しいことには扮裝は何うしても田舍風である。桃割に結つた髮の容から、着物の着こなしに、何處となく間が拔けた處があつて、帶の緊め方などどこか舊式である。津輕少女の訛のある言葉――秀雄はその愛らしい津輕訛を不圖思ひ出して堪らなく戀しくなつた。

暫くしてそれを元の手提に藏つて、今度は紙に包んだ林檎を一箇出した。紅く艶々して、何だか津輕少女の匂ひがこの一顆の果物にも顯はれて居るやうである。秀雄はナイフをチョッキの隱袋に探つて、皮を剝き出した。不圖、傍に二十七八の丸髷の婦人が七歲位になる可愛い男の兒を伴れて居るのに氣が附いて、手提から今二箇出して笑ひながら男の兒に遣つた。秀雄は子供が好きである。

男の兒は嬉しさうな顏をして、軍服を着けた青年士官を豪さうに見上げた。婦人は『好いことねえ、

『おほがはら』と微かに讀める。

時計を出して見ると十時半である。

まだ中々だ、寢ようと思つて再び横になる。仙臺で大分乘つたやうだが、それでもまだ車室は空いて居た。汽車が動き出すと好い心地になつて、すぐうと〳〵する。又同じやうにいろ〳〵なことが頭腦を通る。今度は母親の顏が一層歴々と眼に附ぐやうになつて、それと重り合つて娘の笑顏が見える。『ハハオモイツゴウシテコイ』オモイといふ字が繰返し繰返し氣に懸る………

いつか眠つたと見えて、秀雄は福島を通るのを知らなかつた。

那須野を通越すと、朗らかな朝日が昇つて、鬼怒川の清い流が閃々と美しく光つた。秀雄の胸は愉快で、穩かで、そしてのんびりして居た。自から不思議に思ふほど母親のことを考へて居ない。かと言つて暗い家の光景や、病人の瘦せ衰へた姿を眼に浮べぬのではないが、それは餘り此身とは關係が無いやうに思はれる。母親が苦勞をして、吾々兄弟を養育して具れた大恩に對して、何うか今五六年丈夫で生きて居て具れて、思ふやうな樂をして貰ひたいとは、それは常に念頭を離れない願であるが、抵抗すべからざる力と相面しては、其願などは如何ともすることが出來ないほど小さいものである。若い者は若い者の道を進まなければならぬ。

美しく晴れた空のやうに、朗らかに輝き昇つた朝日のやうに、またはあたりの天地が生々した綠に包

とかれは再び思つた。嬉しさが胸一杯になる。

『祖母はその愛せる孫娘をその身のあたりから離さなかつた。寢る時も其室に一緒に床を敷かせた。晝間は琴を彈かせたり、昔の繪本を讀ませたり、花を活けさせたり、茶を立てさせたりする。秀雄はよく其祖母と物語をした。快活な無邪氣な正直な青年士官の性質は、其家の父母のみならず、昔氣質の祖母をも喜ばせるに十分であつた。

娘は光子と言つた。同僚が來た時、娘が秀雄の室に居たので、段々感づかれて、宴會の席で散々冷かされたことなどもある。會の崩れに、以前はよく誘はれて一緒に伴れられて行つたものだが、其頃から、『君にや光子さんが附いてるから、誘ふのは氣の毒だ、』などゝ言はれた。けれどまだ其時分は戀をして居なかつた。光子でなくてはならぬやうな氣も僞なかつた。寧ろさうした冷かしやら評判やらが遂に戀に落ちる材料となつたのである。

戀を得た今は別離がつらかつた。それに、此頃俄かに迫つて來た從兄との結婚談が心配になるので、『何うかして、今度行くのを機會に、兄に話して、具合が好かつたら母にも話して、公然妻に貰ひ受け度いものだ、』と思つた。けれど今の場合、とてもそれの出來ぬことは自分でも知つて居る。

氣が附くと、汽車が停つて居るので、何處かと思つて、身を半起して秀雄は窓外を見た。停車場の六角燈の上部の青い處に白ぬきに地名の平假名が出て居た。

汽車は轟々として夜を駛る。

車燈の油の光る下に、秀雄は横に倒れて、寢て此一夜を過さうとした。けれどうと〳〵するとすぐ覺める。小さい薄暗い六角の釣洋燈が幾箇となく同じやうなさびしい田舍の停車場をぼんやりと照した。

半眠り半覺めた頭腦にいろ〳〵なものが通る。聯隊本部の將校室、大隊長の黑い難かしい顏、酒保の男の耳の疣、死に瀕した母親の皺だらけの顏、何處かの演習で怪我をした兵士の血だらけの姿、ふと娘の白い顏が見えて眼が覺めた。

自分の室がすぐ浮んだ。二階を上ると六疊と四疊半、四疊半は物置になつて居る。六疊には床の間が附いて居て、四季をり〳〵の花を娘はよく活けた。始めて其處に寄宿した時のこと、娘の可愛らしい姿を見た時と、それからもう一つ或ることを思ひ出した。娘を頭腦に描くと何時でもそのあることを思ひ出すのが、かれの此頃の例になつて居る。もう自分のものだ！ といふ念がすぐ湧き返つた。祖母が難かしからうが、父母が許さなからうが、娘は既に自分のものだ、かれは心にかう繰返した。

二階の階梯をこつそりと上る微かな足音がする、着物の物に觸る氣勢が待焦れた耳にはつきり聞える。六疊の障子は半分ほど明けてあつた。二階は眞暗であるが、下座敷に行燈がぼんやり點いて居るので、階梯を上つて來る娘の顏は白く見えた。

『もう自分のものだ！』

貰つて、下宿に歸るとすぐ準備に取り懸つた。母の容態が氣に懸る。三月に行つた時からとても治らぬ病氣とは覺悟して居たが、愈々となると、離れて居るだけに心配になる。急いで土産物を整へた。圍ひの林檎をも數多く買つた。下宿して居る家の母親に話すと、それは〳〵とさも驚いた風で、何彼と世話をして吳れた。階梯の下の暗い處に色の白い娘が立つて居た。ソッと手を握つたのを誰も知らなかつた。

難かしい昔氣質の祖母が其家に居た。孫娘は其祖母に殊に愛せられて居た。二人の交情が覺られやうものなら、それこそ大變である。津輕氣質として、短刀位突つけられるのは覺悟しなければならぬと娘はよく言つた。それに、戀する秀雄に取つて今一つ重大な心配があつた。祖母の同じ孫で、娘の從兄に當る財產家の息子があつた。祖母の腹では無論それに孫娘を妻はせる積である。父母は稍々當世で、血族結婚に不贊成であるが、――娘も東京から來た士官の若々しいのに胸を動かしては居たが、一家に無上の權力を振つて居る祖母は容易に其を聽きさうにもなかつた。

朝、弘前を六時に發つた。娘は母親の後に立つて、悲しさうにして見送つて居た。昨夜、何うかして好い機會を作つて、いつものやうに娘をこつそり二階に呼ばうとしたが、秀雄は其の目的を達しなかつたのである。

一の關に着いた時は、もう日が全く落ちて居た。辨當を賣る聲が賑かに聞える。秀雄は立つて隱袋に錢を探つて窓から辨當と茶とを買つた。

軍帽を右の手に押へて、金鷄山の方を飽かず見て居たが、衣川の鐵橋をとゞろに汽車が渡り始めると、其儘顏を引込めて、元の席に復した。傍にズックの大鞄が一箇、あけび細工の手提が一箇、旅行案内に文藝俱樂部、新刊の偕行社記事が讀みさしの儘に其上に伏せてあつた。前には仙臺の商人だといふパナマ帽が唯一人相對して乘つて居た。

この軍人は吉田秀雄であつた。

秀雄は仲兄のことを考へた。仲兄が有名な旅行家で、此附近を跋涉して盛岡から秋田を踰えた時の物語を思ひ出した。續いて其身が弘前に赴任の途次、古蹟の遊覽に汽車に乘後れて、一夜を停車場前の汚い旅店に過したことを思ひ出した。昨年の大演習に此街道を南下して南軍に小牛田附近で接觸したことを思ひ出した。其時味方の大隊は聯隊の主力となつて、驀地に敵の中堅を衝いた。低い松原があつた。狼狽した敵を追つて追つて追ひ捲くつた。あの時ほど愉快なことはなかつた。かう思ふと、露營の光景、夜遲く或地點に着いて炊事當番の忙しい目に逢はされたことや、急な命令に接して、遲い夕飯をも食ひ敢へずに出發した難儀などが頻りに思ひ出される。續いて弘前の練兵場の黃い凄じい埃の中に、自分が眞黑になつて、兵を教育して居るさまが眼に見える。突然窓外の風景にまぎれて忘れて居た昨日の電報のことが新しい鋭い力で頭を打つた。『ハ、オモイツゴウシテコイ』この電報を受取ると、急いで中隊長の許に走つた。そして一緒に大隊長の處に行つた。暑中休暇までまだ十日ある。それを賴んで都合して

に經驗したことはない。今のは煩悶を煩悶で濟まして置くことの出來るものではない。色彩を着けて、價値の無いものにも價値を與へて、好奇に快感を買つて居るものでない。そしてこの切實の苦痛が母親の死を待つ念と一緒になつて、鉄之助の頭腦の中を廻轉する。

若い細君は身體の加減で、やゝ憂鬱に傾いて來た。平生の無邪氣もいくらか暗い影を帶びて、何うかすると緣側の隅で眼を赤くして居ることなどもある。氣怠るいと言つては、よく横になる。粉飾を偽るのも億劫らしく、丸髷の壞れ懸けたのを梳らうともしなかつた。

袂には青梅がいつも入れられてあつた。

二十一

青森を午前九時五十分に發した汽車は、夕暮近く、北上川に沿うた平野を平泉に向つて駛つて居た。藤原氏三代の偉業、西の京に擬した市坊は、今も猶淺墟と礎と古寺とを留めて、金色堂の古色は暗い杉樹の裡に其光を殘した。水の流れ、山のたゞずまひ――忙しい汽車の旅をする人もこの形勝の地を徒に過ぎ去るものはない。一しきり其古蹟の物語が車室の此處彼處に起つて、義經の戰死した高館の丘陵を指し合つて居るものもあつたが、不圖、二等室の車窓から少尉の軍服を着けた色の淺黑い顏が覗いて、夕日がその片頰を眩ゆく照した。

を背いて捨て去つたといふやうなさびしいつらい腹立しい氣が起つた。

お梅は足を摩つても、以前のやうに喜ばないのを始めの中は不思議に思つた。何うかすると『もう好いから、彼方に行つてお出で！』などと菅なく言ふ。莞爾した顔――お梅に對してのみする莞爾した顔ももう見られなくなつた。何か氣に入らぬことでも爲たのかと思つて、夫に話して見たが、それらしい樣子も無かつた。

銑之助の多感な心では、妻が懷姙したといふことが何だか不道德な罪惡のやうな氣がせぬでもなかつた。昔は親の喪三年の間夫婦は室を異にしたといふことがある。親を傷むの情しかあるべきことである。古い支那の道德の教が不思議にも新しく銑之助の胸に反響した。

生活は矢張苦しかつた。月に、二十圓の收入を得るのが困難であつた。全力を擧げた長篇小說は全然失敗して、二百枚ばかり書いで破つて捨てゝ了つた。飜譯の安仕事、空想ででつち上げた紀行文、そんなものを賣つて纔かに生活を續けた。それに、漸く名を出し始めた身に、雨霰と注ぎ懸けられる罵評、それが何よりもつらく痛かつた。

結婚當座の甘い快樂も段々と薄らいで行つた。半年位經つた頃は一番破綻の生じ易い時だといふ。表には平和を裝つて居ても、腹ではいろ〳〵な不平が萠す。銑之助の此頃の胸は亂れ果てゝ居た。

四疊半に居る頃は、煩悶も苦痛も要するに美しい空想であつた。今のやうに、實際に觸れた苦痛は更

いかにも悲しさうであつた。

やがてお梅は後に廻つて足を摩つた。痩せたのが著しく氣に懸る、心地好さゝうに並べて二本延して居るが、それが厭に灰色で、血の氣が無く、脛など阜螽の足のやうに細くなつた。

二十

かうした病人の優しい情も總て一時の發作であつた。泣くのも笑ふのも怒るのも癇癪を起すのも、皆同じやうに死の不安と恐怖とから來るので、或時などは身の置所の無いやうに焦れて焦れ通すことなどもあつた。新芽の發生につれて、古葉の凋落するやうな苦痛は常に力強く其胸を襲つた。

襁褓を出して見れた情は、初め若い嫁の若い心を感泣せしめたが、其時から其言葉とは反對に、お梅は其身に對する姑の態度の著しく變つたのをそれとなく感じた。變つた、著しく變つた！　お梅の肥つた血色の好い顏を見たり、無邪氣な早口な快活な言葉を聞いたりすると、病人は今迄はそれが何とも言へず希望に充滿て居るやうな氣がして――その柔かい手で肩なり足なりを摩られるのを此上なく樂しいやうに感じて居たらしかつたが、懷妊したと定つてからは、一種の冷たい情が病人の胸に萠して、艶に憔悴した顏や、目の周圍に何處となく出來た暗い影や、そろ〳〵眼に立つて來た乳や、氣怠るさうな立居振舞や、すべて肉のしまりの無い放恣な形を見ると、今迄自分のものであつたものが、俄かに自分

と聞く。

『それ〳〵、』と病人が點頭く。

枕元に持出して、言ふがまゝに開けて見る。襁褓が幾箇となく出來て居る、大きいのと小さいのと。

風呂敷の底の方には、いろ〳〵の襤褸が一杯。

母親の娘時代に着た着物の片のぼろ〳〵になつたのや、子供達の稚い頃の筒袖の斷片などもごた〳〵と一緒に丸めて交つて居た。

『お產をする時には襤褸が澤山入るものだから、汚らしいけど、寄せ集めて取つて置いたのだよ。襁褓も今ではとてもかう纒めることは出來ないんだけれど、四月頃だッたから、それだけ出來たんだから。』

『こんなに澤山に…………。』と、襁褓を飜しながら、若い細君は姑の眞心を嬉しく思つた。

『家に持つて行つてお置き。』

『何うも難有う御座いました。』

禮を言つて、風呂敷を元のやうに包んで、そして座敷の隅に置いた。

『少しさすりませうか。』

と傍に寄ると、まじ〳〵とお梅の顏を見て、

『丈夫だと世話をして遣るんだけれど……。』

『何でも心配しないでね、氣を緩くり持つて居ないと好けないよ。初めては樣子が分らないから、兎角苦勞なものだが、無理さへしなけりや何のことは無いからねえ、』と飽かず嫁の顏を見て、『餘程前にね、お前が懷姙した夢を見たことがあつたから、實はもう出來ても好ささうなものだと思つてたのさ………。それからお前が赤ちやんを抱いて居る處を見たこともあつたよ。こんな風に横ッちよに抱いて、小兒が苦しさうにして居るところなのさ。夢づて言ふものはをかしなものだねえ。』

病氣をも忘れたやうに機嫌よく、『其時分、子供が出來た時と思つて、少し襤褸などを集めて置いたから、ちよつとそれを出して御覽。』

座敷の押入を見よとのことである。で、お梅は立つて、床の間に接した方を明けると、『いゝえ、其方ぢやない、向うの方だ、』と教へる。別の方を明けて見たが、上段には書籍と雜誌とが一杯、下段には古い長持が長く幅をして居て、其上に種々の道具が置かれてあるばかり、それらしいものも見えぬ。まごまごして居ると、

『其處に無いかえ、大きな風呂敷包だが……。』

『御座いませんやうです。』

『それぢや思違ひか。その向うの緣側の扉を開けて御覽。』

果して、其扉の隅に、色の褪せた大きな風呂敷包があつた。それを持出して『これで御座いますか、』

午からお梅が看護に行くと、母親は常に似ず莞爾して居る。懐妊を聞かれたと夫が話したので、屹度何か言はれるだらうと、初めての身の、きまりが悪いやら、恥かしいやら、怖いやら、小さい胸はそゞろにさゞ波を立てゝ居た。

機嫌が悪く、皮肉でも言はれたら何うしようと思つて來た身には、姑の笑顔が此上なく嬉しかつたが、それでも何だか顔を見られるのが面伏のやうな氣がして、もぢ／＼して居ると、

『御目出度いッてねえ？』

と笑ひながら母親がいふ。

『…………。』

『月のものを見ないんだらう？』

『えゝ。』

と辛うじて返事をして顔を赧くした。

『結構だね。』

病人は珍らしく上機嫌で、『初めてだから、大切にしないと好けないよ。何だか此間から、様子が變だと思つて居たけれど……矢張さうだッたね。』

『…………。』

から何でも樂しく送らなけりや………それからお米も、餘りケン〳〵言はないやうにな………。これは遺言といふ譯ぢやないが……。』

『もう、母樣、そんなこと……。』

お米は堪へられぬといふ風で遮つた。

一座は暫し沈默に落ちた。

母親の一時の感情的發作は暫くして靜まつたが、ふと或事を思出したらしく、鐵之助に、

『お梅は懷妊したやうだね？』

『さうですか。』

と言つた鐵之助の顏は赧くなつた。

『知らないのかえ？』

『何だか體が變だツて言つてましたけれど。』

『此間、庭で梅を喰べて居るのをちよつと見たし、體がいかにもだるさうだからねえ。』

『けれどもまだ何だか解らんのでせう？』

『さうの樣だよ。』

とお米は少し笑ひ氣味にいふ。

……。』
お米も顏を掩つた。
『母樣、もうそんなこと仰しやらんで、治つて戴かなくッては困りますよ、』と銑之助が言ふと、
『この體では、とても難かしい。』と銑之助を見て、『お前は覺えて居るだらう、父樣は一番お前を可愛がつて……根岸に居る時、よくお前を伴れて、新しく出來た田圃の金魚湯に行つたものだよ。覺えてゐるだらう。』
と、常に聞馴れた話ではあるが、平生、平氣で面白く聞いて居た時とは違つて、かうした場合しみじみと胸に沁みた。
『死んだら、お墓參などをして呉れなくッても好い。花などを上げて呉れなくつても好い。』言ひ懸けて顏をしかめると思つたら淚がぽろ〳〵黐れた。『兄弟仲好くしてね、養生をして、長生をして樂しく世の中を送つてお呉れ。』
常に難しい母親であるだけに、一層此言葉が人々の胸を刺した。
『お桂は?』
『鳥渡使ひに行きました。』
『お桂にもよく云つて呉れ、なあ鐐や、仲なぞ惡くしないでお互に助け合つて……短かい世の中だ

『嫌！ 死ぬのが厭だ。こんな好い娑婆に生れて來て、子供等も皆な大きく立派になつたのに、死ぬのは厭だ！』

堪へ難いやうに泣く。

『そんなことはありませんから、安心していらつしやい。』

『いゝえ――もう死なけりやなりません。治る、治ると醫者は言つて呉れますけれど、もう死ななけやならない。』

と顏を蒲團に押附けて益々泣く。

いくらなだめても賺しても、醫師の言つた望の多い言葉を態と選んで聞かしても駄目であつた。氣が弱くなると子供のやうに弱くなる。

『父樣に草葉の蔭で逢つて、子供等が皆な丈夫で成長くなつて、銑には嫁が出來たし、秀は立派な父樣の後繼者になつたつて話したら、何んなに喜ぶか……』と歔欷をして、『父樣は今生きて居れば六十五、まだ其年頃で丈夫な人はいくらもあるのに、御國の爲めとは言ひながら、早く死んで、本當に可哀相だ……。老人子供の世話で、碌々樂もせずに……。』

聲を飮んで、

『それから思ふと、私など樂もした。面白いことも見た。もう死んでも殘り惜しいことは無いけれど

主人は答へる術を知らなかつた。

『親が……子供を育てるのは一通りぢやないぞ。お前達がかうして大きくなつたのは、誰のお蔭だ。』

病人と思へぬ程辭色が烈しい。

『母樣、そんな無理を仰しやつたッて困ります。つい、寢込んで了つて、眼が覺めなかつたんですから。』

『もう好い、お前達の世話にはなりません。寢てお出で……。』

『そんなこと仰しやらずに……。』

『好いよ、世話にならない、私は一人で死ぬから。』

萬事が總てかういふ風に難かしい。

何ぞと謂ふと、『親の恩を忘れたか』といふ。『親は死んでもお前達は悲しくないだらう』と突込む。いつもの皮肉が一層烈しく銳くなつて、人の弱點を抉ぐるやうに刺す。かと思ふと、心細い、悲しい、氣も滅入つて了ふやうな弱いことを言ふ。心底から出たやうな情のある訓誡を縷々として說く。心の狀態が著しく極端から極端へと走つて神經が絕えず動搖した。感情が總て發作的で容易に取留がつかなくなつた。意識しないまでも、「とても治らぬ」といふ恐ろしい事實が旣に其胸を蠶食し始めたのである。

ある時何か思出して泣いて居るので、

『何うかなさいましたか』と訊くと、

腹を抱へて居る醜い形に顏を蹙めて、『本當に人間の屑だ、滿足に育てることも出來ないで、餓鬼ばかり產むなら犬猫でもする、』などと惡口を加へる。

ある夜、腹が痛んだので、誰か來て吳れ！　と呼んだ。主人もお桂も晝間の看護に疲れて熟睡して居た。當番のお米も病人がよく眠つて居るので、ちよつとと思つて四疊半に行つて今寢たばかりである。二聲三聲呼ばれて漸く目が覺めて蚊帳の中から出て來たお桂の扮裝はだらしがなかつた。髮が亂れて胸がはだけて、寢卷の帶は解け懸つて居る。病人は痛い腹を抑へながら、『くつゝいて寢て居るばかりが能ぢやないぞ！』

お桂は聞かぬ風をして、

『押へませうか、』と近寄ると、さも汚はしいと言つた態度をして、

『鐐！　鐐！』

主人が起きて來ると、

『鐐！　お前は親の恩を覺えてるか。』

『…………。』

『女房と寢るばかりが能ぢやあるまい。親がかうして苦しんで居るのを、知らずに寢て居て、それで孔子樣に濟むか。』

十九

小衝突の中に日は經つた。

病人は次第に惡くなつて行く。腹の痛いのもさうだが、此頃はわけて氣難かしくなつて、機嫌の惡い時は手も附けられないので、看護する者は一方ならず困つた。食物が第一喧しい。珍しいもので毒にならぬものは容易に手に入らない。牛乳は昔人の習で、臭をかぐのも厭だといふ。それに、二三日此方著しく症狀が進んで、もう起返ることが出來ない程に衰弱した。それで居て、神經は反對に昂奮して、よく物を抛り附けたり何かする。誰彼の差別なく叱り散した。

お桂とお米は絕えず衝突して居た。けれどそれが素振にでも顯はれると、病人はすぐ腹を立てた。『お前達は何をしに此處に來てるんだ。喧嘩をするなら向うに行け、』と調の高い聲で呶鳴る。主人を捉へては『お前は一人の親を見殺しにしても好いと思ふのか、何故立派な醫師に懸けて吳れぬのだ！』と烈しい調子で責める。ある時、銑之助が少し氣に入らぬことを謂つたら、『馬鹿！　馬鹿！　小說を書くの何のッて生意氣だ。そんなことで小說が書けるか、』と罵つた。

此間までは女の兒が少しぐらゐ泣いても『子供の泣くのは爲方が無い、』と謂つて居たが、此頃は『喧しい餓鬼だ、お米をもう歸して了へ、』とよくいふ。實の娘ながらお米の苛々した調子が煩さく、大きな

『母樣、何か上げようか。』

病人は大儀さうに寢反をして、銑之助の顏を見た。非常に憔悴したと銑之助は思つた。もう一月持つか持たぬかと言つた醫師の言葉を思出した。

『何も食ひ度くない？』

病人は輕く點頭く。茶の間では、まだ其悶着が續いて居るらしく、お米の早口と主人の緩やかな聲とが聞える。をり／＼お桂の聲も交る。中仕切の襖が一枚開いて居るので、此方に向いた病人の眼にも、お米の後姿と長火鉢と時計と主人の顏が見える。

『何を言つてるんだい、さつきから。』

『何ァに、つまらんことさ……。』

『泣饒舌に饒舌つて居るぢやないか。』

『姉さん困るんだ、つまらんことを言つて……。』

『何うしてあゝだらう？』と言つたが、急に聲を高くして『お米！　お米！………お桂も病人を置いて何をべちやくちや饒舌つてるんだ！』

で、茶の間の悶着は靜まる。お米は兒を抱いて緣側から庭へ下りる。お桂は勝手へ行く。主人は病室に入つて來た。前の低い田甫を越した小學校からは、生徒の體操をする聲が賑かに聞えて來る。

鉄之助は激して居るので、ついかう言ふと、

『私も勝氣だらうけれど、嫁さんを庇ふばかりが男ぢやないよ。』あんな肥つた女が何處が好いんだらうといふ腹がお米にある。

『庇つたッて好いぢやないか。』

『それは好いともねえ……。』

『好いければ、そんなこと言はん方が好い。』

『だッて男が鼻どんに鼻毛を長くしてるのは、見つともないよ。』

『大きな御世話だ！』

と鉄之助は激して了つた。

『まァ、好いよ、そんなに言はなくッても……。』

と主人は聲を和げて、『お梅の知つたことぢやない。お梅にそんな惡氣はありやしない……。お米も惡い。そんな餘計な口を利かんでも好い。』

『だッて餘りだからサ。』

『馬鹿な！』と鉄之助は言つたが、其儘ブイと立つて病人の傍に行く。

病人は向うむきに寢て居た。夏の晝の暑く、輕い掻卷も後へ遣つて綿入の寢卷を胸の上に懸けて居た。

がね。』

『そんなこと言つたッて駄目ですよ。私ちやんと聞いて居たんだから………。』

お米は口惜しい。一生懸命にかうして世話に來て居るのに、子供が邪魔にされたり泣くのを喧しいと言はれたりするのがいかにも殘念である。母親は不治の病氣、嫁達に兄弟は好いやうにされて、萬一を賴む實家もかうした有樣になつたのかと思ふと、其身の不運が胸に迫つて今更のやうに悲しくもなるのである。

『兄樣私に惡い處があるなら、ぐん／＼言つて下さい。蔭口を聞かれるのは、私は大嫌ひですから。』

『お桂も蔭口などを言つてはいかんよ。』

と主人は妻をたしなめた。

『お梅さんにもよく言つてお吳れ！』

とお米は銑之助に向つて言つた。其聲が稍尖つて居たので、

『お梅はそんなことは知りはせんよ。』

『だつて言つたんだもの。』

『言つたッて何だッて、………お梅は姉さんの惡口などを言ふ柄ぢやないからね………。姉さんも餘り勝氣過ぎるよ。』

『本當に仲好くして貰はなくつちや爲方がないぢやないか。お前は何しに此處に來てるんだ。母樣の看病をしなくちやならんのぢやないか。お互ひに讓合つて氣まづいことがあつても我慢して少しでも母樣の世話をするのが本當だ。それに、下らんことにいがみ合つて、滑つたの轉んだのッて文句ばかり言つて居る。お桂もお桂だ。何も知らないお梅にまでそんな智慧を附けなくつたッて好いぢやないか。』

お桂は默つて居た。

主人は傍に小さくなつて坐つて居るお梅に向つて優しい調子で、

『構はずお歸り、家が留守になつて居るんだから。』

お梅はそれを好い機會に、丁寧に挨拶して、夫の顏をちよつと見たが、緣側から駒下駄を突懸けて戶外へ出た。久留米絣にメリンスの帶をした丸髷姿が、夏の日影にくつきりと際立つ。

後で又一しきり難しい話が續く。

『一體何うしたんだ？』

『何うしたッて、兄樣、私は馬鹿にされて、邪魔にされて默つて居やしませんからね。惡人だの何だのッて………。』

『お桂そんなこと言つたのか？』

『いゝえ――そんなこと言つたんぢやありませんがね。お梅さんとちよつと話をして居たばかりです

『惡人でも何でも好い。大きな御世話さ。』

いかにも口惜しさうで、出懸つた涙を袂で拭つた。

『また、そんなことを言つて、困るぢやないか。』と主人は宥めにかゝる。

鉄之助も顔を曇らせた。

『いくら私が貧乏したつて、あまり馬鹿にしないが好い。』かう言懸けたお米は聲はもう泣饒舌になつて居た。『本當に、いくら私が田舍者で貧乏生活をして居るからッて……。』

『お前はすぐひがむからいかん、誰が貧乏だッてお前を馬鹿にした？』

『誰ッて、皆な馬鹿にしてるぢやありませんか。』

『お前は氣ばかり勝つて、何ぞと言ふと、すぐひがんで爲方が無い、』と言つて、主人は、『お桂――お桂――。』

病人の傍に行つて居たお桂は立つて其處に來た。

『お前、お米の惡口なぞ言つたのか。』

『いゝえ……。』

『そら、あゝしらぐしいことを言ふ。私はちやんと聞いて居ましたよ。』

主人は強ひて深く追窮せずに、

に自から廻して下して、其處に坐つて乳を含ませた。穩かならぬ氣勢が其顏に歴々と現はれて居た。
お梅は夫が來たので、代つて家に歸るべく母親に挨拶して茶の間に來た。と、お米はいきなり、
『お梅さん、さつき何を話して居たの？』
『え？』
調子が烈しいので、若い細君は驚いて義姉の顏を見る。
『さつき、勝手で、嫂さんと何を話して居たのさと聞くんですよ。』
それと覺つたお梅の顏は俄かに赧くなつた。
『聞いて居ないから好いと思つて人の惡口を言つて本當に左樣だの、何だのッて、餘り人を馬鹿にして居るよ。私が惡けりや私が惡いとちやんと前で言ふが好いぢやないか。』
眞向から痰呵を切られて、お梅は其處にすくんで了つた。
『何うしたといふんだ？』
と主人が眞面目な顏でお米の方を見る。
『何うしたッて……兄樣、先程、石鹸を取りに勝手に行くと、嫂さんとお梅さんと、二人で一緒になつて私の惡口を言つてるんだよ。あんな惡人は無いの、天道樣が見て居るのッて、……』と、聲を震はせて、

見ると、お桂は戸棚の前に立つて、顔を掩つて口惜しさうにして居る。

『何うしたんだ？』

主人から聞かれても小言を言はれると思つて默つて居る。

『困つた奴等だナ。』

と苦々しさうに主人は言つたが、强ひて荒立てるにも及ばぬので、深く追窮もしなかつた。

一時間ほどしてから、銑之助の細君が遣つて來た。すると、お桂は手眞似をしてお梅を勝手にちよつと呼んだ。主人は病人の傍に行つてもう茶の間には居なかつた。お米は玄關の傍の檜の樹の涼しい蔭に盥を持つて來て、いぎたなく睡つた子を負ひながら、頻りに洗濯をして居た。で、お桂とお梅とは長い間勝手の戸棚の前に立つて、何事かを話し合つた。お桂の饒舌る低い聲の絶間に、『えゝえゝ、さうですとも』といふお梅の聲が度々交つた。

『本當にあんな女ッたらありやしないがね。天道樣、ちやんと見て居らつしやるから。』

『えゝえゝ、さうですとも……。』

其處に生憎お米が洗濯石鹼を取りに來た。

銑之助がちよつと家を明けて遣つて來て、主人と長火鉢に相對して坐つて世の常の會話に耽つて居る。と、洗濯を終つたお米は、緣側から茶の間にあがつて、眼を覺して頻りにむづかる脊の兒をぐるりと巧

其笑ふのが可愛いと言つてはよくあやした。

病人はお米を力にしては居るが、子供の泣聲とその田舍風の無作法と氣の勝つた所置振とは矢張厭であつた。お柱と衝突するのも好いが、それが延いて主人と衝突し、銑之助と衝突し、銑之助の若い妻と衝突するのを見るのは餘り好まなかつた。お米の身にしては、田舍のことが苦勞になる、長女の泣顏が氣に懸る、夫から手紙が一本も來ぬので愈々心配になる。衝突はするもの丶、それがまた不愉快で居心地が惡い。

かういふ狀態の中に母親の苦痛がをり〳〵織込まれる。梅雨はや丶晴れ氣味で、心持の好い光線が雲の間から洩れるやうになつたが、一家は相變らず暗かつた。

『お米さん、私、何處が惡いんぢやか、言つてお吳れよ。』

『嫂さんのやうな人には………。』

『だから、さう言ふぢやないかね。』

『好う御座んすよ。』

とお米は聲を尖らして座敷に行く。ある日曜日のことであつた。

主人は茶の間に居たが、勝手をのぞき込んで、

『また何うかしてるのか。』

かつた。で、其夜も遲くまで机に向つて、澁り勝なる筆を動かした。机を離れた時には、若い細君は既にいぎたなく假睡をして居た。

十八

お米が來て、好いこともあれば惡いこともあつた。女の兒が際立つて羸弱なので、ちよつと何かすると、ヒイヒイと泣く。それにまだ締が無いので小便大便をよくしくじる。襁褓の汚れたのが彼方此方に散ばつて、惡くすると御馳走を踏附けることなども尠くない。銑之助は子供が嫌ひなので、泣聲を聞くと、さも不愉快さうな顏をして、時には『よく泣く子だねえ、』『姉さん、それ早く騙したら好いぢやないか』などとつけ〳〵いふ。するとお米はすぐひがんで、其身が貧乏で、無敎育な夫を持つて居るばかりに、兄弟にまでもかう馬鹿にされると思ふ。何もそんなに邪魔にしなくつても好ささうなものだといふ腹がある。『子供の泣くのは當り前だがねえ……』と顏色をかへて、フイと立つて緣側に行く。胸を半分ほど露はに、大きな乳をだらりと出して、はや五月の眼に立つ腹を抱へて、無作法に振舞つて居る形は餘り好ましいものではなかつた。

主人はそれでも其女の兒をよく可愛がつて遣つた。抱いたり、あやしたりするばかりではなく、偶には何か玩具などを買つて來ることもある。色の黑い、おでこの、毛の赤い、それは醜い子であるのに、

『それから、姉様何んな惡口を言つて？』

『腋臭だの、毬髮だのッて、隨分ひどいことを言つたよ。』

『私は田舍の姉さんもひどいと思ひますよ。何もあんなに當り散らさなくつても好いんですもの。此間もあんまりひどいもんだから、兄樣怒つて居ましたよ。そんなに喧嘩ばかりしてるんなら、邪魔になるから歸つて呉れッて。すると姉さんも負けぬ氣で、私や母樣の看病に來たんだから、歸る譯が無いッて言つてました。』

『本當に困るよ。』

『嫂さんだッてそんなに惡い人ぢやないんですもの。』

『さうともさ……。だから兄樣は初めから田舍の姉の來るのを餘り望んで居なかつたんだ。』

若い夫婦は猶少時語つた。やがて銑之助が座敷に行かうとすると、

『今夜も遲くまで御書きなさるの？』

『うん。』

『今夜は早く仕舞ひませうよ。』

『まァ、少し書かう。』

銑之助は妻の淋しいのを知つては居るが、さりとて自己の生命なる創作を意味なく留めるには忍びな

『さう……。』とにつこりする。

『此間、杉田が來てる時、誰かの女の寫眞の口繪を見てると……さう〳〵何とかいふ子爵の家庭の寫眞さ。子爵と子爵夫人と令孃が二人、その總領の娘が中々別嬪さんなんだが、子爵夫人に酷肖で、よくもああ似てると思ふ位なのさ。すると杉田が、いくら別嬪でもこれが子爵夫人のやうな婆樣になるんだと思ふと、色も戀も無くなるッて言ふのさ。そして君のフラウもムッテルによく似てるねえ！　と言ふぢやないか。』

『ムッテルッて何？』

『フラウが細君、ムッテルが母。』

と笑ひながら銑之助が解釋する。

『杉田さん、そんなこと言つて？』

『うむ。』

『ひどい人ねえ、今度來たら言つて遣るから好い。』

『だッて爲方が無い、己もさう思つて居るもの、年を取ると、小石川の母樣のやうに、腰をまげて、ああした調子でお世辭なんか言ふんかと思ふと厭になつちまふ。』

『まさか、私が……。』とまたにつこりした。

『何ァに、いつもの勝氣で困つて了ふのさ。』
『嫂さんのことを何か言つてッたんでせう？』
銑之助は點頭いて見せる。
『何んなことを言つて。』
『何ァに惡口さ。』
『何故あゝ仲が惡くなつたんでせう。』
『勝氣だからいかん。』
『さうですねえ、少し勝氣ですねえ。餘程母さんに似に居ますねえ。』
『兄弟で一番似てるさ。』
『あなたも似てますね？』
『さうかナ。』
『性急で、氣難くつて、私、はら〳〵することがありますよ。』
『それや親子だから、いくらか似てるさ。』
『秀雄さんも、何處か似てる處がありますよ。何うしても兄樣が一番沈着いていらつしやる。』
『お前だつて左樣だ、小石川の母樣に瓜二つだ。』

『さうすりや八月ですね。』

『さうさ。』

『母樣、あんなに惡いのに、もつと早く來られないんでせうか。』

『來られないッて言ふことも無いだらうがね。』

『早く來るやうに言つて遣る方が好いでせう。』

『さう言つて遣らう。』

『もしものことなどありやしますまいと思ひますけれど………、何うせ看病するなら早い方が好いですからねえ。』

『左樣だよ、兄樣も今日さう言つて居た。』

お梅はふと緣側に夏の座蒲團が出て居るのを見て、

『どなたか來て？』

『何ァに、田舍の姉がちよつと……。』

『私が行くとすぐ？』

『うむ。』

『何か話があつて？』

『どんな人でせう？　寫眞でも送つて寄越せば好いのに…………。』
『今度、寄越せッて言つて遣らうか。』
『えゝ』と言つたが、すぐ、
『別嬪さんでせうねえ？』
『何うだかなァ……。顏は綺麗かも知れないけれど、津輕辯では爲方が無い。』
『さうですねえ。』
『高等女學校に行つてるとか何とか言つてたねえ……此間來た時。』
『えゝさうですよ。此間も私にね、嫂さん小學校卒業した限りだらうッて言ふから、――さうですよ、私行きたかつたけれど、家の都合で行けなかつたッて言ふと、駄目だなあッて言ふんでせう。私きまりがわるかつた。そして、あとで、僕の居るうちの娘は高等女學校へ行つてるッて言ふぢやありませんかね。』
『馬鹿にしてる。』
と銕之助は笑つた。
『そしていつ出て來るんです？』
『此處には何にも書いてないが、暑中休暇になつてから來る積りだらう。』

『何處から？』と訊く。

『弘前から。』

と鉄之助はお梅に渡す。

お梅は一通りざつと見て、

『相變らず戲談を言つてますね。』

『お前のことが冷かして書いてあるだらう。』

『えゝ』と笑顔になる。

『餘程調子が變だよ。あの琴の娘がラバアになつたんぢやないかと思ふね。』

『さうでせうか。』

『だッて此處にかう書いてあるぢやないか』と手紙を展げて見て、『此處に、そら「琴の先生と一緒に……」と書いてある處があるだらう。其處がをかしい。』

『左樣ですねえ。』

『屹度もうラバアになつたんだ。』

『さうかも知れませんね。』

と、出流れの茶を茶碗についで飲んで、

が容易に押へ切れない。醫師の宣告をも知らずに、まだ治るものと信じて居る母親の心を考へると、胸が壓つけられる樣な氣がして涙が出さうになる。

螢がひとつ明放した座敷を拔けて、ハンモックの上を飛んで行く。

郵便脚夫が門の郵便受函にがさこさと手紙を入れて行つた氣勢がした。昨日頼んだ新聞小說の話が纏つたのかも知れぬと思つて、銑之助は慌てゝハンモックを下りて、下駄を突懸けて取りに行つたが、闇に透かして見ると、吉田秀雄といふ大きな字が微かながらも眼に入る。

弘前の弟からである。

豫期と違つたので、やゝ失望したが、其儘茶の間の六疊に上つて、暗くなつたら點けて下さいと妻が吊して行つた洋燈にマッチを摩つて火を點した。そして其下で、封を截つて手紙を讀む。

大きな字で、卷紙の一行に五六字位しか書いて無い。旨いやうな拙いやうな自己流の筆蹟で、其文がまた思ひ切つて露骨である。候といふ字があるかと思ふと、處々文章體になつたり言文一致になつたりして居る。戲談もあれば眞面目な用事もある。母親の病氣のことも種々心配して書いてあつた。

輕い足音がして細君が歸つて來た。

湯上りの顏はほんのりとして、薄く化粧した頰のあたりが美しい。フランネルの單衣を着て平常のメリンスの帶をして居る。銑之助の手にして居る手紙を見て、

「八犬傳でも讀めば好い。」

「何處にも無いもの。」

「下の家にあるよ。兄樣が持つてるよ。」

『さうかえ、あるかえ。』とさも喜んだといふ風で、

『本當にあるかえ。』

まだ昔の若い血が流れて居ると見える。

姉はやがて歸る。

銑之助は一人になつた。妻は湯に出懸けてまだ歸つて來ない。不圖立上つて座敷の緣側に行つた。其處には四五日前に買つて來たハンモックが吊されてある。籐椅子が買へぬので、せめてこれに由つて空想に耽る快樂を得ようとしたのである。買つて來るとすぐ釘を柱に附けて、具合の好いやうに吊つて、妻とかはる〴〵身をその上に橫へて、夕燒の雲や夕の星を見た。妻の爲めに輕く搖つて遣つたこともある。

銑之助は例の如く身輕にそれに乘ると、餘力でハンモックが輕く心地よく動く。もう薄暮である。夕照の餘影を受けて一時美しく榮えた雲も消えて、向うの丘の樹の上に星が閃々と光つた。

母親を思ふの念が胸にこみ上げて來た。自分ながらその餘りに多感なのを知つて居るが、何うもそれ

自分の家だと言ふ腹があるんだからねえ。』
『それは左樣だらうさ、細君だから……。』
『あんなことを言ふ。お前も解らない人だねえ………。あんな女に、吉田家を掻廻されてたまるものかねえ。私は出た本家だから何時でも歸つて來て、幅で居るよ。あんな女にへいへいして居られるもんか。』
『それァ小さくなつて居なくつたッて好いさ。仲好くしてさへ居れや――。』
『誰が小さくなつて居るもんか。』
子供が泣出したので立つて、ほいほいと庭を搖つて歩いた。顏には感情の激した痕が名殘なく見えた。
銑之助の全然同情をせぬ口振に一層烈しく激したのである。
『此頃は本を讀むかえ?』
銑之助は暫くして尋ねた。此姉が娘の時分太閤記や楠一代記などをよく讀んで秀吉や正成や清正を理想の男子としたことを思ひ出したのである。
『本など讀む暇は無いものねえ。』
『それでも氣晴しに少しは讀む方が好い。』
『講釋なぞ家で何うかすると買つて來るけれど、あんな人情本は面白くないからねえ。』

『それが惡い。』

『惡くッたッて好いよ。』

と益々激昻する。

『だッて姉さんが好くつたッて、さう仲たがひを爲れて居ては、病人も氣まづいし、兄樣も困る……

……。』

お米はしばし默つて居たが、

『本當に厭つたらしい女ッちやありやしない。だから私や、成たけ口を聞かないやうにして、側にも寄らないやうにしてるんだよ、腋臭でそれァ臭いから。』

と態と顏を蹙めて見せる。

『姉さんも相變らず勝氣で困るねえ。』

と、あまり可笑いので銑之助は笑つた。

『兄樣も女房運の無い人だ。あの毬髮の腋臭の臭い――。』

『まァ、そんな惡口は好いぢやないか。』

『まだ來てから二月も經たないのに、結構上さんづらしてるんだから、癪に觸らァねえ。それも十分いろんなことが出來るんなら、まだ勘辨のしやうもあるけれど、英男の世話も碌々出來ない癖に此處は

『まァ爲方が無い、そんなこと言つたつて。』

『それや私だつて、嫂さんだから、向うでちやんとして來りや、立派に立てヽ置くんだけれど………

あんまり馬鹿にしてるからサ。』

『さゥ勝氣にばかりして居ても困るよ。』

『だッて本當に癪に觸るんだもの。私や來てから二三日しか經たない頃だッたから默つて居たがね。母樣が鳥渡何かむづかしいことを言つたんだよ。すると、兄樣が「そんなむづかしいことを仰しやつては困る。お桂は母樣の看病ばかりしてるんぢやないから」ッて言ふぢやないか。私や餘りだと思つた。兄樣もあんなことを言ふのは惡いが、あのお桂が焚き附けるから、あんなことを言ふんだ。私は口惜くつて涙が出たよ。』

『母樣もむづかしいから、つい兄樣もそんなことを言つたんだ。』

『いくらむづかしいたッて、あんまりぢやないかね。あの病人にサ………何時死ぬか解らないほどの病人に……。』

と頻りに激昂する。

『まァ然し――。』

『なあに、彼奴等に看病して貰はなくつても好い。私はどんなに手を盡してゞも看病して上げるから。』

『碌々母樣の世話なんか爲やしない。四疊半に引込んで、ぐづ〳〵してるんだからねえ。さつきなども左樣だらう。あんなに母樣が苦しんで居るのに、顏も出さないんだから。本當に呆れて了ふよ。』

『だから肉身のものでなくつては駄目だと言ふんだ。』

『肉身のものに越したことはそれやないけれど、あんな嫂さんたらありやしない。口惜いから、私ぐんぐんして遣るのさ。母樣の世話でも、英男の世話でも構はず爲て遣るのさ。……とね、あれでね、兄樣に吩咐けるんだよ。子供ぢやありやしまいし、三十近くになつて、べた〳〵亭主にひつ附いて、泣いて見せたり、笑つて見せたりしてるんだから厭になつちまうよ。……だから母樣だつて怒るんサ。あんな嫁はありやしない。』

すぐ後を續いで、

『此間もね、夕御飯を食つてると、兄樣がね、「お米、お桂もまだ馴れない處はあるだらうが、此場合だから仲好くして看病して吳れ、」と言ふぢやないか。あの兄樣だから私は別に何とも思ひやしないけれど、あのお桂づらが吩咐けたんだと思ふと、腹が立つてね。「何も仲を惡くしたつもりはありません、」と言ふと、「お前は母樣の世話さへ爲て吳れゝば、勝手のことなどしなくつても好い、」と言ふサ。私はぐッと胸に來たから、うんと言つて遣つたよ。私はいくら田舍者だつて、貧乏だつて、物の道理は心得て居るからねえ。』

『何うもあゝ苦しんでは困るねえ。』
『本當だよ。』
『何うか爲やうが無いもんかねえ。』
『隨分手を盡したんだから。』
『それや兄樣もお前も居るんだから、十分なことは爲たんだらうけれどねえ。』
『あの病氣ぢや何うも仕方が無い。』
お米は嘆息を吐いて、『これから樂が出來ると謂ふのに、母樣も不運だねえ。これからならお前もかうして別になつて居るし、秀雄だつて母樣一人くらゐ何うにもなるんだから、厭なら兄樣の處に居なくつても好い身分になつたのに……。』
『本當に不運だ……。』
と銑之助も嘆息して、『痛くなると、苛々して手も附けられないやうになるけれど、せめて看護でもよく爲て遣つて下さい……。』
『それァ爲るともね……。その爲めに來たんだから……。けどもね、嫂さんといふ人は餘程ひどい人だねえ。』
返事を爲ずに銑之助が居ると、

『いゝえ、私が洗ひますから。』

聲が尖つて居た。

『構はんでお置きな……あゝ言ふんだから。』と頭の上で饒舌られて喧しいので、病人が口を挿んだ。

『本當に何うかしてるよ、馬鹿々々しい。』

と、お米は口の中で呟いて、井戸端へ行く。繩釣瓶を繰る音がして、やがて洗濯の音がざぶ〳〵と聞える。

たまさかの美しい天氣、病人は自から蒲團の上に起き返つた。緣側には蒲團や搔卷や着物やらが、ずらりと並べて干してある。病人は庭樹の繁みと空の碧とをじつと見て居た。一月前から見ると著しい衰弱である。皺の寄つた顔の色は黃く濁つて、銳い眼ももう其の光を失つた。齒の拔けた口は締りが無く、無造作に束ねた髮は白く、胸のあたりは見るに堪へぬほど細く瘦せて、もう長く此世の人ではないことは一目で解る。病人は瘦せた手を無意味に自分で翫して見て居た。

十七

終日病人が苦しんで、漸く落着いたある夕暮に、お米は子供を抱いて裏の家の緣側に腰を掛けて、銑之助と話して居た。

嫂も流石に見て居る譯に行かぬので、戸棚の中を頻りに掃除して居ると、
『嫂さん私が爲るから、』とお米が言つた。
別段何の意味でも無い。唯、ちよつと言つただけである。けれど互ひに反目して居るので、これが尠なからずお桂の氣に觸つた。自分の爲てることを綺麗であらうが汚なからうが大きなお世話だといふ腹になつて、フィと向うに行つて了ふ。
其態度がお米の癪に觸つたが、何構ふものか、汚いから、綺麗にするのだといふ調子で、さッさと片附けるものは片附け、洗ふものは洗つて了ふ。
勝手の掃除を濟まして、今度は洗濯に取懸る。
『嫂さん兄さんの汚れたものを御出しなさいな、次手だから……。』
と四疊半を覗きながらわざと言ふと、
『いゝえ、好いんですよ。』と聲ばかりする。
『好いことはないぢやありませんか。汚れて臭くなつたのがあるぢやありませんか。遠慮をせずにお出しなさいッてば。』
『私が後で洗ひます。』
『後だつて、晝からでは乾きませんよ。明日は天氣だか何だか解りやしないから。』

お米とお桂とはすぐ衝突した。

十六

母親の世話をお米がすればするほど、お桂は除け者にされたやうな不愉快な氣がする。お米はお桂が厭にぢやら〳〵して、碌々病人の看護を爲ないのを腹立しく、折につけてチク〳〵と當る。それでも最初の中は、お互ひに腹の中で思つて居るだけで、あまり素振にも顯はさなかつたが、二三日來、母親の病氣が思はしくないので、家の中の空氣が何處となく陰氣で、重苦しく、氣が懊惱する。かういふ時には兎角感情の衝突が募るのである。

梅雨時の勝手の汚いのが綺麗好のお米の神經を殊に刺戟した。大瓶の水を汲むと底から塵滓が孑孑と共に湧き上る。流しには飯粒がすつかり流されずに殘つて居る。鍋や皿も洗はずに一隅につかねて置く。戸棚を明けると、黴臭い臭氣が鼻を衝いて、皿やら椀やら醬油さしの汚れたのやらがだらし無く散ばつて居る。お米は貧乏はしたが勝手を汚くして置くことは大嫌である。で、一日、朝から雲切れがして、碧い空が晴がましい日の光を珍しく四邊に漲らした時、お米は甲斐々々しく女の兒を負つて、蒲團を干す、寢衣を干す、下駄を干す、果ては跣足になつて、大瓶の水を汲み替へ、足駄の泥の堆く積つた水口を掃除した。

『その中、暑中休暇になつたら、來るッて言つて寄越した。』
『しばらく逢はないがねえ、立派になつたらうねえ。』
『うむ。』
『まだ中尉にはなれないんかねえ？』
『さう早くはなれんさ、年限があるからなァ、來年だらう。』
『中尉にでもなれや好いお嫁さんが取れるねえ、』とお米は笑顔になる。
『うむ。』
銑之助は氣乘りがせぬといふ風である。
玄關の格子戸が明いたと思ふと、『折角御馳走しようと思つて行つて見たが何にもありやせん。此處等は田舍だからなァ、』と言ひながら主人が入つて來た。少時すると、其處に茶湯臺が開かれて、兎に角に鮪の刺身、豆腐汁、蠶豆、飯が足りぬので、笊蕎麥が六箇ほど並べられた。德利が一本、主人は猪口を銑之助に差した。
病人は久し振で娘に逢つたので機嫌が好い。常に似ぬ明かな賑やかな夕飯の團欒、田舍に住んだ頃の物語も出て、誰彼の噂も盡きない。氣が付くと、お米は長女の泣顏をも忘れて居た。

『これで母樣さへ丈夫だと好いんだけれど……。』

『本當さ……。』

新聞を傍に置いて、

『少しは看病して行つて呉れるんだらうねえ?』

『するともね。……今度は其積で出て來たんだから、一月や二月……。』

『さうして呉れると、母樣も心丈夫だ。此處の嫂さんでも、家の先生でも、他人だからねえ。肉身のものが居なくちや……。』

『さうともねえ。』

不圖顏を寄せて、小聲で、『母樣、餘程惡いんかえ?』

銑之助は唯點頭いて見せた。

『後で詳しく聞くけども……困つたねえ。』

と小聲で顏を曇らせる。やがて、

『秀雄も丈夫だらうねえ。』

『うむ。』

『來られないのかねえ。』

嫁は勝手で、七輪にぱた〳〵と火を起して、惣菜の準備を爲て居た。もう夜になつた。戸外は細かい雨がまた降出して、隣の二階家の勝手を洩れる洋燈の光が濡れて夕闇を限取つた。女の兒が旨く寢たので、お米は母親の夕飯の給仕をして居たが、それも濟んだので、鍋と盆とを勝手へ下げて、銑之助の坐つて居る長火鉢の横に來て坐つた。

男の兒は洋燈の下で、買つて來た鉛筆で、筆記帳に片假名のイロハを書いて居る。

『英ちやん、伯母さん覺えて居るかね。』

英男は默つて書いて居る。頭を上げようともしない。着物の袖の鍵裂が不圖眼に附いたので、本當の母親のない子は可哀相だと思つた。

銑之助に、

『好いお嫁さんが出來たつてね。』

『何アに。』

『年は十九だつて。』

『うん。』

『兄樣もお前も皆な身が決つて、母樣は安心だ。』

『うん、』と銑之助は今日の新聞を見て居る。

『嫂さん、本當に大抵ぢやありませんね。』

とお米が言ふと、

『いゑ〳〵、もう何も行居かんので……碌なことも出來ませんでな……』と長たらしい調子でお桂が挨拶する。ぢやらぢやらと厭らしい人だとお米は思つた。

『婆ちやん、』と緣側から呼んで英男は入つて來たが、見馴れぬ客が居るので、きよろりとして立つて居る。

『英ちやん、まァ大きくなつた！』

『婆ちやん、鉛筆買うんだからお錢お吳れ。』

『何ですねえ、まァ、お客樣がいらつしやるのに、今に、母樣が上るから、お辭儀をなさるもんぢやがね。』

『婆ちやん、婆ちやん。』

『あゝ上げるよ、』と病人は蒲團の下から財布を出した。

田舍の姉が見えたといふので、銑之助もやがて遣つて來た。

夕暮を俄かの混雜、主人は洋燈を吊すやら、火鉢の火を見るやら、母親の世話を爲るやら――やがて何か肴屋に行つて見て來ようと、自から傘をさして出懸けた。

だけど………。』

『何故あゝだらうね。』

お米は默つて居た。

母親はじッと見て居たが、

『お前また出來たね！』

『え………。』

とお米は恥辱(はぢ)を含んだ腹立しさうな顔を少し赧くした。

『幾月だえ？』

『もう今月で五月……。』

『困るねえ、子供ばかり拵へて喧嘩して居ちや——。』

お米は默つて低頭く。

其處に、主人が茶を運んで來た。嫁のお桂は初對面だと謂ふので着物を着替へて出て來る。一通りの挨拶が取交される。お米は土産にと携へて來た中野縞の大名縞を一反、これはほんの印に嫂さんへ。今一反は母さんの寢卷にでもと……。

少時、何ともつかず語り合つて居たが、

こ來たのさ、』と、少しやけ氣味な口振である。

勝氣で、亭主と衝突して、これまでにも出るの入るのとよく紛紜を引起した。主人も母親も、お米のことに就いては、既に手古摺切つて居るのである。

お米は又お米で、田舍に一人置去にされて、貧しい機屋の世帶、多い子供等と亭主の意氣地無しと薄情とを胸に描いた。現に昨日出て來る時も、亭主は機廻りにも出ないで、酒を飲んでふて寢をして居た。行くなら、歸つて來るなと言つた。えゝえゝ暇を下さるなら望む所だ！ と出て來た。物心の着いた總領の娘の十歳になるのがそれと知つて泣いて追懸けて來たのをも振放つて來た。

『定さん相變らず分らんかねえ。』

『もう爲方が無いんだもの。』

『それでも商賣の方は好いんだらう！』と病人が却つて心を痛める。

『商賣も一生懸命に遣つて吳れると好いんだけど………怠けてばかし居るんだものね………。』

『此頃は景氣は好いッて言ふぢやないか。』

『え、足利は大した景氣、夏物はそれは大層儲かるんだよ。だから今少し身を入れて吳れゝば好いん

玄關に出た主人は、
『やあ、お米か。』
『兄さん！』とさも懷かしさうに。
座敷に入つゝ、憔悴した母親の顏を見るや否、
『母樣、何故こんな病氣になつたんだねえ。』とお米は聲を震はして言つた。
『お米か、よく來て吳れた。』
『母樣――。』
語を半にして顏を掩つた。
中野縞の細かい萬筋の袷を着て、髮は櫛卷にして居る。色の淺黑い、額の廣い、反齒の、いかにも田舍商人の上さんと言つた風、膝にまつはる年弱の三歲の女の兒を抱寄せて、胸をはだけて、大きな乳を含ませた。
『こんなに惡いとはちつとも思はなかつたものだから。』
かう言つたお米の胸はもういくらか輕くなつて居た。
『それでもよく出て來られたねえ？』
『來られるの、來られないのツて……。何うせ無理しなきや出て來られないんだから。』

病人は夜寢られなくつて困つた。蚊帳の中に行燈がぼんやり點いて居る。物の影が青く暗く一室に行渡る。藥瓶と果物の鑵詰と水差とが枕元に置いてある。中仕切の襖は閉てゝあるが、建附が惡るいので、夫婦の寢て居る隣の茶の間の洋燈のあかりが透いて見える。時計の音が際立つて耳につく。と思ふと鼬でも居ると見えて、時々天井で凄じい音がする。

洋燈がふつと消える。

十五

さみだれが猶幾日か降り續く。

裏の畑の麥は既に黃ろくて、もう刈取らなければならぬやうになつた、百姓の老人夫婦が蓑笠を着て、濡れそぼちながら畑に働いて居るさまも見える。路が惡くなつて、足駄を泥濘に取られる若い女の姿も見える。銑之助は賣る當の無い長い小說に筆を着け初めた。豆腐屋の喇叭の音も雨に濕つて、御用聞の酒屋の笠からは雨滴がしとゞに落ちた。梅の實が黃く熟した。

ある夕暮に俥が來て門前に留つた。やがて三歲位の小兒を抱いた三十二三の髮を束ねた田舍風の女の姿が見えて、車夫は大きな風呂敷を抱へて先に立つて格子戶をあけた。案內を乞ふ甲走つた女の聲がする。

が起り勝である。

老母はいつも默つて、苦い顏をして、臥床の上に起返つて、盆に載せた小鍋の粥をさも不味さうに獨り食つた。

肩を摩りませうかなどと言ふことがあつても、滅多にお桂には賴まなかつた。嫁の身にしてはかう取扱はれるのがいかにもつらい。けれど何うかして機嫌を取らうなどといふ心は、二十八の再婚の女にはもう無かつた。銑之助の細君に後を賴んでは、氣晴しによく隣へ行く。主人が歸つて來ると、すぐ書齋に其後を追つて、くど〳〵と何事をか囁く。別に際立つて母親の陰口を言ふ譯でもないが、これが少なからず母親の氣色を損つた。『それ、御覽、お桂がまた二本棒どのに甘つたれて、惡口を言つてるから』と傍に侍して居るお梅によく顎でしやくつて見せた。

それに、男の兒がなか〳〵懷かない。『婆ちやん、婆ちやん』と、老母ばかりを賴りにして、新しい母親などは殆ど顧みようともしなかつた。學校の世話、着物の世話、下駄の世話――小さなことによく紛紜が起つた。

お鐵が歸つてから、お桂は男の兒を其傍に臥かした。一夜寢そびれて非常に泣いたことがある。すると老母は、『お前達には任して置かれない。鐐も鐐だ、少しも自分の子供らしい世話は爲やしない、』と言つて、翌晚からは自分の蚊帳の裾の方に臥かすことにした。

ますから。』

幌を半懸けた俥は動き出した。

梅雨の降頻る中に、蛇目傘を傾けて、三人は別れを叙した。

『左樣なら。』

『それでは御機嫌よう。』

お鐵は俥の後に跟いて坂を上つた。其身の不運、將來の不安が簇々と思出されて、淚は袖を濕した。坂の上で振返ると、綠葉に包まれた其低い家には、雨が斜に降濺いで、銑之助の若い妻の蛇目傘は今し其門內に入つて行く處であつた。お鐵は別れて來た家のことを考へながら、泥濘の深い道を步いた。

十四

さみだれが降り續く。庭の綠葉は低い檐にかぶさるやうに蔽ひかゝつた。床の惡い疊がでこぼこと濕つて、物の黴臭い鬱陶しい重い空氣はじめ〳〵と人の氣を腐らせた。

主人は古い長靴を穿いて、每朝雨を衝いて出て行く。お鐵が歸つたので、家は俄かに淋しくなる。嫁のお桂はそれでも深切に病人の世話をして遣る積であるが、何うも老母の氣に入らない。粥の加減が拙かつたり、器具の取扱が粗雜であつたり、機嫌の取りやうが調子に合はなかつたりするので、兎角苦情

けれど、そんな遠い處には行かないでね、東京に居て、時々は訪ねて來てお吳れ！』

老母の眼にも涙が見えた。

『旦那樣にも宜しく仰しやつて………。』

『えゝ、よく言つて置きますよ。あれもお前には大變世話になつた。………』

『いゝえ、何う致しまして。』

不意に『お桂は何うした？　お桂！　お桂！』

『いゝえ、四疊半にいらつしやいますから、私が參ります。』

と言つて、お鐵は緣側を傳つて行かうとする處へお桂が顏を出した。で、別離の言葉がまた繰返される。

荷物は車夫が俥へ運んだ。お鐵は爪革がけの足駄を穿いて、ちよつと裏の家へも暇乞ひに行つて來るとて門を出た。綠葉に降り濺ぐ絲のやうな雨、長く連る柴垣から、色附いた麥の黃い畠に添つて、急いで行く新しい蛇の目傘。やがて低い門の中に其傘の影は見えなくなつたが、十分ほど經つと、今度は銑之助の若い細君と並んで此方に步いて來るのが見えた。

門にはそれでもお桂も見送つて居た。

『俥を今一臺呼んだら好いでせう。』と荷物で一杯になつて居るのを見てお梅が言つた。

『いゝえ、ぢき其處の藥王寺前に知つてるものがありますから、一先づ其處に落着かうと思つて居り

れに臨んで、一種の哀情を催さしめるに十分であつた。

嫁さんの馴れるまでと言つて留つて居たが、もう嫁さんも看護の仕方を覺えた。田舍の妹の來る迄と旦那樣は仰しやるが、さう何時までも便々としても居られない。其身の不仕合せの始末もつけなければならない。天にも地にも頼るものとては無い自分の孤獨を思つてお鐵は袖を濡らした。

嫁が出て行けがしに取扱ふのが憎くつて爲方が無かつた。反動として、この嫁の世話になる垂死の老母が可哀相になつて、同情の念が湧いた。

お鐵は玄關の三疊を一杯にして、其荷物を片附けて居る。小さい鏡臺を疊んで、行李の中に入れたり、二三册の書籍を其隅に押込んだり、蒲團や夜着を貲布の大風呂敷に包んだりして居た。昨日結つた丸髷に伊勢崎銘仙の單衣、黑繻子の襟を緊めて、鳥渡小綺麗な身恰好。

がら〳〵と音して俥が來た。

其儘座敷に行つて、

『それではお隱居樣、永々お世話になりました。隨分御機嫌よろしう………。此次私がお伺ひ致す時分には丈夫になつて………』と言懸けた聲は曇つた。

『あゝもう行くかえ、』と老母は起直つて、『いろ〳〵我儘を言つて世話になつたね。もつとお禮も爲なければならないんだけれど、かういふ有樣だから………』と少し途絶えて、『昨日、臺灣に行くとお言ひだ

『睦しい間でも、親には疎々しく見せろッて言ふ話があるぢやありませんか、』と細君が少し笑ひ懸けながら言ふと、

『すぐあゝ取るんだよ、まァ、………』と少し睨む眞似をして、『だから厭らしい。さういふ積ぢやないんだッてばねえ、本當に。』

『それはさうでせうよ………』と細君も調子を變へて、『まァ辛抱するんですよ。喧しいたッて、はいはい言つてさへすりや好いんですからねえ………。もうあゝなつて居るんですもの、何うせ長いことはありはしない。此頃だッてよくはないんでせう？』

『えゝ〳〵、段々悪くなるばかり………。』

『辛抱なさいよねえ』と言つた細君の聲は眞面目であつた。

十三

お鐵は六月の下旬、梅雨の蕭々と降頻る日に其家を去る準備をして居た。臺灣に赴任する家族について行かうか、某病院の看護婦にならうか、此二つがかの女の將來の運命であつた。昨年の暮近く、ある希望を抱いて此家に來てから、隨分種々なことがあつた。其折々につけて怒りもし泣きもし嘆きもした。むづかしい老母を呪つたことも一度や二度ではない。けれども半年以上家族として働いた馴染は、今別

『今でも左様なんだッて……それに、お梅さんは望んで貰つたんだッてねえ？』

『え、さうよ、』と笑ふ。

『あの變人が、お梅さんのことだと、大變なんだから可笑くなつて了ふぢやがねえ。お梅さんが母樣に小言を言はれやしないかと、そればかり苦にして居るんだよ……。それにお梅さん、まだほんにねんねえねえ。』

『何處か娘々してる子ねえ。』

『支度が立派だとか何とか言ふから、何んな衣裳持かと思つて、此間見せて貰つたら……。紋附が二重ね、簞笥が一棹、初めての嫁さんでは立派でも何でもないぢやがねえ。』

『でも、何から何まで揃つて居たッて、お婆さんお自慢でしたよっ』

『あんな鏡臺や下駄箱なら、いくらでも揃へられるがねえ。もう長持など鐶が外れて居るぢやないかねえ。』

裁縫友達は藏すところなくいろ〳〵のことを語り合つた。菓子器の餅菓子はみなになつて、茶が出流れて了つた。をり〳〵お桂の頓狂な笑聲があたりに聞える。

『只、本當に困るのねえ、』と暫くしてからお桂は稍眞面目な調子で、『話をしてられないのが一番困るんですよ、書齋に入つて、何か言つてると、すぐ喧ましいんぢやがねえ。本當に遣り切れないねえ。』

ねえ、屹度………。』

『それは左樣よ。』

『其のうち、田舍の義妹が來るんでせうよ………。それ迄置くかも知れないとうちで言ふことは言つてましたがねえ。』

『さうですか。』

また話が變る。

『銑之助さん、よく見舞に來て？』

『えゝ〳〵。』

『際分難かしい人でせう。』

『えゝ〳〵もう私、閉口。何うしてあゝうちなどと氣分が違ふんぢやらう。むづかしいッて、それは一通りぢやないだがねえ。』

『それァあのお婆さんさへ、銑の變人には困る困るッと言つてたんですもの………。それは變り者よ。この隣の四疊半に居た頃などよく知つてるけど………一日蒼い顏をして默つて机に向つてるんですからねえ。そして時々大きな聲をして、新體詩とか言ふものを歌ふんでせう。それァ餘程變でしたよ。それから友達が來て、よく議論をするのよ。丸で喧嘩かしらと思ふくらゐ………。』

と隣の細君は冷かした。

少時話は途絶えたが、やがて、

『お鐵さんはまだ歸らないの？』

『歸す。歸すッて言つてるんだがね。何時歸るんぢやらうねえ。始のうちは私も不思議に思つたんだがね。あの顔に白粉をべた〲つけて、いやにぢやら〲して、厭な女ッたらありやしないんだものねえ。そして時々書齋に入つて、うちと何かこそ〲話してるぢやないかね。始めは私、てつきり……それだと思つて、お菊さん（隣の細君の名）もお菊さんだ、こんな處に世話して呉れるとは何うしたんぢやろと思うたくらゐ…………。』

『まさか鎌さんが…………。』

と隣の細君は笑つた。

『えゝ〱、それはそんなことは無いのはすぐ知れたけどもねえ…………。』

『寢物語にたんと油を取つたといふ譯？』

『えゝ〱どうせさうさねえ。だけど本當に厭な人つたら無い。』

『あの人もお婆さんにはあれで隨分睨まれたものよ。』

『さうでせうねえ。それでもあゝして居るんだから、餘程旦那樣が見込まれたッて言ふやうな譯です

『ふむ………。』

『吃驚して行つて見ると、苦蟲を嚙みつぶしたやうな顏をして………お桂！　これは何だ？　これでも汁粉かと言つて、杓子を盆の上に、』と面白い手眞似をして見せて、『かういふ風に投り出すぢやないかね。』

すぐ言葉を續いで、

『そして、お梅さんの居る前で、こんな鏡汁のやうな汁粉が食へるもんか、汁粉の拵へやうも知りやがらないッてね、それァ不機嫌たら無いんぢやがね………。ごてぐ〵と田舍風に拵へりや好かつたのに氣が利き過ぎてお氣に召さなかつたのさ………本當に難しい婆樣――。』

『婆樣なんて、そんな酷いことを言ふもんぢやありませんよ。』

『はい、はい、』と態とおどけた調子で、『御免なさいよ。惡う御座いました。これからは謹みますよ………。』

『お桂さんはすぐあゝだから厭さ。今少し眞面目になさいよ。』

『はい、はい』と笑つて居る。すぐ、

『でもね、家では旨く出來たつて食つて吳れましたよ。』

『結構ですよ。』

『さう、甘藷大嫌ひ？　それぢやお汁粉でも………。』

『お汁粉も大嫌ひ。』

ふとお桂は思附いて、『お汁粉つて言へば、昨日それやひどく叱られたんですよ………。』

『誰に………。』

『母樣に。』

『何うして？』

と稍眞面目になる。

『昨日の朝お汁粉が喰べ度い、干餡でない、小豆から拵へたのが食べ度いと言ふんでせう。丁度お梅さんも來るから、午時分までに拵へて御馳走して遣れと言ふから、私、一生懸命で、この暑いのに火を燃して、餅を三軒ほど訊いて廻つて、漸と買つて來て淸しの方が好いだらうと思つて、あくぬきをして拵へたのさ………すると大小言さねえ。』

『氣に入らなかつたのかえ？』

『まア、お聞き、かうなんだよ。私や旨く出來た積で、母樣の分だけ小さいお鍋に入れて持つて行つて置いて來るとね、始めは喜んで莞爾して、出來たかえッて言つて、起返つたのさ。私は用があるから勝手に來て居ると、お桂！　お桂！　と尖聲で呼ぶぢやがね。』

『何んぢやろ、まァ、………。』

と手で打つ眞似をしたお桂の言葉には行田訛が殘つて居た。

『だッて餘り幕無しぢやありませんか。………默つて聞いてると思つて………。』

『何が幕無しぢやろ………ちつとも可笑しいことは無いぢやないかね。』

『だつて隨分ですからねえ。』

『何が隨分なの？』

と笑ひながらお桂は態と膝を進める。

『お婆さんが妬くの………半襟を買つて貰つたのッて………、私や眞面目に聞いて居れば、好い氣になつて、たんとお惚けなさいよ。』

『今に新甘藷が出來たら、筋の無い所を澤山奢らうかねえ。』

と相好を崩して笑ふ。

『人を馬鹿にして………。』

と隣の細君も打つ眞似をする。

『だッて左樣ぢやないかね。』

『ちつともそんなことはありやしない。私甘藷大嫌ひ。』

丁度其頃此家の主人は神樂坂の通を歩いて居た。紺羅紗の薄い夏の脊廣の三四年も着古したのを着て、パナマ帽の黄くなつたのを冠つて、紫の唐縮緬の風呂敷包を小脇に抱へて居る。風呂敷包の中には今夜校合しようと思ふ歴史編纂の書籍が入れられてあつた。俄に暑くなつた路に、シヤツもズボン下もびつしより汗になつて歩を運ぶのも大儀らしく、汚れた手巾を隱袋から出しては、帽子を取つてをりをり額の汗を拭いた。街には車が織るやうに通つて、書生が行く、女學生が行く、商人が行く、番臺を擔つた魚賣が行く。氷屋の硝子の暖簾がきら〳〵と日に光る。角の交番には白い服を着た巡査が疲れ切つたといふ風をして立つて居た。

渠の精神も全く憊れ果て倦み果てゝ居た。役所の仕事も、囑託された歴史編纂も厭で厭で爲方が無い。新しく貰つた細君に對しても別に樂しいといふ感も起らない。馴染の女を烏度念頭に浮べて見ても、それも何の反映をも起さずにすぐ消えて了ふ。不圖懷の財布に金が五十錢あることを思出した。丁度其前が青木堂の舖、果物や魚肉類の罐詰が山のやうに積まれてあるのが眼に入つたので、母親を喜ばせようと思つて、づか〳〵と入つて行つて杏の罐詰を一個買つた。

十二

『お桂さん、たんと御馳走して下さいましよ、』と隣の細君が冷かすと、

『さう急には治らんナァ。』と醫師は笑つて見せる。
『何うか腹の痛みだけでも除つて頂きますれば――。』
『よろしい、屹度私が治して上げる。』
いかにも輕い病氣と謂つたやうな風である。不圖、其處にお桂の坐つて居るのに眼をつけて、
『これが主人の嫁さんかな。』
嫁は慌てゝ辭儀をする。
老母は、『此間貰ひまして………不束者ですが………何分宜しく。』
『私はまた此間まで此方が嫁さんかと思つて居ました。』
と丸髷姿のお鐵の方を振向く。お鐵は顏を赤くして茶の間に行つて了つた。
『………いゝえ、あれは召使で………』といふ老母の聲がする。
『此方のは弟御の嫁さんでしたな、』と醫師は猶平氣で『お婆樣、かう好い嫁さんを澤山持つては本當に幸福だ。もう樂が出來る。』
『いゝえ、もう………。』
猶話を續けるかと思つたら、ついだ茶をも飲まずに、其儘ふいと立つて歸つて了ふ。俥ががら〳〵と坂を上る。

て見ると、銑之助の嫁が肩を摩つて居た。
少時すると、門前に俥の音がして、醫師が來る。
此附近がまだ田舍の頃から居る醫師で、脊の低い、元氣な、深切な五十恰好の莞爾した顏、氣輕に座敷に通つて、病人の起きようとするのを手で制して止めて、先づ胸をひろげて腹部を撫でゝ見る。凝結のある邊を堅く押へて、
『痛むか』と訊く。
老母は頭を輕く振つた。
『何時も痛むのは此處だナ、』と言つて、少し考へるやうな態度をして、『ふん』と獨で點頭いて、鞄から聽診器を出して、胸の其處此處と當てゝ見た。最後に脇腹の凝結の處を長く耳を澄して聞いて居たが、
『よろしい。』
と言つて、はだけた病人の胸を合せて、聽診器を藏ひにかゝる。お鐵が眞鍮の金盥に水を持つて來て、新しい手拭を出す。
手を拭きながら、
『大きによろしい。』
『氣分の方は少しは好う御座いますが、時々痛むのには困り切ります。』

面目な女であつた。暖かい家庭の懷から、この嵐のやうな姑の惡い機嫌、絶えず其衝突に胸を痛めて、常に病人のやうに蒼い顏をして居た。

蒼い顏が思出すまいとしてもまた思ひ出される。葬式の時の混雜、實家の父親の悲憤——もう、もう、思出すまいと自から眼をふさぐ。

その赤兒を老母が育てた。機械で腹から出したので、其痕の穴が後頭部に出來て、膿が絶えず出る。それを銑之助は熱心に繃帶して遣つた。銑之助の小心な文學好きな胸には、此時の光景は深く淺ましく刻まれて、殆ど家にあるに堪へなかつた位である。里子の遣る好い口が見附からぬので、久しい間、主人はそれを抱いて寢た。夜深に寢こじれて寢つかぬのを、ほい〳〵と主人は緣側を搖つて歩いた。母親はそれを世話して遣らうと思はぬではなかつたが、感情が衝突して居るので、腹では不人情と思ひながらも、それを平氣で見て居たのである。

青山の嫁の墓が今度は眼につく。椿、楓樹、風雨に曝された墓石、嫁の道具を歸す歸さぬで、一悶着があつて、三百代言風の男が實家から來て、五時間も荒々しい聲で饒舌つた。主人の生優しい聲が齒痒くつて、齒痒くつて次の間に聞いて居られなくなつて、飛出して行かうかと、母親は幾度も思つた。で、交渉の結果、縮緬の婚禮衣を賣つて、其の青山の墓石が建てられたのだ。

頭腦が眩惑するので、われ知らず突伏さうとすると『また御痛みですか、』といふ聲がする。氣が附い

緣にでも入つた畫のやうにくつきりと見える。壁に貼られたまゝ、黑く煤けた西南戰爭の錦繪、野津大佐が劍を振り上げて軍旗を奪ひ返した。其傍に東京名所の不忍池の繪が一枚貼られてあつて、本鄕臺の大學校の時計臺が高く富士と共に聳えて居た。

不圖嫁の死んだ顏が眼前にちらつく。子癇といふ病氣は、姙娠中精神の過勞から來ると或人が語つた。此身が酷め殺したやうなものだ。かう思ふと神經がブリ〳〵する。もう呼吸を引取つたと謂ふので、怖怖ながら座敷に行つて見る。嫁は蒼白い顏をして死んで居た。錬は男泣に泣いて居る。因果な赤兒は傍に放り出した儘誰も構手が無い。其死んだ蒼白い嫁の顏！　今思つても總身が戰へる。

睦しい若い夫婦の愛情、二十何年來自分の身にも增して愛育した息子を其儘奪ひ去られるやうな氣がして、一方では限りない孤獨を感ずると共に、一方では理由の無い嫉妬と忿怒とを感じた。襖を隔てゝの夜のさゞめ言、老母は嫁を仇敵の如く憎んだ。

誰に大きくして貰つた。此母親の爲めに人並に育て上げられたのではないか。此の母親が居なければ――あの時再緣して了へば、……再緣した例はいくらもある……お前達は何うなつて居るか解らんのだ。それなのに嫁の愛に溺れて、母親を粗末にするとは、男にも似合はぬ意氣地なし、何の爲めに學問をした。

『孔子樣の教にはさう書いてあるか、』とよく罵倒した。嫁は容色は左程よくはなかつたが、小心な眞

三歳、お米は十一歳、銑之助は六歳、戰爭に行つた跡は小さい家を借りて、御院殿の坂の下に住んだ。秀雄が弱いので、子供等を前の家に賴んで、結付に負つて、よく淺草の門跡の裏の小兒科の醫者に通つた。坂本の通に繪草紙屋がある。戰爭の錦繪が多く出て居る。それを行きに歸りに見て、戰地の光景を胸に描く。三月の末に戰地から消息があつて『柳の糸も長く菜の花も咲きて、長閑なる氣候に相成候』と書いてあつたが、四月の中旬の御船の戰には夫は戰死して了つたのである。五月になつて一時絕えた郵便が開けて、何處の家にも消息はあつたが、吉田の家には無い。郵便脚夫の通るのを見る度に待渡つたが、遂に來ない。一日總領の鐐を牛込の同藩のある家に樣子を聞きに遣つた。夕暮を待兼ねて、御院殿の坂の上を見て居ると、其總領の少年は其家から貰つた大きな山吹の花の枝を擔いで、其姿を薄暮の空氣に浮出すやうにして歸つて來た。山吹の花を床の間の花瓶に挿した。月の末には戰死の報知が警視廳から來たのである。

國から舅が出て來て、七月には一家を纏めて田舍に歸る。利根川の河舟、薦包の幾個となく重つた後に、母親は其總領の少年が船頭に交つて淺瀨で無邪氣に泳いで居るのを見て居た。夏の暑い日が閃々と水に照り渡る………。

鐐が一人前になつて、東京に上つた時の利根川が續いて老母の眼に映つた。河舟、船頭、苫、岸の竹藪、柳、それが總て其一生と密接な關係を有つて居る。それから田舍家——狹い古い藁葺の田舍家が額

クロ、槍が美しく日に光る。『宮さん宮さん御馬の前にひら〳〵するのは何ぢやいな、あれは朝敵……。』といふトコトンヤレナ節が城下に充渡つた。夜など錢湯に行つて歸つて來ると、其節を唄ふ聲が路の角や裏の畠の向うに聞える。螢がスイ〳〵と闇を縫つて飛んで行く。

あの時、錦は三歳だつた。いつも午後に晝寢をする。其時分よく調練の太鼓の音が鳴響く。ドン、ドコ、ドンドコドン、……それが如何にも喧しいので、折角寢たのを眼を覺さなければ好いと、何のくらゐ苦勞にしたか知れなかつた。

――考がすぐ變る。明治十年の二月夫が警視廳から歸つて來る。愈々戰爭に出ることに決めたといふ。『貴郞、田舍の老人や子供を置いて、もしものことがあつたら何うするんです？』と居直つて眞面目に聞くと、『其時は其時さ、なるやうにするさ、』と平氣な調子で、『御維新の時死ぬ筈なのを、十年生延びた、死んでも殘り惜しいことは少しも無い、』と言ふ。其頃夫は東京に出て下谷の根岸の警察に勤めて居た。老母に取つては其時が一番自由で樂しかつたのである。中根岸の榎の樹のある附近に借家をして住んで居た。近所に八百屋の市があつて、夜はカンテラの黑い煤煙が狹い通に滿ちて、相場を瓘る聲が喧しく聞える。大根の白、漬菜の青、荷車が混雜とあたりに置かれてあつた。坂本のある橫町の角には、夕河岸の魚を鬻ぐ露店が出て居る。鰯が今日は廉かつたと夫が歸り懸けに見て來ていふ。すぐ出懸けて行つて買つて來て夫の晩酌の料にした。戰爭に行く前年、十二月に秀雄は產れたのである。錦は十

嫁が出來て、かうして來て居て吳れたなら、さぞ嬉しからうと思ふ。またしても青年士官のことが胸に上る。

十一

御維新の時、館林藩は烈しく動搖した。御親類の宇都宮の殿樣は、賊に襲はれて御城を取られて、大小も百姓家にお預けになつて、お微服で早川田口から逃げてお出になる。忍藩も形勢不穩で、何だか賊に味方をしたといふ評判が專である。藩はもうすつかり四方から圍まれて、何時戰爭が始まるか知れぬ。風聲鶴唳、人々は皆な荷擔して立つた。力になる男達は疾に既に多く出兵して了つて、年寄まで驅催されて、御番所々々々を固めて居るので、何處の家にも女子供ばかり、賴りになるものとては無い。丁度七月の暑い頃であつた。それ！ と言つたら逃げ支度を爲て置かねばならぬので、近所の上さん達は、門口に出ては聲を密めて落延びる先を彼れの是れのと語り合つた。第一に蒲團は持つて行かなければならぬ。蚊帳を忘れてはならぬ。先祖の佛樣だけは何を擱いても携へて行かねばななぬ。あれも持つて行き度い。是も持つて行き度い。考へるとあの時は實に心細かつた。丁度あの時お米が腹に居た。不安心で不安心で立つたり居たり、今にも鐵砲の音が聞えるかと氣が氣でなかつた。――其翌日、官軍が勢揃をして入つて來たのを見た時は、丸で生き返つたやうに人々は喜んだのである。陣笠に陣羽織にダンブ

お鐵は飛んで來た。

老母は顔をしかめて、迫つて來る腹の痛いのを抑へて居る。

『お痛みですか。』

『痛いから蒟蒻をつけて與れ。それから、お桂があの垣の處で、饒舌をして居るから呼んで與れ。』

立つて行つたが、『奥さん、奥さん』と呼ぶと、やがて返事がして、嫁は其處から姿を顯はした。

丸髷の壞れ懸けた頭で、交織の縞の單衣に黑繻子と絲繻珍との腹合の帶を緊めて、効々しさうに襷を懸けて居る。如才の無い態度で、

『おや、母さん、お腹が痛いのですか。ちつとも存じません、お饒舌をして……。』お隣の奥さんが捉へて離さないもんですから。』

と言懸けて茶の間へ行く。

『何方がつかまへて放さないんだか解るもんか、』と腹を押へながら、老母は嫁の後姿をぢろりと見て言つた。

一時間ほど痛んだが、それでも好い鹽梅にやがて靜まつた。蒟蒻も一度着けたばかりで濟んだ。其處へ藥取に行つた銑之助の妻が歸つて來た。風呂敷から梨子を三個出して坐つた。

老母は銑之助の妻の若々しい扮裝と生々した若い血色とを好ましさうに嬉しさうに見て居た。秀雄の

十年來、それを食つて來た。嫁も當然食ふべき者と思つて居る。であるのに優しい主人は氣の毒に思つて、それを一二杯手傳つて遣る。主人が食ふのを弟の分際で食はぬ譯に行かぬ。二人の弟が手傳ふと、嫁のは殘り少くなつて、餘は暖い飯を盛る。と弟も不平、老母も不平『一體、鐐が甘やかすから惡い、』といふ痛い非難が起る。

英男が四歳ぐらゐの時、焦飯が非常に好きであつた。ある時、銑之助は戲談に、『亡くなつた嫂樣は焦飯ばかり食はせられたから、英男も好きなんだ!』と言つた。と、老母はえらく怒つて馬鹿を言ふナと叱つた。――腹はチク〳〵と針で刺すやうに痛い。

神經は益々昂まる。頭腦が何のことなしに動搖する。いつもの癪を押へに押へて居るが、容易にそれが押へ切れない。追懷、苦痛、苛責、絶望、――

『私のやうな業法人は早く死ね、死ね!』と思つたが、一方では死ぬのが何よりも恐しく厭であつた。堪らなくなつて、

『お鐵! お鐵?』

と叫喚くやうに呼んだ。

返事が無いので、

『お鐵!』

さずに車に乗つた。あの男らしい處が可愛い。何も彼もつけ〳〵と言つて吳れる處が嬉しい。鐐などゝは丸で違ふ。かう思ふと其の軍服を着て劍を下げた額の白い無邪氣な顏が歷然と眼に見える。今一度逢ひ度いものだ。今一度、たッた一度で好いから逢ひ度い。

銑之助に手紙を書いて出して貰はう……と思ふ。

腹が矢張痛む。蒟蒻を當てようかと思つたが、彼奴等の世話になるのも面倒だと思ひ留る。腹を强く蒲團で押すやうにする。

眼では見て居らぬが、嫁が前の庭を通つて、四疊半の離座敷の垣の處に行くのがよく解つた。嫁は其處で、垣越しに隣の細君と長い饒舌を續けるのが常である。

老母は不愉快でならぬ。興奮した神經が手傳つて、其饒舌が此處まではつきりと聞えて來るやうに思はれる。前の嫁も井戶端でよく油を賣つて居た。何うして今の若い者はあゝだらう！　そんな閑暇があつたら、病人の世話をしたら好さゝうなものだ。でなくとも腰卷の汚ないのでも洗濯したら好いだらう。此間なぞ現に汚い物が其處等に散ばつて居た。女がさういふ不始末をするのは此上もない恥辱である。ふと前の嫁が朝飯の焦げを食ふのが厭さに、襤褸布に包んで押入の奥に隱して置いたことを思ひ出して、厭な厭な氣になる。

家庭の衝突は三度の食事にも痛くつらかつた。誰も焦げた飯や冷飯を食ふのは厭だ。けれど老母は四

『私も御寺參でも始めようかな、』など〻言ふ事がをり〳〵ある。かういふ時は、屹度其の家庭の衝突に苦しみ拔いた後だ。けれどそれは出來なかつた。珠數を繰つたり、お寺參をしたり、孫のお傅をしたりする普通の人の好いお婆樣を見ると、何うしてあ〻閑暇なのだらうと思ふほど其心は現實に觸れて居た。不安の念などを起さずに、嫁や息子のするま〻に、平氣で日向ぼつこりでも仕て居れば好いのであるが、何うもさうしては居られない。眼がある、物が見える、するとすぐ其の鋭敏な頭腦が動搖して、不安、不平の念が起つた。

これが其性質ではあるが、境遇もさうするのに與つて力があつたことは言ふまでもない。女子供だと思つて人に馬鹿にされまいといふ長い間の不安と努力とは、其神經を常に興奮させたのである。それに、老母は封建時代の女子の絕對の服從といふ境遇に、其屈しない烈しい性質を置いて來たのだ。自己の絕對の服從といふことは、其身が主權者となつた場合には、多くは自己の忍耐したやうな絕對の服從を他から要求するものである。封建時代ならそれでも好いが、今は人も變り、思想も變り、習慣も變つた。烈しい衝突と不平と不安と荒凉たる生活とは竟に竟に免る〻ことが出來なかつたのである。

三男の秀雄のことを思つた。あれが人並に立派に成功したのは嬉しい。お上の御用で弘前など〻いふ遠い所に行つて了つたのはいかにも殘念だが、これも仕方が無い。斷念めて居る。此間來た時、『もう母樣はお前に逢へるか何うだか解らないから、丈夫で、』と言つたら『うん……』と平氣で言つて涙も滴

裏の窓から逃がして遣ると、ばた〳〵と大きな羽搏をして、栗の樹の繁みに飛んで行つて了つた。

近いこと〻遠いこと〻が丁度遠近の無い銅版畫を見る樣に一緒になつて集つて來る。いろ〳〵な顏が眼前を走馬燈のやうに過ぎて行く。其身は今年六十一といふことを忘れはせぬが、又一方では若い若い若い身のやうな氣がする。庭の樫の葉が微かに風に動いて、ちら〳〵と日光が差込む。前の井戸で水を汲む音がする。家婢のお鐵が門前で何か言つて居る聲が聞える。例の落合の八百屋の爺の聲だ。

『御隱居樣は如何です？』

といふ見舞の言葉がする。

お鐵が何か其返事を爲たやうであるが、聞取れない。床の間の置物の唐獅子が眼に附く。嫁の簞笥の上の鏡臺の鏡に自分の寢て居る瘦せた脚が映つて居る。例の不安と共にある力が迫つて來たと思ふと、今迄胸に描いた總ての追懷、總ての現象が幻のやうに消えて了つて、チク〳〵と痛い腹の現實に歸着する。

老母は氣丈な性質である。夫に死なれてから二十年來、人に指をさ〻れたことはない。物の解りの早い、正直な、感情的な、血の燃えた烈しい處がある。愛憎の念が如何にも强い。氣に入つたものは馬鹿に氣に入るが、氣に入らぬものは、その弱點ばかりが見える。ある目的を抱いて來るものを殊に甚しく憎んだ。

何うしてこんな病氣に罹つたかと思ふ。と、其の最初の時の狀態がすぐ思出される。昨年の春の初、脇腹に瘍が出來た。切開しなければならぬかと思つて尠ならず心配したが、懸りつけの醫師の盡力で、四月頃にはすつかり治つた。あの頃から此病氣は萠して居たのだ。あの時、好い醫師に見て貰へば好かつた。切開してすつかり惡い膿を出して了へば好かつた。

銑之助が別居した頃、家具を買ひに神樂坂によく一緒に出懸けた。長火鉢だの、米櫃だの、お鉢だの、陶器だのいろ〳〵なものを購つた。道具屋を軒別に冷かして見て歩いたッけ。其頃矢來の交番から郵便局までの間の路を歩くのが、不思議に思ふほど大儀であつた。何時もそんなことは無かつたのに……。

あの頃から此病氣は萠して居たのだと再び思つた。

鐐の嫁、銑之助の嫁、すぐ考が飛んで、四五十年も前の昔に返る。御國替以前のことが眼に浮ぶ。出羽山形から三里、高楯の御陣屋に成長したことが分明と……。石の多い水の少い立谷川といふ川があつた。その立谷川からすぐ考が變つて、鐐の姉（それは死んだ）の生れたばかりの時、夫が勤番の朝の歸途に、其立谷川で梟を捕へて來たことを思出した。其川原で梟が烏につゝかれていぢめられて居るのを、大小二本差した夫が拔足差足近寄つて行く光景が何だか畫でも見るやうに、其身とは何の關係も無いやうに眼に見える。家に持つて來て、座敷の床の間に置いた。梟はじつとして居る。置物のやうだなどと言つたことを覺えて居る。近所から人が大勢見に來た。そして夜になつてから可哀相だと言ふので、

けて居たが、何となくはずまぬ調子で、何時もの戯談や駄洒落は遂に出なかつた。

『兄さん、今日は元氣がありませんでしたね、』と歸つてからお梅は銑之助に言つた。

十

老母は輕い搔巻を懸けて臥て居た。枕元には藥瓶と覆盆子の皿に載せられたのが置いてあつて、風が通るやうにと前と後の障子が明放されてある。座敷から茶の間は一目、嫁と家婢とは勝手元で何か頻りに小聲で語りながら、時々低い物音を立てゝ居た。

六月の晴れがましい日の光、物は皆生々として、夏の烈しい生育の氣はそれとなく人の頭を壓迫した。病める者のかよわい衰へた體は、殊に其強烈なる壓迫に堪へ兼ねたといふ風で、痩せ果てた蒼白い顔が際立つて滅び行くものゝ哀れさを語つた。

脇腹の痛を覺える時には、言ふに言はれぬ佗しさと苦しさを感ずる。氣が滅入つて了つて、猶且つ頭腦が苛々する。何うしたら好いだらうといふやうな絶望的の憂苦が漲つて、思はず一種の戰慄が出る。今は沈着いて居る。腹の痛みも無い。別にこれと謂つて惡い處は無いやうな氣がするが、それでも何處かに恐ろしい力が潛んで居て、それが時機を待つて身を壓して來るやうに感じられる。鈍い佗しい理由のない不安がをり〳〵來る。

『だつて、來いと謂ふ方が好いですよ。勝氣だから、後で苦情を言はれると惡いですよ。こんなに惡くなつて居るのに、來いとも言つて呉れないなんて屹度言ふに決まつて居るから……。』

『實はお鐵は歸して了はうと思つてるからねえ……お米に少しの間來て手傳つて貰ふと好いんだけれど……。お駒さんはさう何時までも居て貰ふ譯には行かんし、お桂も今少し馴れなくつては……。』

『さうですとも……私ひとつ來るやうに言つて遣りませうか。』

『さうだねえ。』

と兄は進まぬ風である。

田舍の機屋の上さんで、子供が五人、一番末のが漸く今年生れたばかり、銑之助はまだ田舍に居る頃、其姉の夫に伴れられて、好奇に足利の市に車を曳いて行つたことを思ひ出した。

『此頃はちつとは好いんだらう。』

『いや、あゝいふ風の男だからねえ、損ばかりしてるやうだねえ。』

で續いて種々な話が出た。役所への途中の話、役所の話、關係して居る歴史編纂の話、國學の話、漢籍の話、お得意の漢文の批評も出た。渠の書生時代には外國の學問は異端の教へといふやうに青年の群から斥けられて居て、外國語を少しも學ばなかつたので、此の頃新聞でよく使ふモダン（modern）といふ字は何ういふ意味だなどと銑之助に聞いた。で、お駒の娘が迎へに來るまで、種々のことを語りつゝ

梅さん。段々それは稽古しなけりや――』

兄は常に若い弟の嫁を慈んで、いろ〱のことを教へて遣るやうにして居るのである。

『秀雄に母樣の病氣のことも書いて遣つたかい。』

とすぐ言葉を續ぐ。

『え、三崎博士の診察のことを知らせて遣りましたよ。そして、成るべく都合して出て來いと言つて遣りました。』

『秀雄もいそがしいからな。』

『それはさうでせうけれど…………。』

『相變らずのんきに暮して居るんだらうな。「あだねす、ごだねす」なんて遣つて居るんだよ、屹度。』

『屹度左樣ねえ。秀雄さんはのん氣で好う御座いますねえ。』

『軍人は皆なあゝだ、瀟洒して居て好い。』

『本當にねえ。』

と若い妻は調子を合せる。

『田舍の姉さんも出て來さうなもんだ。兄樣さう言つて遣つたんでせう。』

『言つて遣つたがね……子供は多いし、貧乏はしてるし、………』

母を憐むの情は兄の胸にも漲つた。
『母樣、やつぱり淋しいんだねぇ。』
『本當にさうだ、』と銑之助はさま〴〵のことを思ひ出したといふ風で、
『それでも、かうやつて吾々が何うやら彼うやらしてるのは本當に兄樣のお蔭だ。』
『いやーまァ、皆な人並になつて呉れて、私も安心してるのさ。秀雄の處から消息は無いか。』
と主人は態と話頭を改める。
『たよりは無いが、今日手紙を書いて遣りました。』
『さうか、』と言つて、茶を一杯飮んで、蠶豆を抓んで、『成程、これは旨い、八百屋のとは丸で味が違ふ。』
『旨しいですねえ、』とお梅がいふ。
『初物は贅澤なものだ、』と平凡なことを言つて、『何うだねえ、おあがり……。』
『私、澤山食べたんですもの。』
『それでもまァ一つ！』
と快活に笑ふ。
『茹で方が下手だから、不味くつて駄目だ、』と銑之助が言ふと、
『好く茹つてるぢやないか。……それァ、若いから、始めつからさう旨くはゆきやしない。ねえ、

『困るナア、實に。』

『本當に困るのさ。』

『昨日結婚しての今日だから、嫂樣さぞびつくりしたらうと思つて……。』

『少しは吃驚してたやうだッたよ。』

いつもの快活に似ず、何處となく悄氣て居る。

『何故母樣あゝだらうねえ。』

兄は默つて居る。

二人の胸には長い間の家庭の暗鬪苦鬪のさまが思出された。他人には話して聞かせても想像させることの出來ぬほどの苦痛、兄は『母樣には何うせ私は氣に入らないのだから、銑に後を讓つて私は隱居する！』とよく言つた。ある日の夕暮の衝突、『そんなに仰しやるなら、私は死ぬ、』と兄は本氣に祖先傳來の短刀を出す。母は母で、『貴樣のやうな卑怯者に切腹が出來るなら見て居るから爲て見ろ！』と吸鳴る。銑之助は泣いてこれを仲裁した。又、英男の生れた時には、家は貧苦、兄は非職、嫂は死亡、母親は泣きながら冬の日の寒空に赤兒の襁褓の洗濯をした。銑之助の若い妻も、主人の新妻も、今はこの吉田家の家庭の人となつたが、渠等はその骨に徹する苦鬪の何物をも知らぬのである。家庭の苦鬪ももう終に近い……と二人は思つた。

お梅は立つて勝手へ行く。やがて新蠶豆の茹でたのを盆に載せて持つて來た。

『貴方ちよつと側に寄つて下さい、』と、夫に退いて貰つて、長火鉢の側に來て、お茶を淹れようとする。

『梅さん、まァ好いよ。』

『でも、まァ、……召上つて下さい。ほんの少しですけど。』

『結構、結構。』

と言つて、兄は煙草入から煙管を出した。

『母樣、今日はそんなに痛まなかつたさうですねえ、』と銑之助が言ふと、

『あゝ……好い鹽梅に……。』

『昨夜のやうに痛みつゞけに痛まれると困るからねえ。』

『左樣だよ、本當に……何うかして痛まないやうにして上げ度いと思ふけれど、……』

『それから今日は母樣はむつかしかつたッて？』

と銑之助は兄の穩かな顏を見た。

『うむ。』

と言つたが、煙草を一服吸つて、煙管に手を當てゝ長火鉢の緣で輕く叩いた。

九

其夜、兄は弟の家を訪うた。

長火鉢の前に弟に相對して席を取つたので、細君は洋燈の向うに身を小さくして坐つた。

『さつきは難有う……母樣大變喜んで居ましたよ。』と、先づ蠶豆の禮を述べる。

『いゝえ、ほんの少しばかり……。』

『新の、出たてのは旨いからねえ、……それにあれは昨年母樣が御自分で種をお蒔きになつたんだから。』

『さうですつてねえ。』

『今少し經つて、皆な取つたら、五六升は出るだらう、さうしたら、皆樣にも上げますよ、』と銑之助は言つたが妻に向つて、『まだ少しあつたらう？』

『え……。』

『兄樣に御上げな。』

『ほんの少しですよ。』

『少しでも好いよ。兄さんは珍らしいものが好きだから。』

『まだ惜しい。來月にならなけりや！』
『さうですね。けども新は本當に旨いわねえ、八百屋で買つたのとは丸で比べ物になりませんねえ。』
『それはさうとも。』
『私、畑、大好き。田舍に居て幼い時分には、よく母樣と枝豆を取りに行つたのを覺えて居ますよ。こつちに來てからは、畑など見たくも見られないでせう。あんな混雜した處ですから、』と言つて、調子を變へて『またいろんなものを作りませうねえ。今度は茄子が好いのねえ。』
『茄子はむづかしいから、駄目だ。』
『さう、むづかしいの？』
『母樣でも丈夫で居ると、いろ〳〵世話して下さるけれど……僕等には、茄子はとてもむづかしい。』
『さう……それでも玉蜀黍は出來てね？』
『玉蜀黍は今年は食へる。もうぢき、七月には出來る。』
『本當に畑は面白いのねえ。』
莢はやがて大分剝かれて、青い若い蠶豆は味噌漉に半分位になつた。細君は膝を叩いて立上つたが、奥から皿を一枚出して來て、一半をそれに入れて、風呂敷で包んで、
『それでは鳥渡母樣に上げて參りますよ。』

縁側の柱に寄懸つて、默つて蠶豆の莢をむき始めた。

不意に、

『貴方、ほらこんな大きなのが……。』

と、豆の五箇まで莢に入つて居るのを見せたが、夫が相變らず相手にせぬので、

『貴方、貴方、貴方ッてば！』

『何だ？』

『そんなに一生懸命にならずに、少し御休みなさいよ。餘り勉強すると體にさわりますよ。』

『何ァに……。』

『まァ好いぢやありませんかねぇ、一緒に手傳つて下すつても。』

『喧しい女だな。』

と言つたが、それでも銑之助は筆を置いて、立つて縁側に來た。

細君は笑つて居る。

見る〳〵若い青い莢が一杯に縁側に散らばつた。味噌漉には、剝いた新しい半熟の柔かい豆が段々多くなつて來る。

『もう其中に皆な取りませうねぇ。』

芋を下して置いた里芋が小さい葉を並べて、其隣には馬鈴薯が二畦ばかり出來て繁つて居た。

緣葉の日に照つた間から、若い細君の赤い帶揚が見えた。花鋏の音が靜かな空氣に絕えず聞える。味噌漉を脇に抱へて、畦と畦との間に蹲んで頻りに手を動かして居るさまが、机に向つて原稿を書いて居る銑之助の眼にをり〳〵映つた。丸髷と色白の橫顏とが亂れてこんがらかつた空想の頭腦を鮮かに彩る……。

遲咲の葉の細かい躑躅が燃ゆるばかりに庭に咲いて居た。

少時すると細君は蠶豆の一杯に充ちた味噌漉を抱へて畝の中から出て來たが、其儘夫の勉强して居る座敷の前の緣側に腰を懸けて莞爾して、

『もう大抵出來ましたねえ、そろ〳〵取つても好い位ですよ。』

『さうかねえ。』

と夫は筆を熱心に運ばせて居る。

『ほら、こんなになつて。』

と莢の少し黑くなり懸つたのを一つ取出して夫に見せる。

『成程、もう出來たね』と銑之助は言つたが、思想が今胸に湧き上つたといふ風で、一生懸命に紙の上に筆を走らせるに餘念がない。お梅は、夫が相手になつて呉れぬのを不滿足と言つたやうな樣子で、

と銑之助は萬感胸に集まるといふ風で聲を曇らせた。

すぐ言葉を續いで、『でもお前は母樣の氣に入つてるんだ。正直に眞心でさへあれば、いくら小言を言はれても、ぢき機嫌が直るんだから……。母樣は表面で好いことを言つて、陰で惡いことをするのが一番嫌ひだ。兄樣の嫁さんなどが此までいつも氣に入らなかつたのは、くど〳〵と陰で話などをして居るものだからいけないんだ。兄樣も今少し打明けて物をするやうだと好いんだけれど……』

『さうね、兄樣は優し過ぎるのね。』

『それからすぐ歸つて來たのか。』

『お晝飯のことも心配になりますけれどそんな風なんでせう?』歸るとも言へないで居ますとね、母樣が、もう晝だ、貴方が待つてるだらうからッて仰しやッたから歸つて來ましたの……。其時はもう機嫌が直つて、此間の蠶豆が旨かつたから、もう少し取つて來てお呉れと仰しやつてでした。』

で、お梅は午飯を濟ましてから、庭に行つた。

庭の一隅に五坪ばかりの畑があつた。昨年移轉した時、母親が樂しみに鍬を買つて來て耕して、菜だの、莢豌豆だの、蠶豆などを作つた。

蠶豆は今漸く熟した。

畑の周圍、垣の縁には玉蜀黍がもう二尺位になつて居る。畑にはこれも母親がまだ病床に就かぬ前種

ッて、それは酷い權幕なの。あんなに弱つて居らしつて、何うしてあんな大きな聲が立つかと思ふ位ですのよ。私はね、背後で肩を摩つて居ましたけれど……怖くつて、怖くつて。』

『お前も叱られたんだらう。』

『いゝえ、私は叱られやしませんけど……昨日來たばかしの嫂樣を捉へて、お前は亭主を持つて苦勞したことがあるんだらうが、そんなことで世の中が渡れると思ふかの何のッて、それは聞いて居られないんですもの……。それに、お鐵さんにも隨分酷いことを言つてよ。鐐が猫撫聲をするから好いと思つて、勝手に人の息子を騙しに來る。お前達は狐だ！　狐だ！　と大きな聲しておつしやるんですもの。』

『困るなア。』

『そして終に、私に言ふんですの、お梅などは年が若いからよく聞いて置け、彼奴……彼奴と仰しやるんですよ。彼奴等のやうな甲羅の生えた狐の眞似をしてはいけない。何でも正直に、一度持つた亭主は、何んなことがあつても見捨てる氣になどなつてはなりません。私なぞを見なさい、若い時には難かしい舅姑に酷められ、三十八の時に連合に死なれ、それからかうして老人の世話も爲たし、子供達も成長くした……と仰しやつて、口惜しさうにお泣きなさるんですもの……私も悲しくなつて。』

『本當に、僕等は母のお蔭で成長くなつたんだから。』

『また何か粗相をしたんぢやないか。』

『いゝえ。』

『だつて厭に悄氣てるぢやないか。』

『私、氣が利かないんですけれど……』といくらか投げた形で、『私、何うしたら好いんでせう。』

『一體何うしたと言ふんだ？』

『母樣は何故あゝ難かしいんでせうね。私、もう悲しくつて……』

と涙を摩る。

銑之助は若い妻を憐んだ。每日、朝の跡仕舞を濟ますと、すぐ母親の看護にと追立てるやうにして出して遣る。若い身空で老母の看病の辛いのはよく察して居る。その小さい胸では、其傍に居るのが怖いのであることも知つて居る。けれど自分の妻だけは母親の氣に入らせ度い。何んな犧牲を敢てしても母親に喜んで居て貰ひ度い。長兄の妻の絕えざる衝突を日頃淺ましく思つて居る渠は、自分の妻をも其巴渦の中に入れようとは願はない。まして母親はもう長い命では無い……。

『一體何うしたと謂ふんだ？』

『いゝえ、私ぢやないんですけれどもねえ、』とお梅は赤くした眼を摩つて、『嫂さんが蒟蒻の持つて來ようが遲いつて、ひどく叱られて……。お鐵さんまで小言を言はれて、一體親や主人を何と思つて居る

下は眞面目なる考にて理想的の少女を得よといひしことを御忘れ下さるまじく候。美しき清き妹を得んことは小生等の願に候。不一。

五月十八日　　　　　　　　　　銑　之　助

秀　雄　様

こんなことを書いて馬鹿々々しいと思つてまた消さうとしたが、思ひ返して封筒に入れて宛名を書いた。時計がカン〳〵と鳴つた。數へると十二時、表の家に看護に行つた妻は何うしたかまだ歸つて來ない。五月の日影は庭の綠葉に美しく照つた。

八

細君はやがて看護から歸つて來た。

すぐれない顔を爲て居る。眉のあたりが深い影を帶びて居る。銑之助は一目見て何か事のあつたのを知つた。里心の失せない新妻を庇ふ情と母親の理由のない難かしさを嘆く念とが同時に胸に迫つた。

『母樣、機嫌が惡るかつた?』

『え。』

としほ〳〵する。

『さうとも、あの津輕や秋田は皆な昔から船便の早く開けた處で、酒田から能代、深浦、鰺ヶ澤なんて、上方の船着が非常にあるのだからねえ。日本の歴史では太平洋岸より日本海岸が早く開けた。安部比羅夫が肅愼を伐つた時も其方側の道路を通つたものだ。だから上方の種が多いさ。』と、得意になつて講釋する。

母親も非常に喜んだ。あけび細工の籠に紅い青い林檎の數、汽車で買つて來たといふ南部鐵瓶、青森名產の雲丹、『廿鹽の鮭など處狹きまで座敷に並んだ。母親は床から起きて來て額に帽子の痕の際立つて白い靑年士官と相對した。秀雄は母親の病氣などは餘り苦にならぬといふ風で、元氣よく種々のことを語る。風が强く吹く日で、裏の雨戶は閉切つた儘、室は常に變らず陰氣であつたが、一座は何となく賑かで樂しかつた。銑之助は其時始めて自分の新妻を引合せた。『あれほど女に憧れた兄貴の嫁は要するにこんな女か』と思はれるやうな氣がした。其頃、母親は寢たり起きたりして居た。脇腹の凝結の痛まない日にはよく緣側の日向に出て居たのである。

銑之助は其時から今日までのことを頭に浮べたが、書き懸けた手紙の筆を取つて、

戀の問題は眞面目ならざるべからずと存じ候。曾て貴下は士官學校の入學試驗に合格し、高崎聯隊に入營せし時、その停車場前の旅店の二階にて淺間おろしの吹荒るゝ音を聞きつゝ、戀のこと物語りしを御記憶のことゝ存候。淸き少女を得よ、美しき少女を得よ、二人の兄よりも比較的世間に成功せし貴

で『かう見えても、ちやんと立派なお師匠さんが附いて居るからね、』と言つて笑つた。

其立派な御師匠さんは下宿して居る士族の家の娘であることがやがて解つた。嫂さんのとは餘程違ふといふ生田流の調子は、其の娘の琴の音に聞き覺えたのである。縣廳を青森に取られて次第に衰へた津輕歷代の城市、商業も工業も活氣を失つて、半歳を深雪の中に埋められる淋しい市街も、日清戰役後、第八師團の增設と共に新しい活動の氣は到る處に充ち渡つた。劍鞘を鳴らして勇ましく街頭を步み行く靑年士官の群は、尠くとも古く衰へた屋敷町の津輕少女の眼を聳たしむるに十分であつた。

『あだねす、こだねす、どせばよごいす』

などゝ謂つて、秀雄はよく人々を笑はせた。

『津輕辯、大津繪ぶしこ』といふのをも歌つて、風俗の違つた言葉の解らない北の國の物語を飽かず語つた。下婢のお鐵は面白がつて『椀子』『釜子』『べこゝ』『猫子のこつこ』などゝ謂ふ言葉を無闇に遣つて腹を抱へて笑ふ。銑之助も調子が可笑しいとて、『笠も冠らねぇで、けらこも被ねぇで』などゝ口癖のやうにいふ。あやしげな解らない津輕辯は、秀雄の居る間、一家の人々の嬉々たる團欒の種となつた。

『實に彼方の女は綺麗だ。何うしてあゝ色が白いのかと思ふ位ですよ。何でも上方の種だッてね、彼處等の女は、……』

などゝ言ふと、歷史通の長兄が、

候ひしが、今は全く床上を離るゝこと能はぬ容體と相成候。十日程前三崎博士來診、兄が後に聽きたる處にては腸に癌を生じたるらしく、とても不治とのことに候。小生等は自己の野心と自己の經營とに逐はれて、未だ一片の恩義をも報いざるに母上と別れねばならぬことを考へ候へば、腸九廻の思に堪へず候。公務にてお忙しきは萬々承知なれど、其中又一度御出京被下候やう願入候。

弘前は如何。未だ參らぬ土地とてよくは解らず候へども、此間お出の時の話にて大抵は想像致し居候。下宿は城址附近の素人屋、貴下の起臥する室は二階の由なれば、前に近く山の見ゆることゝ存候。毎朝士族町を拔けて郊外の聯隊本部へ御出勤、若々しき士官の面影眼に浮び申候。練兵の光景なども思ひ出し候。當地は麥の穗長く、蛙の聲前の田に喧しく、夜など母の病牀に侍し居候へば、一種狀し難き哀愁を覺え申候。

銑之助は此處まで書いて來て、行を更めて『琴彈く娘の物語も承り度く候』と書添へたが、鳥渡考へて、墨くろ〴〵と消して了つた。

秀雄が此三月に母親の病氣見舞の爲めに十日ほど來て居た時、琴を彈く銑之助の妻の側に坐つて、『嫂さんのは山田流と謂ふのか、弘前では山田流なんか一つも流行りはせんよ、皆な生田流だ！』と謂つて自分で武骨な大きな指に琴爪をはめて、覺束ないながらも六段のある部分をシャンシャンシャンと鳴らした。思ひも懸けぬ隱藝『御上手ねえ、お稽古なすッたんでせう、』とお梅が謂ふと、青年士官は大得意

第、兄上にして常識に富み、世故に長け、犠牲の貴き精神を有せざりしならば、小生等はいかに相成り候べき。貴下は無論學資なき爲めに成城學校に學ぶ能はず、從つて今日の成功を見る能はざりしなるべく。小生は官省の下級官吏などに身を投じて、自ら生活の荒波に沈まねばならざりしにて候。小生の眼より見れば、兄上は勇氣に乏し、自信に乏し、奮勵の意志に乏し、されど兄上は初めより自信なく勇氣なく意志なき人物にて有之候ひしや。田舍より東京に移りし際貴下は十二、小生は十七、あの富久町の最初の僑居を何れの日か忘れ候はむ。あの頃は嚴格なる兄上にては候はざりしや、唐宋八家文の無點の素讀が滿足に出來ぬとて、半日の跪坐、長煙管の雁首にて頭を打たれ候ことはお互に忘る〻時なかるべくと存候。兄上の優しき胸にも曾ては吉田家の烈しき血流れたるにて候。今こそは其血は乾き其胸は靜まりたれど、其今日に至りし原因を考へ候へば、暗涙の袖を濕すを禁め得ず候。貴下は二十七年以後多くは軍隊生活學校生活を爲したり、從つて家庭の苦痛を適切に身に感ぜざりしやも知れず、されど英男の母親の死亡前後の母上は知れる筈に候。小生はある時は母上の沒人情沒道義を呪ひたることすら有之候ひし、されど母上のかく爲りし徑路にもまた涙なきや。田舍を出づる時は錄の世話になると申して、あれほど樂しみにせし身を、一朝にしてかくの如き境遇に置く。父に早く別れしこと――これ一家の悲劇の根本と存じ候。

母上の病氣は愈々悪しく相成候。此三月貴下のお出の頃は晴れたる日など小生宅まで自から步み來り

疼痛が容易に取れぬので、腹を撫でたり、蒟蒻を替へたりして、誰も其夜は手を離すことが出來なかつた。四時近く、それでも少しは落着いて、病人も横になつて寢ることの出來る頃には、夏の空の明け易く、黎明の新しい光が旣にあたりに充ち渡つて居た。銑之助は曉の新鮮なる空氣を吸ふべく前の雨戶を手づから繰つたが、四疊半の開きが少し明いて居るので、何の氣も無く見ると、暗い洋燈の一室には、蒲團、搔卷、嫁の着物やら帶やらのぬぎ捨てたのがその儘になつて居た。

七

原稿に倦んだ進まぬ勝の筆で、銑之助は弘前の弟に遣る長い手紙を書いた。

拜啓仕候。昨夜兄上は目出度く結婚致し候、嫂になりし人は、旣に此春お出の節其話だけは御存じの筈の隣の細君の友達に有之候、生れは小生の妻などゝ同藩の武州行田のものに有之候よし、母などは何方かと申せば、餘り贊成には無之候ひしも、兄上自から進みて話を定め候次第、小生等は只切に兄上の爲めに將來の幸福を祈るのみに有之候。兄上、眞に不運なる兄上！　兄上は吉田家の爲め、小生等の爲め、其功名の念をも學問をも何も彼も捨てられたるに候、吉田家の爲め、一人取殘されし母上の爲めに盡さねばならぬ責任と申せば、兄上のみにあらず、小生も貴下も十分に負はねばならぬことは言ふまでも無し、然るに、長男に生れしばかりにて、兄上は小生等の責任をも一人して負はれたる次

で、それ！　と言はぬばかりに急いで立つて、お駒に渡すと、お駒はいつもするやうに、老母の脇腹の凝結の出來て居る處にそれを當てた。
苦痛は猶少時續く。
『醫師を呼んで來ようか。』
銑之助がかう言ふと、
『なァに、これで落着くだらう……。それにもう一時過ぎだから。』主人はかういふ發作にはよく慣れて居る。
『一體、酒など上げるからいけない。』
『でも、お祝ひだと思つて、ほんの少し上げたんだけれど……別段それが當つたといふ譯でも無からうがねえ。』
『もうさつきからですか。』
『四十分位前。』
『此方に來てからぢき？』
『さうさ、それから一時間位經つてからだらうか。』
主人は眠さうではあるが、例の落着いた緩かな調子。

には古屛風が半疊まれた儘置かれてある。今宵此座敷で目出度い晴れやかな結婚の宴があつたとは如何にしても思はれぬ程あたりが暗く佗しかつた。お駒は叔母の側で、及び腰になつて痛む腹を押へて遣つて居る。

『母樣、何うしました?』と聲を懸けると、病人は顏を此方に向けて、

『銑か……痛くつて……あゝ痛い。』と顏を蹙める。

『餘り酒を飮んだり何かするから惡いんだ!』と銑之助は强く言つたが、しかも母に對する同情の念は禁め得なかつた。

兄は茶の間の長火鉢の前に坐つて、幾度となく鍋の蓋を取つては、頻りに罨法用の蒟蒻の加減を見て居る。新しい嫁は交織の黃縞の袷を着て手を出すにも出し兼ねてそは〳〵と立つたり居たりして居た。裏の家に行く爲めに熟睡から起されたお駒の娘は眠い目を摩りながら今格子戶を明けて出て行つた。

『痛い、あゝ痛い!』

老母の顏には見る〳〵深い苦痛の皺が刻まれる。

『もう、蒟蒻が暖まりさうなもんだなア、』と絕望的にいふ。

『蒟蒻、蒟蒻! 鐐さん、もう大抵で好いでせう、』とお駒が促す。

嫁が長火鉢の前に立つて行く。主人は熱くなつた二枚の蒟蒻を長い布片にふう〳〵と吹きながら包ん

そゝくさと雨戶を開けると、お鐵は其處に立つて居る。

『急に御腹が痛み出しましてね。旦那樣も奧樣も起きていらしやいますのよ。旦那樣が裏の家にもさう言つて來いと仰有いましたから、大急ぎで飛んで來ましたの。』

『餘りいろんなものを食べるから惡いんだ！』と銑之助は言つたが、

『誰れか一人家にも來て居て貰ひ度いものだな、お梅は一人では淋しいから。』

『お貞さんにでも來て居て貰ひませう。』

若い細君も起きて來て、ねまき姿のまゝ、一枚明けた雨戶から半身を現はした。

『御腹が痛むんですつて？』

『おや――お休みになつたばかしの處を起して御氣の毒でしたねえ……。急に痛み出したんですッて。私ね、成だけ旦那樣を起さないやうにと思つてね、お駒さんと一緒に介抱したんですけれど、餘程強く御痛みなんでせう。ついお聲が出るもんですから、旦那樣も奧樣も起きて入らしッて……。』

『さう……。』

お梅は暗い戶外を見た。

銑之助が行つて見ると、母親は四疊半から寢床を移して、いつもの通り南向に客間の八疊に突伏して寢て居た。腹の痛むのを自から押へて居るのである。枕元には竹筒臺の置洋燈が薄暗く點いて居て、後

『寢よう、寢よう』

と銑之助は立上つた。種々の煩悶苦痛、これを忘れるのは目前の快樂と睡眠とに限る。ふと兄と新妻とのことが頭腦を掠めて通つた。座敷のさまが續いて眼に映る。

『貴郎、ねまきは其處に出してありますよ。』

銑之助が衣服を着替へると、若い細君は簞笥の側の襖の一枚明いた處で、其のぬぎ捨てた着物を丁寧に疊んだ。で、それを簞笥に藏ひ終ると、今度は茶の間の釣洋燈を手にして、勝手から入口、裏の雨戸のしまりを殘る處なく見て廻つた。

六

それから一時間ほど經つた頃、前の雨戸を叩く音が耳に入つて、銑之助は熟睡から覺めた。

『誰だえ?』

『私ですがね…………。』

家婢のお鐵の聲である。

『何うした?』と銑之助は飛起きた。

『御隱居樣がね、御腹が痛い!　と仰しやつて。』

て了つて、私何うしやうかと思ひましたのよ。』

『また貰つて來りや好いのに。』

『あの時はどうしてさう想はなかつたでせう。仕方が無いと思つて歸つて來たんですよ、私、餘程何うかして居たのよ、あの時は。歸つて來て、お駒さんにこれ〳〵と言ふと、よくお斷りを言つて置いてやるからッて言ひますからね、其儘母樣にも挨拶も爲ずに家に歸つて、小言を言はれるか言はれるかとびくびくして居たのよ。處へ、お貞さん（お駒の娘の名）が來て、祖母樣がお梅さんに烏渡入らつしやい！ ッて言ふぢやありませんかねえ、私、ギヨッとしてよ。祖母さん怒つて居て？ ッて聞くといゝえと言ふから、幾許か安心して行つたけれど、あの時はどうしやうかと思ひましたよ。』

『小言はそんなに言はなかつたッていふぢやないか？』

『えゝ〳〵。あゝいふ時は、挨拶してお詫をして行くもんだと仰有つたきり、別に變りはなかつたけれど……。』

『注意する方が好いよ。』

『えゝ〳〵。……』

不圖時計を見て、

『もう十二時よ、貴方。』

て其處の緣側に腰を掛けちや、畑の莢豌豆に手を今少し澤山遣らなければいけないの何のッて、世話を燒いて下すッたのにねえ。』

『まだあの頃は好かつた。』

『何うしてあんな病氣に取附かれたんでせう。』

鉄之助は荒凉たる家庭と母の性格とを思ひ遣つた。人間はこの世の生活に伴はなくなれば次に來るのは死だ！　母親のは確かに自から呪ひ自から傷けた結果の病氣である。昨年の十一月、兄が頻りに家を空ける頃、自から其衝突にも疲れて『私のやうな我儘者はもう死んで了ふ方が好い！』と我とわが身を捨てゝ居た。十二月の初には其病氣が既に萠し出した……。

『私、此間は困りましたわ、』と細君は話を更へた。

『此間ッて？　何時？』

『そら、藥罐を割つたでせう。』

とお梅は夫の顏を見る。

『さうさ、あんなことをするから。』

『藥取の歸途に、紅谷で、鹽釜を二本買つて來て吳れッて母樣が仰しやつたから、彼處に寄つて買つて居ると、つい手がすべつて罐を落したんでせう。彼處は三和土になつて居るもんですから、すぐ割れ

お梅は急須から湯呑に茶をついで夫に渡した。そしてちよつと自分のねまきのまゝの姿を自分で見て
『こんな旨い恰好して！』と、莞爾する。
やがてお梅は言葉を續いで、
『母様は、もう治らないのでせうか。』
『三崎博士もあゝ言ふ位だから、とても難かしいだらう。』
『なんと言ふんですッて、病氣は？』
『盲腸炎だ相だけど、醫師の口振では癌が腸に出來たらしい。』
『癌ッて何なの？』
『癌腫ッて、胃癌だの、何だの、よくあるぢやないか。癌に取附かれては切開して治すより外に道は無い。』
『切開！』
とお梅は傷しさに堪へぬといふ顔をする。
『母様なども若ければ切開するのだけれど、あゝ年を取つちやとても難かしいからねえ。』
『さうでせうね。』
と言つて少し考へて、『私の來た頃はまださう大して惡くありませんでしたがねえ、よく酸漿を鳴らし

死に瀕して居るにも拘らず、其子等の結婚、この事實が銑之助の頭腦をまた烈しく動搖させた。母親のことが簇々と胸に上つて、堪へ難い一種の同情が湧き返る。其身が幼い頃、母親と一緒に住んだ田舍の士族町のさまから、菜の花の咲滿ちた畑道を母と伴れ立つて町に買物に行つた昔が眼に浮ぶ。母は優しい性質であつた。感情的な處があるので、時には嚴しい折檻を受けたこともあつたが、要するに、それは父親の無い子供等の教育に必要であつたからである。母は花が好き、景色が好き、雲の色などに憧れて見とれて緣側に立つて居ることもあつた。銑之助は今も思つて居る、自分にもし文學的の想像の血が流れて居るならば、それは母親から承け繼いだ貴い賜である、と。思出せば弟が士官學校入學試驗に合格した年の秋、母と三人して日光に遊んで、あの中禪寺湖畔の紅葉の隧道の中を樂しく過ぎたことがある。其時の母親の喜ばしさうな顏！　それを思つて居ると、今度は晩酌の時の嶮しい悲しい顏と、此頃の病氣に衰へた痩せた顏とが一つになつて銑之助の眼前を通る。

母親を幸福にすることの出來なかつたのは吾等兄弟の罪である！　と渠は思つた。

若い細君は寢床を敷き終つてねまきのまゝの艶めかしい姿で茶の間に來たが、いそ〱と長火鉢の前に坐つて、

『もう、貴郎お茶を召上らなくツて？』

『今一杯與れ。』

頭腦が烈しく動搖した。天上から地の底深く陷るやうな心地がする。センチメンタリズム、アイデアリズム、かれは尠くとも美に憧憬した。所謂理想をも追究した。美しき面影を頭腦に浮べて、身に汚なき業をする時にも、それを本能の盲目的威力に歸することが出來なかつたのである。醜い汚れたこの人間の總ては、努力して改善して行つたならば、必ず理想の境に達することが出來ると信じて——寧ろ反抗的に病的にそれを信じて、四疊半の不潔な一室に汚ない生活を送つて居た。硯には塵が堆く、雜誌書籍の四邊に散亂して居る中に、髮を長く、顏を蒼く、自から其身を傷つけて居たさまが歷々と眼に見える。机の上に鏡が置いてあつたが、其鏡には鬚の茫々と生えた神經性の顏がよく映つた。洋燈の蓋には戀、神聖、菊子、Love, Amour, mein, leibe, 苦悶、懊惱、傑作などゝ謂ふ字が一面に書いてあつた。そして兄が文箱の底に秘めて置く一册の書をこつそり出して、またこつそり藏つて置いた。

母親の苦惱といふことが續いて考へられる。兄の實際的生活も思出された。兄などの生活から判斷すると、此の人生は平凡主義快樂主義である。快樂を追究しさへすれば好いのである。平凡なる現象を追つて、ある盲目的な力に屈從して行きさへすれば好いのである。

『それが人生か？』

と續いて思つたが、すぐ考へが變つて、

『母親は——母親は死に瀕して居る！』

『本當によく世話をして呉れ。』

『え丶。』

と夫の顏を見る。

少時して銑之助は思返した。

『もう寢ようか。』

『え丶。』

で、お梅は立つて座敷に行く。其處には嫁が持つて來た簞笥があつた。ねまきに着更へる樣子で、帶を解く音、さ丶やかな絹ずれの音――一枚明けた襖の彼方には、線を劃して射し渡つた狹い燈火を限取つて、女が丸髷姿を低頭かせながら、頻りに着物を疊んで居るさまが見える。

疊み終つた着物の上の足袋の白いのが際立つて眼に附くっ

やがて簞笥を明けて藏ふ音が聞える。銑之助は種々の混亂した思ひを胸に漲らせながら、若い細君が押入から蒲團やら搔卷やらを出して頻りに寢床を並べて敷いて居る氣勢を聞いて居た。

『戀愛は本能である。』

と非戀愛神聖論者の言つた言葉が第一に胸に浮んだ。

戀愛とは要するに本能か。

月の月末のことを考へずには居られなかつた。妻には會計のことは一切隱してある。金錢は自から始末して、入用の雜費は一々妻に渡すやうにして居る。實家の親達から入智惠をされて、收入のことをも知らう知らうとする細君をなだめるにも一方ならず心を費した。萬一を慮つた少許の紙幣は、半紙に包んで本箱の奧の書籍の頁の間にこつそり入れて置くのである。

銑之助は原稿を買つて吳れさうな雜誌社と書店とを考へたが、何處も塞つて了つて心當は無かつた。紅葉露伴――分けても近頃賣り出した某々新進作家が羨しい。思はず長嘆息を吐くと、

『何うかして？』

『いや。』

『だつて何か考へて居るぢやありませんか。』

『いや――鳥渡。』

月末の苦勞が胸につかへた。

『母樣のことを心配してるんでせう？』

『いや――。』

『私、出來るだけは看病して上げたいと思つて居ますのよ。私こんなぼんやりで氣が利かないけど、母樣は本當にお氣の毒ですから』

『甘納豆はまだある筈ぢやないか。』

『もうありませんの。』

『食つちやつたのか。』と驚く眞似をして、『實に遣り切れんなア。すぐ平らげて了ふんだから。お前に懸つちや堪らん。』

『だつて旨しいんですもの。』

『旨いのはきまつてるさ。』

その無邪氣な容子が一層いとしいといふ風で、じつと妻の顏を見る。

ふとある不愉快な思ひが銑之助の胸を衝いた。其甘納豆を昨日日本橋の榮太樓で買つた。魚河岸の賑ひ、鐵道馬車、渠の原稿を賣る雜誌社は本町にあつた。漸く文壇に出たか出ぬかの青年文學者が雜誌記者から受ける侮辱、それが言ひ知れず痛く渠の矜持を傷けた。新刊雜誌を滿載した馬車、市下渡しの分を逸早く受取に來る函車、店では男が幾人となく地方發送の荷を一生懸命に繩で絡げて居る。算盤の音、ペンの紙上を走る音。靴の音、スリツパの音、四邊の目覺しい活動は先づ渠の小さな膽を奪つた。其日は主筆は逢つて吳れたが、さも忙がしいといふ風で、書いた短篇小說を詰らなさうにひねくり廻して、此間も頂載してまだ載らずにあるんだからと謂ふのを、無理にいろ／＼に賴んで、一枚三十錢の割で六圓六十錢貰つた。甘納豆は其歸途に態々寄つて買つて來たのである。銑之助はもう十二三日しか無い今

の前に坐つて、鐵瓶を下して、火をかき起した。
『私、始め大變別嬪さんだと思つたのよ。』
『鳥渡遠見が好いからねえ。』
『顏のかたちが好いでせう。それに御つくりしてるもんだから。』
『本當に鳥渡綺麗に見えた。年にしちや若い。惜しいことには髮が少し毬れて居るね。』
『さう、……私、知らなかつた。……』
鐵瓶が微かな音を立て始めた。
『貴郞、鳥渡お茶の鑵を出して下さいな。』
茶箪笥一つ無い貧しい新世帶、傍の一間の押入の下段に、炭取やら膳やら茶盆やらが一かたまりに混雜と置かれてある。押入は總てがらんと空いて居た。銑之助はブリキの茶の鑵を取つて渡す。
日光土產の茶盆に、此間毘沙門の緣日で一緒に行つて買つて來たお揃ひの布志名燒の湯呑茶碗、茶を淹れて、一箇を猫板の上に置いた。
『何か無いか。』
『なんにも……。』
と妻は笑顏をする。

附と繻珍の帶と赤い手絡をした丸髷とが此上なく美しく似合つて、何の事は無い結婚當夜の姿を見るやうに銑之助は嬉しく思つた。色の白いのと眉の濃いのが取柄で、他は十人並以下の顏立、自から進んで妻にしたには相違ないが、時にはもう少し、容色の立勝れたのを欲しかつたと思ふことも度々であつた。『戀愛が神聖だとか何とか言つたッて要するに懷都合で天麩羅を食ふ處を蕎麥で間に合はせたりするやなものだ、』といふ極端な議論に反對して、『戀愛は神聖である。美醜問題ではない、精神問題である、』と論じたこともあつたが――いや今でもさう思つては居るが、矢張美しい妻を持つた人は羨しかつた。

最先に着物を着換へようとする妻を遮つて、

『まア、着換へないで、さうして居る方が好いよ。もうすぐ寢るんだから。』

と銑之助は言つた。

『でもお茶を上がるでせう。』

『うん、飮まして呉れ、』と言つたが、『まア先に一杯水を呉れ。咽喉が乾いて爲方がない。』

『お酒を餘り召上り過ぎるから惡いわ?』

と赤い銑之助の顏を見て、若い妻は莞爾する。

『そんなに飮みやしないが……弱いからすぐ醉ッちやつた……。』

妻の持つて來たコップの水をぐつと旨さうに一氣に呷つた。お梅は若々しい無邪氣な態度で、長火鉢

と銑之助は愈々手を堅く握つて、其儘並んで歩く。

畑に添つた道、穗の長く出た麥に夜露は置いて、其向うに、大きい榧の樹の黑くこんもりとした影が見える。銑之助が四疊半の汚い書齋から始めて世の中に出た家は、此畑道の突當りの處にあるので、いつも若い妻が水汲に出る車井戸の前を通り過ぎると、小さい開きの門があつて、庭には高い檜の樹が二本、檐の低い小さい家屋は闇にもそれと明かに見えた。

開きの棧を明けて二人は垣の中に入つたが、

『鍵を持つてる？』

『え、』と言つて、お梅は右の袂を搜したが無い。左の袂を見たが、矢張無い。『何うしたんでせう、さつき確かに持つて來たんですのに、……』と言懸けて、風呂敷包を夫に持つて貰つて、今度は帶の間を搜し廻したが、

『ありました。』

と、やがて鍵を夫に渡した。

夫婦二人暮し、目ぼしい道具とても無いので、何時もかうして玄關の戶に鍵を懸けて二人は出るのである。銑之助は鍵を外して、戶を明けて、其儘戶內に入つた。茶の間の六疊には、三分の釣洋燈がぼんやりと薄く點いて居たが、螺旋を捩ると、明かなる光は其儘一間に照り渡つた。細君の栗梅の縮緬の紋

草木の薫がしつとりとした空氣にそこはかとなく傳はると、大地からは物の生育する氣があたり一面に緩く暖かくしめやかに滿ち渡つた。

蛙の聲が田から畠から聞えて來る。

前の二階の西洋風の窓には、燈光が明るくかゞやいて居た。何處か遠くで琴の音が微かにする。艶めかしい女の匂がして、盛裝した着物の絹ずれが歩く度にやさしい柔かな音を立てた。女の顏は際立つて闇に白い。

鉄之助は妻と並んで歩きながら、その左の手を力強く握つた。

『お前の手はつめたいねえ。』

『貴郎のは何うしてまァこんなに暖かなの？』

『熱情があるからさ』

お梅は默つて唯手を堅く握り返した。につこり笑つた顏は白く美しかつた。

『今日は母樣は機嫌が好かつたのねえ。』

『うむ……。』

『母樣の機嫌が好いと、本當に嬉しいけども……。』

『まァ、好いよ、そんなことは何うでも。』

『酒を澤山飲んぢやいけませんよ。』

『なァに、ほんの少しさ。……お祝だからねえ。……栗のきんとんが旨かつた。』

『栗のきんとんなどは餘り好くないでせう。』

『何に、少しだから。』

機嫌の好い時は何處から平生のあの皮肉やら惡罵やらが出るかと思はれる位優しい。

『お梅、其處に居たか、顏をお見せ。』

若い嫁が肥えた莞爾した顏を其枕元に出すと、『火の用心を氣を附けてね、若い時といふものは、よく油斷をするものだから、粗相があつてはならんから、よく氣を附けてね。』

『え、……』とお梅は頭を下げる。

『それではおやすみ。』

『お休みなさいまし。』

二人は兄夫婦に挨拶して、折詰を包んだ風呂敷を持つて戸外へ出た。

五

門前の低地に霧は微白く沈んで、空にはをり〳〵星が見える。夜風は顏を撫でるやうに輕く吹いて、

少時して、お開きとなつた。先方の客が先づ座を立つ。膳の料理を折詰めにして、引物の靑籠と一緒に風呂敷に包む。戸外に待つて居た車夫は、提灯を闇にかゞやかして、入口の格子の前に寄つた。歸る人を送る聲が一しきりあたりに聞える。倬はがら〳〵と坂を上つて、提灯の火が賑はしく動く。

一人歸り、二人歸り、大風の吹いた後のやうに室は靜かになる。

鉄之助夫婦は四疊半へ行つて、母親に暇を告げた。

『もう歸るかえ？』

『もう十時過ですから』

母親は機嫌が好い。

『さうなるかねえ、早いものだねえ。また明日來てお呉れ。』

『今日は餘りお惡くありませんでして？』

と若い妻が訊くと、

『あゝ、今日は少し好かつた。いつも今日のやうだと好いんだけれど……。』

『腹も痛まんでしたか、』と鉄之助が續いて訊く。

『あゝ、痛まなかつた。御馳走を澤山頂戴したよ、』と笑つて居る。

枕元には御膳が据ゑてあつて、酒が一本ついてゐる。

る。あの四疊半の變人もたうとうこんな平凡な幕を打つたかと誰も言つて居るやうに思はれる。理想がッてピユリタンを以て任じて居た處で、要するに人間はかうしたものだと誰かが耳の傍で罵つて居る。媒妁に立つて呉れた二人の親友の手前も何だか恥かしい。平生戀愛の神聖を說き、少女の美に憧れて居て、そして内心では烈しい生理的の壓迫を受けて居ただけそれだけ、これが一種の降服のやうに思はれて厭な氣がした。母親はそのすぐ側に坐つて居て、何か食つたら好いぢやないかね、後で腹が空くと仕方が無いと小聲で言つて呉れたが、その愛情すら何だか皮肉のやうに感じられた。一座はやがて酒に亂れて、赤い顔、駄洒落、唄——何うしてかういふ惡習慣が日本にはあるのか知らん、結婚の席で騷ぐのは、結婚そのものゝ神聖を瀆すものだと苦々しく思つた。それに比べると、此の兄の結婚は！　かうした結婚をする兄も、最初は自分と同じやうな思をして結婚したのか、それとも丸で人間が違ふのか、時代が違ふのか、銑之助は惑はざるを得なかつた。

銑之助のセンチメンタルな心では、人が再婚するなどゝいふのが既に解らなかつた。世間では妻を亡ふと四十九日も經たぬ中に後を搜す、五十以上の老人が四十位の中老婦と結婚する。結婚とは隣から猫を貰ふ位にしか思つて居ぬらしい。夫婦の愛情と言ふものはそんなつまらぬものか。そんな無意味なものか、不圖封の切らぬ女郎の手紙が兄の机の抽斗に一杯埋められてあるのを思ひ出して、赤い顔をして本氣で洒落を言つて居る兄と、古い婚禮衣を着て笑を含んで默して坐つて居る嫁とをぢつと見詰めた。

老母は孫の頭を今一度撫でゝ、

『本當に言ふことをよく聞かねばなりませんぞ。』

『英さんは本當に祖母樣子だからねえ。』

とお駒は調子を合せた。

こんな事で濟んで、今度は銑之助と其若い細君とが新しい嫁に引合された。母親は病人だからと言ふので御免を蒙つて、其儘四疊半に引込んで了ふ。內々の親類ばかりを招いたのであるが、先方の客が長兄と仲兄と弟とで三人、主人と主人の叔父と義兄と銑之助と其妻と、それに花嫁と媒妁夫婦を加へて都合十一人、八疊の一間には準備した料理がずらりと並んで、引物の靑い籠が一つ一つ其膳の側に据ゑられた。貧しい家庭、倹約に倹約じた宴ではあるが、兎に角に目出度い結婚の席なので、銚子は羽の生えたやうに飛んで、二十分も經つと、人々の顏は赤くなつて、賑かな笑聲が一間に滿ち渡つた。お駒の娘とお鐵とが酌に立つたが、手が足りぬので、主人は自から德利を取つて酒を勸め、快活な調子で面白い洒落を言つて人々を笑はせた。『かうした花婿もあるものか。』と銑之助は不思議に思つた。

銑之助の結婚した時はかうしたものではなかつた。其時は新しい歡喜と新しい不安とで、自から我を堪へ得ぬほど頭腦が動搖した。床の間近く、强ひて新妻と並べて坐らせられた時には、餘りに晴がましいので、何だか其身が侮辱されたやうな氣がした。客が皆な自分等を見てくすくす笑つて居るやうであ

お駒が先方の人々に老母を引合せる。一通の挨拶はやがて濟んで、嫁と姑とのかための儀式が行はれる。男の子も新しい母親の手から盃を受けた。

『私はもう此の通り役に立ちませんから、これからは、これが、……』と孫の頭を撫でゝ、『さぞ世話になることでせう。婆育ちの三百安しで、平生あまやかして育てゝありますでな、さぞ骨の折れることでせうけれど、親のない不仕合せな子だと思つて、面倒を見て遣つて下さい。英！ 今日から坊の母樣だから、よく言ふことを聞かねばなりませんぞ。』

かう言つて一座を見渡して、

『生れ落ちるとから、世話を燒いたものですから、祖母ちやん、祖母ちやんッて、私でなけりや夜も日も明けませんでな……。前の嫁など何うしても懷きません。何うかして懷かせたいと色々苦勞もして見ましたけれど、たうとう母さんと一言言つたことが無いので御座いますからねえ。』

『不束者ですから、種々敎へて戴きませんでは……。』

と先方の長兄が言つた、

『いえ、いえ、もう私が惡い。つい可愛ものですから、自分で世話を爲ますがな。それが、矢張いけないので御座いますよ。今度はお桂さん……確かお桂さんと言はしつたな。……お任せしますから、何うか不仕合せな兒だと思つて面倒を見て下さい！』

袋を穿かせようとして居る處であつた。無造作に束ねた白髮頭、瘦せた皺だらけの蒼白い顏、四邊には蒲團やら搔卷やら寢卷襦袢やらが混雜と散らばつて居る。

老母はお駒に介抱されて座敷に出た。孫の男の兒は、肩揚の附いた三紋の黑の羽織に仙臺平の袴を穿いて、大人を小さくしたといふ形で、兩手を膝に置いて、しやんとして其傍に坐つた。

『こまつちやくれた兒だ！』

と嫁は思つた。

嫁は盃の儀式を爲ながらも、新しい夫の美しい鬚と優しい柔かな應對とを嬉しく、前の夫の荒々しいのに比べて、一種暖かい思を胸に漲らせて居たが、母親の蒼く嶮しい皺だらけの顏を見ると、兼ねて其難かしいのを聞いて居た故でもあらうか、忽ち後から水を浴せ懸けられたやうな氣がした。『なァに長くつて半年の辛抱ですよ。もうお醫者樣も見放して居るんだ相ですから、お桂さんは運が向いて來たんですよ。旦那さんは、それは優しい善い人ですから、』と言つた隣の細君の言葉をふと思出した。

母親の眼には、稍々色の褪せた紋附と、顏の長い髮の毬れた女の顏とが映つた。何と謂つても元木に勝るうら木無し、英男（孫の名）の母親が一番好かつた。容色も滿更ではなかつたし、優しくもあつたし、女らしくもあつた。何故早く死んだのか。かう思ふと難かしい小言を言つたことが今更のやうに悔まれる。

年はまだやつと十九、丸髷は重く里心は失せぬのである。

お鐵もいつか其處へ來て、障子の穴から一生懸命に見て居たが、

『鳥渡々々、お梅さん。』

と若い細君の袖を引いて、

『鳥渡々々御覽なさいよ。今お盃の處ですからさ！』

若い細君も覗く。銑之助も覗く。手傳に來た親類の男も覗いた。――丁度今嫁さんが盃を受けた處で、色白の顔をぱつと上氣させて、低頭き勝に朱塗の金蒔繪の淺いのを兩手で持添へて、靜かに紅なる唇に當てた。洋燈の光が一座に輝き渡る。戸外では蛙の聲が一しきり絶えて、また喧しく聞え出す。

再び若い細君の袖を引いたお鐵は、小聲で、

『何うでせう。あの旦那の濟しやうは！　平生はあんなに戲談ばかり仰有つて居て……そら御覽なさいよ。あれで三度目よ。』

三獻の儀式はやがて濟む。と、媒妁人は少し下り加減になつた袴を引摺つて、人々の覗いて居る縁側をあたふたと通つて、離座敷の四疊半の扉を五寸ほど開けて、

『母樣のお支度は？』

今しお駒は其病める叔母に急いで衣裳を着せて居た。濃鼠色の三紋附、繻子の帶を輕く結んで、白足

と言つて襖を閉切る。

家婢のお鐵はそれにも頓着せず、閉切つた襖をそッと一分ばかり明けて、熱心に嫁の容色と扮装とを自分の身に引較べて見て居た。襖から追はれて縁側に廻つた群は、障子の紙を唾で濡して、處々に穴を明けて、滿たし難い好奇の眼を集めるのであつた。

少時して、

『別嬪ねえ』

とお駒の娘が銑之助の嫁に向つて小聲で囁く。

『さうねえ、別嬪さんねえ、あれで二十八ですッて、若いのねえ。』

『二十八？　さう……』と娘はまた覗く。

銑之助の若い妻は姉になるべき人のことを鳥渡念頭に浮べたが、續いて五月前に其身もかうして結婚したことを思出した。式は裏の家で擧げたので、障子の穴から隙見などはされなかつたが、それが濟んで、此座敷へ伴れられて來て、難かしさうな母親に引合された時のさまは歴然と今も見える。兄さんとも兄妹のかためをした。九歳になる男の兒にも盃を差して、お駒さんが徳利から酒をつぐ眞似をすると、其男の兒は、それを手に取つて、『何だ坊のは一つも入つてやしない！』と言つて一座を笑はせた。あの時お父さんが醉つて、大きな聲で高砂を謠つたッけと思ふと、實家の母親が今更のやうに戀しくなる。

『そんな事は無い。姉さんなぞこれから少し樂をしなければ……。』

坂の上に何となく騷がしい氣勢がする。それ！　と出て見ると、提灯の光が彼方此方と賑かに動いてがら〳〵と車が五臺、其の一臺は幌が懸けてあつた。

羽織袴の兄弟に護られて、嫁は入口から玄關に上つた。仕切の障子が外されてあるので、二間續きの座敷は明かに見渡される。銑之助と銑之助の嫁とお駒の娘と家婢のお鐵とは、庭に向いて明いた緣側に並んで立つて居たが、屏風に添つて其の嫁の一行の通る時、髮を丸髷に結つた白襟黑紋附の、低頭勝の背の高い姿を誰も皆見た。

嫁の一行は座敷に通る。一番上座に嫁が坐つて、續いて先方の兄と弟とが媒妁役の隣の主人に挨拶して座に就く。花婿はかういふ儀式には馴れ切つた沈着いた態度で、一通の挨拶が濟むと、緩い優しい柔かな語調で、顏には絕えず微笑を含みながら、靜かに世の常の會話の緒を開いた。嫁の眩しさうに低頭いて居るのを、媒妁役の隣の主人が見て、平生遠慮なしに戲談を言合つたことなどを思ひ出して、其生眞面目なのが吹出して笑ひたい程可笑しかつたが、ふと振返ると襖の一枚開いた處から、幾箇となく重り合つた顏！

隣の主人は立上つて、襖の外に出て、

『障子の穴から見るものですよ……障子の穴から。』

央を旨く仕切つて、陰に長火鉢やら料理やら膳椀やらを混雜と置いた。玄關の三疊から此八疊を經て客間に通るやうにしてあるのである。

二 鐵之助が別居してから、離座敷の四疊半は、其儘主人の書齋となつたが、青年空想家の曾て住んだ名殘としてダンテの肖像とハイネの肖像とが壁に張られたまゝ黑く汚れて、薄暗い洋燈の光を受けて居る。

寢床の上に母親は坐つて居た。病みついてから體は愈々痩せ、顏は暗い一種の影を帶びて、嶮しい表情は更に一層際立つて見える。其傍に一人の實直らしい老人が居た。これは老母の義弟であつた。

『嫁取と謂ふものは手數なもんで……』と老人が言ふと、

『本當ですよ。かう幾度も嫁を貰つては、大抵な身代では堪りつこはありはしません。』

『今度は好いのが欲しいもんだが……。』

『本當ですよ……。』

少時默つて居る。

『此頃は腹の痛みは？』

『少しは好いやうですけれど……好いが好いにならんで困ります。』

『好い醫者にかゝつて見なすつたら如何です？』

『餘もさう言ひますがな。何うせ、もう世話ばかり燒かして居るんですから。』

『兄さん、そんな事は誰かに遣らしたら好いぢやないか、もう來るよ、早く衣服を着替へないと……。』
『うん、よしよし。』
と言ひながら頻りにそれを遣つて居る。
『本當にサ、早く。』
『うん、よし。』
媒妁役の隣り主人が同じ羽織袴で遣つて來てまた促し立てた。で、主人はそれを親戚の男に賴んで座敷に行く。其處には羽織袴、衣服、羽織の紐、白足袋などが整然と揃へてあつた。前の細君と結婚した時も此羽織に此袴に此衣服であつた。斜子の羽織は黃く汚れ、仙臺平の袴にも處々汚點が附いて居る。お駒が來て、手傳つて襟の具合などを見て遣つた。
座敷のさまがまた面白かつた。床の間の八疊には、紅入メリンス、黃八丈など近所から借集めた座蒲團が不揃に並んで、煙草盆と火鉢とが打交ぜに置いてある。嫁の簞笥は新しく、鏡臺の鏡は光つて、ニツケル臺の空氣洋燈は眩ゆいほど室內を照して、今少し前まで不治の病氣に罹つた母親が寢て居たとは思へぬ位明るかつた。銑之助の結婚の時には母親は床を疊んで、三男の士官學校卒業式の時に拵へた紋附を着て、晴々しい顏色をして席に列つたが、今は長く座に堪へぬので、一時其寢床を四疊半の離座敷に移したのであつた。茶の間の八疊は、古文書の銅版を貼つた二雙屛風と古い先祖傳來の四雙屛風で中

『お隣の奥さんの友達ですッてね。』

『え、國でお針に一緒に行つた友達ですッて、前の亭主は船乘で、始中終家に居ついたためしが無く、偶に歸つて來ると、新潟の女は何うだの、長崎の女は何うだのッて、そんなことばかし言つてるんですッて。道樂者には懲々したから、何んな苦勞でもするから、しつかりした亭主を持ちたいと……。』

『お鐵さん、お鐵さん！』

と呼ぶ聲がする。

『お母さん！　何處に行つてるの？』と續いて、若々しい聲がして、今歲十六になるお駒の娘が其姿を半ば勝手口から現はした。

『二人は何してるんだらう、此忙しいのに………』といふ聲が戶內でする。

『はい〳〵今行きますよ。』

戶內に入ると、勝手は戰場のやうに混雜して居る。仕出屋の料理、さしみ皿、吸物椀、お平、栗のきんとん、酒樽が傍に轉つて居るかと思ふと、七輪には鍋が湯氣を白く立てゝ煮えくり返つて居る。引物の靑い籠には大きい蛤と鰹節が入れられてあつて、茶の間では、花婿の主人が平生の衣服で、車夫に遣る祝儀を一生懸命に半紙に包んで居た。

羽織袴の鉄之助が其處へ遣つて來て、

大丸髷に結つて、自分から家婢の積りではなく、いろ〳〵心から世話をして遣つたことを思出した。小さい時天然痘に罹つて鏡をも見る氣にはなれぬ痘面、それを氣恥かしくもなく、紅やら白粉やらを塗りつけたことをも思出した。女は容色が惡くては、どんなに正しい心を抱いて居ても振向くものも無いのかと思ふと悲しくもなる。

少時して、『私、本當に、今度は好いお嫁さんが來れば好いと思つて居ますよ。お話を伺ふと、旦那樣は隨分不仕合せな方ですものねえ。』

『本當ですよ。學問が出來て、何一つ知らぬことは無くつて、親孝行で、優しくつて、それは好い人なんですから。』

『本當にねえ。』

提灯の火が坂の上に見えた。お嫁さんではないかと思つたが、さうではなかつた。

『お嫁さんを見たことはないの？』とお駒は訊く。

『えゝえゝ、此間ね、お隣で見合をするツて言ふ時、何うかして見て遣りませうと思つて、それは骨を折つたけれど、後姿を鳥渡見たきり。』

『何んな女？』

『脊のすらつとした、糸織の鐵がゝつた衣服を着て居ましたよ。』

『いゝえ、私なんか。』
『でもねえ、難かし家ですからねえ、却つて好かつたかも知れない。』
『いゝえ……。』
『叔母があゝだから、本當に困るよ。今度の嫁さんだつて、また屹度酷められるにきまつて居るからねえ。』
お鐵は此女が此處に周旋して呉れる時、口を極めて、其主人の溫情、家庭の平和を說いたことを思出した。
『鐐さんは善い人だがねえ。』
『えゝえゝ旦那樣は本當によく物の解つたお方、……でなけりや、私なぞはもうとうに何處かに行つて居りました。お駒さん、私は隨分酷いと思つて、口惜しくッて泣いたこともありますからねえ。あなたの叔母樣ですけれど、御年寄は本當に酷い方ねえ、何ぼ私だッて押附嫁に來た譯ぢやありませんし……そりやこんな至らぬものでも、旦那樣の御氣に叶へば……と思つたばかしですもの。』
『左樣ともねえ、本當に。』
『ですのに、鳥渡でも旦那樣と話しでも爲て居ようものなら、それや大變。怖い眼で睨まれて、色々なことを言はれて、旦那樣にまでそれは酷く當るんですから』と言懸けて、『旦那樣は本當に御可哀相……』

四

其夜原の家の高窓は、夜霧の微白い闇を隈取つて明るく見えた。

何時も早く戸を閉める長い緣側にも人の影が往來して、庭樹の葉裏に座敷の燈光が流るゝやうに射し渡つた。今少し前、嫁の道具が着いて、簞笥やら鏡臺やら行李やらを、人々が寄つてたかつて奥の座敷に運んだが、それも濟んで、今は嫁の君の一行を待つばかり。

蛙の聲が間斷なしに聞える。曖かい濕つぽい空氣はしつとりとして、葉を出し初めた芭蕉の夜風に戰ぐ音がをり〳〵四邊に響く。

高窓に接じた勝手元では、今宵の料理の準備に忙しいと見えて、膳椀を扱ふ音、物の落つる音、流元の水の音、けたゝましい笑聲も時々起つた。今し大丸髷に結つた家婢は、大和障子を明けて、兩手に桶を提げて、柴垣に添つた細い路を、前の井戸端へと水汲に出たが、不圖氣が附くと、其傍に今から半年ほど前、此家に周旋して呉れた老母の姪に當る四十恰好の女が立つて居た。

『まァ、吃驚した。誰かと思ひましたよ。』

女は手で制して、小聲で、

『たうとうかういふことになつて、お鐵さんには本當に御氣の毒……。』

なかつた。それからはもう顧みようともしなかつた。兄は？ と見ると、兄も其手紙の封を截つたことは滅多に無い。机の抽斗は其手紙で一杯に爲つた。

三

また一年經つた。

喜久井町の通にはミルクホールが出來た。畑を潰して、蕎麥屋、西洋菓子屋、米屋などが軒を並べた。原にはまた一軒新建の家屋が殖えた。二階屋の前の空地にも四間位の鳥渡した貸家が建てられて、新聞記者だといふ若い美しい細君を持つた人がすぐ入つた。原の家でも大なる變遷があつた。九月に次男の銑之助が四疊半の書齋から出て裏の三間の小さい家屋を借りた。十一月頃から、老母は兎角氣分がすぐれなかつたが、年を越すと段々容體が惡くなつて、醫師の口振では不治の病であるらしい。一月には銑之助は足元から鳥の立つやうに急に思立つて、自から進んで妻を貰つた。花は咲いて散つた。老母の容體は益々惡い。親戚から娘が手傳に來る。主人の獨身を目的に、旨く行つたら後添にならうといふ特志の中年の下婢が、白粉をべた〳〵と顏に塗附ける。裏の家からは新しい嫁が毎日糸織の着物に黃八丈の羽織といふ若々しい扮裝で見舞に來る。別の家かと思はれるやうに賑かになつた。

今度は隣の夫婦の媒妁で主人の嫁が來るといふ。

して、偶に金が入ることがあればこつそり遊廓に出懸けるといふやうな平凡な生活にどうして甘んじて居ることが出來るかと疑つた。四疊半の書齋に閉籠つて空想にばかり耽つて居る渠には、人間の中年の平凡な苦痛などは解らう筈がなかつた。

妻を離縁した後、主人はよく家を空けた。三晩ぐらゐ續けて歸らぬこともあつた。丁度其頃或書肆の歷史編纂の手傳をして居たので、錢廻りは好かつたのと見える。母は半は憂ひ半は怒つた。歸つた顏を見ると安心はするが、羽織でも洋服でも『何處の馬の骨が觸つたのだか解らん』などと謂つて、碌々疊んで遣りもしない。時々機嫌を取る氣で、旨い西洋菓子などを買つて來ても『そんな見え透いた御世辭の菓子などは食ふと口が汚れる』と言つて手にも取らずに庭に捨てた。子息の心底から思つてする行爲も母の眼には通り一遍の御世辭で『鐐の猫撫聲は油斷がならん。腹では何を思つて居るか知れはしない。あんな腹の黑い男は澤山ないぞえ、銑なども用心しろ』などゝ聞えるやうにつけ〳〵言ふ。

後には馴染から手紙がよく來た。銑之助は初めは母に見せまいと思つて、自分で受取つて、こつそり兄の机の抽斗に入れて置いて遣つた。けれど其手紙がいかにも多い。日に二三通づゝ來る。で或時、何んな事が書いてあるものかと思つて、自分の四疊半に持つて來て、所謂神聖な戀愛小說の書きかけの原稿の上で封を截つた。金釘の解らぬ字で、嬉しがらせの文句が一杯、別に白い紙に墓に薄の生えた拙い繪がなすくつてあつて、恨めしい――と書いてある。銑之助は女郎の手紙の殺風景なのに呆れざるを得

『馴れたものですから、あんな不肖なものでも、成らうことなら置いて遣り度いと存じましたけれど……此間のやうな、人様に御話も出來ないやうなことで御座いますからねえ、いくら眠いからッて、自分の子を……ねえ、貴方……』

『本當にねえ……』

と隣の細君は返事に困つた。

總領の兄は名は鐐と言つた。明治十八年頃の書生生立で、下級官吏の生活と貧しい家の事情とが若い頃の功名の念をも銷磨し盡したといふ風。座敷にある古本箱の中の漢學、國學、歴史學の數多い書籍は明かに其人の半生を語つて居た。机の上には塵が堆く、硯箱の蓋も滅多には取らうともせぬ此頃の狀態を見るにつけても、銑之助は家庭の爲めに犧牲になつた此兄の心を傷まずには居られなかつた。銑之助も秀雄も此兄の口からこそ功名の念を吹込まれ、人間としての理想をも敎へられ、孤往獨邁の偉い精神をも鼓吹せられたのだ。早くして父を喪つた兄弟は此兄を師とも父とも賴んだのである。であるのに、一度世の中の實際に觸れて、氷の如く解け去つた其理想、其精神！　まだ世に出ぬ身の好くは解らぬが、銑之助は少くとも餘りにその腑甲斐の無いのを惜しんだ。さうしてでなくては渡られぬ世の中なら、いつそ今の中に自殺して死んで仕舞ふ方が本望だとまで感情的に心中に絶叫したこともあつた。役所に出勤して、歸つて飯を食つて母親に小言を言はれて、妻と一緖に早く寢て、一月を一圓か二圓の小遣で滿足

ふ人々に其末子の成功と幸運とを語つた。秀雄は高崎の第十五聯隊から士官學校に入學したのであるが、丁度其時日清戰後の軍備擴張で、弘前の第八師團が新設されたので、急に第三十一聯隊附を命ぜられた。東京に居られぬのを母も當人も殘念がつたが、何うすることも出來なかつた。新しい少尉の軍服、軍帽、目に眩するやうな立派な劍、非常な入費も戶主だからと言ふので、總領の兄は無理算段迄して調達して遣つた。そして其月の末には弘前に發つた。

若い嫁は其翌年の六月懷妊して、其翌々年の三月男の兒を產んだ。主人の喜悅は一通でなかつた。これで家庭もいくらか圓滿になるであらうと思つた。銑之助もさう思つた。ところが、四月のある朝、ゆくりなく其生兒の冷たくなつて居たのを發見した。父母の淚は盡きぬのに、間も無く離緣話が持上る。細君の實家の親戚からも强硬なる態度の談判が續く。其六月には、其細君の姿は遂に此の原の家に見えなくなつて、井戶端には老母が桶を下げて水汲に出た。

丁度顏を合せた隣の細君が、

『お雪さん、何うか爲さいましたか』と訊く。

『あれは一昨日實家に戾して了ひました。』

『おや、まァー左樣ですか。』と吃驚して、老母の顏を見て、『ちつとも存じませんでした。此頃御見えにならないから、何うかなすつたかと存じて居りました……』

くりな、色の白い、かなりの美人で、子が無い故か、すべてが年に較べて派手づくりで、紅い帶揚にメリンスの半襟、顏にはいつも白粉をべつたりと附けて居た。前の井戶で一緖になるので、やがて懇意になつて其細君の母親だと謂ふ、人の好い眼の惡い老母が、折々吉田の家に訪ねて來た。

『あのお婆樣には困るよ。話が長くつて、くどくつて、そしてながつちりだからねえ。あゝいふ用の無い閑人はあゝして居ても好いかも知れないけれど、私のやうに、嫁の世話から孫の世話まで爲なけりやならんものには、とても交際は出來ない。』などと吉田の老母は滴して居たが、それでも時々は其家に自ら出懸けて行つて、其老母よりも若い細君を相手に一時間も長話をして來ることなどもあつた。

あたりは益々開けて、新しい家屋は原を緣取つて幾軒か出來た。淋しかつた道には往來が繁く、野犬が居たり、惡戲をするものがあつたりした時代は何時のことかと思はれた。二階屋からは家の娘の彈く琴の音が聞え、近所の家からは軍人の細君らしい若い女が盛裝して出て來るやうになつた。

三年は經過した。

此間原の家では、家庭の衝突は同じく絕えなかつたが、前後に事件が二つ起つた。一つは三男の士官學校卒業の祝、一つは若い嫁の生兒の死に續いて起つた離緣騷ぎ。

弟の秀雄は優等で學校を卒業した。老母は一生の晴れだと言ふので、其卒業式には態々白襟の紋附を造つて、晴々しい氣色で列した。子息のことを人に誇るやうな甘い性質ではなかつたが、此時のみは逢

時はさうして居る中にも經つた。兄の日毎の役所勤め、弟の絶えざる文學上の勞作、若い細君は難かしい姑に睨まれながら、朝夕の炊事、汚れ物の洗濯、酒屋、肴屋、豆腐屋、八百屋の中親爺は落合あたりから車を挽いて每朝遣つて來る。小松菜、蓮根、慈姑、葱、甘薯、秋から冬に懸けては、漬菜や干大根を山のやうに積んで、老母の裁縫をして居る緣側に來て、廉く負けるからと言つて二樽ほど賣つた。

山の手も段々と開けた。鉋の音が到る處に聞えて、新建の貸家が日增しに殖える。原ではだら〳〵坂の西の臺地に二階造の和洋折衷の大きな家屋、續いて其上に、茅葺屋根の寺のやうな家屋が建てられた。其長い緣側には、綺麗な娘が派手な帶を締めて、色白の顏を浮彫のやうに見せて、四邊の好眺望を眺めて居た。

隣の藪地が五十坪ほど切開かれて、やがて小さい三間位の家屋が建つた。小さな門、小さな庭、小さな入口、何ういふ人が入ることかと評判されて居たが、母親がある日銑之助に、『お前のお隣には別嬪さんが來たね。』と笑ひながら言つた。『母親は今少し前色の白い、二十五六の、髮を花月卷に結つた女が其處から出て來るのを見たのである。

其翌日引越車が三臺來た。簞笥と本箱とが殊に目に立つた。越して來たのは、早稻田の法科に籍を置いて居る三十男で、昨年まで地方で基督教の傳道に從事して居たが、生活問題に不安を感じ始めて、新に法律を學ぶ爲め、質素な生活を此處に夫婦して始めるのであるといふことが段々解つた。細君は小づ

日の暮れる頃、わァーッわァーッと言ふ聲が聞える。これは士官學校で、生徒が食後の運動の爲め、號令の練習を遣るのである。其頃初めて牛込に住んだ人々は、必ず一度は此聲の何なるかに驚く。現に此一家族も田舍から出た時には其耳を疑つたのである。此聲の聞える頃、漸く洋燈が光を放つた頃、其時分が一番侘しく一番暗かつた。生の荒凉から覺えた晩酌を母親はいつも遣るので、難かしい顏は旣に赤くなつて居る。皮肉な我儘な道理も何も無い小言が、平生沈鬱な母親の口から迸るやうに出て、其矢面に主人と若い嫁とが立たなければならなかつた。いつものことゝて大概は柳に受けて聞流しては居るが、其皮肉がいかにも勁烈なので、時にはいかに優しい主人も默つて居られなくなる。田舍出の若い細君は飯も咽喉に通らぬといふ風で、勝手へ立つて行つて、顏を障子に押附けて泣くことなどもあつた。

暗い洋燈の下に長火鉢、膳、椀、鍋、處々破れた障子、佛壇も神棚も總て闇で、嫁の持つて來た前桐の安簞笥のみが白く室の中に目立つて見える。銑之助はこれが始まると、そゝくさと急いで飯を濟して了つて、すッと立つて書齋に入つて了ふ。兄や嫂の身にしては、何とか母親をなだめて呉れても好さそうに思はれるが、かれの神經質では、醜い其の光景に堪へ難いので、暗い洋燈の光と母親の赤い嶮しい顏を見ると、此世も盡くるかとばかりつらく悲しかつたのだ。

机の前に坐つて、

『傑作！　傑作を。』と心に叫んだ。

ンチメンタルな冗漫な誇張した長い憧憬小説を書いて居る傍に寢そべつて、雜誌やら小說やらを無造作にひつくり返して、面白さうなものがあると、講談であらうが、探偵物であらうが、鷗外露伴のむづかしい小說であらうが、そんな區別には頓着せずにすぐ讀耽る。

銑之助の抱負では、軍人などを豪いと思つて居なかつた。今に見て居れ、傑作を作つて天下を震撼させて吳れる。不朽の名を明治文學史上に刻んで吳れる。かう思つて居る。けれど軍人ののんきな快活な生々した生活は羨しかつた。暗い家庭に居て、朝から晚まで痛い小さい衝突に神經を昂らせて、其揚句に辛い辛い机の上の煩悶、生理上の烈しい壓迫も愈々其頭腦を不健全にした。憂鬱な我儘な正直な臆病な性質を渠は最も多く其母親の血から承け繼いで居たのだ。

母親の憂鬱な顏の一線の動いたのにも渠はすぐ胸を曇らせた。

士官候補生の制服、軍帽、短かい劍――その暢氣な生活が堪らなく羨しい。門限が來ると言ふので、次の日曜を約して、夕暮に其弟が歸つて行く。母親は玄關の高窓から其後姿を見送る。渠は書齋の前の障子を明けて、だら〳〵坂を急いで上つて行くのを見て居る。軍隊の生活、寢臺の上から落ちた話、消燈喇叭が鳴つた後も西洋蠟燭をこつそり點けて勉強するといふ話、さま〴〵の話が思出されて胸が一杯になる。郊外の秋の日、美しい日の光に浴して、兵士の群が彼處に一團、此處に一團、餘念なく演習を遣つて居るのを見て、かうした無邪氣な快活な生もあるのだと思つて、熱い淚を流したことをも思出した。

其頃の日曜日には、母親は屹度立關の三疊の高窓から顔を出して喜久井町の通に出るだら〳〵坂を眺めて居た。やがて靴の音劍の音と一緒に脊の高い活潑な士官候補生の姿が顯はれる『そら秀雄が來た、』といふ。其母親の顔には喜悦が溢れ渡つた。母親の最後の希望は此三男の勇しい軍人姿に懸けられてあるので、自ら呪ひ自から傷けた荒涼たる生活に、糧でもあり花でもあるのは此唯一の士官候補生であつた。で、日曜日のみは賑かに樂しげに送られた。餅菓子、果物、蕎麥、饅頭の旨いのが馬場下にあるのを、母親は自から使に行つて買つた。快活なる軍隊生活、勇ましい練兵と術科、家庭の小さい紛紜などは何うでも好いと謂つた風な物語は、單に母親の荒涼たる心を暖めるばかりではなかつた。淋しい暗い家庭に、一週一度の此光明を誰も皆待つた。

『お前が來て呉れると、母樣の機嫌が丸で變るんだから……日曜には成べく來るやうにして呉れ。』などと主人の兄が謂ふと、

『矢張、母樣は難かしいかナァ、何うも困るナァ。何故彼樣になつちやつたか。本當に家の揉める位つまらんことはない。』

平氣な調子だ。

そして空想家の兄の書齋に入つて行つては、『銑ちやん（兄さんとは決して言はなかつた）何か面白い小說本は無いかな。』と言つて、其仲兄が髮を長く、色を蒼く、神經性な痩せた顔をして、一生懸命にや

淡竹の大藪の彼方へてく〳〵と出て行く。そして五時過には、夕日に向つて其同じ道を歸つて來るが、其頃は丸髷姿の若い細君が屹度其道に向いた井戸端で頻りに米を炊いで居た。弟は四疊半の書齋に籠つて、終日書を讀んだり、筆を執つたり、所謂神來の想を得る爲めの樂寢に耽つたりして居た。渠は戀と文學とを一緒にして、そして美しい夢を見て居る青年の群であつた。時々同じ夥伴の友人が來て、文學談から宗教談、難かしい人生問題、其論爭の聲は垣の外を行く人々の足を停めた。

母親は其頃五十一二であつた。士族が祿を失つた維新前後の浮世の大波を被ぎながら、早くから夫に別れて難かしい舅姑の世話、多い子供等の教育、忍耐に忍耐した不滿の情は今に及んで、一種嶮しい荒凉たる性格を形づくつた。望を懸けた子供等がひとりは役所の下級官吏、ひとりは物の役に立たぬ空想家、ひとりの娘は田舍の貧しい機屋の細君、息子共が成長くなつて東京に出られるやうになつたらと、いろ〳〵に樂んだ美しい空想は片端から脆くも崩れて、嫁は皺だらけの手、世の常の大きな足、それにちやほやする長男を見ると、むしやくしやせずには居られなかつた。で、家庭の衝突を重ねて、初めの嫁は初兒の產蓐で倒れて了つた。

其初兒を母親は抱寢をして育てた。

上顎の齒が大方拔けて、何だか緊がない處から、酸漿を鳴らすのが習慣になつて、後には丹波酸漿の木を庭に植ゑた。八月には鈴生になつた其酸漿の赤い色が美しく庭を飾つた。

頻りに井戸に出て水を汲んだ。主人は髯の濃い三十二三の柔和な男で、二十四五の、髪の長い色の蒼白い神經質らしい弟と一緒に、簞笥、本箱などを室内に運んだ。

喜久井町から早稻田の通は、まだ其頃は淋しかつた。家屋の絕間には、麥や菜の畑が青々として、雲雀が鳴いて居た。引越蕎麥は早稻田の穴八幡の前の蕎麥屋が配つた。四疊半の離座敷を弟は自分の書齋にして、壁に面して机を据ゑて、前硝子の本箱を其の傍に置いた。雜誌新刊物などの中に洋書が五六册交つて入つて居た。一間の押入の中には上に寢道具、下には古雜誌や古原稿を荒繩で一括りにからげたのを、其儘無造作に投り込んだ。

主人は最後に植木を庭に移した。亡父が生前に此上なく愛して居たといふので、態々田舍から携へて來た大神樂といふ椿は、都會生活の度々の移轉に、生長する暇もなく、葉も枝も萎れ果てゝ居た。其他躑躅、萩、寒竹、毘沙門の緣日で買つた木犀――尻を端折つて、一生懸命に鍬で土を掘つて居る主人の姿は、夕暮の空氣の中にはつきりと見えた。そして其時五歲になる先妻の男の兒は何か無邪氣なことを言ひながら、はつちやけて庭を遊び廻つて居た。で、それが濟むと、主人は緣側に置いた釘箱と金槌を取つて、小さな門に、古びた郵便受函と標札とを打つた。標札には禿びた字で――『吉田寓』

風の吹く日は裏の雨戶は明けられなかつた。八疊二間續き、玄關が三疊、古簞笥の上に佛壇が置かれて、其上に神棚があつた。主人は何時も同じ脊廣の洋服を着て、原の路を丘と田との間に添つて通つて、

或山師が近郊の避暑地の流行から思ひ附いて、見晴が好いのを利用して、築山の下の樹蔭に小屋掛をして、細い瀧などを落して、麥酒の罎を清水に浸したこともあつたが、二年と續かずに失敗して止して了つた。原には春は野蒜、蒲公英、嫁菜などが出た。紙鳶のうなりも聞えた。通行する人は誰も好い惜しい地所だと思はぬは無いが、さりとて此の廣い藪地に手を着けようとするものもなかつた。

處が、ある日突然大工の棟梁らしい男が羽織を着た旦那らしい鬚面と一緒に此原に來て、篠笹の藪地に頻りに繩を引き始めたが、二三日經つと鉋の音が珍らしく聞え出して、二三人の大工の甲斐々々しい姿が其處に見えた。新しい木材の匂、鉋屑が風に吹かれて四邊に散つた。で、原の中央に一軒、西北の一隅に二軒、新しい貸家が建てられて、原を往來する人々は、其路の賑かになつたのを喜んだが、斜に貼られた貸家札は徒に雨風に吹曝されて、久しく住む人の影も見えなかつた。

それから一二年經つた。原の中央の家は少くとも借手が三度變つた。角にある老梅樹は三代將軍が鷹野の歸途、此大名の邸に御立寄になつた時、手づから植ゑられたもので、其下にある大きな花崗石は、將軍が其時腰を懸けられたものだ相だが、其梅樹は年々美しく花を着けて、路行く人々の袖に薫る。丁度春先のある暖かな日、目隱しに植ゑた檜、樫、椎などの繁つた間に、箪笥やら長持やら本箱やら勝手道具やら竈やらを載せた引越車が三臺ほど引込まれてあつた。一月ほど空いて居た此家は新に主を得たのである。半白の、中脊の、人柄な母親が先に立つて働いて、嫁らしい赤い手絡を掛けた若い丸髷が、

『馬鹿言ひねえ、紺屋の上さんのやうな別嬪にも、己の鼻のやうな友達が居らア。はツはツ。』
面白さうに二人は笑つた。
もう日は暮れた。客が一人入つて來た。
『入らつしやい。』といふ番臺の女の聲が高く四邊に響く。戸外を荷馬車の通る音ががた〳〵と聞える。
五月は下旬、空氣の濕つぽい暖かな晩であつた。

二

柳の湯から少し行つて、通を曲ると、柴垣、枳殼垣、冠木門、庭樹の鬱蒼と茂つた古い藁葺の家が一軒、それからだら〳〵と下り坂になつた盆の底のやうな卑濕地には、夜霧が闇に微白く靡いて居た。老いた蛙の聲が耳を聾するばかりに聞えて、雨催ひの空は暖かく、星の影は一つも見えない。この盆の底のやうな處は、曾てはさる大名の下邸の庭の泉水で、向うに靡く低い丘は立派な築山であつたといふ。潰れた邸の址は、久しく藪地になつて居て、其泉水の緣を縫つて早稻田南町に出る細い路は、惡戲をするものがあるのと、質の惡い野犬が居るのとで、日が暮れてから女はなどは殆んど通らなかつた。かうして唯藪地にして置くのは惜しい、開墾して麥でも播かうと、ある百姓の老夫婦が思ひ立つて一坪二厘の地代で其一隅を借りて、肥溜の小屋を造つたのは、それから餘程後であつた。日清戰爭の少し前には、

『あの前の前の先妻の子だ。』
『や、それァ大變だ。隨分澤山な女房持ちだナ。』と顏を手拭で撫で廻して、『女房もさう澤山持つたら好いだらうな。』
『本當よ、己達のやうに、しつかりとこびりつかれて居ちや遣り切りねえ。偶にやあほつくり參つて後の若いのつてやうな幕も打つて見てえな、』と相槌を打つて笑つた。
客の無い廣い流しには、洋燈がぼんやりと點いて、岡湯の漲る音が靜かに聞える。女湯にも一人か二人の客らしい。
『ちや、何うせ大年増だ。』
『そりァ當り前よ。』
『嫁入ッて聞くと、何だかかう自暴に氣が若くなるやうな心持がするが、大年増の、ひね旦那ぢや始まらねえ。』
『別嬪だとよ。』
『ちやらつぽこ言ひねえ、……知りも爲ねえ癖に。』
『だッて、あの家の隣の若夫婦の媒妁だッて言ふぜ。何でもあの若い上さんの友達だつて言ふから、滿更でもあるめえと思つてよ。』

『兄貴の？　さうか、毎日洋服を着て役所へ行く？』

『さうよ。優しい、人柄な、熊公のよく挽いて行く旦那だ。』

『あの旦那にや女房があつたちやねえか。』

『なアに、あのお袋さんの氣に入らねえで、昨年出して了つたアな……あのお袋さん、あれで中々難かしいから。』

『さうかな、優しさうなお袋さんだが……始中終酸漿を鳴らして、莞爾して通るが……』

『さうよ、鳥渡見ると、人柄な好い婆様だが、あれで中々豪い氣丈者だッて言ふから。』

と言ひ懸けて、植木職の定公はちやぶ／＼と手拭で顔を洗つた。早稲田に近い牛込の喜久井町、柳の湯では今洋燈が點いたばかり、戸外はまだ薄明るかつた。夕飯時の客は少く、三助は空いた桶をがたんがたんと流しの一隅に片寄せて行つた。八歳位の、年にしては丈の高い一人の子供が今し湯から上り懸けて頻りに身體を拭いて居たが、そゝくさと着物を着て、帯を巻き附けて、戸を烈しくたてゝ出て行つた。

『今、出て行つたのが息子だアな。』

『さうかあれが……』と相手は點頭いて、『あの旦那にあんな大きな息子があるんか。』

『何でも先妻の子だッて言ふ話だ。』

『先妻ッて、此間まで居たのは、まだ若かつたちやねえか。』

生

一

『今晩嫁入があるツてな。』
『何處で？』
『すぐ此の下の家で。』
『下の家ッて何處だい。』
『そら、あの酸漿を鳴らして通る、白髪のお袋さんの居る家さ。』
『よく彼處では嫁入があるな、このお正月にもあつたぢやねえか……。それに、あのお袋さん、病氣(あんべい)が惡くつてとうから臥てるツて言ふぢやねえか。』
『お正月のは弟の嫁だアな。そら、ぢきあの裏に居るアな。色の白い肥つた、八丈の羽織などを着てよく通るぢやねえか。今晩來るていのは、その兄貴の嫁さんだ。』

生

花袋全集第一卷目次

なつて了ふのではないだらうか。それを思ふと、一層私は心細くなる。大正十一年十二月十三日。落葉にれ埋た代々木の寓居で、田山花袋。

このやうな中をも通つて來た。心も魂もすべて全く粉韲されるやうなこころをも通つて來た。しかし兎に角こゝまでは來た。曲りなりにも此處まではやつて來た。それを思ふと、何んなにつまらなくとも、この十二卷の全集は、私に取つて、捨て難いものであるには相違なかつた。

刹那の中に永久があるといふ。また流行の中に不易があるといふ。箇の中に全があり、全の中に箇があるといふ。それは本當だらうか。幻影ではないだらうか。單に此方の影を向うへうつして見た形ではないだらうか。何處まで行つてもさういふことはわからないのではないだらうか。そしてその不可思議の中に私達のさびしい姿も消えて見えなく

て考へて見ると、この先きの感興の方が正しいのか、それとも
また後の批判の方が正しいのか、わからなくなる。そしてし
まひには、先きの感興も正しく、後の批判も正しいと言ふやう
なことを言はなければならなくなる。

心細くもあれば、恥かしくもある。これからまた新規蒔直
しをやらなければならないやうな氣もしてゐる。向うへ歩
いて行つた自分の姿を振返つて見てゐるやうなさびしさを
も感じてゐる。

しかし、その向うへ歩いて行つた自分は、生効のある世を送
つて來たとは思はないことはなかつた。それはいろいろな
中を通つて來た。苦しい中をも、つらい中をも、時には火と水

序

書いたものは、その刹那だけに價値のあるものかも知れない。時を經ては、その味ひもにほひもかをりもすべて消えてなくなつて了ふものかも知れない。さういふ疑ひに私は今ある。それから考へると、全集を編むなどといふことは、何うでも好いやうな心持もしないではなかつた。

何んなに眞劍で書いたものでも、何んなに張り詰めて書いたものでも、あとで見ると、すつかり裏切られるやうなものが多かつた。何故こんなものがおもしろかつたのか、何故興味を惹いたのか、何故心に留つたのかと思はれた。そして黐つ

明治三十年頃に住んだ家

最近の小照

（大正十二年）

福岡益雄撮影

田山花袋著

花袋全集

第一卷

生・妻・蒲團外十一編

花袋全集刊行會